

魔が注ぐは無償の愛

Rさくら

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分が人間ではないことを自覚しきつた世界征服真っ最中のモモング様が、ウルベルト・アレイン・オードル様と再会したり、たっち・みー様とも再会する話。

ナザリツクの愉快な（一部人間にとっては何も愉快ではない）日常。元人間のバケモノ達と異形の、愛と青春の物語です。

---

この作品はpixivにも投稿しております←

[<https://www.pixiv.net/series.php?id=950167>]

---

以下作品注意点

※グロ・人殺し・犯罪描写

※至高の御方が帰ってくる話

※ウルベルト・アレイン・オードル様とたっち・みー様の登場

※作品は腐向けでは無いが製作者が腐女子

※オリジナル・捏造設定過多

目次

純黒02	267
純白02	250
純黒01	234
純白01	218
On Your Mark 06	206
On Your Mark 05	193
On Your Mark 04	180
On Your Mark 03	168
On Your Mark 02	156
On Your Mark 01	143
主演：捧げる者達 8	138
主演：捧げる者達 7	125
主演：捧げる者達 6	100
主演：捧げる者達 5	92
主演：捧げる者達 4	86
主演：捧げる者達 3	71
主演：捧げる者達 2	61
主演：捧げる者達 1	47
まだ人なのか 06	39
まだ人なのか 05	29
まだ人なのか 04	19
まだ人なのか 03	10
まだ人なのか 02	4
まだ人なのか 01	1

471	S U P E R B I A	461	S U P E R B I A	442	S U P E R B I A	純黒 05	純白 05	審判 03	審判 02	審判 01	言わぬが花	純黒 04	純白 04	純黒 03	純白 03
	G U L A		G U L A		G U L A										
	I N V I E D I A		I N V I E D I A		I N V I E D I A										
	1		2		3	430	419	407	387	372	361	343	323	304	283

砂糖と蜂蜜でできた幸せな檻ではないだろうか。

その国の話を聞いた、たちち・みーが初めに抱いた感想はそれだった。

顔を顰めた男とその仲間達の訝しげな顔を見て、たちち・みーは自分の失敗を恥じた。

失敗と言っても、身を隠していた高台の草場から足を滑らせ間拔けな格好で彼らの前に落下したという、疲労度のことを考えても自ら墓穴を掘り入りたくなるような失敗だ。

かつての仲間達、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーがいたら絶対に大爆笑の渦だっただろう。写真も撮られ、暫くネタにされる程に。

「……モンスター!?!」

突然のことに驚きから固まっていた彼らだったが、仲間の叫び声を合図に一齐に動き出した。

「亜人ではないのか……?!」

「私の知識にいないわ、あんな亜人!」

「新種か? どうする!?!」

「防御陣形! いつでも逃げられるように構えろ!」

「ま、待ってくれ!! 戦う意志はない!!」

慌てて立ち上がり、ゆっくりと両手にあたる部位を上げながらたちちは無抵抗を体で示す。

その姿はまさに不気味な異形だが、ユグドラシルを止めた時の基礎服の装備だけだ。武器は以前見つけたアイテムボックスに隠し済みで、敵意が無く無力に見えるようにしてあった。

「私の名は、たちち・みー。君達と戦う意思はない。人間を襲ったりもしない。信じてくれ」

若干緩んだ空気の中、しかし完全に警戒は解かないままに2言、3言、互いに言葉を交わし探りあっていく。

たっちは、だんだんと相手が困惑していつてることを感じる。今までもそうだったので、何も不思議ではない。大概がモンスターもしくは亜人だと騒ぎ逃げるか戦闘になってしまったが、中には対話のできた者達もいた。

そして対話すると皆が皆、首を傾げるのだ。

「……………あんた、呪いでその虫みたいな姿にされた元人間とかなのかい？」

「いや、えっと……………」

どこの呪いにかけられたお姫様だ自分は、と思いい口に出しかかるもぐつと堪え誤魔化す。

「近い気はします……………。記憶喪失なので……………」

言葉を濁し、たっちはもう何度となく繰り返した嘘を吐いた。しかし強ち間違いではない話だ。

あちらの世界で迫り来る死を感じ目を閉ざしてから、自分の知らない世界に、なぜかユグドラシルのアバター姿に変わって目を覚ましたのだから。

「ふうん、そんなこともあるんだ。やっぱ世界は広いな」

「こんなこと聞けるなんて、魔導王陛下に感謝しないとな」

「最初は未知のモンスターかと思ったけどなー」

「ここやかに軽く始まったその話題に、慌ててたっち・みーは食いつく。」

「今、魔導王陛下と言いましたか？」

「ん？ なに急に」

「何か記憶にあるんですか？」

「いえ、そういう訳ではないのですが……………」

何も答えられず、たっちはとうとう黙り込んでしまった。

「……………大丈夫ですか？」

先程から「どうして良いのか分からない」と言動で表す相手を哀れに思ったのか、優しい彼らは何かの足しにと薬草や僅かな食料を手

渡してきた。旅の途中ならば貴重品であるはずの物だ。

「たっちは感謝を述べ断ろうとしたが、気にするなと微笑み返されてしまい結局受け取ってしまう。」

「行く宛がないなら、元人間でも、その見た目ならアインズ・ウール・ゴウン魔導国に行ったほうが良いわよ。この辺りで一番近いのは法国だけど、貴方が元人間って言い張っても殺されるか奴隷にされるだけよ?」

「まったくだな、と彼らは呆れたように笑い、そしてアインズ・ウール・ゴウン魔導国がいかに素晴らしい国なのかを滔々と語りだした。」

「アインズ・ウール・ゴウン……、魔導国……」

やはり間違いなく、一文字も間違いなく、アインズ・ウール・ゴウン魔導国という名前の国があるのだと知り、たっちは震える。

「私達はその国から来た冒険者なの」

「亜人も人間も生まれも育ちも関係なく、才能があれば陛下が愛してくれる国だよ」

「飢えもなく、汚職もない、この世の富が集まった国だ」

「神のごとき陛下が永劫統治してくださる夢の国なの」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国を賛美する声を聞くのは何度目だろうかかと、たっちはぼんやり思う。

この世界に再誕生してからずっと、魔導国からやって来たという冒険者達としかまともな会話をしていない。いや、冒険者達としか話せなかったのだ。異形と会話をしてみようと試みるのは、彼らぐらいしか居なかったのだから。

「……偉大なる、魔導王陛下とは、どのような方ですか?」

もう何度目かも分からない質問は、情報の精度を高めるためのものだ。しかし、もう内心たっちは諦めていた。事実を事実と認める努力をすべきなのだろうとも、澁々ながらも思っていた。

「陛下はアンデッド、偉大なる死の支配者なの」

崇拜を固め、更に蜂蜜をかけたような瞳で、熱を持った声がまた同じように応えた。

## まだ人なのか 02

コツンコツン。血を吸い込んだ壁に反響する音は、少しの余韻を残して消えた。

一步踏み込んだだけでマトモな感性の持ち主なら発狂するであろう、様々な亜人や人間の「パーツ」で作られた「アート」が飾られた拷問部屋に響くには、少し間抜けでかわいい音。その正体は、指揮棒が軽く譜面台を叩いた音だ。

指揮棒と譜面台はとても美しい白で出来ていて、暗い部屋の中では輝いているように見える。その原材料にさえ目を瞑れば、人々は口を揃えて立派な一品だと褒めそやすだろう。

「準備は良いかな？」

見渡し、視界に入る拷問官達の頷きに、ウルベルト・アレイン・オールドは満足気にその眼を歪める。彼は指揮棒を振り上げ、そして、非常に優雅に振り下ろした。それを合図に、この世の地獄を音色とした悪魔の演奏会が始まる。

ごり、絶叫、バキツ、絶叫、ぐしゃ、絶叫、ぶちゅ、悲鳴、すすり泣き、ぐちぐちぶちつ、絶叫、懇願、悲鳴、嗚咽。

すつと綺麗な流線を空に描きながら指揮棒が女性を指さした。

その指揮棒の先にあるのは悲痛と苦痛と絶望を一体どれほど味わえばそんな表情を作れるようになるのかと、好奇心すら湧く表情。

指揮棒が鮮やかに跳ねる、女の顎から喉までの流線に細身の短剣が突きささり、鼻頭にその先端が現れた。上から鎖で腕を引き上げられ強制的に立たされていた女は、陸にあげられた魚のように跳ねている。

指揮棒が止まり、ウルベルトも完全に停止する。拷問官達も動きを止め、場には静かなすすり泣きと滴る音のみが響く。

パチパチパチ。

余韻を噛み締めていたウルベルトは、拍手のした方を振り向く。

そこにいた偉大なる御方と階層守護者を認識すると、拷問官達は一



齊に片膝をつき頭を垂れた。

「やあ、モモンガさん、デミウルゴス。ご清聴ありがとうございます」

ウルベルトは、演奏を終えた指揮者に相応しく敬々しく胸に手を当て、紳士の鏡と言わんばかりのお辞儀を披露した。

「素晴らしい演奏でした、ウルベルト様」

服が汚れるのも気にせず跪くデミウルゴスの肩に、ウルベルトは軽く手を乗せ再度礼を伝える。それだけで悪魔は歓喜に震え、拷問官達はその御手が触れた肩を羨望した。

「相変わらず、何をしても様になりますね」

「世辞でも嬉しいですよ、モモンガさん。自分でもなかなか良い指揮だったと思っているので。あの最後の締め、あれの恋人の短剣でやってあげてるんです。ああそうそう、」

忘れてたと、ウルベルトが振り向く。

悪魔の瞳に見つめられ、女は面白いぐらいにまたびくりと跳ねた。

「アインズ・ウール・ゴウンに唾を吐いたお前のバカ男はまだ生き地獄にいる、暫くしたら、別の地獄で再会させてやるよ」

にんまり笑う悪魔に、人としての限界を迎えた女は完全に発狂したらしい。小さな悲鳴をあげた後は、口から短剣と血を溢れさせながら意味のない言葉の羅列をぶつぶつと呟き始めてしまった。

とうに興味を失っていた死の支配者と最上位悪魔は下等生物に背を向け、互いの用事と行き先を確認し始める。

「教育機関からの『タレント』含む才能ある子供達の報告書がまとまって、丁度良く皆が集まっていて時間もあるから、報告会をしようという話になったんです」

「《伝言》を送ってくればすぐに向かったのに」

「デミウルゴスから『演奏中』のはずだから直接様子を見に行つて欲しいと頼まれました」

「私めの我侭を聞いて下さり、モモンガ様には感謝の念に堪えません」  
「そうだったんですか。気を利かせてくれてありがとう、デミウルゴス」

「勿体無いお言葉……!!」

もはや泣きそうになっているデミウルゴスと、目の前で至高の御方々が話している事実だけに歓喜し身を震わす拷問官達に、モモンガとウルベルトは目を合わせ苦笑する。

「それで、モモンガさん、《演奏》はどうだった？」

肉塊から滴る血が、床に広がる血溜りに落ちる音が響いた。啜り泣きと狂人の声は、まだ続いている。

「……特に何も、感じませんね。オレは音楽にも興味がなかったですし」

「そうですか、ふふ、それは残念」

微笑む悪魔と無感動なアンデッドは、お供の悪魔も連れてリングによる転移魔法で去って行った。

玉座の間にて、モモンガはそこにある唯一の座に腰掛け、そしてモモンガから見て左手側、玉座より一段下にウルベルトは立っていた。

主から許可を出された守護者統括アルベドと、第四、第八を除く各階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン、コキュートス、アウラ・ベラ・フィオーラ、マーレ・ベロ・フィオーレ、デミウルゴスと、プレアデス副リーダーのユリ・アルファは、立ち上がり、己の支配者を喜びと敬意を内包した瞳で見つめている。

第十階層にて、発見された《タレント》及び《武技》を含む特異な才能を持つ子供達の報告会が、開始された。

それぞれの才能の危険性と可能性が話し合われ、そしてスカウトしたい子供達を各員がピックアップしていく。その後ろにて書記を務めるエルダーリッチの羽ペンには、忙しなく動きっぱなしだ。

現在、集まった階層守護者達はナザリックだけではなく魔導国内でもその土地や公共施設の管理を各々が任されており、ユリも魔導国孤児院の運営担当をしている。

だが、やはり最重要なのは国よりもナザリック地下大墳墓そのものだ。それはナザリック地下大墳墓にて生まれた誰もが常識として理解し、当然のことと共通して認識している。そのため正確に言えば、

魔導国内の管理は各階層守護者の部下達が行っていた。そして更に、その部下である魔導国の領民達が現場で雑務を処理していた。

その雑務担当を「特異な才能持ち」からピックアップするのは、有益な才能ある者達を目が届く所に置く」という意味合いが含まれている。そのため、たかが知れている才能だが、それぞれ真剣に吟味を行っていた。

各々が納得ゆく結果に収まり、そろそろ解散という空気も流れ始めた時、デミウルゴスがアルベドに話し掛けた。

「アルベド、ここまでメンバーが揃っているなら丁度良いんじゃないか？」

「そうね、せっかくの機会だもの。この場で済ませましょう」

アルベドは頷き、モモンガとウルベルトに顔を向けた。話の先を促し頷く支配者達にその美貌を嬉しそうに綻ばせ、アルベドは頭を下げ口を開いた。

「『法国終焉』に向け、準備を開始したいと思います」

ざわりと、波のようにどよめきが広まり、静まった。それぞれの顔には嬉しそうな笑顔が隠しきれずに浮かんでいる。

「法国か、忌々しい彼の国も今は……」

モモンガの言葉と最後の吐き捨てるような失笑に、配下達からは同情も含む嘲りの小さな笑聲が零れる。

スレイン法国、かつてはモモンガとナザリックの者達をも悩ませた偉大なる宗教国家。

所持する世界級アイテムと、徹底された情報と実力者の隠匿主義。人間主義の宗教国家であるため間者も送り込み辛く、また見知らぬアイテムで逆にナザリックの者が人質に取られる可能性もある、恐ろしい未知の国だった。

シャルティア洗脳事件の犯人が法国人物であることが確定的になった後でも、モモンガ達が直ぐ様手を出せなかった程だ。それほどに実力ある国家だった。

だがそれも昔の話であり、今は見る影もない。

玉座の隣で、ウルベルトは山羊の顎髭を弄りながらにやりと笑う。

「良いですね。最後の仕上げ、というわけですか」

「ああ、そうだな。しかし油断は禁物だ。最後の最後で間抜けな終幕を迎えるような無様な真似は、しかもあの法国相手になぞ、御免蒙る」  
「それは同意です。優雅にやらないとなあ、デミウルゴス？」

突如声をかけられた第七階層守護者は、喜びに声を震わせながら応える。

「仰せの通りかと。もちろん、今すぐとは申し上げません。ただ、準備を始めても構わないかの確認を取りたかったのです」

「準備を開始せよ。しかし慎重に行う。まず足場を再度固める。問題、裏切り、間者を探れ。足場を盤石にした後、一気に心臓を握り潰すのだ。この件の詳細は、お前達が担当地区の足場固めを行っている間に、私とウルベルトさんでも話し合う」

「異論あるものは？」

支配者の問いかけに、一つの声が上がった。

第一、第二、第三階層守護者のシャルティア・ブラッドフォールンが、ドレスを少し摘み上げ舞踏会で行うようにお辞儀をする。

「畏れながら、異論ではありませんが、希望がありません」

「申してみよ」

「既に、私を洗脳した愚か者共に直接復讐する権利を頂いた身で、さらなる要求を重ねるのは我侪と重々承知でありんすが…、モモンガ様、ウルベルト様」

持ち上げられた顔には、優雅な所作には似合わない怒りと憎しみの塗り込められた、シャルティアの本性的ような顔があった。

「法国を、その土地を、血で染め上げる権利を頂けませんかえ？」

ウルベルトは目を輝かせ、心底嬉しそうに応えた。

「可愛らしい……、いや嬉しい我侪じゃないか！ モモンガさんに敵対したことがそれ程まで、未だに憎いなんて、シャルティアの忠誠心が強い証拠だな」

「そ、そんな……！ 身に余る勿体無いお言葉でありんすえ……」

急に少女の顔と声に戻り、シャルティアは白磁の頬を紅に染め上げる。

「シャルティア、私もお前の忠義を嬉しく思うぞ。連絡、サポート役とは離れない、血の狂乱発動はなるべく抑えるといった条件は付けるが、好きにすると良い」

深々と頭を下げ感謝の言葉を紡ぐシャルティアの声には、隠しきれない喜びが滲んでいた。

「フランスの残る主戦力との戦闘が終わったら、食事をしたい子供達を招いても良いかも知れないですね。せっかくのパーティーですし楽しんでやりましょう」

ウルベルトが鼻歌交じりに提案し守護者達が笑って賞賛したところで、モモンガがギルド武器を床に突いた。硬質な音が響く。

「まだ勝てるよ、ウルベルトさん」

「おっと……、確かに失言でした」

緩みかけていた空気に一気に緊張感が戻ってきた。

「それから、ユリ、記憶が残らない赤ん坊は今回は助命すると私から厳命しておく。その後の管理はお前に任せるぞ、良いな」

自身が口を出す領分ではないと判断し気配を殺し控えていたユリは、目を瞬かせる。言われた言葉の理解ができると、慌てて、首が取れそうになるほどの勢いで頭を下げた。

「はっ、ありがとうございます、モモンガ様……！」

なんと慈悲深い……。ぼつりと、思わずといった風に各階層守護者達の口から感嘆の声が漏れ出た。

「それでは、今回の報告会は以上で終了とする。各自休憩を挟んでから業務、もしくは休暇に戻ってくれ」

「後から何か、『法国終焉』について意見や希望が出たら気軽に相談するんだぞ」

支配者達が立ち上がると、ナザリックの者は皆頭を下げ、忠誠を示した。

そうして一国の終わりは、ついでの提案でとんとん拍子に済まされたのだった。

まだ人なのか 03

感嘆の声を漏らし、たっち・みーはバハルス帝国の誇る大市場を眺めた。

帝国内に入ってから初めて見る街の景色に興奮していたが、道を進んだ先に突如現れたこの帝国大市場には更に血が熱くなるのを感じる。

この世界に来てから感動と驚きの連続だが、人がごった返す大市場には大自然に抱いた感動とはまた別の力強い感動があった。

屋台が無限に続くのではと思わせるほどの広大な円形に広がる敷地には、様々な人と亜人がいる。屋台の構え方も品物も千差万別で、この世のありとあらゆる形と色と匂いがあると言われても信じられるほどだ。

きっと欲しい物が一つはあるはずだと、その賑わいを前に誰もが思うのだろう。

自分達のいた世界は本当に灰色だったのだと痛感させられる、鮮やかな輝きに目が焼けそうな程だ。煩いほどに皆が笑い、語り、怒鳴り、生きている。

「何をぼんやりしてるんだ」

話しかけられ、たっちは我にかえる。

「あつ、いえ、驚いてしまいました、あまりの凄さに」

「……何か買ってやろうか？それが今回の報酬ということで良いだろうか？」

ニヤニヤ笑って尋ねてくる小太りの男が自分を騙そうとしていることはさすがに分かり、たっちは苦笑する。

旅の途中で偶然出会ったその男は、荷馬車が脱輪し困っていた行商人一行のトップであるはずだが、どうにも小物臭い男だった。

宿探しに行った護衛仲間達を荷馬車と一緒に男と待っているのだが、早く戻ってきてくれと祈りを捧げてしまう程に、たっちは内心辟

易していた。

「いえ、欲しい物は特にありませんので、金貨で謝礼を頂きたいです」  
「遠慮するな！ 私が良い物を見繕ってやるから！」

脱輪修理の手助けをしてから帝国までの残りの道の護衛をたつちは務めたのだが、どうやら男は報酬支払いをケチっているようなのだ。二束三文の品を買って、無知なたつちを騙してやろうという思惑が透けて見えている。

「ごんの馬鹿もんが!!!」

「!!」

突如響いた怒声は、五月蠅いぐらいの市場を一瞬だけだが静まり返らせた。

「ひ。あ、え!?! お、お、お、叔父さん!!? なんで!?!」

「まったく貴様には呆れて物も言えん! いや! 言う! 言うぞ! 死ぬまでにその腐った性根を叩き直してやる!」

ほかんとするたつちの肩に手が置かれる。振向けば、僅かな間だが共に旅した仲間達がいた。

「お疲れ様、たつちさん。もう大丈夫。あの人がちゃんとした報酬を支払ってくれるから、安心してほしい」

「さすがに目の前では言えなかつたけど、あの坊つちゃん一族の問題児なんだ。本当はもつと護衛雇えたし馬車も良いのが用意出来たはずなのに、あの坊つちゃんが女や酒に使つちやつたんだよねえ、予算を」

帝国に着いてすぐに空いてる宿屋を探してくると去った二人は、たつちを挟んで呆れた声を出す。どうやらこの二人はお目付け役だったらしい。道理で、旅の途中で男にたつちが困らされている時に助け船を出してくれたはずだ。

事情を知り納得していると、説教をひとしきり終えた老齢の男が背筋をぴんと伸ばしたまま近付いてきた。

「先程は突然失礼した、たつち・みー殿。あまりの恥ずかしさと怒りに、つい大声を出してしまった」

「いえ、気にしないでください」

実際、後ろで小さくなっている男を見て若干すつきりしていたたちは本心からそう伝えた。

それからたちは、改めて互いに自己紹介し合った。

有り難いことに相手商人は、帝国の店を基盤に冒険者達が見つけた薬草や鉱石の採掘場と帝国領と魔導国領を行ったり来たりして、どの国にも詳しくあった。さらには亜人のたちにも礼儀正しく接してくれたうえ、一族の恥を払拭するためと今後のことまで共に考えてくれた。

結果から見れば、たちにとっては大儲けだった。

「大変な境遇に身を置かれているようだが、安心されると良い。魔導国に身分は無い。仕事も生活もなんとかなるだろう」

「魔導国だけが、人間以外の種族も受け入れているのですか？」

「本当に何も知らぬのだな、たち殿は」

心底驚いた風に言うと、ふむと考え込み、そして人差し指を立て、彼は提案を始めた。

「やはり、貴殿は魔導国王都に行つた方が良いでしょう。たち殿、今の市場の様に種族間に差別なく平等に栄えているのは、魔導王陛下の御力あってこそなのだ。陛下が現れるまでは、この土地一帯にも奴隷制度があつたのだからな」

「奴隷……、制度……」

法律で認められた人権の剥奪。それが少し前まで自分が立つ土地で行われていたことに、たちは動揺する。

「魔導王陛下の御力で改革は進んだが、まだ完璧ではない。愚か者というのはなぜか一定数必ず現れるものらしい。不愉快な思いをしたくないなら魔導国王都に足を進めた方が良かろう。戦う力があるのなら、冒険者になる道もあるしな」

「……いえ、すぐに魔導国に向かうのではなく、暫く、帝国を見ていただきます」

たちが何かに対し逡巡しているのは感じ取ったはずだが、見てみぬふりをしてくれるらしい。それには触れずに、嬉しい提案をしてくれた。



「では、暫くはこの近くの宿屋で働き、お金が貯まったら魔導国に行くのはどうだろうか？　実は私の知り合いが力仕事をしてくれる者を探しているんだ」

「口利きをしてくれるのですか？　ありがとうございます……！　この御恩は忘れません」

「気にするな。あの馬鹿の醜態を忘れてくれればそれで良い」

後ろでずっと小さくなったままのお目付け役に挟まれる男を睨むその姿に、たつちは苦笑する。ふと、そのさらに後ろから二人の女の子達が駆け寄ってくるのが見えた。

きつと姉妹だろう。尖った耳を金糸の隙間から晒しながら軽やかに駆けて行き、笑って屋台の隙間をぬって行く。

微笑ましい光景を、思わずたつちは視線で追った。

「あのエルフ達も、一昔前ならあんな風に笑って自由に走れなかった、奴隷階級の者達だ。かつては、奴隷であるエルフの耳がよく切り落とされていたらしい」

女の子達の笑い声と共に聞こえたその言葉とそれが指し示す意味を、たつちは理解しなくなかった。

そうして、帝国の宿屋にてたつちが住み込みの仕事を貰ってから数日経った。

初めは慣れない仕事に戸惑ったが、小さな宿屋の主人である老夫婦は根気よく仕事を教えてくれたため今はそれなりに宿に貢献できている。

主に力仕事を任され、時折雑務もこなし、隙間時間には老夫婦からこの世界についての知識や言語を勉強した。

そうしてまた一日の仕事を無事に終え、老夫婦と簡単な食事と会話を済ませ、与えられている屋根裏部屋に戻ったたつちは屋根の低さに合わせ小さく背伸びをする。今日もよく働いた、明日に備えて寝ようと現実逃避をしようとして、月明かりに照らされる床に落ちた地図が目に入る。

「……はあああ」

ベッドに向かおうとしていた足を必死に努力して、それに向け動かす。そうして薄っぺらなそれを拾い上げると床に座り込み、そして、地図を片手に頭を抱えた。

「一体どうしたら良いんだ……。なんで普通に死なせてくれなかったんだ、神様とやらは」

いくら寝ても醒めない夢だな、などという現実逃避も、とうの昔に限界を迎えている。それに何よりも、この世界が夢だとしても、アインズ・ウール・ゴウン魔導国に背を向け無視することはできない。それはたつち自身の問題だけでなく、異形の見た目で魔導国から遠く離れば生きていくのが厳しい現実的な問題もある。

「アインズ・ウール・ゴウン魔導国……。か……」

地図の中には、一応アインズ・ウール・ゴウン魔導国以外の国名もある。だが、大概の国々の頭には「魔導国属国」という頭文字がもれなく付いており、現実ではどの属国も事実上の魔導国領土と化していると、たつちは老夫婦から聞いていた。そして老夫婦だけでなく宿の客人達からも話を聞く限り、特段それに不満を覚えている属国の国民はいないらしい。知識を教えてくれた老夫婦は随分あっさりど、いずれ自分達の国名は地図から消えるのだろうかと言っていた程だ。

「まあ、それも当たり前か……」

この国で実際に暮らし感じた限りは、魔導国の民は属国の民も含め皆豊かに暮らしている。

公共施設は充実し、国が様々なものに潤沢な投資をし、スラム街も差別も無い、お世辞抜きで素晴らしい国だ。しかし当然それだけでは無く、圧倒的な力による支配を感じられる国でもあった。陛下に逆らう者が愚か者だと皆が盲信し、反逆に対し死と苦痛が与えられることに何の疑問も抱いていない様子なのだ。

魔導王に対する反抗勢力の存在有無を尋ねただけで、あの柔らかい笑みを優しい皺とともにつくる夫人が、初めて酷い顔を見せたほどだ。そのようなことは決して口にはいけないと、たつちは老夫婦からきつく言い聞かせられた。

「でも……。皆が幸せなのは事実だ。だいたい国に反逆しようとして

罰せられるのは、別におかしなことではないし、そもそも幸せだから誰もそんなことを考えていないみたいだしな……」

それでも、この完璧を体現したような国がたつちには不気味で仕方なかった。

「アインズ・ウール・ゴウン」。

全ての真実がその名が示す通りなのだとするならば、この国が真に味方するのはきつと人間でも亜人でもない。その確信が、どうしてもたつちの中で薄気味悪さとしてこびり付いている。

「……ギルド内にいるNPC達はどうなったのだろうか」

たつちの頭の中に、ギルドメンバー達が作り上げたうろ覚えのNPC達の顔が浮かぶ。

わざわざ、おそらく陛下として王都にいたのであろう彼がギルド名を名乗っているということは、他ギルドメンバーもしくはNPC達が共にいる可能性もある。あれは生きていないはずのただのデータだったが、それを言ってしまうとたつち自身が存在しなかったはずの異形の肉体で今生きていることも否定してしまう。存在している可能性は、零ではないだろう。

「俺が創ったセバス以外は……、たしか、プレアデス、各階層守護者、それから領域守護者がいて……、メイドもたくさん作ってたな……」  
たつちが抱く不安の原因は、思い浮かべたNPC達の「設定」だった。

異形種ギルドに相応しく、かなりの極悪キャラクターを作っていた仲間達がいたことは、たつちも覚えている。あの人食い設定や嗜虐趣味などが都合良く消えているなど、思っただけいけないのだろう。

「仮に、NPCと、『あの人』がいるとして……」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国の最奥で、血溜まりの饗宴が開かれていたとして、たつち自身は何をするのが正解なのだろうか。

戦うべきなのだろうか。魔導国の民は皆、とても幸せに暮らしているのに。

「く、はは……、この姿で、こんなことを考えないといけないなんてな」  
情けないと感じていても、最早自嘲するしかなかった。

かつてその姿を纏う時、たっちは自由だった。しがらみも、利権関係も、自身の今後も、何もかも全て関係なく、困っている人を助けるという大好きな当り前のことができた。しかし、今はできない。

たっちだって、全くの馬鹿ではないのだ。話し合いだけで全てが平等に、全てが平和的に解決するとは思わない。そんなことができないのなら、あの世界はあそこまで淀み、腐らなかつただろう。終末までの暗い道を人間同士で蹴落としあいながら進むような末路には、きつと至らなかつただろう。それぐらいは、たっちも理解していた。

「仮にだ……、ナザリックの者達が人を殺しているとしても、犯罪者など消えても何の支障も無い存在のみのはずだ……。推測でしかないが」

しかし国民に行方不明者が出ているという噂など全く聞かず、そして異常なほど治安が良い理由を考えればそれしか思いつかない。それに一国を幸福で支配しようとしているのだから、それぐらいは狡猾に考えるだろう。

あくまでこの推測が当たっていたならばだが、仮にたっちが暴れ、わざわざ全てを表沙汰にして騒ぎ立てても、救われるのは助ける価値の無い罪人の命だけだ。誰も幸せにはならない。

だとすれば、わざわざ闇に隠された部分を無理に露呈させて、一体何の意味があると言うのか。

そののどこに正義があるのだろうか。

抱いた疑問は、たっちの胸を深く刺した。

「……………貴方は、何を考えているのですか」

癖のあるギルドメンバーをまとめ上げていた、優しいギルド長の名をたっちは呟く。逆に困ってしまうほどに我侷を言わない、遠慮ばかりする人だったのに、たっちの知らぬ間に今は世界なんぞを求めている。

「一体、何のために」

それは直接聞かなければ分からない。たっち自身も、自身がどうすべきかなど、その答えを聞かなければ決められない。

「……………覚悟を決めよう」

小さな窓の向こうにぽつんとある月を見上げ、たつちは深く息を吸い込んだ。

誰かが困っていたら助けるのは当たり前、その残された意志を捨てたくないことだけは確かだった。

老夫婦の経営する小さな宿屋は、大市場から少しばかり離れるかわりに宿代が安いのが売りだ。しかしそれでも、小さな宿屋とはいえ、ほぼ毎日の様に満室なのは国が豊かである証拠なのだろう。

「ふう、今日も凄かったなあ」

昼飯時を過ぎた頃、やっと宿屋一階の飲食店には落ち着きが出始めた。人もまばらになってきている。

食後の空き皿を積み重ね、たつちはその腕力で一気に持ち上げる。ふと、僅かなどよめきが遠くから聞こえてきた。一体何事かと、たつちを始めとした周りが首を傾げる。すると突然、一人の女性がバン！と勢いよく扉を開け駆け込んできた。

「!?!」

彼女はまだゆっくりと食事をとっていたばかりとしていた仲間の中に駆け寄ると、興奮冷めやらずといった風に口を開く。

「陛下が！ 魔導王陛下が大市場に来て下さっているの!!」

「おお！ 本当か!?!」

周囲が一気に嬉しそうにどよめく中、たつちは心臓が握り潰されたような錯覚に陥った。落としそうになった大量の皿とコップのバランスを慌ててとり、たつちは早足で洗い場に向かう。

「あ、あの！ すみません！ 魔導王、陛下に会い、じやなく見に行っても!?!」

いつも落ち着いていて礼儀正しい彼の珍しい姿に、洗い場にいた宿屋の主人は驚く。しかしすぐに笑って、早く行つておいでとたつちを送り出してくれた。

「ありがとうございますー!」

その言葉を合図にたつちは、大市場に向けて必死に走りだした。

これからどうすれば良いのか明快な答えなどなく、最悪の事態を考

えると心底会いたいわけではない。だが、会わなければいけないという焦りだけは確かにあった。

しかし、あまりの人集りに大市場を前に足を止めることになる。元々闘技場も近いこの辺りは観光客が多いのだ。噂を聞きつけ集まった人々が、すっかり分厚い壁になってしまっていた。

「アインズ・ウール・ゴウン陛下万歳！ アインズ・ウール・ゴウン魔導国、万歳!!」

聞こえてくる声に何なんだと眉をひそめつつ、たっちはひとまず人混みに無理に入っていくのを諦めた。自身の腕力が人間離れしているのは既に分かっているので、怪我人を出したくなかったのだ。

何か手段が無いかと、周りを見渡す。すると少し離れた所に高さのある物流倉庫が目に入った。方向転換し、そちらに向かったたっちは走る。

人を避け路地裏側に入り、誰も見ていないことを確かめてから人ではありえない跳躍をする。そうして二階の出窓に一旦捉まると、たっちは腕力だけで自身の肉体を屋根上に弾き飛ばした。着地後に直ぐ様身を伏せて辺りを観察し、そして、人集りの中心によく知っている懐かしいアバターの姿を認識する。

眼窩に紅い灯火を宿す、骸骨の不死者の姿を。

アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下と称賛されるその姿は、よく知っているはずの姿なのに、まるで生まれて初めて見た存在のようにたっちは感じた。

「モモンガ、さん……」

一体どうしたら、一体何が正しいのかと、愕然とするたっちには、天空から見下ろす悪魔が自身をじっと見遣っているのに気付く余裕など、なかった。

ギルド長モモンガの、本人曰く広すぎて落ち着かない私室に、転移した部屋の主人とウルベルト・アレイン・オードルは揃って大きく息を吐き出した。片方は正確には吐き出したふりだが。

「いやー、あつという間に時間って経ちますね、モモンガさん」

「いや本当に、怖いですねー。デミウルゴスが言い出したってことは、もうゴミ箱がいっぱいなんですよね、きつと」

「うーん、もう少しでいっぱいになるって意味じゃないですか？」  
「あ、なるほど」

椅子に座り、アインズとウルベルトは支配者勉強会を開始する。

支配者勉強会と言っても、今まで起きた物事、政争、闘争、事件、そして実際にナザリツクがした対処方法と結果などを書きまとめ、それを復習しているだけだ。ほんの少しでも統治者としてマシになるうとしていただけであり、また記憶を整理するための会でもあった。

「……法国も滅ぶんだなあ」

「はい、油断しない。ウルベルトさん、調子に乗ったら怒りますよ」

「分かってますよ、アインズ様」

「ウルベルトさん？」

「いや本当に調子乗りません……、すみませんでした」

睨まれたウルベルトは苦笑し、話題を変えるべく「スレイン法国弱体化計画」と、書かれた羊皮紙を取り出した。

「まあ、この一件は忘れてないから概要を読み返さなくても平気なんだけどね」

「シャルティアの件で恨んでいるのに加え、この頃にウルベルトさんが帰ってきましたからね、忘れられないですよ」

「懐かしいなあ」

ウルベルトは自身が帰還した際の天地をひっくり返さんばかりの大騒ぎを瞼の裏に思い出す。

ウルベルトの帰還は、ナザリック地下大墳墓を揺るがす大事件だった。下手をしたら、アインズ・ウール・ゴウンの終わりを迎えかねないほどの。

その轟の始まりは、焦燥するマーレの一報。蜥蜴人以外の亜人も数多暮らし、百年、二百年前に比べ異常とも言えるスピードで文明レベルを発展させたコキュートス直轄領にて、ウルベルトを発見し保護したという一報だった。

それから、本当に様々な問題が勃発した。そしてその様々な問題や騒動を挟み、世界の災厄そのものたる悪魔のウルベルトはアインズ・ウール・ゴウンに正式に帰還し、モモンガの世界征服に友として協力することになったのだ。

「……懐かしいですねえ、モモンガさん」

「皆を巻き込んで壮大な茶番をして謹慎処分になったことがですか？」

「違いますよ」

まだ言うんですかとウルベルトが不機嫌そうに歯を剥き、モモンガは笑って謝った。

「ほら、この法国弱体化計画は自分達で立案した作戦じゃないですか」「覚えてますって」

当時、ウルベルト帰還に伴うゴタゴタが終わりアインズが法国についての思案を思い出したのと、ウルベルトが今までの報告書を読み漁り抱いた感想。それらが合致し偶然生まれたのが、『法国弱体化計画』だった。

とはいえ難しい計画ではない。むしろ、至極単純な話だ。

全ての人間が環境の変化に耐えられる訳ではないという、真つ当すぎるほどに真つ当な話だ。

アインズ・ウール・ゴウン魔導国の行った政策は、あまりに単純で、そして平等すぎた。ナザリックとそれ以外。そしてそれ以外の中にあるのは特異な才能の有無。

その世界は、ヒエラルキーの下層にいた者達には有り難いが、上層にいた者達には堪ったものではない世界だ。今まで見下していた者



達と並べられ、さらに才能まで平等に見比べられる。今まで築き上げた空虚な自尊心がガラガラと悲鳴をあげ崩れるには、充分な事象だ。そして、その被害者面した元ヒエラルキー上層者達の燻りは、ずっと国内にあり続けた。

爆発できず溜まるだけの苛立ちは、じわりと魔導国の足を引張り空気を悪くしていたのだ。

ウルベルトはそれを指摘した。まだ上位悪魔になったばかりの、あの世界を憎んでいた彼だからこそ指摘したその事実には、モモンガはヒントを得た。

その無能達の燻る火種をみな、法国に押し付けてやろうと。

最初は魅了や催眠を裏で使うことになったが、段々と火種は勝手に法国に行くようになった。不満はあるが無力で爆発できない彼らは、勝手に法国を人間の理想郷とし逃げ場を作り出したのだ。結果、そこに行けば救われると信じて、無能ほど我先にと命をかけ法国へと亡命して行った。

その結果、頭を抱えることになったのは法国だ。

人間こそが神に選ばれたと宣うかの国は、魔導国と属国になった帝国から流れてきた無能達を、受け入れざるを得なかった。さすがに門を開けず、神が選ばれたのは有能な人間だけだとは言い出せなかったのだろう。結果彼らは数多の無能を抱え、どんどん豊かになる魔導国とは真逆の道を行き始めた。宗教理念と喧しい国民のせいで法国は魔導国に媚びた取引も行えず、緩やかな衰退を迎えるために日々を過ごし始めたのだ。

追い打ちのように魔導国が法国出身の人間でも有能ならば雇い始めた時点で、法国の中心人物者達は胃に穴を開け始めただろう。

無能が集まり、有能で勇敢な人物達が出ていく。国にとっては地獄の光景だ。

それと同時に宗教の力も、国力の低下と同時に著しい低下を迎えた。神に選ばれたと自身を慰めるのにも限界を迎え、実際にそれなりの才能があるのにろくな仕事も報酬も無くなった六色聖典の者達の離反が始まったのだ。特に、アインズ・ウール・ゴウン魔導王の暗殺

などという無茶な仕事がとどめだった。

とうとう一人の裏切り者が出て、その人物が魔導国に受け入れられた後は堰を切ったように裏切り者が続々と溢れ出た。

「……………一体何年経ったんだろう」

「それを考えるのは止めましょう、モモンガさん。アンデッドと悪魔に寿命なんて無いんですから」

「……………衰えとか感じないですか？」

「全く。時の経過を感じないほどです」

「俺も同じく、ですね」

ぱらぱらとモモンガは法国を裏切った人物リストを眺める。

確かに、もう法国は用済みだった。有能で行動力ある人間は魔導国に充分すぎるほど流れ込んだ。今あの国には、アインズ・ウール・ゴウン魔導国には不要な思想と人物と愚鈍な愚者ばかりが集まっている。

もはや国ではなくただのゴミ箱。後は中身を燃やし尽くすだけで良い。ゴミが溢れて汚されるのも不愉快なので、なるべく早めに終わらせようと、モモンガは決心する。

「まだまだ油断はできないけど……………」

シャルティア洗脳の主犯達にも法国自体にも無様な末路を迎えさせることができそうで、なかなか悪くない復讐になった。モモンガの機嫌が良くなるのを感じ、ウルベルトは笑う。

「楽しみですよね？」

「ええ、そうですね」

直ぐ様肯定したモモンガを、ウルベルトはこっさり笑う。

モモンガは、自覚している以上にナザリック地下大墳墓の者達に対して激甘だ。本人は全くの無意識なのだろうが、シャルティアを殺すことになってしまった原因の国を滅ぼせることに対し、それなりに浮かれている。

これは本当に自分がすっかりしなくてはと、ウルベルトは自戒する。

「…………ウルベルトさん、勉強会が終わったら手合わせしませんか？」

その後は倉庫のまだ活きが良い人間を闘技場に放って、乱戦練習しましょうよ」

「お、良いですね。モモンガさん、殺る気満々ですねー」

「まあ、たまには子供達に良い所見せないといけないですし……」

ブハツとウルベルトが吹き出し、その肩を振るわせる。

「くくつ、古典ラノベあるあるの子供の運動会に張り切るお父さんみたいですよ」

「……よし、お父さん頑張って皆殺しにするぞー」

「ちよつと！ 法国戦でシリアスな時に笑っちゃったらモモンガさんのせいですよー」

「支配者として相応しくないので耐えて下さいね」

「はー……、笑ったらダメと思ったら沸点低くなるのは悪魔になっても変わらずかー。モモンガさんは骸骨だから良いですよー」

「でも、笑っているのも悪魔っぽくないですか？ なかなか不気味と思えますよ？」

「なるほど、言われてみればそうですね。相手もかなりムカつきそうですし。……どうです？」

にやりと不気味さを意識してウルベルトは嗤って魅せた。

「……オレ、ウルベルトさんの装備もアバターもずつとカッコイイと思ってたから、不気味と思えないなあ」

「そっかあ、今度拷問部屋で表情による反応変化でも見てみるかなあ」

「悲鳴をあげることには変わりないんじゃないですか？ というか雑談になっちゃってますよ！ 支配者として、ちよつとは頑張ってますよー」

「ん、そうですね。頑張りましたよか」

うんと背伸びして、ウルベルトは姿勢を正すと机に向かった。モモンガも改めて座り直す。

そうしてやっと、血腥い雑談を挟んで、支配者勉強会が開催された。

その数日後、久方ぶりに、モモンガとウルベルトは帝国領土に出か

けることにした。

特別用事があるわけではない。何か欲しい物があるわけでもない。そもそも、各階層守護者をはじめとするナザリックの者達皆は、モモンガとウルベルトが揃ってナザリックから外出するのをあまり快く思っていないのだ。特に、召喚した智天使だけを供にして支配者達だけで街中を歩き回るような外出時は、くしゃくしゃに顔を歪める。しかし至高の存在たる支配者達は、この外出については一歩も譲らなかつた。

これはモモンガとウルベルトの話し合いで決定した『たまには外出し、街と人を直に見ること』という、2人で交した取り決めを守るためだ。

一応それらしい理由として『自身が支配者であると自覚するためだ』とは伝えたが、ナザリック地下大墳墓の者達にとつてモモンガとウルベルトが絶対の支配者であるのは当然のこと。皆一様に理解ができないという顔をしていた。

しかし、それではいけないのだ。モモンガもウルベルトも、自分達が墮落するのを恐れ、自惚れてしまうのを警戒していた。

ナザリック地下大墳墓の中では、モモンガは全て肯定されてしまふ。ウルベルトも、悪魔として拷問を楽しみ過ぎても誰も止めようとはしない。今はまだ人間の残滓が多少は自戒してくれるが、その自制心が永遠である保証などどこにも無い。

しかし自身の墮落や自惚れなどでナザリック地下大墳墓を危機に陥れるなど、モモンガにとつてあつてはならないことだ。また、ウルベルトにとつても、自身が愛する「悪」を自身の手で汚す真似など御免だった。

ただ醜く血塗れた狂王などに、成り下がるわけにはいかないのだ。そのため『たまには外出し、街と人を直に見ること』という取り決めだ。人間に対する親しみが深くなることは今さら無いが、人間を一つの生物として見ることはできるようになる。

さらに言うなら、ナザリック地下大墳墓の者達には絶対秘密だが、外出時には短時間だが交代で人間に化け国民と直に話している。

傳かれずにただ話すこと、ふとしたことでかつてのギルドメンバー達と話した人間だった頃の日常を思い出すこと。

その大切さを感じる限り、モモンガもウルベルトもまだまだ続けていくつもりで大事な習慣の一つだ。

たとえば、あのアルベドとあのデミウルゴスが、モモンガとウルベルトの見送り時にずっと『納得がいかない』という不満顔を隠しもしせずしようともだ。

魔導国から帝国に向かう石畳を颯爽と駆け抜ける馬車は、地面を蹴るといふよりは波の勢いで進み行く船の様だった。実際、馬車内は全く振動せず乗車している者達を不快になどさせていない。

モモンガもウルベルトも、自室のように楽しく談笑していた。

「どうですか？」

「いいですね、ムカつくほど格好いいですよ」

「ふふん、そうでしょう、そうでしょう」

モモンガの目の前にいるのは幻術を使い人間に化けたウルベルトだ。銀髪を後ろに撫で付け釣り上がった金色の瞳を愉快そうに捻じ曲げている。すこし不気味と感ずるのは、歪んだ笑みなのに美貌であると思わせるからだろうか。

服装がセバス・チャンを参考にした執事服なのは、表向きの設定が『モモンガはアインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下』、『ウルベルトは魔導王陛下の執事』だからだ。

「ウルベルトさん、色々化けられるけど必ず美形になりますよね」

「わざわざ醜男になんかなりたくありませんよ。だいたい、昔の顔もイケメンだったでしょう？」

「うーん、オフ会の時……、うわあ、全然顔が出てこない。もうウルベルトさんの顔が山羊で固定されてる……」

「……、……俺も髑髏で固定されてますね。なんか……、幸薄そうだったのはぼんやり覚えているんですが」

「幸薄そうって……、そこは記憶から削除してくださいよ……」

「否定しないんだ」

くだらない言い争いをモモンガとウルベルトが笑いながら交して

いく。

そうしているうちにバハルス帝国領土内の目的地が見えてきて、馬車の速度が緩んだ。馬車と並走していたモモンガが召喚した「門番の智天使」達も速度を落としていく。

「今日もウルベルトさんは市場は見に行かないで上で待機でしょう？」

「ええ、モモンガさんが市場を見て回る間は、上で待ってますよ」

モモンガは何か珍しい物があるかもしれないので大市場を直接見て回るのは好きだが、ウルベルトは群衆の中があまり好きではない。そのため、モモンガが大市場を見て回る時には、ウルベルトは不可視化の魔法と《飛行》を使い上空で守護天使の一体と共にいつも待機しているのだ。

「着いたみたいです、モモンガさん」

大市場近くのため、やはり国民の賑やかな声が多い。馬車を中心にごよめいているのが振動で伝わってくる程だ。

モモンガがウルベルトを一瞥すると、問題ないと頷き返された。ノックされ、モモンガはそれに対し魔導王陛下であるアインズとして応える。扉が開かれ、死の騎兵が姿を見せる。一度頭を下げた死の騎兵は、恭しくその場に片膝をついた。

アインズ・ウール・ゴウンとして、モモンガは豪華な馬車からゆったりと威厳を持って降り立つ。先ほどのざわめきは嘘だったかのよう、その場は静かになった。

六体の守護天使の内三体が馬車より少し高い場所に、残りは陛下の周りに侍る。死の騎兵は一番後ろから追従してきた。そうして陛下が一、二歩と歩いたところで、天使が一体、上空に移動を開始した。急な動きに周りが驚愕し、感嘆の声が上がる。

「さて、いつも言っていることだが、私のことは気にせず普段通りに過ごしてくれ。賑やかな大市場が私は見たいのだ」

初めの頃とは違い、すんなりと皆が笑って日常に戻って行く。最初の頃は一気に国民が干上がったため随分と寂しい市場になったものだが、人も亜人も異形種も、環境には慣れる生き物だ。

「陛下！・魔導王陛下！」

日に焼けた肌の夫婦が頭上で果物が入った籠を抱えて、笑顔でモモンガに駆け寄って来た。

「アイグーン夫妻か、元気そうで何よりだ」

「な、名前を……!? 光栄で御座います、魔導王陛下！」

「突然申し訳ありません、陛下。しかし陛下がお恵みくださった果物が豊作で、どうしても御礼を伝えたくったんです！」

「あの果樹園が軌道に乗り出したことは報告で聞いている。……ふむ、食べられないのが惜しいな」

ふと、モモンガは近くにいるこちらを見上げる視線に気付く。視線の先を辿ると、エルフの幼い姉妹がじつとこちらを見ていた。ナザリックにいる可愛い双子を思い出し、思わずモモンガはその子供達に近付き頭を撫でた。ぱちくりと大きな眼を瞬かせる二人はドキドキしながらも、されるがままで。

「その果物はいくらだ？」

「え、いえ！ 陛下から代金など頂けません！」

「妙な遠慮をするな。入れておくぞ」

慌てる夫人の頭上の籠に、モモンガは金貨を多めに入れる。ちなみに、不足するのは問題になるが多いなら問題にはならないだろうというザル勘定で入れた大量の金貨だったが、夫婦は後でその金貨に気が付き卒倒することになる。

籠から果物を取り出したモモンガは、その握力で黄色く大きな果実を半分就容易く割った。中からは、みずみずしい果実が姿を現す。

「どんな味が教えてほしい」

自ら屈み果物を手渡す陛下に、エルフの姉妹は戸惑いながらも素直に受取り、おずおずと果物を口にした。

「お、おいしいです……！」

「甘酸っぱい！ です！」

「そうか、それは良かった」

モモンガは一つ満足そうに頷き、また市場の中に足を進め始めた。その後ろでは、果樹園を営む夫婦が突然の千客万来に嬉しい悲鳴をあ

げていた。

アインズ・ウール・ゴウン魔導国の皆が笑っていること、豊かであること、その事実にもモンガは満足し頷く。アインズ・ウール・ゴウンを名乗る国内で、貧しいことなどあつてはならない。支配者として、アインズ・ウール・ゴウンを名乗った者として、その御名に泥を塗ってはいけないのだ。

「全ては、アインズ・ウール・ゴウンのために、だ」

何気なく呟いた言葉だったが、周りから勝手に続々と熱い声が返ってきた。

「はい、陛下！」

「仰せの通りです！」

「陛下のおかげで我々は幸せなのです！」

「アインズ・ウール・ゴウン陛下万歳！ アインズ・ウール・ゴウン魔導国、万歳!!」

国民の歓喜の叫びは濁流となり、一気に拡がっていく。そこにいる国民は、絶対なる神を愛する敬虔なる信徒のようであつた。



まだ人なのか 05

ナザリツク地下大墳墓の第五階層から第六階層に続いている転移門から、怯えながらも素直に歩く人間と亜人達が次々と出てくる。

少し歩いた後、細い通路に膝をつくよう指示され従う窶れた彼らは、アインズ・ウール・ゴウン魔導国内の犯罪者達だ。

まだ拷問官達の手にかかっている者達だが、傍らですつと悪魔の音楽会を聞いていたため既にその眼は絶望に染まっていた。

「下等生物って、どうしていつもこんなに愚かなのかしら？」

犯罪者達を眺める冷めたアルベドの声に、呆れをたつぷり含んだ溜息が返ってくる。

「あまりの慈悲深さに何か勘違いをしてしまったのではありませんか？ 罪な方でありんすね、モモンガ様は」

溢れる色香を纏う墮落に誘う肉体に相応しい色っぽい声、白磁の肌につぶらな紅玉の瞳と縁取る輝く銀髪に相反するような無垢で残酷な可愛い少女の声。

贅沢なそれを、集められた人間と亜人達はただ震えながら聞いていた。

膝を地に付き俯く彼らに、その色香を楽しむ余裕など全く無い。縛られておらず自由だが、だから何とかできるはずと思う愚か者は先ほど一瞬で首と胴を切り離されていた。

面倒だから後でまとめて処理しようと思っただけで彼女達が判断したため、死体の近くの者達は膝を血で濡らしている。それは不愉快ではあったが、それでも誰も文句を言わず動きもしなかった。体を支配する恐怖の方が、遥かに強かったからだ。

「感謝しなさい。あなた達下等生物が、最期に偉大なる御方のお役に立てることを」

啜り泣きが漏れ始め、次第に嗚咽の音が酷くなってきた。

「お許しを、おねが、いします……！ どうか、お許しを……！」

「もう魔導王陛下の御意志に逆らうことなどしません、お許しを……！」

「どうか御慈悲を……!!」

重い溜息が零れ落ち、そして鈍い音が響く。そして、アルベドの足近くの地面に液体と肉が飛び散った。

上半身が吹き飛んだそれは腰から僅かに背骨を出し、何かの手違いのように下半身だけが腰を降ろしている。その周りにいた者達は呆然としたまま、自身の浴びた液体と臓物を、ただ温いと感じていた。

「あら、いけない。不愉快すぎて殺しちやっただわ。シャルティア、秘密にしてくれるかしら？」

「もちろん、構わないであります。だいたい私もあんまりな言い分と無様な姿に苛々していたから、むしろ助かったでありますよ」

「本当に、愚かすぎて苛々するわね。アインズ・ウール・ゴウン魔導国の統治下に入る、それだけで身に余る慈悲を頂いていると理解もせず、己が欲望を貫き通すなんて」

もう啜り泣きも嗚咽も懇願も聞こえず、沈黙しかない。

そこにいた罪人達は、自分達自身の愚かさを呪った。一人は、一時の快楽のためエルフの娘達を強姦した。とある一族の者達は、勝手に奴隷制度を続けていた。悪党集団達は、違法薬物を使い拡め売っていた。とある亜人は人間を浚いこつそり食っていた。

その快楽は、味わっている恐怖に比べ何と小さいことだろうと、誰もがあまりに釣り合わないと痛烈に後悔していた。

「アルベド様あ、シャルティア様あ、モモンガ様とおウルベルト様のおご準備が整いましたあく。連れて来てくださあい」

ひらひらした袖を振る妙に甘ったるい声を出すメイドが、細い通路の向こうに現れる。罪人達のいる暗い通路と違い、向こうは明るい。それが今さら彼らは希望など感じ取れなかった。

そんな彼らだが、心底可哀想なことに、未だ正気だ。肉体に傷はなく、昨晩は質の良い食事を与えられたため普段より元気なぐらいだ。だから誰もが正常な思考で、先程からとある疑問を抱いていた。恐ろしくて口に出せなかっただけの疑問を。

“モモンガ”とは、“ウルベルト”とは、一体誰のことなのか、偉大なる御方とはアインズ・ウール・ゴウン魔導王のことではないのか、と。

隠されている事実を、わざわざ罪人に伝える者などナザリック地下大墳墓には居ない。切り札として隠されている、“ウルベルト・アレイン・オードル”の存在を知るとは死ぬことと同義であるということも含め、誰もその愚か者共に教えてやろうとはしない。これから殺す虫にわざわざ、今からお前は死ぬのだと伝える人間など、いないように。

「エントマ、死体が出たであります。食べるでありますか？」

「わあ、良いんですかあ？」

たつたと罪人達の方に駆けてくる女の子はとても嬉しそうな足取りで、ひらひらしたメイド服を靡かせる姿はとても可愛らしかった。しかしその可愛い声の発する言葉の意味と、次に近くで聞こえるむしゃむしゃという音が何を指すのかは、罪人たちは必死に俯き意識しないようにした。

その頭上から、美しい声で死の宣告が降りかかる。

「立ちなさい。そして喜びなさい。あなた達はこれから偉大なる御方の視界に入り、その御手で殺される栄誉を賜るのよ」

誰も立ち上がらなかった。逆らっているのではないということ、アルベドの溜息一つで肩を揺らし、泣き出した者までいることで分かる。

「——立ち上がり、こちらに向かって歩きたまえ。場内に出て、待機だ」

とても心地の良い声が響くのと同時に、一斉に罪人たちは立ち上がり細い通路の先に向かい歩き出した。その先にいる逆光を背に立つ尻尾のある細身の男が何者かなど、何も考えずに。

「あら、デミウルゴス。……嫌だわ、もしかしてモモンガ様をお待たせしちゃったかしら!？」

「それは大丈夫だよ、アルベド、私が勝手に様子を見にただけだから。それから、腹立たしいのは分かるが、私が居ない時のことも考え

て、もつと上手く制御した方が良いと思うよ」

「だって……、ねえ？」

「あれは仕方ないでありんすよ」

「こんな時には結託するんだね、君達は……」

苦笑するデミウルゴスが、いる円形劇場への入口に、口を尖らせたアルベドとシャルティアが近づくと、

「後は私がやっておきますよ。……エントマ、食べるのは既に死んだ者だけだ」

「はあ〜い。死体だけを、片付けますう〜」

「ありがとう、助かるわ、デミウルゴス、エントマ」

「お言葉に甘えて、先に席に行かせてもらおうでありんす」

シャルティアがゲートを開き、アルベドと共に観客席へと移って行った。

通路から全ての罪人達が円形劇場内に出て来たのを確認したデミウルゴスは、指示を待つ愚者達に再度『自由にして良い』と声を掛け、  
“支配の呪い”から彼らを解放した。

傀儡だった者達に一齐に自我が戻り、恐怖と絶望も戻ってきた顔を見渡し、彼は満足げに頷く。

一仕事終えた悪魔は観客席に向かい軽く跳躍し着地すると、既に席で楽しそうにしている仲間達の近くに腰を降ろした。

自分達はまだ希望していたのだと、真の絶望を見て罪人達は知った。

「っ、あ……」

「いやだ、いやだいやだいやだ!!」

「うそ……だ、こんな……」

もしかしたら助かるかもしれないなど、無意識の奥で考えるのすらも烏滸がましかかったのだと痛感する。半狂乱の泣き声と笑い声が響く。座り込んでしまった者すらいた。

「おやおや、練習になりますかねえ？」

嘲り笑われても、それが当たり前前すぎると腹立たしいとも思わないのだと彼らは知った。

捻じくれた山羊の角、歪んだ金の瞳、美しい衣装は黒く滑らかに輝き、細やかな金装飾具と胸元にあるバラや衣装の差し色である赤をより鮮明に美しく引き立てている。

そして、美しく歪んだ笑みを見せる悪魔の如く嗤う山羊の隣にいるのは、まさに死の具現。その髑髏の眼光に宿る赤い炎は見る者自身の命の灯火に思える。一目見ただけで自身の命の軽さを感じさせる、絶対の存在である死の支配者。

「……まあ、的にはなるでしょう」

その支配者の言葉に、周囲から笑い声が返ってくる。

見渡し、観客席に異形の者、人間に見える者達がいるのにやっと彼らは気付いた。そして自分達の立場というものも、嫌々ながらも理解をし苦い唾と共に飲み込んだ。

モモンガとウルベルトは頷き合い、互いに背を向け歩き出す。そして、闘技場の隅に向かい合う形で立った。

目の聳え立つ死と悪魔に、罪人たちはこれから何が起きるのかと涙を流し絶望する。すると、目の前に突然現れた歪みから金髪のメイドが現れ、なんとその艶めかしい体から、泉に石を投げ入れた時のように波紋を広げて大量の武器をがらりと零したのだ。

「ルールを説明します」

まるで何事もなかったのように、淡々とメイドは語る。

「一撃でも、至高の御方に与えることができた場合、あなた達は開放されます」

何を言われたのか、それが事実なのか、最早過ぎた恐怖と絶望に脳が麻痺した罪人達には判断が出来ない。しかし、のろのろと彼らは武器を握った。

それが抱いてしまった希望からなのか、逆らうのが怖いという感情からなのかは、最早彼らにも分からなかった。

「チャンスですよ？ 今は疲れてますからね、訓練終わりです」

悪魔の甘い囁きが、円形劇場内にて響く。それは確かに、嘘ではなかった。先程までウルベルトとモモンガは互いの魔法能力の把握、組み合わせ検討、超位魔法発動までの時間をアイテム無しで凌ぐ戦闘訓

練をしていた。実際にMPはそれなりに消費している。

あくまで彼らにしては、だが。

「うおおおおおおお」

一人の狂戦士が悪魔の垂らした蜘蛛の糸に勢いよく飛びついた。彼の目に、悪魔の歪んだ口元は目に入っていない。

「《魔法の矢》」

「《火球》」

放たれた魔法が知っている魔法だった、それだけで最早狂人と化している罪人達は突貫して行く。たとえ目の前で火達磨になった人間が悶えても、頭から足の先まで貫かれ苦悶の表情を浮かべながら死ぬ巫人が積み重なってもだ。

ウルベルトとモモンガはわざと手を休め、周りを取り囲まれるのを待った。

「《龍雷》」

「《死》」

それはフレンドリーファイアの解禁された現状で、乱戦状態になっても同士討ちをしないように魔法を放つ訓練の為だ。周りを取り囲まれ、魔法を放つと互いに当たりそうな場所に敵がいる。その状態こそが訓練に求めている環境だ。

ちなみにレベル差がありすぎるということで縛りプレイとして、罪人達を逃がしてはいけない、攻撃を受けたら即死と思えば必ず避け逃げながら攻撃をすること、という2つの縛りがある。

そのため、攻撃を必ず避け周りを確認し逃亡者がいたら率先して殺し、と、なかなか難しいゲームになっている。

「ウルベルトさん！ 右手後方に逃亡者！」

「了解、《火球》！」

立ち位置的に狙うのが難しい敵は、互いに補佐しながら殺していく。そうして更に、放つ魔法の距離感、威力、狙えるかどうか、狙えるとして精度はどれぐらいか、それを知り、学び、練習していく。

「《魔法位階上昇化・魔法の矢》」

「《現断》、《火球》」

モモンガがウルベルトの背後から斬りかかろうとしていた男を真っ黒焦げにする。

「おつ、上手くなりましたね、モモンガさん！　ありがとうございます！　す」

「練習の成果です！　ウルベルトさんの攻撃も、さつきからすごく正確ですよ」

「いやー、上達するもんなんですね。なんだろう、ボールを投げる練習……、みたいな感じしません？　《魔法位階上昇化・魔法の矢》」

放たれた矢は美しい軌跡を描き、壁を上り必死の逃亡を試みていた者達を続々と貫く。お見事です！と、観客席から熱い拍手が響いた。

「確かに、そんな感じですね。《火球》。最初の頃は俺達、互いに攻撃しちゃって大変でしたもん」

「モモンガさんを攻撃してしまった時は本当に焦りましたよ。おや、もう挑戦者はいないみたいですね」

死体が積み重なり、勇敢な者は死に絶えた。後は半狂乱で泣き叫びながら背を見せ逃げる者達だけだ。モモンガも周りを見渡し肩をすくめると、一斉に逃げに転じ始めた残りの罪人達に見切りをつけた。

訓練は終了し、生き残りの罪人達の殺処分が開始される。

燃やされる肉の匂い、焦げ臭さ、悲鳴、肉の上に肉が重なる音が絶え間なく続く。そうした果てに、可哀想なことに、どんな不運が重なったのか一人だけで生き残っている人間がいた。

モモンガとウルベルトは、共にその残りモノに目を遣る。

「う、あ、ああ……」

《龍雷》

《魔法位階上昇化・火球》

まさにオーバーキル。悲鳴をあげることもなく、その人間はただの炭に成り果てた。

そして、嬉しそうな声を上げながら観客席から一斉にナザリツクの者達が飛び下りてきた。

「さすがはモモンガ様！　一太刀も浴びずに終わらせるとは、なんと素晴らしいでしょう！」

「ほんに凄すぎるでありんす！」

「マサニ至高ノ御方。コノキュートスモ、鍛錬二一層励ミタク思イマス……!!」

「大変素晴らしい……！ 勉強になりました！ このデミウルゴス、まだまだ至らぬ身であると痛感いたしました……！」

「あ、あの、モモンガ様もウルベルト様もかつこよかったです……！」  
「最後に殺された罪人は幸せものですね！ あんなに凄くて綺麗な魔法で死ねたのですから！」

キラキラ輝く瞳と熱い羨望を向けられ、モモンガは照れてしまう。絶対の支配者が賞賛されて気恥ずかしくなるわけにはいけないので、咳払いで誤魔化した。

「う、うむ。皆、ありがとう。これは賛辞に対する礼ではなく、訓練準備を手伝ってくれた礼だ」

言う前から分かっていたことだが、守護者達は一齐に礼など不要だと慌てた。それでもモモンガは、礼を言うべきと判断したら言い続けようと決めている。しかしそこに突っ込むと互いに譲らず堂々巡りになってしまうので、触れずに流し話を続けた。

「お前達も乱戦訓練をした方が良くかもしれないな。私とウルベルトさんも最初は上手く連携が取れていなかったのは見ていただろう？」

笑顔だった守護者達の顔が一齐に真剣味をおびる。

乱戦訓練初回、ウルベルトの威力上昇させた特大の《火球》をくらい、モモンガは久方ぶりにHPを大幅に減少させたことがある。その時のことを思い出したのだろう、下手な世辞は出ない。

ちなみにこの事件時、モモンガは難しいゲームに挑戦できたことがむしろ愉快で笑って許したのだが、守護者達の方が暫く落ち込んでいて大変だった。

「牢獄の罪人達は好きに使って良いから、お前達も乱戦や共闘などの経験を積むと良い。後は、そうだな……。最悪に最悪の事態を想定して、一般メイドを後方で守りながら戦ったりとかだろうか……。ウルベルトさん、……。ウルベルトさん？」

他にどのような事態を想定できるか聞こうとした相手が近くに



ないことに気付き、モモンガは首を傾げる。

「どうしたんですか、ウルベルトさん？」

モモンガから少し離れた所で、ウルベルトは死体の山から何かを探していた。

「モモンガさん、これ、貰っても良いですか？」

死体の山の中から、虫の息の男をずり取り出したウルベルトは、それをずるずると引きずりながらモモンガに近づく。

「また拷問ですか？ 遊びすぎは駄目ですよ。最近、増えてませんか？」

「違いますよ。後で、ちゃんと理由含め報告はします。デミウルゴス、エントマ、少し一緒に遊びに行こう」

「はっ、お供させて頂きます」

「畏まりましたあゝ」

声を掛けたメンバーから考えるにやっぱ拷問じゃないのかと、モモンガは少し呆れる。しかしこれ以上指摘はしない。元々死ぬはずだったのだから、間に拷問が挟まろうと大した差は無いのだから。

「ソリュシャン、先ほどの訓練は守護者達だけでなくプレアデス、いやナザリツクにいる戦闘員全員が希望するなら可能であると伝える。ただし、訓練時は私もしくはアルベドに許可を取り、万が一に備え観客席には必ずレベル八十以上の者を最低二名は置くことを厳命する」

「はっ、畏まりました」

ふと、モモンガはナザリツクの者達皆が寂しそうな顔をしているのに気付いた。原因は、先ほど去ったウルベルトとデミウルゴスだ。自身の造物主がいないことに、やはり彼らは寂しさを感じてしまうのだ。

一応モモンガからもウルベルトに対しデミウルゴスばかりをかまわないように伝えている。だが自身の作成したNPCを気に入る拷問趣味もマツチしているからか、どうしてもウルベルトは比較的デミウルゴスとよく遊んでいる。

そうなるとやはり、造物主がいない子供達をサポートするのはモモンガの役目だ。少しはその寂しさを埋めてやりたくて、直接の生みの

親代わりにと、度々モモンガは氣遣っていた。

遊びに行こうと誘ったり、欲しい物がなにか気にかれたり、何かしたいことはないか聞いてみたりと色々している。

「ところで今日は皆暇か？ 急ぎの仕事を抱えていないか？」

しかし結局、モモンガにとつてできることは、子供達に寄り添うことぐらいである。

皆が口々に時間があると言い、モモンガの氣遣いを察して、はにかみながらも嬉しそうにそわそわし始める。

「そうか。それなら皆でお茶でもしよう。私は飲食できないが、皆と語り合うことはできるからな。ソリュシヤン、暇な姉妹がいるなら誘ってくるの良い」

わつと嬉しそうに笑顔が咲く。その笑顔を見てモモンガも嬉しくなった。

彼らが幸せならそれでいいと、それだけを心底思っていた。

## まだ人なのか 06

たっち・みーは、生まれて初めて何かの気配を感じて獣のように目が覚め、飛び起きた。

寝ぼけ眼のままだが本能のままに、アイテムボックスから武器を取り出し振りかぶる。相手の気配が動かなかつたのと理性が、既の所でその腕を止めた。

目の前にいる闇夜に佇むモンスターを見て、逆に思考が冷静になるのも、たっちにとっては初めてのことだった。

「……シヤドウ、デーモン？」

見覚えのある影の悪魔は頭をゆっくりと垂らし、恐る恐るといった風に頭を上げる。そして窓辺へするすると移動した。まるで、誘うように。ゴクリと唾を飲み、勢いで取り出した武器を握りしめたまま たっちは窓辺へ近付く。そつと外の様子を覗き込み、そして下にいた存在に たっちは息を呑んだ。

軋む窓を慌てて空けて、その勢いのまま外へと飛び出す。三階から飛び降りたのだが、しかし当然のごとくノーダメージで たっちは着地できた。

「……まさか、あなたもいるとは思いませんでしたよ、ウルベルトさん」

名を呼ばれた悪魔は、つまらなさそうに、冷めた声音で答える。

「それは俺の台詞ですよ、たっちさん」

心許ない星明りしかない夜。建物に陰られ塗りつぶしたような黒の中にいるウルベルト・アレイン・オードルは、まるで人々の悪夢をこの世に体現してしまったかのようなだ。ステッキを持ち優雅に立ちながらも、じつとこちらを伺うウルベルトの見慣れているはずの姿も、たっちには見知らぬ者に思えた。

「何をしに来たのですか」

「そつちこそ、こんな所で何をしているのですか？ 大人しく最期に

家族のことも思つて成仏していれば良かったのに」

目を見開くたつちに、ウルベルトはにんまり笑う。

「おや、当たりですか。ますます仮説が確証に近づいたな」

「仮説……？」

ウルベルトは空を見上げ、何かを思い出したのか、ふうと気怠げに息を吐いた。

「想像通り、俺も死んだと思つたらこつちにいたんですよ。原因として考えられるのは死ぬ寸前の後悔。モモンガさんともつと遊びたかつたなという、後悔だけ」

その後悔は、たつちにも身に覚えがあることだ。

走馬灯の中で思い出したアインズ・ウール・ゴウンの思い出は、とても楽しかつたが、最後に一つ棘のような気掛かりを残していた。

「この世界は、死ぬ時にゲームのことを強く思つた存在が引き寄せられる世界なのではないか、という推測です」

それなりに緊張感を持つべき場面だが、ついたつちはぼかんとしてしまふ。

「なんですかその推測は……、滅茶苦茶だ」

しかし別にからかつている訳ではないらしく、ウルベルトは真剣に言葉を続ける。

「そうですね？　世界のルールなんてそんなものでしょう。重力がなぜ存在するのか、そもそも物体がなぜ存在するのか、考えだしたらキリがない。そう決まっているから、そう決まっている。ただそれだけの話でしょう」

「だから、それが無茶苦茶だと……」

「あの世界のルールに比べたら可愛げがあると思いますかね」

その冷やかな声に、たつちは言葉を失くす。そのルールを守る立場だったたつちに対する皮肉であることは、その顔の歪んだ笑みを見れば分かることだ。

「まあ、つまらない雑談は止めましょう、たつちさん。こんな所で悶々としているあなたに、親切な俺が、せっかく答えを持ってきてあげたのだから。デミウルゴス！」

名を呼ばれ現れた悪魔を見て、たつちは郷愁を感じた。かつての輝かしく楽しかった思い出が、思わず脳裏に溢れ、とめどなく流れ出てくる。

翼を広げ優雅に降り立つ悪魔は、ナザリツク地下大墳墓の、たしか第七階層の守護者だ。ただただ懐かしいと、たつちは思った。

翼が仕舞われ、悪魔が何事か呟くとその身を屈めようとして、ウルベルトに邪魔された。

「跪くな、デミウルゴス。忘れたのか、俺が戻って来た時のことを。あれはまだアインズ・ウール・ゴウンに正式に帰還していない、部外者だ。お前達が忠誠を誓うのは、アインズ・ウール・ゴウンとそこに君臨する、俺達だろう？」

その言葉に、悪魔は我に返ったように一瞬息を止め、邪念を振り払うかのように頭を振った。

「はっ……失礼致しました、ウルベルト様。私の、いえナザリツク地下大墳墓にいる全ての者達の忠義は、ウルベルト様とモモンガ様に捧げております……！」

意志を持ち喋っているNPCは、想定していたが、やはり驚愕してしまう。本当に今は自我を持ち生きているのだと、目前で自由に動く姿を見てやつとたつちは呑み込むことが出来た。

「どうやら……、NPCが生きている予想は当たっていたみたいです。ね。それでも衝撃的でしたけど」

「ええ、可愛い子供達は皆いますよ。エントマー！」

今度はウルベルトの後ろの闇から、人影が現れた。それを見てたつちは戸惑う。

どう見ても、ただの人間だったからだ。傷は無いが何故か随分と草臥れ弱り果てている雰囲気、その衣服も妙に臭う。焦げと腐臭が漂っていた。ひどく怯えているその大柄な男は、今にも泣きそうな顔でメイド服を着た自分よりも小さな女の子に背中を小突かれるまま歩いている。

そのメイド服の小さな女の子には、たつちは見覚えがあった。第九階層でよく見た懐かしい姿だ。記憶にある設定通りなら、正確には、

女の子”と言うのは正しくなかったはずだ。

エントマもたつちの方をちらりと見るが、ウルベルトを一瞥すると会釈だけをし、たつちを視界から外した。

「最後のチャンスですよお。さあ、走つてえ〜」

とんつと、先程より強めに小突かれた男は弾かれたようにたつちの居る方向へと走り出した。しかしその瞳には何も映っていない。ただ塗り込められた恐怖と絶望がそこにあり、本人もどこかで無理だと分かっている節があった。

後ろからひたひたひたひたやって来る死から、逃げられないという確信をその男は抱きながら走っていた。

「《魔法の矢》」

光の矢が、美しく宵闇を切り裂き駆け抜ける。その果にあつたのはたつた一人の命。

矢に貫かれ、男の左目から、右肩から、胴体から、大量の血液と裂かれた臓物が飛び出る。衝撃で飛び出してしまった右目眼球が、ころころとたつちの足元に転がってきた。

そうして魔法の矢は消え、死体は石畳の上に崩れ落ちる。ただの肉塊はびくりとも動かず、ただ血を流していた。

「これが答えですよ、たつちさん」

「そうですか……、よく分かりましたよ!!」

デミウルゴスもエントマも見えていない、装備の差も考えていない、ただ目の相手が人殺しをしたという認識だけで、たつちは飛び出していった。

笑う悪魔は構えない、何もしない、何も起こらない。

それに流石にたつちもなぜと思った瞬間、頭上から第三者が落ちてきた。

二刀流、小柄、素早い、即座に判断したつちは身構え直す。一旦距離を取り、そして間近の相手が、全く知らない小柄な少女であることに瞠目する。

「っ、なに、」

慌てるたつちと違い、相対する少女は冷静に一撃一撃を繰り出して

くる。たっちの戸惑いはそれだけでない。

弱い、弱すぎるのだ。ろくに装備も整えていないたっちでも、力で押し勝てそうで、ハッキリ言って手加減に苦労させられていた。

「なんなんだ君は！ なぜあいつを護っている!？」

「私はウルベルト様に拾われた身。あの方に刃物を向ける者は、全て殺す」

見た目と全く合っていない冷淡で無機質で幼さだけを粗末に残す声。そこでたっちはやつと、目前の少女が暗殺者だと気付く。武闘経験による攻撃ではない、急所だけを確実に狙い殺そうとする剣だ。

「忙しそうだから簡単に解説しますよ。その子、本当は魔導王を暗殺するために送り込まれたんです。だけど暗殺は無理だと王と側近を見て直ぐに分かった。弟を人質に取られてさえないなければ逃げ出していたほどに、絶望したらしいですよ」

金属音が響く、だがたっちは別に命の危機を感じない。ウルベルトも分かっているのだろう、たっちが話を聞きながら片手間で少女をあしらえることを。

「くく、今でも笑える。いきなりエ・ランテルの玉座に現れて自分から暗殺者だつてバラしたんですよ、その娘。それで弟を助けて欲しい、何でもするからつて……、全く美しい話じゃないですか、大爆笑ものの」

ウルベルトは隣で首を傾げているデミウルゴスに気付き、さらに笑みを深める。暗殺訓練のみ受けた戦闘経験皆無の低レベル少女が、なぜ至高の御方と打ち合いができるのか不思議で仕方ないのだろう。

対たっち・ミーメイン盾として、あれを連れて行くと言った時からずっとデミウルゴスは理解できないと顔に出していた。そろそろ解説してやらないと可哀想だと、ウルベルトは口を開く。

「デミウルゴス、ただ強いだけじゃなく、こういう盾もあるんだ。あの正義厨のたっちさんに弱い女の子は殺せない」

「さすがはウルベルト様……。考えが及ばず、恥ずかしい限りです」

たっちの目の前で少女が不愉快そうな顔をし齒ぎしりする。悔しいと、分かりやすく顔に出す少女に、再度たっちの剣が鈍った。洗脳

されているのではなく、本心からウルベルトに忠誠を誓っているのだと知って。

「さてと、そろそろ落ち着いてくださいよ、たちさん。さっきのは罪人ですよ」

さすがに我慢の限界を迎え、可能な限り力を制御し女の子をたっちは弾き飛ばした。

少女はあっさりと吹き飛ばされ、壁に衝突する。

「罪人だからって……！ 貴方は今、人を殺したんですよ!？」

淡々としたまま身動き一つしないウルベルトに、たちちは苛立つ。睨めば、呆れたような溜息が返ってきた。

「分かりませんか？ 一桁単位の殺害なんて、とうの昔に終わっているですよ。今ではもう何人殺したのやら……」

「なっ!？」

「ちなみに拷問も経験済み……、というか趣味ですね。この間はなんだか楽しくなってずっとオツドアイを作っていましたよ」

笑うウルベルトの言葉の意味はあまりに常軌を逸していて、何を楽しんだのか、たちはなかなか理解できなかつた。

「あ、あなたは……」

「赤色を見て赤色だと思う、肉を触って肉だと思う。立って歩くのを意識しないのと同じように、もうすっかり、思考と趣向が悪魔なんですよ。人間の笑い声は耳触りだし、逆に悲鳴は癒やされる。怯えた無垢な子がいれば、暗がりまで追い詰め目玉をくり抜き指を一本一本切ってやりたいと思いますよ。……やりませんがね、アインズ・ウール・ゴウンに逆らった存在にしか」

「……アインズ・ウール・ゴウンに逆らった存在だけ、か」

その手に持つ武器を下ろすたっちの姿に、ウルベルトも警戒を解いた。

「良かった。あなたがもし古典ラノベによくいた訳の分からない精神論や人間の命は平等だとほざく主人公のようなことを言い出すようなら、ここで殺してしまうつもりでしたから」

心底安堵したように言うウルベルトに、乾いた笑い声が返ってくる



る。それは予想外で、ウルベルトは訝しげに正義が好きなのは男を見遣った。

「ハッ、ハハ……。ウルベルトさん、あなたは本当に勘違いしている。私が、本当にそんな愚か者で、リアルでも真っ直ぐに正義を貫き通すことができていたのなら……。ユグドラシルでわざわざ正義の味方なんかしていないでしょう」

その言葉に、ウルベルトは少し戸惑った。自分がずっと嫉妬していた、ずっとキラキラ輝いているはずだった存在の、しなびた声を、まさか聞けるとは思っていなかったのだ。

勘違いをずっとしていたのかもしれないという動揺と、これなら敵対することなくアインズ・ウール・ゴウンに帰還し戦力になるかもしれないという打算が、同時にウルベルトの頭に浮かんだ。

「……モモンガさんは、まだ人なのか？」

その問いの意味なす所に、ウルベルトは呆れる。しかしその気持ちに、同調もしていた。自分の意識と記憶があるまま、自分ではない何かに変わった動揺と誤魔化しようのない心理変化。それはウルベルトも知っていることだ。

「……たっちさんこそ、まだ人のつもりですか」

ウルベルトの想定以上に、その言葉は効果を表した。たっちは足元の死体を見て、黙り込んだ。黙ったまま、何も否定をしないのは、そういうことなのだろう。

「……今日はもう帰ります。影の悪魔は見張りや伝令用に付けておきます。破壊したら敵対したと判断しますので、その馬鹿力でうっかり壊さないように」

「……モモンガさんに報告するのか」

「しますよ。我らのギルマスは相変わらず周りのためにギルマスしてるんですから、雑務や報告ぐらいサボりませんよ。何か伝言でもあるんですか？」

「今は……。特に何も無いな……」

武器をアイテムボックスに仕舞い、たっちはウルベルトに背を向けた。

同行する意思は無いと伝える子供のようなその背中に、ウルベルトは声を掛ける。

「……百八十年です」

「は？ 何がだ？」

突然の脈絡ないウルベルトの言葉に、困惑したたつちは振り返る。

悪魔はステッキを相変わらず優雅に持ち、感情の読めない瞳でじつとたつちを見ていた。

「先程の質問に対するヒントです。モモンガさんがこの地に来てから約百八十年、俺がこの地に来てから約五十年、経っているんですよ」それは今までの戦闘よりも何よりも、たつちに衝撃を与えた。足元が揺らぎ、目の前が真つ暗になったように感じ、膝から崩れ落ちそうだった。嘘だとか悪い冗談だとか、それも言えない。

否定するのも認めるのも、たつちにはひたすらに怖かった。

「たつちさん、貴方が考えてくださいよ。俺達が、まだ人なのか」

とんでもない難問をさらりと投げつけてくるのは、さすが悪魔と褒めるべき所なのだろうか。

何も答えず、いや答えられずに、たつちは黙り込んでいた。呆然とただ立ち尽くしていると、気づけば悪夢は立ち去っており、死体も幻だったのではないかと思えるほど綺麗に消えていた。

しかし夢ではないのだと、影に潜む悪魔の気配が嫌というほど教えてくれる。その悪魔たちが、まるで答えを急かしているようで、彼は苛立つ。

問いの答えなど、自分が教えて欲しいのだから。尋ねてきてほしくなど、なかった。

主演：捧げる者達 1

緑と水色。

視界いっぱいに生い茂る枝葉、その間から見える知らない綺麗な天空。ひとまず頭はそれを視認だけした。続いて風、知らない青い匂いを感じる。

「……………は？」

訳が分からないながらも、いつまでも寝転がっている訳にはいかない。ゆつくりと、死んだはずの身を起こす。

そう、確かに死んだはずなのだ。衰弱しきった身体を横たえ、体温がとどまるところを知らずに下がっていき、恐ろしさも悲しさも超えた空虚が身を包んでいく、死に足先から浸っていくあの感覚。

あれは、嘘ではなかった。

「……………天国、なのか？」

しかしそれは、自分の人生と価値観を思えば随分と縁遠い場所のはずだ。しかしだからといって、ここが地獄のようにも思えず首を傾げる。

「……………ん？」

自身の体に違和感を感じる。視界に入った、やっと思考回路が正常に判断した、〃目の前の自身の腕〃に息を呑む。そして、息を荒げながら、腕を、胴を、脚を、顔をべたべたと触っていき、心臓がどンドン早鐘を打つ。

その感触は、彼の記憶にある懐かしいアバターを簡単に想起させた。

「まさか、まさかまさかまさか……!!」

嘘だ、ありえない、そんな馬鹿な、色んな言葉が浮かんでは脳内で消えていく。大慌てでアイテムボックスから取り出した姿見に映る自分自身に、ただ、愕然とする。

「つ……、ウルベルト・アレイン・オールド……!!」

なんで、どうしてという言葉すら喉奥から出てこない。

しかし映っているのは間違いない、かつてウルベルト自身がユグドラシルで愛用していたアバターの姿だ。しかも、記憶に誤りが無ければユグドラシルをやめた時の姿である簡素な装備まで完全に再現されている。

「いやいやいや、そりゃ、最期に、確かに、モモンガさんともっと遊びたかったとか、考えたり思ったりはしたけど……!!」

ふるふると必死に頭を振る。

これは夢、走馬灯、死に際の妄想、ありとあらゆる可能性が出てきては一瞬で消去されていく。あまりにはつきりしている、自身を取り巻く環境全てが、これは現実なのだとウルベルトに突き付けていた。

「ありえないだろ!!」

そうして暫くの間パニックのまま立ち過ごし、深呼吸をし、そうして漸く、かろうじてウルベルトは僅かに落ち着いた。だが、自分が無意識にアイテムボックスから当然のようにアイテムを取り出したことに気付き、再度頭を抱える。

「ありえない! ありえないだろ!! おかしいだろ!? ……クソツ! だいたいツ、ここはどこだ!!?」

叫んでも、当然答えなど返って来ない。

「……ッ、……糞ツ!!」

ひとしきり悩み抜き、そして、ひとまずウルベルトは待つてみた。何かが見れる可能性を考えての行動だったが、何も現れない。

ならば行動するしかないのだが、大自然の中でどうすれば良いのかなど、ウルベルトには全く分からなかった。その肝心の大自然が枯れ果てていた世界で、そんなことが学べる訳もないのだから。

「こんなことになるなら、ブルー・プラネットさんの話をもっと真面目に聞くべきだったな……」

周りを見渡してみても、知識の無いウルベルトにはデータ上で見たことのある木と草と土と青空としか分からない。そこから得られる情報など、ある訳がなかった。

「……はあ……」

魔法を使うという発想が出なかったウルベルトは、手近にあった木の枝を折る。そしてそれを地面に垂直に立てると、ぱつと手を離れた。風と重力と枝の凹凸が絡んで、棒は一方に倒れる。

「あつちかあ……」

枝が倒れた方へ、半ば自棄糞気味に、ウルベルトは足を進めた。

暫く歩いて、ウルベルトは自身の強運を噛みしめる。

山羊の耳に入ってきたのは自然物の音ではない、人工の音だ。

ちなみにこの時から始まるラツキーが原因で調子に乗り後々大怪我を負うことになるのだが、それはまだこの時のウルベルトの知る所ではない。

カンカン、何かを指示する大声、どすん、どすん。また大声。何か大掛かりな取り組みをしていると分かる方へ、ウルベルトはどんどん足を進める。

暫くして進行方向の先に、森林ではない明るく開けた平地と、建造物らしき姿が僅かに見えてきた。そして大量の動く生命体を視認すると、ウルベルトは一旦その足を止めた。

「……さて、どうするかな」

誰かがいることに、安堵と同時に警戒心を抱く。何の情報も無いのに飛び出しても、下手をしたら殺されるだけかもしれない。何かしら先に手を打たなければいけないと考え、そこでやっと、魔法が使用できるのではないかとウルベルトは思い至った。

「あー、えつと、《不可視化》……できているのか今いち分からないな。それから……、ええい、どうとでもなれ！ 《飛行》！」

浮かび上がる体に驚きバランスを崩しつつ、なんとかウルベルトは体勢を整える。

「あははっ、マジかー！」

魔法使用に問題は無い。意識を自身の内に向ければ、MPもスキルも魔法も全て、手足を動かす感覚で把握できている。それらに驚きと興奮を覚えつつ、ウルベルトはその場から一気に上昇した。

「おー、すごい！ 本当に大掛かりな工事してるな！」

つい大声を出してしまったウルベルトの方へ、工事現場にいる見目から人間ではないが二足歩行している者達が視線をやる。おそらくは知的生命体だろう、衣服を纏い武器をぶら下げた者もいる。ぎくりとするが、首を傾げるだけで作業に戻っていったため、『不可視化』に問題は無いようだ。ウルベルトは、ほっと一息つく。

眼前に広がる工事現場は、新しく都市を作ろうとしている様子だ。森の中に、開拓したのか円形の広い平野が拡がり、そこに五芒星の形をした建築途中の城郭があった。

超巨大な城塞都市、だが別に戦争を想定している訳ではないらしい。外壁はそこまで高くなく、未完成だが壁画や堀細工などの装飾を施している。

更には防御力より交通の利便性が優先のようで、五芒星の内、先端3点には小さな門が作られそれと反対側の凹み部分には正門らしき巨大な門が構えられている。門と合わせ、どこかに続く石畳の道も鋭意製作中の様子だ。

「はー、すっげえなあ、王族の城とかなのか？ 文明は……、中世レベルって所か？ 現代的な機械は見当たらないし……。おつ、魔法を使ってる。ふーん、魔法が当たり前の世界なのか……」

城壁内の工事現場に向かい、さらにウルベルトは近くで調査することにした。

どうやら、街には多くの水路を作る予定のようだ。上空から見えた瓢箪形の池と繋ぐつもりだろうか、それとも魔法を使うのか。詳細は不明だが建築途中の橋や白壁が完成し澄んだ水が街中を流れたら、きっと綺麗な景色が出来上がるのだらうと、無関係なはずのウルベルトも期待してしまう程に既に完成形の美の片鱗を覗かせている。

都市中心では、背の高い塔のような城も建築中だ。既に完成した時の厳かな美麗さを想起させる佇まいの城は、全体的に青と白を基調とする予定のようだ。タイル貼りの複雑な紋様の壁画が、無数の職人によってせつせと完成を目指し作られている。

「おーい、そろそろ休憩だー！」

「南の現場は遅れてるって話はどうなった？」

「そつちは大丈夫だ。それよりエ・ランテルまでの道がな、道幅広げることになってるらしいぞ」

「人手足りるか?」

「ここが終わった後からの改修予定らしい。ドワーフの応援もあるみたいだから、大丈夫だろう」

見た目からバラバラの種族が集まっているが仲が悪いわけではない様子だ。また奴隷のように働かされている様子は一切なく、休憩まで取っている。

「……理由は分からないが言語は通じるみたいだな。動物系人外とアソビとゴレムしかないけど、さて、今の『俺』は果たしてどう見られるのか……」

一気に高さをとり、ウルベルトは現場の指揮官を探し始める。

そして、城壁外側に大木で組まれた高さのある足場を見つけた。その屋根には日差しと雨避けのために綺麗な赤い布が張られており、さらにその近くには立派なログハウスまで建てられている。

「あれかな……。まずは様子見て、大丈夫そうなら魔法を披露して売り込んでみるか」

どんなお偉いさんがいるのだろうかど緊張しつつウルベルトは降りて中を覗き込み、そして、驚愕する。

「えっ、」

そこにいるのは、想定外の、しかしとても良く知っている懐かしい存在。

氷柱を連想させる二足歩行する大きな昆虫と、庇護欲を煽るような弱い少女にしか見えないミニスカート姿のおどおどした態度の少年、だ。

「まっ、マーレ……!!? それに、コキユートスまで!」

ナザリック地下大墳墓の階層守護者であるはずのコキユートス、そして、マーレ・ベロ・フィオーレ。とても懐かしい存在が、あり得ない場所であり得ないことをしていた。

大声を出してしまったが、思考はそれどころではない。しかし当然、守護者達はウルベルトの大声に気づいてしまっている。共に目を

通していた広げた設計図からガバリと顔を上げ、ウルベルトのいる辺りを守護者達は睨みつけていた。

「なんで……」

訝しんでいたマールレがコキユートスと何か言葉を交わし、そして攻撃態勢に移行してるのに気付いたウルベルトは慌てて惚けるのを止めた。

「待ってくれ、俺だ!!」

《不可視化》を解除し、コキユートスとマールレの近くにウルベルトは降り立った。くりくりしたオッドアイと、深い蒼の複眼に山羊の姿が映る。

「え、えっと、分かるかな？ ウルベルト・アレイン・オードル、だ」  
名乗りを上げたところでマールレとコキユートスが自分を知っている確証は無いと気づき、ウルベルトは冷や汗をかく。

「つ……、ウルベルト・アレイン・オードル様……?」

「ウルベルト・アレイン・オードル様……、ナノデスカ……」

相手の口から出た言葉にウルベルトがホツとすると同時に、驚愕の事態が起きた。

マールレとコキユートスが、ウルベルトに対し片膝をつき頭を下げたのだ。まるで、王に忠誠を誓い頭を垂れる騎士のように。それだけでも充分にウルベルトは、だいぶぎよつとしてしまったのだが、静かになった周囲を見渡し、更に目を見開くことになる。

マールレとコキユートスが片膝をついた姿を見た周りが、次々と平伏を始めだしたのだ。まずは足場近くの者達から始まった波は、どんどん広がっていき作業員の手を止めていく。先ほどまであった煩いぐらの音が、嘘のように静かになっていった。

気付けば、周囲全ての二足歩行の生物が、ウルベルトに平伏していた。

それは、明確な上下関係を示唆していた。彼らより上位に君臨するのが“マールレ”と“コキユートス”で、そしてその更に上に君臨している存在こそが、“ウルベルト”なのだ。

「え、と……」



ひくりと顔が引き攣ってしまったのだが、仕方ないだろう。ウルベルトが姿を現しただけで、一帯が静まり返ってしまったのだから。そしてまたウルベルトが何かしなければ、この沈黙が終わらないのも明白だ。

愚図る頭を必死に働かせ、正解か分からないまま言葉が続ける。

「か、顔を上げてくれ、マール、コキュートス。それから、ここで何をしているのか教えてくれないか？」

「は、はい！ ウルベルト・アレイン・オールド様……、えっと、僕は……う、ひぐ、」

「えっ、なんで!？」

大きな瞳から、これまた大粒の涙をぼろぼろと零し始めたマールにウルベルトは大慌てだ。何かしてしまっただのかと問うと、マールも慌てた様子で涙を散らしながら頭を横に振った。

「違うんです！ す、すみません、まさか、ウルベルト・アレイン・オールド様に会えるなんて……！ 僕、本当に嬉しくて……!!」

気遣わし気にマールを伺うコキュートスが、恐る恐ると言った風に口を開く。

「ウルベルト・アレイン・オールド様……、」

それを一旦静止し、ウルベルト呼びで構わないと先程からフルネームで連呼し続けるコキュートスとマールにウルベルトは言い聞かせた。

「テハ御身ノ寛大ナル御言葉ニ甘エテ、ウルベルト様……、ナゼ、ウルベルト様ハ、ココニ居ラレルノデシヨウカ。他ノ……、他ノ至高ノ方々モ、居ラレルノデスカ？」

「ここに来たのは俺一人だけ……、至高の方々って誰のことだ？」

至高の方々とは、ナザリック地下大墳墓の創造主である四十一人、つまりはアインズ・ウル・ゴウンのギルドメンバーのことだとコキュートスの説明で理解し、ウルベルトは頭を抱えた。

（そりゃ作ったのは作ったけど、ゲームデータだぞ!! それで神様みたいに扱われても逆に困るだろ!!）

頭の中で絶叫しつつウルベルトは、あることに気付く。

「……コキユートス、マーレも、ユグドラシル」のことを覚えているのか？ いや、ここはもしかして、ユグドラシル」そのものなのか？」

自分がゲームの世界に来てしまったのではないかと確信しウルベルトは問うたが、しかしその問いは直ぐに否定された。

「ナザリック地下大墳墓ガ元々アツタ土地ノコトナラ、覚エテオリマス。毒ノ沼地ニ囲マレテオリマシタ。ソシテ、ココハ、ユグドラシル」トハ別ノ地デ御座イマス」

「は、はい、コキユートスさんの言う通りです。ユグドラシル」とは違う土地……、ユグドラシル」には無かった、武技やタレントという存在もあります。そして、み、皆、至高の方々のことは当然覚えております……！」

ゲームの世界でもない、異世界。

そんな世界に自分がいることも衝撃だが、それよりもウルベルトには気にすべきことがあった。

「そ、そうか……、そうだったのか……」

「ユグドラシルのことを覚えている」ということはつまり、ウルベルトが途中からログインしなくなった、すなわちナザリック地下大墳墓を、アインズ・ウール・ゴウンを見捨てたのも記憶しているという意味だ。

「……それはつまり、」

もしかしなくとも彼らは自分を恨んでいるのではないかと推測し、青褪める。ナザリック地下大墳墓で作られたNPCのカルマ値の低さは、ウルベルトもよく知ってる所だ。

突如黙り込んだウルベルトに、コキユートスが恐る恐る話し掛ける。

「ウルベルト様、先程ノ問イニ対シオ答エシテモヨロシイデシヨウカ？」

何のことか忘れつつあったのでウルベルトは適当に頷く。

「コノコキユートス、畏レ多クモ今ハナザリック守護ノ任ト共ニ、コノ地ノ統治モ任サレテオリマス。ソシテ今ハ大規模都市開発ノ途中デ

御座イマス」

胸を張り答えるコキユートスに続き、マーレもおどおどしつつも誇らしげに答えた。

「ぼ、僕は、コキユートスさんのお手伝いと補佐で来ています……！」  
その答えを聞いても、ウルベルトには今いち事態が飲み込めなかった。そしてまた、目前の守護者達が親に褒めてと強請る様なキラキラした瞳をしていることに気付く余裕も無かった。

情報が多すぎる、いや違う何も知らなすぎるし分からなすぎるのだ。算数を知らない人間が数学をいきなり教えられたら、きつとこんな感覚に襲われるのだろうと、ウルベルトは確信する。

(なんで、ナザリックの階層守護者が、ナザリック外を統治して都市開発してるんだよ……!?)

全く頭が整理できずに、ウルベルトは頭痛を感じた。次の発言も行動も決めかねるウルベルトに、今度はマーレがおどおどと話し掛けてきた。

「あ、あの、アインズ様は、ウルベルト様がここにいらつしやることを知っているのですか？」

「……アインズ、様？」

首を傾げたウルベルトに、マーレも可愛らしくこてんと首を傾げ返した。そして何かに気づくとハツとして、あわあわし始める。

「しっ、失礼致しました！ アインズ様とは、モモンガ様のことです！」

その言葉に、ウルベルトは、雷が落ちてきたかのような衝撃を受ける。先程から衝撃のオンパレードだったが、驚きに上限は無いのだと思いつき知ることになった。

「モモンガさんが、いるのか」

さすがに頭が限界を突破したらしい。気が遠くなるような感覚に襲われ、ウルベルトは頭を振る。

「あー……、マーレ、コキユートス、少し休めるところが近くにないかな？」

「えっと、ナザリック地下大墳墓に戻られますか？」

「いや、ナザリックではなく、この近くでお願いしたい」

ナザリック地下大墳墓に行ってみて色々確認したい願望はあるが、こんな混乱状態で更なる情報過多は御免である。ひとまず聞いた情報と見知った情報を、一人になってウルベルトは整理したかった。

「か、かしこまりました……。えと、それなら、僕とコキユートスさんが休憩や寝泊まりで使っている小屋ならありますけど……」

「ウルベルト様ニハ相応シクナイカト思ワレマスガ、アチラニ」

あの見えている立派なログハウスが自分に相応しくないとは、知らぬ間に自分は偉くなったものだと思えば遠い目をしつつ、マールに招かれるままウルベルトは脚を進める。そしてふと、自身に向かい平伏したままの周りが目に入り足を止めた。

「コキユートス、作業を再開してくれ。俺のことは気にしないで良いから」

「シカシ……、」

「いいから平伏とかも止めさせて、作業に戻ってくれ。俺のせいで納期に間に合わなかったとか御免だからな！」

「ハッ、畏マリマシタ。御言葉ニ甘エテ務メニ戻ラセテイタダキマス」

コキユートスの掛け声を合図に周りに作業音が戻ってきたのを確認すると、ウルベルトは歩みを再開した。

山羊の目による錯覚とかではなく、近づいてもやはり立派なログハウスだ。

一階建てだが、コキユートスのためにか単に快適さを追求したのか妙に背が高い。そして横にも広く、シンメトリーの中心には両開きのこれまた立派な扉があった。

先程聞いた話通りならば工事期間の休憩室として作られたはずなのに、それにしても随分と豪華だ。両開きの扉には細やかな装飾が施され、ステンドグラスまではめ込まれている。

さらに玄関先ではメイドが待機していた。予想通り、左右に控えていたメイド達はウルベルトが扉前に立つとそれぞれが左右の扉をさっと開け、頭を下げてウルベルトが通るのを待っている。これまで

に体験したことのない自動扉に、ウルベルトはなんとも言えない気持ち  
が沸き上がってくるのを感じた。

「どうぞ、御入り下さいませ、ウルベルト・アレイン・オードル様」  
心底嬉しそうな歓迎の二重奏に若干引きつつ、中に入ろうとして、  
ウルベルトは足を止める。

「ん？ マーレ？」

先にログハウスに向かっていていたマーレが、中に入らず少し離れた所  
で何か話しているのに気付き、ウルベルトはそちらに視線を遣った。

「独り言か？」

ウルベルトは首を捻りつつマーレを待つ。

ウルベルトが先に入室し中で自由に寛いでいても誰も咎めはしな  
いのだが、そんなことは知らないウルベルトは勝手に先に入ることが  
出来なかったのだ。

悲しそうにしたと思えば、嬉しそうにして、誰もいない空間に向か  
いマーレは頭を下げる。

(あんな不思議ちゃん設定だっけか……?)

振り向いたマーレは、ウルベルトを待たせていた事実気付き驚愕  
の顔をする。そして、これまた男の娘らしい可愛らしい走り方で駆け  
寄ってきた。

「ウ、ウルベルト様！ 御待たせしてしまい、申し訳ありません！ そ  
れから、あつ、あの、よろしいでしょうか。アインズ様と、えと、御  
話をしたので……」

え、どうやってという驚きと同時にウルベルトの頭にやっど《伝言》  
魔法が閃く。

「あー……、なるほど。えっと、それでモモンガさんは……、いや、ア  
インズって言った方が良いのかな。……まあいいや。ひとまずそれ  
で、モモンガさんはなんて言ってたんだ、マーレ」

「はい、アインズ様が直接こちらにいらっしやるようです。それまで、  
お待ち頂くようにと仰せでした。お、御食事など運ばせますが、欲し  
い物があれば何でも申し付けて下さい！」

マーレはにこにここと機嫌良さそうに屋内の廊下、真ん中奥へと小さ

い手と指先を向け案内する。

「お、御部屋は真ん中の御部屋をどうぞ。アインズ様が来られた時のための、休憩室ですのぞ」

メイド達が再度扉を開けに歩き出したが、それをマーレが引き止める。

「ウ、ウルベルト様に御食事を用意してください。後少しで《転移門》が開いて迎えが来ますので。後は、僕が案内します」

「畏まりました、マーレ様」

「御前失礼致します」

じつと見詰めてくる熱いメイド達の眼差しに、もしかしてと正解に思い当たったウルベルトは戸惑いつつも彼女達に声を掛ける。

「ああー……、うん、よろしく頼むよ」

メイド達は、それはそれは嬉しそうに深々と頭を下げながら玄関へと戻って行った。

玄関をくぐってから少し廊下を歩いた先の中央扉を、先導するマーレが開く。

目の前の扉以外にも左右に廊下が別れていたが、その先はコキユートとマーレそれぞれの部屋なのだろう。少しそちらも気になりつつ、ウルベルトはマーレに誘われるまま休憩室に入った。

「休憩室……」

アインズ・ウール・ゴウンのギルド紋様が大きく描かれた御旗が、室内に入りすぐ視界に入る。

その前に置かれた、まさに玉座といった風貌の赤く滑らかで細やかな堀細工を施された椅子には、おそらく宝石が埋め込まれているのだろう。大きな輝く粒が所々に見受けられる。床には、ふかふかの絨毯が敷かれており歩くだけで心地が良い程だ。

さすがに玉座に座す気は起きず、ウルベルトは扉近くにあつた黒く大きな椅子に座る。

頑張れば大人五人は座れそうな椅子は、何か巨大な骨をくり抜き装飾を施したもののようだ。腰を下ろす所と背もたれには綿が埋め込まれ滑らかな革が張られており、座り心地がとても良い。さらに柔ら

かなクツシヨンまで三つ置かれていて、ここで何時間でも読書ができれば、そう、快適さだ。

満足そうに座るウルベルトに、嬉しそうなマールは当前のように問いかける。

「ウルベルト様、僕にできることなら何でもいたします、ご、御命令を」  
「あー……、えっと、悪いんだけど、一人で考えたいことがあるから、なるべく誰も近づけないように、お願いできるかな？」

「お願いなどんでもない！ 御命令してくださいれば何でもいたします！ そ、それじゃあ……、」

再度《伝言》で会話を始めたマールに何事だろうかとウルベルトが訝しんでいると、部屋の扉がノックされた。

「あつ、あの、入室させても、よろしいでしょうか？」

構わない、というか許可をわざわざ取らなくても良いのではないかと思いつつウルベルトは頷く。

「ど、どうぞ、入ってください」

玄関で見た二人のメイドがワゴンを押して入り、深々とまた頭を下げた。

ワゴンに乗せられているのは、色とりどりの大量の料理だ。分厚いステーキから七面鳥丸ごと一匹に加え、フルーツの盛り合わせに糖蜜のベールが輝くタルトまである。さらには数種類のパンが盛られた籠と、海鮮料理に肉料理、フライから焼き、煮込み、生食まで幅広く準備されていた。

「失礼いたします。申し訳ありません、遅くなりました」

綺麗な一礼を披露してからメイド達はテキパキと働き始めた。

ウルベルトの前にあるガラスのテーブルに白く染み一つ無いテーブルクロスを掛け、銀食器を並べ華美な皿に乗せられた様々な料理を次々と並べていく。綺麗に並べ終わると、再度彼女達は綺麗な一礼を披露した。

ウルベルトがぼかんとしている間に、マールはメイド達に対し必要な指示を済ませていた。

「……畏まりました。退室いたしますが、何かあれば申し付けて下さ

い」

先ほどまで興奮した様子のメイド達は明らかに気落ちしていたが、ウルベルトにはそんなことに気付く余裕など全く無い。

「……え、ああ、うん。よろしく」

なんとかウルベルトが声を搾り出すと、マーレもメイド達も深々と頭を下げてから退室していった。

「……………え、なに、この状況」

ありとあらゆる問題は解決した。というより解決し過ぎた程だ。

屋根付きの立派な家屋に柔らかいクッションに豪華な椅子、目の前に並ぶ輝かんばかりの食事は肉も魚もフルーツも菓子も、文字通り何でもある。酒に果実水も用意され、ウルベルトのためだけに用意したにしては多すぎる量だ。おそらく、ウルベルトが何を食べたくなくても対処できるようにという配慮なのだろう。

「はあー……」

問題が解決し厚遇を受けているのに、頭痛が止まらず気が重いなんて、ウルベルトにとって初めてのことだった。



## 主演：捧げる者達 2

ナザリック地下大墳墓の第十階層、最奥にて最強の来訪者を待つ玉座には墳墓の主が腰掛けていた。

王の視線が、第七階層守護者と守護者統括に視線を順に移す。

そして、麗しく荘厳なる玉座の間にて深い溜息が溢れた。絶対の支配者のそれに、デミウルゴスは深々と頭を下げ、アルベドは悲しげにその綺麗な顔を歪ませた。

「申し訳ありません、アインズ様」

それは幾度目かの謝罪だ。

玉座に腰掛けるアインズ・ウール・ゴウンは、いや、それを演じるモモンガは、罪悪感を感じる。子供達を謝らせ皆を不快にさせる案件は、誰が悪いのかと本を正せば悪いのはモモンガ自身だ。

「我々の力が及ばぬせいで、ご不快にさせてしまい申し訳ありません。アインズ様の御願い一つすら叶えられぬこの身が不甲斐なく、恥ずかしい限りです……」

まだまだ言葉を続けようとし猛省するデミウルゴスを、モモンガは軽く片手を上げ遮った。

「よせ、デミウルゴス、気にするな」

モモンガがナザリックの参謀達を呼び寄せ話し合っていたのは、かのスレイン法国を如何にしたら滅ぼせるのかという、法国から言わせればとんでもない横暴な議題だ。

「お前達と共に何度知恵を絞っても何も出ないのは残念だが、無茶なことを私が願っているだけなのだからな。お前達は、何も悪くない」

しかし、法国にとつては有難いことに、ナザリックの智者達とアインズが話し合った結果出たのは、かの法国は滅ぼさずに放置と監視と警戒を続けるのが現状の最善策であるという結論。

モモンガの願いとは、真逆の結論だ。

今までと何も変わらない対応方法の継続がされる。それはアイン

ズの願いはまだ叶えられないという、今までと変わらない悲しい現実を意味していた。

「御優しいアインズ様の、せつかくの御願い事を叶えられないのは本当に、本当に心苦しいことです！」

「よい、気にするな。ここで無茶をして、シャルティアが洗脳された時の二の舞を演じるはめになっても馬鹿馬鹿しい。……しかし、ああ、」シャルティア・ブラッドフォールンを洗脳した者が存在することも、そのせいでシャルティアをモモンガがその手で殺さなければいけなかったことも、未だ彼の中では消せない怒りと憎しみの対象だ。未来永劫に、たとえ何が起ころうと、どんな言い訳を述べられようと、決して許せることではない。

それは、シャルティア洗脳に関わった者達には、この世のありとあらゆる苦しみを与え、絶望を舐めさせた事実をもつても変わらない。当然死という安らぎなど、未来永劫に与えるつもりはない。そこまでのことをしても、しかし、未だに報復し終えたのだと、モモンガには思えなかった。

ナザリツク地下大墳墓の者達以外なら、きつと全て終了したと思えるような甘美な瞬間から百年以上経過した今でも、「法国」の文字など見たくない程にモモンガ自身が単純に法国を嫌っていた。

「糞ツ、忌々しい。あれを、あんな国などを、アインズ・ウール・ゴウンの属国などにはしたくもない」

しかし、それしか手が無いのがずっと変わらない現実だった。ギリりと、モモンガは奥歯を噛み拳を握る。

その悔しさの現れに、デミウルゴスもアルベドも思わず顔を俯かせた。そしてまた彼らも悔しさに歯噛みする。しかし、それでも耐えねばならない理由があった。

甘い毒で浸し徐々に国全てを丸呑みにしていくアインズ・ウール・ゴウン魔導国の方針は、現在とても上手くいっている。

国民が、幸せな檻の中で垂れる蜜の味を占めればこちらのもの。そこで生きる民達の支持が無くなれば国など勝手に、あつという間に瓦解していく。魔導国属国から事実上の魔導国領土へ、誇りも国名も国

境も全て、消えていく。

過去に消え去り、国は民からなすすべ無く忘れさられる。

それらに反抗する国の中枢機関の戦力も士気も、大義と大衆からの支持を失えば何とも哀れなほどに無力化していった。

しかし、スレイン法国だけを魔導王の憎しみだけを理由に報復したとなれば、今まで築いたもの全てが崩壊しかねない。

信頼も、信奉も、崇拜も、全て所詮は砂上の楼閣だ。実際にアインズ・ウール・ゴウンがしてきたことが、それを証明している。ナザリツク地下大墳墓が丸ごと転移して来るまで世界にあったそれらを全て、策略と嘘と演出で壊して、自分達に都合良く創り上げてきた真実全てが。

そうやって、ただでさえアンデッドや異形種の集まりというマイナスの印象を必死に拭い、培ってきた貴重な立場だ。さすがにそれは、どれほど怒りがあるろうと法国を滅ぼすのに躊躇する理由になり得た。だからこそ法国も、百年ほど前にあっさりと一部の臣下達を見捨てたのだろう。

魔導王の愛しい配下を洗脳した一件はこれで終わり、魔導国が法国に攻め込む理由など何も無くなったのだと全て手打ちにするために。シャルティアの一件を解決する時にとったその手段も、モモンガは気に食わなかった。理性というよりも、坊主憎けりや袈裟まで何とやらの領域、子供のする様な嫌悪だったが、それを自認できても改めることなどできやしない。

周りの国々を策謀に嵌め思惑通りに動かそうとする、大義のために少数を捨てる、美しい姿で腐卵臭を撒き散らすような法国が、最早どうしようもない程に、モモンガは好かなかったのだ。

ならば、〃滅ぼすのに足る正当な理由〃をでっち上げれば良いのだが、それも難しいのが現実だ。

人類最後の砦を謳うだけあり政治、軍事、宗教の全てにおいて堅牢な法国に、簡単に難癖をつけることはできない。真綿で首を絞めるように追い詰め、自ら属国となるように誘導できれば、それだけでも御の字だ。

しかしどちらにせよ下手を打てば、汚い手で陥れられた人類の反旗である、討てよ醜いバケモノ共を!!」と、法国に反撃の狼煙となる都合の良い火種をプレゼントすることになるだけだ。

そして仮にそうなった場合、起こるのはゲームのPVPではない。国家間の戦争だ。

法国の呼び声に魔導国内の各地で不満を煽らせる反乱分子が一気に溢れた場合、戦争に勝てたとしてもせっかく築いた魔導国の基盤がやり直しになってしまう。最悪の場合、魔導国内に反乱分子の火種が残り、永い間ずっと燻り続けることにもなりかねない。

そのため、デミウルゴスもアルベドも大局を見据えての静観派なのだ。時間は異形種である自分達の味方なのだから、焦って急ぎ食い殺す必要は無いという判断だ。

法国も、今は人類最後の砦としての役割を負い、とても静かである。魔導国を滅ぼさんというほどの気概は見せてない。

勿論隠しているだけの可能性はあるが、馬鹿ではないのだから今が攻め時ではないことぐらい重々承知しているだろう。

今は互いに睨み合いを続ける、言わば我慢比べの時。

二匹の獣が睨み合い、互いに隙を伺っている瞬間。耐えかねて攻め時を間違えれば、逆にこちらが食い殺されてしまう。

「ねえ、デミウルゴス、何か手はないのかしら……?」

モモンガを愛するアルベドは、打って出ても良いのではないかと一度は交戦派に転じたことがある。愛しい人を不快にさせる国を消しても良いだろうと、声を荒らげたのだ。

愛しい殿方の珍しい我俣に、興奮したとも言える。

「落ち着いてください、アルベド。前にも言ったでしょう、今は時ではない、と」

だがしかし、結局それでアインズ・ウール・ゴウンが追い詰められる可能性を叡智溢れる悪魔が冷静に列挙すれば、冷静になった賢い彼女は大人しく静観派に戻って来た。

そしてそれは、王を必死に演ずるモモンガ自身も同じことだった。シャルティア洗脳に関わった者達を探し出す時ですら苦労した彼

の国は、百年ほど経過した今も尚、神秘のペールを腹立たしい程に分厚く垂れ下げたままだ。相手戦力と所持アイテムがはつきりしない状況で戦うのは賢い手とは言えない。

冷静さを少しずつ思い出し、モモンガはそつと自身に呆れ深く息を吐き出す。呼吸が必要ない肉体で行ったそれは、落ち着くための行動だ。

「ふー……、すまん、すこし感情的になってしまった」

「アインズ様が御詫びすることなど何一つとて御座いません！」

「アルベドの言う通り、元々は分をわきまえない愚か者共がアインズ様をご不快にさせたのが悪いのです」

ちつともモモンガのことを責めたてることなどないその発言に苦笑しつつ、モモンガは言葉を続ける。

「冷静に考えよう。私が一番嫌なのは大切なお前達が傷つくこと、お前達と共に築いたアインズ・ウール・ゴウン魔導国というナザリック地下大墳墓の皆を守るための基盤となる国が、無くなってしまうことだ」

「アインズ様……！」

「お役に立てなかつた私共にまで、そのような御言葉をくださるとは……！」

「何度も言っているだろう。私はナザリック地下大墳墓の皆を愛している。皆を守るためなら、どんなことでもしてやるさ」

その発言に我慢の限界を迎えたらしいアルベドが翼を広げ、興奮を隠さずにがばりと手を上げてモモンガに飛びかかろうと試みた。

すかさず察知した悪魔が迎撃態勢に移る。

「悪魔の諸相・豪魔の巨腕！ 八肢刀の暗殺蟲、私に協力を！それから近くにいる筋力のある守護者に協力要請!!」

「アルベド様、御乱心！ アルベド様、御乱心！」

この、伝統芸とも家芸とも化した光景って後何百年も続くのかなあなどと、モモンガが若干現実逃避をしている時だった。その空の頭蓋に、《伝言》が届く。

『ア、アインズ様』

「マーレか？どうしたのだ、急に。何かあったのか？」

片手を上げ指を二本頭に付け、《伝言》を送ってきた相手にモモンガは応える。

その相手であるマーレは確か、今は大規模都市開発を手掛けるコキュートスに協力中だったはず。そのマーレがデミウルゴスやアルベドを飛ばし、いきなり《伝言》を送るとはかなり緊急事態のはずだ。「いい加減にしなさい、アルベド！ 何か緊急事態の様子ですよ！」

「いった」

悪魔の諸相：豪魔の巨腕化した両腕に挟まれる形で頭をごすんとされた見目は可憐な彼女の悲鳴は、とてもささやかだった。声だけ聞けば、ちよつとした段差で躓いた時のポーズだけの声だ。実際は大して痛くないだろうと感じ取れる程度の。

その光景に気を取られつつ、王に相応しく悠然とマーレの報告を促す。そして、心のどこかで慢心し、自分達を脅かすものなどいるはずないと自身が思いこんでいたことを思い知る。

モモンガは、マーレから報告された内容に瞠目する。一気に荒立った精神は、一瞬で強制的に沈静化させられた。だがまた簡単に荒立ち、行動を阻害してきた。

『……アインズ様？』

不安そうなマーレの声に応える事もできなかつた。ただ、今は肉体的には必要ないはずの深呼吸を、精神のためだけにモモンガは何度も行う。

視界を閉ざし、濁流の如く溢れては強制的に消される感情と戦う。やつと精神が小波程度になったところで視界を開き、目の前にいるアルベドとデミウルゴスをじつと見詰めた。何かただ事ではない様子なのは流石に感じ取ったらしく、珍しく幼子のように露骨に不安そうにしている。

『アインズ様、僕、何かしましたか……？ ご、ごめんなさい……』

うっかり意識から外していたこの場には居ないダークエルフの不安顔を思い出し、慌ててモモンガは謝罪し声を掛ける。

「……マーレ、私がそちらにいくから、それまで待ってもらおうように頼

んで欲しい。それから、このことは他の、まだ知らない者達には黙っているように」

目の前にいるアルベドとデミウルゴスが、ますます不安そうにして顔を見合わせる。モモンガにとつて、とても大切なナザリックの子供達にそんな顔をさせたことに苦しみを覚える。

しかし、その子供達を無視して玉座から飛び出して行きたい気持ちも湧き上がった。その咄嗟の願望を、ぐっとモモンガは抑える。守るためには慎重に慎重を重ねて行動しなければいけない。

ナザリックの者達を守るためなら、今すぐ飛び出して事実を確認したい欲望ぐらいモモンガは堪えてみせることが出来た。

冷静にマールエの言葉を聞き、受け答えを始める。それは子供達に対して不安がる必要は無いのだというアピールでもあった。

「ああ、食事を急ぎ用意させよう。シャルティアにゲートを開かせる、メイド達には待機しておくよう伝えてくれ」

必要なやり取りを終わらせ《伝言》を切ろうとしたマールエを、モモンガは引き止める。

「それから、マールエ、先程は無視をして悪かった。さすがに私も驚いてしまつてな……。ああ、マールエ、お前を大切に思っているよ。……

ああ、また一緒に本を読もう。図書館にも行こう、約束だ」

淋しそうだった声に喜色が戻つて来たことを感じ、モモンガはひとまず安心して《伝言》を終わらせた。

そして、その骨のみの正に白い手を降ろし、デミウルゴスに、そしてアルベドにと顔を向けた。賢い彼らは膝を地につき、覚悟を決めた顔でアインズを見詰め、そつとその御言葉を賜る瞬間を待っている。

「デミウルゴス、そしてアルベドも、落ち着いて聞いてほしい」  
何が起きたのか不安であるように、明朗な返事が返ってくる。

口を開き、うまく言い出せない自分に気づき、モモンガは自身を叱咤する。子供達のためにも、子供達のように、そしてアインズ・ウル・ゴウンの名に相応しく堂々としなければと。

「……ウルベルトさんを、保護したとマールエから連絡があつた」

愕然とするデミウルゴスは顔を俯かせてしまい、何を言うべきか探

している様子だ。

アルベドも狼狽を隠せていない。目を見開いて、呆然と骸の顔を見詰めている。

「アルベド、箆口令を敷く。コキユートスの都市開発現場にはメイドが二人いるはずだが、その者達には暫くは口を閉ざすように伝えてくれ。ついでに、シャルティアにゲートを開きメイド達の料理の運搬を手伝うように、指示を頼む」

「は……、はい、畏まりました」

ショックを受けていながらも、アルベドは返事をする。

そしてモモンガは、普段とはかけ離れた様子の彼に声を掛けるか逡巡してから、意を決して命令を出した。

「デミウルゴス、私と共に来てくれ。そして、ウルベルトさんが本物か確認してほしい」

「っ、は、はい、畏まりました……」

初めて聞く狼狽えたままの震えるデミウルゴスの返事に、モモンガは創造主の影響力の大きさを改めて思い知る。

「……可能性は低いが、お前に不快な思いをさせるかもしれないな」

「アッ、アインズ様！ アインズ様がお気になさることなど、何一つとして御座いません!! 仮にその様な、あの御方の姿に化けた不屈き者だとしたならば、必ずやこの私が……!!」

耳障りの良いはずの声が、攻撃性を帯びて刺さるように玉座の間に響く。

「デミウルゴス、落ち着きなさい。アインズ様の御前よ」

ハツとして青褪めるデミウルゴスに、そして悪魔を嗜めるアルベドに、王は構わないと優しい声を掛ける。

「私も少し落ち着きたい……。すまないが、少しの間独りにして欲しい。デミウルゴスも、十分後に玉座の間に戻ってきてくれないか？」  
頭を下げ、アルベドとデミウルゴスが、続いて側仕えのメイドも八  
肢刀の暗殺蟲も出て行き、一気に玉座の間は静まり返った。

色々な感情が、独りになった所でまた噴き出してくる。



「ふう……」

しかし、モモンガの頭の隅では冷静に万が一のパターンと想定される敵勢力、そして考えうる最悪の予想が展開される。

「……はは、あんなに会いたかった仲間を見つけたって報告なのに、何してるんだろ、オレ」

ずっと昔のモモンガなら、きつと一にも二にもなく飛び出して会いに行ったはずだ。そう思えば、嘲りを含んだ笑みがついつい零れ落ちてしまう。

「だけど、仕方ないだろう。この世界に来てから、一体何年経ったと思うんだよ……」

独り言のはずだが、随分と誰かに向けての言い訳じみた独り言だった。

約四十年か三十年前、モモンガは、アルベドに任せていたギルドメンバーの探索隊を解散させていた。

あまりに長い時間が立ちすぎて絶望したのも、疲れたのも、諦めたのもあるが、何よりも“変化”が大きかった。いや、大きすぎたのだ。

アインズ・ウール・ゴウンとナザリック地下大墳墓の子供達、その価値が、モモンガの中であまりに大きくなりすぎた。その結果、揺らぐはずがなかった部分が、大きく揺らいでしまった。

ギルドメンバーと、自分と、ナザリック地下大墳墓の子供達の天秤の傾きは、恐ろしい程に変わってしまったのだ。

揺るがなかったはずの天秤が大きく揺らいだ事実、定まらず揺らぎ続ける現実。それらから、モモンガは目を逸らした。

そう、逃げたのだ。

難しい問題だが、解かなくても今は何も問題ない、そう思い込み、ずっとずっと無視をして、目を逸らして、考えないようにしてきた。アルベド提案のギルドメンバー探索部隊を、苦しい言い訳を羅列しわざわざ解散させてまで、只管に目を逸らし続けたのだ。

考えたくない現実から、考えうる可能性から、ずっと。その問題が、悪戯のように再度やってきた。まるで、嫌がらせのように。

「……………ウルベルトさんなのは、せめてもの救いかな。ああ、でも、」

変わらない存在など何一つとてない。

かつて永遠に遊戯の頂点に君臨していきそうだったゲーム、ユグドラシルも人気絶頂期からは想像もつかない程に落ちぶれ、サービス終了を呆気なく迎えた。モモンガの所属したギルド、アインズ・ウール・ゴウンだって、同じだ。そして、この世界に来てからも、再び何もかも変わっている。

変わらないと思っていたものだって、変わっているのだ。

「オレが、ウルベルトさんの知ってるオレじゃないように、ウルベルトさんも、オレの知っているウルベルトさんじゃない可能性もあるんだ」

笑って、はしやいで、肩を組んで、ドロップアイテムが糞すぎて悪態について、運営と一緒に詰って、時にはリアルな悲しくなるような話をして、また一緒にクエストで笑って、そんな風になっていた時と、今はもう、きつと違う。

また、感情が沈静化される。

消されたのは何と言う名前の感情だろうか、そんなつまらないことを、モモンガは考えてしまった。

### 主演：捧げる者達 3

友達、と言っても数年ぶりに会えばほぼ他人だ。

環境の変化、趣味の変化、性格の変化から久々に会った友人と会ってみても楽しくなかったということだ。普通にあるだろう。だからこそ久々に会う友人には、やはり若干緊張する。若干、他人行儀になつてしまうものだ。

それも、喧嘩別れしたような友人など殊更そうだろう。まさに今のウルベルトと、モモンガのように。

「……………ああ、ウルベルト様……………」

そんな気まずい空気をまず切り裂いたのは、感極まる美声だ。現実ではあり得るはずない夢想の幸福を目にしたと、その声は打ち震えている。

「デミウルゴス……………」

ウルベルトの作ったNPCが、よろよろと造物主に向かい歩いてくる。そして座るウルベルトの足元にへたり込むと、その手を取りりぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「また、お会いできる日が来るとは、」

泣きじゃくるデミウルゴスの肩に、戸惑いながらもウルベルトはそつと手を置く。慰めるべく、ぎこちなくもその手でぽんぽんと肩を叩けば、デミウルゴスは身体を大きく震わせ咽び泣いてしまった。

「……………デミウルゴス、独りにして、悪かった」

「その様な、その様な御言葉……………！ 私は、貴方様に忘れられなかっただけで、ただそれだけで……………!!」

痛々しすら感じる程に喜び咽び泣く自身が創り出した悪魔から目を離し、ウルベルトは少し離れた所でただ立っている懐かしいアバターへの友に目を遣った。そして何故か、再度目を逸らしたくなり、やつと自分を支配する先程からの感情の名を理解した。

それは、罪悪感だ。

ウルベルトの再会に純粹すぎる喜びをみせる彼らに対する罪悪感。そして、そこまでのことを自分はしたかという怒りにも似た言い訳と自己弁護の気持ち。それらがウルベルトの胸の内では居た堪れなさを作り出している犯人だった。

「……お久しぶり、ですわね」

その頭蓋から出てきた声は、変わらない雰囲気纏っている気がした。そのことに、密かに安堵の息をウルベルトは吐く。そんなウルベルトが返事するより早くデミウルゴスが姿勢の向きをアインズへと変え、深々と頭を下げ謝罪をした。

「私としたことが、御身の前で恥ずかしい姿を……!」

「気にするな、デミウルゴス。お前が喜ぶ姿を見られて、私はほっとしている位だ。しかし、すまないが……、私とウルベルトさんの二人きりで話したい。構わないか?」

「私めの許可など不要です! 一目、ウルベルト様に御会いできただけで、この身に余る至福であります……!」

「頭を上げよ、デミウルゴス。後で私からもウルベルトさんをお願いして、お前と話す時間を作ってもらえるようにしよう。さあ、手を貸そう」

デミウルゴスに手を差し伸べるアインズ自身とその御手を交互に見詰め、戸惑いながらもデミウルゴスはその手を偉大なる存在の手に重ねた。

「有難き幸せ……! 今日この身に起きた幸福な事実は、この身朽ちるまで決して忘れません……!!」

御手を借りて立ち上がったデミウルゴスは、アインズを、そしてウルベルトを熱く見詰め、再度深々と頭を下げた。美しく優雅な所作からは、真の忠誠が滲み出ている。

御前から去る無礼を丁寧に詫びてから、デミウルゴスは退室していった。部屋から出て扉が閉まり切るまで、悪魔は当然の如く頭を下げていた。

その頭頂部が見えなくなり、静まり返った部屋の中、咳払いをしてからウルベルトはやっと口を開いた。

「……………あー……、えっと、お久しぶりです、モモンガさん」

それに笑い声が返ってきて、ウルベルトはきよとんとする。

「あははっ、懐かしいなあ。久々に聞きました、その名前」

「ああー。そう言えば、アインズに改名したんですっけ？」

「ええ、今の俺は、アインズ・ウル・ゴウン、しかも魔導王なんです」

茶目つ気たつぷりの言い方だったが、嘘でも冗談でもないのだろうとウルベルトは感じ取る。この自称工事現場の休憩室にある玉座に、慣れた様子で今はアインズを、そして王を名乗る彼は優雅に座った。その姿はとても様になっている。

「魔導王陛下、ですか。確かに王の風格を感じさせますね」

「たくさん練習しましたから」

「あはは、モモンガさんらしい！」

ウルベルトがひとしきり笑えば、先程まであつたどこかきこちない空気は消え去り、まるで昔のように二人はまた笑いあつた。

「他のギルメンは、どうやらないみたいですね」

「はい、ナザリックにオレ一人です。まさかウルベルトさんに再会できるとは、思ってもみなかったですよ」

「俺だって、こんな形でモモンガさんと会えるなんて思ってもみなかったですよ」

葡萄を一粒房からちぎり取り、ウルベルトは口に放り込んだ。それを羨ましそうにアインズが見ていることには、気づいていないままだ。すっかりリラックスした彼は、姿勢を崩す。

「ウルベルトさんは、どうやってここに？」

「モモンガさんとまた遊びたかったなあー、とか思いながら死んだら、来ちゃってました、この世界に」

「え、死んだ!？」

素っ頓狂なその声にウルベルトの方が驚く。自分が死んでこの世界に来たのだから、モモンガも同じようにやって来たのだと思いでいたため、そこまで驚くことではないと考えていたのだ。

「……………間違いない、それどころじゃないし、失礼なんですけど……………うん、やっぱり嬉しいですね」

続いて出てきたその言葉に、再度ウルベルトは目を見開く。

その視線に気付いた気遣い屋の骸骨は軽い謝罪を挟めてから、言葉が続けた。

「もう……、アインズ・ウール・ゴウンのことも、ナザリック地下大墳墓のことも、全部忘れて、皆は生きてるんだらうなと思っていたので……」

目を逸らして床に視線を遣るその姿から、王の風格はすっかり消えている。ウルベルトのよく知る、己にあまり自信がない彼本来の姿に近い。それは、友人として分かることだった。その淋しそうに、複雑そうに喜ぶモモンガに、ウルベルトは慌てる。

確かに三百六十五日二十四時間ずっと思い馳せていたといえば嘘になるが、忘れることなどあり得ない。卑下する彼が思うよりウルベルトはあのゲーム世界を愛しており、そして、モモンガのことはあの世界で得られた貴重な友の一人だと思っているのだ。

それなのに、そんな嫌な思い違いなどしてほしくなかった。

「現実に帰らず、あの世界でずっとモモンガさんと遊びたかつたぐらいいには気に入っていました。……忘れられませんが、アインズ・ウール・ゴウンのことも、モモンガさんのことも」

骸骨の顔のくせに随分と嬉しそうにモモンガがウルベルトを見つめ返した。まだどこか信じられないという空気を漂わせているが、それでも随分と嬉しそうだ。

ギルドメンバー同士が仲良くしている時やアインズ・ウール・ゴウンが称賛されている時も、同じように嬉しそうにしていたなあと、ウルベルトは懐かしむ。

「そう思えば、ここは天国ですね。ユグドラシルとは違うみたいだけど、永遠に帰らないで遊べるみたいだ」

「そうですね、……帰れませんが」

その含みある言葉に、ウルベルトは己が気にしていたことを思い出す。この室内でずっと考えていたのだ。この世界に来て一体どれ程の時間が経てば、城郭を堂々と築き様々な種族を従える力を手に入れることができるのだろうか。

「……モモンガさんは、いつからこの世界に？」

それが想定を越えることは、たつぷりと空いた間と、言い難そうな雰囲気で察することができた。しかしそれでも、モモンガからの答えにウルベルトはただ驚くしかなかった。

「……百三十年ほど前、ですかね」

たつぷりと時間を掛けて、その答えと意味する所をウルベルトは呑み込む。百三十年。それは、ウルベルトの知る平均的な人間の一生の約三倍の時間だ。

「その間、ずっと独りで」

「独りじゃありませんよ」

思いの外強い否定が返ってきて、ウルベルトは再度驚くことになった。

「ナザリックの子供達がいましたから、独りじゃなかったです」

それは力強い言葉だった。その事実を欠片でも否定などしようものなら、ウルベルト相手でも烈火の如く怒るだろうと感じ取れる程に。

「そう、でしたか」

その返答が言い終わると同時に、しんと部屋が静まり返る。黙り込むウルベルトは、友であるはずのモモンガを見られなかった。視線を遣ってしまつたら、そこにはウルベルトの知らない存在が玉座に腰掛けている気がしたからだ。

「……さて、この世界について教えますね。俺の立場とか、ナザリックの子供達についてとか、その他たくさん」

聞こえてきた良く知る声に、ウルベルトは一体自分は何を考えているのだと頭を軽く振る。

「……それは、長くなりそうだ」

少し疲れた様子のウルベルトに対してモモンガは、笑って応えた。「百三十年分の歴史ですからね。覚悟して下さい」

ウルベルトが顔を上げ見詰めた先の真っ赤な玉座には、不敵に笑う魔導王がいた。

ウルベルトは、羊皮紙から目を離し重たい溜息を吐き出す。

それから机に置いてある広げた地図を指差し教えられたことを反芻し記憶を整理した。

長い歴史の授業に未だ終わりは見えない。と言うよりか、歴史の授業はつい先程に始まったばかりだ。

まず第一に教えられたのはナザリック地下大墳墓の子供達について、だった。

アルベドの設定を書き換えたことから始まったそれは、ウルベルトが途中からまだ続くのかと内心焦り出した程に長い話だ。

この世界に来てから増えた子供達の仕事と友好関係や趣味嗜好から始まり、外部から入って来た新メンバーのことまで事細かな話は、しつこい程にとても丁寧に説明された。

その説明を聞くだけでも長かつたうえに、うろ覚えのナザリック地下大墳墓にいるNPCを思い出すことも大変な作業だった。自分が執着して作成した第7階層以外は、ウルベルトの中でかなり曖昧な記憶でしかなくなっている。

階層守護者達は大侵攻の被害時の衝撃と、親ばか自慢のおかげではつきり記憶しているのだが、それ以外はすっかり記憶から抜け落ちていたのだ。モモンガから指摘されてやっと、ログハウスの自動扉をしていたメイド達がナザリックのメイドだと思い出せた程だ。

正直に言つて、ナザリック地下大墳墓にいる全員を完璧に暗記できる自信がウルベルトには全く無かった。

ナザリックに来るつもりなら子供達が落ち込んでしまうので最低でも名前を全部暗記してからにしてくださいと、モモンガからしれつと言われた時には何かの冗談かとウルベルトは思いたかった程だ。

「あー……、メイドを全員覚えるだけでも心折れそう……」

先程ウルベルトが同じ弱音を呟いた時には、モモンガから絶対にメイド達の前でそういったことは言わないようにと釘を刺された。しかし今は、そのモモンガがいなかったため返事は無い。

多忙なる彼は、今はナザリック地下大墳墓に戻っている。

元々組み込まれていたスケジュールで、魔導王として地方視察と冒



険者組合の顔出し、それから明日には地方管理役人からの報告会が控えていたらしい。

モモンガは出掛けるのを渋っていたが、脳が休憩を求めているウルベルトは背中を押して送り出したのだ。

「あー……、面白いや結局、モモンガさんじゃ駄目なのか？　アインズさん？　様？　って、呼んだほうが良いのか？」

しかしあれはモモンガさんだと、ウルベルトはすっと感じる。アインズとは、呼びたくないなと思う。

そしてやつと、ずつと昔のモモンガのことを思い出す。時には無茶苦茶なことも言い出す位だった、こうと決めたら意外と頑固な、アインズ・ウール・ゴウン結成前のモモンガの姿だ。

今現在の、落ち着きはらい冷静になっているあの雰囲気、あれは彼がギルドマスターとして、まとめ役に徹する時の雰囲気だ。確かに元から滅多に自己主張のしないタイプだったが、それでも言うべきことや言いたいことは言える人だった。改めて思えば、ギルドの中心になつてから意見を言わないことが増えていった気がする。

ギルドメンバーの仲裁のためなら、必要以上に自己を殺せる人だった。だからきつと、アインズ・ウール・ゴウンのために彼は黙る道を選んだのだろう。

「……、まだ、我慢してるのかな」

ナザリックの子供達がいたと言っていたモモンガが、その子供達のために一体何をしてきたのか、どのように振る舞ってきたのかも、教えられたからウルベルトは知っている。そしてそれが、本来のモモンガなら選びそうにない道なのも分かっていた。

あのユグドラシルで遊んでいた時ですら見たことのないフィールドや魔法にキラキラ目を輝かせていた人が、盤石の基礎を築くことだけに腐心するなど、あり得ない。勿論、心変わりして慎重派になっただけという可能性もあるが、そうでないとすれば、彼はずっと、ずつとアインズ・ウール・ゴウンに捕らわれていることになる。もしも本当にそうならば、ウルベルトにとつて、とても許し難いことだ。

そんな苦しみなんかと共に、アインズ・ウール・ゴウンに君臨など

してほしくはなかった。

「モモンガさん、忘れちゃいましたか。俺達のギルドができた理由を」好きなアバターで好きなように自由に遊ぶため、たとえ貶されても馬鹿にされても憎まれても呆れられても、それでも、ただ只管に自由を楽しむために。そのために、自分達はあの世界に君臨していたのだ。

” 九人の自殺点 ”として始まり、そして、アインズ・ウール・ゴウン”として。

発案者とその発案者自身の考えは気に食わない。だが、自分達が異形種であるがためだけに自由に遊べなくなる胸糞悪さをPKで晴らす、それは、確かにウルベルトが愛する悪だった。

「つまらないですよ」

せつかく二人いるのに、一人だけが楽しいのでは遊べない。もう一人も楽しんで、そこでやっと笑い合えるのだから。

ウルベルトはつまらなさそうに地図と羊皮紙から目を逸らし、そして目を閉ざした。

悪魔は瓦礫の上に座っていた。

常に何かをしている彼にしては珍しく、本当にただ座っているだけだ。背を丸め、手を祈る様に組み、額に押し付けている。

炎に満ちた第七階層の朽ち果てた有様の神殿を前にして、その神殿の瓦礫上で悪魔が祈る様は、皮肉と嫌味と悪趣味に溢れている。だがしかし、その悪魔は、デミウルゴスは、真剣だ。真剣に、冷静さを一瞬で消し去りそんな自身を押し留め、敬愛する神の来訪を待っていた。

ただ、じつと待っていた。

動かないその悪魔は偉大なる支配者のお役に立つために、読書や実験をしたり趣味に興じたりと、常日ごろから時間を有効活用すべく心掛けている。だからこそ、彼の周りにはびくりとも動かないだけの上司を心配する部下で溢れていた。

「っー」

ばつとデミウルゴスが弾かれたように顔を上げる。それに驚いた彼の配下達も遅れて、偉大なる存在が自分達の居る階層に現れたことに気が付いた。配下達は一斉に一歩下がり、膝を地につけた。

「デミウルゴス、待たせたな」

「とんでも御座いません、アインズ様。わざわざ第七階層まで来て頂き、恐悦至極で御座います。どうぞ、こちらへ」

見た目は朽ち果てた神殿の奥へと、デミウルゴスがアインズを招く。

建物というより廃墟と言った方が正しい朽ちた神殿の奥には、デミウルゴスの居室と来客用の部屋がある。当然抜かりの無い悪魔は、偉大なる存在が来客する事態も想定し神殿奥に玉座の間を増設していた。

先程までであった朽ちた柱や神像が幻かと思えるほど、廃墟奥に見事な白亜の大理石で出来た空間が突如広がった。真紅のカーペットが王の道を祝福する様に鮮やかに玉座まで案内している。

アインズはその赤い道を歩き、そして先にある玉座を見遣った。様々な動物の良い所の骨で構成された、一度はアインズが着席を断った悪魔自作の玉座だ。

その玉座に、躊躇なくアインズは座った。肘掛けの先にある頭蓋骨に、手を乗せ、落ち着いた様子でゆったりと腰掛ける。

悪魔は嬉しそうに跪き、頭を下げた。

「一通りの話は終わった。そして、ナザリック地下大墳墓にウルベルトさんが来ることになった」

ぴくりと思わず肩が動いたが、デミウルゴスは続くアインズの言葉をじつと待った。

「ウルベルトさんの世話係を、お前に任せよう」

「はっ……!!」

その応えは喜びに震えていた。我儘や願い事をあまり言わない忠誠心の厚いこの悪魔も、この命令の取り下げだけは、きつと受け入れないだろうと思わせる程に。

「ウルベルトさんはこの世界に来たばかりだ。私からも色々説明は

したが、分からないことがあれば、デミウルゴスに聞くように言っている。お前は賢いからな、教師役にはぴったりだとも伝えておいた」「おお……、それはなんと真に恐れ多いことでしょう。身に余る御言葉、有難う御座います……！ 畏まりました。このデミウルゴス、僭越ながら精一杯務めさせて頂きます！」

深々とデミウルゴスは頭を下げ、御世話係という大役を拝命する。その役目を授かったことによる緊張と喜びを噛み締めるデミウルゴスの耳に、衣擦れと玉座が微かに軋む音が届く。

次に、俯くデミウルゴスの視界に偉大なる存在の崇高なる美しい御衣装の裾が入ってきた。唐突の事態に悪魔は戸惑う。

「デミウルゴス、よく聞いて欲しい」

頭を上げられないまま、デミウルゴスはただ混乱する。優しい支配者の声は直ぐ近くで聞こえており、更には、間違いなく至高の方が自分の前で膝を地に付けていた。それに対して戸惑いはしても、策謀を得意とするはずの頭脳は何の打開策も出してこない。

「ウルベルトさんは……、今は行く宛がないから、このナザリック地下大墳墓に戻るだけだ」

御手を肩に置かれたこと、その御言葉、様々な要素が智將たるデミウルゴスを混乱させていく。一体、何が起きているのかと。そして、自分は何を求められているのかと。

「だから、もし、ウルベルトさんがナザリックに戻ってこず、この世界のどこかで自由に暮らしていくのを望むなら、お前は……、好きな所に行くといい」

「っ……!! アインス様っ、それは！」

許可を得ていないのに顔を上げたデミウルゴスの瞳は見開かれ、そこにある綺麗なダイヤモンドがアインスの姿をたくさん映し出していた。

「お前の幸せを、私は願っている」

「勿体ない御言葉……ッ！ しかし！」

続けたかったはずの言葉が上手く出せずに、デミウルゴスはただ口を開閉しただけだった。それでも何とか、何か伝えたくて、デミウル

ゴスは必死に言葉を搾り出す。流暢に心地の良い声で素晴らしい提案を次々と出す普段の彼とは真逆の、無様とも言える姿だ。

「しかし……、アインズ様、わ、私は……、私は……!!」

「デミウルゴス、お前が選ぶのだ」

切り捨てるような言葉を言うやいなや、アインズは立ち上がる。振り向かずに静かに去って行くその黒衣のローブの裾に、不敬だろうが無様だろうがデミウルゴスは縋り付きたい気分になった。何処にも行かないで欲しいと、不敬なことを言い出しそうな自分をデミウルゴスは必死に食い止める。その噛み締められた唇には、血が滲んでいる。

「お前の幸せを私は邪魔しない、それだけは、覚えておいてくれ」

その尊き後ろ姿から発せられた声に、デミウルゴスは辛うじて、か細い返事をした。

くたびれ果てたウルベルトは、ナザリック地下大墳墓生活における大先輩のモモンガから教わった注意点の意味を、寝室のベッドで横たわりながら噛み締めていた。

「くたびれた……、贅沢してるのにくたびれるって何なんだ……」

八日前、ウルベルトはナザリック地下大墳墓に帰ってきた。他に行く宛も、したいことも特段何も無かったため、だ。それに加え、自分が作成したNPCのデミウルゴスに再会した時に、ああも感極まられたら、今後の身の振り方は決まってなくとも顔を見せに1度は戻った方が良いかと思えたのもあった。

しかし、そんな軽い気持ちに罪悪感を抱いてしまう程、ウルベルトを迎えたナザリック面々からの歓迎は予想以上に熱烈だった。

一日目には盛大なパーティーが行われた。

ウルベルトはそこで、今までの生活には二度と戻れまいと覚悟する程の贅沢を味わった。

用意されたフルコース料理の絶品さに、逆に怖くなったほどだ。明日世界が終わるのではないかと思わせる程の御馳走を、ウルベルトがウルベルトであるという理由だけで与えられたのだ。怖くなって当

たり前だろう。

しかもウルベルトの感想を待つ料理長達は、不味いとも言われようものなら即座に自害すると言わんばかりの気迫で胸を張って微動だにせず立っていたのだ。それも食事するウルベルトの目の前に、だ。

とても美味なのは間違いないのだが、拙いウルベルトの感想に咽び泣き膝から崩れ落ち肩を抱いて互いの健闘を讃え合う料理長と副料理長、そしてメイド達を見た後は、いろいろ衝撃的すぎて食事の味が分からなくなってしまった程だ。

そのパーティーでは料理長達以外のナザリック地下大墳墓の者達も、よく泣いていた。次から次へとウルベルトに挨拶をしに来て、そして姿を見るだけで感極まり泣いていくのだ。

さすがに初日に全員との挨拶はできなかつたため、今でも一日の内の数時間はナザリックの者達の挨拶と歓迎の言葉を聞く時間になっている。

何が驚きかと言うと、その挨拶をどう考えても二度三度と繰り返して、何度も咽び泣いている者達が未だ多いということだ。

これに関しては、さすがにウルベルトもモモンガに相談した。直接創造したデミウルゴスならまだしも、それ以外のNPCからまで感極まれる理由に心当たりなど無く、少し不気味に思えたからだ。モモンガとアルベドの協力のもと判明した事実には、ウルベルトはこの熱が冷めきることはきつと無いのだと諦めた。

ウルベルトは、ナザリック地下大墳墓にて生まれた全NPCの「見える希望」になっていたのだ。

至高の方々も、自身の造物主も、もう二度と帰ってくることは無いのだと長い年月に心を打ち倒されたNPC達にとって、突如帰還したウルベルトは正に希望の星だった。もしかしたら他の至高の方々も帰ってくるかもしれない、そんな淡い可能性だけでも彼らにとっては果のない幸福だ。だからこそ彼らは、その嘘のような希望が、都合よく作ってしまった自身の夢幻ではないのだと確かめるため、何度もウルベルトの御姿を視界に入れようとし、そして感極まり泣き出すの

だ。

ウルベルトが覚悟を決めた予想通り、ナザリック地下大墳墓訪問初日からの歓待の熱は、未だ冷める気配すら一向に見せていない。

ひとまず、ナザリックの面々がウルベルトを恨んでいないどころか、果ての無い程に敬愛し、深い、深すぎる情熱を傾けているのは分かった。分かったのだが、あまりに唐突に向けられた重く痛い程の大量の熱愛に、精神が悲鳴をあげている。

この数日間、ウルベルトが受けているのは間違いなく高待遇なのだが、くたびれて仕方がなかった。

「……だからって、引き籠もつても駄目だよなあ」

たった一度だけ、ウルベルトはうっかりメイドの仕事を奪ったことがある。

それは未だに慣れない朝の着替えの時間だった。

ウルベルトが少し寝坊し、定時通りにデミウルゴスが来たため、メイドがウルベルトのボタンを留めている時に扉がノックされたのだ。後は最後にマントを羽織るだけだったので、戸をノックしたデミウルゴスを迎えに行くようメイドにウルベルトは指示を出した。そして、彼女が少し離れた間に、ウルベルトは自分でマントを羽織り身なりを整え終えたのだ。

部屋に戻り、そのウルベルトの姿を見たメイドの信じ難い程に悲痛な表情は、最早ウルベルトのトラウマだ。その後続いた彼女の痛々しい懺悔の声も、未だ耳から離れないでこびり付いている。

ウルベルトが部屋から出ないことで仕事が無くなるなどと、はしやぐ者達がいけないことはこの数日間だけで嫌という程に分かっている。外が酷い有様になる前に部屋から出ようと、決意と覚悟を決めウルベルトは立ち上がった。

しかし寝室からでて直ぐに、忠誠心限界突破の悪魔が当たり前前の顔をして出迎えてきた。

「お出かけで御座いますか、ウルベルト様」

「……………ずっと待ってたのか、デミウルゴス」

「はい、当然で御座います」

昼食後から寝室に籠もっていたため、おそらく最低でも二時間は経っているはずだ。その間ずっと寝室外で待機していたと聞かされ、ウルベルトの覚悟がいきなり粉碎された。そういえば、下がって良いと命令を出し忘れていたと、ウルベルトは内心頭を抱える。

「そ、そうか……。でも休みたかったら休んでいいからな？」

「お気遣い頂き有難う御座います。ですが休憩など不要で御座います。ウルベルト様の御世話係という大役を任されたことが望外の喜び……。それに疲労など感じませんので」

残念なことに聞き慣れてしまった尽くせることに喜びを抱く嘘偽り無いその言葉を、ひとまずウルベルトは、適当に相槌を打ち聞き流すことにした。

「あー、俺が見ていない残りの場所は？」

「第五階層の氷結牢獄と第六階層の果樹園、この辺りにはウルベルト様はまだ足を運ばれておりません」

「そうか……。じゃあ、そこに向かおう。まず最初に、果樹園。次に氷結牢獄、だ」

いよいよかと、ウルベルトはひっそり覚悟を決める。

この世界に来てから肉体に引つ張られ精神も変容したと、モモンガは言っていた。ならば同じくウルベルトも変化を迎えているはずだ。

その変化は、子供達のためにしたことの報告をモモンガから受けた時に心に漣一つすら立たなかった時から既に感じてはいる。だがしかし本当の変容というものを感じられるのはきつと、牢獄で行われている事実を見詰めた時だ。

その時にきつと、ウルベルト・アレイン・オードルが正しく再誕するのだろうか。

「今は、何人捕らえている？」

「生きた人間、亜人種なら三千ほど。今は牢獄隣に倉庫を増設しており、そこに殆どの好きにして良い生物を入れております。殺さないように気を付けている者達は予め氷結牢獄内の部屋に分けておりますので、御安心ください。ウルベルト様なら、倉庫内全て使い切っても誰も文句は申しません」



「……そうか」

流れるような明朗とした報告内で、簡単にやり取りされる命はナザリツクの者達の意思一つで吹き飛ぶ軽い命だ。それに対して、やはり、ウルベルトは憐れとも救ってやりたいとも思えない。

ただ、備蓄を無闇矢鱈に減らした場合に補充される分はあるのかなと、中が残り少ない冷蔵庫を見るような、そんなくだらない思考が展開されただけだった。

## 主演：捧げる者達 4

今はアインズ・ウール・ゴウンを名乗るモモンガは、自身の黒歴史、兼息子、兼宝物殿守護者であるパンドラズ・アクターと向き合っていた。

宝物殿の主であるパンドラズ・アクターに勧められるまま、断るのも面倒なのでアインズが腰掛けたのは、輝かしい財宝に囲まれた黒曜石の玉座だ。

その鋭利な雰囲気を漂わす黒い玉座は周り全ての財宝の輝きを奪わんばかりに存在感を放ち、嵌め込まれたルビーは漆黒の不気味さを増長させるために存在していた。本来なら財宝の中の一つであるはずのそれは、アインズが座るために周りから財宝を退かされ、更に一際目立つことになる。

だがしかし、それも真の王が腰掛けるまでの話。

全ての財宝が、アインズ・ウール・ゴウンの登場と共にその輝きを曇らせ脇役になる。

片ひぎを床についたパンドラズ・アクターは、快楽にも似た喜びを秘めやかに抱きつつ、偉大なる父を見上げる。それと同時に、見惚れていた。宝物に囲まれた偉大なる造物主に。まさに護るべき、絶対の、唯一無二の宝である珠玉の存在に。

見惚れながらも宝物殿の主は、その口から零される偉大なる御言葉を一滴たりとも漏らさずに受け取った。そして受け取ったからこそ、その御言葉が終わるまで口を挟まず、そして、終わっても尚パンドラズ・アクターは何も応えなかった。

その為に、ただ沈黙がひた走る。

側仕えのメイドも八枝刀の暗殺蟲もアインズは下がらせており、今宝物殿にいるのはドッペルゲンガーとアンデッドのみ。子供の落書きのような黒く塗り潰された目と口、本来なら動くはずのない頭蓋骨が、黙したまま向かい合っているだけだ。

宝物殿の名に相応しい財宝がその空間内では一等煩く輝いている。まるで財宝を封じ込めた生者のいないような空間に、やっと声が響く。

だがしかし、それはアインズが望むような返答ではなかった。

「それでは、父上、このパンドラス・アクターは、本日より反抗期に入らせて頂きたく思います！」

「……………は？」

あんまりにあんまりなその返答に、アインズも間拔けな声を出してしまう。

つい先程アインズがパンドラス・アクターに伝え頼んだ内容は、決してその様な愉快的な返答を促すものではなかったはずだ。

「…………お前、私の話を聞いていたのか？」

「はい！ 然とこの耳に拝聴させて頂きました！ 父上の慈愛溢れる思慮深き御判断を！」

「そ、そうか。…………本当か？」

アインズが、いや、モモンガが生み出したNPCの言葉なら皆納得してくれるはずと、信頼し頼んだことは伝わっていると答えられてしまった。しかしそれでも、先程の発言に不安しか感じられないモモンガは、しつこく再度問うた。

「本当の本当に、理解したのか？」

「はい！ 私も危惧する事態、当然父上も考えておられるだろうとは思っていましたが、やはり、父上はとても慈悲深い御方です」

「…………私が言ったことを分かっているなら、先程の発言は何だったのだ」

「反抗期ですよ！ 父上！」

その人間では有り得ない長さの指を鉄砲の形にしてバキューンと、モモンガに対し撃つ真似をパンドラス・アクターはしてくる。派手なオーバーリアクションに、最後に銃身に見立てた指で軍帽をくいっとした辺りで、モモンガは精神を強制的に沈静化された。

「お前なあ…………!! 本当に、そういうのは…………」

「仮に、ナザリック地下大墳墓に留まらずウルベルト様が出て行くと

して、」

絶対なる支配者の発言を遮るといふ、ナザリツクの者達に聞かれようものなら八つ裂きにされることを、パンドラズ・アクターは平然と行った。それにはさすがにモモンガも驚き、そして「反抗期」の意味と、本当に開始したのだという事実を理解せざるを得なかった。

「ウルベルト様に着いて行くのを願った者達が出て行くとして、問題になるのは父上の仰せの通り今後の人材不足、それから外でウルベルト様方と敵対関係になる可能性でしょう。それに関しては、互いに有益となる形で誓約書を取り交わせば、ひとまず問題は無くなるかと思われまます」

「う、うむ」

「最悪の事態は、父上の仰せの通りです。ウルベルト様が、このアインズ・ウール・ゴウンにおける絶対君主の座を望んだ時、ですな」

輝くガラクタの如く積まれた金銀財宝に、跪くのを勝手に止めた自称反抗期の領域守護者は足を向ける。そしてその中から、ひよいと黄金の冠を拾い上げると、軍帽の上からそれを被った。誇りある王冠を馬鹿にするように軍帽に無理矢理被せたパンドラズ・アクターは、言葉が続ける。

「ウルベルト様側と父上側に別れてしまったら、始まるのは果ての無い削り合い。せつかくここまで築き上げた魔導国という基盤も、おそらく崩壊するでしょう、父上の危惧される通りに」

無理矢理乗せていた王冠を片手で持ち上げ、パンドラズ・アクターはそれを誇らしげに輝く財宝の山へと放り投げた。硬質な財宝の悲鳴が響き、余韻を残して消える。

「パンドラズ・アクター……」

「ですから！ 私は反抗期を迎える必要があるのですよ、父上！」

「いやなんでだよ」

思わず素が出てしまったが、仕方ないだろうとモモンガは自身に言い訳し、慰める。

そもそも反抗期というものは自らの意思で始めたり終わらせたりするものではない。更に言うなら、反抗期を迎えた息子はきつと、親

を父上などと呼んだり敬語を使ったりはしないだろう。

「このパンドラズ・アクターめは、父上のためなら如何なる敵とも戦い、勝利を収めてご覧に入れましょう！」

マントの如く肩に引つ掛けるコートを、パンドラズ・アクターは格好良くばさりと翻す。まるで舞台のクライマックスの様に。

「如何なる問題も、華麗に解決して御覧にいれましょう！　しかし、しかーし！」

スポットライトでも浴びているのだろうかど錯覚してしまいそうなほど、パンドラズ・アクターは大きくその手を天に掲げた。モモンガは再度、精神を強制的に沈静化されていた。

「たとえば父上の御命令でも、父上のごことは見捨てません。決して、このパンドラズ・アクターは、御側を離れません」

頭を抱えていたモモンガが、その温度差に驚きハツとして顔をあげると、その真剣な様子に水を差すような子供の落書きそのものの顔がそこにはあった。しかし、嘘偽りもオーバリアクションもそこにはなく、ただ只管に真剣なのだど、漂わせる空気が真に訴えている。

先程までのピエロではない、軍服から醸し出される唯の雰囲気でもない、パンドラズ・アクターの忠誠心が、そこには具現化されていた。

静かな足音が、ゆつくりとモモンガに近付く。そして、創造された存在は、自身の造物主の足元に跪いた。

「だからこそ反抗期を迎えるのです。決してモモンガ様に逆らうことにはないという忠誠と誓いを、破り捨てるために」

玉座の肘掛けにあるその骨の手に、色だけは人間のそれである異形の手が這わされる。そつと、抵抗なくその生きていない手は持ち上げられた。

その両手で、壊れ物の如く、可能な限り力を入れないようにしながらパンドラズ・アクターはモモンガの手を動かした。そして、その手の甲に人間で言うなら口と思われる部分を僅かな間押し当てる。

「恥ずかしい奴だな、お前は……。しかし、……。私が悪かったな、今回は」

ナザリックの皆を守るための基盤が崩壊する。しかも、内戦で。そ

れはモモンガが想定する1番最悪の地獄絵図だ。

その最悪の事態を防ぐためならば、正式にウルベルトに王位もギルドマスターの立ち位置も譲渡して、ナザリック地下大墳墓をモモンガは出ていくつもりだった。

しかし、出て行った後にモモンガの意志に疑いを持たれても困る。ウルベルトが無理に言わせたのでは、などと余計な不和が起きてしまったらモモンガが出て行った意味がなくなってしまう。

だからこそ、モモンガが生み出したNPCの言葉なら皆納得してくれるはずと、信頼し頼んだのだ。

「モモンガは自らの意思でウルベルト・アレイン・オールドルに全てを譲渡し、出て行った。後のことは全て、ウルベルトの指示に従うように」と、パンドラズ・アクターからナザリックの者達皆に伝言するよう。

二度と会えまいと覚悟を決めていた存在と出会い泣き崩れた悪魔を見た時に、その愛の深さを改めて思い知ったはずだった。それなのに自身の息子に残酷な願い事をするとは、その浅はかな己の行動にモモンガは呆れ、自嘲するしかなかった。

「すまなかった、パンドラズ・アクター」

「……謝るのは私の方です、父上」

頭を上げない普段とは全く違う大人しい声音に、モモンガは苦笑する。やはりこれは反抗期ではないのだが、こんな苦しい言い訳を出すしかなかったのかと思うと微笑ましく思えた。また、そこまで自身を想ってくれていることに、恥ずかしくもあるが、やはり嬉しくもあった。

「ウルベルトさんが突然帰ってきたから、私も妙にナーバスになってしまったのかもしれないな。全部、今の所は私の妄想だ。馬鹿馬鹿しいことに付き合わせたな、パンドラズ・アクター」

「私に対し信頼を寄せて頂けることが分かりました。この上ない至福で御座います、父上」

アインズは立ち上がり、まだ手を離さない息子の手を握り返した。そうして引張り、立ち上がらせると、息子の衣服で少し皺になっていた

た部分をその骨の指先で整えてあげた。

「父上……！」

「無駄に不安にさせた詫びだとも思え。気にするな」

跪こうとするパンドラズ・アクターを止めて、アイNZは笑いかけた。

「邪魔したな、パンドラズ・アクター。……お前の忠義に感謝する」

リング・オブ・アイNZ・ウール・ゴウンによる転移魔法で宝物殿から去って行った偉大なる父にパンドラズ・アクターは深々と頭を下げる。既に居なくなつた後も、暫く頭を下げ続けてから漸く、その巫山戯た顔面を持ち上げた。

そして、その身を震わせ、金銀財宝を足蹴にしその小山を一気に上り詰める。

「反抗期を終わらせるとは伝えなかつた！ ……ああ！ 偉大なる父上を謀るこの身のなんと浅ましいこと……！ しかし、しかし……！！」

まるで、その睨む天空にスポットライトの白光があるようだ。何かを掴もうとするかの様な、その異様に長い指先は空に絡む。

「全ては、全て、我が父のために……！」

その指が落とした影が、ドツペルゲンガーの口元に墮ちる。その黒く塗りつぶされた影は、まるで歪に笑っているような弧を描いていた。

## 主演：捧げる者達 5

第六階層のジャングルでは、約束された晴天の下、木々がキラキラと輝いていた。

まるで外にしていると錯覚させる風景に、ウルベルトは改めて感服する。本物の大自然を見た後でも圧倒されるここには壁があるはずなのに、やはり何度見ても無限に続く世界に感じられるほど気持ちのいい空間だ。

「ウルベルト様、第六階層の果樹園はこちらで御座います。…おや、どうやら誰か遊びに来ている様ですね」

「あれは…、アウラとマーレ、…それから、ルプスレギナか？」

悪魔達が見遣る視界の先、遠くに黄色の実がなる整列された樹木が見える。その手前には、背の高い白を基調とした大きな円柱形のガゼボが建っていた。

綺麗な白塗りの柱や手すりの縁には金の立体的な蔦を象った装飾が施され、頭上はミントグリーン複雑な美しい紋様が絡み合いドーム型の屋根になっている。その本来の屋根の役割を果たさない装飾には本物の蔦と色とりどりの生花が絡み、明るい彩りを添えている。

植物も天候も操る階層守護者がいるからこそ成立する美しいガゼボの中、三人の美しい少女達が談笑しているのが見えた。

正確には、一人たりとも人ではなく、また内一人は少女でなく少年だ。しかもそれは性別の判断に困る中性的な容姿のズボンを履いたエルフではなく、誰もが可愛らしいと称するだろうスカート履いたエルフのことだ。

笑い合っているのは、この階層の守護者たる第六階層守護者のアウラ・ベラ・フィオーラとマーレ・ベロ・フィオーレ、そしてプレアデスのルプスレギナ・ベータだった。

ガゼボの中に設置された巨大な正円の渋い木製机には、花模様の堀



細工がされており、その上に厚いガラスがのっている。それを取り囲む椅子は、ナザリツクの様々な種族に対応すべく様々な種類の物が設置されている。

何かの手違いで置かれたような長方形にくり抜かれた無骨な岩だったたり、真つ赤なベルベットの猫脚ソファだったり、だ。主に多く用意されているのは、ガゼボの雰囲気に合わせて丸く座るものを包むような硝子の椅子だが、その椅子も大中小とサイズが取り揃えられている。

その中で、アウラは中ぐらいのガラス椅子に背を預け、マーレは青地のシンプルな木の椅子に座っていた。ルプスレギナは、天井からぶら下がる花と蔦の彩りが添えられたハンギングチェアにクツションを抱きながら腰掛けている。

机には地図と羊皮紙と羽根ペンとインクが散らかっていて、何かを決めるため話し合っている様子だ。

「あつ、ウルベルト様だ！ようこそ、私達の階層へ！」

「ウルベルト様……いえ、えつと、どうしよう、お姉ちゃん……!？」

「わあー、どうしたつすか？デミウルゴス様まで一緒つす。あれ？アルベド様はいないんすか？」

「今はだいぶ落ち着きましたからね。彼女も暇ではありませんから、通常業務に戻っていますよ」

数日前まで、ウルベルトの世話係にはデミウルゴスと共にアルベドも任命されていた。

ウルベルトが生みの親であるデミウルゴスが、集まった者達を追い払うと嫉妬と確執のもとになりかねないとアルベドがアインズに忠言し任命されたためだ。しかし、初日に比べてだいぶ落ち着いた今ではデミウルゴスの言う通り暇ではないアルベドのために、ウルベルトが御世話係に断りを入れたのだ。

断わった理由は正確にはそれだけではないが、わざわざ言わなくて良いためウルベルトは黙っている。

「ところで、そっちは何をしていたんだ？」

今は各自自由に行動するNPC達の交友関係にウルベルトは興味

を抱き、尋ねる。詳細を聞いた所、遊んでいたのではなく仕事の打ち合わせ途中だった。

「果樹園を外でも作るんです。主にトレントと、雇った魔導国の者達に栽培実験をさせる予定です」

「なるべく僕の協力なしでって、じ、実験らしいです」

「でも泥棒とかスパイとかは湧くだろうし、頭の悪いモンスターが荒らすだろうからってことで、私とアウラ様で果樹園警備任務をするって話になったつす」

「へえー、面白そうな実験するんだな、モモンガさんらしいや。色々試したがるタイプだもんなあ」

「アインズ様はスゴイつす！常に何か実験してるんじゃないんすか？ねえ、アウラ様、マーレ様」

話を振られたアウラがふむと考え込む。

「そうだね…、敵もあまり殺さないで使い道が無いか、よく検討なさってるし、アインズ様は私達と違って、きつと常に色んなことを考えているんでしようね！」

「す、すごいです…！」

「アインズ様の叡智には、感服するしかありませんね」

唯一事実を知るウルベルトは心の中でモモンガに合掌した。周りからの期待や希望を無視することのできない不器用な彼が、こんなべた褒め期待値爆上げ状態にずっといることには同情と尊敬をしてみよう。

「あー…、ところで犯罪者って、やっぱりアインズ・ウール・ゴウン魔導国に逆らう奴らがいるのか？」

「大きな恐るべき組織は目立ってありません。しかし、どうにも理解できない愚か者というのは必ず湧く定めのようにして…。〃犯罪がしたい〃、〃自分より上位に誰かいるのが気に食わない〃、〃徒党を組めば勝てるはず〃、〃隠れてやればバレないはず〃、その他諸々…。こちらは身の丈に合った幸福をわざわざ用意しているのに、下等生物の思考は摩訶不思議です」

「ぼ、僕もあれはよく分からないけど、デミウルゴスさんにも分からない

いんですね」

「愚か者というのは本当に理解できない存在だからこそ、愚か者なのだろうね」

元人間として、話を聞いていたウルベルトは勝手に、その摩訶不思議な思考回路を理解していた。

理解できないもので構成されていたあの不条理の中、あの中で奴隷として生きた人間も、死ぬと分かっている分厚い壁に突撃し死んでいった人間もいたが、あれは理屈で出来た話ではなかった。

腐った世界に包まれ死んでしまった心を抱え、それでも生存し続ける肉体を引きずって内にある感情だけを支えに、それでも人々は生きていたのだ。

人間を、理性と知性の生き物として捉える馬鹿もいるが、本当に間抜けな考えだとウルベルトは思う。

その自惚れが招いたのが、あの澱んだ世界だ。もっと早くに認めるべきだったのだ。

人間は、欲望と願望と感情のみで構成された醜く低能な、バケモノなのだ。

「……それでも、お前達が導いてやるんだ。この世界はきつと、これからもっと素晴らしくなる」

ウルベルトの言葉に、嬉しそうに悪魔とダークエルフと人狼が顔を綻ばせる。その笑顔が、世界を祝福する神の微笑みのようにウルベルトには思えた。

広がる蒼白の雪景色にぼつんと立つプレアデスのメイドであるソリュシャン・イプシロンとエントマ・ヴァシリッサ・ゼータは、そのメイド服が黒衣だけあって目立っていた。

「あれは何をしているんだ？」

場所は変わり、先程までウルベルトとデミウルゴスがいた果樹園とは正反対の雪と氷山が埋め尽くす第五階層に悪魔達は移動していた。コストカットのため吹雪が消され今はただ綺麗な雪景色をウルベルトは眺め、そしてプレアデスの戦闘メイド達を見つけたのだ。

何か話し合っているソリュシャンとエントマの近くには、コキュートス配下の雪女郎が二体もいる。そして、見窄らしい服装の人間が二人。片方はソリュシャンの足元で蹲りガタガタと震え、片方は微動だにせず膝立ちしている。

「どうしたんだ、ソリュシャン、エントマ」

ウルベルトの声掛けに綺麗なお辞儀をしてからエントマが答えた。「マーレ様が前にお読みになっていた本に出ていた、『かき氷』というモノを作ろうとしていたのですう」

そこでやっと、ウルベルトはエントマの前にある微動だにしない、いや、できない状態の凍りついた人間の意味を理解した。それが、食材としてそこにあることもだ。

「後は削るだけで完成ですわ。ただ…、それが少し手間ねと、エントマと話していたところですよ」

「ねえ〜」

「…そうか、それじゃあ俺が手伝うよ。デミウルゴスも手伝ってくれ」  
「そんな！わざわざウルベルト様とデミウルゴス様の御手を借りるなど、恐れ多いこと…!」

「気にするな。それに、確かめたいことがあるから、俺にとっても調度良い」

ウルベルトは、凍りついた女の前に立つ。恐怖と絶望に見開かれた眼は濁り、その顔面は苦しみを表現したまま凍りついている。どこも見えていないようで、こちらを責めたてているような死者の視線を受け、悪魔の心にざわめきは起こらない。

「デミウルゴス、俺が砕くからエントマの持っているボウルでキャッチ頼む」

了承した悪魔は、虫のメイドがその両腕で抱えていた大きなガラスボウルを受け取る。その声音はとても優しく、当たり前前の如くお札を

述べた。

きつと今までに見たものと余りに掛け離れていたのだろう。まだ生きている哀れな人間は、驚愕の顔をしていた。この悪魔は、そんなこともできるのかと。

「放り投げろ」

「畏まりました。悪魔の諸相：豪魔の巨腕」

巨大化した悪魔の腕は簡単に人間一人を持ち上げ、まるで小石のように上空に放り投げた。それを見詰め、自分がこれから行うことをウルベルトは考え、そして躊躇なく実行した。

「《風神の舞踏》」

その魔法は、ユグドラシルにおいて敵よりも壊れそうな壁などを相手に、その粉碎目的によく使われている魔法だった。狙い通り、現れた全てを切り裂く風の渦はそこにあつた凍死体を粉碎する。はらはらと落ちてくる人肉のシャーベットアイスを、デミウルゴスが器用にその手にあつたボウルで受け止める。

「わあー、すごいですうー！」

嬉しそうなエントマの声が響き渡り、拍手するソリュシャンは柔らかい笑みを浮かべている。エントマは肉体の事情で変わらず無表情だが、ぴよんぴよんとその場で跳ねているので喜んでるのはよく伝わった。

「素晴らしいですわ、ありがとう御座います、ウルベルト様、デミウルゴス様」

「これぐらい気にするな」

「礼には及びませんよ」

デミウルゴスからエントマに返されたボウルには、粉々になったシャーベット状の人間の肉が積もっている。彼女が欲しがっていた、*“カキ氷”*だ。正確には全くの別物だが、そんな無粋なことをウルベルトはわざわざ言う気は無かった。

「これで完成ね、エントマ」

「わあーい」

「いや、最後に仕上げをしないとな」

“不足しているモノ”に気付いたウルベルトは、アイテムボックスからレイピアを取り出す。以前ゲーム内のイベント関係で取得した全体が真っ黒なだけの目立つ特徴も特性も無い、ただのレイピアだ。敢えて言うなら、どんな職業や種族でも装備可能という特徴があるが、それ以外の+αは皆無の、完全にイベントのためだけに作成されたイベントアイテムの装備品だ。

それを、まだ生きている震える人間の腕の付け根を目掛けウルベルトは振り下ろした。

「ああああああっ!!」

「おー、切れ味とか心配だったが、問題なさそうだな」

抵抗なく肉に突き刺さったレイピアを、ウルベルトはさらにめり込ませ、その腕と胴体の切り離し作業に掛かる。本来なら刺突武器として使われるはずの細長い剣が、無理やり動かされ、皮膚を、筋肉を、血管を、骨を、ゴリゴリと無理に千切っていく。鮮血と千切れた破片の皮と肉が、雪の中に飛び散り目出度い紅白となり、歓声のような絶叫が響き渡る。

「騒々しいな。——『静粛にしたまえ』」

そのデミウルゴスの気遣いにかっかりした自身に戸惑いつつ、しかし口元が笑っているのもしつかりとウルベルトは自認する。悲痛を訴える悲鳴は、今まで聞いたどんな音よりも麻薬のように魂に染み渡っていた。聞き足りない、と思える程にだ。

悲鳴をあげる権利すら奪われ、悶えるだけの人間から右腕が落ちる。どばどばと肩から先に行き場を失った大量の血液が落ち、雪から僅かに湯気が上がった。

ウルベルトは雪原に落ちた腕を拾い上げると、エントマの持つボウルの中に、その腕から鮮血を注いだ。

やはり、“赤いシロップ”があつてこそその“カキ氷”だろう。

「ほら、完成だ」

「本当ですわ。感謝いたします、ウルベルト様！挿絵で見たのと同じになったわね、エントマ」

「有難う御座いますう、ウルベルト様！」

エントマの頭をウルベルトは撫で、欲しそうにしていたので腕もついでにエントマにあげた。さらに嬉しそうにするエントマと、その妹の様子に微笑みを零す姉のソリュシヤンにウルベルトは満足感を覚える。

「それじゃあ、お礼にそつちの余りをくれないか？」

「どうぞお好きになさってください。良ければ、倉庫からご希望のものを持ってきますが？」

「いや、それでいいよ。それからデミウルゴス、支配の呪言の解除を」「畏まりました、ウルベルト様。——『自由にして良い』」

しかし言葉を話すことを今更許されても、その人間にはもう何かをしようとする気力が無かった。大きすぎる絶望を前に、ただへたり込むだけだ。いずれ訪れる死刑の時を待ち、処刑台を見詰める死刑囚の眼がそこにはあった。

「お、お許しを……」

やっと出たその声はあまりに上滑りしている。その発言に何の意味も力もないことを、発言者自身があまりに理解しすぎていた。生存本能が搾り出させたのだろうか、あまりにも哀れな無駄な抵抗と努力だった。

その震える胸に、浅くレイピアが突き刺さる。鈍い呻き声が漏れ、そしてレイピアがそのまま魚の腹を捌くように下へ滑り出し、絶叫が響く。

聡い雪女郎達が痛みに暴れようとしたその身体を捕らえ、押さえ込む。

レイピアは滑らかに滑ってゆき、その中にある真つ赤な肉と内臓を外に曝け出してゆく。ぼろぼろとはしたなく、その中身全てを溢れ出させてゆく女の悲鳴は、突然ぶつんと絶えた。

「ああ、いい音色だった……」

まるで演奏を終えた指揮者のごとく、ウルベルトは純黒のレイピアから滴る血を雪原にはらう。

そこに優雅に立っているのは、悲鳴の祝福と死者の血潮にて再誕した紛うことなき悪魔、ウルベルト・アレイン・オードルだった。

## 主演：捧げる者達 6

その招集令は、唐突なことだった。

守護者統括のアルベドが隠しもせず眉間にしわを寄せてしまう程に、整頓されていない隊列の酷さがその証拠だ。

第十階層の玉座の間に緊急招集されたナザリックの者達は皆、突然呼び出され、当然だが到着した順番にめいめい広間に入っている。それにしては、互いに呼びかけ合い助け合って、そこそ綺麗に並び直してはいるのだが、ナザリック地下大墳墓の管理を任されている彼女にとつては耐えられない有様だった。

愛するモモンガの御前に、自分の力不足の証明を並べられたようで、アルベドには不快で仕方がない。

玉座に腰掛ける愛しい殿方の隣では、さすがに彼女も舌打ちはできない。だが、玉座の数段下で不敬にもモモンガに背を向けて悠然と立つ山羊を、アルベドは不愉快さと嫌悪を隠しきれないままに睨みつけていた。

そして、その首と胴を切り離し、狩人が獲物を自慢するように首を剥製にして自室に飾れたらと、うつそり妄想していた。その妄想は、ウルベルト・アレイン・オードルがナザリック地下大墳墓に客人として訪れた日よりずっと、彼女の微笑の下で密かに行われている妄想だ。

無意識のうちに実行してしまうのではないかとアルベド自身が危惧する程に具体的な妄想では、血抜き処理の手際から飾る剥製を縁取る装飾まで細かく夢想できている。

しかし、それ程憎もうとアルベドはまだ実行には移さない。

あの憎たらしい存在を殺した所為でアルベドが愛しい愛しいモモンガから憎まれるなど、堪ったものではなかった。

殺すとしたら、愛しい殿方がアルベドが手を汚した事実を知らないで済む瞬間。いつの日か訪れるであろう、その首を刎ねる機会に恵ま



れた瞬間を、まだ今は待たなければいけない。

じつと、獲物の首を付け狙うアルベドの眼光は、どちらかと言えば狩人より獣側だ。その獰猛な金の眼はしかし、愛しい殿方を見詰める時には嘘のように柔らかくなった。

「アインズ様、私も下に降りて、ウルベルト様からの御話を賜りたいと思います。……パンドラズ・アクター、貴方は——」

「私めは『反抗期』ですので、このまま愛しい父上の隣にしようと思いません！」

「お前の言う『反抗期』はどんどん滅茶苦茶になっていくな……。アルベド、コイツは変わらず無視してくれて構わない。気にするな。私ももう気にしないことにした」

何やら草臥れたその様子を気遣う様子を見せつつ、アルベドは器用に綺麗に微笑む。

「左様で御座いますか……。パンドラズ・アクターのここ数日における勝手は、目に余るものがありますが……。アインズ様が構わないと仰せなら、これ以上私から申し上げることは御座いません。ですが、何かあれば直ぐに御命令を」

アルベドは、自分の口からすら出てくる大？を微笑みながら平然と連ねた。

ウルベルトの言葉を跪いて聞きたいなど欠片も思っていないし、パンドラズ・アクターが愛しい存在の傍にすることに嫉妬はしていても今は離れるとは彼女は思っていない。寧ろ信頼していない山羊に相対するモモンガの隣に、忠誠に対して疑う余地の無いパンドラズ・アクターが立つのだ。

アルベドからすれば、大変都合のいい話だった。

それでも、その傍から僅かでも離れることに苦しみを覚えながらアルベドは階段を降りる。憎たらしい山羊はなるべく視界に入れないようにして、階層守護者達の中央、守護者統括としての場所に片膝を付けた。

「やあ、皆、集まってくれて有難う。急だったがよく来てくれた」

頭上から降ってくる偉そうな口ぶりにまた、辛うじて落ち着かせて

いた怒りが一気に湧くのをアルベドは感じていた。怒りを抑えるため浸っていた妄想の海は、一気に干上がってしまう。私達を一度は捨てたくせにと、今後のことなど何も考えずに今直ぐ唾を吐き捨てたくなる程だ。

「このウルベルト・アレイン・オードルは、ナザリツクに正式に帰還する。今までは客人としていたが、これからはナザリツクの皆と共にあるろう」

その表明に、玉座の間に集まったナザリツクの者達全員が歓声を上げる。アインズ・ウール・ゴウンに忠誠を誓う者としてのその歓喜の声、その轟に荘厳な静けさは壊れ、玉座の間は揺らいだ。

しかしアルベドは拍手もできず歓声も上げられなかった。ただじつと玉座にいる愛するモモンガを見詰め、発狂してウルベルトを殺しそうな自分を宥めることだけに努めていた。

その胸中を蝕むのは悔しきや憎たらしきから生まれた苦痛。逆る怒りから生まれた激しい心音。

それでも、彼女はその激情に耐えてみせた。

愛しい殿方が嬉しそうにしている様子を眺めていれば、アルベドはどんな苦渋にも堪えられたのだ。

「まったく……。ウルベルトさん、急に皆を集めて何事かと思ったら……」

驚き、呆れつつもご機嫌な様子の玉座につくモモンガを、名を呼ばれ振り返った悪魔はじつと見詰める。

階段下から見上げるウルベルトの視線は獲物に絡みつこうとする蛇の様で、モモンガは戸惑ってしまう。

「ウルベルトさん……？」

友の理解出来ない行動と、その敵意滲む視線に、アインズではなくモモンガとして玉座に座す彼は問い掛ける。しかし答えは返ってこず、結局は戸惑いが増すだけに終わる。

しかし戸惑うだけのモモンガと違い、至高の存在そのものを憎むアルベドと「反抗期」を理由に宝物殿守護者ではなくアインズの子息としてその隣に立つパンドラズ・アクターは、迷うこと無く臨戦態勢

に移行していた。

ウルベルトが足を進め、玉座へと向かい一段上がる。異様なほど、その靴音だけが場に響いた。

「もう一つ、全員に伝えることがある——」

その御言葉を発する悪魔を、そこに居る者達はひたと見据えていた。一部の者達を除いて。

アルベドは、パンドラズ・アクターに金の刺すような視線を遣っていた。そして、その焦点どころか目線すら理解に苦しむ目と、視線を絡ませていた。

こくりと、彼らは小さく頷き合う。

その瞬間にアルベドは、この数日間におけるその身勝手な行為には怒りと嫉妬を抱いていたが、それでも全て許した。パンドラズ・アクターと、そこにある意志と共通の至宝を認識し合い、そして、共通の不倶戴天の敵を、認め合った瞬間に。

「——アインズ・ウール・ゴウンの玉座は、このウルベルト・アレイン・オールドが貰い受ける!!」

その不遜な宣告に即座に対処できたのは、守護者統括のアルベドと宝物殿領域守護者のパンドラズ・アクター、そして第七階層守護者のデミウルゴスだけだ。

大災厄の魔たるウルベルトがその名に恥じぬ混沌を齎し反旗を翻したことも、目前でアルベドが微笑を崩しアイテムボックスからバルディッシュを抜き出したことも、炎獄の悪魔たるデミウルゴスが炎を纏い玉座へと飛び出したことも、皆見ているだけで理解はしていない。呆然と、ただ見詰めていた。

「ははっ、ムカつく姿を選ぶじゃねえか、パンドラズ・アクター! 《魔法最強化・連鎖する龍雷》!」

「お褒めに預かり光栄の極みです!」

たちち・みーの所有する攻撃のスキルで魔法攻撃を暴力的に打消し、爆風の中、その姿と力を借りたパンドラズ・アクターが玉座の前で盾となり構える。

「ウルベルト様!!」

「貴方の相手はこの私よ、デミウルゴス！ 愚かな造物主を持ったことを悔いなさい！」

バルディツシュの鈍い煌めきを視界の端にとらえ、デミウルゴスは慌てて体勢を整える。長く伸びた悪魔の爪が辛うじて刃を流し、スーツを裂いただけで済む。しかしそれは、デミウルゴスにとっては不快極まりないことだ。舌打ちするデミウルゴスに、アルベドの嘲笑が掛かる。

「貴方の愛しい山羊も、私が首を刎ねてあげるわよ……！」

「アルベド、貴様……!!」

珍しく感情を露わにし怒りに歯を剥き出しにしつつデミウルゴスが冷静に足止めスキルを重ね、完全武装ではないアルベドの行動阻害を行う。

「ゴキユートス！ 友として要請する！ ウルベルト様に御味方してくれ！」

「ナツ、デミウルゴス、一体ナニヲ……!?!」

その発言にアルベドの腸が一気に煮えくり返る。躊躇なく嘗ての友を切り捨て、反逆者の首を刎ねるべきなのに、一体全体何を躊躇しているのかと。

「このッ、恥知らず共があああッ!!」

その絶叫に、ナザリツクの者達が身を震わせる。音としての振動だけでない、濃縮された憎悪が確かにそこにはあり、それが異形の者達にですら、悍ましいと感じさせたのだ。

「私がッ、私が愛するモモンガ様に反逆した愚か者共も、即座に御味方しなかった不屈き者共も、全員、この私が首を刎ねてやる……ッ!!」  
確固たる決意を込めるように、そのバルディツシュをへし折らんばかりにアルベドは凶器を握りしめる。

そして、その美しい身が、歪む。

まるで悪そのものがこの世に形を取ろうとしているかの如く、吐き気を催すほどに変貌してゆく。それに応えるように、デミウルゴスも真の醜悪なる悪魔の姿に変貌しようとする。

存在し得る世界の穢れと醜さ全てを煮詰めて産まれたようなバケ

モノ同士の食い合いが始まるのだと、満ちる殺気とそれをただ見詰める彼等の背筋を走る怖気が証明していた。

「……止める」

ウルベルトにその剣先を向けていたパンドラズ・アクターが、背中から聞こえてきた小さな声に固まる。それは醜いバケモノになるうとしていた者達も同じだ。

全員が、懇願に限りなく近い命令を出した玉座の骸へと、ゆっくりその顔を向けた。

「頼むから、もう、止めてくれ……」

酷く痛々しく、弱々しい声だった。

命令ではない、完全なる懇願。強者の我儘でもなく、それは弱者が涙と共に垂れ流す様な無力なただの願い。意味のない唯の音の羅列。

絶対の支配者であるはずのアインズ・ウール・ゴウンのそれに、静まり返った後、一斉にどよめきが起こる。

愛するモモンガの、心からの悲鳴を聞いてしまったアルベドが変貌を止めて、へたり込んでしまう。その手は武器を離し己の顔を覆っている。そしてまるで、転んでしまった子供の様に泣きじやくり始めてしまった。

「ああ!! だから……、だから、嫌だったのよお……!!」

優しく慈悲深い愛しいモモンガが、深く深く傷付いていることが、アルベドには痛くて堪らなかった。

その奥底にある誰にも触れない、しかし自分達に注がれるものを、砕かれたことが酷く悔しくて堪らなかった。その大切なものを守れない癖に“守護者統括”などという御大層な名前を掲げている自分が、彼女には恥ずかしくて堪らなかった。

身も蓋もなく泣きじやくるアルベドは武器に目を遣る。しかしそれを握ることに何の意味も見いだせず、結局泣くのを続けるだけだ。

「ッ……、」

アルベドは結局、アインズ・ウール・ゴウンのため、ナザリツク地下大墳墓を護るため“そのためだけに産み出された存在だ。アインズ・ウール・ゴウンを去る選択肢も、残る選択肢も、その全てを壊

す選択肢も、何も用意されていない造られた存在なのだ。

至高の存在のように自由ではない。

生み出しておいて全て置いて去ったくせに戻って来る、偉大なる存在のその御意志による自由な行為も選択も、被造物でしかないアルベドには止められやしない。

その忌々しくも偉大なりし存在が、誰にも触れないモモンガの心を侵犯することも、粉碎することも、土足で踏み躪ることも止められやしないのだ。

「ああ……、なんで……、私は……!!」

そして粉々にされたその御心を、元に戻す術もアルベドは知らない。

だから、只管に帰ってくるなど無意味にも願っていた。だから、それなのに帰ってきたウルベルトが目障りで不快で、嫌で嫌で仕方がなかった。

愛するモモンガの隣で、ウルベルトが親しげに振る舞いモモンガがそれに嬉しそうに応える度に、アルベドは世界で一等尊い存在を人質に取られている気分だった。

「モモンガさん」

その悍ましい口が、愛しい存在の名を呼ぶことにアルベドは齒ぎしりする。そしてそれは、アルベドだけではない。

ほんの僅かな隙を狙いウルベルトを殺そうとしたパンドラズ・アクターが、飛び出る。強化された魔法の一撃をすかさず放つことで、モモンガはその行為を阻害した。

「私は、出ていく」

「父上、そのようなことをされずとも、私めが問題をすぐに解決して差し上げます」

「止めてくれ、パンドラズ・アクター。頼むから、私にお前を憎ませるな……」

その力無い言葉には、さすがのパンドラズ・アクターも動きを止める。正義を体現したかのような白銀の鎧と情熱を表す赤いマント、違和感を覚えながらもモモンガはそれを押し退ける。

偉大なる父に弱々しく押された息子である彼は、よろめき、思わず道をあけてしまう。

「……ウルベルトさん、全てを貴方に託し、オレが出ていきます。どうか……、ナザリックの子供達を幸せにしてください。皆も、ウルベルトさんの言うことを良く聞くように」

しんと、静まり返った空間で返事をしたのはウルベルトだけだ。

アルベドは声にもならない嗚咽だけを流し、言葉を見つけれなかったパンドラズ・アクターは、呆然とその背に手を伸ばす。

夢現のように、絶望したまま、ナザリックの者達はその光景を眺めていた。動こうと、何か言おうと誰もがし、そして正解を見つげられずに戸惑っている。

「アインズ様……！ いえ、モモンガ様、モモンガ様……！！」

悲痛な彼女の悲鳴に近い絶叫には、モモンガもさすがに無視できず、泣きじやくり黒髪を振り乱す美女に視線を遣った。しかし結局、聞こえてきた友の声に応えるべく、直ぐ様目を逸らしてしまう。

「分かりました、モモンガさん」

そう言っただり前のように差し伸べられた山羊の右手に、モモンガは咄嗟に、応えるべくつい手を出してしまった。

警戒すべき相手に対するその行為に一部の者達から悲鳴が聞こえ、モモンガが自分がまだ相手を友と思っていることに苦笑した瞬間、ウルベルトがギルドの指輪を掲げる。

「それじゃあ、地底湖に遊びに行きましょうか！」

「はっ！」

そうして骨の手を強く握り返しニヤリと笑ったウルベルトは、モモンガを連れて第四階層地底湖の、“上空”に転移をした。

「はあああああああああああ！！」

間抜けなモモンガの驚愕の声に、ウルベルトの爆笑が返ってくる。しかし実際笑い事ではない。

確かに死にはしないかもしれないが、それでもかなりの高さから現状落下しているのが現実だ。何か対策をと考え、飛行魔法を思いつく

のが当然だろう。しかしその魔法は、発動するより前にウルベルトの発言に邪魔された。

「チキンレースしましょうよ、モモンガさん！」

「はあ!？」

「度胸試しですよ！ 先に《飛行》を使った方が負けです！」

「なんで!？」

「なんならガルガンチュアでも起動しますか？ 面白いかもしれないですし！ ガルガンチュア起動！」

「いやいやいや！ それどころじゃないし！ ガルガンチュアも起動しなくていいから！」

上空から降ってくる至高の存在からの命令に、結局ガルガンチュアは人間だったらかなり辛いであろう無茶な中腰の姿勢で停止した状態になってしまおう。

「モモンガ様あああああああああ」

混沌の二重奏が更にも上から降ってきて、モモンガはぎよつとして声の降ってきた方へと振り向く。

当たり前のように、アインズ・ウール・ゴウンのギルドの指輪を持つ守護者統括と、宝物殿の守護者が同じく上空から落下してきていた。

冷静に考えれば分かることだっただろう。アインズにべつたりと纏わり付く自称反抗期のパンドラス・アクターが追いかけて来ることも、あのアルベドも自称反抗期になって命令に従わなくなることも。

かつてアインズの膝に乗るためだけに赤ん坊の泣き真似までしてみせた彼女が、反抗期にならないはずがなかったのだ。

「おのれ！ モモンガ様を苦しめた挙げ句このような暴挙に!!」

「父上！ やはり私は貴方様に忠誠を誓わねば生きていけません！ たとえ未来永劫憎まれようとも!!」

空中で翼のあるアルベドが有利なはずだが、怒りに任せ振り下ろされたバルディッシュはウルベルトの魔法で容易く吹き飛ばされる。しかし至高の存在のうち遠距離射撃の得意な《バードマン》が煙の中からスキルを發揮し、その不意打ちにウルベルトは左側の腕と耳、



そして角を大幅に挟られることになった。

そしてまた、モモンガも迫り来る衝突に対して何か、《飛行》以外の対策をせねばいけなかった。

「クソッ！ 当たっても許してくれよ、ガルガンチュア！ 《爆裂》！」  
ガルガンチュアと、落下しているウルベルト、モモンガ、アルベド、パンドラス・アクターの間には爆風が起こる。幸いなことにガルガンチュアに爆裂魔法の直撃は避けられたようで、爆発したのは何も無い空間だ。

ウルベルトが巨体の頭上に、肩から背にかけてのなだらかな坂の上  
にアインズとアルベド、パンドラス・アクターが、爆風によって落下  
の衝撃を緩和させながら着地した。

「父上！ 無事ですか!?!」

「なんで追ってきた!?! 私意志は伝えたはずだ!」

「私の意志も伝えたはずです!!」

自称反抗期の息子に怒鳴り返され、モモンガは黙るしかなかった。  
皆が戦い合うところを見たくないのがモモンガの我儘なら、それは  
パンドラス・アクターの我儘だ。

絶対に譲ることのできない領分、自分の中で揺るがない普及の存  
在。それは間違いなく、誰にも侵犯できないものだ。

「私んです、モモンガ様」

モモンガとウルベルトの間に、パンドラス・アクターとアルベドが  
並ぶ。そこにあるのは美しい程の純然たる決意だ。

「私が愛している唯一の方……、たとえ貴方様に憎まれようと、私は、  
コイツだけは許さない……!!」

不敵に笑うウルベルトの上空から、耳障りの良い美声が降ってく  
る。その声は自身の立場を明確に指し示しながら、造物主の側に下り  
立った。

「ウルベルト様、御怪我を……!?!」

アイテムボックスから回復アイテムを取り出したウルベルトはシ  
ルクハットを脱ぎ、自身に頭からぶつ掛ける。巻き戻したように修復  
された頭を雑に振り、短く息を吐くと、悪魔は、焦燥する悪魔に落ち

着いた声音で答えた。

「気にするな、平気だ」

「左様で御座いますか……」

あからさまにデミウルゴスは安堵していた。その姿に、アルベドは怒りと哀しみを抱く。

結局は自分達を捨てたその存在を、今まで側にいてくれた偉大なる慈悲深い方よりも選ぶ悪魔に対して、裏切られたという悲哀がどうしても心に生まれていた。まるで今まで共にあったこと全てを、無価値と放り捨てられたかのような。それは余りにも憎く悲しく、そして酷く寂しくも感じられた。

次に現れたのはアウラとマーレ、そしてコキユートスとシャルティアだ。

「アインズ様！ ウルベルト様！」

階層守護者達は今は全員がギルドの指輪を所持している。後から集まった者達は湖の畔に一度転移した後、至高の存在と守護者達の着地点を遠目から視認してから転移したので、上空から落下はしてこなかった。

「……パンドラズ・アクター、急ぐわよ」

「分かっております」

これ以上の数の差は圧倒的な不利に繋がると、モモンガの防御は賭けに近いが捨てて、ウルベルトに向けアルベドは突貫する。その援護はバードマンに化けるパンドラズ・アクターが務めていた。

「アルベド……!!」

悲鳴を上げたのはシャルティアだ。

しかし幼さを残す偽りの美貌を持つ真祖の吸血鬼は、動けなかった。その血を固め創ったようなルビーの瞳の戸惑いを一瞥し、しかし、それでもアルベドは武器を握り締め振りかぶった。

「デミウルゴス……!!」

次に痛ましい声を上げたのはコキユートスだ。

蟲王は武器を握り締め構えていたが、覚悟が足りず動けなかった。酒を酌み交わし嫉妬も尊敬もする良き友が、反逆者として守護者統括

と戦っている事実には未だに目を逸らしたかったのだ。

「短期決戦か……、それじゃあ——」

ウルベルトが呪文を唱え始め、それを聞き何をしようとしているか察したモモンガが焦りを隠さずに叫ぶ。

「パンドラズ・アクター!!」

続いて叫ばれた至高の存在の一人である御名に、その意味を汲み取ったパンドラズ・アクターは直ぐ様その御姿に化け、その姿によって発動するスキルの重ねがけで強化された防御魔法を素早く展開した。

「アルベド! いや全員、伏せろ!!」

「そうそう、モモンガさんなら分かると思ってたよ」

ウルベルトから放たれた魔法は一直線に光線を残し、アルベドの横を通り過ぎ、そしてパンドラズ・アクターの展開した光の壁を相殺されつつも粉碎し、轟くような荒ぶる爆風を第四階層全体に置き土産にして消えていった。

「……あれ?」

その白光の軌跡はそこまで命中率の低い技ではなかったはずだが、随分とアルベドにもパンドラズ・アクターにも自分にも離れた場所を通ったことにモモンガは疑問を抱く。仮に防御魔法の展開が間に合わなくとも、きつと直撃はしなかつただろうと確信できる程の逸れっぷりだ。

確かに気になるが、しかし先程の爆風に守護者達が吹き飛ばされていないかの方が心配になり、モモンガは周りを見渡した。

さすがは守護者というべきか、軽く吹き飛ばされていきそうな見た目の可憐なエルフの双子も、細く白い吸血鬼も、顔を顰めてはいるが未だしっかりと足場の悪いガルガンチュアの背に立っている。

アルベドは直近で余波を受けたせいにかふらついているが、目に見えるダメージは見当たらなかった。

そして、後ろから遅れて多くの驚愕の声か波になり聞こえてきた。

それに驚きモモンガが振り向き辺りを見渡すと、よく見れば湖畔にはナザリックの者達が集まってきていた。

ウルベルトがわざわざ「地底湖」というワードを発したので、ギルドの指輪を持たない者達も転移門を使い必死に追いかけてきたのだろう。足の早い者達から順に集まり、そして翼を持つ者達は湖上空を駆けて追いかけようと試みていたらしい。ただしその努力は、先程の爆風で大分後退させられている。

しかしその中で唯一、爆風に堪え飛び込んできた大きな影があった。

「アインズ様！　ウルベルト様！　どうか矛を収めて頂けないでしょうか！」

第六階層の守護者達から借りたドラゴンの羽音と共に現れたのは、その背に乗るプレアデスの副リーダーであるユリ・アルファだ。

「分をわきまえない行為であるのは重々承知しております！　懲罰も喜んで受けます！　しかしどうか！　どうかお止め下さい！」

プレアデスの姉妹の姉として、常に落ち着いた様子とは真逆の、その絶叫。普段なら綺麗にまとめられた夜会巻きも、すっかり乱れている。

「現在既に各階層で混乱が起き、妹達とセバス様が何とか対処をしております!!　ですが、これ以上は……!!」

喉から血を吐きそうな程の必死なユリの懇願に、アインズは言葉を無くす。

全てが壊れてしまう、その恐怖がアンデッドであるはずのモモンガの体を動かさなかった。

しかしそれを見詰めるウルベルトが、集まってきたナザリックのメンバーに冷徹な命令を淡々と下し、更に場は混乱することになる。

「丁度良い。ナザリックに所属する全員に命令を下す。モモンガさんを殺せ」

信じられない程に、その命令はその場に響き渡った。

アルベドは目を見開き、そして慌てて振り向いて、そこにあった愛しい殿方の酷く傷付いた様子に絶望した。

愛しい愛しいモモンガが、酷く傷付いている顔を晒していた。言っ  
てしまえばモモンガの顔は、ただの頭蓋骨だ。表情を構成する肉も皮

も無い。

だがしかしナザリツクの者達には、そして彼を深く愛するアルベドには痛い程に分かることだった。

偉大なる慈悲深い支配者が、心の柔らかい部分を深く傷付かせているのだと。

「あ、ああ……ああ……！ モモンガ様……!!」

「ウルベルトさん、どうして……」

「父上、あのような下郎と話す必要など御座いません」

アルベドが無防備にその白い背をウルベルトとデミウルゴスに晒し、バルドイツシユも手放し駆け出す。何も考えず、ただ愛しい方の側にふらふらと駆け寄り、その骨の胸に手を当てる。パンドラズ・アクターが、今度こそは譲らぬとモモンガの前に立ちはだかった。

それでも、友に裏切られた彼の絶叫は止められない。

「なんで……、どうしてですか……」

久方ぶりの再会だった、事情があったとはいえ別れがあった、仮想現実という空間での希薄な繋がりがりだった。それでも、友と想つた男の裏切りを、モモンガが糾弾しない訳にはいかない。

当然困惑だけではない。再会した彼がくれた嬉しい言葉全て、大嘘だったのかとモモンガは深く傷付いていた。再会してから昔と全く同じとはいかなくても、語らい笑い合えたことを喜んでいたのはモモンガだけだったのかと、虚しくて悔しくて、辛くて堪らなかった。

「ウルベルトさん……どうしてですか!? オレは貴方に、そこまで憎まれることをした覚えは無いですよ!? むしろ、」

「むしろ、なんですか?」

傷付けられた驚愕と哀しみから一転して、モモンガの中で怒りが沸々と湧き上がってきた。

悠然と立つその姿は、嘗てモモンガが憧れも含む眼で見詰めた姿そのもの。だがしかし、あれ程に尊敬していたはずの、格好良いと純粹に思っていたはずの姿が、今のモモンガには妙に醜く悍ましく見えてしまう。

「貴方が作ったデミウルゴスも含め、ここはずっと、オレが守ってきた

んですよ!!」

その怒声にはしかし、馬鹿にするような拍手が返ってくる。その巫山戯た軽い音だけでモモンガは数度、強制的に精神を沈静化された。「だけど、それを『あげる』って言ったのはモモンガさんですよ？」

なあ、皆?」

ウルベルトが辺りを見渡すと、誰もが気不味そうに視線を逸した。ウルベルトからの問い掛けに対し、否定も肯定も、何も返ってこない。ただ何も言わず、誰もが黙りこくっていた。

「ついさつき、そのアインズ様が言ってたよなあ? このナザリック地下大墳墓を去るって。そして俺にアインズ・ウール・ゴウンの全てを譲るって」

「そ、それは……」

「よくもぬけぬけと……!」

怒りに声を震わせるアルベドを無視して、ウルベルトは冷淡な問いかけを続ける。

「忠誠を誰に誓っているんだ、お前達は」

その言葉が届いたナザリックの者達全てが、戸惑いの表情を浮かべる。

忠誠とは、至高の存在に対して捧げられるもの。そして、その偉大なる御方からの御命令ならば、彼等は如何なる難題をもこなすべきだと常識としてとらえている。だからこそ、ウルベルトからの命令もモモンガからの命令も、本来なら従順に従うべきなのだ。その命令には、矛盾も何も無いのだから。

モモンガはウルベルトに従えと言った、そして、そのウルベルトはモモンガを殺せと言った。

酷く明確で具体的な命令は鋭利な刃物の如く、しっかりとナザリックの者達に突き刺さっている。拒否できる要素など、NPCとしては、何一つとてありはしない。

「……いい、嫌でありんす」

小さな呟きだったが、その苦しみに共感した多くのナザリックに属する者達にその声は深く響いた。

ウルベルトとモモンガの間に、武器を手放したコキユートスが立つ。無骨で不器用でしかし真つ直ぐな彼は、どちらにも頭を向けずにその頭をガルガンチュアの上でその身にこすり付けた。誇り高い武人たらんとする勇ましい彼の無様なその姿に、あまりの痛ましさにどよめきが起こる。

「ウルベルト様、アインズ様、ドウカオヤメクダサイ。ドウカ、我等ヲ、オ許シクダサイ」

静まり返った次には、子供のすすり泣きが流れ出す。

「なんで、なんで……こんな……、やだよう、お姉ちゃ、ん」

「ま、マール……、な、泣かないでよ……!!」

いやだいやだと泣きじやくる弟につられて、その肩を貸してあげる姉も涙声だ。

ナザリックの純粋な子供達、ただそれだけのために生み出され望まれ存在を与えられた彼らにある心は、残酷にもズタズタにされている。

ズタズタに裂かれて、その奥底にあるものを彼等は知った。長い長い時の中で育まれてきた温かいものを。どれ程苦しくとも、己自身を矛盾せしめても、足元が崩れ落ちても、それは手放せないのだと、思い知った。

“殺したくない”。ナザリックの子供達は皆そう願ってしまった。たとえ他の至高の存在全てが、その唯一を否定しても殺したくないのだと思い知った。

成長と成果を自分のことのように嬉しそうに褒めてくれたことのある者は思い出し、頭を撫でて抱き上げてくれたことのある者は思い出し、失敗をしても見捨てずむしろ成長の機会を与えてくれたことを思い出す者もいた。

その記憶にある喜びも誇りも尊さも、捨てられる訳がない。切り捨てられる訳がないのだ。

気付けば皆がさめざめと泣いていた。今まで命令をされるだけでも嬉しそうだったナザリックの存在が、与えられた命令に嫌だ嫌だと泣いている。

それは、モモンガを、憤怒に一瞬で連れて行くには充分すぎる事象だ。

「ウルベルトさん、止めてください」

冷ややかどころではない、極寒でもない、色も温度もない刺さる怒りが音になっていた。丁寧な物言いなのに、殺すぞと言われたかのような不快感と威圧感に満ちている。

その、明確な敵意に満ち満ちた声には、泣きじゃくる子供達も小さく息を呑み黙り込む。誰に対して言ったか分かりきっている言葉なのに、聞いた誰もが謝りたくなってしまっていた。

「ウルベルトさん、もう、これ以上の勝手は許さないです」

「へえ、忠誠を誰に誓うかも決めかねる子供達に、そこまで肩入れしませんが」

びくりと各々の肩が跳ねる。ただでさえズタズタにされた心を泥のついた靴底で踏み潰された彼等は恥じいり、自身の居場所を探すかのように俯く。

しかし分からなかったのだ、どうしたって、分からなかった。

アインズ・ウール・ゴウンのために産み出された彼らにとつて、至高の存在からの御命令に逆らうことは自身の魂の根幹からの否定だ。

それを平然とやってのけるのは、設定変更という大いなる言い訳を手に入れることができたアルベドと、生みの親がモモンガであり、反抗期”という言い訳を手に入れたパンドラス・アクターぐらいのものだ。

どうしたって、彼等以外の産み出された者達は考えてしまう。今この瞬間にウルベルトに逆らうということは、どうということなのかを。それは、己の意志を不遜にも持つということ。

万が一また、自分の造物主とモモンガが似たような立場に立たされた時には、選ばなければいけないのだ。

命令に唯従うのではなく、最も忠義を尽くすべき相手を、己の意志なんぞで。

「そんなことはどうでもいいんだよ!!」

その怒鳴り声に、抜けられない思考の渦に陥っていた者達はぽかん



としてモモンガを見つめる。

彼の荒れ狂う怒りが、ただ迷うだけの情けない自分達には向けられていない事実には戸惑い、そしてその慈悲深さに気づくと、はらはらとまた彼等は涙を流した。

「ナザリックの皆を傷付けた代償は支払って貰います。本気で、戦います。たとえ……、貴方を殺すことになっても」

ニヤニヤと何がそんなに嬉しいのか、不気味に悪魔は笑っている。「おやおや、お怒りですか。それで？ 俺を殺してまで、何が欲しいんですか？ 皆の忠誠ですか？」

モモンガは首を横に振る。単純明快な、心にずっとあつた答えはするりとその口から滑り出た。

「オレは、ナザリックの皆を守れるなら、それでいい」

その潔い言葉に導かれるように、アウラが、そしてマールが、モモンガの前に背を向けて立った。

「ウルベルト様、ごめんなさい」

「僕達は……、モモンガ様をお守りします……!!」

モモンガを庇うマールとアウラの声は震えていた。その瞳は泣き腫らしたせいで腫れぼったく、震える脚は哀れで庇護欲を覚えるような姿だ。とても勇ましいとは言えない。実際その瞳は未だ困惑の色を湛えている。

「ウルベルト様、私達はモモンガ様とずっと一緒でありました。この選択は、とても苦しいでありんですが、それでも同じ苦しみなら、私はモモンガ様と共にあることを選ばせて頂くでありんす」

同じく泣き腫らした眼のシャルティアが、必死に震える声を張り上げ、ウルベルトとモモンガの間に立つ。やはりその眼にも、戸惑いが残っている。その白い手は、可哀想なほど震えていた。

「ウルベルト様、ドウカ、ドウカ今スグ御命令ノ撤回ヲ!! デミウルゴス！ オ前モ、ウルベルト様ヲ御止メシテクレ!!」

必死に叫ぶ友の呼び掛けを無視する悪魔は、その感情も表情も全て分厚い眼鏡の硝子奥に隠しこんでいる。

「ッ、ウルベルトさん……!! 返してもらいます！ この子達もナザ

リック地下大墳墓も……、大切にしてくれないならオレに返してもらいます！ 貴方はユグドラシルでできた大切な友人だけど、オレの大事な今の仲間達、ナザリック地下大墳墓の皆を蔑ろにするぐらいなら、オレは貴方を許せない……!!」

張り詰めた空気に、迸る緊張、次の誰かの一手でナザリックは確実に崩壊へ進む。そして今、その一手を握るのはウルベルトだ。その発言と意志が、ナザリック内の内紛の開幕となる。

もはや退けない戦い前、各々が必死に覚悟を決めてゆく。

「モモンガさん、やっと我俣を言ってくれましたね」

そんな緊張感が溢れる空気にそぐわない優しい声音に、各々の間抜けな漏れ声が重なる。

「……………はい？」

殺し合いが始まるのだと肩肘張っていたのに、がくと膝カツクンを唐突にされたかのようだ。何を言っているのだお前はと睨むモモンガに、ウルベルトはにやりと意地悪く笑う。

「はあ……、アイツの言葉を借りるのは癪だけどな……、仕方ない。モモンガさん、良い所が全部悪く発揮されてますよ。少しは我が儘を言った方が良いつて、どっかの誰かさんが言ったの忘れちゃいましたか？」

その気が抜けた言葉に、モモンガは昔のことを思い出す。ナザリック地下大墳墓を手に入れたばかりの、ギルド長になったばかりのモモンガにウルベルトと仲の悪かった騎士が送ってくれた言葉だ。

「それって、たっちさんがオレに……」

ナザリックの子供達には意味の分からない問答に、どよめきと戸惑いの声がそれぞれから漏れ出る。ウルベルトとモモンガそれぞれの顔を交互に伺い、子供達はどうしたら良いのかと焦っていた。

「よーし、ガルガンチュア、起動終了。沈め」

その言葉の意味は全員に伝わった。それは、自分達の足場がいなくなるということだと。

「え、ちよ、それ今言ったら……!」

指示されるまま動くゴーレムは従順に、そしてその質量は重力にも

従い、一瞬で落下を始めた。

ギルドの指輪を使えば、全員着水せずに優雅に土の上に降り立つことができただろう。それなのに、ガルガンチュア上にいた全員が湖にその身を浮かべていたのは、これまたウルベルトのせいだった。

落下する寸前に転移しようとしたモモンガに、アメフト選手の如く華麗なタックルをウルベルトが決めたからだ。奇怪な音を口から出しながら吹っ飛ぶモモンガと、それに大笑いしながら落下していくウルベルトを見てしまえば守護者達も誰も転移できなかつた。

その結果が全員で仲良く水浴びだ。

モモンガ様、モモンガ様、と叫びながら焦りを隠さずモモンガの側に近づいてきたアルベドとパンドラズ・アクターを宥めると、モモンガは、呑気に水に浮かび楽しそうにしているウルベルトを睨みつけ、そして、疲労の滲む呆れた声を出した。

「……………ウルベルトさん、今回の反乱は茶番ですね？」

「あつはつは、正解です」

その会話が聞こえた全守護者とドラゴンに乗るユリが、はあ？と間抜けな声を出す。

「だって、こうでもしないとモモンガさん、また遠慮するでしょう。俺はね、そういう一方に尽くさせたり我慢させたりは、友達同士だと思っていないから」

「……………それじゃあ、思いつきりますけど、あんたバカですか!! それでこんな、ナザリック全体を大騒ぎさせるとか!! 本当にさつき怒ってたんですよ!?! 絶対殺すって思いましたからね!?!」

「あつはつは、良いですねー」

「笑いごとじゃねーよ、この悪魔!!」

「そうです、悪魔ですよー」

「うっわー、ムカつく。ウルベルトさんそんなうっさいキャラしてましたっけ?」

「モモンガさんこそ、そんなジメジメした性格でしたっけ?」

「お、殺りますか?」

「返り討ちにしますよ、こつちがガチビルドだつて忘れていきますか?」「ウルベルトさんこそ、装備全部預けてゲーム止めたの忘れていませんか?」

結局不穏な空気が流れ出し、少し安堵していた守護者達がまた不安そうに至高なる存在の御尊顔を交互に見やる。しかしまた、ウルベルトとモモンガが同時に噴き出したことで目を見開き、そして振り回される彼らは再度ほつとした。

「はー、馬鹿らしい」

「まったくですね」

アルベドだけは警戒を緩めず、そしてここぞとばかりにモモンガにぴつとりくつついている。それに対し仕方ないなあと放つて置くモモンガと、それに淋しそうにするアルベドを見て、ウルベルトはふむと頷く。

「モモンガさん、NPCだつてこと意識しすぎだよ。アルベドの好意が恥ずかしいからつて逃げるのはアルベドが可哀想でしょう」

「そつ、そんなことはない、ですよ!だいたい設定を書き換えたのは事実で……」

突然、自身に抱きついている当事者をちゃんと女性として見ろと指摘され、モモンガが露骨に狼狽える。

「設定が絶対なら、シャルティアが廓言葉をサボつたりペストーニヤがワンを付け忘れるのをなんて説明するんですか」

「そ、それは……」

まだ何かしらの逃げ場を探すモモンガの、その逃げ場を奪つたのは愛に生きるサキュバス自身だ。熱い瞳で見上げ、愛を訴える彼女は濡れ姿が妙に色つぽく見えて、モモンガは更に動揺する。

「モモンガ様! 私、私はたとえモモンガ様がその様なことをなされなくとも、最後まで残つてくださった貴方様をお慕い申し上げております!」

「ほら、逃げない」

水中で必死に逃げようとしたパニクる骸骨の背をウルベルトは押し、アルベドにわざとくつつけた。

「ちよつ、ウルベルトさん……！」

「一度は出て行った俺でも、あの子達は俺を至高の存在として忠誠を誓ってくれるでしょう、その一部をのぞいて。でもねモモンガさん、」

そつと近くで囁かれたその言葉に、モモンガは黙り耳を傾ける。

「俺よりも、百三十年一緒に頑張ってきた、共にいてくれた貴方の方が皆に愛されていますよ」

「そんなこと……」

「おやおや、デミウルゴスを泣かせたのに、また謙遜ですか」

露骨に驚き動揺するモモンガに、ウルベルトは苦笑する。

「俺に、モモンガさんと一緒にいてほしいって、俺にもモモンガさんにも忠義を貫かせて欲しいって、必死だったよ。そんな熱血キャラにした覚えはないんだけどねえ」

穏やかな声が面白そうに紡ぐその事実には、モモンガは胸中が熱くなるのを感じる。あそこまで深い忠義と同格に扱われた事実が、じんと空の胸に染みているのをモモンガは確かに感じていた。

「もつと我が儘、言ってくさいよ、モモンガさん」

また一押しされて、モモンガは周りを見渡す。すると、きよとんとした表情でびしょ濡れの守護者達と目が合って思わずモモンガは、なんだか可笑しくなって笑ってしまった。

この世界に来てから、目新しい物を見つけるのがモモンガの趣味の一つだ。

実際、ユグドラシルで遊んでいた時もそうだった。知らない世界、アイテム、魔法、武器、それが目の前に現れる度に心が踊った。未知が好きだった。

今でも冒険者組合に力を注いでいるのは、彼らが持つて来る世界の品々と冒険譚が楽しみだからだ。

だが本当は、聞いたり持つて来て貰ったりはモモンガの楽しみ方ではない。アインズ・ウール・ゴウン魔導王の楽しみ方だ。

モモンガ自身は本当は、直接出向きたいのだ。

発見された時は海と思われた湖も、謎の遺跡にあるという不気味な壁面も、モモンガは直接その未開の地で見してみたかった。つい最近報告のあった鉱石の採掘現場は、この世のものとは思えない程に美しいクリスタルのみで構成された空間が奥から見つかつたという。それも本当は自分が最初に発見できていたらと、モモンガは思つてしまふ。

だがしかし、報告だけで充分と我慢している。

自分の楽しみを我慢してでも守りたい存在がたくさんできたのだから、それは当然のことだつた。

確かに初めは、かつての仲間達が残してくれた子供だからという気持ちばかりだつた。しかし当然今は違ふ。

長い時の中で共に頑張つてくれた、信頼してくれた、痛いほど愛してくれた、愛されようと健気に尽くしてくれた、愛しい子供達。いや、新しい仲間達だ。共に笑つて、頭を抱えて、困つて、意見を出し合つたり、喧嘩もした、大事な仲間達なのだ。

今回の一件で、モモンガは痛いほどに自身の抱く願望が分かつた。もう二度と仲間達を失いたくないのだと。

そして、ナザリック地下大墳墓の仲間達が後から来た誰かに奪われ、好き勝手されるなど、たとえそれがアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーでも許せることではないのだと。

湖に浮かびながら、モモンガは辺りを見渡し、ナザリック地下大墳墓の者達に問い掛ける。

「……お前達、私に、アインズ・ウール・ゴウンではなく、このモモンガ自身に、忠誠を誓ってくれるか？」

命令ではなくお願い事だ。断られても仕方ない無力なただの願い事。だがしかし力強い言葉が一気に返ってくる。

「当然で御座います！ アインズ様！」

「ぼ、ぼく、もしもアインズ様を、殺せつて言われても無理です……！！ 逆らうなんて許されなくても、逆らいます……！！」

「マーレだけじゃないですよ！ 私も大好きです、アインズ様！」

「誓うでありんす、アインズ様！ どうか、アルベドだけじゃなく！」

私も!! 本心からアインズ様を愛しているでありんすよ!」

モモンガは自身に抱きつく柔らかい存在から太い舌打ちが聞こえた気がしたが、聞き流して気のせいだということにした。

わざわざ泳いで近づいてきたコキユートスが、モモンガに対し頭を下げる。その波で揺られながら、モモンガはその真つ直ぐな声に耳を傾ける。

「コノコキユートス、コノ身朽チルソノ時マデ、御側ニ仕エタク思ツテオリマス」

「……ありがとう。マール、アウラ、シャルティア、コキユートス。その言葉を、本当に、心の底から嬉しく思う」

そして、少し離れた所で気配を消し、黙りこくったままの悪魔にもモモンガは視線をやり優しく尋ねる。

「デミウルゴス、お前は誓ってくれないのか?」

その慈悲と愛に悪魔は身を震わせ、何か言おうとして口を開く。その唇は、みつともなく震えている。その御言葉の意味に感極まり、俯き、眼鏡を外し彼は咽び泣いた。ダイヤモンドの眼が濡れて輝き、その髪も着水の衝撃で今までに誰も見たことない程に濡れ乱れている。

何度か深く呼吸をし、やっとの思いで呼吸を整えてから、デミウルゴスは震える声で応えた。

「つ、……このデミウルゴス、喜んで忠誠を捧げさせて、頂きます!!」

その答えに、モモンガはまた満足げに頷く。そして、辿々しくもアルベドの肩を抱き、パンドラズ・アクターの肩に手を乗せた。

「アルベド、パンドラズ・アクター、お前達もこれから変わららず、私を、いや……、このオレを、愛してくれるか?」

「当然でございます……!! ああ、世界で唯一愛しい、我が君!!」

「私の絶対であり唯一の方……、未来永劫に、このパンドラズ・アクターめは貴方様の為にあります」

その大仰な答えに苦笑しつつ、有難うとモモンガはその言葉を受け取った。そして、その光景を横目で満足そうに眺めていたウルベルトに、じたばたと泳いで近づく。

意外そうな顔をしてモモンガを伺う悪魔に対し、モモンガは我儘を

続けた。

「ウルベルトさん、一緒に世界征服してください」

それは、我俣と言うにはあまりに可愛げのない大それた願い。素材集めに付き合っってほしいと言うぐらいの軽さで言うには相応しくない言葉だ。

しかし、ナザリック地下大墳墓を偵察なし一発クリアしようと言いだした彼の我俣だと思えば、ウルベルトには当然の、まったくもって自分の友らしい願い事に思えた。

「ナザリックに、残ってください」

続く我俣には、呆れ混じりにウルベルトは笑って答える。

「それでまた、モモンガさんと友達に戻るならお安い御用ですよ」

これまたあつさりとしたその返答に、若干緊張していたモモンガは驚いたような声をこぼす。この期に及んでまだ断られることも考えていた慎重派の友に呆れながら、あつけらかんとした態度でウルベルトは応えた。

「モモンガさんとまた遊びたかったって、言ってるじゃないですか」

こんな風にね、なんて戯けて言う悪魔に、アンデッドはからりと笑った。



## 主演：捧げる者達 7

ウルベルト・アレイン・オードルが大勝負に出た切っ掛けは、三つ。

一つは愛に燃え盛るサキュバスから与えられた憎悪、一つは文字通り表情の読めないドツペルゲンガーからの警告、そして、果無い忠誠を傾ける己が生み出した悪魔からのいじらしい懇願だ。

ウルベルトの世話係として側仕えになったのは初めはデミウルゴスだけ、後からアルベドが追加された。尤もらしい理由を並べ立てて御世話係になった彼女は、完璧な微笑とともにウルベルトに頭を垂れた。

「至高なる存在であり、アインズ様の御友人でもあるウルベルト様の御世話係という大役を授かり、恐悦至極で御座います」

後から思えば、その時からウルベルトは背筋に薄ら寒い何かを感じとっていた。わざわざ作り上げたかのような完全な出来上がりの微笑む美女が、不気味に思えて仕方なかったのだ。

しかしそれを上手く指摘することも声に出すことも要望を出すこともできずに、ウルベルトは暫くの間アルベドを側に侍らせることになる。正に世界を傾けそうな程の美女が隣で完璧な微笑を浮かべているのに、ウルベルトにはそれを全く喜べなかった。むしろその微笑が仕事の為に側を離れる時には、心底安らぎを得ていた程だ。

それに対して、やつと既視感に似た答えをウルベルトが得たのはナザリックを訪れてから五日目のこと。

初日に比べれば歓待の熱も流石に若干落ち着いてきた頃、第六階層の闘技場にて、ウルベルトがモモンガと共に夜空の下で色々と語り合っていた時だった。

その時にモモンガとウルベルトは、まあまあくだらない積もる話を

していた。

なにせ互いに抱える今までのことだけでも話題は膨大で、この世界に来てからのことも語り足りない。話のネタは尽きず、草臥れる身体も無く無限とも言える時間を手に入れているとなったら、やはりダラダラと話し続けてしまうものだ。

側仕えのメイドも控えるデミウルゴスもアルベドも闘技場の観客席に腰掛けており、時折話に混ざりながら、のんびりと最初は時間が過ぎていた。

しかし、暫くして至高なる存在が揃っていると聞きつけた手隙の下僕達が闘技場に集まってしまい、更にはモモンガと一緒に話をしようとした結果、我先に近付かんと押し合いへし合いになってしまい場が大混乱になってしまったのだ。

その混乱をおさめたのは統括の名を持つ彼女だ。

「ほら、アインズ様と、ウルベルト様にあまり御迷惑をお掛けしては駄目よ」

そう言つて微笑んだまま、モモンガとウルベルトの周りに興奮のまま群がるナザリックの皆を嗜める彼女はまるで優しい母や姉のようだった。しかしやはりウルベルトには、その微笑も優しさも崇拜もただ恐ろしいものにしか思えなかった。

その黄金の瞳とぶつかり合った瞬間に恐怖を覚え、そしてやっと、ウルベルトはかつて自身が居た世界のことを思い出した。なぜ今の今まで思い出せなかったのかと自分を訝しく思う程に、それをウルベルトはよく知っていた。

笑顔だが、いつか絶対に殺してやるという確たる決意を秘めた視線。

それは社会の下層でよく見かけた光景だ。絶対なる勝ち組、上層に君臨する者達に対して媚び諂いながらも、その眼からはどうしても憎しみと怒りは消せない。

貼り付けたまま微動だにしない笑顔も、上っ面だけの心のこもっていない声もその証拠だ。アルベドに敵視されているのだと、ウルベルトは漸くその時に気が付いた。あの自分に向けられる崇拜の姿勢は

ただのハリボテなのだ。

そしてその時から、アインズ・ウール・ゴウンが抱える秘めたる火薬庫にウルベルトは危機感を覚えていた。

次に決め手となったのは、自称「反抗期」を迎えた宝物殿の領域守護者たるパンドラス・アクターだ。

べつとり付き纏われる被害者のモモンガ自身は、また訳のわからぬいことにハマってしまったと頭を抱え精神を何度も沈静化させていた。だがしかし問題を軽視しており、そのうち飽きるだろうと早々に諦め放つたらかしにしたのだ。結果的に、アルベドかパンドラス・アクターのどちらか片方、もしくは両方が常にモモンガの側に必ずいることになっていた。

モモンガが苦笑している時、ウルベルトには全く笑えなかった。

自称「反抗期」のパンドラス・アクターは、アルベドと同じ気配でじつとウルベルトを観察してくるのだから堪ったものじゃない。

やっと周囲が落ち着いたのを理由にアルベドから離れられたと思えば、今度はモモンガと会う度に警戒し殺意を撒き散らすパンドラス・アクターだ。モモンガ自身は何も問題ないと本気で思っている様子だが、ウルベルトには全くそう思えなかった。それどころか、友達が呑気に地雷原で散歩しているのを見せられている気分だった。

挙句の果て、廊下ですれ違った時にウルベルトはパンドラス・アクターから警告されたのだ。

誰にも聞こえないように、暗殺者の刃物のように、するりと言葉をウルベルトの耳にパンドラス・アクターは送った。

「巫山戯た真似をしたら殺す。たとえば父上に恨まれようとも」と。今までの名前通りの張り上げた声は何だったのだと問いかけたくなる程の、全く笑えない冷ややかで静かな声だった。思わず振り向いたウルベルトの糾弾しようとした声はしかし、喧しい役者の声に掻き消される。

「おお、朝から偉大なるウルベルト様とすれ違えるとは、何たる幸福!!」

ウルベルトから離れ追従していたデミウルゴスと側仕えのメイドがくすくす笑って談笑を始めてしまえば、もう何も言えやしない。

「まだ『反抗期』を続けているのかい？パンドラズ・アクター、あまりアインズ様に御迷惑をかけるのは守護者としては如何なものかと思うがね」

「助言有難う御座います、デミウルゴス殿！それでは、私は父上の御尊顔を眺めに行きますので、Sch・nen Tag noch!」

肩をすくめるデミウルゴスと、苦笑するメイドから少し離れた場所で、独りウルベルトは冷や汗をかいていた。

それらの経緯を踏まえて何かをしなければいけないという葛藤が生まれても、その結果ある作戦を思いついても、ウルベルトにはなかなか踏ん切りがつかなかった。

作戦が想定通りにゆけば全て丸く収まるが、そんな確約は当然誰もしてくれない。

下手をしたら、再会したばかりの友を傷つけるだけで終了するかもしれない。更に言うなら最悪、ウルベルトが死ぬ可能性もある。そんな作戦を、自分の一存でも良いのだろうかという不安はどうしても拭えない。

躊躇し、今までのこと全てに對し見て見ぬ振りをするのが懸命なのではと、言い訳まで生まれてきてしまう。

その迷える背中を最後に一押ししたのが、ウルベルト自身が作り上げた悪魔のささやかなる懇願だった。

意を決した表情で現れた、モモンガ的な言い方であれば「自身の息子」に對し、今度は何事だと正直ウルベルトは初めはうんざりした。

しかもウルベルトが部屋で独り休みたいと伝えたのに、それを無視してまで現れたのだ。

丁度自身の行く先に頭を抱えていたウルベルトにとっては、ますます追い詰められたような気がして、不愉快だった。しかし、その嫌な感情はデミウルゴスからの懇願を聞いて霧散することになる。

その懇願は、今までに心中に積み上げた靄を吹き飛ばすのには充分

な、愛らしい願いだった。

今はアインズ・ウール・ゴウンを名乗るモモンガに、そして造物主であるウルベルトに共に忠誠を誓い捧げたいという、いじらしい必死な悪魔の願い。

「どうか、この身に余る願いを、聞き届けて頂きたいのです」

その決死の思いで伝えてきた願いを、デミウルゴスにさせたモモンガの伝えた想い。それを彼の口から聞いたことによって、ウルベルトはどうとう覚悟を決めた。

全てを捧げ守ってきた彼に報いるには、自分も全てを賭けるしかないのだと。

「デミウルゴス、勝負を仕掛けるぞ」

自身の真意と作戦を全て伝えたウルベルトは、自身の創り上げた悪魔が困惑し逡巡するのを感じ取る。

それも仕方ないことだろう。創った側として、この勝負が策士のデミウルゴスが嫌う賭け事タイプなのは、ウルベルトにも嫌というほどよく分かっている。周りのリアクション次第で成功も失敗も委ねられる、ウルベルトにとってもあまり好きではない、しかも一発勝負だ。

賭けた、負けた、また挑戦は決して出来ない。

「…私を創造してくださったウルベルト様と、私共と共にあってくださいましたモモンガ様のために、このデミウルゴス、全てを捧げます」

聡い悪魔のその答えに、ウルベルトは心からの謝辞を贈る。そうして、ナザリックの未来をベットした勝手な賭け事は始まったのだ。

第九階層にあるバーの扉には、「CLOSE」と流れる文体で描かれた文字がぶら下がっていた。

その扉を、現在自室で謹慎処分中のはずのウルベルトは堂々と開いた。それは招かれて来たから、という事実もあつてこそその振る舞い

だ。

薄暗いバーにいる存在は、三つ。

シェイカーを振るマスターは居ないものとして扱おうとして、カウンターに肩を並べるウルベルトを押し動かした切っ掛け二つに、彼は貼り付けた笑顔でにこやかに声を掛ける。

「やあ、アルベド、パンドラス・アクター。長くここを去って、不在にしていた罪は今回の件で許してくれるかな？」

ウルベルトに、顔のように配置された黒い三つの点と、端正な顔が向けられる。ただし美人は即刻顔を歪めた。この酒宴を称する腹の探り合いに招いたのは、某役者の方だ。アルベドはその知能をもって弾き出した結果から、仕方なく渋々とこの場にいるのだろう。

そのせいか、既に随分と飲んでいる様子だ。

「ふん、偉そうに」

「全くですー」

「おいおい、随分と冷たいな。ああ、マスター、ギムレットを」

頷くマスターはアルベドの前に完成させたカクテルを置くと、さっそくウルベルトの注文に取り掛かる。

置かれたワイングラスの中にあるグラデーシヨンになっている真紅を暫し眺め、アルベドはウルベルトを無視してこくりとカクテルを飲む。

「反抗期なのですよ、このパンドラス・アクターも、守護者統括殿も」

そう言うときくと彼もロックグラスを傾け琥珀色の液体を、顔面の配置から口と思われる部位から喉奥に流し込んでいた。それを横目で見ながらウルベルトは内心、それどうやって飲んでいるんだよと思っていたが、わざわざ尋ねはしなかった。

いまは尋ねるべきことも、聞くべきことも、他にある。

「しかし、ウルベルト様、このパンドラス・アクター、貴方様を見くびっております！…今回の件で、私も、渋々ながらも守護者統括殿も、貴方様を許すことに致しました」

自身の隣に腰掛けた至高の存在に、パンドラス・アクターは嘘偽りなく心よりの賞賛を送っていた。

至高の存在などという不和の元になりかねない、それも一度はアイ  
ンズ・ウール・ゴウンを去りモモンガの心に暗い陰を落とした者達な  
ど、パンドラズ・アクターにとって本来不要の存在だ。だからこそ、至  
高の存在の探索隊をアルベドから提案された時に喜んで飲んだのだ。  
当然その真意も全て汲み取ったうえでだ。

だがしかし、アインズ自身からの命令で肝心の探索隊は解体されて  
しまった。そうなってしまえば最早アルベドにもパンドラズ・アク  
ターにも、他の至高の存在に対して帰ってくるなど願うしかない。

しかし、ただ願うことに何の力も意味も無いことなど、常識だ。  
願っていても、至高の存在の御意志が帰還すると決めた時には、守護  
者達に為す術など有りはしないのだ。

「貴方様のおかげで守護者の皆様の忠誠がどれ程か、試すことができ  
ました。本当に有難う御座います、ウルベルト様」

パンドラズ・アクターは愉快そうにコップに入った氷の塊を転が  
す。いや実際に、パンドラズ・アクターは嬉しくて嬉しくて仕方がな  
かった。

ナザリック地下大墳墓の宝物殿守護者でしかない「パンドラズ・ア  
クター」では出来ない、至高の存在である「ウルベルト・アレイン・  
オードル」だからこそ出来たあの重い問いかけは、パンドラズ・アク  
ターが問い掛けたかったことだ。その答えまで確認できたあの結果  
は、パンドラズ・アクターにとって最高に満足ゆく結果だった。

「ナザリックの皆には苦しい選択をさせたな。まだ引きずって、思い  
詰めている奴もいるようだが…、これで良かったのか、パンドラズ・  
アクター」

「ええ、この結果は父上のためになる。とても素晴らしい戦果でした」  
淀み無く言い切るパンドラズ・アクターのその姿は、軍服がよく似  
合っている。そこに迷いも後悔も言い訳じみた何かも、何もない。あ  
るのはただ一つ、成果だけを求めるといふ断言だけだ。

「……貴方の発言で、アインズ様、いえモモンガ様が私の好意に対し真  
剣に考えてくださるようになったのよ」

唐突に隣の隣から聞こえてきたその独り言のような発言が、酔った

アルベドの必死の感謝の言葉だと気づき、ウルベルトは苦笑する。

「なに、俺もモモンガさんの友人として心配になっただけだ」

マスターがウルベルトの前にカクテルグラスを置く。その爽やかな香りを楽しんでから、一口含みウルベルトは嚙下した。

「自分は遠慮ばかりして我儘を言わない…、今回の件だってナザリツクを離れるなんて絶対に嫌だったはずだ。それなのに自分が貧乏くじを引けば丸く収まると判断したら、さっさと引退を決めた。モモンガさんらしいっちゃ、らしいんだけどな」

パンドラス・アクターがグラスを降ろし、その手の中で解けた氷が振動で揺れた。からんと揺らぐ音がする。

「父上は、とても慈悲深い方です」

その声にはパンドラス・アクターにとっての「唯一」に捧ぐ優しさと本音が、滲んで現れている。ウルベルトはデミウルゴスのことを想起し、やはりこの役者にとっての絶対の存在はこの世に唯一つなのだなと納得する。

「…俺以外のギルドメンバーが来てたら、あんまり面白くない展開になってたかもな」

「そうですね、貴方様が帰還されたのは、こちらにとっても幸運でした」

さすがに、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバー全員がモモンガと仲が良い訳ではない。それに何よりも、モモンガのしたことを聞いて、ただ聞き流せる者達ばかりではないだろう。

ウルベルトのようにモモンガ自身と仲が良く、人間に対し元々失望していた様な元人間が現れたことは、彼らにとって本当に都合が良いことだったのだ。

（どっかの正義厨が最初に現れていたら、冗談抜きでナザリツク内は崩壊していたかもしれないしな…）

折角の酒が台無しになることを思わず考えてしまったウルベルトは、杯を傾ける手をぴたりと止めた。不快な思い出を必死に忘れようとするその耳に、これまたぶっ飛んだ、それどころではなくなる思いがけない助け舟が隣の隣から飛んできた。



「…貴方、モモンガ様のごことが好きなの？」

その唐突な爆弾発言に、しんと空間が静まり返った。そして、ウルベルトが爆笑しパンドラズ・アクターも嘔き出した後にカウンターに沈み肩を振るわせる。

「ぶ、ははっ、こ、恋は盲目って言うけど、どんだけ必死なんだよ、アルベド！あー、笑すぎて腹が痛い！」

「いやいやいや！統括殿のぶっ飛び具合には負けてしまいます!!」

「なっ、何よ！私は恋のライバルには全員釘を差しておきたいのよ！正妃は絶対に私よ!!」

さすがにここまで遠慮なく笑われれば、アルコールに関係なくアルベドも真っ赤になってしまう。がたりと立ち上がり必死に叫ぶ姿は可愛らしくもあり、そのアホ毛と腰の妖しい黒い翼はパタパタと忙しく動いている。

「まあ、友達としてな。今度こそ、ずっと隣あって、馬鹿みたいに遊んでいたいと思うよ」

その発言で、腰を上げ興奮のまま翼を広げていたアルベドはようやく腰を降ろした。なによ私は愛に真剣なだけよと、ぶつぶつ言いながら、ワイングラスに残る液体をぐびりと飲む。その顔は変わらず赤い。

「それでは、我々はモモンガ様のためなら死ねる仲間ということで、絆を結びましょうか！」

グラスを持ち上げ、高らかにパンドラズ・アクターが言う。それにウルベルトは賛同しかねた。

「いや、死ぬのはちよつと…」

「何よ！友達でしょう！モモンガ様のために死になさいよ！」

「いや、重いわ。そんなんだからモモンガさん、若干引いてるんじゃないかな？」

「ええ!?なんですって!?この愛のせいで、伝わらないの…!?そんな、私は、どうしたら…!?ああ、モモンガしゃまあああ!!」

「統括殿は実はだいたい酔っておられるのではないのでしょうか？」

パンドラズ・アクターの冷静な指摘に、ウルベルトは堪らず嘔き出

した。当然酔っ払いは酔っ払いらしく、毛程も酔っていないと自己主張している。

「あー…、でも、ずっと感じてることはあるんだよな、たぶん…」

グラスを傾けアルコールで口の滑りを良くしてから、ウルベルトは断言する。

「俺、友達のモモンガさんが殺されたら、世界を地獄の業火で焼き尽くすわ」

冗談でも、酒のせいでの勢いでもないと言うのは伝わったらしい。いやそれどころか、アルベドもパンドラズ・アクターも何を当たり前のことを言っているのだという空気を出している。

「あら、奇遇ね、私もよ」

「私もです！」

総意を得られたと認識したパンドラズ・アクターが仕切り直す。

「では我々は、モモンガ様が殺され…は、不敬かつ縁起が悪いので、モモンガ様が世界に否定されたら焼き尽くす仲間、ということ！如何でしょうか！」

そういうことならと、グラスが三つ持ち上がる。繊細なグラスのためにつけ合うようなことはしなかったが、各々の中には硬質な音が確かに響かせ合っていた。

暫くして、ウルベルトは最初の一杯を飲み終わると立ち上がった。

「それじゃあ、俺はお先に。誰かに見つかる前に部屋に戻らないとな。その酔ったアルベドはお前に頼むわ」

「おお、なんと惨たらしい…！私めにこのような役目を押し付けなされるとは…！」

立ち上がりマントの皺を整えさつきと去ろうとするウルベルトに、まるでロミオに手を伸ばすジュリエットのようにパンドラズ・アクターが大袈裟に振る舞う。

「本当にいちいち仰々しいな…。ああ、そういえばさ、パンドラズ・アクター」

バーの扉に手を掛け、ウルベルトはちらりと相も変わらずな顔をし

ている、アルコールを呑んだ意味はあるのかと言いたくなるようなパンドラス・アクターに問いかけた。

「お前、俺を焚き付けたか？」

じつとその空虚な点に見詰められ、思わずウルベルトはぎくりとする。しかし返ってきたのは道化の返事だ。

「んー、何のことだか、さっぱり分かりかねます！」

「…そうかよ」

元々問い質す気は無かったウルベルトはあつさり諦め、扉を開けようとしていた手に力をいれる。

「ただ、私の名前の意味を、今一度御考えあそばせていただければ、と」

バーから出て行ったウルベルトが振り向けば、扉が閉まり切る前に、その向こうでお辞儀するパンドラス・アクターが見えた。

崇拜から象るお辞儀ではない、舞台役者のそれだ。観客に対し、ご来場有難う御座いましたと伝えるそれは、そつと閉まる扉向こうに消えていった。

カーテンコールも御免だと、ウルベルトは内心で毒吐き急ぎバーの扉に背を向けた。その視線の先には、忠義の見本を見せるかのように頭を下げたデミウルゴスがいた。

場所とウルベルトの抱える事情で、跪きはしていないがそれでもきつちりと頭を下げたままのデミウルゴスにウルベルトは頭を上げるように指示を出す。

「お話が問題なく終わったようで宜しかったです。しかし、今後はもう少し安全な策をとっていたらいただければと…、ウルベルト様？」

「んー、いや、モモンガさんも大変だなあと思ってたな」

少しくたびれた様子のウルベルトに、何か問題でもあったのかとデミウルゴスが心配そうにする。

「何でも無い、気にするな。それよりもデミウルゴス、俺は悪魔だと言っただろう」

にやりとウルベルトは笑い、歩き出す。それはウルベルトの自室と

は真逆の方向で、戸惑いながらもデミウルゴスは追従する。

「悪魔はやりたいことをやるだけだ。俺の願いを叶えるためなら、何だってしてやる」

「左様で御座いますか、それは、とても尽くしがいがあります」

「ははっ、そうだろう！さて、少し遊びに行こうか、デミウルゴス。謹慎は退屈だ」

ふるふるとデミウルゴスが首を横に振る。追従しているので、その動作は見られていない。ただ忠言を呈する自分に活を入れるための行為であった。

「ウルベルト様、謹慎中なのでですから、そろそろ御部屋に戻らないといけません。仮に街に出るとしても、護衛を規定数以上は付けないといけませんし…」

「悪魔が堅苦しいことを言うなって」

「……五分だけです」

「はいはい、十分な」

ウルベルトはデミウルゴスの指からギルドの指輪を抜き取ると、忠言に耳を貸さずに転移していった。そして更に、一度だけ訪れたエ・ランテルの王城にウルベルトは転移を重ねる。

誰も居ないエ・ランテルの玉座の間は闇夜に溶けている。まるでその闇から溶け出たように、ウルベルトは現れ、《不可視化》を自身にかけるとテラスに出た。

夜風は気持ちよく、謹慎中の悪魔の身に祝福のように注がれる。眼前に広がる賑やかな輝きに満ちるアインズ・ウール・ゴウン魔導国の夜景に、悪魔はにんまりと笑みを深くする。そこに満ちるのは、悪魔にとって不愉快な幸せそうな明るい声と輝き。だがしかし、その全てがアインズ・ウール・ゴウンを育むための栄養素なのだと思えば、悪魔としても酷く愛しく思えた。

ああ、なんて美しい国だろう。どうせ同じ檻の中で暮らすなら、灰色よりも黄金の檻が良いに決まってる。

ウルベルト・アレイン・オードルは、心よりの賞賛を魔導国に送っ

た。

主演：捧げる者達 8

カランと、今宵はもう開かれるはずのなかつた扉が開く。CLOS Eの文字がぶら下がる扉を開いた悪魔は、先程まで彼の造物主が座っていた席に腰掛ける。

「それで、今回は貴方の総取りですか、パンドラズ・アクター」

せつかくの貸し切りバーでつまらなそうにする悪魔に酒を勧めながら、パンドラズ・アクターはすつとぼける。

「さてはて、何のことやら。此度の一件は皆にとつて苦しく辛く、心に刺さる事件だつたではないですか」

「ウルベルト様にとんだ賭け事をさせて、自分はどう転んでも旨味のある道を進ませたこと、これ以上誤魔化さないで頂きましょうか」

叡智溢れる彼らしくない真つ直ぐな物言いに、パンドラズ・アクターは驚く。そして、それが真つ直ぐな問い掛けであるからこそ、これ以上惚けるのは厳しいことにも気が付き直ぐ様答えもしなかった。

これは逃げるが勝ちというやつかと、席を立とうとしたパンドラズ・アクターだったが、その腕を酔い潰れているはずの右側から掴まれ立ち上がるのを阻まれた。その身は、力強くぐつと席に縫い付けられる。

「そうよ、パンドラズ・アクター。腹を割って話し合ひましょう」

「おやおや…」

色々と酔っているだけかと思っていたアルベドが素面であると認識し、逃げるよりも折角の機会に腹を割って話す方が良いと判断した宝物殿の領域守護者は座り直す。大人しく、階層守護者と守護者統括に挟まれる形で。

「そうですね…、このような美女に誘われて断るのは無礼というもの」「マスター、この店で一番頑丈なショットグラスを三つ用意して、ウイスキーを。氷は無しで」

領き準備を始めるマスターは、黙したままだ。

この場のことに関わることも記憶に残すこともしないと、沈黙で彼は応えている。そもそも店は閉店中だ。誰も来店している訳が無いのだから、記憶にも記録にも残るわけがない。

「しかし今回の一件、アルベド殿にもデミウルゴス殿にも、旨味はありましたでしょうか？」

パンドラズ・アクターの指摘したそれは、確かな事実だ。デミウルゴスもすんなり認める。

「まあ、そうだね」

帰還したばかりのウルベルト・アレイン・オールドルには明確な立ち位置も実績も、根拠ある信頼関係も何も無い。それどころか、一度はこのアインズ・ウール・ゴウンから去った存在として認識されている。

だがしかし、今回の一件は良くも悪くもウルベルトの今までを全て粉碎してくれた。

そして茶番だったとは言え罰を与えると言った支配者としてのアインズに、ウルベルト自ら『ナザリックからの永久追放も、死刑判決も受ける』と言ったことが決定打となり、確たる立ち位置が出来上がった。

ウルベルト・アレイン・オールドルは、ナザリックの全員、そしてモモンガの絶対的な味方であるのだと。

ウルベルト自身が泥を被ってまで目を背けたくなくなる問題を突き付けてくれたことによって、根拠ある信頼も生まれた。可能性として残った避けられない問題の提示は、不愉快ではあるが嘘偽り無い味方だからこそ出来ることだ。

確かに、間違いなく、パンドラズ・アクターの指摘するそれは事実だ。だが、その裏側にいる役者の真意と彼が得たメリットを、より明確にしておきたかった悪魔は言葉を重ねる。

「素直に話してほしい。何を願っている？」

なみなみと液体が注がれたショットグラスが、器用に一滴も零されずマスターの手、正確には触手で、それぞれの前に置かれる。

「父上の幸せが未来永劫続くこと、それだけを」

その返答に対し舌打ちしそうな悪魔の様子に、内心ドツペルゲン

ガーはひっそり笑う。嘲りではなく、その絶対なる忠義に対する好意的な意味で。

「…しかしこれは、貴方様が望む答えではありませんね。それでは、素直に言いましょう」

パンドラス・アクターにとつて一番大事なことは生みの親であるモモンガが未来永劫の安寧を迎えること、ただそれだけだ。だから、そのためなら何だって殺せる。何だって壊せるし、奪える。

ただそれに実力と手が足りるかと問われれば、甚だ疑問だ。万が一大多数を相手取ることになった時を考えると、現実的には厳しいとも言える。

「もしも剣を交える時、相手と互角の場合、そして万が一相手の数が多いう時、その者共が戦闘中に悩み戸惑い、手を僅かな時でも止めてくれれば、有難いと思いませんか？」

「…そうだね。こちらと違い、相手が覚悟を決めきれていないのなら、それは有り難いことだ」

パンドラス・アクターの得たメリットを聞き、納得したといった風に悪魔はやつと追求を止めた。

「パンドラス・アクター…、君は、アインズ様のためなら誰だろうと殺せるのか？」

「当然です。デミウルゴス殿は、出来ないのでしょうか？」

「…見くびらないでほしいな。此度の一件でとうに覚悟は出来たよ」  
たとえそれが『至高の存在』と呼ばれる存在でも、『守護者』と呼ばれる存在でも、誰でも殺してみせるといふ覚悟。

それを静かにデミウルゴスとパンドラス・アクターは確かめ合う。  
守護者達の心に育まれた忠誠と親愛、それらを利用してでも殺してみせるといふ冷酷な決意は、深すぎる愛が齎したものだ。

「…デミウルゴス殿とは仲良くやっついていけるかと。父上はウルベルト様と本当に楽しそうに遊んでいらっしやる。あれは壊したくありません」

「…確かに、仲良く出来そうですね。私もウルベルト様とモモンガ様が仲良くなさっていて幸せそうにされていることは、何にも代えが



たい喜びですから」

睨み合っていた悪魔とドツペルゲンガーはグラスを手に取り、そのグラスを壊さんばかりの勢いでぶつける。乾杯と言うにはあんまりなそれによって、キインと硬い音が響いた。

跳ねた液体は互いのグラスに注がれ、混ざり合う。そしてそれを一気に、彼らは飲み干した。

悪魔は獰猛に笑い、表情が変わらないドツペルゲンガーも歪に笑ったような雰囲気漂わせる。

「ところで、アルベドは？」

悪魔の問いかけに、独りつまらなさそうにしていたサキュバスは拗ねたようにそっぽを向く。

「私は、モモンガ様以外どうでも良いわ。だからモモンガ様の味方のパンドラズ・アクターはともかく、デミウルゴス貴方とは…」

全部が全部、茶番だったとは言えモモンガの反逆者側に立った者としてデミウルゴスのことをアルベドは未だ許せない様子だ。一応、モモンガ仲裁のもとアルベドとデミウルゴスの和解は成されている。だが、それで気持ちまですつきりしたかと言われれば、当然それはNOだ。

ふむと悪魔は考え込み、提案する。

「…モモンガ様と御尊名を元に戻すことと、アルベドの恋愛支援を行うようにウルベルト様に提案させて頂きます。名に関しては確実に通る提案でしょう。ウルベルト様はモモンガ様と呼ぶのを改める気は無い御様子ですから」

「私達、とっても仲良くなれそうね！」

先程まで漂わせていた澱んだ雰囲気は吹き飛ばし、にこやかにアルベドはデミウルゴスへと顔を向けた。

「私は元より仲良しのつもりですよ」

「私もです！」

マスターに再度なみなみとウイスキーを注いでもらったデミウルゴスとパンドラズ・アクターはグラスを掲げる。アルベドも嬉々としてグラスを掲げ、そして、再度グラスは悲鳴のような音を響かせた。

酒は踊り狂うように跳ねて、互いのグラスに飛び込み、混ざり合う。  
そのグラスの酒は、三杯共に一滴残らず飲み干された。

# On Your Mark Ol

アインズ・ウール・ゴウン魔導国属国、バハルス帝国領土内にて、背の低い太っちょ男の良く通る声が、早朝の澄んだ空気に響きわたった。

「コキュートス城方面行きー！間もなく出発ー！」

叫ぶ男の隣には、大人しく出発の時を待つアンデッドの馬に繋がれた幌馬車があった。

それは、魔導国とその属国や友好国も含む各国内の大型都市部を繋ぐ、魔導国営の自動循環馬車である。そして、その国営馬車の出発時刻を告げたり、運賃と停留所の管理を任されている叫ぶ彼は、馬車停留所管理係員だ。略されて係員さんと、馬車の利用者からは親しげに呼ばれている。

その馬車の白く頑丈な幌は縦長の半円状に客席部分を覆っており、外側左右には、小さな木箱と旗が括り付けられている。箱には掠れた文字で緊急時用と赤く書いてあり、旗には、どこから来てどこに向かう馬車なのか都市の紋章で描かれていた。

出発前の馬車に乗車しているのは、親子やひとり旅の老人、それから出稼ぎから故郷に帰る者達だ。向かい合う形で並んだ席に固定された、少し草臥れたクツシヨンに、思い思いに彼らは座っていた。

簡素な幌馬車とは言え、庶民にとっては有り難い値段で運行している国営自動循環馬車は人気がある。そのため早朝発の馬車だが、席は既に埋まりつつあった。

「間もなく、しゅっぱーっ!!」

静かな空気に、明朗に掛け声が振動する。

そして、その大声に応えるが如く、慌ただしく駆ける足音が遠くに現れた。石畳を乱暴に蹴り飛ばすその音はどんどん大きくなり、馬車へと近づいて来る。

「すみません！乗ります!!」

遠目からでもヒトではないと分かる、二足歩行で体格の良い昆虫の様な姿。しかし、属国とは言え魔導国の庇護下で生きる民がそんな姿如きに怯む訳もなく、じとりと非難の目で係員は彼を睨めつけるだけだ。

「駆け込み乗車はご遠慮くださいーい！」

「はい、すみません！」

叱られ、謝りながらも運賃を駅員に投げ渡し、息を切らしながら彼は、馬車に乗り込んだ。

そしてその異形種、たっち・みーは、以前自分が居た世界を思い出すようなやり取りに懐かしさを覚え、少しばかり口角を上げる。

そんなたっちの後ろから、係員は馬車を覗き込む。幌馬車の中に無賃乗車犯が居ないかチェックし、懐から出した支給品の時刻表用の懐中時計を見て、係員は満足げに頷いた。

「ゴキュートス城行きー！ 発車しまーす！ 危険ですので、馬車には近付かないよーに！」

係員は再度、馬車が動き出すのと同時に腹の底からよく響く声を絞り出した。

まるでその声に押し出されるように、命令通りに動くアンデッドによって、幌馬車は定刻通り問題なく進み始めた。

動き出した馬車の後部、風雨と日光に晒されるので他の席より人氣が無く空いていた席に腰掛け、たっちは乱れた息を整える。そして、暫く暮らしていた帝国の風景を暫し眺めた後に、軽く彼は頭を下げた。

帝国での暮らしにおいて大変お世話になった老夫婦と、商人に向けて。

ふと少し前に老夫婦と済ませた、感動的ではなく笑い話のようなお別れを思い出し、たっちは苦笑する。

これが最後だからと、ついつい夜遅くまで語り明かしてしまったせいで寝坊してしまい、寝起きから早々に文字通り必死の全力疾走をするはめになったのだ。当然、最後の挨拶をゆっくりしている暇など無く、慌ただしく済ませてしまっている。それは少し申し訳ないと思う

が、しかしそれでも、これから会う予定の相手を考えると、様々な意味でたつちは遅刻をしたくなかったのだ。

暫くして呼吸もようやく落ち着き、たつちは汗を拭った。そして次に、あくびを噛み殺す。

(それにしてもコキユートス城か…。ネーミングがそのまんま過ぎないかな。まあ、今はあの面子しかナザリックに居ないなら、マシな名前に落ち着いたと思うべきか…)

そんな取り留めのない、若干失礼なことを考えながら、彼は自身の影を見つめる。

その中に潜む影の悪魔が、死の支配者と世界の災厄からの言葉を伝えてきたのは五日前のこと。

そろそろ会ってお話しませんか、なんて、アンデッドと悪魔からのメッセージにしては可愛らしい言葉。それを断る理由も上手く見つけられず、たつちは唯、その誘いに頷いたのだ。

(……答えを出さなきゃいけないか)

自分が一体どこに立つべきなのか、その答えを。玉座の間に居る彼らは、たつちの出す答えを首を長くして待っているのだから。

朝ぼらけ、目覚めの時。馬車は決められた通りに進み行く。それに揺られながら、彼は刻々と向かってゆく。

スタート地点へと。

ガラゴロ、ガラゴロ。

小さな幌馬車は陽光に照らされながら、石畳の上をのんびり走っていた。

気持ちの良い晴天、退屈なぐらい延々と続くだけの森林、爽やかな香りを運ぶそよ風。遠くの方に、この辺りに昔から住むという蜥蜴のような亜人の村が視界に入ったり、その亜人達から手を振られたり、道中の盛り上がり、に精々該当する。穏やかで退屈な、幌馬車の旅。

「ねえねえ！もう少しかな！」

「ええ、そうね。そろそろ到着するんじゃないかしら。だからほら、大人しく座ってなさいな」

元気なその声に答えつつ、母親はその太い腕で子供を自身の膝に座らせ、縫い止めた。腕白そうな子は、大変不満そうに足を揺らしている。放っておいたら何処までも駆けて行ってしまうような程に元気が有り余っている様子で、露骨につまらなそうにして口を尖らせていた。

その穏やかで豊かな、微笑ましいとされる光景を、たっちはそっと見守っていた。

その子が大人しくなり、また静かになった馬車内で、まずはその子自身が船を漕ぎだした。うららかで暖かな空気に、つられて皆がうつらうつらと夢へと迷い込んでいく。

同じく眠ってしまいそうになるたっちの影から、それに潜む悪魔がそつと合図を送ってきた。それにハツとして飛び起き、慌ててたっちは走行中の馬車から飛び降りる。

「え!?ちよつ、ちよつと何やってんだい!？」

「お兄ちゃんが落ちた!」

「平気です!わざと飛び降りましたから、気にしないで!」

無事をアピールして手を振るたっちに、乗客達は皆ぼかんとするばかりだ。そんな彼らは、命令された通りに走り続けるアンデッドの馬車によって運ばれて行き、どんどん小さくなっていく。

「コキユートス城も近いから、散歩してから行こうと思つて!」

子供がにこにこ手を振り返し、隣にいた巫人にビツクリしたねと、話し掛ける。巫人も獣の顔を綻ばせ返事して、楽しそうに、種族など関係なく話し始めた。

それをたっちは、じつと眺めていた。

その優しい光景を齎した骨の王と、彼は間も無く対談予定だ。未だに迷うたっちにとって、ほんの些細なことでも、判断材料になり得る情報が欲しかったのだ。

暫くして、先に進み左へと緩かに曲がって行ったことで馬車は完全に見えなくなる。その消えた方向には、蒼白の美しく細長い塔のような城が森林から突き抜けてそびえ立つのが見えていた。

「迎えに来ましたよ、たっちさん」

空から降ってきた声のした方へ、名を呼ばれた彼は顔を向ける。最初は何も見えなかったが、おそらく魔法を解除したのであろう悪魔は唐突にその姿を現した。

だがしかし、現れたのは見知らぬ存在で、たっちは戸惑ってしまう。

「…何ですか、その姿？」

「見ての通り執事ですよ。一応表向きの役職は、『アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下の執事』ってことになってますので」

長い銀糸を少し乱れたオールバックで流し、切れ長な金の瞳を持つ人間が無愛想に答える。

見た目だけなら全くの見知らぬ赤の他人なのだが、その声と露骨な嫌悪の滲む雰囲気は確かに、たっちの良く知るウルベルト・アレイン・オードルだった。

「あつ、そうだった。《飛行》」

飛行魔法をかけられ空に浮いたたっちは、訳が分からないままウルベルトに続き空に浮かび上がる。そして続けて周りの景色をよく見しておくように指示を受け、首を傾げながら辺りを見渡した。

とは言え、辺りで特徴的なものは瓢箪型の池ぐらいなものだ。周りには後は、ひたすらに木しかない。

「はい、見終わりましたね。《転移門》」

開いた門にさっさと入って行くウルベルトに対して何なんだと思いながら、たっちもその後が続こうとする。

まるで獲物を喰らおうとするかのように開かれた穴の様な門に、一瞬だけ躊躇した後、たっちはその闇へその身をとぷりと浸した。

そうして転移した先には、静かな青の空間が広がっていた。

ターコイズブルーとホワイト、紺が僅かに混ざるタイル画が、渦を巻いて咲いて花火のように散る様を描いている。そのタイル画は床と少しばかり壁を埋め尽くしており、タイル画の上に広がる壁は白の土壁だ。

それらが長閑な日光を浴びて反射し煌めく様は、まるで海の底に招

かれた様な気分させる。白く薄い、僅かにレースを施されたカーテンがはたはたとひらめいている様も、まるで波に揺蕩うかのようだ。

「綺麗ですね…」

「この世界はカラフルで良いですよね、そればかりは、たっちさんに同意ですよ」

「…、本当に、驚くことばかりです。空の青さも、何もかも」

室内を見渡すと、たっちは緊張を忘れ爽やかな気分になれた。

部屋の調度品も、これまた水や氷、海を想起させるような繊細な硝子製と濃紺の陶器製ばかりが置かれている。しかし中には、まるで海底で家具が浮かばないようにしているかのような、太い足の見るからに重そうな机もあった。ダイナミックなそれは、碧い巨大な鉱石をくり抜き作られており、全体がエメラルドグリーンに鈍く輝いている。その豪快な家具の隣にはしかし、添えられたかのように儂い硝子製の椅子が置かれていた。

そんな少しちぐはぐな所が、部屋全体を絵本の中のような不思議さを感じさせる空間にしていた。

「たっちさん、ほら、あそこにさつき外で見た瓢箪型の池があるでしょう。ああ、テラスには出ないでくださいね」

ウルベルトに話しかけられ、たっちは彼が指し示す外を伺う。確かに、そこには見覚えのある特徴的な形をした池があるのが視認できた。

そしてたっちが視線を戻すと、先程まで執事服の人間が居た場所には、彼が良く知っている姿の悪魔が立っていた。

「逃げたくなくなったらお好きにどうぞ、ここはたっちさんの見知らぬ土地ではないって意味ですよ」

先程までの行動の意味がやっと分かり、たっちはウルベルトの雑さに少し呆れる。その雑さから、その気遣いはウルベルトの考えや配慮ではなく、もう片方のギルドマスターの彼が考え慮ったことだと、たっちに良く伝わった。

「それじゃあ、俺とモモンガさんは隣の部屋で待ってますから、準備や話し合いが終わったら来てください」



準備や話し合いとは一体何のことだと首を傾げるたつちの口から問う言葉が出る前に、その答えは自ら現れた。ノック音がして、ウルベルトが許可を出して開かれた、その扉から。

「失礼致します」

現れたのは、その白銀の髪と老齡さを感じさせる見た目には不釣り合いな、がっしりした体格を黒衣で包む執事、セバス・チャンだ。

そして後ろに控えるメイド達がワゴンに乗せ持って来たのは、嘗てたつちがギルドマスターに預けた、世界最強の証明でもある、懐かしい鎧。

その鎧は、たつちの思い出の中と同じ煌めきと存在感を未だ放っていた。預けた相手がそれをぞんざいに扱わなかったのだと、無言のまま雄弁にその身で物語っている。曇り一つすらなく、どこか誇らしげに、相応しき誰かが自身を身に纏う瞬間を待ち侘びているかのようだ。

「……………」

「……………」

掛ける言葉を見つけられなかったたつちと、何も言えなかった執事は黙り込む。

目を離せば相手が消えてしまうかのようにセバスは造物主を見詰め、そして我に返り、その片膝を床に付けた。胸に手を当て、ゆっくりと頭を垂れ、重みのある静かな喜びの滲ませた声を、生み出された存在は絞り出す。

心よりの祈りと、敬愛と喜びを込めて。

「…今生で再度、たつち・みー様にお会い出来たことを心より感謝致します。御健在のようで…、誠に、何よりで御座いました…」

「…………セバス、」

その泣き出しそうな震える声に戸惑いつつ、何か声を掛けねばと焦るたつちよりも早く、軽い調子の声が響いた。

「何日でも待ちますから、こちらのことは気にしないで、気が済むまでどうぞ」

そう言うのと背を向け、セバス達が入って来たのとは別の赤銅色の扉

から、さっさとウルベルトは出て行ってしまった。その出て行った扉を見詰め、そして、自身が生んだNPCだったセバスを見、最後に己の鎧をたっちは見た。

此処にある全てを使い、何に備え、何の準備をするのか。それは全て、たっちに委ねられていた。

懐かしい白銀の鎧に、柔く微笑むメイド達と硬い顔した執事に手伝われながら、たっちは着替え終えた。

着替えの手伝いなど恥ずかしいと、たっちは初めは断わろうとした。だが、可愛い顔立ちをしたメイド達に悲哀に満ちた顔をされ、結局受け入れざるを得なかったのだ。

根負けして頼んだ瞬間に、晴れやかな笑顔になった彼女達は実は結構したたかなのではと、たっちは内心思いつつ、無心で着替えを手伝ってもらった。

ゲームと違い装備メニューをワンタッチで済む楽しさは、さすがにない。

だが、ただ鉄から作られただけの鎧と違い、ユグドラシル製のワールドチャンピオン専用装備だけあって、その装着は実に簡単なものだった。

鎧は、たっちの手足、胴体、頭、それらに合わせ変形し、留め具は勝手に繋がりが合う。その締め付けも、装備者の身体に合わせ、機動力と防御力、共に決して損なうことのないように自動的に調整された。

その機能とメイド達の手伝いもあつたため、装着はほんの一瞬で終わる。

最後に兜を被り、瞑っていた視界を開き用意された姿見を見れば、そこには、とても思い出深い、誇らしい姿が写っていた。嫉妬も称賛も憎悪も尊敬も呆れも怒りも、ありとあらゆる熱情を受けてきた、輝かしいワールドチャンピオンの雄姿が。

「ああ…、懐かしいな…」

ふつつつと血が沸き上がるのを、たっちは確かに感じ取っていた。静かな興奮が、じわじわと足元から競り上がり、襲ってくるような感

覚を。

そんなたっちの脳裏に浮かんだのは、行きしなに見た腕白な子供。その子に、今更たっちは同情した。静かにしているとは、大人しくしているとは、何と酷なことを母親は言うのだろうか。

「……！」

抑えるのが難しい程のエネルギーが身の内で発散場所を探し、のたくりまわっているように、腹奥が熱かった。

駆け抜けて、斬り伏せて、武勇を示せと何かがガンガンと思考の奥から叩きつけてくる。その幻聴は、凶暴なる囚人が檻を叩き喚く音に非常に似ていた。

「たっち・みー様、帯刀も許されておりますが、如何されますか？」

「……いや…、それは、まだ預かっていてくれ」

「畏まりました」

執事から恭しく差し出された剣を受け取ることを、必死の思いでたっちは断った。それを握ってしまったら、ずっとずっと大人しくしていた何かが、牙を隠すのを止めて駆け出してしまうそうだった。

未だ自身の立ち位置も、あり方も決めかねる身で、それはいけないことだ。深く呼吸をして、必死にたっちは自身を諫めた。

鎧の装着手伝いを終えたメイド達はセバスと二言三言交わしてから、その小さな頭を下げて至高の方への挨拶を済ませると退室していった。若干不満そうにしつつも大人しくそうするのは、予め段取りでそう決まっていたのだろうと、メイド達を見送り室内に残るセバスを見てたっちは推測する。

何もかも、誰かさんの段取り通り、という訳だ。

「そう言えば……」

懐かしい鎧の感触をじっくり味わいつつ、あの、マントをはためかせる機能はどうなったのだろうか、たっちはふと思う。それと同時に、説明できぬ感覚でそれが使用可能だと分かった。やってみたい誘惑に駆られるが、さすがにたっちは自重した。

「たっち様、如何なさいましたか？」

「いや、何でもない。久々に装着したから、色々と確認していただけ

だ」

「何か問題は御座いましたか？」

尋ねる執事に、たつちは何も問題ないと伝える。それは気遣いではなく、本当のことだ。懐かしさを伴う喜びはあっても、違和感や不快感などは何も無かった。

「それは宜しゅう御座いました。それでは、こちらにどうぞ御掛けなさってください」

「ああ、ありがとう、セバス」

セバスが引いた椅子に近づき、たつちは腰掛ける。そしてその隣的一步下がった所で、執事は深々と頭を下げた。そのまま不動の姿勢を貫かんとする自身が作成したNPCに、頭を上げ、腰掛けることをたつちは促す。

薄っすらと想定していた通り、頭は上げて腰掛けることはなく、執事として彼は真っ直ぐに立ち続けることを選んだ。

相手は立っていて自分だけ腰掛ける状態に違和感を抱きつつ、しかし掛ける言葉も何が妥当で正解か分からなかったので、諦めてたつちは自分に都合よく話を進めることにした。

「セバス、モモンガさんとウルベルトさんを傍で見えてきたお前の意見が聞きたい」

「意見…、で御座いますか」

「僅かな間だがこの国で暮らして、まるで…、いや、正に理想郷のようだと思った。この世界を、今のように変えたのはモモンガさん達なのか？」

「左様で御座います。モモンガ様は大変慈悲深い方、我らナザリツクの者達以外にも情けを掛けられます。ウルベルト様は…、失礼ながら多少悪趣味と言えますが…、あくまで自業自得の罪人や、敵対者などにしか残虐な行為は行われません」

たつちの予想が当たっていたと知り、そして戸惑う。ならば問題は無いなど、片付けようとした自分自身にだ。

それは、ウルベルトと再会したあの夜、冷たい石畳に転がっていた死体を見つめ、悪魔から「まだ人なのか」と問われた時と同じ感覚

だ。

今、たつち自身の心は、ナザリツクの者達から苦しめられている者達に対して、実際は何も感じてなどいない。

その思考にあるのは、誰かが困っていたら助けるのは当たり前という、捨てたくない自身の誇りと意志。そして、記憶にある正しく善良な人間の判断方法、唯それだけだ。

可哀想だとか、怒りだとか、特別な感情がわざわざ湧き上がることはない。

あの死体も、突然目の前で自分の知己が人殺しをしたから驚いただけで、死刑囚だと言われ冷静になった頭で見た時に思考したのは、ただ死体が転がっているという事実の確認だけ。

憐憫の欠片さえ、湧き出なかつた。

しかしそれが間違っていることは、人間だった時の記憶が指摘してくる。違うだろうと、五月蠅く喚き立てるのだ。しかし、では一体何が違い、誤っているのかと聞き返せば、それは黙り込むのだから、なんとも勝手なものだった。

「…自業自得の罪人相手なら、何をしても問題ないと思うか？」

自分が答えを探し、そして見つけ出せなかつた問を、従順なる執事に押し付けるのは意地が悪いと、口に出してしまつてからたつちは気付く。しかし問われた相手は、真剣に考えて、意見を出してくれた。

「…答えにはなりません、罪無き存在が理不尽な暴力を振るわれるよりかは、真つ当なことかと思えます」

「罪無き存在が…。確かに、その通りだな…」

たつちは、かつて居た世界のとある光景を思い出し、俯く。

冤罪や陰謀の被害者となつた者達、大切な人を奪われた者達が列を成し、恨み辛みを吐き出す光景。それを、たつちは真正面から何度も見てきた。

そして、流れ作業の様に、彼らは皆地獄へと送られた。それは、治安を良くするための正義だと言われていたが、全くもつて真つ当なことには思えなかつた。

「はい、嘗て私が愛したツアレという女性がいましたが、彼女は、」

「すまない、セバス、ストップ。…今なんて言った？」

しれっと出てきた驚愕のパワーワードに、今までの思考が全て吹っ飛んだたっちは待ったをかける。

傲慢にはならないし当の本人には絶対に伝えられないが、たっちはセバスの設定を仲間達に比べそこまで作り込んでいない。そのシンブルな見た目から伝わる通り、そのままなのだ。

ギャップ萌えとやらを入れたり、古今東西のエロゲキャラの設定を注ぎ込んだりなどもしていない。性格設定だって、凝り性でこだわりの強かった仲間達に比べれば薄い設定なのは、たっちも自認している。

だから、たっちの知る限り間違いなく、設定上セバスには、嘗て愛した女性なんて居ないはずだ。

「…私が愛したツアレという女性がいましたが、と申し上げました」  
繰り返された言葉の意味を、たっちは噛み締める。少なくとも聞き間違い、言い間違いではないのだと。

それはつまり、この世界に来てから出会い、セバス自身の意思で関わり、更には恋愛関係にまで発展した女性がいると言うこと。なかなか驚愕の事実だ。

NPCのセバス・チャンの生みの親としても、かつては子供までもうけた一人の男としても、とても気になる話だった。

(まさか、セバスが…!!お相手は竜なのか？異形種？人間か？子供は居るのか？…過去形なのは、死んでしまったのか…?)

急に黙り込み、じつと見詰めてくるだけの至高なる存在であり生みの親であるたっちに、セバスは困惑する。そして戸惑いながらも、恐る恐ると尋ねた。

「たっち様、私めは何か、おかしなことを申したでしょうか？それとも何か無礼を…」

「いやいや、そんなことは無い。それよりもだな、」

たっちは早々に、色々諦めた。どうせ答えが出ないのだしと、投げ遣りな言い訳を心の中で済ませ、そして居住まいを正す。

「そのツアレさんとセバスの話を、馴れ初めから、初めて会った時か

ら、じっくり詳しく聞こうか」  
ひとまずそれを聞かないとすつきりしないことだけは、たつちに  
とって間違いなく事実だった。

美しき五芒星を象る城郭内、夜の帳がすっかり下り、魔法の永続光を僅かに残して皆が寝静まる頃。

とある巫人が都市の中心に高々と立つ、塔のように細長い城の最上を指し示し、珍しくまだ明るいなど指摘した。仲間同士で、魔導王陛下が来訪されているのだろうか、あり得ないだろうなどと舌足らずに噂し合う。その酔った巫人達の中心、歓迎会の主賓が、昼間の馬車のことをふと思い出して仲間になんとなく話し出した。

風変わりで見えたことのない種族の者だったが、ちゃんと城下町に辿り着いてると良いなどと語る優しい彼に、同じく優しい友は、きつと大丈夫だろうと返した。

つい先程、その友が指し示した光の下にその相手が居るなんて、思いつく訳もない彼らは千鳥足で帰路を行く。

ゆつくりと息を吐き出し、たち・みーはドアノブを握る。

悪魔が出て行った赤銅色の重厚な扉の、純金製のドアノブ。手入れが行き届いていると伝わるその見目から分かる通り、それは何の問題もなく動く。しかし、それを握り動かすたちの方が未だ明瞭な答えを出せておらず、迷いが残っている有様だった。

「たち・みー様、今宵はもう御休みになられませんか」

一旦ドアノブを握る手から力を抜き、声を掛けてきたセバス・チャンに、たちは顔を向ける。彼は申し訳なさそうな表情で、造物主の顔を伺っていた。

「私事ばかり話しただけですの、他にも何か御尋ねになられたいことが、あるのではないのでしょうか？」

かつてセバスが愛した女性について色々と聞き出したのは、たち自らが希望したことだ。それなのに、自分が余計なお喋りを長々とし



て時間を浪費させてしまったと自責する様子の執事には、たっちは苦笑するしかない。

「ウルベルト様が仰せの通り、私もモモンガ様より、たっち・みー様が納得されるまで話をするようにと言付かっております。寝所の準備も御座いますので、無理に急いで進められなくとも、何も問題は御座いません」

「…そうか、」

やはり自分は氣遣われているのかと、たっちは心中で言葉が続ける。

その痛く悲しい程の氣遣いは、居心地の悪さを感じるほどだ。

装備一式をわざわざ準備し、NPCのセバスと話し合う時間まで与え、こちらの氣が済むまで幾らでも待つというのは、彼らしいとも言えるかもしれないが。

今後、互いにとって相手の立ち位置がどのようになるのかも分からないうちから、あのギルド長は、たっちを案じてくれたのだ。

胸の中が温かくなる反面、しかしそれは優しさか、何かを目論んでのことではないだろうかと思ひ疑念も起こる。長い時が齎したであろう変化はきつとあるはずだと、懸念してしまうのだ。

たっちの知る彼が、そこに居るのか分からない今は、どうしても警戒心が自然と現れてしまう。そんなものを友相手に抱くなど、たっ치가望んでいなくてもだ。

「セバス、氣遣ってくれてありがとう。だけど、もう会おうと思う。…これ以上、分からないままにいるのも、辛いだけだ」

一刻でも早く、互いのためにも会わなければいけないのだと、たっちは確信していた。そして再度、ドアを、その向こう側を見詰める。そこに君臨する存在が、果たして嘗ての友なのか、それとも友の姿をした成れの果ての何かなのか。その答え合わせが間もなく行なわれようとしていた。

「…畏まりました」

背後からの了承の声を聞き、たっちが力を入れると、ドアノブは当然だが動き出した。扉は音も無く、滑らかに開く。

僅かに空いた隙間から、懐かしい声が聞こえ、たっちはいきなり立ち止まってしまう。

「それで、そこに図書館を作って、本を一旦集めるんです」

立ち聞きになってしまおうが、そんなことに気遣える余裕など瞬時に掻き消えていた。

モモンガのその声に続き、ウルベルトの声も聞こえてくる。

「全部ナザリック送りにしてたらパンクするし、良い案ですね。いつそのこと学校とかも併設して与える知識の一括管理場所、としたいところですが…、うーん…」

「書籍の検閲だけでも一苦労ですからね。ユリも頑張って専門用語とかが無いならアイテム無しでも読解できるぐらいにはなったけど、図書館管理だけで精一杯じゃないかな…」

本当の本当に、彼らは為政者として国々を支配しているのだなど、その会話からたっちはやっと、モモンガとウルベルトが頂点に立つ存在なのだ実感できた。この国の舵が彼らの手の内にあるという事実には、たっちはまた緊張と、そして確かに熱を感じる。

導くにも救うにも、何を成すにも必要だった確かな力、権力。それが、手を伸ばせば掴める間近にある事実が、たっちを密かにざわつかせた。

「そうですねえ…」

これ以上立ち聞きしている訳にもいかないと、我に返りたっちは手を動かす。ドアノブを更に押して、支配者達の居る部屋に一步、彼は踏み込んだ。

「それに、図書館の中庭には超巨大なアインズ・ウール・ゴウン像も建てなきゃいけませんし」

「建てませんよ。日当たりが悪くなる」

「いや、そこですか」

ついツツコんでしまいがら、たっちはモモンガとウルベルトが腰掛ける肘掛けと背もたれのついた長椅子に向かい歩を進めた。長椅子はたっちに背を向けているが、その後ろで控える守護者達を見れば、そこに誰が腰掛けているかなど一目瞭然だった。

そうして歩みながら、まず最初にたつちが視線を交えたのは、こちらを横目で伺うデミウルゴスとパンドラズ・アクターだ。その警戒心が宿る視線と絡み合いながらも、たつちは、魔導王と自称その執事の正面側へと周り込んだ。

先程の部屋がお伽噺の世界のようだと評するなら、モモンガとウルベルト、そしてたつちが集まっている部屋は、正に貴族の来賓室のようだった。

部屋全体は天井から床まで真っ白で染み一つなく、床には毛の短い敷物が穴のように黒く広がっている。そこまではシンプルで寂しいぐらいなのだが、置かれた調度品達が揃いも揃って豪華で大きく圧倒的な存在感を放っているの、結果的には少し煩いぐらいの部屋になっていた。

モモンガとウルベルトが腰掛けるのも、部品の切り出し段階で何か間違えたのではと思える程、人間の大人五人は余裕で腰掛けられる大きさだ。

長椅子の猫脚は、文字通り獣が後ろ足で立つ姿の彫像がその役割を担っている。派手で豪快だが、背もたれなど細部には透かし彫の細工が施され、また薄浅葱の布地には深藍で細かく紋様が描かれていた。

正に力ある者のため作られた、技術と財の結晶とも言える一品だ。しかし、そこにゆつたりと腰掛ける死の支配者と大災厄の悪魔、そして、それぞれの後ろに控える千変万化の顔無しと炎獄の造物主と共に見れば、それは極当たり前の、ありきたりでつまらない家具にしか見えない。

その豪勢さも、絶対の王に僅かでも華を添えるための健気な努力にしか思えなかった。

「…お待たせしました」

たつちの声掛けに、ウルベルトが手にしていた羊皮紙を机上に置き、顔を上に向ける。

「思ったより早かったですね、たつちさん。それじゃあ、…モモンガさん？」

ウルベルトと同じく、たつちもモモンガの反応に戸惑っていた。

骨の顔だが、それでも分かる程に、ぽかんといい擬音が似合いそうな表情でモモンガはたつちのことを見詰めていた。まるで、その来訪を知らなかったように。

「えっと、モモンガさん…?」

思わずたつちは手を伸ばしたが、それよりも早くモモンガの後ろから、細長過ぎる人のそれではない指が、にゅっと現れた。

そのパンドラズ・アクターの手が、振り子のようにモモンガの眼前で揺れる。その行為はぼんやりしている王への呼び掛けの為でもあり、そして、玉体に触れようとしていた騎士の手を遮る為でもあった。

「父上」

「あつ、ああ、すまない…。いや、その、ウルベルトさんから話も聞いていたし、頭では理解していたつもりだったんだが…」

言い淀み、視線を彷徨わせ、目の前の憧れの騎士を見上げるとモモンガは、困ったような誤魔化すような笑顔をその口からもらった。

「…えっと、…お久しぶりです、ね、たつちさん」

「はい…、お久しぶり、ですな」

ぎこちない挨拶が交わされ、ぎこちないままに話がテンポ悪く続くとする。

「あつ、えっと、座ってください、たつちさん、どうぞ」

「ああ、はい、ありがとうございます」

「…あー…、何か食べますか?」

「えっ、ああ…、いえ、大丈夫です。…その、お気遣いなく」

分厚いクリスタルの机を間に挟んで、モモンガとウルベルトと向い合せて、たつちは促されるまま腰掛けた。

モモンガ達が座るそれと似たような長椅子を独りで使用し、隣の妙にぽっかり空いた空間に、たつちは落ち着かない気分になる。目の前のクリスタル製の机は光を反射し煌めき、縁取りも綺麗なのだが、たつちにはただ冷たい存在に感じられた。まるで、左右の山を隔てる谷間に流れる川の様だと。

「…」

「…」

「…」

モモンガ、パンドラズ・アクター、ウルベルト、デミウルゴス、その面子と相対する自戦力は自身と人型のセバス、色々なことを加味して現状勝負は五分五分かとまで考えたところで、たっちは正気に戻った。

まだ敵対と戦闘を前提に考える段階ではないはずだと自身を叱咤し、そして、その原因となった相手を睨んだ。銀の尻尾を持つ嗤う悪魔と、軍服の良く似合うドツペルゲンガーを。

その生みの親であるモモンガとウルベルトはまだまだ様子見という印象だが、その守護者達からは露骨に敵意と警戒心が溢れていた。ついうっかり、たっちが思考を完全に戦闘モードにしてしまう程に。

「たっちさん、」

呼び掛けられ、たっちはそちらに顔を向ける。

「あの、また会えたこと、オレは嬉しく思ってますよ」

そのたどたどしい言葉に、彼の優しさをたっちは思い出す。気遣い屋な彼にとつて、上手く歓迎の意も伝えきれないまま沈黙になってしまったことは、耐え難いことだったのだろう。

たっちは無意識に、その兜の下で目を細めた。

「俺も…、モモンガさんとまた会えて、良かったです」

これは本心だと噛み締めながら、たっちは応える。

「こんな風に、また、……………」

夢の様な世界で、純粹に遊べるなんて、とまでは流石に言えず、たっちは口を噤む。

あの歪んだ世界で、たっちが最期の最期に想ったのは、結局捨てることが出来なかった未練に成り果てた正義への信仰。そして、かつてユグドラシルでそうだったように、また無垢に駆け回り笑って遊びたかったという単純な願い。それだけだ。

あの現実逃避の様なゲームをやめたのは、色々あったとはいえ、それでもたっち自身の意志だ。それなのに、結局最期にそこに帰ることを望んだなんて。

あまりに自分勝手に恥ずかしくて、特にモモンガには、言える訳が

なかった。

「でも…、まさか、王様になつたモモンガさんと再会できるとは思わなかったです。昔の俺に言っても、きつと信じませんよ」

冗談めかして、にこやかにたつちは声を掛ける。ぎこちなさを何とか消し、心からの親愛を込めて。

「オレだって、同じですよ。想像できなかったことばかり続き続けますから」

「モモンガさんが城を建ててなんて、誰にも予言できなかったでしょうね」

それまでどこか一步引いた場所にいたモモンガだったが、しかし、その話題には嬉しそうに食いついてきた。

「すごいお城でしょう！」

子供のようにはしゃいだ声に、たつちは戸惑う。自分の城自慢なんて、記憶にあるモモンガには似合わないからだ。しかし勘違いをしていたことに、続いた発言でたつちは直ぐに気付いた。

「ふふ、まさかたつちさんにこんな自慢ができる日が来るなんて思わなかったな、子供自慢なんて」

「こ、子供…？」

これまた別の勘違いをしたたつちだったが、またもや続く言葉で直ぐに勘違いに気付く。

「はい、子供自慢ですよ。この城はコキュートスが発案して、デミウルゴスやマールレ、絵が上手いメイドの子達も協力して作ったんです。ナザリックの子供達の、傑作なんです！」

第三者として聞いているウルベルトはモモンガから顔を反らし肩を震わせているので、たつちがいちいち勘違いしているのは気付いているのだろう。その様子に若干イラツとしながらも、たつちはモモンガの嬉しそうな声に応えた。

「ナザリックの者達を、大切にしているのですね」

「ええ、何よりも尊く、大事なものです」

淀み無く返ってきたそれに、たつちはぴくりと微かに反応する。

それに気付いたのは、注意深く騎士を観察していた悪魔とドツペル

ゲンガーだ。彼らからの刺すような視線を感じながらも、たっちは思考を止めない。

再会できる訳が無いと諦めていた友と出会えたことは嬉しく、しかも昔の様にまた遊べるなんて、それは確かに何事にも代え難い喜びだ。それを簡単に諦め手放すことなど、当然できやしない。せつかくまた楽しそうなゲームと、しかも一緒に遊べる友達が目前に居るのに、手放したくなど無かった。

だがしかし、それでも、どうしても曖昧にはできないことがあった。変わり果てても捨てられない正義を、たっちは確かに抱えていたのだ。

「…アインズ・ウール・ゴウンを愛していたように、この魔導国も大切にしていますか？」

真剣なその声音に宿る意志を汲み取り、モモンガも堅い口調で答えた。

「アインズ・ウール・ゴウンを名乗る以上は、汚すつもりはありません」

「なら、汚す者達には？」

「絶望に塗れた苦痛を与えます」

「それ以外の者達には？」

「苦痛や死を与える理由が無い魔導国の民なら、幸福な一生を約束しますよ。アインズ・ウール・ゴウンのモノが傷付くことは、決して許されませんから」

単純明快な返答だった。迷い無きそれに、たっちはほっとしてしま

う。

「…氷結牢獄や、人を食べるNPCもいましたが、その辺りはどうなっていますか？」

「罪人や反逆者、敵、殺すべき相手しか許してません。子供を食べたがるナザリックの者達もいるけど、許可は出してません」

モモンガの言葉を全面的に信頼するならば、現状たっちには糾弾するべき点など何も見つけられなかった。そして、モモンガの言葉は全面的に信頼できるものだ。

それはなにも、モモンガが友だからという甘い判断理由ではない。

仮に全てが嘘だった場合、アインズ・ウール・ゴウンが、どうしようもない小悪党に成り果てるからだ。それは、あのギルドに思い入れのあるモモンガと、美しい悪に思い入れのあるウルベルトが行うとは、到底思えないことだった。

美しく、優雅なままに、目を逸らしたくなる程の悪虐と非道を極める。それこそが彼らの愛し誇る、アインズ・ウール・ゴウンなのだから。

「罪人は、記憶確認をして冤罪が無いように気を付けています」

「あの世界と違つて確実に冤罪は無いですよ。でつち上げも、理不尽もありません」

今まで黙っていたのに嫌味を言うためだけに口を挟んだウルベルトには、さすがにモモンガも窘める。しかしたつちはそこまで、特段その発言を気にはしていなかった。

それは確かに、胸に刺さり、嫌なことを思い出させる発言だった。だが、皮肉られたそれは、紛れも無い真実だ。

たつちだつて、その汚らしい現実を憎んでいた。だからこそ、冤罪が無いという素晴らしい世界があることに強い喜びをも感じていた。

「…犯罪者の扱いについては、セバスからも話を聞いてます」

その扱いは、たつちにとつても非常に納得ゆくものだった。

軽犯罪者はまず各地方にある刑務所に収監され、懲役と社会奉仕が義務付けられる。

ナザリツク地下大墳墓に集められるのは、重犯罪者や、軽犯罪者でも何度も繰り返して改心が認められない者達だ。

たつちはそれを聞いて、ウルベルトの悪趣味に譲歩を決めた。

元々助けるべきかすら悩んでいた相手が救いようもない存在だと分かれば、葛藤はすつきり消えてしまったのだ。

「しかし犯罪者以外は、苦しみを与えるに足る理由がありますか？」

その問いには、つまらなさそうに悪魔が答えた。

「救いようもない奴も、魔導国に支配された方が幸せになると理解できない奴も、どうしたつて現れる。それを摘んで、大多数が幸福になれるなら何の問題も無いでしょう」



「殺せば良いのに、苦しめる必要がどこにあるんですか」

「必要なありませんよ。楽しいから拷問している、ただそれだけです。ただの趣味です。何の価値も無い存在が死ぬ迄にどんな目に合おうが、何も問題は無いでしょう?」

「悪趣味ですよ。せめて、安らかな死を与えてあげたら、」

「はっ、悪趣味ねえ。確かに、あの世界は悪趣味でしたね」

「ウルベルトさん、今はこの世界の話をしているんですよ」

「分かっていますよ。すぐくつまらない話だったから、冗談の一つや二つぐらい、混ぜた方が良くかと思っただけです」

互いに譲らず、嫌悪感も隠さずに、ウルベルトもたっちも吐き捨てるように会話した。

「ああ、それで何でしたっけ。アインズ・ウール・ゴウンに逆らった連中に安らかな死?はっ、それこそ嗤えない冗談は止してくださいよ、たっちさん」

ウルベルトが顔を上げ後ろに控えるデミウルゴスと目を合わせるのと、悪魔達は呆れたと言わんばかりの腹立たしくなる嘲笑を零した。

僅かに動いたセバスを片手を上げることで止め、このままでは堂々巡りだと諦め、たっちはモモンガに視線を向ける。しかし視線を遣った先の彼の様子に、思わず予定とは全く違う問いかけをしてしまう。

「…モモンガさん、緊張していますか?」

「えっ!?!」

突如として話を振られたせいか吃驚するモモンガに、たっちは吹き出す。これには周りもぽかんとしてしまうが、たっちは気にせず肩を揺らしていた。

「た、たっちさん…?」

「いや、だって、見るからに大魔王面なのに面白いぐらい肩が跳ねたから…、くく」

昔のことを思い出し、たっちはますます笑いのツボに入る。

かつてユグドラシルで出会ったばかりの頃、モモンガは、ただの雑魚モンスターと見間違えそうな襤褸布を身に纏っていただけだった。

しかし、当初の弱かった頃から成長し装備もスキルも充実させてい

くうちに、その見目と選択する職業から、魔王と呼ぶに相応しい様相にどんどん変わっていったのだ。

それなのに、変わらず物腰は丁寧なうえ、優しく、気遣い屋な彼には、その見た目が全く似合っていないかった。だから最初の頃はそのギャップに、たつちは実はこっそり笑っていたのだ。

表情が動かないゲームだった時と違い今はこっそり笑うことが出来ずに、たつちは落ち着くまで開き直ってひとしきり笑った。

「はあー、変わらないですね、モモンガさん。どっかの山羊も、厨二が磨かれただけで何も変わってないみたいだ」

「たつちさん、ちよつと表で殺し合いしませんか？瞬殺してあげますよ」

「ははは、瞬殺されてあげますよ、の間違いでは？」

たつちの発言に、殺気立つのはNPCだけだ。モモンガはどこか嬉しそうにしつつ顔を少しだけ俯かせ、ウルベルトは不愉快そうな顔をしつつ体勢を崩し、たつちも深く腰掛けていた。

暫しの沈黙が流れた後、焦れたようにウルベルトが立ち上がった。

「デミウルゴス、パンドラ、セバス、お前達は此処で待機している。地下には俺達だけで行く」

アイテムボックスから本を取り出したウルベルトは、数歩先にあつた本棚に向かう。

「お待ちください、ウルベルト様！」

「ウルベルト様の御命令とはいえ、私は父上の御側から離れるわけにはいきません！」

「駄目だ。こつからは、俺達だけで、話し合いの時間だ」

そう言つてウルベルトは、取り出した本を、棚に置かれてあつた天秤の一方の皿に置いた。一方にある羽根とその本はなぜか釣り合いがとれ、天秤の平行は保たれたままである。そして、光る魔法陣が現れ、その光の消失と共に本棚は自動扉のように横にスライドして開かれた。

本棚の後ろにはぽっかりと穴が空き、その穴の中には、地下に続く螺旋階段が続いている。

「この下は、盗聴も武器使用も阻害される。問題は無いだろう？」

それでもなお食い下がろうとした守護者達だったが、モモンガが自ら立ち上がりウルベルトの方へと足を向けたので口を噤むしかなかった。

自分達とは違う、至高の存在のみでの対話をモモンガ自身が望み、難癖に近い止める理由しか思い浮かばない以上、守護者達には最早見送るしかない。また、下手について行ったせいで話合いが上手くいかず、よりによってあのワールドチャンピオンが敵対することになるとも、彼らにとつては避けたい事態だった。

「心配するな、パンドラズ・アクター。デミウルゴスも、少し友達と話してくるだけだ。なあ、そうだろ、たっちさん」

「ええ、その通りですよ」

たっちも立ち上がり、セバスに待機を伝える。執事は恭しく頭を垂れるだけで、無言を貫いた。

「セバスに自分の剣は預けている。そんなに睨むな」

たっちにそう声を掛けられたパンドラズ・アクターもデミウルゴスも、それでも渋い顔をしていた。それに対し支配者達は慣れた様子で、大丈夫だと適当に声掛けをする。その声には若干諦めの色も現れていて、そして少しぞんざいであった。

不安と不満を隠さない守護者と寡黙で控えめな執事に見送られながら、モモンガとウルベルト、そしてたっちは地下へと続く螺旋階段を下りて行く。

いつの間にやら手に燭台を持っていたウルベルト・アレイン・オードルが先導し、延々と続くかのような螺旋階段を、異形種達は黙々と降りていく。

悪魔の道案内に従い下へ下へと行くのは、まるで地獄に誘われているようだ、たつちはふと思う。悪魔の後に続くのは死神の様な見目の彼で、まさに地獄へと誘われている真つ最中の様な光景だろう。しかしそこまで考えて、たつちは今の自分の姿を思い出す。

全身を甲冑に包まれ外側は人間のように見えるが、その下の姿は彼らと同じ異形だ。第三者からして見れば、己も地獄へと誘う側に見えるのだろうと、たつちは今ある肉体に意識を向ける。

人間の時とは全く違う感覚を、たつちは感じた。紛うことなく、これは自分の肉体なのだという感覚を。

暫く歩き、前触れなく不意に目的地に辿りつく。ドアはなく、馬蹄形のアーチを潜り抜けた先には、飾り気の無い小さな丸い部屋があった。

入ってすぐの正面にギルド、アインズ・ウール・ゴウンの旗がある以外は、小さな円卓と五つの椅子のみがあるシンプルな部屋だ。天井からぶら下がるシャンデリアも黒い鉄製で、飾り気がない。蝋燭の火がちらちらと揺らめくばかりである。

「ウルベルトさん、気遣ってくれてありがとうございます」  
「気にしないでください、モモンガさん」

モモンガとウルベルトが会話をしながら適当に腰掛けるのを見て、たつちも腰掛けた。互いを結ぶと三角になる形で、彼らは向かい合う。

「さて、それでは何か言おうとして止めていたモモンガさんから、どうぞ」

巫山戯た仕草でウルベルトに手を向けられたモモンガは、調子が狂

うと文句を言いつつも、少しずつ話し始めた。たちへと視線を向けて、守護者達の前で吐露する訳にはいかない、その心の内を。

「…たちさん、その、オレは、随分と変わってしまったと思ってたんですよ」

「そんなことないですよ」

「変わってないって、言ってもらえて嬉しかったです。でも、この姿になってから随分と長い…、長い時間が経って、変わったことも確かにあるんです」

長い時間、その言葉にたちも改めて恐ろしくなる。

時の経過と共に全ては移り変わっていく、それは間違いなく事実だ。だからこそ、モモンガと会うのが恐ろしかったのだ。百年以上経っても尚、友は自分の知る友なのか、不安で。

「オレはもう、人ではないんです」

その断言しつつも、自身に言い聞かせる様でもある物言いに、たちはやっと自分の配慮の無さに気が付く。

人ではないと言い切る彼と違い、まだ言い切れもしないくせに、思いやりに欠けた自身にたちは嫌になってしまった。不安や恐怖など吹き飛んで、今はただ、恥じ入る気持ちがたちを強く支配していた。

肝心の友自身が、長い長い月日の経過に、一体何を感じてきたのか思い至らなかつたことが、彼は恥ずかしくて堪らなかつた。

「…変わらないですよ。子供自慢を嬉しそうにするところとか…、根本的な所は、何も変わっていない」

たちの返事に、嬉しそうにモモンガが笑った。その骨の顔が変化することは当然ないのだが、嬉しそうに笑っていることぐらいはたちにも良く伝わった。

「それで？色々聞いて言ってみましたけど、これからどうするんですか？」

ウルベルトの質問で、少しばかり緩んでいた場に緊張感が帰ってくる。たちは問いかけてきたウルベルトへと顔を向け、答えた。

「ナザリックに正式帰還するかは…、すみません、もう少しだけ考えさ

せてください」

その返答に対して、呆れと落胆の表情をウルベルトは隠さない。モモンガは、たつちを真つ直ぐに、じつと見詰めて続く言葉を待っていた。

「理由はどうあれ、国民が幸福に暮らせる、素晴らしい国が出来上がるのは嬉しいし、協力もしたいと思ってます。ただ、」

「さっきの話をまた蒸し返すんですか。仕方無いでしょう。拷問は悪魔達にとって煙草や酒や音楽、所謂生活の潤いなんですから」

「分かってますよ」

そのたつちの返事が投げ遣りでもなく真摯なもので、ウルベルトはおや、と違和感を覚え逸らしていた視線を戻す。兜に隠された、正義を愛する聖騎士の表情を伺うことは出来やしない。だがそれでも、彼がいい加減な対応や返事をしているのではないことは、その態度と声音から分かることであった。

「そういうのが趣味の者達が、ナザリックにウルベルトさん以外にもいるのでしょうか？ 悪趣味とは思いますが、だからといって一部の者達に我慢を強いるのも、良くないですからね」

そのたつちの発言で、ウルベルトはやつと理解に至った。目前にいるのはユグドラシルにログインしているたつちではなく、異形種の肉体を纏う、人間ではない何かなのだと。

正義の残り滓を貼り付けた魂が、異形の肉体で生きているのだと。

その事実が可笑しくて可笑しくて、ウルベルトは腹を抱えて笑い転げたくなる。何とかそれを耐え忍び、口元に手をあててウルベルトは誤魔化した。

「だから、自分なりに納得いく形で何かをして、ナザリックに協力もしたいんです。ただ明確な答えがまだ出ないから、待つてほしいんです」

悪魔が内心笑い転げていることなど気付かずに、彼は真摯に語り終えた。そして、その正義の歪さを誰も指摘することなどなく、話は進む。

「分かりました、たつちさん。…それじゃ、先にオレの我が侷だけ伝え

ておきます」

「え、」

その意外な返答に、たっちは驚く。そして、続いて伝えられた彼の願いごとに、目を見張ることになった。

「オレと一緒に、世界征服してください」

よろしく願います、と最後に丁寧につけ加えて、モモンガはぺこりと頭を下げる。

記憶の中では遠慮ばかりだった彼の珍しい言動に、たっちは驚愕するばかりだ。しかし、その様子にウルベルトが嬉しそうにしているのを見て、たっちは合点がいった。

「はは、変わらないと思ってたけど、随分と悪魔に入れ知恵されてたんですね、モモンガさん」

「元はたっちさんのアドバイスでしょう。なんだか俺がモモンガさんに余計なこと言った、みたいに聞こえるんですけど？」

「それはすみません。そうですね、意固地になったモモンガさんに我俣を言わせたのは、功績ですよ」

「：オレ、そんなに頑固でしたか？」

柔軟に意見を聞き入れてたつもりなんだけどなあ、と首を傾げながらも真剣に反省し始めたモモンガには、ウルベルトもたっちも、思わず呆れ混じりに笑ってしまう。

「：ところで、ウルベルトさんは今はどのような役職に？」

自身の今後を考える何かヒントになるかと思ひ尋ねたたっちだったが、モモンガとウルベルトはぱちくりと目を合わせるだけだ。

「言われてみれば、俺の役職って：：？」

「特に明確なのは無い、ですね：。幅広く雑務をしてくれるから助かってはいるけど：：」

「決めた方が良いですかね？」

「良いんですかね？でも：、俺は確かに一応トップとして、ギルド長として働いているけど、役に立ってるかと：、言われたら：：：はは、」

「モモンガさん、そこは気にしたら負けだって前も話したじゃないか！気をしっかり持って！」

突如凹んだモモンガを、ウルベルトが巫山戯た調子で慰める。前より更に仲良くなつた様子の二人組にイラツときつつ、たっちは話を進めた。

「役職を決めず放つたらかしていたという事は、大した仕事もせずプラプラ遊んでいたんでしようね。今さら役職なんて決められませんか」

「たっちさん、殺されたいんですか？」

棘のある言葉にカチンときたウルベルトが、身も蓋もなく返す。そしてその隣でモモンガがもしかしてと、自身の推理を披露した。

「再会した時に目の前でいきなり人殺しされたから、機嫌悪いんじゃないですか？」

そこではないのだが、軌道修正するためにもたっちはそれに乗つかった。

「……すみません。ちよつとウルベルトさんにあたりすぎましたね。でも、あれはウルベルトさんが悪いです」

「はああ!? たかがアレぐらいで怒らないでくださいよ! だいたい一番ソフトな方法だったんですよ? 生首の詰合せとか目玉の詰合せとか、デミウルゴスと色々考えたけど、たっちさんのことを考えて、ああなつたんですから!」

知りたくなかつた裏話の情報提供で、たっちは腹を立てる。

確かに死体を見てもそこまでショックは無かつたが、死体と、目玉やら生首やらの詰め合わせは、絶対にグロテスクさが別物だ。

「その初期案やつてたらガチギレしてましたよ。というか、俺のことを考えて? 大嘘吐かないでくださいよ。単純に面倒くさかつたからやらなかつただけでしょう、どうせ」

「ははは、妄想働かせて冤罪でつち上げですか? 証拠あるんですか? あつ、証拠なんて正義の警察官様には要らないんですか?」

「…表に出てくれませんか、ウルベルトさん。その頭の角、更にお洒落にカットしてあげますよ」

「たっちさんのセンスでカットなんかされたら、恥ずかしくて表歩けなくなりますよ。それよりも、俺がその鎧をもつと美しくしてあげま



すよ、真っ赤に染めてね」

「ははっ、染められますか？ 触れるどころか、近づくことすら厳しいだろうに…、どうやって染める気なんですかね？」

「たっちさんこそ…、角に剣が届く前に指先から灰になってしまいうだろうに、どうやって剣を握る気なんですか？」

「……」

「……」

無言で睨み合っていたウルベルトとたっちが、勢いよく立ち上がる。その一触即発の空気は、彼らにとつては懐かしいものだった。そのため取り乱した様子も一切ない声で、モモンガは呆れ混じりに執り成すだけだ。

「はいはい、落着いてください」

そう伝えて、モモンガがパチリと骨の手で器用に音を鳴らす。すると、ウルベルトとたっちの頭上から突如として滝のように水が落下してきた。

「!? ちよ、これ何ですか!?!」

「び、びっくりした…!! 水!?!」

「おっ、成功した。やっぱりこれは攻撃判定に引っ掛からないんだなあ」

のんびりした口調のモモンガを、ウルベルトとたっちが揃ってじりと睨み付ける。だがそれに対して、悪びれもせずにモモンガはしれっと返した。

「だって、ウルベルトさんとたっちさんが顔を合わせて話し合いなんかしたら、絶対に喧嘩するじゃないですか」

「…それは」

言い訳をしようとしてハモった相手を互いに睨み付けるので、モモンガは苦笑するしかない。せつかく息があつたのに、揃って非常に不愉快そうにしていた。

「というかこれ、何の魔法ですか。こんなありましたっけ?」

「魔法じゃなくて、オレの指パツチンに合わせて影の悪魔が無限の水差しをひっくり返しているだけですよ」

「……影の悪魔、自殺しちやいませんか、それ」  
「言い聞かせてるから…、たぶん、大丈夫です」

心配そうに影の悪魔が潜んでいると思われる天井の影を見上げる悪魔とアンデッドに対して、まだその愛の重さを知らないたつちは首を傾げるだけだ。

そのたつちを視界に入れて、ウルベルトは抗議の声をあげる。

「ちよつとモモンガさん、このやり方反対です！俺に比べてたつちさんノーダメージですよ！」

びしりとウルベルトが指差す先のたつちは確かに、衣服どころか全身の羊毛が水を吸い悲惨なことになっているウルベルトに比べて何も変わらない様子だった。全身を鎧で覆っているのだから、それも当たり前だろう。

しかし、その当人から抗議に対しての否定の声があがる。

「いや、自分も隙間から入った水で気持ち悪いですよ…。足が特に…、気持ち悪い…」

「雨の日の長靴みたいな感想ですね…。ウルベルトさんは…、お風呂に入った猫動画で見たことある姿になりましたね、毛のポリウムが減って」

「濡れ山羊…んっ、ごほんごほん」

「意味の分からねえところで勝手にツボって笑ってんじやねえよクソたつち殺すぞ」

一息で呪詛と殺意溢れる言葉を終わらせたウルベルトは、アイテムボックスからスクロールを取り出す。それは空に放り投げられると、瞬く間に赤い炎と光になり封じ込められていた魔法の力を開放して消えた。

そのスクロールに込められていたのは、第0位階魔法、いわゆる生括魔法だ。その魔法によって生み出された熱風は何者も傷つけることもなく、びしょ濡れだった山羊の毛皮とその衣服を、ただ乾かした。

あつという間に乾き元通りになった自身の体と衣服に、ウルベルトは満足そうだ。その毛はふわふわと、膨らんでいる。

「それはズルいでしょう!?!」

非難の声が当然、未だ鎧の下はずぶ濡れ状態のたちから上がった。

「ウルベルトさん、そんなスクロール常備してたんですか」

「前に外出先で濡れた時、気持ち悪いし全然乾かないので反省してね。それから持ち歩いてるんですよ」

「それじゃあ、たちさんにもお願いします」

モモンガからのその申し出に、ウルベルトは固まる。

「そういった事情で持ち歩いているなら、一枚だけしかストックがない、なんて有り得ないですよ？たちさんにも、お願いします」

「……………わかりましたよ」

事実をあっさり指摘され、繰り返し頼まれ、仕方なくウルベルトは再度同じスクロールを取り出した。そうして先程より雑に、実に嫌そうにたちに向かい放り投げ、その身を乾かしてあげた。最後の最後まで、大変不服そうにしながら。

「さてと、たちさん、難しいとは思いますが喧嘩をいちいち買わないでください」

「本当に難しいですが…、努力はします」

渋々といった様子で、肯定とも否定ともつかない発言で返答を濁しながら、たちは座り直す。

「ウルベルトさん、たちさんはこっちに來たばかりなんだから、もう少し優しくしましょう」

「……………善処はします」

たちと同じく、ウルベルトも無然とした表情のまま、あまり守られることのない努力する旨の発言をしながら腰を下ろした。

それを見てひとまずモモンガは安心し、話を進める。

「でも、役職かあ。今更増やしてもあんまり上手く機能しないだろうし、実際今まで、あちこちで手が足りない時にウルベルトさんが補佐に入って何とかしてくれて助かってるからなあ」

自由に動けるからこそ助かっているウルベルトを固定させても、あまりメリットは思い浮かばないらしい。モモンガは考え込むだけで、あまり良い顔はしない。

「それなら、有事の遊軍隊長つてのはどうですか？平時は今まで通りで」

たっちの提案にモモンガは顔を上げ、今度は僅かな間だけ考えてふむむと納得した様子の声を出した。

「…良いですね、さすがたっちさん！第七階層丸ごと、ウルベルトさんの遊軍部隊にしましょう。隊長はウルベルトさん、副隊長はデミウルゴスで」

その発言には、ウルベルトもたっちも驚愕させられた。

ウルベルトはニヤリと嬉しそうに笑い、たっちは少しつまらなそうにする。その発言は、ウルベルトとデミウルゴスに対して、モモンガが絶対の信頼を寄せているという証明に他ならない。

先程から少しばかり嫌な疎外感を感じるなど、たっちはこっさり兜の下で口を尖らせる。

例えるなら、三人で並んで歩いていたのに気付けば自分だけ後ろに押し出され更には前の二人が自分の知らない話題で盛り上がり始めたような、そんな疎外感だ。形容し難く、また恥ずかしくて言い出せない様な、そんな不快感があった。

「…そうですね、陰に潜む遊軍隊なんて、ウルベルトさん好きそうですし」

「おいこら、喧嘩売らないと気が済まないのか、正義厨」

「はいはい、喧嘩は売らない、買わない」

またもや喧嘩が勃発しかけたのを止めて、モモンガは嬉しそうに両手を合わせ骨を鳴らした。

「話合いがひとまず纏まって、良かったじゃないですか。法国を殲滅する前にたっちさんと争うことになっていたら、それどころじゃなくなっていただろうし」

その聞き捨てならない言葉に、たっちは戸惑い聞き返す。

「殲滅？法国も属国にするのでは？」

「いえ、殲滅します。スレイン法国は地図から消えて貰うんです」

さらつと言われた返事に、温度は無い。ただ淡々と、モモンガは決定しているスケジュールを語っているだけだった。

「その理由を伺っても?」

なぜそんなことを?という表情を露骨にしながらも、モモンガは憎き法国の嫌いな所を丁寧にとつちに解説した。

そうしてシャルティア洗脳事件の話を主軸にした悪評を聞き終わり、たつちは、首を横に振った。

「:反対です。国民全員根絶やしにするには、理由があんまりだ」

その思いがけない言葉にモモンガは動揺し、ウルベルトが直ぐ様声を荒げた。

「正式帰還していないたつちさんの意見を聞いてモモンガさんが指示を撤回したら、ナザリックの子供達に示しがつかないでしょう。それに、あそこには魔導国の主義思想に反する人間が集まっているから、根絶やしにするぐらいで調度いいんですよ」

「しかし国民全員が危険思想ではないでしょう?それに、改心する人だって居るかもしれないじゃないですか」

「そうかもしれないけど:、それでもシャルティアに約束した手前、オレも約束破りはしたくないです。でも、たつちさんの意見を丸ごと無視するのもな:」

「モモンガさん、これは無視して良い意見ですよ!コイツは部外者なんですから!」

ウルベルトが声を荒げ、たつちが冷ややかに返す。

「:俺が戦地で片っ端から人助けをしても良いなら、無視してくださいっても構いませんよ?」

ぴくりと、怒りにウルベルトが顔を引きつらせる。

「それは、脅しのつもりですか、たつちさん」

先程の喧嘩とはまた違う空気が流れ始める。完全なる敵対を選ぶのかと、刺々しい殺意溢れる空気の中で悪魔と騎士は睨み合う。しかし直ぐにその雰囲気壊す、明るい声が上がった。

「あつ、そうだ!陣取りゲームにしましょう!」

あまりに唐突すぎて毒気を抜かれたウルベルトもたつちも睨み合いを止めて、モモンガへと視線を移す。

「ゲーム、ですか?」

きよとんとするウルベルトとたちを無視して、モモンガはアイテムボックスからスレイン法国の地図を取り出した。そして皮袋も取り出し、スレイン報国の神都上にルビーを置いた。更に続けて、ブラックダイヤモンドとステイブナイトも取り出す。

何をしているのだろうか、立ち上がり、モモンガの手元をウルベルトとたちを覗き込む。

「ウルベルトさんとたちさんの陣営で分けて、一つのテント…、いや旗で良いかな？ 占領判定の範囲は、このぐらいかな…。うーん、ゲームルールはデミウルゴスやアルベドからも意見を聞いて煮詰めようかな…」

取り出した羽根ペンとインクで、法国の地図に適当な大きさの丸をモモンガは描く。

「ウルベルトさんと、たちさんで陣営を別けてスレイン法国でゲームをしましょう。ウルベルトさんは自分の陣営で、たちさんは自分の陣営で好きなようにしていいことにします」

光を喰らいつくさんばかりの黒いダイヤと、鈍い色を秘めた透明な四角い水晶の周りには、くると円が描かれている。その丸が描かれているのは他国の領土であるが、そんなことなどモモンガにとっては全く意に介することではない。

そして、そこに住まう者達に対する配慮など一切ない発言を、嗜める者も非難する者も、そこに居るわけがなかった。

「最終的に一番広く陣営を設置できた側には、そうですね、相手陣営トップにどんな命令も下せる権限の付与、なんてどうですかね」

「なんて恐ろしいルールを思いつくんだ、この骸骨…」

ウルベルトが呆れたという声を出し、頭を抱える。

「もちろん何でもって言っても、アルベドとデミウルゴス、それからセバスの了承が出た命令じゃないと駄目ですけど」

「そこじゃないですよ！」

ウルベルトにツッコミされても、当のモモンガは良いアイデアだと自信満々の様子だ。

「陣取りゲームですか…」

たつちは、考えて、そして妥協点として悪くないと判断した。

先程は勢いで脅したが、良い手ではないことは、たつちも分かっていた。

単身で乗り込んでも結局、可動範囲が狭過ぎて助けられる数に限りがある。更には助けた後のことも問題だ。生きていく術や仕事を見繕ってやることも出来ないたつちでは、先々において救う手立てが全く無いのだ。

そんなことになるよりも、アインズ・ウール・ゴウン側からも認可が出ている救済を広範囲で行えるゲームに乗った方が、弱者を多く救えるのは間違いないかった。

それに何よりも、勝利時に貰える権限は、なかなか魅力的なものである。

「よし、こつちが勝ったらウルベルトさんとデミウルゴスに漫才をしてもらおう」

「ふざけんなよ！それでデミウルゴスが割腹自殺したらどう責任取る気だ！」

「あー…、皆の前でスベったりとかしたら冗談抜きでやりかねないですわね…」

とうとう円卓を乗り越えてウルベルトが、たつちの鎧の鬱陶しい赤マントを剥ぎ取ろうとする。

武器使用禁止空間のため、互いに掴み掛かりギャーギャー言い合うだけのウルベルトとたつちを眺めながら、相変わらずだなあと、のほほんとモモンガはそれを眺めていた。そしてまた、器用にその指を鳴らしたのだ。

コキユートス城内にある隠し扉の先にある地下、正確に言えば魔法で作成された異空間へと至高なる存在は去ってしまった。

その背を見送り、取り残された守護者達は、ただ黙り込んでいる。華美な装飾品に埋め尽くされた室内には、重苦しい空気が流れていた。

その沈黙を初めに破ったのは、デミウルゴスの美声だ。

「行ってしまわれたね…」

哀愁の滲むその呟きにも反応せず、パンドラス・アクターはじつと、父の消えた先を幼子のように見詰めていた。本棚の後ろに現れた、螺旋階段の奥にある闇を。その向こうに居る尊き存在を、ひたと見詰め続ければ捉えることができるのかの様に。

「…失礼、私めは少しの間、席を外したいと思います」

次に口を開いたのは執事、セバス・チャンだ。その目に滲む煌めきを一瞥し、悪魔が優しい声音で語りかけた。

「今更、私達の間隠し事なんかする必要があるのかい、セバス」

背を向け去ろうとしていたセバスが、その問い掛けにぴくりと反応して立ち止まる。

「気持ちにはよく分かるよ。私も、ウルベルト様と再会できた時は取り乱してしまった。それを思えば、まだ帰還を決められていないたち・みー様のため、執事として自身を律しここまで立派に振る舞った君は、賞賛に値するよ」

本当に、と念押ししてデミウルゴスは褒めちぎる。それは嫌味なんかではなく、彼の正直な気持ちであった。

「同じ立場に立ったことのある者として、君を、心より尊敬しているよ」

彼の口から溢れるのは、耳障りの良い賛辞の声。しかし非常に珍しいそれらに返ってきたのは、苛立ちを隠しきれない、軽蔑すら滲



むような棘のある言葉だった。

立ち去ろうとしていたセバスは、視界を滲ませる存在を親指で乱暴に拭う。そして眉間の皺を深くし、デミウルゴスに向き直った。

「隠し事ならば、あるでしょう」

その発言に、デミウルゴスの笑みは瞬時に消え去る。

「…すまない、先程の尊敬するという発言は君の愚直さで打ち消されたから取り消すよ、セバス」

「構いませんよ、デミウルゴス様」

先程までの友好的な空気など、瞬く間に消えてしまっていた。言っ  
てしまえば普段の、正に犬猿の仲といえるピリピリした空気に、場が  
ガラリと変わる。

さすがにパンドラズ・アクターもそれには警戒し、視線だけをやっ  
と、対峙し合う彼らに向けた。

「それでは、説明をして頂けるのでしょうか？私が、唐突に、帝国から  
一番遠方の冒険者組合支部で冒険者の方々の訓練相手に抜擢された  
件。それが、」

それは普段と変わらない丁寧な口調のままだが、あからさまに苛つ  
き、攻撃的な物言いだった。

「その長期出張期間が、どう考えても、貴方とウルベルト様がつち  
みー様を見つけたられた時期と、被る事について」

「君らしくないね、セバス、嫌味かい」

くつくくと喉を鳴らし小馬鹿にしたように嘲笑う悪魔は、こてりと首  
を傾け、平然と答える。

「単純明快だろうか？あの御方を殺す時に君が居るか居ないかだけで、  
勝率は大幅に変わってしまうのだから」

「デミウルゴス…!!」

憤怒を爆発させるセバス・チャンの前に、先程まで全く動く気配を  
見せていなかったパンドラズ・アクターが立ちはだかる。悪魔に掴み  
かかろうとしていた手が突然のことに止まり、その眼は怒りを孕んだ  
ままじつと目前のドツペルゲンガーを睨んだ。

「失礼ながら、執事殿、その怒りは私共から言わせれば、間違ってます

よ」

「それは、…っ」

自身の創造主に対する不敬と殺意。それに怒りを覚えることも、それ自体が誤りだと言われ非常に不快に思うことも、NPCにとって当然のことだ。しかしセバスは、パンドラズ・アクターに対して何も言うことが出来ない。未だ理性が完全に消えている訳ではない彼には、その指摘の意味が理解できてしまったのだから。

激しい怒りと正しい理性が互いを打ち消し合った結果、セバスは何も言えず、行動もできなくなっていた。

「…間違っていないのでしょうか？それはそれで、大変問題ですな」

パンドラズ・アクターの嫌味な指摘が続く。笑うはずがないその顔から嘲笑を感じとり、不愉快に思いながらも、それでもセバスは口を閉ざしたままだ。彼の創造主が迷っていたように彼も、指し示された行き先のどちらを選ぶかなど、決めきれていなかった。

「…ここは、至高の御方からの御言葉を拝借させて頂きましようか！」

その芝居がかかった言葉は、セバスにとつては酷く鬱陶しいものだった。その質問を装った皮肉と嫌味はネチネチと、セバスを責めているだけなのだから。

「セバス・チャン殿、貴殿は、その忠誠を誰に誓っているのでしょうか！？」

そののっぺりした顔をぐいっと近付け問い質す被造物は、当然無表情だ。だがそれでも、何もかも分かったうえで質問し笑っていることが伝わってきて、セバスは非常に疎ましく思えた。

「…私めは、」

その答えを、口から出すことを、しかし結局セバスはできやしなかった。その口から回答が出ることは無く、沈黙が再度訪れる。

暫し流れたその沈黙から、責め立てられている様な気持ちになつていたセバスに助け舟を出したのは、意外なことにデミウルゴスだった。

「パンドラズ・アクター、そろそろ意地悪は止めないかい？君は、ずっと父君が傍に居たから分からないだろうが…、それは本当に、苦しい

ことなんだ」

背後から掛けられたその言葉には、パンドラズ・アクターも些か驚いた様子だ。しかし流石に感じ入るところがあったらしく、落ち着いた声音で反省の弁を述べた。

「…そうですね、まだ父上と至高なる御方々の話し合いの結果も出ていないうちから…、大変失礼しました。…どうやら、頭に血が上っていたようです」

親しい悪魔からの嗜める声を聞き入れたドツペルゲンガーは執事から離れ、再度丁寧な詫びを入れた。その謝罪を、執事も快く受入れる。

「気にしないでください。…デミウルゴス、私も頭に血が上っていました。貴方はあくまで最悪の事態を想定して行動しただけ、そうですね?」

「ああ…、当然だろう、セバス。我々は、アインズ・ウール・ゴウンに君臨する至高の方々のため、ナザリツク地下大墳墓を護るため、あの御方々から生み出された存在なのだから」

「…分かっておりますよ…」

落ち着くためか、机上で寂しく放置されていた水差とグラスで水をおおっていたパンドラズ・アクターが、飲み終えたグラスをことんと机上に戻す。そして、くるりと半回転し、まるで台詞のように朗らかに述べた。

「話し合いが良い形で纏まることを私も願っています! 私達は、大切な仲間同士なのですから!」

しかし、まるでその声音と真逆のように執事の顔は暗いままだ。

「今は確かに、そうですが、しかし、」

「単純明快な話ですよ」

視線を落としていたセバスが顔を上げると、そこには相対するデミウルゴスとパンドラズ・アクターが居た。

その細長い指が、セバスの立つ足元を指し示した。

「対立するなら、我々は全身全霊をもって、モモンガ様とウルベルト様の敵対者を殺し尽くすだけです」

セバスは指し示された足元を見詰め、誇らしげに立つ守護者達に目を遣り、そして偉大なる創造主と慈悲深き支配者と絶対の君臨者の消えて行った先を見詰めた。

「…私めは、たっち・みー様に造られた執事。主のお側に控え、ご命令に従うこと。それこそが、執事として生み出された私の存在意義」

それは、天地がひっくり返ろうとも揺るがない事実。それを確かめるように、セバスは呟く。

「願う立ち位置など、主の傍ら、ただそれだけ。その主を自ら選ぶなど、大変おこがましいことにしか思えません。ですが、」

セバス自身の内には、唯一つの欲望だけがあった。

「間近で最期の時まで見守ることが出来たならと願っているのも、事実です」

彼らが誇らしげにしているのに倣い、セバスも胸を張り、その想いを言葉にした。

「あの御方が振るう、正義を」

問いに対する答えではない、ただの彼の願いを聞いて、同じ造られた存在は、わらっていた。

女神と悪魔の彫刻が施された巨大な扉を、セバスは見つめる。そして、自身の背中側に居る、造物主に思い馳せる。

心より望んだ、一時的とはいえ、至高なる方の帰還の時。それに対して溢れ出る喜びは、セバスにとって紛うこと無き事実だ。しかし、それと同時に抱く憂いも、悲しいかな嘘ではなかった。

悪魔の優しい声と、ドッペルゲンガーの嫌味な問い掛け、そして、ずっと傍に居てくださった慈悲深き支配者。それらが、セバスの心内にひっそりと影を落としている。

可能性として存在し続ける、その時と選択肢。その結論など、当然セバスの中で未だ絡み合ったまま、解かれる気配すら見せてもいない。

それでも、全ては勝手に進み、どこかに帰着してゆく。

その諦めにも似たセバスの複雑な心情を反映したかの様に、とうと

う扉が動き始める。その動きは滑らかで、時の本流の如く淀みが無い。

開かれた扉の向こう、ナザリツク地下大墳墓の最奥に、そこで生まれた者達と支配者が集まっていた。

緊急招集ではなかったため整然と並ぶナザリツクの子供達は、僅かでも音をたてることすら主人に対し無礼だと言わんばかりに黙り込んでいる。結果、玉座の間はそこに居る生物とアンデッドの数に反し、静まり返っていた。

本来ならば絶対なる支配者に対し頭を下げているはずの彼らは、背筋を伸ばして緊張した面持ちで玉座へと続く道を見詰めていた。期待や不安、戸惑いまで混ざり、様々な表情を彼らは披露している。

それらを一瞥し、セバスは情けない思考全てをかなぐり捨てて、堂々と至高の存在の帰還を告げた。

「たっち・みー様、御入室されますー！」

ナザリツク地下大墳墓の執事の凜とした声が響き渡り、そして、硬質な金属音が一つ続いた。一旦その身を隅に移動させた執事は、自身の後方から現れた存在に対して深く頭を下げる。

扉の向こうから現れたのは、輝く白銀の鎧を纏い、燃え盛るような赤いマントを風も無いのに室内ではためかせている聖騎士。

アインズ・ウール・ゴウンにその御名を嘗ては列ねていた、至高なる存在、たっち・みーであった。

本来なら、その登場に対し拍手と歓声が鳴り響くところだ。だが、前回帰ってきた者によつて植え付けられたトラウマのせいで、彼らの複雑な心境が反映され、控えめな拍手のみが行われた。何よりも嬉しはずの至高なる存在の帰還は、彼らの中ではすっかり不安の種になってしまっていたのだ。

その反応をさして気にする様子も無いたっちにセバスは内心ほつとしながらも、追従し始めた。

複雑な色合いの視線を一身に受けながら、たっちは視線を迷わせることもなく歩んで行く。巨大な扉から、唯一の座へと真っ直ぐ続く用意されていた道を。

たつちが現れた扉と相對する壇上にて、ナザリックの子供達が忠義を誓う支配者達も、彼を見詰めていた。しかし子供達と違つて支配者達は、常と変わらぬ鷹揚とした態度のままだ。

モモンガは玉座に腰掛け、その一段下では、モモンガと同じくナザリックに君臨するウルベルト・アレイン・オードルは、悠然と立っていた。そこに不安の色は一切ない。

それでも静かな興奮と僅かの不安に浸りながら、ナザリックの子供達はじつとその至高の存在を見詰め続けた。

そうして静かに歩みを進めた彼は玉座の前へと到着すると、その足を止めた。その瞬間、一部の守護者達は体がこわばるのを感じていた。何か起きるのではと、警戒心を咄嗟に抱いてしまったのだ。しかし、たつちは軽くモモンガに会釈をしただけで何もしない。

それに対し、それでも警戒心を抱きつつも、何事も起きなかつたことに彼らはこつそり安堵の息を吐いた。

それと同時に、至高の存在が帰ってきたことを素直に喜べない自身の心境変化に嫌な苦しみを覚える。そして、彼らは妬ましいという気持ちも含んだ睨みを、この場で動揺なぞ一切していない者達に送りつけた。

今この時、玉座のある壇上にて、立つことを許されている守護者達を。

玉座の右手側に居るアルベドも、左手側のパンドラズ・アクターも、その表情を常のそれから何一つとて変えていない。面を貼り付けたかのような完璧な微笑と、表情不明な唯の黒い三つの点そのものだ。ウルベルトの居る所より下にて、優雅な立ち姿を披露するデミウルゴスも、常と変わらないあくどい笑みをたたえていた。

仮に次の瞬間に騎士が牙を剥いたとして、彼らが何をし何を優先させるかなど、明白なことであつた。

しかし現状は、何も起きていない。また、何か起こす気も全くない様子の騎士に対して跪く守護者達は胸を撫で下ろす。何事も無く終わるのかと、ナザリックの誰もが内心ほつとしていた。だがしかし、たつちが玉座ではなく隅へと移動を始めたことで、彼らは一斉に動揺

し、ざわめき始める。

移動したたつちがナザリツクの者達と玉座側の境界線を睨むように立ったことで、彼らの落ち着いたはずの心境は、また簡単に困惑の色に変わった。

「たつち様……？」

「何故アノヨウナ隅ニ御立チニナラレテイルノカ……」

「お、お姉ちゃん、なんで、たつち・みー様は……」

「私に聞かないですよ！」

どこにも属さないような場所に立つたつちに対し、流石の守護者達も困惑と疑念の視線をたつちに送ってしまう。そんな彼らの疑問は、玉座からの声によって答えられた。

「まず説明しよう。たつちさんは正式に、アインズ・ウール・ゴウンに帰還はしていない。ウルベルトさんの時と同じく、客人待遇で受け入れよ」

ナザリツクの者達は、胡乱なる者を見るような視線を隠せず、不安げにちらりとたつちの方を伺う。ウルベルトが帰還する前なら有り得なかった感情が、ナザリツクの者達には芽生えていた。

その姿に、内心舌なめずりをする者達が居た。分厚い笑顔、もしくはポーカーフェイスでドス黒いその心を上手に隠すのは、忠誠を捧げる相手を既に選び取った者達だ。彼らには、全くもって迷いも不安も無い。

今は未だ愛しい仲間達だが、選び取った結果次第では敵となる、そのことに対しては些かの同情を抱きつつも、彼らは冷徹に周りの動向を見張っていた。

「次いで、これは今は関係ないのだが、せつかく皆が集まっているのだから伝えておく。……ウルベルト・アレイン・オードル、そしてデミウルゴス、前に」

名を呼ばれた悪魔達は、壇上から下りてナザリツク地下大墳墓の前の前へと歩み出る。ウルベルトは愉快そうに口元を歪めており、デミウルゴスは緊張しつつも誇らしげな様子だ。

今度は何事だろうか、しかし相手が相手なので不安ではなく好奇

心と喜びを胸に、ナザリックの者達はそわそわし始めた。

「ウルベルトさんにはナザリック遊軍隊の隊長を、デミウルゴスには副隊長を務めて貰う。そして、遊軍隊は第七階層の全ての者達が請け負うように」

一瞬の静寂、そして割れんばかりの拍手と咆哮が響き渡る。特に、第七階層の者達が居る場所からは、桁違いなものが巻き起こっていた。

「平時は今までと何も変わらない。だが有事の際は、ウルベルトさんとデミウルゴスの独自判断でアインズ・ウール・ゴウンにとつて最善と思える手を自由に行える権限を与える。報告から行動まで全て、自由だ」

歓声に対し軽く会釈をした後、デミウルゴスはモモンガに向けて膝をつき頭を垂れ、忠誠の儀を示す。

「遊軍隊副隊長のお役目、拜命させて頂きます。絶対なる勝利、そして永劫の繁栄を、御身に御約束致します」

その力強い言葉に、祝福と称賛を伝えるが如く、大きな拍手の波が再度巻き起こる。そして、続いてウルベルトがナザリック地下大墳墓の皆に向け優雅にお辞儀をした。偉大なる御方のそれに一瞬呆け、慌てて子供達は頭を下げ、そして祝意を示す。

「ウルベルト・アレイン・オードル様万歳!!」

「至高なる存在に忠誠を!!」

「第七階層の命は全て、ウルベルト様とモモンガ様に捧げます!!」

その声に礼を述べてウルベルトは、マントを翻し玉座へと向き直る。そして、モモンガに向かい、一歩進んだ。その靴音が、また玉座の間に嘘のように響き渡る。

それは嘗ての悪夢のような光景を思い出す姿だ。だがしかし、ナザリックの者達の心中に不安は一切沸き上がらなかった。ただじつと彼らはその光景に目を奪われていた。

玉座からモモンガも立ち上がり、一段下へと進んだ。

まるで神話のワンシーンを切り取った名だたる絵画を見たかのよう、ほうと感嘆の溜息をナザリックの子供達は思わず漏らしてい



た。

モモンガのスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが床を突く音が、響く。モモンガがスタッフを傾け、数段下で軽く頭を下げるウルベルトの左肩にそつと当てた。

「ギルドマスターと、アインズ・ウール・ゴウンに、このウルベルト・アレイン・オードルが絶対の勝利を約束しましょう」

その約束の御言葉だけで、ナザリックの涙腺を所有する者達は歓喜のあまり泣き始めてしまう。その胸に満ち満ちる喜びだけで、死んでしまっても構わないと彼らは純粹に思っていた。それほどに幸せだったのだ。

「有事の際は任せました、ウルベルトさん」

「ええ、任せてください、モモンガさん」

顔を上げたウルベルトとスタッフをその肩から上げたモモンガに、波のように徐々に大きくなる拍手が届く。

ナザリックの者達は咽び泣き、肉体の事情で泣けない者達は必死に拍手を鳴り響かせ咆哮を上げていた。中には喜びが強すぎて、ただ只管に至高なる方々をうつとりと眺めている者達もいた。

それは先程まであった客人として帰還した存在に対する不安への反動もあり、その熱はなかなか収まりを見せない。

「いやあ、参ったな。ただ任命されただけなのに、ここまで泣かれるとは…」

「とりあえずウルベルトさん、手を振ってあげて。ほら、テレビで芸能人がしていたみたいに」

「マジで？・やんなきや駄目？」

「子供達のためです」

ひそひそ話をばっさり切られたウルベルトは仕方なしに、子供達に向き直り手を振ってみた。結果、物凄く嬉しそうな子供達の声と拍手が一段とポリュームを上げて響いたのだった。

遠い目をしているモモンガとウルベルトを眺め、たっちはこれが何か異常が起きた故の過剰反応ではなく、常日ごろからナザリックの者達はああなのだど理解した。いや、理解せざるを得なかった。

ナザリツクの子供達に対し、軽く会釈をし手を振る悪魔はまるでファンに応える人気芸能人だ。投げ遣り気味だが、それでも子供達の望むまま手を振ってあげているウルベルトを見て、あの山羊でも気遣いとかできるんだなど、若干失礼なことを思いながらたっちは呟く。「……………これは、なるほど、これが話に聞いていた愛が痛い、か……………」

たっちが何事か仰せになったのが微かに聞こえた執事が、慌てた様子で早足でその傍に近づき、尋ねる。

「たっち様？如何されましたか？」

そんな堅物な執事の目尻にも、涙が浮かんでいるのを見て、たっちは愕然とした。

「…………マジか」

「まじか？」

「いや、何でも無い…。気にするな、セバス。ただの独り言だから」

「左様で御座いますか…？」

納得していない様子だったが、たっちが何でも無いと言ったためセバスはプレアデスのリーダーとして立っていた場所へと戻って行った。

少しして、場が漸く落ち着き、モモンガの咳払いが響いた。

肝心な話を一番最後に持ち出すのは間違っていないことだろうが、予定よりも草臥れているなど思考がぶれ、モモンガは再度咳払いをした。集中しろと自分に言い聞かせ、モモンガは子供達を見渡し、そしてたっちに視線を遣った。

そこでやつと、緊張感が帰ってくる。

「さて、次にスレイン法国を殲滅する件だが計画後半が大幅に変わったので今から説明する。この件に関することが理由で、たっちさんは一時帰還をしたので計画にも関わってくる。これからの説明が終わったら各自、自由に選んでくれ」

正式に帰還をしていないのに作戦に関わってくる、告げられた言葉に動揺を隠せない者達ばかりだ。

何よりも、モモンガの口から出た「選ぶ」という言葉。それにはや

はり、不安になってしまいう者達が多かった。しかし、彼らの愛する偉大なる支配者は変わらずどっしりと構えてあり、悪魔も余裕の笑みのままだ。それに対して喜びと安堵を抱きながら彼らは、その御言葉を賜った。

「黒と白の陣営、どちらか好きな方を」

そうして漸く、ナザリツクの者達にゲームルールの説明が行われた。

一国を盤上にしたそのゲームに、無垢な子供達は目を輝かせる。至高の存在と一緒に遊べるゲーム、それだけでも彼らにとっては垂涎ものだ。しかし、一抹の不安が彼らの瞳には確かに宿っていた。その不安げな視線は、壇上から離れた場所にいる至高の方へと静かに集まっていた。

その様子を眺め、セバスは溜め息を吐き出したくなるのを堪える。

あたかも不安も悩みなども無いのだと言わんばかりに胸を張り、堂々と立つことを頭のとっぺんからつま先まで意識した姿。執事としてではなく、造物主を支える忠実なる被造物として、彼はそこに立っていた。

ナザリツクの者達の様子をこっそり伺っていたセバスは、次に、玉座とその壇上にいる存在へと意識を向けた。

そこに居る悪魔は変わらぬ笑顔のまま、ドツペルゲンガーもポーカーフェイスのまま。しかしどこか、あの時と同じ、同情にも似た優しさが漂う表情に滲んでいるとセバスには思えた。

あの時と変わらない雰囲気を漂わす壇上の彼らを、セバスは見詰める。そして、ちらと再度たちをセバスは盗み見た。

先程、御方が何事か呟いた時は聞き逃してしまっていたことを、セバスは大変後悔していた。

身の程知らずなことだが、きつと偉大なる造物主は自分と似たような不安を抱かれてるに違いないと、セバスは考えていた。先程の呟きは、もしかしたらその不安を吐露されていたのかもしれないと。聞くことが出来ていたならば、ほんの僅かでも、御支えすることが出来たのかもしれないと。痛烈な後悔が、セバスの胸中にはあった。

「…」

無意識に俯いてしまい、セバスはふと、あの時に指し示された自身の足元を再度見詰めることとなる。そして顔を上げてまた、誇らしげに立つ守護者達に目を遣り、そして偉大なる創造主と慈悲深き支配者と絶対の君臨者とを見詰めた。

そして、殺し尽くすことを彼らを選ぶならと、決意した。自身は、生かし尽してみせようと。

尊き存在が殺し合うことも、尊き存在が胸を痛められるような殺し合いも、与えられた力を全て使って、止めるのだと。

自分は選んだと、意志を伝える如くセバスは睨む。それが伝わったのかは分からないが、確かに彼が笑ったようにセバスには感じ取れた。

スレイン法国を支える残された柱達には、その恐ろしい釣り針が見えていた。それに釣り上げられたら最後、骨も残さず平らげられてしまうのだと。

法国の領土を守らんとそびえ立つ城壁。魔導国属国領土と隣接するそれは、勤勉で真面目で、ケチであると評される領主に築かれたことを証明するかの如く、無駄を削ぎ落とされ、古いが改良を重ね続けた優秀な城壁だ。継ぎ接ぎの見た目が不恰好だが、魔法にも攻城武器にも対応可能であり、迎撃面でも優れている。他の国境付近領主達が学びに訪れ、その城を真似する程であり、それは領主の自慢でもあった。

そんな法国の盾として優れた壁近くには、とある日、夜明けと共に突如として大量のアンデッドの兵達が現れた。

まるで、おもちゃ屋の棚にずらりと飾られた兵隊人形のようなアンデッドの兵士達。それらは文字通り、果て無くギユウギユウ詰めめの状態で、国境に合わせて魔導国属国側にてそれらは敷き詰められていた。

その様子を見て、まるで国境に合わせ延々と続いているかのようだと誰かが冗談を言った。

その冗談が、事実だと判明した時、その調査結果を聞き届けた法国の誰しもが自身の目と耳と頭を疑った。しかし残念なことに、夢でも、嘘でも、冗談でもない。法国の領土を文字通り、アンデッドの兵隊が取囲んでいるのが悲しい現実だった。

平野にも、川にも、森の奥にも、山林にも、荒野にも、アンデッドだからこそできる荒業で、完全に法国を取り囲む形で兵は配置されていたのだ。申し訳程度に道と呼ばれる所には配置されていないが、その間を通り抜けできる豪胆な者などそうそういる訳がない。それま

であった行商人などの運行は激減したが、仕方が無いことだろう。

国内の人々はすっかり怯えきり、国の奥深くへと移動を開始した。しかし、それができるのは極一部の者達だけだ。生活拠点を簡単に変えられない庶民や、それこそ兵士として働く者達は、国境から離れることなどできやしなかった。

殺される、殺されるんだ、きつと。頭に浮かんだ後ろ向きな考えを、法国の兵士である男は必死に首を振って追い払う。それはもう、何度目かのことも分からない行為だ。

悍ましきバケモノを受け入れる醜い国、選ばれし血族を蔑ろにした愚かなアンデツドの魔導王。それらをいつの日か打ち倒す為に法国に亡命した誇り高き血が流れるのに、男の手は震え、すっかり冷え切っていた。

ちらと男は、受け持つ城壁上の見張り位置から魔導国側との国境を伺う。少し視界から外した間に魔法の様に消えてくれと願っていたアンデツドが大量にまだいることに、兵士はこっさり重い溜息を吐き出した。

遠くに見えるアンデツドの兵士達は、魔導国側曰く、城壁である。

『法国に怪しい動き有りと、国境付近の魔導国領民が怯えているので領土の境に見張りを置かせてもらう。あくまで見張りであり、アンデツドは攻撃されなければ何もしない。新しいタイプの国境の壁だとも思っしてほしい』

要約するとそのような内容になる一方的な通告が、魔導国から法国に送られたことは国中の噂になっていたので男も知っている。言いがかりと濡れ衣しか根拠にはなく、法国側の言い分は一切聞いていないそれは、あまりにも横暴だ。

神人とやらを出するなり神々の遺産とやらを使うなりして、あの邪悪なる魔導国をさっさと滅ぼせばいいのにと、男は国の上層部に対して不満を抱いていた。男が溜め込んでいるその不満や怒りは、国内で元々燻っていたものだ。そのため今回の一件で国民達は怒り狂い、神都はなかなかの混乱具合だと、神都から遠く離れた国境の城壁務め

の一兵にまで届いている有様だ。

「…それにしても、壁かあ。悪趣味だな、バケモノってのは」

「ハハ、言えてらあ。おつかれさん」

「おーう、おつかれさん」

男の独り言が届いた巡回兵の一人が声を掛ける。それに適当に男が返事すると、特に伝達事項も緊急事態も無かつたらしく、彼らはさっさと歩いて行ってしまった。

「まあでも、本当に壁なんだよなあ。…今の所」

魔導国側が堂々と言い放った、アンデッドの兵達は城壁であるという宣言。その言葉に一切の嘘は無く、アンデッドの兵士達は配置されたからというもの全くもって微動だにしない。

だがしかし、だからといって国境付近の法国の者達、特に城壁勤めや国境管理の役人や兵士達が、馬鹿正直に壁だと信じて安心しきる訳にはいかないのだ。

そもそも、動く死者の骨がぐるりと国を取り囲んでいるのだ。それだけで充分すぎるほど、落ち着かない、嫌になる光景だった。

「一体何を考えているのだね！上は！」

暫くの間アンデッドで構成された自称壁を見詰めていた男の耳に、怒鳴り声が飛び込んでくる。

その声は男が務める東城壁管理職の上官の声で、大変聞き覚えのある大声であった。近くから聞こえてきたため、気になってしまった男は数歩持ち場を離れ、城壁の下を覗きこみ様子を伺う。

壁の下では、ガリガリの男が上官に怒鳴られ青褪めていた。その男が身に着けている衣服は多少汚れているが、それでも何の制服なのか分からない程ではない。

領主も含む上層部との作戦会議にも顔を出せる、参謀補佐員だ。補欠含め何人かいる頭脳担当の一人で、有事の際には壁の各拠点で直接全体戦況を見極め指示を飛ばすことにもなる、なかなか重要な役割の人だ。

しかし最近は何かが大変だということ、それを言い訳に何人か消

えてしまっている。あの初めて見る者は、おそらく穴埋め要員として急遽雇われたのだろうと推測し、そして男は同情した。

「し、し、しかし、これはあの、」

「目の前にアンデッドの兵がずらりと並んでいるのに、防衛は最低限にまで減らし、兵士の休息時間を増やせだあ!?!なんでそんなことをしなきゃならねえんだよ!?!ああ!?!」

「ヒィッ」

枯れ木のような彼は何も言い返せず、踵を返すと馬に乗って去ってしまった。真つ直ぐに、城壁のさらに奥、領主の館がある方へと逃げ帰って行く。

別に隊長殿は怒っていない、ただ常に喧嘩腰なだけだと声を掛けてあげた方が良かったかなと、男は少し反省する。そして、逃げ帰った彼に対し心底不思議そうに首をかしげる隊長に、男は呆れ苦笑するしかなかった。

無自覚に乱暴な大男の上官殿と会ったばかりの頃は自分もビビりまくっていたなあと、男は昔のことを思い出す。

なにせ、上官殿は筋骨隆々の大男で、見た目もまるで熊が急に人間に成長したかのような野性味がある。しかも、戦闘能力も突出して物凄いのだ。武技と才能が揃うどころか、更には『戦闘を連続して行えば行う程に戦闘力が一時的に向上する』というタレントまで持っている。あの細っこい枝のような男なんて、片手で鼻歌交じりに一瞬で殺せると言われても信じられる程だ。

そんな男にがなり立てられ、平然としているという方が無茶な話と云えるだろう。

「しかし、休息は増やして欲しかったかなあ…」

母国の領土を守る城壁にずっと居る法国の兵士達を見渡せば、皆が顔面蒼白の有様だ。

実際には何事もなく日々が過ぎても、毎日毎日あのアンデッドの壁を見詰め囲まれていることを意識したら、気が狂いそうになるのも仕方無いことだろう。この非常事態に陥ってからというもの、食事もあり喉を通らず、夜も上手く眠れなくなっているのは何も男一人だけ



ではない。

まるでバケモノに暗がりの袋小路に追い詰められている様な感覚に迫られながらの日々では、普段と同じ業務も倍以上に疲れるものであった。

例外として、城壁近くがあんな状態で食事や睡眠がまともにもできているのは、アンデッドなど雑魚だと日頃から笑い飛ばす上官殿ぐらいだ。

「なっ、何をされているのですか!? 上官殿?!」

そのひっくり返った大声には、男も周りも何事かと驚く。今度は男だけでなく周りも集まって、その現場を覗き見た。そして、本当に一体何事なんだと驚いた。

あの上官が、恐怖を刻みこんだ顔で戦闘準備をしていたのだ。籠手をガチャガチャと雑に取付け、慌ただしく装備を整えていく。まるで、熟睡中に奇襲にあったかの様な慌てぶりだ。

「出撃命令など出ていないでしょう!? 何故急に、」

「喧しい!!」

怒鳴り声と共に放たれた上官の拳が、諫めていた兵士の顔を凹ませ、吹っ飛ばした。壁に打つかって崩れ落ちた彼の顔は、見るも無残なことになっている。

それに対し何故だと、様子を覗っていた兵士皆が動揺する。男もそうだった。

確かに、がさつで少し頭が悪くて頭を抱えることもあるが、上官は善良な人だ。

納得いかない命令に従わないことはあっても、それは自分達一兵を蔑ろにするような上の発言に対する抗議だったり、理不尽なものは一切無い。今だって、部下のことを気遣い夜中の見回りを自分の時間を削ってまで行ってくれている程だ。

「なんで、そんなことを…!」

「分からないのか!」

睨み付けられた兵士は怯え、息を呑む。

「このままじゃ、殺されるんだ!! 俺達はあのアンデッドに殺される!!」

殺される前に殺さないといけないんだ!!」

無茶苦茶だと言うことが出来た兵士は誰もいない。しんと静まりかえるが、一人の兵士が唐突にぼそりとつぶやく。

「そうだ、このままじゃ、殺されるだけなんだ」

何かが伝染したかのように、騒ぎに集まっていた兵士達が一斉に慌てて動き出す。それになぜだと言う前に、まるで後ろから怪物のギョロリとした目玉に睨み付けられたかのような恐怖が男を襲ってきた。

恐怖に襲われた男も何も考えず、切羽詰まった様子で戦闘準備を開始した。ただ恐ろしくて、ただひたすらに死にたくなくて、その手足を動かす。

そこに理性などなく、混乱と恐怖に支配された兵達は本能のままに突き動かされているだけだった。

たいした間も空かずに、城門はたやすく開かれた。とは言っても、当然要の正門ではなく男の上官が担当する東城壁小門だけだ。そのため、細長く出来た小隊がそこから蛇のように飛び出ることになった。

本来ならば許されるはずの無いその行動に、しかし男は罪悪感も後悔もしていなかった。恐怖に尻を叩かれる仲間達と同じく、その心も頭も、純然たる恐怖に支配され理性など働く余裕も無い。

正門方面からけたたましく鐘が打ち鳴らされる音と数多の怒鳴り声が届くが、恐怖に目を血走らせる部隊の馬を止めることは、できやしなかった。

馬を全力で走らせた部隊は、統率や警戒に一切配慮をしていなかった。ただけあって、あつという間にアンデッドで出来た自称城壁に到達した。そして間髪入れずに、一方的な攻撃を始める。

まるで今までの恨みを全て晴らすかのように、法国の兵士達は喧しくアンデッドに凶器を振るっていった。

攻撃が始まればアンデッドも抵抗するかと思われたが、そんなこともなく、僅かに動くだけで抵抗しない。まさに唯の脆い壁の如きアンデッドは、兵士達によって続々と打ち倒されていく。

アンデッドが減るに連れ、兵士達は散らばっていった。今まで苦し

められてきた原因を殺せて、兵士達の気持ちは興奮と歓喜に満ち溢れていたのだ。もつと、もつと殺させろと餌を望む家畜の如く法国の兵士達は兵としての統率など捨てて唯殺し、嬉々として馬上から槍を振るっていた。

最早何体目か分からないアンデッドを弾き飛ばし、男はふと首を傾げる。

「…なんだ？」

先程から蜘蛛の子を散らすようにアンデッドがガシヤガシヤと動き出していたのは、男も周りも気づいていた。しかし、反撃はせずに変わらず蠢くだけなので、特別気にはしていなかったのだ。だが、その蠢くアンデッドの群れ内に生物が紛れ込んでいるのに男は漸く気が付いた。

人間がぼつんと立っているのだ。いや、よく見れば亜人もいることに男は気付く。兵士ではなく村人の様な格好を、その者達はしていた。

「あつ、」

なぜアンデッドみたいにろくに動きも逃げもせず、しかもこんな国境付近に居るのかと疑問に思う前に、狂戦士と化している同僚がその首をぼんと跳ねてしまう。

その光景を切っ掛けに、恐怖や興奮が冷めてきて男は冷静になる。何か得体の知れない不安に襲われた男は、寄る辺を、少し様子がおかしかつたが、それでも強い上官を探し始めた。

そして見つけた上官の馬が向かう先にも、やはりアンデッドではない、蹲った子供達が2人いるのが見えた。

「いや、人じゃないな。…あれは、あの耳は、エルフか？」

魔導国領土の子供達は共に深く帽子を被っているが、おそらく兄妹のエルフだろうと、飛び出る尖った耳とその服装や抱きしめ合う姿から推測できた。

あれならきつと槍で刺し殺す前に馬に跳ねられて死んでしまうだろうなど、男はぼんやり思う。

子供だが、所詮はエルフだ。人間の奴隷としてあるべき種族が魔導

国なんぞで調子に乗るからそんな目に合うのだと、冷めた眼差しで、数分後には儚く散るであろうその生命を男は眺めていた。

「なんだ、あれは」

間拔けな顔をした同僚の真似をして、男も上空を見る。

上官殿の上空に、蝙蝠の翼を生やした銀の尻尾を持つ蛙頭の気持ち悪いバケモノがいた。しかしあの細身、それに距離を思えば何もできなさそうな存在だ。

「悪魔の諸相：豪魔の巨腕」

驚いたのと、上官が吹っ飛び地面に叩きつけられるのを見たのは、男には同じ瞬間に思えた。

突如として腕が巨大化したそれは、スピードを上げ瞬く間に男が寄る辺としていた上官を弾き飛ばしていた。

男以外のまだはしやいでいた者達の勢いが止まり、急に兵士全員に冷静さが帰ってくる。命令を無視して飛び出し、一体全体自分達は何をしているのかと。

平然と腕を元の形状に戻した悪魔は、エルフ達を庇うように立つと、口を開いた。

「法国の宣戦布告ですか」

綺麗な声が、別段張り上げて出していないはずなのに、なぜか全兵士に響き渡るほど明朗に伝わる。

「せ、宣戦布告です…!!ば、僕達、法国の兵士に殺されるかと思いましたが…!」

「間違いありません!その男は法国の兵士、その兵士が魔導国の者達を一方的に襲っていました!宣戦布告以外の何だと言うのでしょうか!」

続いた糾弾の声は、その刺々しきに見合わないほど幼さが残っている。それでも、その言葉が突きつける現状は変わらない。

「ああ、なんということでしょう…。私めが、国境付近の地理に詳しいからと村の者達の言葉に甘え、こんな所まで連れ出さなければ、彼らは死ななかつたのに…!私めが目を離した僅かな隙きに、法国の兵士共が、このような蛮行に出るとは…!」

その悪魔の如き見目から想定できないほどに嘆きと悲しみの滲んだ声で、その台詞のような痛恨の言葉は述べられた。

そのバケモノに抱きしめられたエルフの子供の肩は、憐れみを誘うように震えている。

そこでやつと恐ろしいことに気付き、男は辺りを見渡す。無数のアンデッドの残骸と人間や亜人の死体が積み重なる平野に、血を浴びた法国の兵士達がいる惨状が、周囲に広がっていた。

「なんたる…なんたることだ…」

声のした先にいたのは、この場で最上の飾りを施された馬に乗る老齢の男、あの城壁の防衛、管理における最上位に座す男だ。僅かな従者だけ引き連れ飛び出したようで、綺麗な衣服は見窄らしく思えるほどに乱れている。

その白髪と髭と同じく真っ白になった顔と絶望の呟きに、周りの法国人達は終末の来訪を悟らざるを得なかった。

「ま…、待ってほしい、違うのだ、これは…!!」

最早言葉に何の意味も力も無いと分かっているながら、老人は言葉を続けようとする。垂らされていた餌を、馬鹿正直に食った愚か者が自分達の配下に居たことを認めなくなかったのだ。

「これは、貴国が突如設置したアンデッドに怯えた哀れな兵士達が、勝手に動いただけだ！」

一部の法国要人達は今、必死に国内のバランスを調節をしている。人員配置の調整から魔導国に対しアンデッドの撤去を依頼する為の使者の準備に、残された有能な者達は駆けずり回っているのだ。老人はそれを分かっており、だからこそ必死に食い下がっていた。

自身の失態を償うためにも。

法国を生き延びさせるためにも。

「何はどうあれ、アインズ・ウール・ゴウンの国民を殺した時点で、それは宣戦布告と同義です。我らが偉大なりし王は、狭量なるそちらと違い、如何なる種族の民も等しく扱っていらっしやる。大変慈悲深い御方なのですから」

小バカにしたように嘲笑う蛙頭に、男は恐怖を越えて怒りを覚え

る。

「ああ、まったく。魔導国の民を殺すとは…、なんと罪深いのか」

まるで舞台上にいる役者の様に、明朗な声を場に響かせながら美しく、妙に耳障りの良い声でバケモノは朗々と語る。そして、先程吹っ飛ばされた隊長の男へと近寄った。蛙頭が何事か呟くと、その黒い指先が嘘のように伸び、尖った。

地面に横たわる気絶した隊長の首に、そつと、その尖った爪先と思われる何かが、添えられる。そして、その行為の意味を見詰める者達が理解するより手早く、そして容易く、その太い首は切り落とされた。

それはほんの一瞬の出来事であり、手首どころか細く尖った指一本を動かしただけの行為だ。しかしそれでも、たったそれだけで、隊長が死んだのは事実であった。

怒りが爆発した男は、雄叫びを上げる。理性を失った彼の眼には、焦る老人も、その可愛らしい見目に似合わない歪な笑みを浮かべながら寄り添う双子のエルフも映らない。

「おぞましい魔導国のバケモノ共め!!好き勝手しやがって!!本来なら人間に殺される側のお前らが、何を偉そうに振る舞っている!!」

その勇ましい声は、思わぬものを揺り起こした。それは溜まりに溜まった鬱憤だ。兵士達は嬉しそうに、怒りを爆ぜさせた男の後に続く。

それとは真逆に、老人は馬上でその瞳から光を失い、項垂れ力も抜けて手綱から手を離していた。

「バケモノ共め!我らがスレイン法国の、人間の力を知れ!!」

「そうだそうだ!!」

その声に、それはそれは嬉しそうに魔導国の悪魔は応える。まさに舞台役者がここぞというクライマックスに、より一層声を張り上げるかの如く。

「さあ!法国兵士の皆様、神都の方々に伝令を!我々魔導国は、貴国からの宣戦布告を、確かに受け取ったと!!」

ほんと、軽やかに投げられた首が空に弧を描きながら飛ぶ。そして絶望する馬上の老人へとぶつかりかけ、撥ねられ、地上へ落下した。

「七日後の夜明けと共に、アインズ・ウール・ゴウン魔導国は侵攻を開始します!!」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国からスレイン法国への宣戦布告は、神都にて人類最後の砦としての矜持を抱く者達の耳に雷の如き速さで届き、そして轟いた。

「ふざけるな!!!ちくしょう!!」

吐き捨て、神官長の一人が手を痛めるほどに机を叩きつけた。その何の意味も成さない罵詈雑言と行為に対して誰も何も言わないことこそ、彼らの心情を如実に現していた。

「もう、後悔しても遅い」

苦虫を噛み潰した様な顔で、搾り出されたその声に追従する声が続く。しかし何人かは、焦りと怒りを抑えられずに罵詈雑言を続けるばかりだ。

「止めないか!今更腹を立てても何の意味も無いだろう!確かに、どう考えても何か仕組まれたのは明白だ。だが、それをどうやって証明し、そして仮に証明できたとして、誰が責められる?この辺りで属国となっていない国など、ほとんど居ないと言うのに」

その冷静な指摘に、やっと場がにわかに着き始めた。しかしそれでも、現実を認められない神官長の一人がねちねちと過去を責め立てる。

「やはりもつと早くに攻めるべきだったのだ…!周りの奴らが腑抜ける前に、せめて足場で火事でも起きれば…、」

「だから、今更それを言うて何になるよ。だいたい、当時はそれどころでは無かったわ。…ああ、いや今もか…」

その実り無き会話を聞き、そう言えばと一人の男が、魔導国に忍び込ませているスパイを管理する女の神官長に顔を向けた。

「内乱はどうだ?起こせないのか?」

「無理です」

にべも無いその返答に、落胆の声が自然と周りから漏れ出す。しか

しその返答は各々薄っすらと予想はしていた様子で、誰も食い下がり  
はしなかった。

「法国が魔導国の民を一方的に蹂躪し、魔導国の王に仕える参謀が自  
ら体を張り国民を守った。驚愕の美談が既にあちこちで流れていま  
す。内乱の火付け役になる予定だった者達は皆、自分達が袋叩きにさ  
れるだけだと協力を拒否する有様です。…そもそも、火付け役が頑  
張ってくれたとして、小火も起こせるか怪しいですけどね」

最後には自嘲まで混ざったその言葉が終わると、溜息が重なり、そ  
して威厳ある老いた男の声が響いた。

「この王都を砦として戦おう」

その毅然とした態度に、俯き気味だった全員がハツとして、姿勢を  
正した。そして、実りの無いただの後悔と悪態を垂れ流すことを止  
め、現状の最善策を考え始める。

「…貴重な戦力を集結させるのは賛成だ。下手にバラけさせるよりは  
良い手だろう。土地が荒らされるのも避けたいしな」

「法国の復興に備え国土を汚さないためか、だとすると…、この王都の  
決戦場で我々は見世物になるのだな」

何人かが首を傾げ、それを見咎めた者が仕方なしに解説する。

「魔導国のバケモノ共に我らに残された力、貴重な品々、それらを全部  
見せつける。そうして我らの価値を分からせるのだ」

「暫く戦った後に属国になると敗北を受け入れれば、一部の国宝は奪  
われるかもしれんが法国は残る」

「なるほど」

それが生き残る為の上策だと纏まりかけたが、露骨に嫌そうにして  
いる声が横から出てきた。

「敗北、しかないのか」

「もちろん勝機があれば攻撃に転じる」

「勝機があれば、ねえ」

嫌味なその言葉を窺める者はいない。不愉快そうにしつつも、その  
神官長が面白くないと思うように、法国に残った人間を愛する者達に  
とつても、この事態は面白くはないことだった。



「国民には、七日以内に王都に向かうか、法国から脱出するように指示を出す。もちろん、王都を戦場とすることも合わせて通達を出すつもりだ」

既に混乱の坩堝と化している神都内の管理を任せられている神官長の男が鈍く呻く。胃がある辺りを青ざめた顔で擦る彼には、さすがに誰も声を掛けられなかった。継るように視線を向けられた隣の女など、露骨に目を逸らしたほどだ。

「それにしても、民に酷い選択をさせることになってしまったな」

「ああ…、まったくだ」

王都にて戦争に参加し勝つ方に賭けるか、法国を脱出し生き残る方に賭けるのか。

それとも法国領土内に隠れ、魔導国の兵士にも見つからず法国も魔導国から勝利、もしくは属国提案を受け入れてもらえると祈るのか。

国が民に選ばせるにはあまりに残酷な、命懸けの選択肢だ。

「さて、忙しくなるぞ。残された時間で人類が生き残る為のありとあらゆる手を打つのだ」

そう言った最高神官長が、窓の向こうの斜陽に目を遣る。

残された時間の少なさを語るような夕暮れはしかし、空の裂け目から炎の灯りが漏れでるようで、美しかった。これから訪れる闇に対して、せめて最後にと添えられたかのような光る赤。同情でもあるように、無情にも思えるような、憂いを抱かせる天空。

国の終わりが近付かんとしているような時でも、それでも、やはり太陽はいつもの通りに美しく沈み、ただ、夜を迎えた。

アインズ・ウール・ゴウン魔導国が通達した開戦の狼煙が上がる朝は、今までと何一つ変わらない、日常の風景と共に訪れた。

太陽は問題なく狂い無く昇り、空は濃紺から水色へと変わっていき、風も優しく吹いて、花は光を得ると同時に咲き始めた。しかし、より正確に言えば、変わらないのは自然界だけだ。

スレイン法国の人間達は誰もが顔を青くし、今にも吐き戻しそうな顔色をしていた。

法国の神都城内一室で、地図を広げ、駒を動かし、戦略を見直していた軍師は重たい溜め息を吐き出す。

「……」

ありとあらゆる最悪のパターンを考えたが、それでも彼には、考え足りない気がしていた。

城内に留まるため急遽用意された今は軍師の部屋となっている元は来賓が宿泊する用の一室は、地図と今までに判明している魔導国の戦力が記載された紙などが散らかっている。その散らかっている、推論まで含む膨大なデータを頭に叩き込んでも、勝利ではなく敗北と属国宣言を指摘していても、それでも不安が彼には強く残っていた。

眉間にしわを寄せ、唸っていると、唐突に部屋の扉が乱暴に叩かれ彼は目を見開く。こんな朝っぱらから何事だと、眠れずに結局は徹夜をしてしまった不機嫌さそのままに応える。しかし、小さく唸るようなその声は扉の向こうに届かなかつたらしく、激しい音は止まない。

「喧しい!!何事だ、入れ!!」

朝の洗面一式や着替えの準備をするメイド達は、文字通り実家に帰ったのか消えてしまっている。男は苛立たしげに、適当にベッドのくたびれたシートで顔を拭った。

「し、失礼致します!・早朝からの無礼は緊急事態であるが故お許し」

「ええい、いいから要件を言わんか!!」

「そ、外に魔導王がいます!!」

暫し呆然とした後に、男は部屋から飛び出す。呆然とする兵士を怒鳴りつけて先導させ、そして必死に走りながら怒りのままに叫ぶ。

「なぜだ！一日目だぞ！魔導国側との国境には幾重にも兵が、いやそれどころか神々の遺産すらもあつたはず！」

法国の戦力を見せつけながら神都にゆるゆると後退、それが一日目から大凡三日から五日かけて行われる予定だった。幸か不幸か最終決戦を神都でと定めていたので、そこまで危機的状況ではない。だがしかし、あまりに唐突で、想定外な出来事というのは戦局に予想外の影響を与えるものだ。

長い廊下に舌打ちと罵声を浴びせながら走り、案内された城壁上へと汗だくになりながら階段を上がり、彼は到着する。

到着してすぐに、バケモノはどこだと軍師はわざわざ尋ねなかった。呆然と見つめる兵士達の視線の先を追えば、そこに当たり前の様にして死の象徴が居た。

「あれが……」

何をぼんやりしているのだと怒鳴ることも忘れ、彼もつい、その圧倒的存在に視線を奪われた。

東の空、朝焼けを背に、まるで後光を背負うように魔導王陛下が中空にいた。

空に浮き、黄金の杖を持ち黒いローブをたなびかせるその様は、まるで死の神がお迎えにきてくださったかのようだ。誰も彼もが、敵に対する感情ではなく、神に抱くような、ただの畏怖をその胸に抱いていた。

そして、魔法で拡声された魔導王の声が響く。それによつてやつと、法国の幾人かが我に返った。

「やあ…、おはよう、スレイン法国の諸君！」

ばさりと深紫のローブを翻しながら片手を上げるその大仰な仕草は、戦時中の敵対国の王が現れたというよりは、何か舞台が始まったと錯覚しそうな程だ。

「いや…、これからの君達の末路を思えば、おやすみ、の方が正しいかな？」

戯けた調子のブラックジョークに、一気に法国の者達は怒りを覚え、やつとのごとで憎悪と共に骸骨を睨んだ。神経を逆撫するには充分すぎる態度と発言に、呆けていた者も怯えていた者も、沸き上がった怒りを原動力に立ち上がる。

「巫山戯おつて…！」

直ぐにでも出撃をと、軍師の周りの兵士達が沸き立つ。それを軍師は喝を飛ばし、諫めた。

「落ち着け！今ここで突貫したらあのバケモノ共の思う壺だ！」

その叱責の声に部下達も冷静さを取り戻し、続く命令の言葉を待った。

「至急、神都全戦力の戦闘準備！城壁の魔法防御を展開させろ！その伝令兵、宿舎で寝てる奴らに水を被せて叩き起して来い！全門、全壁に配置させろ！」

伝令役は短い気合の入った声で応えると、その自慢の足で全速力で駆けて行った。

「偵察隊も準備でき次第即刻出せ！」

力強い兵士達の応える声が轟き、一斉に臨戦態勢へと動き出し始める。防御や精神系の魔法が飛び交い、戦士達の目が次々に爛々と闘志を燃やしていく。しかしまた、絹を裂くような悲鳴が上がり、彼は苛立ちを隠さず舌打ちした。

「ああつ！あれを！あれを!!」

壊れたように絶叫する一兵の指示す先、小高い丘の上に現れたそれは、認めたくないが、確かにイキモノらしく歩行していた。

しかしそれはきつと、生まれてきてはいけなかった何かだと、それを見てしまった誰もが確信した。その黒く醜いバケモノは、その見た目にはそぐわない愛らしい仔山羊の声で鳴いている。そんな生き物など存在しても許されるのかと、怒りを覚えるほどに醜悪だ。

「あ、あ、あれはまさか伝承に聞く、七万の軍を瞬殺したという、魔導王が飼う山羊、なのか!？」

「ふざけるな！あれのどこが山羊だ！」

ヒステリックな声は留まるところを知らずに、城壁全体へと広まっていく。先程勇ましく応え、勇ましい表情を見せていた者達すらも、呆けて手を止めバケモノを見つめてしまっている。

「落ち着かんか!!あれぐらいなら、神都の内にいる我らは恐るることなど無い!!」

その再度の喝に、そうだとそうだとやつとまた兵士達に僅かながら活気が戻る。

「そもそも見ろ！山羊はたったの二匹!!嘗ての惨事では五匹も居たと聞くのに、あの有様!!この戦争も、弱ってきた自戦力に焦った魔導国側の必死のあがきに過ぎぬぞ!!滅ぼせ!!戦え!!我ら人間こそが神に選ばれた種族だ!!」

全ででつち上げ、適当に思いついたそれらしい言葉を並べただけの、はったりだ。しかし、死線を目前に控える兵士達は当然、何も言わず考えずに勢いの濁流に乗っかる。気合を入れるために、咆哮がいくつも上がった。目前の悪を討ち滅ぼすためだけのことを、思考しよくと、兵士達は武器を握りバケモノへの殺意を滾らせる。

「ん…？」

魔導王が身動きし、どこからか唐突にその手いっぱい収まる玉を取り出していた。それは何か禍々しいオーラを出している訳でもなく、ただの透明な、微かに光を内包する綺麗な硝子玉にしか見えない。「おい、魔法知識のある奴で何か分かる者は居ないのか！」

その呼び声に、誰も答えぬまま、その硝子玉はひよいと軽く放り投げられる。するとそれから魔法陣が浮かび上がり、そして次の瞬間、閃光が弾けた。

何が起こるのかと睨み続けた法国の誰もが、直ぐ様に後悔することになる。光が、痛いほどとなった所でやつと目を瞑ったが、それはあまりに遅すぎた。文字通り真つ白な世界が生まれ、それをもろに見てしまった神都にいた者達は皆、視界を潰されていた。

「くっそ…!!誰か!!誰か無事な者は居ないか!?下に居た、目が潰れていない者達は上がってこい!!」

激しく痛む頭部に歯を食いしばりながら、軍師は叫んだ。しかし、慌ただしい足音、うめき声ばかりが巻き起こるだけで、事態は最悪の一言だった。パニックになってしまったのか近くで何かが崩れる大音までして、彼は舌打ちする。

そして、これは法国内のパニックではなく、敵からの攻撃だと分かる轟音が軍師の体を揺らした。さすがに硬直してしまい、息を荒くする軍師の肩に、突然手が置かれる。

「軍師殿!!」

「報告しろ!!何が起きている!!」

「な、何か分かりませんが、先程丘上の空に何か、人間ではない、魔導王でもない、異形がいたのを一瞬見ました!!けど、もう何も居ません!!」

「…はあ!?何を馬鹿なことを!!気でも狂ったか!!ここまできて、撤退したというのか!」

それは有り得ないことだった。唐突の事態に法国側は未だ混乱状態が続いているのだから、攻め時と言っても誤りは無いはずだ。仮に途中で去るとしても、法国の混乱が収まるまでは可能な限り攻め込み、戦力の調査と削りを行うのが常套手段だろう。

この惨状を前に狂った兵士からの報告かと、男は呆れと怒りを抱く。しかし、嬉しそうな報告は止まること無く続いた。

「本当です!!確かに先程攻撃を受けておりますが、しかし、余り被害はありません!攻撃も止んでおります!」

そこまで言われ、やつと彼も周りが徐々に静かになっていくことに気が付いた。最初の攻撃から続くような衝撃が一切無いことにも、やつと頭が回る。

「城壁から落下した者、何か巨大なものが貫通したと思われる城の破壊跡、瓦礫に潰された者が居ますが、ですが、魔導王も何もかも、丘周辺から消えているのです!!」

「なに?」

軍師は必死に痛む目を細め、先程までバケモノどもがいた場所を睨みつける。霞む視界ではよく見えないが、黒い何かが無いのだけはポ

ケた視界で辛うじて理解できた。まるで悪夢から覚めることができ  
たように、ただの朝日といつもの風景だけがそこにはあった。

「まさか、本当に弱っているのか…?」

自分の言ったことが、当たっていたのではと思ひ至り、もはや彼は  
興奮を抑えられなかった。雄叫びをあげて、その握りこぶしを天に突  
き上げる。

その握り拳の先、天空で〈完全不可知化〉を使ったモモンガと、〈不  
可視化〉効果のあるアイテムを纏うウルベルト・アレイン・オードル  
は〈伝言〉を使い会話していた。その声音は、友と語らうには相応し  
い、朝焼けのなか駆けてゆく風のように爽やかで優しく、落ち着いた  
ものだ。

『久し振りに見られますね、ウルベルトさんの魔法が』

『ええ、楽しみにしてください、モモンガさん。これからお見せする  
究極の災厄は、魔導王陛下への、プレゼントですよ』

唐突なプレゼント発言に、モモンガはきよんと自分より下に居る  
ウルベルトに視線を遣る。スキルで見えているモモンガと違い、ウル  
ベルトは適当に見上げているだけなので視線は噛み合わない。だが、  
ウルベルトは愉快そうに笑っていた。

『魔導王陛下就任祝、そう言えば、送っていないかったですしどう?』

そんな冗談を交わしている場合ではないのだが、注意もせずに楽し  
そうにモモンガも笑い返す。

『あははっ、そうですね。ありがとうございます、ウルベルトさん』

『物凄い出世ですよねえ、社会の底辺かつ平社員から王様って…』  
『もうそれって出世って言わない気がしますけどねえ』

のんびりとした会話を交えながら、モモンガはその出世祝とされる  
プレゼントが渡される瞬間を待った。その心内にあるのは、純粹な喜  
びと、予想外のことが起きないことを願う少しの心配ばかり。

そして、ウルベルトがこれから使用する予定の魔法はとても好き  
だったため、純粹にモモンガはわくわくしていた。テスト使用時も相  
も変わらない破壊力を誇っていたあれが、この神都に齎す破壊は如何

程のものなのか、楽しみで楽しみで仕方なかったのだ。

そしてそれは、ウルベルトも同じことだ。

目の前にある神都は、人間が大多数の人間のために、身勝手な取捨選択を繰り返し栄えた、虫唾の走る国の都。切り捨てた存在を、無かったことにした事実を、必要な犠牲だったと宣う国。

それを、悪魔の無慈悲な暴力で無に返し、ぐちゃぐちゃにできるのかと思えば、腹の底からどす黒い喜びが湧き上がってきた。

そしてウルベルトにとって何よりも楽しみのは、その国の屍の上に幸福の国を築くことだ。

黄金と蜜で満たされた豊かで幸せな国を創り上げ、未来永劫に法国の努力を、その殺戮を、その正義を、嘲笑ってやれるのが、楽しみで愉しみで仕方がなかった。

「おやすみ、最期の時に最高の悪夢を…、ゆっくりと、」

悪魔が、優しい声音で空から、寝かしつける母のように語りかける。そしてニヤアアと、神都一つ平らげるに相応しい牙を剥き出しにして、寧猛に、嗤った。

「たっぷり、愉しんでくれたまえ、スレイン法国の諸君！」

歪んだその口元から、終極の言葉が告げられる。

「―――〈大災厄〉」

それは、ワールド・デイザスターを最高レベルまで修めることで得られる、最大MPの60%を使う超大技。かつてユグドラシルで使用された時には、80〜90代レベルの体力満タンドった強大な精霊と星霊を一瞬で消滅させ、それを召喚したボスの体力まで大幅に削った、超位魔法を凌ぐ力。

世界から零れ落ちた葉の憎悪によって形作られた、物理的な現象となるまで圧縮された呪詛、純然たる破壊エネルギーの渦。

それが、神都に、落ちた。

一体誰が、その世界を地獄以外の何かで例えようとするだろうか。

それは、まるで神の筆で一瞬で世界が上書きされ、塗り替えられた様だった。

先程まで確かにあったはずの命の気配は消え去り、残ったのは静



寂。全ての生命体は生きることを受け捨て、人はその顔に拭い難い絶望を刻み込んだ死に顔を晒していた。建物ですら、まるで何百年も昔の遺跡のように風化し、つい先程まで法国の富と力を誇示するために在った物だとは、とても思えない有様だ。

死と絶望と憎悪が行脚し、蹂躪し尽くした果の終局、それがこれだと説明しても足りぬほど。そこに救いは無く、命は灯らず、希望の御旗は掲げられない。ただ一言、終わりとはこれのことと言われた方が、人々は納得するかもしれない。

ある種の美しい光景に、賛美の拍手が響き流れる。

骸と廃墟の上で拍手を送る相手に、ウルベルトは自身を隠していたアイテムを外し、軽く会釈し、誇らしげにする。

「やっぱり格好いいですね、ウルベルトさん！」

「ありがとうございます、モモンガさん。自分も久々にこれが使えて嬉しいです」  
はしゃぐモモンガだが、しっかりとやるべきことは済ませている。

門番の智天使を召喚して待機させており、周囲を警戒させていた。下では〈転移門〉から仔山羊とナザリツク・オールドガーダーが現れ、神都内と周囲の探索と警戒を開始していた。

「それじゃあ、皆待っているだろうし行きますか」

「お迎えも来たようですよ」

ウルベルトが指した方向に顔を向ければ、彼の生んだ悪魔が飛んでくるのがモモンガにも見えた。やって来た悪魔は空中でも丁寧にお辞儀をすると、さっそく賛辞の声を並べ立てた。

「大変素晴らしい魔法で御座いました、ウルベルト様！その偉大なる御業を拝見できただけでも、このデミウルゴス、歓喜に打ち震えております…！」

すっかり興奮した様子の悪魔に、アンデッドも力強く頷き同意する。

「うんうん、分かるぞ。やっぱりウルベルトさんの魔法はかっこいいよな。最後のとどめて感じがまた…」

「いやだなあ、褒めても何も出ませんよ。それよりも、下で皆が待っているから行きましようよ。褒め言葉は、後でゆつくり頂戴しますから」

「そうですね。ゲームが終わったら皆でまたお茶会しましょう」

指摘され本来の目的を思い出したデミウルゴスが、慌てて手を地上に向ける。

「失礼致しました。皆が待つております。さあ、どうぞ、こちらに御越し下さいませ」

デミウルゴスが先導し、モモンガもウルベルトも移動を開始した。招かれた先の丘の上では、天空から下りてくる愛しい殿方を見つめるアルベドと、腰にある剣に手をかけるたち・ミーが待つていた。

その後方、丘を下りた先のなだらかなった場所には、六台の馬車と数多のアンデッドが並んでいる。

馬車は純白と漆黒の三つずつ左右に分かれているが、配色の違い以外は同じ装飾と大きさ、造りの物だ。

一台は異様に大きく、アンデッドの馬が四体繋がれている。少し傾いた半円状の屋根がない乗車部分を中心に、前に御者の席があり、後ろには中心より高いところにある座席と、その背からカーブを描き被さる幌があつた。その幌は滑らかに輝き、垂れる半透明の薄地と宝石飾りがそれはそれは美しいものだった。だが美しいだけでなく、その垂れ下がる宝石一つ一つに、攻撃の反射をする魔法が仕込まれており、薄地には向こう側に居る存在の認知を阻害する術がかけられていた。

残る二台は二頭引きであり、半円の上に四角い箱が載せられた形状だ。前の高い位置に御者の席が、後ろには荷を入れるための箱が備え付けられている。

そして、それぞれの馬車には所属陣営を示す細長い燕尾型の旗が掲げられていた。

漆黒の馬車の旗は、黒地に赤い縁と細い十字架が描かれている。

純白の馬車の旗は、白地に青い縁と剣のシルエツトが描かれていた。

そんな馬車の周りに居るのは、死の騎兵と蒼褪めた乗り手達、アンデッドだ。馬車が風変わりなせいもあって、軍の隊列というよりは曲芸団の一座の方に感じ取れる雰囲気は近かった。

そして、馬車の一団より丘上に近い所で、各陣営に参加するナザリックの者達が、同じく出立の時を待っていた。その参加者達も、自身が所属する陣営側に、左右に分かれて立っている。

純白の馬車側に立つのは、ナザリック地下大墳墓の執事であるセバス・チャン、第九階層戦闘メイドであるユリ・アルファ、そして同じくシズ・デルタ、それからメイド長のペストーニャ・S・ワンコである。

漆黒の馬車側に立つのは、第一、第二、第三階層守護者であるシャルティア・ブラッドフォールン、第九階層戦闘メイドであるソリュシャン・イプシロン、そして同じくエントマ・ヴァシリツサ・ゼータであった。

たちちを除いて、皆が恭しく頭を下げている中に着地し、ひとまずモモンガは頭を上げるように指示を出した。そして、自身と同じくゲームの審判を務める側のアルベドに問い掛ける。

「さて、現状何も問題は無いということが良いか、アルベド」

「はい、計画通りで御座います、モモンガ様」

よしと頷き、モモンガはウルベルトとたちちにそれぞれに順に顔を向ける。

「いよいよゲーム開始ですね、モモンガさん」

「いつでもどうぞ、準備は出来ていますよ」

ウルベルトとたちち、それぞれから、ゲーム前の興奮を隠せない様子の高ぶった声が返ってきた。

「わかりました。早速始めましょうか。それじゃあ…」

そう言つて、モモンガが取り出したのは銃身が太く短いピストルだ。それを天に向けて構えれば、何をしようとしているか分かったウルベルトとたちちが愉快そうに笑った。

「あはは、さすが凝り性のモモンガさん」

「懐かしいですね、それ。確か肝試しの時に使ったヤツですよ」

「ん？あー、ペロロンチーノさんが物凄い悲鳴あげてた、あの時のか」

「あの時のタブラさんと茶釜さんのタッグはえげつなかったですから

ね…」

「あれはさすがにペロロンチーノさんに同情しましたね、トラウマになっただって本人も言っていましたし」

懐かしい話題を挟み、和やかな空気が場に流れる。それに対して守護者や戦闘メイド達も、その微笑ましい光景を嬉しそうに見守っていた。特に、自身の造物主の話題が出てきた吸血鬼は、そわそわと聞き耳を立てている。後でおねだりすれば詳しく聞かせてもらえるだろうかと、ひっそり彼女は思案していた。

「あの時みたいにも、それで一斉にスタートですか？」

「ええ、やっぱりゲームのスタートは分かりやすい方が良いでしょうから」

「審判の合図で両陣営が一斉にスタート、ですな」

了解したと、たつちが頷き、そして横目でウルベルトをじとりと見る。

「幻覚とか使ってフライングしないでくださいね、ウルベルトさん」

「わざわざそんな姑息なことしませんよ。たつちさんこそ、独自ルールじゃなくて話合って決めたルールを守ってくださいね」

スタート前から反発し合う各陣営リーダーに若干不安を覚えながらも、モモンガは声をあげる。

「ほら、位置についてー」

その声で、各陣営の馬車とアンデッド達が動き出す。漆黒の馬車一行は北西を、純白の馬車一行は南東へと先頭を向けた。

ゲームのルールは単純明快。より多くの陣営を設置できた方が勝者だ。ただし、各チーム毎に設定された中心拠点があり、その拠点の設営完了がされていなければ陣営が多くても敗者となってしまう。

そのため、どちらにもまずはゲーム開始前に伝えられた各々の中心拠点を目指した方向を目指しているのだ。

「行くぞ、デミウルゴス」

歩み出したウルベルトに、デミウルゴスは嬉しそうに応え、追従する。

「勝つぞ、セバス」

歩み寄り、その肩に手を置きながら語りかけてきたたつちに、セバスもまた喜びと緊張の滲んだ声で応え追従した。

各陣営の死の騎兵が一等大きな馬車の垂れる布を乗車時に邪魔にならないように動かし、歩み寄る偉大なる御方に頭を垂れる。

ウルベルトは《飛行》を使い優雅にその高い座席に着席する。たつちは腰の剣をアイテムボックスに仕舞うと、軽い跳躍だけで簡単にその座席へと腰掛けた。

魔法の効果によって内部から外部はクリアに見えるようになっていく。ウルベルトもたつちも、追従し馬車に乗り込む自陣営の者達を上から見守った。そして、最後に自身と同じ馬車内に乗り込んできた己が生み出したNPCと目を合わせる。そうして、その眼から力強い忠誠を、彼らは確かに受け取った。

全員が乗り込んだことを見届けたモモンガは、ピストルを持つ手にぐっと力を込める。天空に向けられた不躰な銃口は、太陽光を浴びてきらりと光った。

「用意、…スタート！」

引き金が引かれ、パンツと、乾いた空砲が鳴る。それはまるで、祝砲のように。

人など一切居ない一団が、自己本位の想いを抱きながら圧倒的な力を振るい進みゆく。まさに、それこそ正義の一団であった。

片方は蹂躪を、片方は救済を掲げて、法国の領土を踏みつけて行く。その一団をこよなく愛する骸骨は、その小さくなっていく姿を見えなくなるまで見送った。それからやつと、審判としての仕事へと取り掛かり始める。その仕事を共に務められるサキュバスは、とても嬉しそうにその頬を赤らめていた。

斯くして、一国を盤面にした陣取りゲームは勝手に開催されたのであった。

何故、こんな待遇を受けているのだろうかという何度目か分からない今さら無意味な自問自答を、男はまた抱く。

野菜と干し肉の入ったキラキラした具沢山の湯気のあるスープに、ふわふわのパン。そして水滴のついた新鮮な黄色い果実が丸ごと一つ。それらが目の皿の上で、ただ食われる時を待っているのを男は呆然と見ていた。

男は、スレイン法国の戦士として最後まで戦おうとし、あえなく魔導国側に捕まった哀れな捕虜である。一つの部隊を率いる隊長でもあり、南東に向かったと報告があった魔導国の白い馬車を追いかけて、偵察する役目を担っていた。

スレイン法国内の南東、広大な平野にあるその都は、中央の城に見守られる美しくも堅牢なる城塞都市と謳われていた。

なだらかな丘を中心に円形に広がるその都市は、田舎の長閑さと都市の利便性を兼ね備えた豊かな場所だった。多くの自然物が街中には残されており、それらと人工物の融合した景観が素晴らしいと法国内でも評判が高く、知らない者は少ない。

生い茂る植物は人々の居住地に鮮やかで生き生きとした彩りを添え、四季折々に様々な色と香りを生み出していた。当然人々はそれを愛で、大切な街の一部としていた。その都市に暮らす人々にとって、自然との優しい共存は当たり前のことであり日々の癒やしでもあったのだ。

そしてそこは、戦時にも役に立つ構造となっていた。

その城郭は、国境警備につく勤勉かつケチな某領主も協力して出来上がった堅牢さを誇り、隙が無いものとなっていた。聳え立つ中央の

城は単なる飾りではなく、伐採して見晴らしをよくした平野一体を見張る監視塔の役目も担っている。

また、美しいと評される街中も、乱戦に備えて造られた物だ。

自由に育った植物とわざと区画整理されていない建物で迷路になった街は、住み慣れたはずの住人すら普段行かない区画では迷ってしまう程だ。仮に門と壁を敵に突破されても、簡単に中央の城へと導かせない造りになっていた。更には中央に近づくにつれ壁も、一部の者達が把握する隠し通路も無数に増えていく。内部に入り込んだ敵を確実に屠る罠が、そこには数多用意されていた。

それ故に、男は呆然とし、愕然としていた。

信じられない一心で彼も、偵察隊の部下達も何度も瞬きを繰り返す。しかし彼らが何をして、城塞都市の無残な姿と中央に高々と掲げられた敵国の紋様が入った巨大な旗は消えやしなかった。

中央の崩壊した城に掲げられた旗は、紛うことなくアインズ・ウール・ゴウン魔導国の国旗。それ以外の無数にある旗は、男の見知らぬ紋様の入った細長い燕尾型の旗である。その燕尾型の旗は輝く様に白く、青い縁と剣のシルエットが描かれていた。

遠目からでも嫌でも分かる、法国側が完全敗北をした姿に、男も部下も膝から崩れ落ちるしかない。

彼らが把握する限り、魔導国側の馬車が法国の城塞都市に到着してから、おそらくは一日から三日しか経過していないはずだ。それなのに、かの堅牢な都市は敗れている。城壁と都市内部、そして中央の城を巨大な獣に喰われたかのように穴を空けられ、占拠されている。

その事実と現実と横たわる光景は、恐ろしいという言葉では足りず、逃げ出したいと彼らが思うには充分すぎる程だ。

しかしそれでも、絶望した部下達を奮い立たせ、法国の兵士として男は最後まで戦おうと決意した。

情報を欠片でも集めて本陣に戻る、その使命を全うしようと熱い闘志を滾らせたのだ。しかし、そんな彼らは次の瞬間には魔導国のモンスターに取り囲まれ、虚しい程に簡単に捕縛されてしまう。

あまりに呆気ないその結末に男は怒りすら覚えるも、どこか諦めの気持ちにも襲われる。あまりに圧倒的な力を目にしてしまったせいで、抵抗することの意味に疑念を抱いてしまったのだ。

それに対して恥じ入りたくなるような開き直りたくなるような複雑な気持ちのまま、男とその部下達は連行された。死よりも無慈悲な何かを待っているのだらうと、彼も部下達も仕方なしに覚悟を決める。

しかし、彼らが連れて行かれたのは地獄ではなかった。

そこは、法国の城塞都市に元々あった建物の一つ。

元は宿屋兼食事処だと思われる屋内は荒れた様子もなく、不快どころか快適に暮らせる環境である。外に見張りがあることを除けば、普通の広々とした建物ではない。

二階に並ぶ個室のベッドも撤去されておらず、眠る場所には当然まったく困らない。それどころか、病で倒れるなど何かあった時の為に、緊急時用の呼び鈴まで丁寧な説明書と共に設置されていた。

暫し呆然とした後、食堂だったのであろう場所に放置されていた椅子に男も部下も戸惑いながら腰掛けた。

清潔で広い室内には、見張りが居ない。彼らが自由に喋ってみても、移動しても寛いでも、何か起きることは無かった。連れて来られた場所は普通の、ただ快適に過ごせるだけの家屋であった。

王族でも金持ちでも何でも無い、法国の一兵士でしかない自分達を何故こんな待遇で扱うのか、男にはさっぱり意味が分からなかった。黴びた地下牢にぶち込まれたほうが自然で、もしかしたらそちらの方が落ち着いて過ごせたかもしれないと思える程である。

挙げ句の果て、食事まで出てきてしまったのだ。

複数の人間と亜人種一体が協力して運び込んできたその食事は、捕虜に与えるにしては随分と贅沢なもの。野菜と干し肉の入ったキラキラした具沢山の湯気のアがるスープに、ふわふわのパン。そして水滴のついた新鮮な黄色い果実が、丸ごと一つ。

それらをじつと、男は見ていた。そして彼の部下達も、疑わし気に



食事を睨んでいる。

彼らの混乱は極まるばかりだ。隊長である彼だけではなく、部下の兵士達にも平等に食事が行き渡っているのだから尚更である。彼らにとつてそれは、有り得ないことだった。

男は再度、目の美味しそうな食事を睨みつける。

「……………」

やはり怪しく思えて、何か仕組みられているのではと再度辺りを見渡す。すると、可愛い部下達の縋るような目と視線がぶつかってしまった。そんな目で見られれば、隊長として、これ以上悩むだけの煮え切らない姿は見せられない。

覚悟を決めざるを得なかった。

「ええいつ、食うぞー！どうせ捕まったんだ！これを食べ、死んでも、バケモノに変わっても、知るものか!!」

「た、隊長……！」

意を決して、隊長として叫び、勇ましくスープを飲み始める。

時間の経過で少し冷めていたが、とろける野菜と肉から溢れる旨味が、しびれるように舌先から疲労した体へと染み渡っていく。どんどん口に、喉に流し込み、そして彼は腕をやつと机に戻した。

「……………美味い」

その間抜けな感想と鳴った誰かの腹の音を合図に、見ていただけの兵士達が一齐に食事にがつつき始める。毒が入っていると、バケモノに変わってしまうとか、散々な憶測も、空腹の前には無力である。

暫くして、いや一瞬で、パン屑まで残さずに彼らは完食した。

食べ終わったら食べ終わったで、異常が無いか不安になって兵士達は互いに体を確認し始める。だが何も問題は現れておらず、各々ほつとした表情に戻っていった。

「すげえ旨かった……」

「……なあ、なんで俺達こんな良い待遇うけてんだ？」

「し、知るかよ……。バケモノが考えることなんか」

僅かに心に余裕が出来た部下達が話し始めるのを聞きながら、隊長の男も周囲を眺め、もう何度目か分からない疑問を抱く。

押し込められた場所の設備は、生活に不便が無いようにと、どう考えても気遣われている。確かに監禁はされているが、それでも、代わりなど幾らでも居る一兵士に与えるには贅沢すぎる環境なのは間違いなかった。

「なんか怖いな。俺達、あの魔導国に捕まったんだよな？」

「…なあ、もしかしたら俺達を太らせて、油断して寝てる時に頭から食うつもりなんじゃねえか？」

「おまつ、恐ろしいことを言うなよ……！」

「でも、アイツらはバケモノだぜ。それぐらいのことするかもな……」

不安がる部下達に何か言いたいのが、掛ける言葉が見つからず隊長であるはずの男は口を閉ざす。

弟だったら、何か言えたのだろうかとかと、この場に居ない人を彼はふと思いつ出した。口がかなり悪いが、どんな場面でも軽口を叩くことができ、場を和ませるのに長けている自慢の弟を。

「皆、落ち着け。敵が何を考えているかは不明だが、休める時に休むのは悪いことじゃない。交代で横になり、回復を図ろう」

兄貴の演説は堅いなあ、弟がよく言ってたばやきを彼が思い出したその時、扉がノックされる音が響いた。

部下達が一齐に緊張し、身構える。それを片手で制し、扉前に隊長として彼は進み出た。緊張する彼は目の前の扉が開かれるのを、死を覚悟すらしながら睨みつけた。

姿を現したのは、意外なことに人間で、彼は少し安堵する。しかしその立派な執事服から、敵側だと判断して緊張はしたままだ。

顔付と白髪から推測する年齢には不釣り合いな、逞しい体付き。その身を深い黒衣にて包んだ老人は、背筋もやはり兵隊の如く真っ直ぐだ。

その油断ならない執事は、刺すような視線で隊長として進み出ていた人間と、室内を一瞥する。そして何も問題は無いと判断したらしく、扉を押さえながら身をわきに避け、恭しく頭を下げた。

そうしてやっと扉向こうから現れた太陽光を背負う真っ白な騎士に、男は目を見開く。

白銀の見事な鎧は、まるでその高潔さをあらわすかの如く曇り一つ無い。実戦用なのか疑いたくなる程に、綺麗に輝いている。その左肩にかかるマントも、白銀の輝きに負けず鮮やかだ。まるで血で染められた様な赤には、染み一つ無い。その全てが、敵に対して自ら此処に居るぞと主張するような出で立ちである。

認めたくないが、そのバケモノには人間には持ち得ない壮麗さがあった。恐ろしく近寄り難くいて、しかしどこか、心奪われるような。「この中の隊長さんと話したいのですが、…貴方ですか？」

丁寧な物腰と口調の、これまた魔導国の有力者と思われるにしては随分とイメージからかけ離れた存在。まるで品の良い上流階級の人間を相手に行っているようで、男は自分の薄汚れた格好が少し恥ずかしくなってしまう。

「ああ、そうだ。…話とはなんだ」

しかし隊長として部下達の前で、しかも敵国の者に対し負けを認める態度に出る訳にはいかない。頭を下げず、胸を張りながら彼は答えた。次の瞬間には首が飛ぶかもしれないなど、危惧しながら。

「ここで立ち話も何でしょう。こちらにどうぞ」

一兵士に過ぎない捕虜が媚び諂わないことに対して、騎士は何も感じていない様子だ。丁寧な物腰も揺るがないまま、扉の外へとあつさり招かれる。

深呼吸を密かに済ませ、男は一步進む。すると、まるで断頭台上に上がる者を見送るかのような悲痛な声が、後ろにいる部下達から聞こえた。

「落ち着け、お前達。少し話すだけだ」

体が震えるのを必死に堪え、彼は言葉を絞り出す。魔導国のどんな歓待が待ち受けているのか怖くて仕方ないことを、ひた隠しにしながら。部下達に情けない姿を晒したくない一心で、彼は必死に耐えていた。

「ええ、話すだけですよ。ところで…、皆さん、食事のお代わりはいかがですか？遠慮なく言ってくださいね。そちらと違って、こちらには余裕がありますから」

「ぼツ、馬鹿にしてんのか!？」

「テメエ、隊長に何かしたら絶対許さねえからな！」

「止めないか!!」

器を投げてきた血気盛んな若者二人を、慌てて男は怒鳴りつける。

その態度が回り回って自分に返って来ると思えば、可愛い部下達も一瞬で憎たらしく思えた。しかし、おそらく取り押さえた先輩隊員から小声でそれを指摘された二人が共に顔を青褪めさせたのを見ると、やはり男には憎みきれなかった。打って変わって、しおらしく土下座まで始めている姿はやはり守ってあげたくなるものだった。

「気にしないでください。隊長思いの、良い部下じゃないですか」

嘘偽りを感じさせない朗らかな声が騎士から出てきて、また啞然とする。これがあの、死を撒き散らす邪神の如き凄惨で勝手な王の部下なのか。信じられない思いで男はぱちくりと瞬き、その騎士を見た。

最早そこに居るのは、ただの高潔なる騎士にしか男には思えなかった。

これ以上驚くことはないだろうと思っていたのに、監禁場所から出て暫く歩いた先で、また男は驚くことになる。処刑場にでも連れて行かれるかと思っていたのに、彼が招かれたのは居心地が良い広場だった。

騎士と執事に男が前後をはさまれる形で緩やかな石畳の坂を昇った先、そこにその邸宅と庭園があった。

開かれた鉄の門の先にて現れた眺めの良い庭と豪邸は、元は法国の金持ちが所有していた物だ。

植物と綺麗に融合する街並みを眺められる広大な庭と、赤煉瓦の大きな邸宅。芝生が敷き詰められたその庭には、大きな彫像が幾つか設置され小道として石畳も敷かれている。そして、色とりどりの花々も様々な種類が植えられていた。横に広い邸宅は二階建てで、丸みを帯びた白樺の窓がいくつも並んでいる。どれも嘗ては、持ち主の財力自慢に使われていた物だ。

しかし今は、庭は雑草だらけで、美しい花々は大変不服そうにして

いる。邸宅の赤煉瓦の一部は蔦で覆われ、完全に開けなくなっている窓もあった。庭の装飾品も傷んでいる状態で、ゴミの様に隅に移動させられていた。

少し前までは所有者の自慢だったろうに、今は見窄らしいだけの邸宅と庭。さらに、その場合は今、魔導国の者達によって全て開放されている。客人として踏み込み眺めることも許されなかっただろう人々に、自由な出入りと使用が許可されていた。

広大な庭の芝生の上で寝転がったり食事を摂る法国民は、金持ちも貧乏人も関係なく数多そこに居た。当然のように子供達も多くいて、元気に走り回って遊んだり昼寝をしたりめいめい自由に過ごしている。厳かさのある邸宅も、今は宿泊施設兼倉庫扱いをされていた。一階の大きく広がる両開きのドア辺りには木箱が溢れ、煩雑に物が置かれている有様だ。

そして、腹が空く様な良い匂いが、どこからか漂ってきていた。

腹一杯に食事したばかりのほろほろの男も、思わず唾を飲む。誘導されるまま足を進めて行く先で、美味しそうな匂いはますます濃くなる。男は、腹を鳴らしてしまいそうだった。

「お代わりー！」

「まだ食べていない人が優先です。そして並ばないと駄目です」

「ほらほら、並んで、並んでー」

「まだ食事を受け取っていない人はいませんか？」

声のした方に彼が顔を向ければ、信じられない程の美女がそこにいた。周りの亜人も人間も無視して、思わずその美女ばかりを彼は視界に入れてしまう。

くるりと巻かれ纏められた滑らかに艶めく黒髪、そして黒いロングドレス、輝くような白磁に人形のように端正な美しい顔。黒いドレスを着こなす美しい人だと、逆上せて勘違いしてしまう程の美貌。少しの間を経て、男の脳はやっとエプロンとホワイトブリム、そして見落とすにはいけないはずの細腕に似合わぬ凶悪なガントレットを認識する。

そんな恐ろしくも美しいメイドもさることながら、魔導国側として

働く者達にも遅れて彼はギョツとした。

恐ろしい見目の亜人種と人間、そしてアンデッドが、共にあくせくと働いていた。先程監禁場所に食事を運んできた一匹どころではない、信じられない数の亜人種がそこにはいた。

法国の人間に食事を配っている彼らは、忙しく大鍋からスープをお椀に注ぎ、群がる子供達や静かに並ぶ大人達に次々と渡していく。一体どこから調達してきたのか、大量のパンと果物が入った籠や大鍋に入ったスープを抱えて運び込むのは、大柄な亜人とアンデッドだ。

同じ法国の人間だとすぐに分かるほど、大人達の表情は一樣に引きつっている。空腹にならない体なら列に並ばないのに、と分りやすい苦々しい表情を晒していた。しかし子供達はすっかり慣れた様子で、おかわりを強請りまくっていた。

育ち盛りがあれば程美味な食事を貰ったのだから、それは仕方ないことだろうと男は思う。しかしさすがに全ての子供達がという訳ではないようだ、男はちらりと辺りを見渡しそれに気づく。

庭の隅や、邸宅の窓の向こう側に、進んで歩み寄ろうとはしない様子の暗い表情の子供達も多く見えた。ふと、男は大人の数に比べて子供の数が多いのではないかと気付く。戦争孤児だろうかと考え、自身と法国の子供達の行く先を考えてしまい彼は眉間にしわを寄せる。

「……しかし、……は……」

しわを寄せながら、男は、どう見ても誰も苦しんではない周囲に困惑した。

アンデッドが何体も歩いているが、人間になど興味ないと言わんばかりにその存在を無視して黙々と働いている。庭をよく見れば魔獣と思しき存在も隅で徘徊している。

見るからに人間を捕食しそうな亜人もモンスターも近くにいる状況で、普段通りなのだ。子供達は自由に駆け回り、大人達も騒ぐこと無く食事をしている。

「何なんだ、……は」

敵陣と形容するには、違和感を抱いてしまう様な場所だ。敵国のモンスターだけでなく、法国の人間があまりに沢山そこには居た。しか

も、何不自由なく。あまりに虫が良すぎる扱いで。

「なんでこんな…。ま、まさか…。あんたら、法国の子供達を連れ去って食うつもりなのか!？」

顔を青褪めさせ糾弾する男に、騎士は変わらず落ち着いた様子のまま語りかける。

「……ここにいる子供達は、魔導国の孤児院に保護者の方と一緒に移ってもらう予定です。貴方達兵士も含め、法国民の方々も改心してもらえば魔導国の施設に務めてもらう手筈になっています」

その言葉に、男は目を丸くする。言われている意味が理解できず、ぽかんとしてしまう。

子供達はともかく、敵兵であるはずの自分達にすら勤め先を用意するのは、信じられない高待遇だ。

何か引つかかる所があったが、それを見つけ出す前に騎士から声を掛けられ、男の思考は途絶えた。

「さあどうぞ、掛けてください」

騎士が促すその先には、地面に刺さる大きな空色の日傘の下に、純白の丸机と椅子が置かれていた。ただの一兵士を招くにしては、やはり立派で綺麗すぎるそれに、男は尻込みしてしまう。

執事は戸惑うだけの男を無視して椅子の側にさっと近付き、無粋な音をたてることもなく、騎士の腰掛ける椅子を引く。そして、騎士が腰掛けてからなんと、その反対側にある男が腰掛ける椅子も引いて男が座るのを待ったのだ。

「…!？」

執事に腰掛ける準備をされるなど、勿論彼にとって生まれて初めてのことだ。しかも敵陣などで、想定していなかった事態すぎた。困惑を隠しきれないまま、ぎこちなく男は腰掛ける。

「セバス、お茶と茶請けを」

「畏まりました」

男が口を挟む隙もなく、執事は足早に去ってしまう。

「あの、いや、話をするだけでは？」

「せっかくですから食べて行ってください。あの子達が作る菓子は美

美味しいですから。きつと気に入りますよ」

「は、はあ……」

すっかり出鼻を挫かれた男は、気のない返事をして曖昧に笑い返した。

「…警戒する必要など無いということは、そろそろ解って頂けましたか？」

その問いかけに、男はぎくりとする。それがどういった意味なのか、どのような返事が最適解なのか、思考を巡らせる。

「……………それは、」

「この光景を見て、貴方達が少し、勘違いをしているだけだと解つてくれれば嬉しいのですが」

「……………」

「アインズ・ウール・ゴウンの名のもと、全ては平等です。生まれも育ちも関係ない、当然、元は敵国の人間だったことも」

「……………」

耳障りの良い甘言に何かしらの返答を男が行う前に、ワゴンを押しながら執事が戻って来てしまう。男は結局、ただ目を泳がせたただけだった。

「お待たせ致しました。レモングラスティーと、夏橙とブルーベリーのクリームチーズタルトで御座います。それから、お好みではなかった時のためクッキーも用意させて頂きました。レモングラスも、お口に合わなければ申し付けくださいませ」

その執事が何を言っているのか、男にはさっぱり分からなかった。あまりの事態におろおろしながらも、並べられた綺麗な皿と菓子を食い入るように男は眺める。その陶器の美しさと質の良さ、そして高価さは、何も知らない彼でも見て伝わる程だ。

それに乗せられた食べ物とは思えない品の良い見目をしたそれらも、口にしなくても美味いと伝わってくる。

「……、これは、食べてもいいの、か」

執事が用意したティーカップや菓子が乗った皿は、間違いなく男が居る側にも置かれている。しかしそれでも、本当に食べて良いのか分



からず、マナーにも疎い自覚のある彼は躊躇ってしまったのだ。

笑われても仕方ないと、発言してしまつてから男は顔を赤くする。しかし、騎士は笑いもせず優しく声を掛けてきた。

「私のことは気にせず、好きだけ召し上がってください」

その言葉と、漂つてくる甘い匂いに思わず唾を飲む。

まず最初に、小皿に乗っている見たことがない繊細そうな菓子に男は目を遣つた。

キラキラと蜜が光り、それに包まれた美味しそうな黄色い果実と紫の小粒の実がふんだんに乗つた三角形の食べ物。白いもつたりした何かが、焼かれたパンのような美味しそうな焼き色の生地の上のっている。

真ん中にある大きめの深皿には、クッキーと執事が言っていた品がある。

随分と可愛らしい見た目をしているそれは、平べったく様々な形をしていた。黒と白に分かれた生地で模様まで作られていて、食べてしまふのには勿体無く感じる程だ。何枚かには、ジャムと思われる赤く輝くものが中央にある。よく見れば、ナッツが混ざっているものまであった。

誇りと好奇心と食欲と疑念とが、男の中でぐるぐる渦巻く。

しかし結局は誘惑に負けて、フォークで不器用に崩し、まず三角形の何かを男は口に運んだ。

「…うまつ…!!」

口内に瑞々しい果物の甘酸っぱさとクリームチーズの濃厚な甘さが広がり、美味しすぎて彼は驚愕する。目を見開いたまま、こぼしていた固い生地部分も拾い上げて彼は口に入れる。

そのサクサクした生地部分と、濃厚なクリーム、そしてフルーツの酸味。それらが合わさり口の中で広がると、バラバラに食べた時よりもっと美味しく感じられ、彼はうっとりする。

もう一口と食べたところで、細い持ち手のティーカップから漂う香りに誘われ、男はそつとカップを持ち上げた。その陶磁器の細やかな模様と金細工に驚愕しつつ、彼は口をつける。口の中に残っていた甘

味が消え、爽やかな香りと味が口と鼻孔いっぱいにひろがり、彼は自身の立場も忘れ心底ほつとってしまった。

口いっぱい広がる幸せな味を、男はただ噛み締めていた。そして、近くから突然した子供の声に男は仰天し、やっと我に返る。

「甘い匂いがするー！いいなー！」

いつの間にか近づいていた子供が無遠慮に皿へと手を伸ばし、菓子を取ろうとしていた。男がギョツとしてる間に、おそらくは母親と思われる女が向こうから走ってくる。

青ざめた顔をした彼女は、子供を抱きしめて引き止めると、必死に地面へ頭を擦りつけ詫び始めた。謝罪の言葉を繰り返す母親に、男は内心同情しつつ、どうやって事態を収めるか焦りながらも思案する。

しかし、それは無駄な思考になる。なんと、騎士自ら跪いて母親の肩に手を置き、落ち着くように優しい声音で宥めたのだ。

「気にしないでください。ほら、取り合わないで、ちゃんと分け合うようにするんだぞ？」

どう考えても薄汚れた子供に気軽に与えてはいけないような深皿ごと菓子を子供に与え、騎士は満足そうにして席に戻って来た。

恐縮しきりの母親は何度も頭を下げ、子供と一緒に離れて行く。そして、不安そうに集まっていた人々の所に戻ると、戸惑いながらも菓子を配り始めた。

余程それは美味しかったのだろう。それを貰った皆が皆、信じられないと言わんばかりに顔を輝かせている。

「さてと、肝心の話をしましょうか。ああ、どうぞ食事は続けられて構いませんよ」

まるで幸福と正義を具現化したかのようなだと、男は思う。

今の今まで自身が一体何に怯え、恐れと敵意を抱いていたのか、法国の兵士であるはずの彼には最早分からなかった。それはもう、滑稽な程に。

「あっはっはー！」

突然笑いだした相手にたつちは驚き、執事も警戒をする。しかし、続けて頭を下げた法国兵士を見て、その心情変化を察して彼らは嬉し

そうに表情を緩めた。

「降参だ。笑つちまうぐらいにな。死ぬ覚悟もしていたのに、この様子を見て安心しちまうなんて…、ああ、バカバカしい。一体全体、俺達は何を恐れてきたんだろうな…」

「それでは…、考えを改めて、これからは魔導国の民として生きてくれるのでしょうか？」

顔を上げた彼は、胸に手を当て深く頷く。

「ああ、勿論だ。俺の部下達も説得してみせるぜ。いや、失礼致しました。説得してみせましょう」

日差しの中で駆け回る子供達を眺め、男は決意を固めた。たとえ売国奴だのバケモノに魂を売り渡したと可愛い部下達に蔑まれても、彼らを生かしてみせるのだと。

「ああ、それにしても本当に安心しました。これなら、別部隊を率いる弟も無事そうで……」

陽光に照らされる深い緑を眺め、草原のような弟の瞳を男は思い出す。あれも今頃は腹一杯に食事をしているのかもしれないと思いつつ、口角が上がってしまうのを男は感じた。

「弟さんが、別部隊を…？」

「はい、弟は西の方の偵察担当なんです。黒い馬車を追いかけて行きました」

表情の読めないはずの兜の下、その顔が引き攣ったような気がして男は首を傾げる。何故黙り込んでいるのかと問うても、今までのように明朗な優しい答えは返って来ない。

会わせてあげようと言いつつ清廉なるはずの騎士は、ただ黙り込むだけだ。

焦燥と不安に押し潰されそうになりながら、弟の無事を祈る兄は立ち上がった。

「おい、何を隠している？」

「落ち着いてください」

冷静な声はしかし、弟は無事だとは言わない。むしろ逆の、諦めろと諭すような、突き放すような声音だった。

そこでやつと男は途絶えていた思考を再開させ、引つ掛かりに気がついた。目前の騎士は、「ここにいる子供達は」と、言ったのだ。ならば、ここにいないならどうなるというのか。

ここに居ない、法国の人々は。

「おい…、ぶざけるなよ!!」

「たつち様!!」

たつちに飛び掛かった男を抑えられる者など、周りには山程いた。しかし最上位の存在が自ら手を出すなど叫んだせいで、誰も動けずに成り行きを見守ることとなる。

振りかぶった男の拳が、たつちの兜にぶつかった。鈍く、痛々しい音が、その場を支配する。

「つ…!!」

たかが人間の握り拳が、その兜に傷を付けられるわけがなく、男の血が舞う。しかし男も、伊達に隊長を名乗る者ではなかった。

殴りかかったのはフェイクだ。すぐに拳を反転させ兜の縁に指を引つ掛ける。外すことが出来れば御の字、ズラせば視界を潰せると打算し死にもぐるいで彼は痛む手を動かした。兜がズレたのを視認し、男は隙間から隠しナイフを差し込むべく掴みかかる。

運が良ければ、騎士だけでも殺せる可能性に全てを賭けて。

「くそがああああああ!!」

弟のように口汚く勢いで叫び、猛進する。しかし騎士もまた冷静に対処した。何の躊躇なく自らズレた兜をすりと外し、目前に迫るナイフを冷静に躲したのだ。

現れた人間ではない頭部に、周りから隠しきれない悲鳴があがる。男もその姿に驚き、それと同時に簡単に組み伏せられた。

とてもじゃないが、それは人間には視認も対応もできない速度だった。

ナイフを叩き落とされ、後ろ手にまとめ上げられ、身動きを男は完全に封じられる。

「バケモノが…!!クソツ!!」

知る限りの罵詈雑言を叫び、騎士を毒付きながらも男は祈る。

どうか、弟はどこかで無事に生き延びていてくれと、ただそれだけを。

何故、こんな待遇を受けているのだろうかという何度目か分からない今さら無意味な自問自答を、男はまた抱く。

繊細な彫り込みの入ったキラキラ輝くスプーンとナイフとフォーク、そしてモーニングスター。血が滴る新鮮なバラバラ死体が、何体も。それらが目前の机上で、ただ使われる時を待っているのを、男はぼんやりと見ていた。

男は、スレイン法国の戦士として最後まで戦おうとし、あえなく魔導国側に捕まった哀れな捕虜である。一つの部隊を率いる隊長でもあり、北西に向かったと報告があった魔導国の黒い馬車を追いかけて、偵察する役目を担っていた。

スレイン法国の北西、周りは雄大な自然に囲まれた僻地にあるその都は、六大神に見守られる荘厳なる宗教都市と謳われていた。

巨大な崖と湖の間に細長く広がるその都市は、神の御加護を得るために人々が多く訪れる場所だった。都市の背にある崖に彫り込まれている巨大な神々の御姿は、信心によって成された大業。それによって常に神々に見守られている神聖なる清らかな場所だと評判が高く、知らない者は少ない。

都市の前に視界いっぱい広がる輝く湖は、まさに神の愛と恵みそのものの如く壮大で、全てを祝福し受け入れるかのようにであった。当然人々もそれを愛し、神聖なるものとして扱っていた。その都市に暮らす法国の人々にとって、神々の像と湖の水に祈りと感謝を日々捧げるのは産まれた時からの習慣であった。

そして、そこは戦時にも役に立つ構造となっていた。

自然の城塞に幾重にも取り囲まれたそこは、大軍を一斉に送りこめ

ない立地によって攻める側としてはとても厳しいものだ。都市の中央神殿では、儀式によって常人では到達不可能な魔法を行使する準備が常に備えられている。そこは、有事の際には反撃の役目も担っていた。

また、都市はいつでも籠城戦に移行できる程に万全の管理がされていた。

常日頃から悪天候などで道が絶たれると補給が厳しくなるということもあり、街内の備蓄管理は厳しく事細かく行われていた。それと同じく、その都で暮らす魔法使い達も使用可能な魔法とその種類を全てしつかり街に把握されていた。それらによって常に、ありとあらゆる緊急事態に対応可能な常態維持がそこでは行われていたのだ。

それ故に、男は信じられなかった。

彼も、その配下も悪夢を見ているのか、それとも厳しい地形の中を密かに移動するうちに道に迷ったのではないかと、疑った。いや、そうだと信じたかった。しかしいくら待っても、宗教都市が元々存在していたと思われる場所にある残骸の山は消えやしない。その瓦礫の山にて主張する高々と掲げられた敵国の紋様が入った巨大な旗も、決して消えやしなかった。

一等小高い所にある旗は、間違いなくアインズ・ウール・ゴウン魔導国の国旗。中央にてたなびくその巨大な旗の棒を支えている存在は骸骨と、そして人間だ。血を流し項垂れる人間は、茨で拘束され膝立ち状態で旗を支え続けている。

それ以外の無数にある同じく人間と骸骨に支えられた旗は、男の見知らぬ紋様の入った細長い燕尾型の旗だ。その燕尾型の旗は全てを吸い込む様に黒く、赤い縁と細い十字架が描かれている。

遠目からでも嫌でも分かる、法国側が完全敗北をした姿に、男も部下も膝から崩れ落ちるしかない。

彼らが把握する限り、魔導国側の馬車が法国の宗教都市に到着してから、一日、長くとも四日しか経過していないはずだった。それなのに、かの壮麗な都市はその美しさも厳かさも全て破壊しつくされ、た

だの塵芥に変えられている。挙げ句の果て、神聖なるものとして扱われてきたはずの湖上には冒瀆的な砦が造られていた。それが、おびただしい数のアンデッドを組み合わせ造られた物と気付いた時、彼の配下数名は嘔吐した。

そこに広がる全てが、悍ましいという言葉でも足りず、バケモノ共を殺し尽くしたいと思うには充分すぎるものだった。

しかしそれでも、彼は隊長として撤退を決めた。情報を欠片でも集めて本陣に戻る、その使命を全うできないのは彼にとつては悔しくて堪らない。だが現実問題、遠くからの観察以外が出来る状況ではなかった。

潜伏予定だった街は文字通り跡形もなく、アンデッドの足場に法国の兵士が足を乗せればどうなるかなど火を見るより明らかである。この惨状を伝え、上の判断を仰ぐしかなかったのだ。

そうして撤退を始めた男と部下達は、鬱蒼とした森の中で、今までに見たことも無い形容し難い存在と出会う。

山羊頭で二足歩行し、漆黒の衣装に金の細かい細工と宝石飾りを贅沢に施した、優々と佇む何かを。そして、銀の尻尾を持つ蝙蝠の翼を生やした悪魔を。

彼らの進行方向上空に突然現れたそれに対して、法国の兵士達は戸惑う。彼らの経験値が、山羊頭のそれを亜人種と断定できなかったのだ。得体の知れない恐ろしい何かだと本能がざわつき、彼らは鳥肌をたたせる。

見た目に凶悪さは無く寧ろ華やかで品があると言って良い程なのに、彼らは理由も分からないまま、ひたすらに怖気走っていた。

「てつきり旗の人間を助けに行くかと思つたのに、冷静な判断をするんだな。おかげで賭けに負けてしまったよ」

「人間の思考を読むのは難しいですね。私も半分が残り半分が撤退ですので…」

「そつちの予想が当たりに近いな。何か賞品を用意した方が良いかな？」

「そんな、滅相もない！」





その中には、簡素な黒い檻と血まみれの道具とまだ血塗れじやない道具が転がっている。そして、男と彼の部下達が括り付けられた椅子も。

幾つもある積み重なった檻の中には、性別と年代によって分類された人間が詰め込まれていた。少女達は身を寄せ合って啜り泣き、中年女性の幾人かは壊れたようにぶつぶつと祈りを捧げ、虚ろな目をした老人は天の迎えを待つかのように虚空をぼんやり見上げていた。

無駄だと分かっているはずなのに、後悔するだけと解っているはずなのに、救いを求めて彼はまた辺りを見渡した。

繊細な彫り込みの入ったキラキラ輝くスプーンとナイフとフォーク、そしてモーニングスター。血が滴る新鮮なバラバラ死体が、何体も。変わらずあるそれらは、悪夢は未だ覚めないのだと証明している。

男はがっくりと俯いた。投与された毒物によって力の入らないその身体は、思っていた以上に勢いよく項垂れる。その衝撃で椅子が少し軋み、ギイという音がテント内で煩く周りに響いた。そしてまた、しんと静まり、誰かがぶつぶつと呟く音だけ流れ始める。

「……………」

今では壊れた誰かの独り言しかないテント内だが、初めは酷く喧しい場所だった。

開放しろだの、バケモノ共めだの、男を始めとして人々が思い切り騒ぎ立てていたのだ。後から思えば、檻の中や椅子に括り付けられている状態で何故と問いたくなる程に。それ程に、誰もがギャンギャン騒いでいた。

それなのに誰一人として今は叫ばないのは、叫んでいた人間の無残な末路を見学したからである。

「……………」

その惨たらしい最期を思い出してしまい、男は胃液を吐き出しそうになる。全部が夢だったらと、もう何度めか分からない弱音が心の中で沸き上がる。

「隊長……」

隣から気遣わしげな声が聞こえ、男は顔を上げて横を見る。左右に  
ずらりと並ぶ椅子には、隊長と呼ばれた男と同じく椅子に括り付けら  
れた兵が複数人、腰掛けていた。彼らは皆、彼の可愛い部下だ。

不安がる部下達に何か言いたいのが、言葉を出せないのが隊長である  
はずの男は口を閉ざすしかない。

兄だったらもつと上手く対処して皆を守れたのだろうかと、ふとこ  
の場に居ない人を彼は思い出した。生真面目で口が重いが、どんな場  
面でも冷静に判断することができ、場を落ち着かせるのに長けている  
自慢の兄を。

「…っ、……い！」

やはり話すことができず落胆するが、それを隠して力強く首を横に  
ふる。大丈夫だと言いたいのは伝わったらしく、部下達は少しホッと  
してくれた様子だ。

お前は本当に口が悪いなあ、兄がよく言ってたお小言を彼が思い出  
したその時、布が動いただけの微かな音が、響いた。

それはテントの出入り口の垂れ幕が動いた音。それだけで誰もが  
硬直し、目を見開き黙り込んでしまう。僅かばかりでも安心してくれ  
た部下達の顔には一瞬で、絶望と死相が塗り込められていた。

姿を現したのは、この地獄に相応しい山羊頭の悪魔で、彼は小さく  
息を呑んだ。

長い爪のような刃物を、人間のようなその指に一本一本身に付けた  
バケモノ。しかしそれが羽織る滑らかな見目の黒衣のマントには、優  
美な薔薇が添えられている。着用する衣服も装飾品も全て、大金持ち  
ですら逆立ちしても一生手に入ることが叶わなさそうな一品だ。被  
る帽子にも細やかな飾りが施され、その金属によって煌めいている。  
片手に持つステッキはシンプルだが、純金の重厚な持ち手の細工と、  
深く塗り込められた黒は紅を滲ませ、厳かな様相である。

認めたくないが、そのバケモノには人間には持ち得ない荘厳さが  
あった。恐ろしく悍ましく、しかしどこか、心奪われるような。

「なんだ、随分と静かになったな」

「ソリユシャン様の教育のおかげかと思われませす」

テントの中へと山羊頭が続いて現れたのは、純白の衣装に烏の嘴を模した仮面を付けた何か。道化師のような、医者のような見た目は、真っ白なのに全く信頼できない雰囲気しかない。それが何なのかは分からないが、しかしきつと碌でもない存在なのは確かだと男はひっそり思う。

「そうだな、プルチネツラ、後でソリュシヤンを褒めてやらないといけないな」

「流石わ至高の御方、何と御優しいのでしよう！」

嬉しそうに弾む声は、嫌味などではなく本心からそう言っているのだと伝わる。残虐なる悪の権化に対して優しいと、心の底から素直に褒めているのだと。優しさとは真逆の行為を目の当たりにしたはずの誰もが、しかし、黙りこくっていた。抗議の声は誰もあげない。だがそれも、やむを得ないことだ。

山羊頭の彼がたった一言、煩いなど言っただけで、金髪の美しいメイドが特に煩かった檻の中に居た八人を惨殺したのだから。

その惨事を思い出してしまったのだろう、誰かの嘔吐物が床に撒き散らかされる。パニックになったのか号泣し始める者達まで現れ、阿鼻叫喚の地獄絵図に一気にテント内は変わっていく。

それを聞く男だつて、せつかく耐えた嘔吐の欲求が帰ってきて大変だった。目前の血が染み込んでどす黒く変色した木の板に、胃液を吐きだしたくて仕方がなかった。

「おやおや、人間とわ弱々しい生き物ですね」

「仕方ないさ、プルチネツラ。だからこそ、神に選ばれたなんて妄想に人間は縋るんだ」

「成る程！ああ…、ウルベルト様と御話をしていると、なんと勉強になるのでしょう…！なんと有り難いことなのでしょう…！」

喜びと感動を、仮面をつけた存在は口に出していた。その会話に、人間に対する情愛は一切感じられない。目の前で人が手足の先からゆっくり溶かされ絶叫しながら絶命するのを見た瞬間から、そんなものは此処にありはしないと男には分かっていた。だがそれでも、ここまで無価値なものとして扱われる事態を覚悟など、できていなかった

た。

いや、正確には、ここまでの地獄を想像ができなかったのだ。

「さあ、ウルベルト様、何をして遊びましょうか？このプルチネツラわ、ウルベルト様と遊べるだけで恐悦至極の至りで御座います。それ故、ウルベルト様がされたい遊戯をしたいのです！」

「んー、そうだな、久々にオツドアイでも作って遊ぼうか、プルチネツラ。ほら、こいつら口は汚いのに、目だけは綺麗だからさ」

「左様で御座いましたか…。恥ずかしながら、瞳の観察まではしておりませんでした」

恥じ入った様子で頭を下げた仮面のバケモノは、悪魔の指し示す、ずらりと並ぶ椅子に固定された人間に仮面を向けた。その頭蓋に収められた丸い眼球の瞳の色が、じいつと観察される。

「青紫、琥珀、青、金、黒、濃紺、緑……」

自分の瞳の色を呼ばれると同時に見つめられ、男はぎくりとする。そして、自分と可愛い部下達がこれからどんな目に合うかの察しもつき、顔を青褪めさせた。

「おや、これはこれは綺麗な…、漆黒」

それが惚れた相手から送られた言葉であれば、誰もが嬉しがるような台詞だろう。しかしその発言は、単純に褒めただけでも好意がある訳でもない。それは、これから弄ぶモノに対しての、ただの眩き。無感動な独り言だ。

「バケモノめ！悪魔め!!」

荒い呼吸を繰り返していた部下の一人が、一步、仮面のバケモノに近づかれただけでヒステリックに喚き散らした。勇敢な雄叫びではなく、恐怖から生まれたひっくり返った情けない声である。目尻に浮かんだ涙を唾とともに散らし、半狂乱で男は叫ぶ。

漆黒の瞳を持つ部下に落ち着くように声を掛けようとして、何も出ない自身の口と喉に男は苛つく。

「近付くな!!近付くな近付くな近付くな!!」

最早まともな思考も出来ていない様子の部下に、男はますます焦燥する。しかし、彼ができることなど、何も有りはしなかった。彼が無

駄な身じろぎをしている間に、とうとう最後には助けてと呟き部下は啜り泣き初めてしまう。

その痛ましい姿に彼は唇を噛み、そして為す術も無く見ていた。

「おいおい、その悪魔とバケモノに敵対する国で生きていくことを決めたのはお前達だろう?」

仮面のバケモノも、男も共に、口を開いた悪魔へと視線を向ける。呆れたようなその言い草は、法国の兵士だけでなく、法国の民全てを小馬鹿にしていた。

「こうなることぐらい覚悟はしていなかったのか?まさか、自分達人間が、人間だから、神に救われ助かるなんて都合の良い妄想をしていただけなのか?」

その指摘に、兵士達の目が、いや法国民全員の目が泳いだ。

男も、一向に現れない救いと確実にある絶望を前にして、その間に噛み付くことはできない。仮に、口を開き言葉を発することが出来る身だとしてもだ。

戸惑いと困惑を顔に浮かべたまま、何か叫ぼうとして吐き出せないままの兵士に、悪魔は呆れるどころか興味すら失った様子だ。どんな感情と理由からかは不明だが、短い溜息が悪魔から吐き出された。

「さて、俺もソリユシヤンを見習って教育をするか」

そう言うのと背伸びして、山羊頭の悪魔は、テント内の片隅で様々な道具が並べられた机上に足を向ける。

ステッキは、背を向けていたので何をしたのか分からないが、唐突に空中に消えた。その右手の鋭利な爪のような刃物も、次に手が持ち上がった時には消えてしまっていた。

空いた手で悪魔は、一つの男にとっても馴染み深い品を手取る。何に使うのか考えたくもない品々が並ぶ中、悪魔がその手に取ったのは、スプーンだった。

馴染み深いと言っても、一兵士でしかない男にとっては有り得ないほど、そのスプーンは細かく彫り細工がされ輝いていた。

「わ、我々は、人類の…」

「喋った奴の目玉をくり抜くでしょうか、プルチネツラ」

背を向けていた悪魔のその一言だけで、何か言おうとした兵士は黙り込む。青褪めた部下は継るように隊長である彼を見遣ったが、何も出来ない男はただ共に焦ることしかできない。

「誰が喋ってた、プルチネツラ？」

「この人間で御座います！」

「…へえ、綺麗な青だな」

いつの間にか後ろに回り込んでいた心底楽しそうにしている仮面のバケモノが、嬉しそうにその手を兵士の肩に乗せる。悪魔の宣言に慌てて黙り込んでいた彼は目を見開き、悪魔が言った色合いの瞳を晒していた。

スプーンと、そして長方形の箱を悪魔は兵士達の元を持ってきた。

仮面の道化師が預かり、開いた小箱の中には綺麗な紫の布と凹みがある。丸い物を固定して置けるように造られた円形のくり抜き。それが何を置くために作られた物なのかは余りに明白で、口を開いた彼は必死の形相で叫び始める。

「おゆるしを、お許し、お許しください!!」

拘束されたまま身悶える彼の左目が、道化師によって強制的に開かれる。

「……!!」

喋ることが出来ないまま、それでも隊長として、仲間として彼は口を必死に開閉した。しかしそれに何か意味や効果がある訳もなく、部下の眼孔に、スプーンが突き刺さった。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ」

嫌な音をたてながら埋まっていくスプーンが、ある一定までいくと止まり、眼球をほじくり出す為に動かされる。その度に、短い悲鳴が上がり、その身は逃げようと悶える。しかし脆弱な人間が、力でそこから逃げる術などありはしない。血を溢れさせながら、その眼球が徐々に本来なら有り得ない場所へと移っていく。

まるで悪魔の食事シーンのようなそれは、目玉がくり抜かれ、あっさり終わった。男は呆然と、その光景を見ていただけだった。

糸引く眼球と未練がましく残る神経は雑にちぎられ、部下から取り

出された青い瞳孔の眼球は円状のくり抜きへと収まった。

「つ、あ、あああ……」

力ない嗚咽と悲嘆の声。聞くも耐えないそれが響き渡る中で、しかし悪魔達は変わらず楽しそうにしている。

男は呆然と、その凄惨なる光景を見詰め続けた。部下達は絶望し、涙を流している状況なのに、隊長であるはずの彼は何も出来なかった。言葉を発することも許されず、椅子に拘束されているだけである。

何か隊長としてできることを、そう思惑しても、彼には悪魔に取り出された眼球を見詰め返すことしかできなかつた。

そうして、目を逸らしたくなるような地獄と幾つもの悲鳴を見届け、聞き届けた男の背中側に、足音が止まる。

「ウルベルト様、次はこちらの緑なんて如何でしょうか？」

「おお、良いんじゃないか、プルチネツラ」

にんまり嗤う悪魔が近付き、項垂れる男の頭を持ち上げ至近距離で覗き込む。

硬い木の椅子に括り付けられた男は、ひたすらに視界に入る其れらを消したくて消したくて堪らなかつた。

「ん？一番口汚く喚いていた奴じゃないか。やあ、元気そうで何よりだ」

そう朗らかに語りかけられ、男はぎくりとし肩を跳ねさせる。

山羊頭が二足歩行で洒落た服を着て歩きやがって！なんて、少し前の自身の発言を思い出して男は身体を震わせた。他にも取り返しのつかない罵詈雑言を、既に男は沢山吐いてしまっていた。

兄から士気を上げる為とはいえ口の悪さは直せと言われ続けたのに無視し続けていた自分は本当に愚弟だと、彼は遅すぎる猛省を行う。

「少しくすんでいるが良い緑だな」

彼が悪魔から褒められたのは、瞳。先程から嫌だ嫌だと思考してるのに、つぶさに悪魔の情報を拾い上げる憎たらしい眼だ。男は、自身の眼球すらも呪ってしまいう程追い詰められていた。



「こつちの奴と入れ替えてみようか」

悪魔の左手で、男は顎を掴まれた。

その毛並みの気持ち良い滑らかさとふわふわした感触、刺さる尖った長い爪に対して調子の狂った悲鳴をあげることも、彼には許されな  
い。

悪魔は、綺麗な銀食器のスプーンを掲げる。食卓の机と皿の上の飯はずっと、こんな気持ち悪い光景を見ていたのかと、そのどンドン近付いてくるスプーンに対して無茶な現実逃避を男はしていた。

「…っ…!!…!!」

その匙は今までと同じ様に、頭蓋骨という皿から眼球という具材をすぽんと掬い上げた。

悲鳴をあげたい激痛と強烈な不快感に男は襲われる。それでも、悪魔からその権利を取り上げられた男にはそれが出来ない。

「…悲鳴が無いのはつまらないな」

悪魔から非難がましく睨まれるが、銀の尻尾を持つ悪魔から『黙れ』と命令を下されていた男には、悲鳴をあげる権利すらない。

「私めが奏でてご覧にいれましょうか?」

「いや、違うんだ、プルチネツラ。コイツからは聞くに堪えない大切な友と部下に対する罵声が多かったから、デミウルゴスが黙らせただ  
だ」

「左様で御座いましたか!でわ、デミウルゴス様を呼んで来ましようか?」

木箱の中に、自分の左目が置かれるのを男は残された右目でただ見  
ていた。雑談をされながら片手間に取り出された、左目を。

そして、その銀のスプーンが、今度はその隣に並べられていた色の  
違う眼球を拾い上げる。次に何をされるのか分かっているはずなの  
に、信じられないという思いが男は未だ強かった。

「いいよ、忙しいのに、わざわざこんなことで呼び戻すのは悪いから  
な」

「おお、ウルベルト様わ、なんと御優しいのでしょうか…!」

仮面の上から涙を拭う仕草をするその声に、感情は感じられない。

とても平坦な声音は、その存在を含め全てが大嘘の様だった。

「はは、ありがと、プルチネツラ」

「感謝など勿体なく！」

場違いな談笑と世辞の言葉が終わった後、耳を塞ぎたくなくなるような音が、頭蓋と脳髓に眼孔から直接響く。まるで子供のお遊戯のように、スプーンの腹でぐりぐりと新しい眼球を押し込まれ、男は新しい目を強制的に得た。

「なかなか良い色合いじゃないか？」

「ええ、素晴らしいと思います！ほら、あなたもご覧なさい！」

力無く項垂れる男の顔面前に、鏡がねじ込まれる。鏡に映る自身の気持ち悪さに、男は再度吐き気が込み上がってきた。

左目には、男の隣に並ぶ部下の赤茶色の眼球が埋め込まれていた。血が涙のように流れ、ただ嵌め込まれただけの眼球は焦点が合わないで明後日の方を向いている。

「ああ、でもクリスマスカラーっぽいな。うん、やっぱり金にしよう」  
その言葉の意味に、男はぞくりと鳥肌を立たせる。嫌だ、もう許してくれと言う権利もない男はただ、また眼孔の中にスプーンをねじ込まれた。

これ以上苦しむことはないだろうと思っていたのに、眼球が定位置から出て暫く経ってから彼は、苦しみに果てなど無いと知ることになる。

「さてと、プルチネツラ、そろそろ仕事に戻るから、後は好きにしていぞ」

「畏まりました、ウルベルト様」

悪魔が去る旨のことを口にして、テント内の人間はほっとしてしまふ。しかし続く会話から、それが誤りであったことを思い知る。

「取り合わないで、ちゃんと分け合うようにするんだぞ？」

「ええ、勿論です！」

「それから、その椅子の奴らは特別歓迎するから、食べ尽くさないように」

「重々承知しております」

まるで親が子供達に言い聞かせる様なその言葉。その言葉の意味、食事とは何のことか、解りたくもないのにテント内にいる誰もがきっちり理解してしまう。

悪魔が去り行き、再度衣擦れの音がする。少しの間が空いた後に、大量に何か TENT 内へと入って来る音がした。それらによって、布が揺れ動く。そんな些細な音に、こんなにも恐怖する日が来るなんて誰もが知らないことだった。そして、知らないままでもいいことだった。

悲鳴が響き渡る。おぞましいバケモノが、テント内に群れて現れた。先程の悪魔とは違う、生物として認めたくない様な醜悪な見た目で蠢くモンスターの群れと、数多のゴキブリが。

ゴキブリが足元から這い上がってきて、兵士の一人が絹を裂くような悲鳴をあげた。

「おっと、これは食べてはいけません！檻の中にある人間だけです。さあ、どれにしますか？」

信じられないことに仮面の道化師からの注意を聞き届けた様子の害虫達は、部下の体から降りていく。そうして尋ねられたバケモノ共は、一つの檻に群がっていた。

「やはり柔らかいお肉わ人気ですね」

間もなく大人に成りそうな年頃の少女達が、檻の中で半狂乱に叫んでいた。群がるバケモノに舐めるように見られ、その柔らかな肢体にはゴキブリが這い回っている。檻から逃げられる訳もなく、身を寄せ合う彼女達はただ泣き叫んでいた。

「いやあああああああああああああああああ!!」

「うそ、うそ、うそ、やだやだやだやだ!!」

「さあ、お食べなさい」

無慈悲にも檻の扉はあっさり開かれ、バケモノ達の爪や伸びた舌によって、一気に少女達は引きずり出された。その細腕や足での抵抗など、当然何の意味も成さない。

「たすけて、お願い、許して!!」

縋る言葉にも何の意味も力も無い。檻にしがみついていた少女は、腕を切られることで外に引きずり出され、その悲鳴は胃液の中へ溶けていく。

引き千切られ、噛み砕かれ、裂かれ、潰され、啄まれ、咀嚼され、飲み込まれ、啜られて、彼女達は人間の形を失っていった。

倒れた死体の内一体が、恨みがましく顔を兵士達に向けていた。背中側に真正面の顔を向けた乙女の口からゴキブリが溢れ、その可愛らしいと称されるであろう顔面は、虫に食まれ消えていく。

「あ、ああ、かみさま…」

檻の中に。小柄な女の子が一人取り残されていた。その女の子に、仮面の道化師が手を伸ばす。まるで救う者かのように。

怯え後ずさるも、檻の外にいたバケモノが垂らした唾液に腕を溶かされ、彼女は思わず前に飛び出てしまう

「あつ、」

腕を捕まれ、少女は檻の外へと引きずり出される。小さい悲鳴をあげた彼女は、されるがままに仮面のバケモノと踊り始めた。

黒い檻の上で、バケモノとぐちやぐちやになった死体に見守られながら、くるくると。荒唐無稽なワルツが唐突に止まり、そして再度なされるがまま彼女は、バケモノに添えられている手を支えに背を反らせた。

仰け反った少女の視界に広がるのは、惨たらしい死の世界と涎を垂らすバケモノ共だ。

「さあーっ(っ)覧なさい！ 歓喜なさい！ 貴方わ幸運なのだから！」

目を見開いた彼女は、数多の肉塊を視界に入れる。そして、待ち受ける己の運命に静かにはらはらと涙を流す。

「貴方わ間もなく彼らに食われ、ナザリツク地下大墳墓を…」

少女の左手首を掴んでいた手を放し、その頬をまるで恋人のように優しく仮面の道化師がそっと撫ぜる。

「アインズ・ウール・ゴウンを護るモノ達の、血肉になる誉れを得るのですから!!」

嬉しそうに、道化師は細いその腰に添えていた手を放し、乙女を地

獄へと叩き落とす。神の救済はそこには無く、重力という無慈悲な現実の法則だけが働く。

待ってましたと言わんばかりにバケモノ達が群がり、落下した彼女を一斉に食い始めた。あつという間に肉塊になり始めたそれは、人らしい姿形をあっという間に失っていく。

その少女の血潮の香りが、漂い、鼻腔内に触れた瞬間、男は耐えきれずにとうとう吐き出した。

知る限りの神々の名前を思い出し、心中で縋り付きながらも男は祈る。

どうか、兄はどこかで無事に生き延びてくれと、ただそれだけを。

## 純白02

一部が抉れた城塞都市を一望できる神殿内にて、異形の頭部を晒した騎士は紅茶を味わう。

ふわりと浮かんでは消ゆく湯気が、少し薄暗くなってきた部屋の中へとまた消えていく。その光景を、彼はただ一瞥し、報告書を眺める作業へ戻っていった。

スレイン王国の神都に大災厄が訪れ全てが終わってからすぐに、南東へと純白の馬車は走った。向かう先は、白の陣営の中心拠点として設定されたスレイン王国のとある都市である。

その都市は、ゲームで勝つために必須の土地。そして、たちち・みーにとっても広く救済を開始する最初の足がかりとなる大事な拠点である。

本来ならば人の足では何日も掛かるはずの道のりは、騎士の意志によって劇的に短縮される。アンデッドの尋常ではない馬力と、強制的に造られた直線の道によって。結果、ほんの数時間で、純白の馬車は城塞都市に到着した。

ちなみに、ゲームのルール上、移動手段は基本的に支給の馬車のみとなっている。〈転移門〉を使える使えないの不利が発生しないようにするためだ。アンデッドの馬は疲れを知らずに信じ難い速度で快適に走るの、たつちはそのルールに不満は無い。

固く閉ざされた門の前にて馬車を止め、たつちは直ぐさま飛び降りた。その足取りは軽く、侵略者のものとは思えない程である。

「さて、急いで始めようか」

独り言ちて、城壁の上にて身構える者達をたつちは見上げる。槍を握り締め敵を睨みつける兵士達を一瞥し、そして思っていたより高

かった壁をたつちは観察する。

それを見ていた法国の人々は、安堵と拍子抜けをしてしまっていた。

聳える城壁前にて現れたのは、まるで旅の曲芸団一座の如き装飾の施された真つ白な馬車。それが、たったの三台。風がわりな見た目なうえ一台は異様に大きい、それでも片手で数えられる程度の台数のみ。壁の向こう側にてぼつんと草原の中にある姿は、笑ってしまいたくなるような光景だ。

そんな城塞都市にて身構える者達の複雑な心情など知らずに、まるで観光客のようにたつちは物珍し気に壁を眺めていた。いや実際、観光気分でたつちは高い壁を眺めていた。主人の後に続いて馬車から降りた執事もメイドも、物珍しい品を眺める主人を微笑ましく見守るだけである。

見た目だけで言えば、それはあまりにおかしな光景であった。

豪華で派手な純白の馬車から降り立った白銀の鎧を身に纏う騎士、そして傍に控える執事と目を疑うほど美しいメイド達。憎つくき敵国が攻めてきたというよりかは、どこかの貴賓がやって来たと説明した方がしっくりくる見目の彼ら。そんな彼らに相對するは、固く門扉を閉ざし武装した法国民達だ。

あまりに状況がチグハグで、心境と合っていない状況に法国民は戸惑ってしまふ。門を開け歓迎の式典を挙げなければいけない気分、彼らはさせられていた。

しかし相手は敵国の者だと、騎士が発した言葉で彼らは気付かされ我に返った。

「スレイン法国の皆さん、こんにちは。突然申し訳ありませんが、降伏してください。大人しく門を開けて改心してくれるなら、私は誰も殺さないことを誓います」

城壁をしげしげと眺め終えた後、スクロールに封じられていた魔法で拡声した騎士は傲慢にも言い放ったのだ。開門しると、敵国に大人しく従えと。法国民の緩んでいた警戒心は、一気に引き締められる。その声色だけは優しく爽やかな騎士を、城壁を守る全員が睨みつけて

いた。

「さあ、無駄な抵抗はしないで、開門して下さい」

我慢できずに罵詈雑言を飛ばす者達まで現れ、正に敵国の言葉を伝えてくる騎士への罵りは増えていく一方である。

執事とメイドの顔が不愉快そうに歪むも、騎士が片手を上げ人差し指をその口元に当てたことで渋々と黙り込む。それを見届け、たつちは、滔々と降伏することによるメリットを罵倒の嵐の中で語った。

降伏し改心するならば誰一人殺さないこと。これからは魔導国民として幸せに生きていけばいいこと。魔導国は平等であり誰もが幸福になれること。彼にとつて、ただの幸福な事実を、淡々と。

「スレイン法国の神都は、滅びました」

最後に付け足された言葉は、法国民を震撼させるには充分な一言だ。増えていく一方だった罵声が、ぴたりと止んでしんと一気に静まり返る。

「つい先程のことです。もう貴方達に戦う理由など無いのですから、大人しく降伏してください」

嫌味でなく、ただ事実を突きつけ現実的で合理的な提案をたつちは行う。彼は城門を見詰めた。しかしいくら待っても開かれないそれに落胆し、肩を落とす。

「…明日の朝まで待ちます。ここで待たせて頂きますので、そうですね、せめて個人で降伏を願い出たい方がいらっしゃれば、どうぞお気軽に来て下さい」

期日を提示し、そして妥協案も述べて騎士は馬車内へと戻っていく。執事もメイドも、静々と乗ってきた馬車内へと帰っていく。唐突に現れた騎士は、一方的な通告のみをして、そして一方的に切り上げたのだ。

法国民は、白昼夢をみたかのような顔を晒していた。

騎士の声に耳を傾ける者など居るはずもなく、与えられた猶予は戦闘準備と一部の人間の脱出ルートと合流地点の再確認の時間にあてがわれた。騎士からあれ程に甘い言葉を貰っても、都市の人々は己が故郷を信じ逃げ出さなかったのだ。神都が滅びたと敵に言われたか



らと、敗北を受け入れようという意見も市民の暴動も行われぬ。むしろ法国国民として、神都にいた者達への弔いのためにも、戦い抜く覚悟を彼らは決めていた。

門の前にぼつんとある馬車への攻撃は、昼間にたった一度だけ行われた。全てが無効化され、半刻も経たぬうちに無駄打ちになるだけだと攻撃停止命令が出たため、それ以降は行われていない。

結果、騎士が馬車から降りる時を狙う、単純なその司令一つに都市の全員が取り組むこととなった。その街の誰もが、そのためだけに駆けずり回ったのだ。これから始まるであろう戦争を前に、老若男女関係なく休む間も惜しんで出来ること全てに取り組んでいた。その瞳に、誰もが熱い意志を輝かせながら。

その誇りとしていた街で大して戦うこともしないまま降伏宣言をすることになるとは露も思わずに、彼らは必死に働いていた。

そして夜は明け、純白の馬車から一日目と同じように白銀の騎士が降りてくる。

まるで一日目を忠実に再現しているかのように、やはりその鎧には曇り無くマントも皺一つとて無い。そして歩むその足取りも恐ろしいほどしつかりしている。控える執事とメイド達もだ。本当に一晩中その馬車内に居たのか怪しいほどに、その美貌は変わりなく整えられた衣服に皺などありはしなかった。

たつちが数歩、門の前へと足を進める。漂ってくるピリピリとした空気に薄々と失敗を勘付きながら、それでも期待を込めて彼は口を開いた。

「さあ、城門を開けてください」

それに答えるように、法国側から一斉攻撃が仕掛けられた。

それは、一部の者達が無駄打ちになるから止めないかと苦言を呈した程の、過剰な一斉放射だ。それこそ個人相手ではない、万の軍勢に向けてこそ放たれるべき攻撃量。

魔法の武具による、様々な特殊効果が付与された矢の雨。都市に居る全ての魔法使いを動員しての、ありとあらゆる属性の攻撃魔法の

嵐。そして、本来なら相手の攻城武器を破壊するためにあつた巨大投石機は、放たれる岩に魔法の炎をまとわせて放たれた。

それらは全て、仁王立ちする騎士たった一人に叩き込まれたものだ。

そして、その結果を見て法国民の誰もが愕然とした。騎士のピンチに対して、周りに控える謎のメイドや執事ぐらいは慌てるはずだと誰もが思っていた。しかし実際は、誰も慌てやしなかつたのだ。騎士も、呆れるような悲しむような仕草を微かにしただけだ。

次の瞬間、騎士が常人には視認できない速度で剣を横に振るつた。その動きだけで、苦言を呈した者の懸念とは真逆の意味で、その攻撃は全て無駄に成り果てた。全ての攻撃が、騎士が肩に纏わせる赤いマントを焦がすことすら無く、消え失せたのだ。その上、その攻撃を打ち消して生まれた余波だけで城壁一部は破壊されてしまう。

起こつた現実が信じられずに、多くの者達が呆然としていた。しかし、まだ闘志が残っていた何人かの魔法使いは予め準備していたおりに魔封じの水晶を使い召喚魔法を起動させていた。そうして現れた偉大なる天使の御姿に、人々は安堵し、また闘志を滾らせる。その天使が自分達を守ってくれるのだと信じて、彼らは武器を握りしめた。

しかしそれは生まれたと同時に、消えてしまう。その天使が、頭上の輪から足元までを容易く一刀両断されたことによつて。

天使が真つ二つになるのを真正面から見ていた法国の者達は、何が起きたか理解する前に塵芥に成り果てていた。それが、騎士の二撃目だとも知らぬ間に。

たつちが放つたその二撃目は、天使を真つ二つに裂き、そのままの勢いで城壁を、城塞都市の一部を蹂躪した。たつたの一閃が、城壁と街と中央に聳える城を、一直線上に粉碎したのだ。

閃光が走り去つた跡には、抉られた跡だけが残る。そこにあつたはずの何かしらは、まるで初めから無かつたかのように消し飛んでいった。

光が消え去つた後も轟き続ける崩壊の音と、余波で崩れ続けていく

建物と自然物。それらがやっと収まり静まり返った時、そこには道ができていた。ぽっかり空いた城の傷口前から、門があつた場所へと。全てを破壊し尽くして完成された、まるで支配者を出迎えるかの如く真っ直ぐの道が。

「ああ、残念だな…。せつかくの立派な城壁が、壊れてしまった…」  
騎士の眩きの聞こえた執事が、悲しそうに顔を歪める。城まで壊れてしまっているのを見咎めた騎士は、更に露骨にがっかりとしていた。

当然、その破壊された城塞都市にいる者達はそれどころではなかった。

轟音と静寂に続いて法国民を支配したのは、パニックだ。事実を事実と認められない者達、事実と認めたからこそ未来に絶望する者達、何かに縋ろうと右往左往する者達。ありとあらゆる絶望と恐怖、混乱、悲哀が、感情だけが場を支配している。

もはや確固たる一団ではなく、ただ群れているだけの動物に法国民は成り果てていた。泣き叫び、そして神の名前を叫び、天に縋る咆哮ばかりが響き渡る。

その中で幾人が走り出した。この状況で、最も生き残れる可能性がある、残された唯一の方法を行おうとして。バラバラの立場の彼らだったが、しかし目を合わせただけで互いに何を考えているか汲み取り、迅速に行動していく。何名かは倒れていたスレイン法国の国旗をたなびかせていた棒を引つ掴み、自国の国旗をむしり取った。何名かが城壁の塔や、人々が暮らす家屋から真っ白な布地を見つけ必死で走り出した。何も言わずに彼らは必死に、黙々と作業する。

「たっち様、ご覧ください」  
「ん？…ああ、やっと解つてくれたのか」

執事が嬉しそうに指し示す先、そこでは何人かの人間が大小様々な大きさの白旗を振っていた。

そうして、白陣営側の中心拠点が占拠完了してから三日めの昼が訪れる。

たつちによつて生み出された真つ直ぐの道の先、破壊された城隣に建てられていた神殿内には執務室ができていた。攻撃の軌道から逸れていた為に被害が少なく済み無事な部分が多い神殿は、たつちの希望で利用されていた。眺めが良いそこは、彼がこつそり楽しみにしていた本来使う予定だった城代わりにはなっている。

たつちはまた、紅茶を口に運ぶ。そして報告書を捲り、スレイン法国の地図を横目で眺めた。

神殿内部は、少し前までは厳かで仰々しい雰囲気満ちていた。しかし今は、事務机と物資が大量に運び込まれ、ただの執務室に格落ちしている。神々が祝福を注ぐようだった天窓のステンドグラスも、今ではただ明りを室内に入れるための窓でしかなく、それ以上でも以下でもない。中央に設置された大きめの机には巨大な地図と鉱石、そして書類と羽ペンやインクが散らかっている。

まるで、俗世間の事務方がせつせと務めていても違和感が無いような光景である。実際少し前までは死者の魔法使い達が、報告書のまとめ作業と最終チェックという事務処理にあたっていた。

神殿内に微かに残る静寂さも、洗練された厳かな雰囲気も、支配された後は為す術無く消えていくだけだった。

「……やっぱり、もう少し頑丈そうな、湯呑みとかが良いかな」

ぼそりと、執事が居ないからこそ言える愚痴をたつちは呟く。

彼のために用意された茶器は、甲冑に覆われた手で持ち上げただけで壊れそうな程に儂い持ち手のティーカップだ。うっかり割ってしまえば、先程からたつちは地味に気にしていた。

そもそも一応戦場であるこの場所に、わざわざナザリツクから道具を運び込み、茶を淹れなくても良いだろうと、たつちはこつそり思っている。しかし、紅茶は文句無しに美味しく、執事も嬉しそうに用意するので黙したまままだ。

そうしてまた恐る恐るティーカップを持ち上げて紅茶を一口嚙下し、読み終えた報告書を机に置いた。そして次の書類に移る。偵察部隊による報告書の次は、中心拠点内で管理している人々の記録だ。そこに記載された捕縛された人々の情報、管理状況を、淡々とたつちは

把握していく。

『たっちさん、今、大丈夫ですか？』

「モモンガさん、はい、大丈夫ですよ」

《伝言》に反応し、たっちは報告書から顔を上げる。机から離れ、背もたれに身を預けてモモンガの言葉をたっちは聞いた。

『審判希望の住民がいない古い村ですが、拠点登録はオツケーです。古き関係なく、人が住んでいたと思われる場所は占拠可能です。ただし、偽装判明時はペナルティで陣地一つ消失です』

「了解しました」

たっちが審判役のモモンガに依頼していたのは、事前に設定していたルール規定だけでは判断がつかない物事の判定だ。

今回のゲーム上、判断に困った時は審判のモモンガとアルベド、それからアウラ・ベラ・フィオーラとマーレ・ベロ・フィオーレが話し合い多数決を取って決めることになっている。

『それからついでに、追加詳細です。キャンプ地など人が居た痕跡程度は拠点は不可。新しく作られた砦などは、丸太とか洞窟をベースにしているとか造りに関係なく、拠点として登録可能です』

「それは丁度良かった」

つい弾んだ声を出してしまい、モモンガが首を傾げるのを感じ取ったたっちは続けてその理由を話した。

「実は、法国の兵士達が集まって砦を造っているのを見つけた報告があります。着々と作業を進めているらしいので、どうしようかと思っていたんです」

『さっそく陣地一つ追加ですね。って…、いけない、いけない。油断大敵です。たっちさんも気を付けて』

心配性のモモンガらしい発言に、たっちはこっさり笑う。大胆なことをするかと思えば、石橋を念入りに叩いてから渡るようなその相変わらずな性格は、とても彼らしく微笑ましいものだ。

「モモンガさんの決めた通り、護衛は必ず付けてますよ。偵察も送ってます」

『まあ、たっちさんなら何も心配ない気はしちゃうんですけどね』

「はは、それこそ油断大敵ですよ。私がこの世界でもワールドチャンピオンなのは、まだ分からないんですから」

謙遜と警戒の言葉だが、しかしどこか自信に溢れた声でたっちは答える。しかしそれをモモンガは、わざわざ窘めはしなかった。

「それじゃあ早速偵察を送って、砦の人達に降伏するよう頼んでみます」

『それ、聞いてくれる人いますか？』

「残念ながら居ないですね、今の所。一生懸命造つただろう壁を粉砕することになってしまいましたし、心苦しいのですが…、なかなか理解してもらえなくて」

『仕方無いですよ。たっちは何も悪くないです』

「ありがとうございます、モモンガさん」

励ましの言葉を有難く受け取り返したところで、モモンガの言葉が一旦途切れ、そして申し訳なさそうに再開された。

『…すみません、長話になっちゃって。後、そろそろアルベドが…』  
最後に付け足された言葉にたっちは思わず笑ってしまい、モモンガから笑い事じゃないんですよと、責めるように言われてしまう。

「そうでしたね、すみません。それじゃあモモンガさん、そっちもそっちで頑張ってください」

『ええ、頑張りますよ。たっちさんも、気を付けて。また何かあったら連絡ください』

《伝言》が切られ、室内に再度静寂が帰り、遠くから伝わる喧騒だけがBGMとなる。

報告書を眺める作業に戻ろうとしたたっちだったが、しかし、鈴の音に止められる。誰かの出入りを知らせるそれが響いて、少しの間が空いた後に、部屋の扉をノックする音がした。

「セバス・チャンです、法国民の様子を報告しに参りました」

その声の主に入室の許可を出し、たっちは報告書を再度机上へと戻した。

今や聞き覚えどころか馴染み深いものとなったその声と姿、自身が創造した執事、セバス・チャン。彼が滑らかな動作で頭を下げるのも、

背筋を伸ばしたまま歩む姿も、変わらず優雅で堂々としたものである。こちらにも負けていられないと、胸を張りたくなる程にだ。

「ありがとう、セバス。それで、どうだった？」

「恐れ入ります。まず、現状何も問題は御座いません。先程の騒ぎの件も落ち着きました。ただ、一部の方々は隔離施設に移って頂いております。また、残念ながら処刑が決まっていた数名を、なぜかパンドラズ・アクターが譲渡希望されたので渡しております」

「そうか。パンドラズ・アクターが…、おそらくアンデッドを作るのに使うのだろう。今回は国土全体を使ったゲームでアンデッドの使用量が大変なことになっていると、モモンガさんも言ってたしな」

「私めもそう思っています、全て譲り渡しております。事後報告になったこと、お詫び申し上げます」

「構わない。今は皆忙しいのだから、都合がいいように進めてくれ」  
それよりも、礼を述べようとした執事を止めてたっちは話を続ける。

「そつちは良いとして、しかし、やっぱりナザリックの皆は有能だな。先程の騒ぎは尾を引くかと懸念していたのに、特に大きな問題にはならなさそうで安心した」

「それは、是非とも直接皆に言っただけで差し上げてください、たっち様。きつと喜びます」

「…：うん、そうだな…。ちゃんと直接、言うべきだよな」

しかし、それで咽び泣かれたりしないだろうなど内心思いつつ、嬉しそうな執事にたっちは曖昧に返事する。さすがにあのオーバリーアクションには未だ慣れないので、直接声掛けするかは悩みどころだ。しかし、きちんと礼を言うべきなのは良く分かっていた。

八枝刀の暗殺蟲など、不可視化スキルや隠蔽スキルに長けた者達の尽力で、街中に潜んでいたものは残らず発見し街全体の把握も既に完了している。

プレアデスのユリ・アルファとシズ・デルタ、メイド長のペストーニャ・S・ワンコも、ゲームが始まってからずっと働かせ続けている様な状況だ。

彼女達は現在、掌握した街を捕虜の軟禁場所と一般市民の保護地区とに分けて、それぞれの生活の面倒を見ている。

それと同時に見張りや物資の管理も行い、更にタレントや武技、アイテムなど発見物の報告書作成まで行っている。この時点で働かせ過ぎて申し訳ないのに、様子を見ながら魔導国施設に国民移送も進めてくれているのだ。

ゲームに負けようが勝とうが、今後自身の立ち位置がどうなるうとも、白の陣営で頑張ってくれた者達には手厚い報酬を与えることをたっちは固く決意していた。

「それでは、私めはこれで、」

報告を終えたことで下がろうとした執事を引き止め、たっちは地図を広げる。

「ついさつきモモンガさんから審判結果が届いた。廃村でも、古き関係なく拠点扱いになる。ついでに砦も拠点登録が可能だ。ただし偽装判明時は、ペナルティで陣地一つ消失だ」

了解の意を示すべく、執事は頷く。

「畏まりました。他の者達には私から伝えておきましょう」

「ああ、頼む。それでだ、報告書にあった森林内の砦、北東の住人が逃げた跡と思われる村々、そしてこの拠点を結べば…、なかなか大きい陣地になるだろう?」

「…成る程。確か、偵察では軍隊も見つけていたはず。この大きな陣地内に軍隊を追い込み、可能な限りの捕縛をお望みで御座いますか?」

執事が地図上で指し示した箇所と指を滑らせながら述べた考えに、たっちはにやりとする。

今回のゲームにおいて、道や山林などの居住区ではない箇所は、最低三つの拠点を直線で繋ぎ囲まれた土地が好き勝手できる自陣営のモノとなるルールだ。

そして、さらに細かく決まっていることもある。囲まれた中にある居住区が敵の陣地となっていた場合は、手を出せない。より広範囲で囲まれた場合は広大な陣地側のものとなる。一部のみ重なり合っ



いる場合は、どちらの陣営にも属さない扱いとなる。などといったことが決められていた。

そしてたつちは、勝負にも勝ちたいが、救済のためにも広範囲の自身の陣地作成を優先としたかった。そんな考え全てを汲み取ってくれた執事に、嬉しそうに彼は力強く頷く。主人の意志を汲み取れたことに、執事も誇らしげにしている。

「そういえば、以前森林内で見つけた砦も戻って来た見張りから話を聞きました。なかなか立派な建物になってきたと」

その報告に、たつちは考え込んでしまう。壊してしまうことになるのは仕方ないと諦めていたつもりだが、やはり何とかならないだろうかという気持ちが芽生えてしまった。

「そうか…。やっぱり壊すのが勿体無いな。従ってくれない者達を隔離するのに都合が良さそうだから、出来ればそのまま利用したいところだが…。厳しいか」

「確かに、白の本陣でもあるここに危険思想の者達を置いているのは、あまり良くないですね…」

主人の懸念する内容に、執事も気付かされ考え込む。

黒の陣営と比較して、白の陣営は殺す数が圧倒的に少ない。

今後を考え改心の機会を与える為に拘束もなるべくしていないので、数が増えると内部で混乱が起きる危険性が自然と増えることになる。現状の管理体制に問題がないか足場を確認してから陣地を広げるとなると、黒の陣営との勝負には負けてしまう。

ゲームに勝つ為には、混乱の原因になりそうな者達を隔離しておくる施設がほしい所だった。そして今後増える人数を考えると、破壊する建物も最小限に済ませたい。それに何よりも、犠牲者が出なければ納得されず投降しない状況は、たつちにとって打開したいものだった。

「…そうだ、手紙を書いてみよう！大声で投降を呼びかけるから怯えさせてるのかもしれないし、手紙なら相手も冷静に読んでくれる可能性があるんじゃないか？」

「良い御考えかと思われます。早速ユリに手紙をしたためてもらいま

しよう」

これは成功しそうだ、たっちは自分の妙案に嬉しくなる。今度こそ、無血開城の期待ができた。

「砦の中に置かないと読んでくれないだろうし、読まないで捨ててしまう者も居るだろうな。不可視化スキルのある者達で、密かに砦内に沢山手紙を届けてみてくれ、セバス」

さらりと行われた人間ならば無茶難題の命令を、執事は眉一つ動かすことなく承諾する。まるでお茶のお代わりを頼まれた時と同じ様に。

そして、砦の中にか敵からの手紙が無数に置かれていることは恐怖以外の何物でもないのは誰にも指摘されないまま、その案は採用された。

最後に深々と頭を下げた執事が出て行くのを見送って、たっちは再度報告書を持ち上げる。

「…兵士はともかく、一般市民は早め早めに魔導国へ送れるようにした方が良さそうだな。ここで世話するユリヤシズ、ペストーニヤの負担も減るだろうし」

魔導国内の馬車を移送に利用できないか相談をと、思案していたたっちの耳に鈴の音が届く。またもや誰かの出入りを知らせるそれに、たっちは警戒する。

セバスは出て行ったばかりであり、プレアデスもメイド長も多忙な身のため来訪は滅多に無い。

机上に置いていた兜へ、たっちはそろりと手を伸ばす。不可視の警護役が暴れる気配は無いが、念の為である。

ノックの音が室内に響き渡る。そして、来訪者は扉向こうから名乗りを上げた。

「たっち・みー様、パンドラス・アクターめが参りました！入室しても、よろしいでしょうか？」

その申し出に対して、少し悩みつつも、たっちは兜に伸ばしていた手を引っ込める。そして、入室を許可した。

扉を開け、深々とゆつくりお辞儀をする軍服姿のドツペルゲンガーに慌てた様子も困った様子もない。常と何一つ変わらない、相変わらずの雰囲気だ。

「どうした、パンドラズ・アクター。何か問題でもあったか？」

来訪した理由が分からず、たっちは尋ねる。宝物殿守護者がたっちに会いに来る理由など、何一つ無いはずであった。そして何よりも、彼は現在多忙なはずなのだ。

パンドラズ・アクターは、今回のゲームにおいて特殊な役割、アイテム管理担当者を担っている。

たっちの白陣営側もウルベルトの黒陣営側も、何にどう使うにせよ道具が必ず要る。

その必要な道具、特殊なアイテムなどの要請された品々を渡すべく、宝物殿守護者は現在、各陣営とその拠点を奔走しているはずだった。

水を無限に生むアイテム、清潔な大量の布、移送用の馬車、拘束道具に嘘発見器などなど、白陣営側が要望した品だけでも準備などに時間がかかるはずだ。だからこそ、パンドラズ・アクターは今回のゲーム中は礼儀を欠く行為でも都度の挨拶は不要となっている。

勿論それはナザリツクの者達が決めたことで、たっちは別に礼儀を欠いてるとは思わないことなのだが。

「いえいえ、何も問題は御座いません、たっち・みー様。御希望のアイテムも全て用意できております！」

問題がある訳でも無いのに、わざわざたっちの前に姿を現した理由は一体何なのか。思い当たる節が全く無く、たっちの疑問は解消されないばかりだ。もしかして挨拶をしに来たとか言わないだろうか。たっちが懸念していると、恭しくパンドラズ・アクターが頭を下げ口上を述べた。

「まずは、三日目にて中心拠点の掌握完了、おめでどう御座います」

なんだか厭味つたらしい言い草に煽られ、思わずたっちは聞き返してしまう。

「……ウルベルトさんは」

「一日目には全てを塵芥に変えられ、占拠を済ませておりました」  
「…そうか。それで、まさかそれを言うためだけに来たんじゃないだろ？」

その間に、パンドラズ・アクターがその長い指を一本立てた。

「実は、一つ気掛かりなことができてしまいました」

「気掛かりなこと？」

鸚鵡返しのそれに、こくりとパンドラズ・アクターは頷く。

「はい、たっち様、つかぬ事を伺いますが、モモンガ様を侮辱した愚か者はおりませんか？」

居ると答えればその人間がどうなるのかは、その声音から察することはできない。平坦な口調はその顔のようで、何かを察するのは難しい。しかしそれでも、その問いが指し示すところはナザリック地下大墳墓にて生まれた存在を良く知る者達にとって、汲み取るのは容易いことだった。

「仮に居たとして、その者達を引き渡す義務は無いはずだ」

「おお、それは確かに、仰せの通りかと」

戯けた様な返答は、たっちの返事を受け止めたとはいえない調子である。やはり当然、彼は平然と言葉を連ねた。

「しかし、このパンドラズ・アクターめの心の内を慮っては頂けませんでしょうか？心より敬愛する父上のことを嘲った愚か者共が、これから魔導国で平然と生きて逝くなど…、ああ、耐えられぬのです…！」

「すまないが、我慢してくれ、パンドラズ・アクター。人間は誤る生き物だ。そして、その過ちを正し、生き直せる生き物でもある」

「おお、なんと慈悲深い…」

感動したような言い草のその声は欠片も震えておらず、只管に嘘臭い。パンドラズ・アクターは、つまらなさそうに吐き捨てた。

「しかし、その慈悲深さは平等なのです。ウルベルト様で御座いましたならば、私に甘くしてくださいますのに」

「……平等とは、違うな」

手を組み、考え込むが、最適解はたっちの中で既に出ていた。パンドラズ・アクターがその名を出すならば、たっちが口から出すべき答

えは唯一つだ。

「これは正義だ」

その言い切られた、訂正するのも指摘するのも憚られる凜とした物言いに、しかし呆れたような返事がされた。

「恐れながら申し上げます…。その正義とやら、何とも無価値で無意味かと。絶対なる存在、何にも代え難い、いえ代えられることなど出来ぬモノは存在いたしますので」

「その盲目に、何の意味がある?」

次に食い下がったのは、たつちの方だった。まるで仕返しのように、呆れた声音で彼は返す。

「そうして甘やかして何になるんだ、パンドラズ・アクター。それはいずれ、腐敗に繋がるんじゃないのか?」

「御方が座す玉座も、何も、何も腐りは致しません。ただ、偉大なる絶対の神が、君臨し続けるだけで御座いますよ」

その声は冷たく、巫山戯た調子ばかりが常の守護者にしては珍しく、彼自身の感情が表立っていた。

「正義など、嗚呼、くだらない。ただあの御方が居る、それだけが絶対であり、唯一正しいことで御座います、たつち・みー様」

その言葉、その感情をたつちは噛み締め、聞き届ける。そして、それに晒され続けてきた人でなくなった友の心内に思い馳せる。

「……ありがとう、パンドラズ・アクター。探していた答えの一片が見つかりそうだ」

「それはそれは、宜しゅう御座いました。それでは、このパンドラズ・アクターめは退室させて頂きましょう。お邪魔致しました、たつち・みー様」

少し拗ねた様な、怒ってる様な、つまらなさそうな様子で、踵を返し出ていこうとする友の創造した子を、たつちは優しく呼び止める。「それで、パンドラズ・アクター、…俺を値踏みした感想は、どうだった?」

「はっはっはっ、いえ、値踏みなど、恐れ多い。ただつまらない感想を抱いただけですよ!」

去ろうとしていた彼が、声だけで微笑いながら振り向く。軍服の裾が揺れ、金属が微かに鳴いた。そのくるりと振り返った彼の顔が一瞬、たつちには意地悪く笑ってみえた。

「貴方様とは、あまり美味しいお酒が飲めそうにないなと」

それに対して、たつちも、にっこりと笑って返す。

「はっ、それは当然だな。上司と飲む酒なんぞ、緊張して美味しく感じる訳がないだろう？」

「…はは、」

あつはつはと、大きな笑い声が重なる。それはまるで、化け物達が人間の真似をして無理に作ったような笑声。

聞く者を不快にさせ、そして妙に不安にさせるような笑い声だった。

## 純黒02

元は宗教都市だった瓦礫の山の上にて、その足故か平然と悪路を歩む山羊頭の悪魔は煙を味わう。

ぷかぷかと浮かんでは消ゆく自身が吐き出した煙が、宵闇の中へとまた消えていく。その光景を、彼は見るともなしに、ぼんやり見送っていた。

スレイン法国の神都に大災厄が訪れ全てが終わってからすぐに、北西へと向けて純黒の馬車は走った。向かう先は、黒の陣営の中心拠点として設定されたスレイン法国のとある都市である。

その都市は、ゲームで勝つために必須の土地。そして、ウルベルト・アレイン・オールドにとっても広く蹂躪を開始する最初の足がかりとなる大事な拠点である。

本来ならば人の足では何日も掛かるはずの道のりは、悪魔の意志によつて劇的に短縮される。アンデッドの尋常ではない馬力と、強制的に造られた直線の道によつて。結果、ほんの数時間で、純黒の馬車は宗教都市に到着した。

ちなみに、ゲームのルール上、移動手段は基本的に支給の馬車のみとなっている。〈転移門〉を使える使えないの不利が発生しないようにするためだ。アンデッドの馬は疲れを知らずに信じ難い速度で快適に走るのだが、ウルベルトにとっては少しダルいルールだった。

湖の前に馬車を止め、ウルベルトは馬車から降りることなく独りごちる。

「さて、どうしようか」

宗教都市にて身構える者達など無視して、まるで研究者のように彼は絶壁に彫り込まれた神々を観察していた。信者のようにじつと、し

かし冷めきつた瞳で。

それを見ていた法国の人々は、安堵と拍子抜けをしてしまっていた。

常と同じく輝く湖の前に現れたのは、まるで旅の曲芸団一座の如き装飾の施された真つ黒な馬車。それが、たったの三台。風がわりな見た目なうえ一台は異様に大きいのが、それでも片手で数えられる程度の台数のみ。湖の向こう側に現れ、ぽつんとある姿は間抜けで笑ってしまいたくなる光景だ。

見た目だけで言えば、それはあまりに滑稽な光景である。

一方は、湖の前に停車したまま微動だにしない華美な馬車。もう一方は、警戒心を滾らせ武器を握る法国国民。まるで観光客相手に警戒しているような、そんな馬鹿馬鹿しい気分法国国民達はさせられていた。

しかし彼らは決して気を緩めない。彼らは魔法によって、神都がどれほど無残な終幕を迎えたかを知っていたからだ。

その恐ろしい結末を見届けた者は、報告を終えた後は自室に籠もっている。転移魔法が使える魔法使いの逃亡者も後を絶たず、その宗教都市に残る人々は逃げられなかった者達と逃げなかった者達に分類される程だ。

そして、逃げ出さなかった者達は更に二つに分類できた。

一つは、己が故郷と神々を信じて逃げ出さなかったバケモノ嫌いの者達。彼らは哀れにも蹂躪された神都にいた者達への弔いのためにも、戦い抜く覚悟を既に決めていた狂信者だ。

もう一つは、魔法の探求者だ。無駄なプライドや事情があり魔導国に亡命せず法国で探求し続けてきた少数派達。彼らは最後の最後に、魔法の深淵を覗きたいという欲を抱きその都市に残っていた。自身の命すら対価に、その片鱗だけでも拝めるならと残った、ある意味、魔法の狂信者達であった。

彼らは皆、理由は違えど血走った目で純黒の馬車を睨んでいた。次の瞬間に何が起こるか、瞬きすら惜しんで固唾を呑んで睨みつける。



まさか馬車の中で、ウルベルトがゲームルールの最終確認として、中心拠点はどのような状態でも占拠できていれば問題ないか確認しているだけだとは露も思わずに。

純黒の馬車から、遠目からでも人ではないと分かる者が降りてくる。その存在の人ならざる見た目に、法国の一部の人々は顔を顰めた。

そして、続いて降りてきた者達には誰もが動揺した。続けてどんなバケモノかと警戒していた彼らが見たのは、女だった。しかも、一人はドレスを着た少女、二人はおそらくメイド服を着ているという全くの想定外の出で立ちだ。

あまりの予想外に、法国側はざわついてしまう。

しかし、あれは人間か、助けるべきか攻撃か様子見かと法国側がざわついたのは一瞬だった。彼らは、いや魔法使い達は皆、その青白い光に心奪われ立ち尽くしてしまう。心に住まわせていた全ての憂いを忘れ、ただそれに見入ってしまう。

ワールド・ディザスターの周囲に展開されていく、青白く輝く超位魔法の魔法陣に。その圧倒的なる、美しい力に、誰もが見惚れていた。それは、目まぐるしく姿を変えて放つ魔法の力を溜めていく。広がり、円を描き、滑らかに陣が作り出されていく様は人々に魅せるための芸術品のようだった。

法国の魔法使い達は、その美しさに涙した。バケモノを憎む者達すら、耐えきれずに雫を零す。神話の領域、自身が決して片鱗にすら到達できない階位にある魔法。常人の理解をゆうに超えた何か。普通に生きて死ぬだけでは決して知ることも見ることもない世界の片鱗を目撃した事実、己の立場も忘れて彼らは滂沱の涙を溢れさせていた。

最早、その場の軍指揮官の言葉に意味もなく、かろうじて整えられていた隊列は崩れる。魔法使い達がそれを見ただけで泣き崩れるほどの圧倒的なる力、その意味を理解した者達は続々と逃げ出し始めていた。

そうして一瞬のようで永遠のような時間が経過し、魔法使い達は山

羊頭の悪魔が欠伸をしたことで我に返る。つい先程まで、その見事な衣装と魔法陣もあって神の降臨の如くだった姿が、急に俗物の如くなったことで誰もが夢から覚めたような顔になっていた。

その欠伸はあまりに俗世間じみでいて、退屈だと雄弁に述べていた。それに呆ける彼らが間抜けな声を出したのと、超位魔法が発動されたのは同時であった。

そのたった一つの魔法は、人々を見守ってきた神々の像の彫り込まれた崖を、粉碎した。

轟く崩壊音は雷鳴の如く響き、砕け散った岩は霰のように降り注ぐ。天から崩れ落ちてきた神々の彫像の瓦礫によって押し潰され、人々は次々と容易く死んでいった。全てが平等に砕け、そして全てが平等に潰されていく。

破壊の音がやと収まり静まり返った時、そこに人々が居た痕跡は何も無かった。まるで最初から何もそこには無かったかのように、瓦礫の山だけが存在した。

そうして、純黒の馬車が現れてから一日も経たずに宗教都市の国民は死に絶えたのであった。己の幸運を知らぬ間に、何が起きたのかも分からないうちに。

貴重なアイテムをわざわざ使うのは勿体無い、そんな理由だけでウルベルトが超位魔法の発動までの時間を大人しく待っていたなど、知る由もなく。

そうして、黒陣営側の中心拠点の都市が塵芥となつてから二日目の夜が訪れる。

ウルベルトによつて生み出された残骸の山、その目の前の湖の上には冒流的な砦ができていた。それを、残骸の中、一等小高い場所からウルベルトは眺めていた。

「二日目には終わらせるだろうとは思っていたが、まさか塵芥にまで変えるとはと、父上が仰せでしたよ」

「中心拠点は占拠できているなら状態は何でも良いって言われたし、

後、少し気になったんだよなあ」

彼に追従して残骸の天辺まで来た傍らの者に、のんびりとウルベルトは答える。

「この街を破壊しようとしたら神様とやらが現れて、敬虔なる信徒達を救いに来るのかなって」

「成る程。それで、現れましたか？」

答えずに辺りを眺めるように片手で促すウルベルトに、パンドラズ・アクターは小さく嗤う。

「愚問でしたね。そもそも、真の神は既に君臨されているのですから現れるのは紛い物の神でしょうし」

楽しそうなその声に、真の神とは誰のことなのか、などという愚問をウルベルトはしなかった。

「それで、この瓦礫の山に呼ばれた理由をお伺いしても宜しいでしょうか？」

「旗を立てる道具がほしくてさ。ぶっ刺しても良いけど、やっぱりバランス悪くてな、どうにも安定しない」

周りを眺め、不足しているものにパンドラズ・アクターは納得し頷く。湖上の砦には陣地表明の旗があるが、アインズ・ウール・ゴウン魔導国の巨大な旗は見当たらなかった。元は宗教都市だった陣地にも、旗は一本もささっていない。

必要数を確認するために辺りを眺め、そして、もう片方の陣地も必要になるかとアイテム管理担当者として彼は思案する。

「たっち様の分は…、不要ですかね。あの御様子なら、元々あったものを御使いになるでしょうし」

その独り言に、ウルベルトが反応し尋ねる。

「宣言通り、平和に征服しているのか？」

「ええ、降伏を促しておられましたよ。二日目には強制的な手段に出ておりましたが、一部分が消滅しただけで残りは無事な状態で占拠しております」

聞いておきながら、どうでも良さそうに返事をしウルベルトは話題を変えた。

「そういえば、パンドラ。キッチンスペース一式って用意できるか？簡易なもので良いからさ」

「可能で御座いますよ。料理をなさるのですか？」

「デミウルゴスと一緒にエントマが頑張ってくれてるし、新鮮な肉も沢山あるしな。三日後の晩ぐらいには、本陣に一旦戻る予定だから労ってやりたいと思ってるな」

パンドラズ・アクターが得心がいったという風に、ああと声を出す。

「やはりデミウルゴス殿は、遊軍部隊としてお勤め中心でしたか」

「まあな、国境で釣りをしてるよ」

「それは楽しそうですね。それでは、私めも勤勉なる悪魔の友人を見習い、職務に戻ろうと思います。キッチンスペースも直ぐに準備致しますよう」

頭を下げ、お任せあれと大袈裟に振る舞うパンドラズ・アクターにウルベルトは苦笑する。そして、影の悪魔の呼びかけに気付いて地面に目を遣った。

その報告を受けたウルベルトがにたりと嗤うのを見て、パンドラズ・アクターも嬉しそうに尋ねる。

「如何なさいましたか？」

「この辺りを偵察していた法国の部隊が居たらしい。その内一人がなかなか強いらしいぞ。ここに招いてみようじゃないか、パンドラ」

「やれやれ。油断大敵で御座いますよ、ウルベルト様」

窘めつつも止めはせずに、ウルベルトが誘導の指示を出すのを彼はただ見守っていた。

影の悪魔が去り、暫くは静寂が続く。

手加減を誤って殺してしまったかなと彼らが危惧し始めた辺りでやっと、重たい足音が聞こえてきた。

「デミウルゴス殿に殺されるのは勘弁願いたいので、どうぞ私めの後ろに御下がりを」

「お前も心配性だなあ」

残骸の上に這い上がり、叫びながら鈍足で走るそれは、ウルベルトからしてみれば蛞蝓のようなものだ。とてもじゃないが、自分がそれ

に殺されるとは思えないような存在でしかない。

「ぬあああああああ!!」

頭から既に血を流し、今にも足を纏れさせすつ転びそうな様子の兵士の前に死の騎士が立ち塞がる。圧倒的なその壁に対して、兵士はその胸にぶら下げていた宝石を引き千切ると勢いよく掲げた。すると、それが発光し、なんと斬りかかろうとした死の騎士の動きを止めたのだ。

その想定外の出来事に、ウルベルトもパンドラズ・アクターも一気に警戒レベルを上げて臨戦態勢に移る。

「今のはアイテムの効果だな」

「死の騎士の動きを止めるとは……。あ、いえ、動き出しましたね。効果は若干の足止め程度ですか……。ふむ……。ウルベルト様、如何致しますか?」

「足止めをしたアイテムの確認がしたい、殺すな」

「畏まりました」

突貫する兵士の生死について、悪魔とドツペルゲンガーの間で淡々と話し合われ取り決められる。

自身がどこに向かって走っているのか理解しないまま、彼は今度は宝石をウルベルトとパンドラズ・アクターめがけ投げつけた。

「死ねえ!!バケモン共があ!!」

光を放とうとした宝石はしかし、男が瞬きをした間に両断されており輝くこともなく地面に落下する。呆然とし、それでも戦士として駆け抜けようとした男だったが、しかし、背後から迫っていた死の騎士に頭を鷲掴みにされて空中に釣り上げられてしまう。

「この、クソツ、クソツ、クソツ……!!」

じたばたと足掻くも、アンデッドの手から脱出できずに男は苛立ちのまま口汚い言葉を並べる。それに対してウルベルトは別に何も感じない。しかし、次に発せられた言葉は別だった。

それに対して、ウルベルトは拍手したい気分になった。目の前にいる喚く男の、まるで宝くじに当選した後隕石に当たって死んだような、酷い運に。

男は、よりによってパンドラズ・アクターの前で、最も言つてはならない暴言を吐いたのだ。アインズ・ウール・ゴウン魔導王はクソツタレの下衆野郎、最低趣味の下劣漢で、あんなのが王として君臨するのが間違っていると。

そもそもパンドラズ・アクターは、各拠点から要請があればアイテム提供と設置手伝いのためだけに転々としているはずの存在だ。この戦場においては一所に留まらない、言つてしまえばレアキャラのはず。そんな彼が偶々ウルベルトと談笑している時に見つかるなんて、驚くほど運があまりに無さすぎる男だ。

「…ウルベルト様、これは私が貰つても？」

生みの親と同じく表情の読み取り難い相手だが、怒り心頭なのは雰囲気からも伝わる。ウルベルトは当然すぐに許可を出した。

「アイテムについてちゃんと調べるなら、後は好きにして良いぞ」

「有難う御座います。さて、デミウルゴス殿とマーレ殿にもアポを取付け、色々ご教授頂かなければいけませんね」

その口から出た拷問の先生一覽に、あ、思った以上に怒つてる、とウルベルトはこつそり思う。だが、それだけで終わりだ。男がこれからどんな目に合おうと、ウルベルトには関係ないことである。

「ん？これ動かなくなつたけど、死んでないか？」

「なんと！人間は脆い！」

慌てて死の騎士に手を離すようにパンドラズ・アクターが命令し、男は開放される。剥き出しの岩肌につかるだけと思われた肉体は、途中で動きだし地面に伏せる形で着地する。そして闇夜の森へと目掛けて、兵士は脱兎のごとく逃げ出した。

「おや、謀られましたか」

冷静な独り言を呟き、当然の如く駆け出したパンドラズ・アクターは男に一瞬で追いついた。そして、綺麗な回し蹴りが男の鳩尾に入る。勢いよく転がって来た弾む男の頭を、サッカーボールの様に足でウルベルトはキャッチする。

「おいおい、パンドラ。ムカついているのは分かるけど、拷問する前に死ぬぞ？」

「ああ、しまった！つい！」

ウルベルトが顔を擦り降ろされた男の襟首を掴み、持ち上げると呻き声があがった。しかし今や頭部から流れていた血どころではなく、皮膚が捲れ肉が剥き出しになった頬や鼻頭も真っ赤な状態である。内蔵も潰れている様子のため、無事であるかは怪しかった。

「セーフですか！アウトですか！」

「うーん…、お、動いた。ギリギリセーフみたいだぞ、パンドラー」

「それは良かった！」

男が一命を取り留めたことに嬉しそうに声を上げ、パンドラス・アクターはウルベルトに駆け寄ってくる。

それにしても本当に運のない男だと、ウルベルトはどうとう感心する。先程の衝撃で首でも折れて即死できていれば幸せだったのに、変に逞しいせいで生き残ってしまうとは。しかしおかげでアイテムの調査は問題なく行えるのだから、ウルベルトにとっては彼の運の無さは有り難いことである。

そんな取り留めのないことを考えながら、ウルベルトは無造作にアイテムボックスから取り出したポジションを男にふりかける。

「ほら、次は気をつけろよ。即死なんて、つまらないもんな？」

ウルベルトが差し出す呻き声をあげる男を貫い受けながら、パンドラス・アクターも明るい声音で返す。

「まったく仰せの通りかと！」

しかしふと、表情は変わらないが俯き顎の辺りに細長い指を当て、パンドラス・アクターは思案を始める。そして、真剣な口調で語り始めた。

「私めは考えが甘かったようです、ウルベルト様。このような考えを抱く愚か者がいるとは…。ですので、少しばかりの我が儘を、たち様に伝えるに行こうと思います」

父への冒涇に怒る息子が出したその名前に、ウルベルトはにやりとする。

「パンドラ。アイツもなかなか、食えない奴だぞ」

今までとはまた違う調子で評するウルベルトに、パンドラス・アク

ターはきよとんと顔を向ける。しかし、そうして返された言葉は常と変わらないものだった。

だからアイツのことは大嫌いなんだと、不愉快そうに、しかし口元は歪めながらウルベルトはそう零した。

黒の陣営中心拠点を占拠して三日目の黄昏時。元は崖であり、そして神々の彫像だった残骸の上にて、ウルベルトは煙をのんびり味わっていた。

都市に降り注ぎ全て押しつぶし掻き消した瓦礫の山の隣では、湖が素知らぬ顔で常と同じ表情を見せている。

その湖のうえには、無数のカラフルなストライプ模様のテントが並んでいる。大量のアンデッドによって作られた足場の上に設置されたそれは、とても華やかで、賑やかな装いだ。陸地と湖上のテントそれぞれを繋ぐ道にはランタンが設置され、黄昏の訪れと共に灯り始めている。

まるで、サーカス団が見世物をしにやって来たかのような光景。

しかし、辺り一帯はとても静かで、風が通り抜ける音と夜を迎え興奮する動物たちの鳴き声しか無い。湖を汚すドス黒い染みも、ただ静かにテントの下に広がって、澄んだ水に溶けていくだけだった。

待ち合わせしているウルベルトのために屋外に用意された寝椅子は、繊細な金の細い蔦と花卉を象る宝石細工が贅沢に施されている。一目見ただけで、桁違いの高価さが伝わる品だ。

まるで本物の様に生き生きと茂る黄金の植物は、漆黒のクッション部分に添って飾られている。質の良い厚い布を間に敷いて地面に置かれたそれは、土埃と無骨な岩の上では場違い感が否めない。口があればきつと、こんな所に私を置かないでと不平不満を垂れたらろうと思える程だ。

それに背を預けながら、パイプを啜るウルベルトは湖の上にある自身の拠点をぼんやり眺めていた。朱と濃紺と灰色の雲が斑に空で混ざり、世界は眩い紅に染まり、じとりと濃紺が裾から新色を開始し



ていた。

パイプを吹かして彼は、紫炎が夕刻の色に染まる空を揺蕩い、また消えていく紫煙を見送る。そして、その耳が、ぴくりと動く。

その原因である足音の主は、待たせておきながらひようひようと語り掛けてきた。

「この様な所で御独りでは、危ないではありませんか？」

足音と声の発生源を一瞥もせず、警戒もせずにウルベルトは変わらぬのんびりと答えた。

「周りに一応、護衛ぐらいはいるよ」

「狙撃にも備え、盾役ぐらいは手近に置かれた方が良いでしょう」

発言者は、引き連れて来た死の騎士に緊急時は壁となるように命令し、寝椅子の周りに配置する。今回のゲームにおいてアイテム管理担当者を担っている守護者に、にやりとウルベルトは笑いかけた。

「ありがと、パンドラ。そうだな…、狙撃には備えるべきだよなあ」

にやにや笑いながら、おちよくるように言うウルベルトに対し、パンドラズ・アクターは肩をすくめる。

「礼には及びませんよ、ウルベルト様。ただ…、私めが至高なる方の御姿を借りて貴方様を撃ち抜いたことは、そろそろ忘れて頂ければ幸いです」

「努力はするよ」

どこか気安さのある声かけを交わし終え、ウルベルトは身を起こした。そして、アイテムボックスから取り出した物を、来訪者に差し出す。

「葉巻、お前も吸うか？」

「それでは、一本頂きましようか」

ウルベルトから差し出された葉巻をパンドラズ・アクターが受け取ると、それと同時にウルベルトは自身の指に装備された爪のような細長い刃物で葉巻の吸口を切り落とした。

「火は…、《火球》で良いか？」

「顔面が丸焦げになるのはご勘弁願いたく」

「はは、冗談だよ。ほら、使え。あと、ここ座っていいぞ」

言いながら、起こした身を隅に寄せてもうひとり座れるスペースをウルベルトは作った。そして、またもアイテムボックスから取り出した燭台と火の灯された蝋燭をウルベルトは差し出す。

「…では、お言葉に甘えて」

空いた場所に腰掛け、ウルベルトの差し出す灯火でパンドラズ・アクターは葉巻に火をつける。上品な寝椅子は、最早見る影もなく、ベンチと言われてもおかしくない程だ。きつと口があったら、憤慨の言葉を並べ立てただろう。

唐突に短い笑声をパンドラズ・アクターが零す。それに対し、ウルベルトがどうしたと聞けば愉快そうに彼は答えた。

「いえいえ、デミウルゴス殿がこの光景を目の当たりにしたら私めは殺されるかもしれないなと思ったら、可笑しくて」

パンドラズ・アクターの指摘に、ウルベルトも笑う。その息子の様子は、とても容易く生々しく想像できた。

「あいつ、いつまで経っても堅いんだよなあ。まあ、そう創ったのは俺なんだけど」

「私めが殺される前に再教育して頂きたいところで御座いますよ、ウルベルト様」

「ああ、努力するよ」

「…先程から努力されるばかりで御座いますねえ。結果も出して頂ければ、幸いなのです」

パンドラズ・アクターの皮肉めいた返答に、楽しそうにウルベルトは笑う。そうして笑って、煙を楽しみ、隣に座る守護者に優しく問い掛ける。

「それで？ たつちの野郎はなんて言ってたんだよ、パンドラ」

足を組んだウルベルトが、膝に頬杖をつけて背中を丸めて尋ねる。パンドラズ・アクターは、慌てて答えるようなことはせずに、葉巻を味わっていた。ウルベルトも大して気にせず、煙を味わい暮れゆく景色を眺め、ただ待った。

そうして暫く静かな時が流れ、やっとパンドラズ・アクターの口と思しき黒い点から、回答が出てきた。

「……………非常に面白い御回答を頂きました」

その答えにならない答えだけで、ウルベルトは全てを察し汲み取った。だからこそ、同じような答えを返す。

「俺の言った通り、なかなか食えない奴だっただろ？だからムカつくんだよなあ、アイツ」

「ええ、全くもって仰せの通りです、ウルベルト様」

その思い切った返答は、さすがに予想外でウルベルトは腹を抱えて笑ってしまう。それを一瞥し、葉巻を啣えながらパンドラズ・アクターがおもむろに立ち上がる。その背に、優しく問い掛ける言葉が掛かった。

「俺には何か聞きたいことはないのか？」

「…いいえ、貴方様に問うことなど、何もありません」

「それで良い。俺はもう決めてるからな」

背を向けていたパンドラズ・アクターが振り返り、ウルベルトへと顔を向ける。ウルベルトのパイプから風に流されやってきた紫煙が、そつとその軍服を撫ぜた。その紫煙が流れ消え行くのを、パンドラズ・アクターは視界になんとなく捉える。そしてそのまま追いかけ、湖へと再度視線を戻した。

最後の別れを味わった葉巻を、その細長い指でパンドラズ・アクターは弾き飛ばす。中途半端に楽しまれた葉巻は、空中で弧を描いた後にあっさりと落水した。

「おいおい、ポイ捨てとはマナーが悪いな」

「現在進行系で色々と御捨てになられているウルベルト様から、まさかそのような御指摘を受けるとは」

「捨ててはないさ。無駄なく使ってるだけだ。魚の餌になるだろう？」

その惨い言い分を追求する訳もなく、パンドラズアクターはウルベルトの近くへと戻ってくる。そして、腰掛けるウルベルトの足元に自ら膝を地につけ、頭を垂れた。

ウルベルトは静かに、その跪く友人の息子を眺めている。

「ウルベルト・アレイン・オールド様、今この時、このパンドラズ・ア

クターめの忠誠を、お受け取りくださいませでしょうか」

真剣なその告白を、悪魔は優しくからかう。

「どうした、父親主義のお前が珍しい」

悪魔のそれに対して、ドツペルゲンガーも茶化すように応えた。

「ええ、父上は絶対です。しかし、次に絶対なのはウルベルト様で御座います」

「くくっ、無茶苦茶だな」

愉快そうに笑った悪魔は、しかし、長く息を吐き出すと煙管をアイテムボックスへと放り込んだ。そして、跪く守護者の前へ、その手を差し出す。

「だけど、お前らしいよ」

「…ありがとう御座います」

ウルベルトの差し出された手に、嘗てパンドラズ・アクターが宝物殿で父に贈ったのと同じ意味合いの口付が、落とされる。

その忠誠を、深い愛を、悪魔はいつのまにか迎えていた闇夜の中で静かに受け取る。

青白い月明かりの下、血の染みた澄んだ湖の傍で、揺らぐことない愛を。

立ち上がったパンドラズアクターが、そう言えばと指を一本立てる。

「ご依頼されていた御旗を立てる道具を、ご用意させて頂きました」

やっと触れられた話題は、本来ならば最初に言うべきことだった。なぜならウルベルトが待ち合わせていた理由が、それなのだから。

この場に事情を知っているナザリツクの者がいれば、パンドラズ・アクターを怒りのままに糾弾しただろう。しかし、当の本人もウルベルトもどちらも大して気にしていないために謝罪は無く話は進む。

「へえ…。悪くないな。でも、準備が大変だったんじゃないか、パンドラ」

満足そうに、ウルベルトは瓦礫となった宗教都市にて旗を掲げる骸骨と人間を見渡す。

旗を支える人間はぐったりした様子で、膝立ちしている。揺らぐことのないように人間がその手で握り締めるのは、瓦礫に刺さる旗だ。その背からそつと協力する骸骨と組み合わさったその姿は、まるで一つの芸術品のようである。

青褪めた顔したまだ生きている彼らは、苦痛に耐える顔を晒している。嫌で嫌でたまらないのだと、隠しもせずその表情に出していた。しかしそれでも従っているのは、地獄の底を覗いてきたからだろう。

最後にウルベルトは、瓦礫の山頂で掲げられるアインズ・ウール・ゴウン魔導国の御旗へ視線を遣った。その巨大な御旗を掲げる大役を担った者は、つい最近見た覚えのある人間だった。

「有難う御座います、ウルベルト様。白陣営から譲っていただいたものを、急ぎ躡って参りました。とは言え、恐怖公にご助力頂いたのでここまで苦労はありませんでしたよ。それから、」

パンドラズ・アクターが右手を天に掲げる。

「これで仕上げです」

そう呟いた彼のその細長い指が器用に音を鳴らす。すると、骸骨の手から一つの小さなアイテムが落下した。そして次の瞬間、茨が地面が生え人間は皆その茨に包まれた。瞬く間に茨の拘束は完了し、微かにしていた動きも一切なくなる。

「『いばら姫の夢』というアイテムに御座います。効果は、絶対不可侵と自動迎撃。デメリットは行動不可能と外の世界が把握できなくなること」

アイテムの解説をしつつ、旗を立てる道具を準備するという役目も全うできたことにパンドラズ・アクターはとても満足そうである。

「こいつら、幸せな夢を見てると良いな」

優しい口調で、にたりと語りかけてくるウルベルトに、パンドラズ・アクターも明るい声音で同意する。

「ええ、私がゲームの終わりに迎えに来た時、心から喜んでもらえるために、幸せな夢を見ていることを祈りますよ」

「そうじゃないと、愉しくないもんなあ」

「全く仰せの通りかと」

あははつと、心底愉快そうな楽しそうな笑い声が重なり合う。そのバケモノ達の笑い声は、闇夜に響き渡ってゆく。

それはどこかで祝い事をしているのではないかと聞く者に思わせる程にとても、とつても愉快そうなものだった。

## 純白03

天に御座します、神様。

「…かみさま」

がらんどうな声が呼ぶ。馬車の中、乾いた明るい床板の上で。

なぜ、その御座より降りて御手で救い上げてくださらぬのかと。地上の暴力を、平然と無視されるのかと。

傲慢なのは、救われると信じていた人々なのか。不意に足元が揺らぐ人間を、バケモノが笑っている。困ったように。

初めて村に現れた時と同じ顔で。

数刻前、村人全員で煮え切らない話し合いを繰り返し、やっと逃げることに決まった昼間。村に現れたのは、現在、村人達をどこぞへと連れて行くため馬車に乗るよう指示する犬頭の女だった。

謎の白い燕尾型の細長い旗と共に唐突に現れた彼女に対し、スレイン国民の誰もが最初はぼかんとするばかりであった。

見た目の印象と違い花のような香りのする彼女は、首から下はまごうことなく品の良い美女である。まるでメイドの様な黒衣のロングドレスを、綺麗なボデラインを魅せるように着こなす姿。長い黒髪をさらりと流す様。全てが、正に艶やかと言っても過言ではない容姿だ。

その首から上に真ん中に傷跡が一本走る犬頭が無ければ、法国の兵士でも敵国の女に見惚れていたであろうと思わせる程に。

その戦闘要員とは思えぬ姿に、誰も彼もが混乱し戸惑うだけで行動を起こせなかった。彼女が無条件降伏と投降を呼びかけ、アンデッドの大軍が周囲に現れるまでは。

暫しの間を空けてから、全員が起きたことを理解した。そして悲鳴を上げ、我先にと一斉に村の外へと逃げ始めたのだ。しかしその全員

が、一瞬で、為す術無く捕縛された。

武器を手にとった者達もいたが、あつという間にその武器をへし折られ、結局何も出来やしなかった。

今は皆、放り込まれた馬車の中で大人しく蹲っているだけだ。

弱りきった人々は、残された手段として、神様を呼んでいた。

「…かみさま」

誰かがまた、神様に縋りつき、呟く。

晴れ渡る青空の下に並ぶ簡素な五台の荷馬車と、純白の美しい馬車。簡素な馬車は元々は、法国の民草が逃げるのに使うはずだった物だ。しかし、その見た目に似つかわしい繋がれていた普通の馬は今、アンデッドの馬に変わっている。

幌馬車に乗せられた法国の人々は、不安そうに身を寄せ合っていた。まるで地獄に向かっていているような、今にも発狂しそうな面持ちのままに。恐ろしい、恐ろしいと震える彼らの視線の先にいる犬頭の彼女は、時折苦笑を浮かべるが、指示を済ませてからは黙したままである。子供が泣き出そうとも、微動だにしない。見た目から格が違うのだと否応なく示してくる立派な馬車の隣で、立っているだけである。

女の体と犬の頭を組み合わせた継ぎ接ぎの姿。胸をざわつかせるその存在から指示されるまま、モンスターに囲まれ、続々と馬車に押し込められていくだけの彼らの目には最早、生気も希望も無い。勇敢に戦うこともできず生き延びてしまった誰もが、只管に後悔していた。

そしてただ静かに、無力感に苛まれながら涙を零すばかりである。彼らの心を支配するのは、バケモノ共に対しての憎悪と軽蔑。そして、認めがたい感情がもう一つ。憎くて憎くて堪らなくても、それでも尚彼らが抱いてしまうのは、密かな畏怖の念だ。

抵抗の意思を示して、斧や鍬、包丁を握りしめた者達は沢山いた。口汚く罵った者だって少なくない。それなのに、その身を壊された者は誰一人として居なかった。破壊されたのは、あくまで武器だけだ。

威圧的な態度は一つも取らず、村人全員を無傷で無力化できる程の、その圧倒的な強者故の振る舞い。それは弱者として寄る辺を必要



とする人々にとって、憧れであり、眩い天上のものである。

「……………私達、本当に殺されないのかしら」

生き残った人間の女が、小さく可愛い子供を抱きしめながら口を開く。その独り言に対して誰もが目を見逃らし、応えはしない。

未来を悲観しさめざめと泣く村人達に、犬頭のバケモノは懇切丁寧に今後のことを説明してくれた。その内容は、法国民にとって都合の良い妄想のような、確かな救いであった。しかし、話が済んだ後は沈黙を貫くバケモノの様子からは冷徹さしか感じられず、彼らは彼女を疑っていた。その彼女の沈黙が実は、冷酷な感情故ではないと知らないうちに。それは単に、今までにも話し掛け宥めようとして尽く失敗し続けた優しい彼女の諦めと傷心の現れであるだけとは、露にも思わずに。

「出発します、わん」

その一声を掛け終えて、彼女は純白の馬車に乗り込んだ。その馬車を先頭に駆け始めた一団に、護衛兼見張りの役割を担う地獄の猟犬が並走し始める。人々からまた、ざわりと悲鳴が上がった。

ざわつく生命の物音が騒々しい、無数の鼓動が鳴り響く世界。上空に座す太陽が何時も通りに世を照らす中、戻るべき場所へと純白の馬車が導く一団は進む。ただ真っ直ぐに、乗った者達の複雑な心境など、無視して。強く暖かな日差しに照らされる道を、お伽噺から生まれた様な馬車を先頭に進み行く。苦くも暖かな香りの満ちる、明るい道を。

先頭の美しい馬車内にて、それはそれは重苦しく、ペストーニャ・S・ワンコはまた溜息を零していた。

暫く走り続け、草原を抜け、森林を突っ切り、そうして平野に馬車は出る。視界を遮るものが無いその場所で、目的地はその姿を現した。

法国内で有名だった城塞都市の高い壁を、小窓の向こう側の遠くに人々は認める。その都の中央にて、アインズ・ウール・ゴウン魔導国の巨大な旗が掲げられている、苦々しい事実も。その光景によって、

人々の目から更に光が消えていく。徐々にはつきりと見えてきた都市の無残な姿に、光の消失は加速していった。

敵国の旗と、白地に青い縁と剣のシルエツトが描かれた細長い燕尾型の旗がたなびく法国都市が、今は誰の所有物と化したかなど明白なことである。この土地の支配者が今は誰なのか、言われずとも認めずとも、誰もが解っていた。

元々は壁があつたのであろう出入り口の城壁の穴に、馬車は悠然と入って行く。

ぽつかりと空いた壁の穴の向こう側にあるのは、抉れた大地と刈り取られた街並み、そしてその先にある崩壊した城だ。中央高台に聳える城はその半分を綺麗に抉られ、崩壊し、その内部を無防備に晒していた。

中に入り、無数のアンデッドが練り歩くのが見えて、馬車に乗る人々はそろって呻き声を漏らした。中心に向かって真っ直ぐとある破壊されて出来上がった道には、まるで柵のようにアンデッドが並んでいる。地獄へようこそと死のパレードに出迎えられたかのようで、とうとうさめざめと泣き出してしまふ者達も現れ始めてしまった。精神の限界を迎えて、皆が皆一様に顔を青褪めさせていく。

それでも、アンデッドの馬は指示通りに停車するだけである。他にも何台もの馬車が並ぶその場所で停まった意味など唯一つであり、降りるしかないことは指示されずとも村人の誰もが理解している。しかし拘束されているわけでもないのに、まるで固まったかのように誰も動き出さなかつた。

そこに突然、打って変わって底抜けに明るい声が飛び込んでくる。「おかえりなさい、ペストーニヤ様！」

その明るい声の発生源は嬉しそうに、迷い無く、白い豪華な馬車へと近付いて行く。軽やかで足早な、樂しげな足音を響かせながら。そして、純白の馬車から降りてきたペストーニヤに再度、心からの労いの言葉を、その明るい声の主は笑顔と共に送った。

「お疲れさまです！怪我とかしていませんか？大丈夫ですか？」

にこにこ笑う青年に対して、彼女も心底嬉しそうに、優しい声で返

す。

「ただいま戻りました、わん。こちらは何も問題は無いですよ。そこらは留守の間に何か無かったですか？」

「大丈夫です！あつ、でも、ユリ様が何か御用がある様子でした。ペストーニヤ様のことを少し前に探してましたから」

「分かりましたわん。こちらの皆さんの案内が終わったら、さっそく向かいましょう。…あ、わん」

「はい！」

思わず馬車から身を乗り出して、啞然と法国の人々はその光景を見ていた。

何故なら、心底嬉しそうにバケモノと語らっているのが、どう見てもただの人間の若人だったからだ。耳も尖っていないし牙も角もない、健康的な小麦色に日焼けした善良そうな人懐っこい笑顔の青年は、一目で好印象を抱く様な人物だ。

なんで、どうして、という疑問を抱きながら、法国国民達は戸惑った顔を見合わせるばかりだ。そうして驚いて、冷静になつてよくよく耳を澄ませば、遠くから人々の笑い声まで聞こえてくる。そのことに、法国国民達は何度もぼちくりと目を瞬かせた。

そしてまた、様々な、しかしどれもが嬉しそうな足音がタツタツと近付いてくる。

「ペストーニヤ様！おかえりなさい！」

「やっぱり！何か聞こえてたから自分だけ駆けて行ったのね、ズルいわ！」

「僕達もちゃんとお出迎えしたかったのに…」

賑やかな声が、またもや法国の者達にとっては警戒すべきバケモノへと自ら足どり軽く近付いていく。

「こら、喧嘩はダメですよ、わん」

またもや人間と、そして獣頭やグロテスクな見目の亜人種達まで現れ、法国の者達はぎよっとする。

犬頭の彼女の周りに嬉しそうに集まりだしたのは、亜人、人間種含めた様々な種族の者達だ。バラバラの種族だが、しかし誰もが親しみ

と敬愛の念を彼女に抱いているのは、一目で分かる程に明らかなことだった。

「そうだ、重傷者が少ないなら、私達だけで案内や治療をしますよー！」  
魔法使いらしき見た目の女性の提案に、周りも続々と賛同する。

「あら、それじゃあ…、お言葉に甘えても良いかしら？今回は兵士の方は居ないから安全だと思うし、ユリが何か用があるみたいだから…、あ、わん！」

付け足された語尾に、クスクスと笑い声が返される。彼らは力強く頷き、彼女から任されることを誇らしげにして、とても喜んでいた。

「任せてくださいー！」

「私達だけで大丈夫ですよー！」

「それでは任せましたわん。全員、一般市民保護地区の施設に移動させてくださいー」

口々に了承の意を伝えた彼らは、見送りの言葉と共に笑顔でペストーニヤを送り出した。護衛と共に去っていく背中が小さくなるのをキラキラした瞳で見つめるその姿は、憧れの先生を見詰める無邪気な子供のようである。

そして彼女が見えなくなると、任された仕事をさっそく彼らは開始した。

「さあ、皆さん、施設まで案内しますから、動ける人は下りてくださいー  
い」

「動けない人や、病気、怪我の人はいませんか？治療しますよー！」

「はいはい、こっちですよー」

案内し誘導する担当と、治療魔法をかける相手を探す担当、馬車内から動かない人々への声かけ担当と別れて、手慣れた様子で彼らはきびきびと働き出した。

動くのが辛そうな老人に響め面をされながらも巨体の亜人はその身を背負い上げ移動を助け、尖った耳に対するひそひそ話など無視してエルフは泣く子供や母親の移動を手伝っていく。

そんな彼らのことを眺める呆然とした法国の者達は、誰一人として事態を把握しきれていない。しかし国土を蹂躪されている者として従

わざるを得ず、渋々と困惑したまま馬車から次々と降り始める。そうして彼らに誘導されるままに、とぼとぼと歩き始めた。そんな村人達の内一人が、ぼそりと、思わず呟いてしまう。

「…なんなんだ、あの犬頭の気持ち悪いメイドといい、魔導国とは、」それは、本人からすれば小さな呟きのはずだった。だが、聞こえてはいけない相手に聞こえてしまったのは、しんと辺りが静まり返ったことで発言者にも痛い程に分かることだった。

「おい、あんた、今なんつった」

いの一番に犬頭のバケモノへと駆け寄ってきた青年が、丁寧な口調をかなぐり捨てて村人に詰め寄る。

「先生の悪口を、助けられた分際によく言えたわね。さすがは法国の民ね、プライドだけは天下一品みたい」

丁寧な口調のままだが、嫌悪感を一切隠さないうで獣頭の亜人は吐き捨てるように詰る。

場にはピリピリした空気が漂い、緊張が走りだした。そして、青年が腰の武器へと手を伸ばしたことで、村人達全員がギョツとする。法国民にとっては、彼が何故そこまで怒るのか全く分からない事態だった。

しかし彼が怒るのは、その場に居る魔導国側の者達にとっては至極当然のことだった。彼らは皆、魔導国の冒険者であり、そしてその多くが、魔導国の孤児院出身の者達だからだ。

特にペストーニヤの優しさも愛も知っている孤児院出身の者達は、怒りを剥き出しにしていた。その愛によって同じく救われた身で彼女を貶した存在が、彼らは許せなかつたのだ。

それは決して、決して、許されることではなかつた。

「止めましょう、私事で殺しても、先生方はきつと喜ばれない」「うっ…、それも、そうだな…」

大柄な亜人がそつと、人間の手を壊さぬように気を付けながら尖った爪の生えた手を添えて、怒りに顔を歪めていた青年を諫める。諭された青年は尊き優しい方々がその顔を歪めるのを想像して顔を顰めると、渋々とだが武器を定位置に戻した。

「さあ、移動を開始して！それから、人間だからという理由だけで救う神などこの国にはいないということ、よく頭に刻み込むように！」  
その巫人の声に人々は戸惑いつつ、移動を再開した。もう誰も、口を開かないままに。

届く騒ぎに耳を傾け、ペストーニヤは再度ため息をこぼした。最早何度目かも分からない溜息である。

少し離れた所から文字通り聞き耳を立てていた彼女は、首を振り、歩みを再開する。近くに潜む不可視の護衛と、追従する死の騎士も、彼女から少し遅れて歩み始める。

「あんなに慕ってくれる可愛い子供達、そして善良な冒険者の方々……。ああ、良心が痛むわ……」

協力してくれている魔導国の冒険者に対して、当然のことだが、現在開催されているゲームのことは一切説明していない。善良なる彼らを騙して、白の陣営は利用しているのだ。

彼らには、白陣営の活動は、『最後の一兵まで戦うことを決めた法国の方針に巻き込まれる民草を哀れんだ魔導王による保護活動』という説明をしている。そして、冒険者達に協力要請をした理由は、『危険に魔導国民が巻き込まれるのは良しとしないが、数多のアンデッドの軍隊は用意できても傷ついた人々を慰めるような人員は用意できないため、苦肉の策としての冒険者頼み』としている。

そんな表向きの理由をでっち上げゲームを隠匿する面倒を負ってまで冒険者を白の陣営が利用しているのには、当然理由がある。

圧倒的な人手不足という、白の陣営側参加者がゲーム開催決定直後にぶつかった最初の大問題がその理由だ。

今回のゲームにおいて、大量の人間を助ける目標のある白陣営には、その助けた人達の面倒を見るための人手が数多必要だった。大量の人間の面倒を見るつもりならば、やはり、人手不足はかなりの痛手となってしまう。

しかし、アインズ・ウール・ゴウンに逆らう存在の救済に意義を見出だせない者達が、ナザリツク地下大墳墓においては圧倒的大多数で

あつた。

たち・みーが率いる白の陣営側に参加希望を自ら申し出た者達は、ペストーニヤを除けば、セバス・チャンとユリ・アルファ、ニグレド、それから姉を手伝いたいという理由からシズ・デルタ、以上である。そしてニグレドは、留守番・見張り係になる必要があつたため、見た目の問題もあつたが、白陣営には結局のところ不参加となつてしまつた。

黒陣営側に参加するのは領域守護者と彼らが従える多くの配下達。そして食事が出来ると浮き足立つ者達が何名も。元々配下と呼べる存在も少ない上に、どれも非戦闘員である白陣営参加側との人員格差は酷いものであつた。

プレアデスの姉妹にユリが助力を乞おうとしたが、それも手遅れとなる。

ソリユシャン・イプシロンとエントマ・ヴァシリツサ・ゼータは早々に仲良く黒陣営側に参加表明を表してしまい、残つていたナーベラル・ガンマとルプスレギナ・ベータはナザリック防衛のためコキユートスと共に留守番組になつてしまい不参加になつてしまつたのだ。

最終手段としてナザリックのメイド達を連れて行きたいと執事とメイド長がモモンガに嘆願してみたが、それは即刻却下された。万が一のことが起きた時にナザリックのメイド達が死ぬのは絶対に嫌だと、モモンガが頑として譲らなかつた為である。

そうなるとユリも、そしてセバスにも打つ手が無くなつてしまう。

勿論、審判側であるモモンガの協力と指示で、白陣営側の護衛や見張り、そして雑務を担当する戦闘員は多く準備された。だがしかし、普通の人間のような見た目の存在は、当然いなかつたのだ。準備されたアンデッドで法国民の世話をすることは出来なくもないが、余計な混乱と不和を起こすことになりかねないと白陣営の誰もが懸念した。

そうして、せめて人間に近い見た目の人員が欲しいとちと、ナザリックの者達は絶対に危険に晒したくないモモンガの話し合いが行われ、最終的に提案されたのが魔導国内の冒険者の利用だつた。

尤もらしい理由を並べ、『遠くの土地に旅立てる強さ、異文化交流を

時には行える柔軟さこそ必要なのだ』という魔導王陛下の御言葉による呼びかけの結果、その慈悲深き御言葉に多くの冒険者が感銘を受け、多くの協力者が現れた。

人手不足が解消されたことは、至高の存在が話し合って提案し、そして協力までして行ってくれたことだったのでナザリツクの者達にとってそれは極めて当たり前のことであつた。至高の存在に、解決できない問題など有る訳がないのだから。

予想外だつたのは、想定外な熱意と共に魔導国の孤児院出身の冒険者が集結したことである。

真面目なユリとペストーニヤは、自分達が必要としている人材だからと冒険者組合に直接出向いて協力者を募つたのだが、その結果、孤児院出身の冒険者達が集結したことは彼女達にとって全くの想定外であつた。

孤児院の子供達とは偶に顔を会わせ、一部の者達と僅かばかり関わっているかどうかであるぐらひは、彼女達も自認している。だからこそ、自分達が慕われている事実が信じられず、疑問でしかなかつたのだ。

まるで直接命を救われたかのような並外れた熱情を抱く彼らが現れた理由は、未だユリとペストーニヤには謎でしかない。しかしそれでも、その善意を利用して居心地悪くは感じていた。

「……ごめんなさい。万が一があつたら、必ず復活魔法を掛けるから」  
勝手な謝罪を独り言で済ませ、ペストーニヤは気持ち切り替える。そしてまた止まっていた足を動かし、待たせている相手がいる建物へと足を進めた。

戻つて来た馬車の中に何か不審物が残っていないか調べる青年は、本来ならば施設への案内係だつた。

見た目から好印象を抱かれやすいためその役目を負っていた彼はしかし、つい先程に怒りから武器を取り出したためその役目を取り上げられていた。



取り上げられたと言っても、不愉快な相手だったため彼にはどうでもよく、寧ろ有り難いことだった。あんな不愉快な連中を優しく案内するぐらいなら、馬車の点検作業という地味な作業をずっとしている方がマシだ。うっかりつい先程の腹立たしい出来事を思い出し、青年は頭を振ってモヤモヤを追い出そうとする。

「よし、こっちは終わったぞー！」

それに応えて周りからも次々と、同じく終了と報告が上がっていく。馬車からひよっこり顔を出し額の汗を拭った青年は、隣の馬車を確認していた仲間に声を掛けるつもりだった。そろそろ夕食にするか、保護する人の増えた施設の手伝いに行くかと。しかしその考えは吹っ飛び、仲間の背後に居た騎士に目を奪われ、彼は口をぽかんと空ける。

「やあ、お疲れ様。ペストーニヤはもう行ってしまったのかな」

白銀の鎧を装備し赤く燃え盛るようなマントを肩から垂らすその騎士は、その見た目の重苦しさとは正反対な軽い口調で尋ねてきた。

「はっ、はい！えと、ユリ様が探していたと伝えたら、会いに行くと、仰ていました！」

たつちに気がつくまでの緩んでいた声と違い、堅くなった調子の返事。それにたつちは苦笑する。

冒険者は皆、慈悲深き魔導王陛下が望まれるままにと、孤児院出身の者でなくとも、現場指揮官として紹介されたユリとペストーニヤ、それからセバスとシズの言うことに良く従った。そして彼らが敬うたつちについても、明確な説明をされないままなのに、対上位者として接してくれている。

「そうか。休憩室の方かな？」

本当は砕けた感じで接してくれてもたつち個人としては全く構わないのだが、それはそれでややこしいことになるので仕方なく流していた。

「おそらくは、そちらに行かれたと思います」

「ありがとう。ああ、そうだ。ついでに伝えておくよ。実はさっき、夕餉の準備を…、えーと…、外部に委託してね。ほら、君たち冒険者が

寝泊まりしている場所近くの広場に、ささやかだけれど礼を準備した。お酒も有る。忙しいだろうけど、せめて夕食ぐらいは美味しい物を食べて休んでくれ」

たつちの言葉に、冒険者達の顔が綻ぶ。お礼を述べる彼らに、お礼を言うのはこちらだと、本心からたつちは伝えた。

なにせ、協力してもらっている冒険者達には拠点から一切出ることなく、日々精力的に働いてもらっているのだ。拠点にやって来る人々の世話に関しては、彼らに大変助けられている。そしてその労働時間は、ゲーム終了後には絶対にボーナスを払わなくてはいけない程になっっていることも、たつちは把握していた。

更に言うなら、彼らを騙して運用しているのだから、罪悪感もかなりのものである。

彼らが感銘したという魔導王陛下の御言葉は皆で考えた嘘の作文であるし、当初は赤子以外皆殺しの予定だったことはナザリックの者達にとっては周知の事実だ。当然、拠点から出さないのは安全のためではなく、黒の陣営と対戦中のゲームを露呈させないためだけである。

純粋な笑顔とお礼を眩しく感じ目を逸らしつつ、たつちは気に掛かっていったことを尋ねてみる。

「そう言えば聞いてみたかったんだが、君は孤児院出身の冒険者だったよな、確か。前にペストーニヤと楽しそうに話していた」

「はい、そうです。俺だけじゃなく、彼女も、彼も、それからアイツも。後あつちの二人も！」

周りを指差し、誇らしげに青年は答える。

「ユリとペストーニヤのことを随分と慕っているようだが、どうしてだ？ ああ、いや、変な意味でなく純粋な疑問なんだ。ユリも、あまり君達と関わっている訳じゃなかったから意外だったと言っていたから、気になってね。それに、君達は彼女達が人間でないことも分かっているのだろうか？」

魔導国内の孤児院全般の運営に携わるペストーニヤとユリ、彼女達と孤児院の子供達が共に過ごした期間は殆ど無いと言ってもいいだ

ろう。定期的に施設を訪問するだけの彼女達よりも、孤児院にて住み込みで働く者達の方が、子供達と共に過ごした時間は当然長い。

「その短い時間だけで充分だったんです。何十年経とうが定期的に現れて子供たちの頭を撫でてくれる、ただそれだけで」

問われた彼のシンプルな返答に、力強く周りも頷き同意を示す。

「何年経っても変わらない姿のままなのに孤児院に定期的に通い続け愛してくれるって、凄いいことだと思うんです。私達はきつとユリ様やペストーニヤ様より弱い、所詮は赤の他人のはずなのに、ずっと変わらずに愛してくれるなんて…」

うっとりとする彼女の瞳を見て、たちは理解した。

彼らにとつて、最早ペストーニヤもユリも肉眼で見える愛そのものの、生きる聖母に等しい存在なのだ。何年経ってもずっと変わらない姿をしている彼女達だが、そんなことを糾弾する者など居ないのだ。

「君達は、ユリとペストーニヤを愛してくれているんだな」

その言葉に、また爛々と彼らの目が輝く。雄弁に、その通りだと叫んでいた。

「俺は、コントロールが出来ない聴力のタレントで苦しんでいたけど、ペストーニヤ様が助けてくれたんです…！あの時に頂いた御言葉が、ずっと支えになっています！」

一人が言いたくて言いたくて堪らなかつたという風に、嬉しそうに語り始め、周りも思いの丈を吐き出していく。

「私は幼い頃に酷い親から逃げ出したところを偶然通りがかったユリ様に助けてもらいました！」

「ぼくは、欲しい本を貰いました！魔法学院に行くお金まで援助してもらってます…！」

「孤児院の大好きな先生が老衰で死んだ時に寄り添ってもらった御恩は忘れられません。幼心に本当に辛かつたので…」

嬉しそうに語る彼らの輝く目には、たちも嬉しくなる。

困っている誰かが救われる。当たり前だとたちが信じたかった理想が行われていると語る証人達に、汚れた心が救われ洗われるよう

な心地であった。

独りぼつちの子供も、報われない子供も、暴力から逃げられない子供もいない。当たり前だと信じたかったことが、目の前にあることが、たつちは嬉しくて堪らなかつた。

広間を通り抜け、目的地を視界に入れたペストーニヤは、死の騎士には一旦外で待機と見張りを申し付ける。そして、石造りの頑丈そうな建物玄関へと向かつて行つた。

元々は集会所と裁判所を担つていたその建物の重厚な両開き扉は、見張りの死の騎士によつて開きっぱなしの状態にされている。その扉向こうは広々とした吹き抜けの空間が用意され、床には毛並みの良い赤いカーペットが敷かれていた。壁には巨大な額縁と、迫力満点の、モンスターを人々が踏みつけ勝利する絵画が飾られている。少し前の常時なら、その空間は緊張感と威厳が溢るる空間だつたであろう。

とはいえ、今はその広間には必要物資が所狭しと並んでおり、景観はお世辞にもよろしくない状態だ。一階にある部屋は全て改装されて、冒険者達の休憩所となっている。そして二階は、ユリとペストーニヤ、そしてシズの休憩所になっていた。

休憩中の冒険者達が、ペストーニヤの姿を見て、慌てて顔付きを変えて立ち上がった。そんな彼らに気にせず休むよう指示を出しつつ、ユリが部屋に居るかペストーニヤは尋ね、在室を確認してから階段を上がる。

二階には両開きの扉一つと、その向こうの広大な一部屋だけがある。その扉をノックし、了承の返事を貰つてからペストーニヤは扉を開けた。

「ただいま、ユリ。待たせてしまったかしら？私を探していたと聞きましたわん」

「おかえりなさい、ペス。お疲れ様。大丈夫よ。急ぎじゃないの」

中央の机で書類を睨んでいたユリは、顔を上げて帰ってきた同僚兼友に、にこやかに微笑みかける。そして椅子に深く腰掛けなおすと、

ティーカップに手を伸ばした。

美しい彼女の周りにある家具は、どれも繊細な装飾が施されており、まるでユリの美貌を飾る額縁の如くであった。そのどれもが、彼女が丁寧に扱う理由から察せる通り、ナザリックから持ち込まれた物である。

室内に元々あった家財や装飾品は全て撤去されており、室内にはナザリックの美女に相応しい品々が用意されていた。

部屋の奥、衝立の向こうに並ぶ三台のベッドも、片隅にあるコンソールテーブルと空間を飾る小さな花瓶一つも、机も椅子も全てだ。どれもが以前あった家具全てよりも、高価なものに変わっている。しかし、そのどれもが外に持ち出してもかまわないと判断された、ナザリック内では結局その程度でしかない代物である。

その持ち込まれた豪華絢爛な家具に対し、そして「何かあって壊れても別に気にしない。壊れても構わない物しか持ち込んでいないから」というユリの微笑と共に発せられた爆弾発言によって、攻め込んだ魔導国の戦利品つて無いのでは…?と、冒険者達がざわついたことを彼女達は知りやしない。

お茶の香りを味わい終え、腰を上げたユリが視線を遣った先、扉の近くには包帯と清潔な水を作り出すアイテムが幾つか用意されていた。それだけで何のために自分を探していたのかペストーニヤは察しが付き、また溜息を吐きたくなってしまった。

「ごめんなさい…、また付き合ってくれるかしら?やっぱり、独りで行くのは、どうしても憂鬱で…」

「勿論、お付き合いしますよ」

「我が儘を言っつて、ごめんなさいね」

「気にしないで。気持ちは痛いほど分かりますから」

苦笑して顔を見合わせる彼女達にとつて、治療行為に必要な道具など本来なら不要な品だ。しかし治療魔法が使用可能なペストーニヤは、なぜそれが用意されているのか知っているので何も言わない。ただ、哀しそうにするだけである。

まるで水浴びをした犬のように頭を振り、落ち込みかけていたペス

トニーヤは気合を入れ直す。

「頑張りますわん……！」

「ええ、頑張りましょう！」

友人を見習い、ユリも気合を入れ治す。彼女達が互いに励まし合うその理由は、これから行く先で受ける言われぬ罵詈雑言に對してだ。

そうして彼女達が改めて気合を入れ直し荷物に手を伸ばしたところで、ノック音が響いた。手を止め、来訪者が誰か尋ねると、大きな声が返ってくる。

「ペストーニヤ様！ユリ様！お疲れ様です！」

「お疲れ様です！よろしければ、お茶をどうぞ！準備しましたので！」扉向こうからも良く聞こえる明るい声を掛けられ、少し目を見開いてから、今度はくすりとユリとペストーニヤは微笑い合う。

一旦荷物から離れペストーニヤが扉を空けると、元氣よく声掛けしていたのに急に照れ臭くなったのか、おずおずと彼らは部屋に数歩だけ入ってきた。しかしそれでも、片方は獣の顔を、片方は冒険で負つたのであろう左半分を潰すかのような傷跡を笑顔でくしゃりとさせ、にこにこ嬉しそうにしている。彼らが持っているトレイには、湯気の上るティーカップが二つ、ちよこんと置かれていた。

「ありがとうございます！」

「本当に、嬉しいですよん！」

その言葉に、嬉しそうな笑みはますます強くなる。しかし、近くにあった治療道具一式を見て彼らは一気に顔を顰めた。敬愛する彼女らがこれからどこに行き何をするのか察して、心配そうに眉を下げる。

「あの、私達も護衛で付いて行っても宜しいですか？隔離施設に行くのでしよう？」

「私も行きます！いや、そもそも、法国の失礼な兵士や民など、救う価値などあるのでしょうか!？」

その無垢な質問に、彼女達はどうしたものかと曖昧に笑う。

「確かに、救う価値なんて、きつと無いですよ！あいつら、助けても

らつておいて、あんな酷い悪態ばかり言うなんて……！」

許せないと続いた言葉に、片方もうんうんと力強く頷く。

ユリとペストーニヤが行こうとしていた、彼らが毛嫌いする施設は、法国の兵士と民の中でも人間種以外を大変嫌い暴れる為に隔離された者達がいる場所だ。更生の見込み無くば別の場所に設けられた施設へと移っていくのが本来の手筈だが、怪我の都合で運搬できない者達も居た。そんな者達がそこに詰め込まれている。

そしてその施設の者達は、ペストーニヤの治療魔法に対して魔導国の魔法は穢れているから受けないと頑として突っぱねているのだ。そのために準備されたのが、一応彼らが自力で治療できるように用意された治療道具一式だった。

「気持ち嬉しいですが……」

ユリもペストーニヤも曖昧に笑うだけで、強く否定はしない。

罵詈雑言を浴びせ続けられれば、さすがに彼女達だって疲弊と嫌悪感に襲われる。特に仲が良いユリとペストーニヤは、友達が貶されるという耐え難いストレスにも参っていた。

「僕達があいつらにガツンと言つてやりますよ！任せてください！」

にかりと獣の犬歯を見せて笑う巫人の冒険者の背後から、ノック音が響く。きよとりと冒険者は首を傾げ、ナザリックの者達は目を見開き、ユリが扉に駆け寄り慌てて開いた。

「やあ、突然すまない」

「たっ……っ、わざわざ、この様な所まで足をお運び頂けるとは、申し訳ありません！」

「御呼びして頂ければ、参りましたのに……！如何されたのでしょうか！？」

ユリもペストーニヤも突然の来訪者に対し焦りながら、深々と頭を下げる。特にうっかりしていたユリは、酷く慌てた様子である。

遅れて冒険者達も、片方はトレイを手にしたまま不器用に頭を下げる。名を明かさなない騎士の名を、彼女達はわざと口に出していないことは察しており、冒険者の彼らは当然そこには踏み込まない。

来訪者は、汚れ一つなく自ら輝くかのような美しい白銀の鎧の騎士

である。その見目とは真逆の柔らかかな声が、優しく労りの言葉を投げかける。

「ペストーニヤ、ユリ、それから冒険者の君達も、まずはお疲れ様。ああ、跪かなくていいから、そのまま。それから、来客中にすまないが少し伝えたいことがあるだけだから、良いかな？」

「勿論です！」

騎士に断られ、せめてと頭を少しばかり顔を伏せるユリが答え、それから騎士は冒険者達にも顔を向けた。

自分たちにも問うてるのだと遅れて気付いた彼らは戸惑い慌てながら、当然構わない旨を返答した。

「実はさっき、夕餉の準備を外部に委託してね。近くの広場にささやかだけど礼を準備した。忙しいだろうけど、せめて夕食ぐらいは美味しい物やお酒を、ゆつくり楽しんで休んでくれ。ユリもペストーニヤも、もちろん冒険者達も」

「そんな…、わざわざ配慮して頂き、勿体無いことです。有難う御座います…！」

「本当に、身に余る褒美ですわん…！」

「何を言ってるんだ、ユリもペストーニヤも、シズにもセバスにも、本当に沢山仕事をしてもらって助かるよ。ああ、シズも今日一旦ここに帰ってくるから、姉妹でゆつくりすると良い」

その言葉に、ユリが嬉しそうに顔をほころばせる。友人の嬉しそうな様子に、ペストーニヤも微笑ましそうに穏やかな顔付になった。

「それから、君達も、協力してくれてありがとう。助かっているよ」

その騎士の言葉が、自分達に向けてだと気付くのに、冒険者の彼らは把握するまでにかかなりの時間を要した。

確かに、彼らにとつて現れた白銀の騎士は、名も地位も知らない存在だ。しかし周りが上位者として扱い敬意を払っているので、少なくとも冒険者の一人二人気にかけることなどしなくても良いはずの存在であるはずだ。自分達より遥か上位、魔導王陛下にきつと近い存在なのは、馬鹿でも察することができる。そんな存在が、わざわざ自分達を気遣ってくれている事実には、彼らは目を白黒させた。



「わ、わざわざ僕達、あ、いえ、私達のことまで配慮して頂き、ありがとうございます！」

「仲間達もきつと喜びます！」

嬉しそうに返事した彼らに、騎士は満足そうに頷く。そして、ユリとペストーニヤへ視線を遣った。

「あ、えつと、それじゃあ、僕達は失礼致します。お茶はここに置いておきますね！」

自分達は部外者であると察した空気の読める子が、未だぼんやりしている片方を小突き、退室する旨を告げる。ユリとペストーニヤがお茶に対する礼は言っても引き止めないのを確認し、彼らは部屋から出て行った。

「失礼します！夕餉の件は僕達から皆にも伝えておきますね！」

「あ、はい、しっ、失礼致します！」

ペコりと頭を下げて、閉まりゆく扉向こうに去って行くその背中をたっちは見送る。足音も遠ざかり、不可視の護衛と影の悪魔が頷くのを見てから、たっち・みーは口を開ける。

「ユリとペストーニヤが運営している孤児院の子供達は、本当にいい子ばかりだな。二人の教育がしっかりしているおかげなのかな」

「滅相ありません。そのようなことは、有り得無いかと。私は定期的に見て回るのが精一杯で…、教育など出来ていないかと思われま

す」

「恥ずかしながら私も、ユリ様と同じ思いですわ」  
思いがけない褒め言葉に、ユリもペストーニヤも謙遜どころか戸惑ったような声を出した。しかし騎士は、そんなことはないだろうと言葉を続けた。

「もつと自信を持っていいと思うよ」

「左様で御座いますか？しかし、」  
至高の存在の言葉を受けても、それでも自信が持てない異形の彼女達の否定文を遮り、たっちは優しく言葉を掛ける。

「気になって何人かと少し話をしたんだが、色々聞けたんだ、ユリ、ペストーニヤ」

つい先程の出来事を、たつちが伝えると、ユリもペストーニヤも驚きつつも嬉しそうに話に耳を傾けた。顔を緩めて、聞いて思い出した昔のことを嬉しそうに口にする。

「その話はきつと私ですわん！まあまあ、もうそんなに大きくなつたのね、あの泣き虫な子が！」

「本は…、きつと私ですね。ふふ、懐かしいです。あの子は魔法学院に行くべきだと私が言ったこと、忘れていなかったのね…」

「忘れていたのは寧ろ、私達だったのね、ユリ」

「本当ね、ペス」

微笑む彼女達に対し、彼らはユリとペストーニヤに対して最早信仰に近い感情を抱いているようだとは、さすがにたつちも伝えなかつた。もう少し柔和な言い方をと考え、迷つた末に、母親のように想っているようだよとたつちは伝えた。

「もしそうなら、嬉しい限りです、わん」

「ええ、そうね。なんだか不思議な気持ちだけど」

未だ戸惑いを隠せない様子だが、照れくさそうに顔を見合わせユリもペストーニヤもはにかんでいる。

「ユリ、ペストーニヤ、君達を誇りに思うよ。あの子達を助けてくれて、ありがとう」

その思いがけない御礼の言葉には、暫しぽかんとした後ユリもペストーニヤも大慌てで頭を下げてとんでもないことだと否定した。

「そんなに卑下ばかりしないでいいのに…」

「し、しかしっ」

「至高の御方から御礼を言われるなど身に余る榮譽すぎて…！」

「けどなあ…、ユリとペストーニヤと違って、教育も愛も、救済も何も、俺は、できていなかったんだよ」

全くもつてうまくいかなかった世界を思い出し、たつちは肩を落として力無くぼやいた。

遙か遠い記憶に思い馳せ、たつちは自嘲する。

その場に居る誰も知らない、彼自身の人生を、瞼の裏に投影して、腐りきつた世界で授かった小さな幸せと、その子に自身が与え指し示す

ことができたこと全てを思い起こす。そのちっぽけな、愛の全てを。そんなたつちの様子に戸惑う彼女達を見て、つまらないことを言ってしまったなとたつちは後悔する。

「さあさあ、行ってきなさい、二人共。広間に準備したナザリックの食事が無くなってしまう」

誤魔化すようにその背を押して、たつちは戸惑うメイド達を部屋の外へと見送った。その顔に浮かぶ表情を見て申し訳ないと思うが、少し独りになりたい気分になってしまっていた。

風に当たりたくてテラスに出ると、遠くからはしやぐ声が聞こえた。

快活なよく通るその声は、先程たつちの問いかけに対して真っ直ぐに応えてくれた者の声だ。小麦色の肌をした彼は、真に神がいるなら罰を食らっても何らおかしくないことを最後の最後に言っただけだ。揺るぎなく真っ直ぐに、『ユリ様とペストーニヤ様は、俺達にとって神様です』と。

「…天罰か。くだらないな」

澄み渡る青空は、変わらずのんびんだらりとしたままだ。唐突な雷も、嵐もやってこない。

心地の良い静寂が壊れることは無い。それは、分かりきっていたことだった。

見上げるそこは、空なのだから。

## 純黒03

天に御座します、神様。

「…かみさま」

がらんどうな声が呼ぶ。森の中、湿った暗い大地の上で。

なぜ、その御座より降りて御手で救い上げてくださらぬのかと。牙を剥く地上の暴力を、無視されるのかと。

傲慢なのは、救われると信じていた人々なのか。不意に足元が揺らぐ人間を、バケモノが笑っている。嘲るように。

初めて村に現れた時と同じ顔で。

数刻前、村人全員で煮え切らない話し合いを繰り返し、やっと逃げることに決まった夜中。村に現れたのが、今や村人の過半数を惨殺したであろう可憐な美少女だった。

謎の黒い燕尾型の細長い旗と共に唐突に現れた少女に対し、スレイン国民の誰もが最初はぽかんとするばかりだった。

とても愛くるしい微笑みを浮かべる彼女は、村人全員が今までの人生にて見た中で間違いなく一等の美少女だった。村人にとって噂にしか存在を聞かない華美なドレスを着こなす彼女は、白く、細く、儂く、汗など流さない存在のように思わせる。その流れる銀糸に見合わぬ幼さの残る顔は、しかし強烈な色香を纏い、年齢も性別も関係なく誰もを虜にさせた。誰もが、危機感を抱くこともなく、彼女に見惚れてしまっていた。

その美少女が、小さな爪一つで、村一番に屈強な大男の首を容易く地に落とすまでは。

暫しの間を空けてから、全員が起きたことを理解した。そして悲鳴を上げ、我先にと一齐に森の中へと逃げ始めたのだ。しかしその殆どの者達が、周囲を包囲し待ち構えていたモンスターにあっさり殺さ

れた。

その待ち伏せを掻い潜り森へ逃げ込めた者達も、今や走るのを止めて座り込んでいる。

弱りきった人々は、最後に救いを求め、神様を呼んでいた。

「…かみさま」

誰かがまた、神様に縋りつこうと、呟く。

青白く照らされる夜の森に響く、心底楽しそうな胸をざわつかせる女の甲高い笑い声。それに追いかけられながら悲鳴と断末魔を背後から聞いてきた彼らの目には最早、希望の光など無い。容易く追いついてきた麗しき少女の愉しそうな笑みを見れば、逃げられたのではなく逃され、弄ばれたのだと誰もが否応なく解ってしまった。

下手に生き延びてしまった者達は、誰もが後悔していた。今や無力感に苛まれながら、涙を零すばかりである。その場に居るのは最早、リビングデッドのみであった。

硬直する彼らを支配するのは、バケモノ共に対しての恐怖と軽蔑。そして、認めがたい感情がもう一つ。恐ろしくて恐ろしくて堪らなくても、それでも魅入られてしまう、その美貌に対する羨望。

可愛い顔をしたバケモノは、逃げ惑い泣き叫び命乞いした人々の絶叫を奏でたのに。武器を手にした者達も、その圧倒的な力を持つて一瞬で物言わぬ肉塊にしたのに。その圧倒的な美しい容姿に、可憐なその四肢に、指先に、それでも彼らは見惚れていたのだ。

それが嘘偽りでしかない有り様だと知らないままに、彼らは悍ましい美にその心を捉えられていた。

銀髪の少女が、また綺麗に微笑む。この世のものとは思えない、微笑。

まるで花畑にいるのではないかと錯覚させる程に無邪気に、可愛らしく、楽しそうに、愛くるしく。しかし、その足元に広がるのは花々ではない。血で真っ赤に染まった大地と、無数に積み重なる死体だ。

その光景を、フランスの民草は呆然と見詰めている。月明かりの下、無意味にてらてらと光るだけの冷めた臓腑と垂れる血液。嘗ては生物の一部だった何かが、今はただ食物連鎖の最下層で転がっている様

を、ただ漠然と、彼らは視界に入れていた。

その身を震わせ、逃げることも戦うことも諦めて、踏み潰される肉塊に己の運命を重ねながら。

軽快な足取りで、人間に見せつけるように彼女が肉片を踏みつける音が月夜にまた響く。

自身と眷属達の素晴らしい仕事跡を踏みしだく行為に高揚を覚え、麗しいその顔は益々機嫌を良くして笑みを深めていった。

「私達も、殺すのか」

生き残った人間の男が、咄嗟に握りしめてきた全財産の入った小袋片手に口を開く。震える声を発した生き残りをじいと眺めて、彼女が小さく可愛いその口を開く。

それに対して人間達は驚いた。村人に対して少女は今までに笑いかけるだけで、何一つ声を掛けやしなかったからだ。最期の言葉を聞く程度の慈悲があるのだろうか、人々は彼女の艶やかで愛らしい唇を見詰めた。

そして、その口が、にんまりと裂けるように嗤う。嘘みたいに、夢幻の如く、麗しかった美貌は消え去っていた。

「残りは、砦に連れて帰ってくんまし。じっくり、愉しませてもらうことにしんじょうかえ」

その愛くるしい声による無慈悲な命令に、人間には見えない存在が彼らに這いよる。誰もが何も理解できないまま、一人、二人と闇夜の中に消えていき、悲鳴は遠ざかっていく。

そうして最後の一人も、月を背に心底愉快そうに嘲笑うバケモノを最後に見て、この世から別れ地獄の底へと連れて行かれた。

恐ろしいほど静まり返る、生き物が死に絶えた世界。上空に座す月と星々が何時も通りに世を照らす中、戻るべき場所へと白く小さな足はヒールを鳴らして歩み始める。可愛らしく、くるくると踊りながら。静かな死で染められた道を、悪夢から生まれた様な美しい少女は進み行く。甘く冷たい香りの満ちる、暗い道を。

それはそれは恐ろしくも美しく、シャルティア・ブラッドフォールンはまた微笑んだ。

楽しい夜の散歩も終わり、シャルティアの視界に黒の陣営の中心拠点である砦がある湖が見えてくる。その向こう側にある、瓦礫の山に姿を変えた宗教都市の残骸も。

アンデッドで構成された冒瀆的な砦が建てられた月と星を映す闇夜の湖。都市の面影など既に無い岩と土でできた山は、無力な神々の像の成れの果てだ。穏やかな月明かりに照らされているその一帯には、既に濃厚な死の匂いが染み付いていた。

思わず鼻歌交じりになりながら、さらに軽やかにシャルティアは歩みを進める。その口元は、微笑っていた。

ふと、その小さく可愛い足が止まる。そうして紅玉の瞳がゆるりと動き、ある物を視界に捉えた。

ひたとそれを見据え、シャルティアは崇拜の念から頭を下げた。瓦礫の山の天辺にある巨大なアインズ・ウール・ゴウン魔導国の御旗に対して、深々と。

その魔導国の国旗以外に掲げられているのは、黒地に赤い縁と細い十字架が描かれている燕尾型の旗、黒陣営の拠点を示す旗である。闇夜の中だが、闇の住人である吸血鬼の瞳は遠目からその御旗を容易く視認していた。その下で旗を支える憐れな人間の姿も。

また、シャルティアは笑う。今度はにたりという音が似合う歪んだ笑みである。

瓦礫の上、小高い所で御旗を支えるのは、茨に包まれた人間と、それを助成する骸骨だ。その茨に包まれた人間が生きていることも、ゲームが終わった後にどうなるのかもシャルティアは話に聞いている。だからこそ、滑稽で、心底面白くて愉快で堪らなくて、嘲笑ったのだ。

闇夜の中でぴくりと動かない彫像めいて見えるそれが、ずらりと並び旗を掲げる姿は、本来ならば不気味以外に言いようがない光景だ。しかしシャルティアにとっては、喜劇の一場面にしか思えない光景である。

シャルティアは、分相応な姿である憐れな人間に対して酷薄な笑み

を浮かべる。そして、よくお似合いでと言い捨てて、また歩みを再開した。

夜を吸い込み真っ黒になった湖上に造られた無数のアンデッドによって組立てられた砦。無数の骨で造られたその足場の上にはカラフルなストライプ模様のテントがいくつも並び、無数のランタンが灯っている。

骸骨の手によって掲げられる銅と金で繊細な装飾を施されたランタンは、その光自体がカラフルである。ただでさえテントによって砦全体がカラフルで派手な印象になっているのに、青や黄、ピンクやオレンジの光まで灯され、さらに悪目立ちしていた。

そんな見た目だけは華やかで楽しげな死臭漂う静かな場所へと、暗い陸から続く不気味な一本道があった。

砦と同じく骸骨で構成されたその道、陸と湖上の境目は、死の騎士が見張りをしている。そしてその湖上の中心へと行く道の途中、ランタンの下にて人型が一つ。

赤い灯りに照らされながら真っ暗な森の向こう側を見詰めるのは、露出の激しい扇情的なメイド服を来た、麗しい金髪の艶めかしい美女だ。

じつと、文字通り微動だにしなかったその四肢が、微かに動く。緩慢とした瞬きに、まつ毛が揺れる。その金糸に縁取られた深い蒼の瞳が、美しいドレス姿の少女を捉えた。

鬱蒼とした森から現れた美少女が月明かりに照らされながら近付いて来る姿は、まるで御伽話の不吉な報せめいた光景だ。不気味で、ぞわりとさせるような場面である。

しかしその光景は、ソリュシヤン・イプシロンにとって待ち侘びた光景、ただの嬉しい報せであった。

「おかえりなさいませ、シヤルティア様」

恭しく頭を下げ、捕食型粘体は真祖の吸血鬼を出迎える。

「ただいま帰りました、ソリュシヤン」

見た目だけなら戦場にそぐわない、美しいソリュシヤンと可愛らしいシヤルティアが並び立つ。そこだけが突然に、ぱつと華やかな夜会



の場になったかの様だった。

周りをぐるりと見渡し、シャルティアは片手を上げ、周りにいた潜伏と隠蔽スキルに長けた護衛に対しての指示を出す。陣地に戻ってきた為に、半分は陣地周辺の守護の任に戻したのだ。

「ウルベルト様は如何されているでしょうか？」

「今は奥のテントで、エントマのために食事を御準備されてますわ」

ソリュシャンの返事に、シャルティアがぱちくりと目を瞬き、綺麗な紅の瞳を輝かせる。そして、うっとりとした口調で甘やかな吐息と共に言葉を漏らした。

「まあ…、ウルベルト様だったら、ほんに御優しい方でありんすえ…。さすがはモモンガ様の御友人でありんす。なんて慈悲深い御方でありんしょう…！」

「ええ、シャルティア様の仰る通りですわ。ウルベルト様の御寵愛を受けられて、エントマもとても嬉しそうですし…、…ですが、」

区切られた言葉の先を、シャルティアは可愛く小首を傾げ促す。ソリュシャンは、複雑そうに苦笑しつつ話を続けた。

「姉としては嬉しくもあり、けれど嫉妬もあり…、素直に喜べなくて…」

「あらあら、複雑な姉心でありんすね」

「ええ、恥ずかしいことですわ。可愛い妹に対して嫉妬なんて」

気落ちした様子ソリュシャンに、シャルティアは優しく語りかける。

「そこまで気に病むことはないでありんしょう。至高なる方に愛されること、御役に立てること…、これ以上に甘美な幸せなど、ありはせんのですし。私も嫉妬しちゃうでありんすよ」

「そう言って頂けると、気が楽になりますわ。ありがとうございます、シャルティア様」

不気味なアンデッドが掲げるランタンの下を潜り抜け、砦内を巡回中の配下達に頭を下げられながら、楽しい彼女達のお喋りは陣地中央へと向かっていく。

「こちらのテントに居られますわ」

ソリュシャンが手を向けた先の陣地中央には、まるでサーカス団のような赤と黒の縞模様の派手な丸型のテントが設置されていた。

そのテントの出入り口の守護を任されているアンデッドとモンスター、そして悪魔達は、階層守護者と戦闘メイドに気が付くと、恭しく頭を下げる。

彼女達が更に近づくと、入り口近くの柱を構成している骸骨の手が左右から伸びてきて出入り口のカーテンを開いた。ストライプ模様の布地の更に先には、闇を縫い合わせて出来上がったような黒い布地が幾重も垂れていた。

中に入り、自動的に脇へ避けていく黒の布地の向こう側へとシャルティアとソリュシャンは歩みを進める。そしてその先にある、光あふれる場所へと出ると、優しい声が濃厚な死と血の匂いと共に彼女達を出迎えてくれた。

「おかえり。お疲れ様、シャルティア」

「至高なる御方からの歓迎と労いの御言葉、恐れ入ります。シャルティア・ブラッドフォールン、只今帰還したのでありんすえ」

真紅のシングルソファに腰掛けていたウルベルト・アレイン・オードルは、テントに入ってきたシャルティアとソリュシャンを視界に入れると、開いていた本を閉ざし、足置きにて乗せいていた蹄の先を下ろした。そして腰掛けたままに、彼女達へと姿勢を向けた。

「ソリュシャンも、シャルティアの出迎えに行ってくれて、ありがとう」

「恐れ入ります。私めには勿体無いお言葉ですわ」

頬を染めてはにかむのは恋をする乙女のようなだが、胸に手を当て頭をゆるりと下げるさまは忠実なる部下のそれである。相反するような仕草も表情も、全て、唯一つに向けられたものだ。

数歩、ウルベルトの前に歩み寄り、シャルティアとソリュシャンは床に膝を付こうとしたが、それは御言葉によって止められる。

「いいよ、ここ散らかってるから、シャルティアとソリュシャンの服が汚れるぐらいなら跪かないでほしい」

その気遣いの言葉に、麗しいその顔を彼女達はますます蕩けさせる。

「ああ、なんと御優しい方……。感謝致しんす、ウルベルト様」

「偉大なる御方からの御気遣いに、心の底から感謝いたしますわ」

ウルベルトが指摘する通り、テントの床、彼女達の足元は夥しい量の臓腑や血で汚れていた。

テントの中にて積み重なる檻と、その中にいる無数の人間、そして椅子に括り付けられた数名の人間達。そのいずれかの人間か、それとも既に亡くなつた存在が残した断片か、その両方か。

誰のものだったか、何人分のモノだったかなど、全く分からない程に散らかつたそれは、凄惨な出来事を無言のままに語る。

「散らかしっぱなしで悪いな。残骸は都度片付けてもらっているんだが、すぐに散らかしちやつて……」

床に敷かれた木の板は、赤黒く染まり、じつとりと湿っている。つい先程に革袋から溢れたばかりの臓腑は、まだ片付けられずに床の上に残っていた。椅子に括り付けられた人間の腰掛けるそれも、既に大量の血液が滲み込んで変色している。

「ウルベルト様が気を煩わすことなど無いでありんすえ。御身が御楽しみになられている、それだけで良いのでありんす」

全肯定するシャルティアの隣で、ソリュシヤンも頷く。それに対して笑って、ありがとうと答えながらウルベルトは手にしていた本に視線を戻す。

その表紙には、『美味しい！簡単！夕ご飯！』と可愛くポップな書体で書かれていた。

「ところで、お食事の準備をされていると伺つたでありんすが、あれがシエフでありんすかえ？」

クスクス微笑うシャルティアの視線の先、人間の体液の匂いが一層濃く漂う中央に、場違いな物が唐突に設置されていた。

調理台と手洗い場、そして焔炉が並ぶそこは、所謂キッチンスペースである。そして、その場で料理の真つ最中であるのは、血みどろのエプロン姿の人間。

料理をする者としては如何なものかと思える程に顔を青褪めさせ、今にも吐きそうな顔をしている男は、血の染み付いたコック帽をかぶっている。成形途中のハンバーグのタネを持つ手は震え、今直ぐそれを手放したいとその目は訴えていた。

「ああ、元兵士だが、指示通りに材料を切って、肉を捏ねるぐらいはできる、有能な奴だよ」

「ウルベルト様からそのような有り難い御言葉を頂けるとは、なんと恵まれている人間でありんしょう」

「まったくですわ」

調理台の近く、椅子の上でひくひくと痙攣し血を垂れ流している人間を見据えながら、美女達はニヤニヤと嘲笑う。

太腿の肉を削ぎ落とされ白い骨を晒す虫の息の人間が、何のためにその肉を削がれたのか。シェフが指示されるままに何を調理しているのか、それはその場の人間達の青褪めた表情が雄弁に語っていた。「ところで、こっちは何も問題無かったが、シャルティアの方も問題は無かったか？」

片手から片手へ、空気を抜くためにハンバーグのタネが放り投げられる間抜けな音が響く中、ウルベルトは尋ねる。

「はい、予定通りの地区まで殲滅し旗を建ててきたであります。白側が近付いていたであります、凡そ間に合いました。予定していた内の三つ、それから未確認だった土地にあった砦や村を少し、取られてしまったであります…」

「気にするな。それぐらいは想定内だ。よく頑張ってくれた、シャルティア」

その褒め言葉に照れる愛くるしいシャルティアのその表情は、つい先程までのあくどい顔付をした者と同じとは思えない程にあどけない。

「それじゃあ、明日もこの調子で陣地を増やそうか。隠れている軍が見つかったけど、今のままだと好きに出来ない場所に居るからな」

ウルベルトが満足そうに報告を聞き届けた所で、シェフの動きが止まる。涙目の彼は、綺麗に成形された楕円形の塊が五つ並ぶトレイ

を、ウルベルトが見えるように差し出していった。

「うん、上手じゃないか。それじゃあ、続いてはつと…」

読み上げられたレシピ通りに、並ぶ塊の中央を軽く抑え凹みを彼は作っていく。続いて、フライパンに油をひき、戸惑いながらも言われるままにコンロの火をつけた。

「さて、話し合いは後でゆつくりするとして、シャルティア、何か欲しい物は無いか？頑張ってくれたご褒美に、何かあげるよ」

「そ、そんなつ、ご褒美だなんて…」

熱くなつたフライパンにハンバーグのタネが置かれ、焼ける音が煩く鳴った。肉の焼ける音と良い匂いを嗅ぎながら、遠慮するシャルティアが我が儘を言えるようにウルベルトは説き伏せていく。

「あんまり遠慮されても嬉しくはない、そうモモンガさんに教わらなかつたか？」

「っ…で、では…、ウルベルト様、この辺りにいるのは、好きにして良い人間でありんすかえ？」

そわそわした様子の子のシャルティアは、未だ言つて良いのか迷いながら尋ねる。そんなシャルティアがちゃんと我が儘を言えるように、ウルベルトはあくまで強制的にならないように、そつと優しく続きを促した。

「そうだけど、欲しいものがあるか？どれでも構わないぞ、シャルティア。好きなものをいくらでも選ぶと良い。そうだ、ソリュシャンも何か欲しいものは無いのか？」

ウルベルトの言葉に嬉しそうにし、礼を述べてからシャルティアは檻の中にいる人間の物色を始めた。しかし同じく問われたソリュシャンは首を横に振り、遠慮がちに断りを入れた。

「私めは褒美を貰えるようなことなど何もしていませんわ。仕事もしていないのに、褒美だけは頂けません」

「何を言ってるんだ。昼間は途中までシャルティアに付いてくれたうえ、ここの人間から情報収集や教育まで務めてくれたんだ。充分な働きじゃないか」

ウルベルトのその言葉に、ソリュシャンはぱちくりと目を瞬かせ

る。確かにウルベルトの指摘する通りの仕事はしたが、何かしらの成果を上げた訳ではないために、まさか把握されているとは思っていなかったのだ。

「感謝してるよ、ソリュシヤン」

「っ！なんと、勿体無い！あ、ありがとうございます、ウルベルト様：！その様な身に余る御言葉を頂けただけでも、光栄の極みで御座います…!!」

常に落ち着いた雰囲気を纏う彼女だが、その声には確かな喜びと、プレゼントを前にした興奮が隠しきれずにあつた。

「遠慮するなよ、ソリュシヤン。好きなものを選びな？おっと、そろそろかな」

次の指示を出された人間は、ぎこちない動作で何とかフライ返しでハンバーグを一つ引っくり返す。差し出されたフライパンの中、片面に程よい焦げが付いたのを確認すると、よしよしと満足そうにウルベルトは頷く。

「良い焼き色だ」

満足そうに呟いたウルベルトは、ハンバーグを全てひっくり返し、後は火を止めて、蓋をして蒸し焼きにするよう指示を出す。もうここまでくれば、出来上がりだ。調理人の役割は、終了である。

「さてと、約束は約束だ」

その言葉にやっと、料理をしていた男は安らかな顔をした。長い長い勤めを終えて、やっとベッドで眠れる時が訪れたかの様な、安堵の顔を。

「おっと、いけない。ソースを作るのを忘れるところだった。ほら、材料はボウルに入れてるから、その肉を取り出して、それと肉汁を混ぜるまでが、お前の最後の仕事だ」

すうっと顔を青褪めさせながらも、しかし、最後という言葉を支えに元兵士のシェフは仕事を再開する。綺麗な青い大皿に焼けた肉の塊を退けると、肉汁が残るフライパンの中へと、ガラスボウルに入った材料を注ぎ込む。

黄金色の蜂蜜と、茶色のどろりとした液体と、そして真っ赤な搾り

たての液体。それらを混ぜながら、またもや泣きそうになっているシエフの背後から、からかいの言葉が掛かる。

「味見をするかい、シエフ。最期の晩餐だ。どんな罪も許されるだろう」

場に響く乱れた呼吸音と破裂しそうな心臓音は、シエフが奏でるものだ。フライパンから手を離し、混ぜ終えたことを報告するシエフのその顔を見て、くつりとウルベルトは嗤う。

「冗談だよ。お疲れ様。…《真なる死》」

どしやりと、立っていた人間が死体となって崩れ落ちた。それは、彼とウルベルトの間で取り交わされた約束の結果である。

転がる死体と、完成されたハンバーグの置かれたキッチン、椅子の上で虫の息の骨を晒す男。

面白い光景だなあなどとぼんやり思っていたウルベルトの耳に、無邪気にはしゃぐ女の子の声が届く。

「ウルベルト様、あの檻の娘共が欲しいであります！」

レシピ本を閉じてアイテムボックスの中に放り投げると、ウルベルトは立ち上がり欲しい物を見つけたシャルティアへと近づく。

細く白い指が指し示す檻の中には、彼女が度々可愛がっている吸血鬼の花嫁と見た目年齢が近い震える少女達が三人居た。

「ああ、いいぞ。シャルティア。どうする？ナザリックに運ばせておこうか？」

「御気遣い頂き有難う御座いんす、ウルベルト様。少し遊んで立場を分かせた後にナザリックに運びんすが、自分でやっておくであります」

「そうか。一通り調べたから大丈夫とは思いますが、怪しいと思ったらナザリックには入れないで殺すんだぞ？」

「はい、気を付けるであります！」

元気よく、とても気持ちのいい返事をしたシャルティアは、檻に視線を向ける。そして先程の表情は瞬く間に消して、何を思っていたのか、歪んだ笑みを浮かべた。

「ふふふふ、愉しみでありますえ…」

その愉しみについては、シャルティアの製作者のことを考えてウルベルトは当然深くは尋ねなかった。シャルティアが楽しいならそれで良い、ここで思考をウルベルトは完結させる。

「私があれば欲しいですね。あの年齢はルール違反ではないのですよね、ウルベルト様」

ソリュシャンが指示す先には、未だその眼に光を宿す若者達が二人居た。その灯火を掻き消したいのだろうと気付くが、楽しみを邪魔しては悪いと思い、ウルベルトは口を閉ざす。

「ルールで決まってる年齢以下の人間なら別の所にまとめてあるから安心していいぞ、ソリュシャン」

嬉しそうにお礼を述べる彼女達の背の向こうでは、指された者達が揃いも揃って目を見開き、自分達に対する扱いに愕然としていた。しかし、どれ程哀れっぽく鳴こうとも、睨もうとも、それは彼女達にとって無関係で無関心でどうでもいい出来事だ。なにせ彼らは、ここでは生きていく物でしかない。

食料や玩具の心の内など慮らないことは、普通のことである。それは、ただ消費される存在でしか無いのだから。

衣擦れの音がして、テント内にまた新たな人でない存在が現れる。

「ウルベルト様、デミウルゴス、只今帰還致しました」

「同じく、エントマ・ヴァシリッサ・ゼータ 帰還致しましたあ、ウルベルト様」

現れたのは、派手なストライプの衣装がすらりとした手足に似合う、銀の尻尾以外は人間の様な見た目の男。そして、妙に動かない顔以外は人間らしく非常に可愛い風変わりなメイド服の少女。どちらも姿形だけならば脅威を感じさせない、人に近く感じる出で立ちである。

しかし檻の中の者達は、警戒し恐れる。いまさら淡い期待など、彼らは抱かない。否、抱けないのだ。それほどの地獄を、その両の眼で見て、体と魂全てで味わってきたのだ。このテントの中で生まれるのは絶望と耐え難い痛みだけだと、嫌という程に彼らは既に知っていた。学ばされていた。



デミウルゴスは檻にいる憂う暗い顔をした人々を愉しそうに眺め、その口角を何時も通りに吊り上げる。エントマは、生きている人間の表情などに関心を抱くことなく、漂う良い香りをこっそりと味わっていた。

「おかえり、デミウルゴス、エントマ。二人共、お疲れ様」

いつものように謙遜し、床に膝をつこうとした彼らを、シャルティアとソリュシャンの時と同じ様に理由を述べウルベルトは止める。

「積もる話は別のテントで聞くよ。それよりも、丁度良かった。エントマ、おいで」

招かれたエントマは恐る恐ると、しかし期待もしながらウルベルトの側へと近付いた。

「ほら、エントマのために作ったんだ。ほんとは皿にちゃんと乗せて、綺麗に盛り付けて出す予定だったけど…、せつかくの出来たてだ。…食べてくれるかな?」

キッチンスペースにて邪魔な死体を蹴り飛ばし、青い皿に乗ったハンバーグを、ウルベルトはエントマに見えるよう差し出した。

「…………ああ、なんと、ウルベルト様…！私めの為に、このような…、なんと勿体無い…!!」

思わず素の声で、歓喜に震えながらエントマは礼を述べる。あまりの身に過ぎた褒美に、戸惑いを隠せないままにエントマはおたおたしてしまふ。

そんな可愛らしく喜ぶ彼女の様子に、ウルベルトは柔く微笑む。

「少し待っててくれ」

小皿に一つハンバーグを移すと、スプーンで掬ったソースをさらりと掛ける。続いてウルベルトはフォークを引き出しから取り出した。そして慌てるメイドの傍に近寄り、自ら跪いて背の低い彼女と視線を合わせる。そしてエントマへと、それをそつと手渡した。

その光景に羨ましさを抱きつつも、ナザリックの者達はその慈悲深さに胸を打たれ静かに涙し感動する。なんて御優しい方なのだ、ナザリックの者達は心を深く打たれていた。

「ほら、火傷しない様に気をつけるんだよ」

「っ…!!」

もはや胸がいつぱいで、あまりに身に余る光栄すぎて、エントマは辞退したい程だった。しかしそれを断るという万死に値する行為が取れる訳もなく、恐る恐るハンバーグにフォークを刺し、半分に分ったそれを仮面の下の口へと運び込んだ。

「…美味いのです！すっごく美味しいです、ウルベルト様あ！」

表情は変わらなくても、その声音がとても解り易い喜びを表している。ぴよんぴよん跳ねて心底嬉しそうにはしゃぐエントマに、ウルベルトも嬉しそう目を細めた。

「エントマに喜んでもらえて良かった。このお肉は気に入ったかい？」

「はい、このお肉、美味しいですう！」

「そうかそうか、美味しいか！」

嬉しそうにウルベルトは立ち上がり、振り返ると、虫の息になっている男へとアイテムボックスから取り出したスクロールを一枚放り投げた。

「良かったな。美味しかったてさ」

ウルベルトが発する癒やしの呪文に呼応してスクロールが燃え上がり、緑の燐光が死にかけの男に降りかかる。封じ込められていた癒やしの力は開放され、その超常の力は行使される。あの世への階段を着実に登っていた法国の兵士だったが、その階段は消え失せて、また奈落へと逆戻りとなった。

「あ…あ…」

「んー？壊れたか？」

虚ろな目で口を開閉させる男を、ウルベルトは、そしてナザリツクの者達は、何の感慨もなくただ見ている。そして興味を失い、また雑談を再開させようとしていたが、それは男の絶叫で邪魔された。

「ふ、ぎけるなあ…!!」

唐突に大口を開けたかと思えば、男はぎやあぎやあと騒ぎ出した。

男の体を椅子に括り付ける鎖と革ベルトが暴れ、喧しく音をたてる。

「離せ!!これを外しやがれ!!はずせはずせはずせ!!」

「あのなあ、敵国の兵士に開放しろって言われて素直に聞くバカがいると思うのか？」

呆れたように、ウルベルトは溜息を吐き出す。しかし発狂した男の叫び声は止まない。

「はなせ!! はなせはなせはなせ!!」

「その拘束具が無くなれば良いでありんすか？」

にっこり笑うシャルティアの手には、その綺麗な手には似合わない太く長い釘と重たそうな金槌が握られていた。まさか、と横でその光景を見ていた法国民の誰もが、その真紅の瞳に浮かぶ残虐さにぞくりとする。

その冷めた声音に、思わず暴れるのをピタリと止めた男の前に、いつの間にかシャルティアは立っていた。その細い白磁の指先は、彼の望み通りに拘束具を外す。そして、その腕がどこかへ逃げ出すよりも速く、その小さな手は、腕に釘を打ち付けて肘置きに固定した。

「ぎつつやああああああ!!!」

「外しんしたのに、感謝もしないとは。まったく失礼な輩でありんすね」

淡々と呆れたように言いながら、シャルティアは釘でその肉を椅子に固定していく。けっこう面倒だとシャルティアがぼやき始めたところで、麗しい微笑をうかべるソリュシャンも手伝い始めた。デミウルゴスからも的確な指示が出て効率は上がり、暫くすれば彼の望み通り拘束具は外された状態となっていた。

「シャルティアは優しいなあ、こいつの我が儘を聞いてやるなんて」

「ウルベルト様の慈悲深さに比べたら、わらわに出来ることなど、先程の無礼をこの程度で済ませることしかないでありんすえ」

照れたように頬を染めるシャルティアの頭を、ウルベルトはよしよしと撫でる。彼女の頬が更に真っ赤になったのに微笑ましく思いながら、ウルベルトはデミウルゴスに呼びかけた。

「プルチネツラに伝言を頼む。別のテントで仕事なんだが…、悪いが仕事追加だ」

「畏まりました。拘束具が気に食わなかった彼らのため直接釘で手足

を椅子に打ち付けておくように、伝えておけば宜しいでしょうか」

恭しく頭を下げた叡智の悪魔が汲み取った言伝は、今や椅子に座る表情を動かさない人形に成り果てた者達の顔すらも絶望に染め、硬直させた。

「ああ、せっかくのシャルティアが聞き届けてあげたりクエストだ。お仲間全員にプレゼントしてあげないと、不平等だろう？」

「ええ、御優しいウルベルト様の仰せの通りかと。それでは、私めより確かに伝えておきます」

考え全てを汲み取ってくれた悪魔に、ウルベルトは嬉しそうにしている。創造主の意志を汲み取れたことに、デミウルゴスも誇らしげだ。

愉快そうに嗤う悪魔は、椅子に座る人間を眺める。そして釘が何本有れば足りるか試算を行い、シャルティアも手伝って、釘の太さや長さはどれ位の物だと丁度良いか調べ始めた。

「それじゃあ、片付けたら移動するか」

背伸びして、調理器具一式の後片付けを始めようとしたウルベルトが手を伸ばした先にあつた道具を、ソリュシャンとエントマが先んじて掴みとった。

「私共が片付けますわ、ウルベルト様。御料理も、私共が持つて行きますわ」

「私も！お礼の為に片付けをさせてください、ウルベルト様！」

後片付けを押し付けるのは気が進まず、ウルベルトは渋る。しかし、エントマがこれをやらせてくれないなら自害せんばかりの勢いで迫ってきたため、引き下がらずを得なかった。任せる旨を伝えれば、それはそれは嬉しそうにプレアデスの姉妹は働き始めた。

「ああ、そうだ。別のテントでデミウルゴスの労いも準備してるからさ、プルチネツラに伝言したら、直ぐに来てくれよ？」

「それは…、なんと恐れ多い。有難う御座います、ウルベルト様」

可愛い息子の恭しく堅苦しい態度は相も変わらずで、ウルベルトは苦笑する。もう少しだけでも対等に振る舞ってくれないものかとは思うのだが、それを直接伝えて上手くいった試しは今までになかつ

た。

ふと、大人しくなった人間達が視界に入り、そして自身がソリクションを見習い教育するかと言っていたことをウルベルトは思い出す。それから、某卵頭の道化師から結果を出せと催促されたことも。

「……………うん、自分は、どうやら教育はあまり上手じゃないらしいな」

肩をすくめ、ウルベルトはぼやいた。しかし、これから先で教育方法を磨き、そして愛しい子らに対等を教えてゆけば良いのだと気持ちを切り替える。

「先に行ってるから、青と黒のテントに後で全員集合な」

ウルベルトの言葉に、嬉しそうな了承の言葉が返ってくる。その後には、啜り泣きと悲鳴とが渦巻いているが、それは極めてどうでもいい少し聞きすぎて食傷気味になったBGMでしかない。

「……………」

ウルベルトは足元に転がる、自ら願い出て死んだ肉の塊を一瞥する。無表情のまま、何をしても無駄なのだと思ひ安らかな眠りを選んだそれは、本当に幸せそうな表情をしていた。

その死体を跨いで、外へと、テントから出て行こうとするウルベルトの背中に、最後に一つ、大きな声が降りかかる。大きな大きな、呼び声が。

「神様!!」

必死なその声を少しの間味わうべく、目を閉じ、ウルベルトは足を止める。その後が続いた絶叫を聞き届けてから、彼は歩みを再開した。

歩み続けた黒い垂れ幕に包まれた道の向こう側では、騒々しいランタンの灯の上で、暗い夜が涼やかにひろがっていた。知らん顔を決め込む血液を呑んでくれる湖は、月と星の灯火を身に纏って美しく輝いているだけである。

山羊頭がゆるりと天上を、美しき満点の星空を見上げる。歪んだ眼にきらり、流れ星が一瞬写り込んだ。それは、彼の知らぬ間に消えゆく。

「……なあ、おい、呼ばれてるぞ」

宵闇の中に溶ける独り言。

返事はない。それは、わかりきっていたことだ。

見上げるそこには、星々しか居ないのだから。

晴れ渡る空の下、緑生い茂る山林に優しい風が吹く。

眼下で歩み行く人々を眺め、岩壁の上でたっち・みーは満足気に頷く。

彼を包む白銀の鎧も誇らしげに輝き、喜びを現すかの如く赤いマントははしゃいでいる。晴天、爽やかに広がる青空。囀る鳥たち。薫る風。全てが祝福を贈るべく世界を奏でているように、彼には感じられた。

主人が抱く悦びを察した執事が、横からそつと祝いの言葉を述べる。

「おめでとう御座います、たっち様」

「ああ、ありがとう、セバス」

自身が創造した執事のセバス・チャンに返す言葉が弾んでいることは、たっち自身も自覚している。しかしそれも仕方無いと思う程、崖の下に続く途切れることのない行列は、たっちにとつて至極嬉しいものだった。

全くもって、爽快なる気分であった。

「ウルベルトさん、悔しがってるだろうな」

「おそろくは」

黒衣の執事は微笑み、前向きな返事をする。

実際の所どうなのかは全く分からないのだが、悔しがっていると良いとたっちは意地悪く思う。そしてまた、眼前の自身が救済した万単位の人々を嬉しそうに眺めた。

その顔に蔓延る陰鬱とした表情も、アインズ・ウール・ゴウン魔導国でいざれ笑うだろうと、満足気に。

現在、ゴーストタウンが散らばる森林地帯と連なる山脈の一部にか

けて、黒と白の両陣営で互いの足を引張り合いながらの地道な作業が続いていた。偵察を放つては潜む者達を見つけ、適当なモンスタール襲わせて自身の陣地に追い込むという、なんとも地道な作業が。

ルール上どちらの陣営にも属さない場所となつてしまったその一帯には、スレイン法国の兵士達だけでなく非戦闘員も含めた数多くの法国民が未だ潜伏している。

法国軍は徹底抗戦の構えを解かず、潜伏のため散り散りとなつても武装解除をどの部隊も行わなかった。彼らは決して諦めずに、魔導国の拠点目掛けての侵攻と攻撃を未だに仕掛け続けている。それは残された人類としての誇りによるものでもあり、そして囀の役割もあった。生き残った法国民達が少しでも多く魔導国の手が及んでいない国外に逃亡できるようにと、彼らは戦っていたのだ。

その中に強者が紛れ込んでいる可能性に警戒しつつ、黒の陣営も白の陣営も少しずつ彼らを捕縛する作業を続けていた。

たっちの率いる白陣営も、黒陣営にちよつとした嫌がらせをしつつ、地道に法国民の保護活動を行っている。白の陣営内に人々を追いつたて捕縛し連行する、ちまちまとした作業は真面目な白陣営参加者達には合っていたらしく、保護活動に今のところ大きな失敗は無い。それどころか先程たっちが眺めていた万単位の人々の救済は、大成功とも言えるものだった。

数時間前に見つけた護衛部隊に守られていた法国民の大移動は、一般市民はほぼ死傷者無しで保護が出来ている。

先に白陣営側が見つけたこと、発見場所が白側の陣地が近く有利だったこともあり、とんとん拍子で陣営内に追い立てることができたのだ。黒陣営には全く邪魔されることなく、大量の人間が。

黒陣営側にとっては、何も面白くない展開だろうとたっちはまたにんまりする。白陣営側に黒陣営側がまんまとしてやられたというだけでも、彼には愉快なことであった。

たっちの足元に落ちる影に、影の悪魔がやって来て報告を上げる。捕縛した人々を移送する馬車の準備が整い後は順次出立するだけと



いう報告を受け、思わず鼻歌交じりになりながら、たっちはアイテムボックスからスクロールを取り出す。

先程、死者の魔法使いから相談されどこかに移動した執事はまだ戻ってきていない。わざわざ彼の戻りを待つ必要もないかと思いい、たっちも仕事を進めることにした。

スクロールを放り上げ、たっちはその魔法を唱える。燃え上がったスクロールは使用者の指示通り〈伝言〉を発動させた。

「ペストーニヤ、今は大丈夫か？」

たっちが〈伝言〉を飛ばした相手は、ペストーニヤ・S・ワンコだ。彼女は今、二日前に無傷で拠点にしたばかりのそこそこ大きな都市に居る。

『た……ん、し、失礼しましたわん……！』

驚いてしまったせいで名前を口走りかけたペストーニヤが、咳払いで誤魔化す。その反応から近くに彼女を慕う冒険者達がいるのだろうと察し、タイミングが悪かったかなとたっちは懸念する。

「すまない、タイミングが悪かったみたいだな。セバスが途中で手が離せないから、私から連絡した方が早いと思ったんだ」

『そんな！御身が謝られることなど、何一つとて御座いません！』

慌てふためく声音に苦笑し、しかしせっかくスクロールを使ったのに切るのは忍びなく思え、たっちは尋ねる。

「それで、今は大丈夫かな？どうやら周りに人がいるみたいだが……」

『大丈夫で御座います。皆さん、部屋から退室してくださいました』

「そうか。それじゃあ本題に早速移ろう。こちらは無事終わって、今そちらに向かう馬車の出立準備が済んだところだが、そちらはどんな様子だ？」

ペストーニヤと彼女を慕う冒険者達に無条件降伏を飲んだ小都市の掌握と保護施設として利用するための準備を、たっちは任せていた。今回の一件で急遽保護することとなった人々は、その都市に行くことになっている。しかしそれは、既に利用している法国都市の施設の容量があまりに足りない為に急遽決まったことだった。そのため最後の確認作業を急ぎ終わらせるように、彼女達にたっちは頼んで

いたのだ。

申し訳無いとは思いますが、他に手段がないために仕方なく。「私から指示を出しておいて何だが、無理をさせる気は無いんだ。受け入れが厳しいなら言ってくれ。それに、何かの罠ということも無条件降伏の時は考えなければいけないからな」

『御安心下さいませ、たっち様。不可視化スキルや魅了スキルのある者達の協力で最終確認は終わりました。何かしらの企みごともなく、皆さん改心しております。施設の準備も整っておりますので、そちらの皆様をちゃんとお世話させて頂きます、わん!』

最後の元気な鳴き声に、たっちは微笑む。感謝を述べ、それに恐縮されながら、たっちは最後にペストーニャに頼んだぞと伝えへ伝言を切った。そして足下で大人しくしていた影の悪魔に、移送担当者に出立するよう言伝を指示する。

そして振り返り、死者の魔法使いと共に戻って来ていた執事に声をかけた。

「セバス、そっちは終わったのか」

「はい、片付けは終わりました。それから、少し報告が御座います」

「報告？緊急事態か？」

少し慌てた声を出した騎士に、執事も慌てて首を横に振る。

「いえ、緊急では御座いませぬ。少しばかり確認を取りたいことがあるだけです。御御足が汚れてしまいますが、よろしければこちらにご足労願います」

首を傾げつつ、彼に招かれるままにたっちは歩み、足を進めた。

「どうぞこちらへ」

先導する死者の魔法使いに続き、岸壁の縁から執事が飛び降りる。見た目とは全く合っていない軽快さで、彼は岩壁を何度か蹴って地面にべちよりと降り立った。そして同じく執事が仕える騎士も、迷うこと無く飛び降りた。その鎧姿からは想像できない軽々とした動きで、岩壁をまるで階段のように降りて行く。

そして、地面の上にたっちが降り立った瞬間も、べちやりという粘ついた音がした。

それに対して騎士は、仕方ないなどと諦めの溜息を短く零すだけだ。なにせ地面の乾いているところは少ない。そこだけ踏んで移動しようとしたら、かなり跳躍しなければならなくなる。それは少し面倒だった。

びちやり、ぐちやり、彼らの足の動きに合わせて湿った土と液体がその存在を主張する。空は青く澄み渡り、雲一つ無い。しかしまるで雨が降りしきった後の様に、大地は湿っていた。

そうして騎士と執事が異様に湿った大地を数歩進んだ先に、その原因が見えてくる。

彼らが眺め見渡す方向から流れてくるのは、血腥い風。開けた場所に、万の軍勢だった人間達が息絶え、横たわっていた。綺麗に整頓されて、隊列のようにならずらりと死体は並んでいる。並ぶ遺体の中には欠損が激しい物も多く、悪ふぎけのように腕や足が一本だけ転がっているのが幾つも見えた。

大地は、命燃え尽きた兵達の流した血潮と臓腑によって、濡れていたのだ。そして、その散った命は全て、たった独りの騎士によって掻き消されたものだった。

「死体はこれで全てか？」

「はい、全て集め終えたと思われませぬ。念の為に吹き飛んだ死体がないかも、広範囲に探させました。それから、あちらに居るのが、どうするか確認したかった何名か居た軽傷者です」

執事が指し示す先、木陰の下で蹲る三人の男がいた。項垂れる彼らの傍には報告してきた死者の魔法使いとは別の見張りがおり、たつちの命令一つで即座に殺すべく待機していた。

「生存者がいたのか!？」

たつちが死者の魔法使いと執事に頼んだのは、彼が殺し尽くした法国内士の死体の探索、そしてその整理だった。同時に息の根を止められていなかった者は、苦しまないように殺してあげることも頼んでいた。しかし、それはあくまで念の為の命令である。

全員が無駄に苦しむことなどないようにと、たつちは全身全霊をもって相手取り兵士達の即死を心がけていたのだ。そして内心、間違

いなく即死だろうなという自信があった。

それに失敗した事実は、彼にとつてなかなかショックなことだった。

「なんてことだ……。苦しめないように即死を心掛けたのに……。腕が落ちてしまったのかもしれない……」

「滅相もない。私めの方で念の為に何か防衛系のスキルやタレント、アイテムを確認しましたが、どれも違いました。皆死体の山でこっそり隠れていただけで御座います」

「そうか……。それでも鍛錬した方が……。やっぱり鈍っているんじゃないか。あいや、今はそれどころじゃなかったな、すまない」

独り言を並べつつ、ふと我に返ったたちは慌てて自分を戒める。そして自身が今抱えている、するべき仕事をするために、向かうべき場所へと足を向けた。

死体のように動かない、生き延びた兵士達の傍へと。

たちが近付くと、先程までぼんやりとしていたはずの三人が揃いも揃って俊敏に動き、土下座を始めた。敵国の、きつと仲間を殺し尽くしたはずの騎士に向かい、必死に彼らはその頭を地面に擦りつけていた。その姿には、敵意は見当たらない。そして、誇りも、何も感じられない姿だった。

「……顔を上げてください」

「は……。はい……」

ゆっくりと持ち上げられたその表情を正面から見て、たちは一歩、後ろに下がりそうになる。塗り込められた絶望、悲哀、眼の奥で消えはしないが風前の灯火となった怒り。それは、たちのよく知る顔だった。

たちは、何度も何度も何度も、その顔を見てきた。そして全てを見送ってきた。あの世界では何の力も無い、その手で握れる相手しか守れなかった彼は、ただ全てで見ているだけだった。圧倒的な力を持つ搾取する側が、搾取される側を何の感慨も意味もなく踏み潰すのを。ただ、見ているだけだった。

「……立って、ください」

たつちは手を伸ばす。法国兵の顔に驚愕と戸惑いが浮かぶ。白銀の甲冑に覆われたその手は、なかなか取られない。しかしそれでも、じっとたつちは待った。暫らくしてやっと、震える手が、恐る恐ると騎士の手に近付いていった。信じて良いのか、惑う幼子のように。

その手がたつちの手に触れた瞬間、そつと握り締められる。そして、法国兵は騎士に引つ張られるまま立ち上がった。ざわりと、戸惑いの声があがる。

それもそうだろう。勝国の圧倒的な力を持つ騎士と、敗国の弱小な兵士が握手をしまるで対等な友のように並び立っているのだから。

「…死にたいのなら、苦しみもなく殺してあげます」

その言葉に、ぎくりと兵士達の顔がゆがむ。法国の兵士としての模範解答と、個人としての希望の間で揺れ動く彼らの答えは、次の騎士の言葉で決まった。

「生きたいのなら、これからは魔導国民として、幸せに生きて下さい」  
「幸せ、に」

「ええ、幸せに、生き直してください」

それは当たり前前の答えだったのかもしれない。死にたくなくて、生きたくて、彼らは死体の山の中で息を潜めていたのだから。

死者の魔法使いに誘導される未だ戸惑った表情のままである兵士達を見送りながら、たつちは影の悪魔に伝言を任せる。

「……彼らが妙な真似をしたら、残念だが、その時は殺すように伝えておいてくれ」

影の悪魔が去ったのを感じ取り、たつちは辺りを見渡す。

近くに侍っていたセバスは、死者の魔法使いと影の悪魔と共に移動と見張りの段取りについて打ち合わせ中だ。それを横目で見、そして並ぶ死体を見て、たつちは溜息を吐き出す。せめて殺し尽くしてしまいう前に、降伏してほしかったなど。

「いや、さすがに兵士の彼らは大人しく降伏する訳にはいかないか……」  
「しかし、残りの一万ほどの市民の方々は大人しく降伏してくださいました。それもたつちさまが圧倒的な御力を御見せになったからで

しよう」

いつの間にか再び傍に控えていた執事の心配りに、眉間にしわを寄せていたたつちの表情が緩む。

「それでも、初めから降伏してくれるのが一番良いんだがな…」

転がる肉塊の無意味な死に、たつちは暗い声を落とす。

たつちは彼らに、降伏し考えを改めて魔導国で幸せに生き続けてほしかった。彼らが死のうが生きようが、法国の末路はどうせ変わらないのだから。それならば、友が築く、メツキの世界を見たからこそ創れる真の黄金の国で、幸せに生きてほしかったのだ。

「たつち・みー様は本当に、お優しい」

「…優しくはないさ。俺はずっと、諦めているだけだ。全てに対して」  
今までは違うどろりとした重いトーンに、執事は顔付を変える。それを見て、そして周りに誰も居ないのを見て、構わないかとたつちは口を滑らせた。限りなく独り言に近い、独白を。

「現実で、皆が平等に幸福になるなんて有り得ないのは解ってる。ずっと、諦めてきたんだからな。それこそ、この世界に来るまでの自分には何の力も無かったのだから、そんな世界を創れる訳がなかったんだ。理想郷を夢想するしかできない、弱者だった俺には」

「たつち様が…？」

信じられないという表情を見せる執事に、たつちは苦笑する。

「俺は弱くて、くだらない、在り来りな存在だったんだよ、セバス。自分と大切な存在以外なんかどうでも良い、そんな、在り来りな」

憧れていたヒーローと違い、そこら中に溢れているどこにでも居る存在にしか、たつちは成れなかった。自分と、その左右の手で握りしめられるモノを守るだけで精一杯な、そんな存在にしか。

「自身の足元がどうなっているように気がにもとめない。そんな奴らが支配する世界で、甘い蜜を啜っていた側だ。最後の最後にみつともない足掻きをして、…足掻いただけで、終わったが」

長い、疲労感の滲む溜息を零して苦笑交じりにたつちは話を締め  
た。

「だから、俺が弱者を救済するのは自分の為なんだ。誰のためでもな

い、俺のために、理想郷を創りたいだけなんだ」

「……それならば、ナザリックに正式に帰還されては如何でしょうか。どのような理想郷にせよ、地獄にせよ、支配者は要りようで御座います故」

その返答は意外なもので、ぱちくりと瞬きをしてたつちはセバスを見詰め返す。彼にとって訳の分からぬ話を聞かせてしまったことは自覚しており、てつきり流されるだけかと思われた話に、思わぬ提案が返ってきた。それは驚きであり、そして嬉しくもあった。

「たつちさま、私めはきつと貴方様の抱えてきたことを何一つ理解していないでしょう。それでも、」

そこでやはり、偉大なる造物主への提言という行為に逡巡し始めた執事の言葉の続きを、なるべく優しい声音でたつちは促す。

「構わない。言ってくれ」

「…たつち様、今の貴方様は、貴方様の意志一つでナザリック地下大墳墓に帰還しアインズ・ウール・ゴウンの頂点の座席に腰掛けることが許される身です。貴方様には…、この世界を、理想郷とする力が御座います」

その執事の単純明快なる事実の羅列に、たつちは雷に打たれたかのような衝撃を受ける。この世界はあの世界とは違う、解っていたはずの只の事実が、また改めてたつちの脳天を直撃した。

たつち自身がまだ、あの世界での思考を未だ引きずっていたことに、やっと気付かされたのだ。

妥協も、忖度も、我慢も、切り捨てても、無視も、沈黙も、暗黙も、全て、今のたつちに強要できる者など、在りはしないのに。理想郷を指し嘲笑う者も、自ら目を逸らしたくなるような高すぎる分厚い壁も何も無い世界。

その世界に、たつちは今、立っている。

「そもそも、このゲームが開催されなければ先程の人々全員が即死か、最悪の場合は死ぬよりも苦しい地獄へと連れて行かれていたでしょうし…」

セバスの言葉に、それもそうだとたつちは頷く。自身の言動が、我

が儘が、国を動かした事実がやっと実感を伴う理解へと昇華されていく。

「……そうだ。今の俺には、力が、あるんだ」

顔を上げて、果無く続く大地の地平線の彼方へとたっちは思い馳せる。この世全てを平定し正義と幸福のもと支配する、それが今は夢物語ではないのだと、ここが今は現実なのだ、やっと彼は呑み込めたのだ。

今までずっと、手放して諦めて目を逸らして夢想することが正しかった自身の理想と夢。それを、たっちは確かに、掴み直した。見詰め直した。

目を見開いて、直視した。

「…セバス!!…この世界全てをアインズ・ウール・ゴウンが支配するための戦争、それを、この世界の最後の戦争とするぞ!!」

その兜の下で主人の眼が何を睨みつけているのか、解った執事が恭しく、どこか嬉しそうに応える。

「畏まりました。御身に造られしこの身、その道阻む世界の全てを討滅してご覧に入れましょう」

執事の熱い返答に、にかりと笑い、たっちは果てない世界の先の先へと思ひ馳せる。

そして、嘗て自身に対して随分と嫌な質問をしてきたゲーム対戦者のことも、睨みつけてやった。

「俺は、答えを見つけたぞ…!!」

与えてきた問に、答えを返してやろうと寧猛に騎士は笑う。そして、その問をそのままに、あの悪魔の皮を被った人間に返してやろうと、仄暗い思惑をそっと胸中に潜めたのだ。

それがどれ程に胸クソ悪いことなのか、理解しながら。

深呼吸をして、たっちは思考を切り替える。答えは出たが、今は救済とゲーム勝利に向けて尽力すべき時である。

「セバス、何時も通り確認と火葬を頼む。自分は馬車に戻って偵察隊



の報告を聞くことにする」

「畏まりました」

執事が死者の魔法使い達に指示を出し、〈火球〉による、おそらく法  
国の兵士として戦い死んだ者達にとつてはとんでもない方法で火葬  
が始まった。セバスはスクロールで〈伝言〉を起動し、何時も通りに  
アンデッド作成に何体か残しておいた方が良いかの確認を取り始め  
る。〈伝言〉の相手が時間に余裕があればアンデッドは作成され、忙し  
い時は面倒なので焼却処分という流れになっている。

今更救えない死体に対して特別興味もないたつちは、一瞥もせずに  
馬車へと歩みを進めていく。

『たっち様、突然申し訳ありません、ユリ・アルファです。今は大丈夫  
でしょうか?』

「どうした、ユリ。珍しいな」

ユリ・アルファから直接かつ唐突な〈伝言〉に、たつちは驚く。真  
面目な彼女はまずセバスを通すので、珍しいどころか初めてのこと  
だった。

『それが、北の国境近くで問題が起きております』  
「なに?」

とうとうどこかの施設で暴動でも起きたかと、たつちは焦る。しか  
しユリの返答は、たつちにとつて全く想定外の問題であった。

『多くの法国民が、黒陣営の陣地を通過して国境を越えて逃げようと  
しています。黒陣営は何故か法国民を無視しており、誰も何もしてお  
りません。このままでは、あの法国民は全員死にます』

「なっ……!」

その報告に、たつちは驚き、言葉を失う。

今回のゲームにおいて、国境は審判側が管理することになってい  
る。ゲームの開始時点から決まっているルールで、国境に近付いた者  
達は基本皆殺しと規定されている。だからこそ、白陣営は初めに国境  
周囲の陣地ばかりを取ってきた。当然全てではなく、黒陣営の物と  
なった国境近くの拠点や陣地になった場所だって無数にある。しか  
し、今までに黒の陣営側がわざと人間を逃していたことは無かった。

ルール違反ではないが、わざわざ行う意味がないからだ。

それを、このタイミングで行うということは間違いない何かの罠に違いないとたつちは考える。そして、あちらも仕掛けてきたということかと、たつちは無意識ににやりとした。

「…ユリ、北の湖を通して白陣營が法国民を運搬してるルート近くか？」

『仰せの通りです。黒陣營の陣地を通過して、私達が利用しているルートからの脱出を法国民は考えているようです。信じられない程の集団、兵ではなく主に民間人の者ばかりが大移動をしています』

たつちの予想は当たり、現在黒と白が睨み合う土地から近い国境近くの陣地が問題の場所であった。

「ユリ、少しの間待機してくれ。こちらから〈伝言〉を飛ばす」  
『はっ』

緊迫した空気を感じ取った執事は、地図を広げ待機していた。その有能さに感謝を述べ、地図の中から問題となっている国境付近の道と、陣地を見つける。

白陣營側が利用している魔導国側に向かう道と、そして現在黒陣營側が何もしていない問題の陣地。地図を睨みながら、問題の場所を指さして現状の問題をセバスに説明する形でたつちは整理し始めた。

「黒陣營側がこの陣地に穴を空けた。確かに、ここから馬車移動の光景を見れば、法国民達が無事に脱出している様子に見えるだろうな…。アンデッドの壁もなくて、警備がないようにも見えるし…」

だが実際は違う。白陣營側が国境を通過するのも全て、審判側に許可を貰ってからの行為だ。移送中の馬車から飛び出し逃げた者達の安否保証はしないと、モモンガよりも念押しされている。

「…先程浮かれていたのも、馬鹿だったな。黒側はずっと煽っていたんだろう、潜伏中の大量の民間人を。助かるかもしれないという情報を流して、大移動させるために」

たつちは、にやにや嘲笑っている様子のウルベルトが脳裏に浮かび不愉快になる。白陣營のしていることを利用する辺りに彼らしさを感じつつ、顔を歪ませた。

「襲われてから白陣営側に逃げ込んでくれれば良いが、もと来た安全な道に向かうのが自然だろう。そこを一気に狩場とするのも、あの悪趣味なウルベルトさんならやりかねない」

「これは、ウルベルト様の罠なので御座いますか？」

首を傾げる執事に、間違いないとたつちは頷く。

「大方、追いついて捕まえる作業が面倒にでもなったんだろう。そもそも、黒の陣地を通れば安全なことを、どうして法国国民達が知っていると思う？」

そこでやつと執事は、悪魔の罠の全容に気が付いた。

あちら側の協力者には、ドツペルゲンガーが居る。不安と恐怖に陥った人々を法国兵の姿で騙すことは、赤子の手を捻るよりも簡単なことであろう。忍び込み、弱った人々を口八丁手八丁で騙し、彼らの意志で自ら地獄へと歩み行くように仕組まれてしまったのだ。

「それにしてもマズいな…。動ける者達がもう、ここに居る者達しか残されていないのに…」

たつちは渋い顔をして唸る。

ゲーム後半となった今では、大量の人々の世話をしている白陣営側のナザリツクの者達で、手が空いてる者などいやしなかった。

黒と白で法国国民の奪い合いを繰り返している土地での斥候も、追いつける役割のアンデッドも、白側にとってはかなり希少な残された労働力だ。ユリとペストーニヤを慕う冒険者達にはゲームを秘匿、安全のためと嘘をついて拠点から出していないために頼ることはできない。国境に向かって大移動を開始した法国国民に割く人員など、ありはしなかった。

しかしそれでも、知っていて見捨てることなど、たつちにはできなかった。

「…俺とユリで行こう。セバス、すまないがこの辺り一帯を任せても良いか。それから、ユリに問題の場所への移動開始の指示を出してくれ」

「おまかせくださいませ、たつち様」

執事の力強い返答を背に、たつちは急ぎ足で進む。

「影の悪魔、伝令を！今後はセバスにこの一帯の管理を委任する！護衛だけ付いて来い！」

命令を出したたつちの後ろに、猛スピードで駆け寄ってきた馬車が近寄って来る。その風圧は幾つかの死体を吹き飛ばし、幾つかの火葬中だった炎を消して死体を生焼けにしてしまう程だった。しかしたつちは平然と、たなびく布飾りの奥にある高い座席へと、走行中の馬車へ飛び乗った。

上手く片手をつけて勢いを殺し、平然とそのまま深く腰掛け地図を睨む。ただ飾り布がたなびくだけで風圧に襲われそうな車内なのに、そこは嘘のように静かだった。馬車が猛進していることなど幻のように布は垂れ下がり、車内に風は一切入らない。

たつちが指示した行き先を聞き届けた賢いアンデッドの馬は、主人の意志を汲み取り最短距離を突き進んで行く。

大量の人間が、生きようと足掻くこと。蜘蛛の糸に縋るように国境の道へ移動をする行為を、正直言つてたつちは、舐めていた。

それは地獄絵図だった。住民と、そして僅かに脱走兵が混ざり合い、必死の形相で駆け続けている。パニックとヒステリーがあちこちで起こり、法国民同士ですら突如として足の引張り合いを始める有様だ。子供や赤ん坊どころか、大人たちの泣き叫ぶ声まで木霊している。

「国境から出ないでください！私達の許可なく出たら命はありません！助かりたいのなら、こちらに来て投降してください！」

自身の陣地内に純白の馬車を止め、たつちは法国民達が大移動している黒陣営の陣地である林に駆けつけた。そしてユリと合流し、そこで繰り広げられる悲惨な光景に啞然とし、圧倒されながらも、法国民へと投降するように彼は呼びかけていた。

必死に、向かう先に救いは無いのだと、事実を。信じてくれと、彼は叫ぶ。

しかし、魔導国側のたつちの言葉を人々が聞くわけもない。むしろ、たつち達の出現は火に油、いや地雷原にミサイルを落とした様な

ものであった。地獄絵図の光景は、阿鼻叫喚のさらなる地獄の奥底へと、また変わってしまう。

パニックに拍車がかかり、発狂寸前の人々は更に足を速める。国境まであと僅かなこともあり、誰もその足を決して止めようとはしなかった。ここまで無事にやって来て今更捕まってもたまるかと、誰もが必死に足を動かしていく。

しかし黒陣営の陣地であるため強制的に捕縛もできない白陣営は、完全に八方塞がりの状態であった。

「やはり駄目でしたか…。兵ならこちらに飛び掛かった所を捕縛とも出来ましたが、市民の方々は逃げるだけですね」

「クソッ、こうなったら仕方ない。国境近くまで行ったら彼らの先頭が殺されUターンすることになるだろう。その時に国境の空白ライン内で白の陣地に追い立てるしか、もう手段が無い」

「…それは、」

ユリが、たっちの取り出した地図内にある国境の空白ラインを見ながら言葉を濁す。黒と白、どちらにも属さない審判が管理している国境陣地。両陣営の活動を許可されたそこはあまり広くない。それに何よりも現状では、とても手が足りていなかった。

「畏れながら、厳しいのではないでしょうか？」

そもそもユリは本来ここではなく、占拠したばかりで大量の人間を受け入れることになったペストーニヤの居る拠点に向かう予定だった。そんなユリが急遽駆けつけなければいけない程に人員が足りていないのだ。

「…仕方ないか」

用意された選択肢の中から、合理的に正義を騎士は選択する。そして、黒と白で繰り返し返している奪い合いのため残っていた者達の移動を、たっちは決めた。

「南の方は、切り捨てる。これ以上の救済は行わない」

もう充分に救ったと、たっちは判断したのだ。居るか居ないかわからない残りの法国民の探索と捕縛に人員を割いている余裕は無い。それならば、確実に存在する救済すべき存在を優先すべきだと。

残してきたセバスに命令を伝えるため、影の悪魔をたっちは呼び出した。

「空白地帯に残り対応中のセバスと、その指揮下の者達も全員こちらに移動。国境近く空白ラインが見える場所で待機。不可視化が可能なのは国境近くで待機だ。彼らが国境に近付いた後、法国内部にUターンした瞬間に可能な限り捕縛、もしくは白の陣地内に追い立てる」

伝令が去ったのを見送り、続いてユリへとたっちは向き直った。

「ユリ、ペストーニヤの補佐に行ってくれ。一応大丈夫だとは言っていたが、やはり彼女だけだと大変だろう。落ち着いたら連絡をくれ」  
「畏まりました」

続いてユリが移動を開始したのを見送って、たっちは苦虫を噛み潰したかのような顔をして、その場から離れた。馬車に戻ると力なくしやがみ込み、身を潜め、息を長く吐き出す。

「……………最低限の犠牲で、助けよう」

その呟きを最後に、空白地帯に残る人々への想いをたっちは断ち切った。空白地帯で拮抗し邪魔をしていた白が居なくなり、黒だけが好きなようにできるようになれば、残る法国民がどうなるかなど明白である。全員が、地獄行きだ。

しかしそれでも、アインズ・ウール・ゴウンの敵としているのなら地獄行きの覚悟くらいはしているのだろうと、彼は思考を完結させ、終わらせた。

国境に、先頭を駆けていた者達はどんどん近付く。きつと逃げられると信じて駆けていく彼らの首が、ぽんつと、吹き飛んだ。その有様を、哀れな末路を、騎士と執事はじつと見ていた。

それを信じられなかったのか、その心理に何が起きたかは分からな  
いが、後ろを駆けていた者達も死体に近付き、そして同じ末路をた  
どった。その結末を目にした法国民達は暫し呆然とし、そして一斉に  
Uターンして自国へと戻ってくる。

悲鳴を上げながら戻ってくる者達に目掛けて潜伏させていた自陣  
営の者達に、たっちは突撃を命令した。

それが殺戮しろという命令だったならば全滅だっただろう。それ程まで綺麗に囲まれた集団は、統率された動きによって白陣営の陣地へと誘導された。暴力は振るえないので、包囲できなかった者達は自ら黒陣営へと駆けていってしまったが、多くの者達は白陣営側の捕虜として捕獲されることとなった。

その結果に満足し、たっちはほっとする。

「さて、ウルベルトさんのことだ。どこかで見てるんじゃないか、あの悪魔」

天空を見渡すが、何もみえない。不可視化アイテムを所持しているので何も不思議ではないが、事が終わった後なら姿を現しそうな彼が一向に現れないことに、たっちは首を傾げた。

そんなたっちの背中側、少し前までセバスが居たであろう南の方角に、ゲヘナの炎が高く上がる。それをみて、たっちは自身の勘違いに気が付いた。

てつきり、ゲリラ戦をちまちま相手取るのに飽き、わざと国境に穴を開けることで一箇所に集め一気に捕らえるつもりなのかと、たっちは思い込んでいた。もしくは逃げられると信じきった人々を絶望させ、殺し尽くすつもりなのかと。しかし、それは違った。そしてそれは冷静に、その性格を考えれば分かることだった。取り合い合戦なんて地味なゲームを、ちまちまするような性分ではないことを。

「いやいや、待て。まだ間に合う。今から急いで戻って黒の陣地に行っていない人をこっちの陣地に……」

あの一帯がどちらの陣地にも属さない事實は、揺るぎないはずとたっちは深呼吸する。

その足元に、影の悪魔が現れる。現れたそれは、全ナザリックメンバーへと前置きのうえ伝令を伝えた。

「白陣営側に通達、ゲヘナの炎内にナザリックの者は入らないように。そしてたっち様、黒陣営の陣地に追加報告が御座います」

「黒の陣地が増えたのか!？」

たっちがアイテムボックスから取り出した地図のとある一点を、影の悪魔が指し示す。そうして現れた巨大な黒の陣地に、たっちは目を

見開く。そして、この一連の行為全て、黒陣営側が計画していたことを悟り、齒ぎしりする。

「あの山羊、一掃する気か！クソっ、嵌められた!!」

足元に地図が叩きつけたくなる衝動を、必死に抑え、戸惑う執事にたつちは自嘲しながら解説する。

「あの辺り一帯全てを、焼き尽くすつもりだ。：俺達が、邪魔だったんだよ」

自分達が行っていた妨害工作、それがあの場所では今、一切機能していないのに気がついた執事がハツとする。

「私が退いたから…」

気付いた所で今更彼らにできることなどありはしなかった。少し前まで自分達が居た場所から巻き上がる噴煙と黒い炎を、執事と騎士はただ見つめるばかりだ。

気落ちする創造主に、何も言えずに執事は黙り込む。もっと自身が賢ければ、主人が気落ちすることなど無かったかもしれないと思うと、セバスはますます胸が塞がるおもいだった。セバスがそんな様子だからか、急遽呼び戻すことになってしまったユリも暗い顔をしている。進み行くほどに黒く焦げ臭くなっていく周囲の景色は、執事とメイドの気分の落ち込みを更に助長させていく。

「酷いな」

馬車で近くまで来た後、救助できる人々を発見しやすいように降りて歩いていったつちがぼやき、聖水を振りまく。召喚主が召喚した魔物を消してやっとな消えてくれる黒い炎は、普通の水では消えないためだ。

「私共が居なかったために…」

「言っておくが、お前達は何も悪くないからな」

「ッ！」

その言葉にセバスが顔をあげると、落ち込んでいたはずのたつちは毅然と前をみている。

「助けに行こう、きつと困っている人がいる」



「はっ！」

力強く答えたセバスとユリは、仕える主人に負けじと前を、炎があらゆるこちらで燻り、焦げ臭い真つ黒な世界を睨む。

「この一帯はまだ空白地帯のほずですが、火が確実に広がって来ていますね…」

黒い炎が斑に染める道の中、セバスは周囲を睨みながら零す。

「燃え移った炎に関しては事故扱いだろう。あくまで最初の狙いが黒の陣地だったのなら文句を言えない」

広範囲における攻撃で、規定年齢以下の死亡や余波による相手拠点や陣地の殺人は、仕方のないこととして許可されている。当然、視認してしまった場合は救済義務が生じるが、知らなかった場合は責任を追求しないのだ。

「たっち様、セバス様、おそらくもう黒の陣地内です」

「…そうか。…規定の年齢以下なら救済しても問題にはならない。少しでも生存者が居ないか探そう」

話し合いで決まった規定の年齢以下は、黒陣営から白陣営に引渡し義務がある。しかしその齢の人間が生きているか甚だ怪しい程に、炎は広がり燃え盛っていた。

「ん…？何か今、動いた気が」

その発言の途中で、その生き物にたっちは気が付いた。蹲り晒す背中が見知ったそれとはかけ離れた色だった為に認知できなかつただけで、それが、死にかけの生き物だと。

「っ、ユリー！」

名を呼ばれ駆け寄ったユリだが、彼女は躊躇した。黒の陣地内にいるその女性は、助けたところで結局のところその結末が決定された人間だ。しかし彼女は結局、この場合は残酷な行為ともとれる癒やしの魔法を行使した。

「いいから助けてくれ！」

偉大なる慈悲深き至高の存在の切羽詰まった声と、彼の視線の先、彼女が抱きしめる子供が、ユリの背中を押したのだ。

発動させたスクロールの光が背中が爛れた生き物を包み込み、苦し

そうだった呼吸は安らかなものへと変わる。女性はそのまま気絶してしまい、その腕の中に抱えられていた子供はたつちに抱き上げられた。

煤けているが、綺麗な衣服を着た子供だった。肉付きのいい頬は丸く、薔薇色に染まりながらも涙に汚れている。抱きしめられながら気を失っていたその子供が、愛されていたことなど語られなくても誰にでも分かる話だ。

重苦しい空気が漂うその場に似合わない明るい声が、上空から振ってくる。

「あれえ、たつちさんじゃないですか、奇遇ですね！」  
「…」

世界を黒く塗り潰した相手は、楽しそうに嗤いながら平然と声をかけてきた。街中で親しい友人にすれ違った時のような爽やかなその声が、ただの嫌がらせのために発せられたものだと、たつちは知っている。

「ええ、本当に、奇遇ですね」

ついつい眉間に皺を寄せてしまうたつちとは真逆に、にたにたと笑う心底愉快そうなその表情は、まるで幸せそうである。

「人間が、居たんですか」

じとりと、その目が、たつちの抱える人間を見た。しかしすぐにそれは逸らされそして、それは女を捉える。

「それじゃあ、そっちの規定年齢より過ぎてる女、こっちに寄越して下さい。殺しますから」

淡々と言った悪魔は、騎士を一瞥すると、堪えきれないといった風に嘲笑った。

そんな心底楽しそうな悪魔が本当に不愉快で、たつちは、全くもって憂鬱な気分だった。

晴れ渡る青空の下、潰された家屋しかないゴーストタウンに優しいそよ風が吹く。

地べたに転がる屋根の上で、ウルベルト・アレイン・オードルは酷くつまらなさそうにしていた。

彼を包む黒檀のマントは垂れ落ち、派手に装飾されたシルクハットがその顔に暗い影を落としている。

晴天、爽やかに広がる青空。囀る鳥たちと、薫る風。全てが悪魔を皮肉りからかうべく世界を奏でているように、彼には感じられた。

創造主が抱く憂鬱を察したその背後に控える悪魔が、そつと気遣いから声を掛ける。

「ウルベルト様…」

「あーあ、どーしよっか」

自身が創造した悪魔のデミウルゴスに返す言葉が投げやりなことは、ウルベルト自身も自覚している。しかしそれも仕方が無いだろうと開き直りたくなる程に、現在続いているゲーム内容はウルベルトにとって退屈極まりないものだ。

全くもって、憂鬱なる気分であった。

「はあー。……たつちさん、面倒くせえ」

銀の尻尾を垂らす悪魔は困り顔をして、沈黙で返答する。

きつとあの騎士は今頃ドヤ顔で嬉しそうにしているのだろうかと思いい、ウルベルトは更に不愉快になる。そしてまた彼は、なんとなしに足下に居る一匹の動物を眺めた。

その顔に純粋な生命体としての表情しか浮かべない、アインズ・ウール・ゴウン魔導国に迎えられるべき、一匹の生き物を。

現在、ゴーストタウンが散らばる森林地帯と連なる山脈の一部にか

けて、黒と白の両陣営で互いの足を引張り合いながらの地味な作業が続いていた。自身の陣営側に法国の者達を追い込み殺戮もしくは捕縛、人間を食料にするか人間に食料を与えるかの、仕分け作業が。

スレイン法国側としては、潜伏が容易いために廃村が散らばる森林地帯や山に潜伏しているだけだろう。しかしそこは偶然、黒と白のどちらにも属さない空白地帯になっていた。そのために黒も白も、まずは自分の陣地に追い込むというワンクッションを余儀なくされていた。

ゲームがとうとう最終局面に差し掛かった盛り上がるべき頃なのに、最後の最後に残されたのがつまらない作業。何とも地味な展開だ。

そんな現状に、ウルベルトは大変悩まされていた。発狂しそうな程に退屈極まりなさ過ぎて、嫌になっていた。正直言って付き合ってもらえないのだが、しかし、真面目に作業を熟す白陣営側の思うままに事が進むのも面白くない。そんな捻くれた理由で、ウルベルトは地味でつまらない作業を何とか熟してきた。

そうして何とか苛立ちを抑えてきたウルベルトがそろそろ我慢の限界に達しそうだった時、その拠点は見つかった。ウルベルトが望む盛大な花火の打ち上げが可能となる、一手が。

それは気落ちしていた彼を一気に機嫌よくしたが、しかし、つい先程に届いた報告はまた容易く彼を苛立たせた。思わず舌打ちをしてしまい、ナザリツクの者を怯えさせてしまった程に。

白陣営側に万単位の間人が流れたという報告は、それで某騎士がはしゃいでいるのかと思えばウルベルトにとって腹立たしくて仕方がないことである。しかし、そのこと以外に関しては心底どうでも良いことだった。後もう少し待てば、あの正義厨にとって不愉快極まりない展開になる予定なのだから、今更少し白陣営に取られても、気にはならなかった。

だからこそウルベルトは今、目前の新しい玩具で暇潰しを試みているのだ。

本来の役割上なら有り得ない位置にある屋根は、ウルベルトが破壊

し崩壊させた家屋の屋根である。土台を無くしたそれは本来なら触れるはずのない土の上で、悪魔に腰掛けられていた。

壊れたそれは、元から粗末な物であった。崩壊しかけの建物が崩壊している建物に変わっただけと言っても過言ではない程に。だからこそ綺麗な衣服を纏う彼が、これまた上等な敷き布を挟んでまでボロ屋根の上に腰掛ける姿は、あまりに奇妙な光景に見える。

見窄らしい屋根に、煌めく布地はあまりにそぐわない。とてつもなくチグハグで、無理に繋ぎ止めた様には見えぬ光景である。

そんな景色の中に、まるで、その留具のような存在が一つ。いや一体、いや一匹、はたまた一人いた。

数え方に悩むそれは、右足の膝から下が無く手の指が六本あることを除けば、一般的な人間の形をしている。地べたに這いつくばるその生き物の瞳は、ウルベルトの隣に置かれた綺麗な皿ではなく、それに盛られた骨付き肉だけをじっと凝視していた。ウルベルトがわざわざ用意させたそれは、鳥の骨付き肉で、油が光り焼き立ての香ばしく空腹を誘う匂いを漂わせている。

ウルベルトが骨付き肉を手に取り、振ってみると、それに合わせてその生き物の目が追いかけて動く。そして彼が肉を放り投げれば、当然それは落下してゆく肉を追いかけて、口でキャッチした。

その見事な芸に、ウルベルトの気持ちが少しばかり持ち上がる。愉快そうに彼は笑った。

「はは、上手、上手」

山羊頭の悪魔に褒められていることも、後ろに控える銀の尻尾を持つ悪魔から汚物を見るような目で見られていることも意に介さず、それは無心で肉を貪り始める。

「ウルベルト様…、それは、殺さないのですか？」

デミウルゴスが、餌を貪る動物を睨みつけながら尋ねる。

嫌悪感を剥き出しにして睨むそれは、つい先程、念の為に憂き晴らしの為に見つけた村の家屋を彼らが片っ端から潰していた時に小屋から這い出て来た存在だ。

「規定の年齢に達してるか分からないからなあ、コレじゃ」

またウルベルトが肉を放り投げると、嬉しそうに食らいつくそれは、確かにあまりに人らしく無く年齢推測が難しい。小柄で背が低いが、それは栄養不足が原因なのか年相応なのかも判別が厳しかった。また、支配の呪言を使って問い質しても、当の本人が自信の年齢を理解していなければそれは無意味な行為にしかならない。

「別にいいだろ。一匹ぐらい趣向を変えて遊んでも。それに、規定の年齢以下かもしれないのに殺したことが知られたら、鬼の首を取ったようにたつちの野郎から糾弾されるぞ」

「それは、確かに…、その通りですが…」

ほんの少し前まで、非常に悍ましく、そしてとてつもなく汚らしい姿で地べたを這っていた生き物をデミウルゴスは苦々しげに見る。

与えられる肉を食うそれは、ほんの少し前までは、まるで汚物が自我を持って集まり蠢いているような醜悪な生き物だった。吐き気を催す臭気と腐敗臭を帯びて、伸び放題の髪が虫の住処になっているような、死にかけの汚物と言い捨てても問題ないような無価値の動物だったのだ。

当然デミウルゴスは即座に殺すべきだと判断した。至高の存在の御前に、出るべき存在ではないと。しかしその殺害を止めたのが、当のウルベルトであった。

更にはウルベルトの命令によってアンデッド達の手で野良犬のように洗われ、さらには魔法も使用しての完璧な清掃がそれには施された。膿んでいた傷口も魔法で治され、その身体が身につけている服らしき物も魔法で綺麗になった檻褌布へと変わった。

今は食事を与えられているその生き物は、今ではすっかり無臭になっていて、見た目だつて初めに比べれば雲泥の差である。だが、ボサボサで伸び放題の髪はそのまま、荒縄で檻褌布を胴体に巻き付けることでなんとか服の体を成しているその姿は、ガリガリの身体もあつて得体の知れない未知の生き物のようだ。

「……………ウルベルト様が、望まれるままに」

独り言の様な呟きは、完全に悪魔が悪魔自身に言い聞かせる言葉であつた。

言葉を濁し面白くないと表情だけで訴える息子にちらと視線をやり、ウルベルトは苦笑する。目前の家畜をちよつと可愛がっただけで嫉妬する様は、可愛くもあり、鬱陶しくもあった。

「うー、あつ、にくうー、くらっ」

必死に手を伸ばしギラギラと目を輝かせて強請る様は無様で、見ていて恥ずかしくなる程だ。しかしウルベルトは心底楽しそうに笑うばかりである。

「はは、素直だなあ。お前も見倣えよ、デミウルゴス。これぐらい素直に、我が俣を言っても良いんだぞ?」

「なっ…!?」

明らかに自分より遥かな下位にいる存在を見習えと創造主に言われてしまったデミウルゴスは、驚愕と絶望に顔色を染める。

「ほら」

ウルベルトは再度、皿から肉を取り出し、放り投げた。

「っーあうー」

嬉しそうに飛びつくその生き物は、四足動物のように動いていた。本来ならば二足歩行を行うはずの動物だが、そんなことなどしたことが無いそれは、器用に四足で歩く。平均体重よりはるかに下まわるであろうガリガリの身体と、どんな目にあつてきたか語るようなギラギラした瞳が相まって、人間よりも獣寄りに更に思わせる姿だった。

犬食いをする姿、舌つ足らずな言葉を並べるだけで上手く喋れず、知恵も無さそうな有り様。

戦火に追われ逃げ出した村人が、何故これを飼っていたかは分からない。だが、何故ぼろ小屋の藁の中にこれを捨てて置いて行ったのかは、語られなくても誰にでも分かる話だ。非常時に逃げる時には、荷物はなるべく減らすべきなのだから。

また一つ、ウルベルトは肉を放り投げた。そして、気落ちした息子に呆れつつ、声を掛ける。なるべく優しい声音になるよう、気をつけながら。

「あー…、言っておくがな、デミウルゴス、お前のことはちゃんと愛してるからな?」

ウルベルトが送ったフオローの言葉に、露骨にしよんぼりしていたデミウルゴスの尻尾が持ち上がる。

「ま、真に、で御座いますか?!」

「当たり前だろ。つーか、なんでお前達の思考はそう極端なんだ。ゼロカイチ、どころか、—100か+100ぐらいの差があるよな…」  
呆れたような口調に、デミウルゴスの尻尾がまた垂れ下がる。偉大なる造物主から見捨てられることや呆れられることは、生み出された者達にとっては耐え難い苦しみだ。

デミウルゴスの分不相応な我が侬を許し、聞き届けてくれたこと。そして、自分のことを贅沢にも息子の様に可愛がつてくれていること。それらの事実から、抱く感情が不敬ともとれる杞憂だとはデミウルゴスも充分に解っている。それでも、恐ろしい可能性を、頭が考えるのを止めてくれないのだ。

「この家畜に興味を持ったからって、お前達への好意が急に無くなる訳がないだろ?」

「……申し訳、ありません」

悩んだ末にデミウルゴスが苦し気に絞り出した答えに対し、ウルベルトは肩をすくめるだけだ。

ウルベルトの興味は彼が指を指した先で、最後の肉をほうばり終えた生き物へと移る。それは這い蹲って、ウルベルトに近付こうとしていた。

「あー、うつ、う」

しかし少しずつ近付こうとしたそれに対して、ウルベルトは待ったをかける。ステツキの先で、伸ばされた左手をぺちりと叩いたのだ。それにびくりと過剰に反応した生き物は、その場で大人しくなり蹲る。

「そうそう、ペットは主人の足元で大人しくしておくものだ」

その騾の言葉に、びくりと今度はデミウルゴスが反応した。

「…………ウルベルト様、また人間を飼われるおつもりですか」

「ん?うーん、どうしたもんかな。前のはそこそこ使い道もあったし、愉快的人間だったけど、これは何も能が無さそうだしな。しかし…、



ペットってのは役に立つ役に立たないで飼うものでもないしなあ」

ウルベルトの返事に、デミウルゴスの尻尾は項垂れたり弾んだり忙しい。ちらりと、悪魔は蹲る生き物を視界に僅かに入れる。至高の存在にかまわれている塵屑の存在が、非常に不愉快で仕方なかった。

天が落ちるのではないかという不安の前に、愚かと自認しつつも彼は感情を押し殺すことができず、とうとう、恐る恐ると、素直に吐露し始めてしまう。

「恐れながらウルベルト様…、私は、嫉妬してしまうのです。貴方様の興味がナザリツク以外に向かう度、捨てられてしまうのではと、不安になってしまうのです、どうしても…。貴方様が、私の絶対であるが故に」

自身の胸中にある不安を取り出し、形を確かめながら、デミウルゴスは告げる。

「貴方様が、モモンガ様が、別の何かに興味を抱く度、どうしても、私共は、私は、もう不要だと、思われるのではないかと」

本当に言ってしまった、という焦りを抱きつつ、悪魔は告白を止められなかった。

「貴方様方に、これ程愛され想われた、分不相応な幸せを与えられながら、卑しくもこの欲望には底が無いのです…！」

その決死の告白に、ああと感嘆の声をウルベルトは漏らす。

「デミウルゴス、やっぱ俺は、お前が、ナザリツクの皆が大好きだよ」  
ぱちくりと、喜びと驚きにデミウルゴスは目を瞬かせる。微かに濡れた悪魔の眼窩に嵌められたダイヤモンドが、太陽光を受けて一瞬きらりと光った。

ウルベルトがまた、蹲る生き物を指し示し、そして無感情に述べた。  
「あれが、人間の本质だ」

嫌そうにするわけでも、好ましそうにするわけでもなく、ただ現実を受け入れ読み上げるように、淡々と。

「それなのに、さも清廉潔白の様に振る舞って偽って、大嘘の大義名分を掲げて、汚いものには蓋をして先送りにして…。そうして繰り返し返した果ての果て、それでも綺麗な上っ面だけで汚い現実の全て覆い隠そ

うとするような、醜悪な世界」

天空を見上げ、吸い込まれそうな高く澄んだ青空をウルベルトは見上げる。当たり前のように澄み渡り、生物を育む空気を流し、鳥が飛ぶ大空を。

「星すらも巻き込んだ傲慢が蔓延る世界」

その言葉には、呆れにも怒りにも諦念にも似た感情が滲む。そしてどこか、酷く疲れ果てたような声にも感じられた。

「俺はな、そういう最果ての、終わりから来たんだ」

デミウルゴスはただ、その告白を聞いていた。彼が吐露する、憎くて難くて悪たらしい、醜いどこかの世界の話を。

「だから、俺がこういう人間をかまいたくなるのは、当然のことなんだよ」

口角を上げるウルベルトは、どの悪魔よりも最も悪魔らしい魂と表情をしていた。全てを嘲嗤い、全てを見限るような無感動な瞳。身勝手な横暴で傲慢な、暗い失望。それらがそっと、その顔には現れている。

表情も感情も読めない様な悪魔のそれに、なぜか、確かに。

「だから、お前達が何よりも愛しいんだ。愛しい存在以外は心底どうでもいい、素直なお前達が。ああ、可愛くて堪らないよ」

美しく美しくて心底賛美したいのに、何よりも醜悪にも思え顔を逸らしたくなるような、そんな微笑みをウルベルトは浮かべる。

そんな彼に愛されている事実は、デミウルゴスにとって何よりも誇らしく思えた。そして、その深き愛をまた、彼は確信できたのだ。

腹がいっぱいになったから、寝る。正に動物的単純なる思考のまま、ぐーすか寝る動物をウルベルトはぼんやり見ていた。

そして、指示されなければいつまでも棒立ち状態であっただろう、命令されやつと横に腰掛けたデミウルゴスに顔を向け、問いかける。「なあ、遅くないか？子供服の買い物なんて、そんなに時間がかかるものなのか？」

それは話題作りにも近い問いかけで、少し気になったので口に出し

た、ウルベルトにとってその程度のものである。しかしそんな問いに  
対し、想定外の返事が行われる。

「ウルベルト様の御眼鏡に適うものを人間の街で探しております故、  
なかなか見当たらないのでしよう」

「…えっ」

さらりと返ってきたその返答に、驚き、そして失敗したとウルベル  
トは内心焦る。

少し前に、『審判側に許可を貰ってから、〈転移門〉を使って人間の  
街で子供服を買ってきてほしい。適当に見繕ってくれ』と、ウルベル  
トはデミウルゴス配下のドツペルゲンガーに確かに指示を出してい  
る。

しかしその命令は、本当の本当にテキトーなものだったのだ。

襪褌布フアッションをこれ以上見続けるのも嫌だが、ナザリツクに  
ある衣服をわざわざ与える程に温情をかける程でもない。ならば人  
間の街で子供服を買えば良い。ただそれだけの思考で出されたもの  
である。

そもそも、適当な服と曖昧な指示を出したのは、某鳥人間みたいに  
変態趣味があるわけではなく子供服に関する知識が無いから任せただ  
けなのだ。子供服に関するまともな知識のありそうな人物に心当た  
りはあるが、ソイツに頼ることだけはウルベルトにとって死んでもご  
免であった。

「何か問題がありましたでしょうか？」

「あー…、いや、大したことじゃないんだがな、」

本当の本当に、適当な街に入って適当な店に入って適当に子供服を  
買って帰ってくれれば、ウルベルトにとってそれだけで良かったの  
だ。しかし冷静に考えれば、自分が出した指示をナザリツクの者達が  
軽いノリで承って遂行する訳がないのである。

具体的な指示を出さないのはダメ上司！、モモンガから借りた本に  
記載されていた一文が頭に流れ、ウルベルトは反省する。上司として  
も、彼らに敬愛される至高の存在としても、赤点の対応であった。

「…デミウルゴス。ドツペルゲンガーに伝達」

首を傾げつつ、デミウルゴスは頷く。

「そうだな…、ワンピースとかならサイズが多少違ってもたぶん大丈夫だろうし、服は無地で、光ってるとか派手な柄がすごい入ってるとか、悪目立ちしないものなら、別に高価な良い品じゃなくて良いって伝えてくれ。これが着れるなら、何でも良いからって」

「畏まりました」

恭しく頭を下げたデミウルゴスは、立ち上がり、少し離れた場所へ移動する。そうして買い物を任されたドツペルゲンガーにさっそく〈伝言〉を送り、対話を始めた。

別に隣で話し込み始めても気にしないのだが、あの自身が創った悪魔の堅苦しい対応に関してはそういうものだと言ってしまうのかと、少し投げやり気味な思考がウルベルトの頭に浮かぶ。

「いやいや、ダメだな。なんだか思考が怠けているな。しっかりしないと…」

自身を叱咤して、ウルベルトはアイテムボックスから取り出した地図を広げる。

その地図には、白側の陣地と黒側の陣地、それからそれらを繋いで出来上がったどちらの領土扱いとなっているかが沢山書き込まれている。

その中から残り少ない未探索の部分の確認を始めるも、最早拠点にできそうな何かしら有りそうな土地は残り少ない。互いの陣地も複雑に絡み合って、自由にできる土地も白のいやらしい陣地設置によって削られまくっている。

どこもかしこも、後は虱潰しか地味な作業を続けていくだけかと、なりつつあった。

それでも、ゲームはまだ終了していないのだ。だから今は、殺戮とゲーム勝利に向けて尽力すべき時であるとウルベルトも分かっている。解ってはいるのだが、それでも、つまらなくて仕方がなかった。

「あー…、やる気でねえー」

黒と白の両陣営で行われている互いの足を引張り合いながらの地道な作業。偵察を放っては潜む者達を見つけ、適当なモンスターに襲

わけて自身の陣地に追い込むという、なんとも地味で面倒な作業。

こんな作業に熱意を燃やせるあの虫野郎はどうかしている、また勝手な罵倒をウルベルトは心の中で吐き捨てる。

『ウルベルト様、突然申し訳ありません。シャルティアであります。デミウルゴスに繋がらなかったので、直接へ伝言を飛ばさせて頂किनした』

『どうした、シャルティア』

ちらりと先程離れていったデミウルゴスを見ると、確かに話し中であつた。随分と長く話し込んでいるなと思いつつ、シャルティアの要件をウルベルトは確かめる。

『実は、ナザリックの倉庫が一杯になってきたと報告が上がりました。アインズ様からは、どうしても言うなら倉庫を増設しても構わないと許可を頂いているであります。如何致しんしょうかえ?』

その報告に、ウルベルトはぱちくりと目を瞬かせ、驚いた表情を浮かべる。

「そつか。けつこう殺していたと思つたけど、送つたやつもそれなりに居たか」

『はい、実験用に確保する必要があつた武技の使い手、魔法使い、タレント持ちも、必要数は確保できんした。食用と玩具の分も含め、倉庫がいっぱいと聞いているであります』

少し考え込んで、ウルベルトは首を横に振つた。犯罪者も徐々に減りつつある現状で、倉庫増設許可は魅力的だが、あまり我が儘ばかり言うのは良くないだろう。残された人間らしさのようなものが、良い上司であろうと戒める声に耳を傾け、ウルベルトは決断する。

『いや、増設は止めよう。コキュートスの階層をこれ以上圧迫するのは申し訳ないからな』

倉庫一杯の状態ならば、当面ナザリックで人肉を食する子供たちの分には問題ない。家畜として飼っている分も含めれば充分過ぎる程だろうから、趣味に関しては少し楽しむ程度に落ち着ければいい。

「遊びすぎるとモモンガさんに怒られるしなあ」

『モモンガ様にでありんすか?』

「そうそう、慢心は、墮落と崩壊への一歩だからな」

別に誰そのの名言とかでなく、口から出てきただけの言葉にも、さすがは至高の御方と称賛の声が返ってくる。それに対して複雑な心境になりながら、ウルベルトは残る人間全員の殺戮命令を出した。

『了解でありんす。それでは、残りは全て殺し尽くすでありんすえ』

愉しそうな声音につられて、ウルベルトも楽しそうに返事する。穏やかな調子の声が、全て殺しつくそうと謳う様は、何かの手違いかのように長閑な空気が漂っている。

「ああ、そうしてくれ。そっちは順調そうだし、楽しそう良かったよ、シャルティア」

『はい、ウルベルト様。間も無く西南一帯の確認が終了しそうですでありんすえ』

「西南か。ああそういえば、そっちは白陣営の邪魔も無くて良さそうだな。羨ましいよ」

地図を広げ、陣地を確認したウルベルトは心の底から羨ましく思い、ついうっかり本音を零してしまう。黒陣営ばかりのそこは鬱陶しい邪魔もなく、爽快であろうと。

『ウルベルト様が居られる所は、確か、面倒になってしまっているとデミウルゴスが言っていた場所でありんすか…？』

「ああ、面倒くさい所だ。初めは少しは楽しめていたんだがな…、もう飽きたし、誤魔化すのも限界だよ。つまらなくて仕方ない」

『うう…、私ばかり楽しんでいるのが申し訳ないでありんすえ…』

自分ばかりが楽しんでいることに気がついたシャルティアは、気落ちした声を出す。しかしそれをウルベルトは笑い飛ばした。

「気にするな、シャルティア。後少しで、一気に殲滅だ」

それはそれは嬉しそうに、牙をむき出しにしたウルベルトの声は弾んでいて、それを感じ取ったシャルティアもはしゃいだ声を出した。

『ああ、ウルベルト様と遊べるデミウルゴスが羨ましいであります！』  
「そっちが早く終わったら、こっちに来ると良い。それじゃあ、」

自身の会話を終えウルベルトの傍で跪いて終わりを待つ悪魔に視線をやって、ウルベルトはシャルティアに別れを告げた。

「シャルティア、楽しんで」

『ウルベルト様も、そちらが愉快なことになるよう、お祈りしているではありません』

可愛らしい少女の声で行われた残酷なる祈りに耳を傾けながら、ウルベルトは視線を動かす。その金色の山羊の眼の先にいた深々と頭を垂れるその悪魔の様子に、ウルベルトは、準備が整ったのだと察する。

「話し終えたのか」

「はい、服を買いに行つた者と、それから忍び込んでいる者とも話し終えました。間も無く開始される手筈になっております」

「そうか。そうか…、ははっ、ハハハ」

ひとしきり嗤い終えて、ウルベルトは至極嬉しそうな感極まる震え声で事実を噛みしめる。もう間もなく、この辺り一帯を燃やし尽くすことができるのだと。

「やっと終わりか」

何かを察したのか、それとも偶然か、悪魔のペットが目覚めます。その真に無垢な瞳は、邪悪の笑みを見詰めても、首を傾げるだけであつた。

美しく、爽快に、晴れ渡り広がる青空。雲ひとつ無いそこに、ゲヘナの炎で区切られた一帯に放たれる予定の、超位魔法の魔法陣が広がる。

「デミウルゴスのおかげで愉快的な光景が見られそうだな」

「お褒め頂き光栄の極みでございます！」

にたつと悪魔たちは、その背景に見合わぬ碌でもない笑顔で心底愉快そうに笑い合う。これから全てを破壊し尽くすことが、楽しみで楽しみで堪らないといった風に。

その笑い声に対して悪魔に抱えられた子供は、きよとりとした後に、しかしつられて首を傾げながらも表情を真似て笑顔になる。片方はそんな子供の無邪気さに歪んだ笑みをつくり、もう片方は露骨に眉間に皺を寄せた。

つい先程まで、悪魔と悪魔のペットがいたゴーストタウンは、黒陣営側に広大な黒の陣地を齎してくれる拠点であった。偶然良い位置に密やかに在ったそれが黒の拠点となり、空白地帯だった場所を黒く塗り潰したのだ。

しかし、追加陣地表明をウルベルトは即座に行わなかった。偶然発見した彼は、村人から捨てられたそこに黒の陣営拠点となった証明の旗を打ち立てて隠蔽だけを行ったのだ。

拠点の追加、陣地の変更表明を行わなければ、審判側も白の陣営側も把握していない拠点なのだから当然無効である。黒の新しい陣地が認知されていないのだから当たり前のことだが、どちらの陣営にも所属しない空白地帯扱いのままであることにも変更は行われない。

空白地帯での地味な作業に嫌気がさしていたウルベルトが、新たに見つかった拠点を即座に申告しなかったことには理由があった。

申告してしまえば、確かに黒の陣地は一気に増える。しかし、今まで行ってきた通りにきつと、直ぐ様に白陣営側が嫌がらせをしてくるに違いなかったのだ。

フレンドリーファイアが解禁された今、このゲームでは同士討ちは禁止事項とされている。モモンガが主催なので当たり前だが、事故や精神攻撃は仕方ないとして、意図してのナザリックの者に対する攻撃は絶対の禁止事項なのだ。

そのため広範囲殲滅型の魔法を打ち込むには、その攻撃範囲内に入りそうなナザリックの者達を一時撤退させる必要があった。そして、その殲滅を希望するウルベルト側にとって障害だったのは、斑に入り混じった陣地や拠点にいる白陣営側のナザリックの者達だった。

しかし、一時撤退を頼んでも、リーダーの指示で白陣営側のナザリックの者達が遅々として動かないのだ。実際に今までも白陣営側がわざと黒陣営側に食い込む形で陣地を拡げたり、わざわざ通らなくて良い時に陣地内をゆっくり通過したりと妨害してきている。そのせいで黒陣営側は広範囲魔法が撃ち込めなかったり、最悪の時は逃げられたりもしている。

勿論抗議はしたが、相手拠点内の人間には手を出していないという



ことで、不問に付され終わってしまった。

そのために、ウルベルトは見つけた拠点を隠していたのだ。何の対策もせず今の黒陣営の陣地拡大を伝えただけでは、またもや広範囲魔法の妨害をされかねなかった為に。まず間違いないく邪魔が入ってくるのだが、簡単に予想ができた為に。

当然、『今からこの辺り一帯を殲滅するので白陣営は少し退いて離れていてください』と馬鹿正直に頼む訳にはいかない。それならば、自らの意思で退いてもらうしかないのだ。

「さてと念の為だが、見張りの悪魔達から報告は何もないな、デミウルゴス」

「はい、何も問題は御座いません。どうぞ御楽しみくださいませ、ウルベルト様」

最後の確認を済ませ、ウルベルトとデミウルゴスは互いに頷きあった。主人の望む結果をお渡しできたことに喜ぶ悪魔はしかし、その崇拝する君の腕の中の存在に露骨に嫌悪感を向ける。

「そんなに睨むなよ」

「…下に置いてくればよろしかったのに」

「死んじやうだろ」

発動するために展開され動き続ける超位魔法の陣を、それは目を輝かせながら追っていた。

「思ったより大人しくしてるじゃないか」

抱き上げていた人間を、脇の下から両手で支える形でぐいとウルベルトは持ち上げてみる。ウルベルトが気まぐれで手を離せば落下して死ぬのに、それはきよとんとするだけである。

「…いや、何も分かかっていないだけか」

「あ、う？」

「無能ですね」

吐き捨てるようなデミウルゴスの言葉にウルベルトがクツクツと笑った時、より一層、魔法陣が輝き、超常の力が終焉の来訪をその輝きでもって訴えた。

「大人しくしているんだぞ」

片手で抱き上げ、自身にもたれかかるよう促して、ペットの位置をウルベルトは調整する。

そして、アイテムボックスからステッキを取り出すと、振るい、そして、開放の時を待つ超位魔法を唱えた。

それに応え、黒の陣地内に、それは落下していく。まるで黒い雫の小雨、小さく無数の水滴。それが、高く高く伸びた木の先端に触れた瞬間、その木は黒い炎の薪となり燃えあがった。

見つけたばかりの廃村と元々あった自陣営と結んで生まれた多角形の黒の陣地へと向けて落下していくそれは、ウルベルトの下にあつた林を焼き尽くしていく。燃え広がる炎の中で何かが蠢くが、それが四足歩行の動物だろうが二足歩行の動物だろうが、ウルベルトにはどうでも良かった。

「き、あ、」

これまためいっばい目を見開いて地上の炎に感動する無邪気な動物に、凄いだらうとウルベルトは話しかける。そしてニヤリと笑い、これだけじゃないんだぜと自慢げに地上を指し示す。

「ほら、生まれるぞ」

ウルベルトが指し示す地上にて渦巻く黒炎から、ぐるりぐるりと狂ったように渦巻きながら突如現れたのは、真っ黒な蜥蜴である。

それは、その巨体と、その体が触れた場所が発火していくことと、その口から炎を吐き出すこと以外は普通の見た目の蜥蜴だった。

「殺し尽くせ」

召喚主のウルベルトの指示に従い、地上の全てを蜥蜴は燃やし尽くしていく。生きとし生けるもの全てを灰にするべく、炎を吐き出し、踏み潰し、燃やし、溶かし、破壊していく。

燃え移っていく炎も、蜥蜴が吐き出す炎も、白陣営にはみ出ているが、そこにナザリックの者達が誰もいないことは確認済みだ。そのうえ、釘を刺すため白陣営に影の悪魔を送っている。死ぬかもしれないと解っていて、妨害のためだけにナザリックの者を送れば、立場が悪くなるのは確実にあちら側である。

「ああ、やつとスッキリしたな、デミウルゴス。これでこの一帯の掃除

が終わりだ」

「左様でございますね」

炎に呑み込まれた世界の全てが真っ黒な何かになり、大地が、岩が、熱で変形していく。その地獄の上空で、悪魔が歪んだ笑顔で見守る。

「おっと、白陣営側や空白地帯にも炎が燃え移ってしまっただか」

「それはそれは、不幸な事故で御座いますねえ。隠れている者達が生き延びると良いのですが」

燃えたぎる世界で生き残る者など、居るわけがないと知りながら、白々しい会話がのんびり行われる。

見た目と合っていない綺麗で高価そうな服を着た人間は、無垢な瞳のまま見詰めていた。

「く、お」

「お前を飼ってた奴らも、死んだかもしれないなあ」

「し、だ？」

きよとんとするそれにクスクスウルベルトが微笑う。そして彼は、黒い炎が焼き尽くし黒く染め上がっていく大地にて、見晴らしの良くなったそこに、染みのように目立つ白銀を認める。ウルベルトはますます愉快そうに、にたあと顔を歪めた。

「行くぞ。デミウルゴス」

白銀の騎士へと、とても爽やかに、朗らかに、上空から降りながらウルベルトは話し掛ける。

「あれえ、たちちさんじゃないですか、奇遇ですね！」

「…」

世界を黒く塗り潰すのを尽く邪魔してきた相手は、沈黙で返すだけで非常に不愉快そうな様子だ。だからこそ、街中で親しい友人にすれ違った時のように、親しみを込めてウルベルトは声をかけたのだ。その声音が、ただでさえ不愉快そうな騎士を、ますます不愉快にさせるものだど知りながら。

「ええ、本当に、奇遇ですね」

にたにたと笑う心底愉快そうなウルベルトとは真逆に、兜の下でどんな面を彼が晒しているのか簡単に想像できて、ますます悪魔は笑み

を深くした。

「人間が、居たんですか」

たっちの抱える人間を視界に入れるも、それは白陣営側のモノとすぐに分かりウルベルトは視線を逸らす。そして、女を視界にとらえた。じとりとその目は、殺すべき対象を見た。

「それじゃあ、そっちの規定年齢より過ぎてる女、こっちに寄越して下さい。殺しますから」

それはウルベルトからしてみれば、嫌がらせでも何でもなかった。元々全て殺すつもりだったのだから、それを殺すことに、生命を一つ終わらせることに、意味も目的もなく、ただの作業であった。

だから悪魔は、騎士を一瞥して堪えきれずに笑ってしまったのだ。ただ一人殺すと言っただけなのに、酷く重苦しい様子になった騎士に對して。

そんな至極不愉快そうな騎士が余りに愉快で、ウルベルトは、全くもって爽快な気分であった。

## 言わぬが花

それは、パンドラズ・アクターの気紛れから始まった出来事。ゲーム開催中に起きた誰も知らぬ一幕の話。

何となく、断る理由もなく、してはいけない理由も無いために。そして彼の興が乗ったから。それだけで起きた物事だ。狭間の物語ですら無い。言わば、舞台裏の休憩時間である。

己を創造した父を何よりも愛する彼の、その愛と信仰心の結果、動物が二人死んだ。

これは唯それだけの、日常のおはなし。

現在、絶賛開催中のゲームにおいて、パンドラズ・アクターは進行側である。より正確に言うとなら黒と白の陣営、どちらの味方でもありどちらの敵でもない、協力者だ。

彼はどちらの味方もせずに、アイテム管理の担当者として望まれるままに働くだけである。

例えば、黒陣営側がノコギリが欲しいと言えば用意し、白陣営側が包帯が欲しいと言えば用意する。片方が水が欲しいなら水供給アイテムを渡し、もう片方も同じく欲しいと言うなら必要数を確認して同じく渡した。東西南北どこへだって、呼ばれば駆けつけ、望まれば渡した。あるかないか尋ねられれば答え、無ければ代わりの物を渡した。

そして現在、ナザリツク地下大墳墓にあった物だけではなく、スレイン法国国土全般にあった物も、続々とパンドラズ・アクターの管理下に入ってきている。

利用できる物とできない物、破壊すべき物と分配すべき物と、いくつかに種別された物品は、彼の手によってナザリツクの者達へと流通

していく。

ただし、あくまで物だけが彼の管轄内だ。人命は、彼の管轄外である。だから、彼は未だゲーム内で人殺しはしていないし、今後も行われないことになっている。

その事実は永劫に、変動しない。

その日のパンドラズ・アクターの気紛れは、黒陣営中心拠点、骸骨で構成された砦にあるテントの内の一つから始まった。

釘と開口器、それから針を大量に運び込む仕事を終えたパンドラズ・アクターは、転移の前にふと、漂う甘い香りが気になって足を止めた。失礼ながらも場違いに思える花の香りに、彼は目に見えぬそれの発生源を嗅いで探す。

鼻が無いのに分かるのかと、嘗て愛しい父に問われた疑問をなんとなしに思い出しながら彼は場所を嗅ぎ当てると、空洞のような目と思われる部位でそちらを見遣る。

それは、ピンクとライトブルーの可愛いらしい色合いの縞模様のテントであった。その出入り口の垂れ幕は微かに開いており、そして何か小さな物が幾つか落ちていているのが遠目からでも視認できた。

「これは…、花びらですね」

気になって近寄り、出入り口に落ちていた数枚のうち一枚をパンドラズ・アクターは拾い上げる。人と比べ細長すぎる指の先で、甘い香りを纏う花卉が弄ばれた。

「…お邪魔致します」

好奇心に負けたパンドラズ・アクターは、一言述べてそのテント内に入ってしまった。

黒い垂れ幕がいくつか退いた向こう側へ進む程、甘やかな匂いは濃くなっていく。最後の一枚の向こう側、テントの中では、さらに濃厚な一際甘ったるい香りが彼を迎え入れ包み込んだ。

「おお、これは…」

真っ白で滑らかな花卉を持つ花々が、テントそのものがまるでそれの花束の如く、そこには溢れ返っていた。息苦しいとすら思える程の

濃厚な甘い香りは、最早質量をもつて襲ってくるかの如くと錯覚させる程だ。

「おや、どなた様かと思えばパンドラズ・アクター様！如何されたのでしょうか？」

プルチネツラから声を掛けられ、ひとまず勝手に入った無礼をパンドラズ・アクターは大袈裟なアクションとともに侘びた。そして甘い香りがして、花びらまで落ちていたから気になってと言葉を続ける。

「ああ、この飾り付けわウルベルト様の指示でさせて頂きました。おそらくわ気遣われてのことでしょう！人間は、ましてや幼き者わ脆弱ですから」

「ウルベルト様が…。ああ、失礼。どうぞ仕事を続けてください、プルチネツラ殿」

「お気遣い頂き感謝致します。それでわお言葉に甘えて、仕事を続けさせて頂きます」

丁寧なやり取りを挟み礼を述べてから、プルチネツラは手を止めていた仕事を再開した。テントの中央に設置された巨大な檻の中にいる彼の仕事は、そこにいる人間達への食事の配膳である。黙々とプルチネツラは、人数分の食事を次々と机上に置いて並べていく。

檻の中には簡素な長椅子と長机があり、そこに腰掛ける人間達は皆、祈りの真つ最中かのように項垂れている。そんな者達の前に置かれたのは、肉も野菜もたつぷり入ったシチューに、ふわふわの白パン。彼らは震えながらも、しかし黙々と、与えられた者から順に食事を始めていた。

その全員が、保護しなければいけないゲームルールの規程年齢以下の人間であることを、その待遇の良さからパンドラズ・アクターは察する。

「…少し、近くで観察をしたいのですが、宜しいでしょうか？勿論手は出しません。ゲームの進行側、協力者として、ルールは遵守します」  
「構いませんとも、パンドラズ・アクター様。しかし、そこまで面白い見世物はありませんよ」

首を傾げつつプルチネツラは、まだ配膳の済んでいない一列へとワ

ゴングと移動する。

「少しばかり、見るだけです」

白い花に包まれた檻への道を、パンドラズ・アクターは進む。

濃厚な甘い香りを切り裂きながら近寄ってくる彼を、檻の中の一人がやつと視界に入れ、その顔を凝視した。驚愕と恐怖に彩られた顔をしたその人間に周りもつられて、俯くのを止めてしまい、それを見てしまう。

人のようで、人でない顔を。

檻の中に入ってきた新たな人外に、人間はその身を震わせ視線を逸らす。それに対してパンドラズ・アクターは、顎に手をあて何やら考える仕草をした。そして、おもむろに一人の側に歩み寄る。

「っ…!!あ、あ…!!」

保護されている一匹の頭を掴み、自分の顔を見るようにその細長い指で固定しながらパンドラズ・アクターは呟く。

「不思議ですねえ…」

「何がでしょうか？」

プルチネツラはのんびりと聞き返す。怯える人間の声など気にも留めないどころか、聞こえていないかの様だ。実際には聞こえているのだが、仕事中の彼にとつてそれはリアクションすべき対象ではなかった。牢屋内の者達を白陣営側が引き取りにくるまで問題なく生かすことが、彼の仕事だ。つまり、生きているならそれだけで良いのだ。どれ程に恐怖しようと、生死には無関係なのだから。

「私には牙も無い。角もない。どちらかといえば人間に近い顔をしている。それなのに人間は恐怖する。アッシュユールバニパルにあった本によると、人間は、人間のように人間ではない何かに気持ち悪さを感じるらしいのです」

どちらかといえば人間に近いという発言に、近くないと言える者はいない。プルチネツラは新たな知識を得たことに感謝するだけで、人々は当然怯えるばかりである。

「…さてとー私もそろそろ仕事に戻らなければいけませんね」

戯れにトラウマを植え付けた相手を、彼は簡単に手離す。それが今



後どう生きようが、アインズ・ウール・ゴウン魔導国に、尊き父君に逆らいさえしなければ、それだけで良かった。それ以外に彼が心を割く余地など、在りはしない。

「パンドラズ・アクター様、お土産に一輪いかがですか」

「ええ、貰いましょうか」

「よくお似合いでー」

咲き誇る無数の同じ花の中から特に意味もなく選ばれた一輪。それをその細長い指先で手折り、左の胸ポケットへと彼は差し込んだ。黄色の軍服を背景に、優雅に咲き誇る白い花をパンドラズ・アクターはそつと撫でる。

「私も、これは気に入りました」

麗しき花と、やつれた人間を見遣り、とある悪魔の胸の内に彼は思い馳せた。割れない果実を実らせる花の名前、それをかの父の友たる彼が知らぬ訳がないと、パンドラズ・アクターは確信していた。なにせ、なかなかには彼は好ましい程に悪趣味なのだから。

全て知っていて、解っていて、飾り付けさせたのだろう。そう思うと、パンドラズ・アクターは自分でも驚くほどに愉快的心地に浸れた。「貴方達は、幸せ者ですよー」

そう朗らかに言い残して、仕事中の仲間に軽く会釈をした後、彼はその場を足取り軽くも去っていった。

甘い花の香りを、その軍服に纏わせながら。

そうして移動先で仕事を終わらせつつあったパンドラズ・アクターは、気付いてしまうと無視できないような事態に直面してしまっていた。

そこは、占拠済みだがアンデッドの見張りが置かれているだけの拠点。陣取りゲームのために陣地として占拠されたが、使い道がないため放置されている場所だ。

しかしそれでも、物はある。そのためにパンドラズ・アクターはそこに赴いて、働いていた。

領主の、周りの民家と比べれば豪邸と言えなくもない家屋内を、彼

は護衛兼手伝いの悪魔とアンデッド達とともに漁っていた。ナザリックの者達にとって目ぼしい物は見当たらないが、白陣営側に協力している冒険者達への報酬にはなる金品を、彼らは黙々と回収していたのだ。

一通りの検分を終わらせ、残りの細かな確認は手伝いに任せ外に出たパンドラズ・アクターは、そして気が付く。気付いてしまうと無視できない、魔導国の御旗が傾いているという些細な事態に。

偉大なる父が支配するそれが傾いていることに、彼は不愉快になる。いや、所詮はたかが旗なのはパンドラズ・アクターにだって分かっている。だがそれでも嫌だったのだ。不快で、どうしても見過ごす気分になれなかったのだ。

「……また、御借りしますよ」

そう言っつてパンドラズ・アクターは、以前にも借りたことのある背中に翼が生えた至高の御方の姿を借りる。ばさりと羽ばたくと、領主の家屋の上に彼は降り立った。

そして元の姿に戻ったパンドラズ・アクターは、領主の館の上に設置されていた旗を真っ直ぐにする。そしてついにと、他の若干傾いていた旗も直し、緩んだ支えを締め直した。うまくバランスを取りながら移動して、器用に仕事を進めていく彼の様子はまるで曲芸師のようだ。そうして働いて、満足ゆく仕上がりになったところで、もう一つの仕事へと彼は渋々と向き直る。

「……まあ、無視する訳にはいきませんよね。後から何かあって責任を追求されても嫌ですし」

アイテムボックスから先程家屋内で回収したばかりの宝石、ナザリックの者達にとつてはただの石ころを取り出す。そして、100レベルの肉体能力を全力で駆使して、彼はそれを投げた。

ひゅんと、音をたてたそれは木々の向こう側で何かにめり込んだ音をたてて止まる。

「隠れても無駄ですよ」

ひよいと屋根から飛び降り、パンドラズ・アクターは華麗に着地する。まるで階段を一段飛ばしただけかのような軽やかな着地は、その

軍服も胸にある花も乱さない。

そして、藪の向こう側から飛び出てきた男を、つまらなそうに彼は見た。その奥にいる血まみれの左腕をかばう女も、軽く一瞥する。ただその存在を、認識だけする。なんの感慨もなく。

「まずは様子見、ですかね」

男が振りかざし、全力で振るってきた剣を数度避けた後に、パンドラズ・アクターはアイテムボックスから黒いレイピアを取り出した。複雑に絡んだ金属の持ち手に、細く長い指が絡む。

片手で構え、まるでハンディキャップのようにもう片方は背後にまわされ腰に当てられた状態のまま、彼は男を相手取る。その様は、胸に添えられた花のせいで踊るようであり、まるで襲ってきた男に剣を教えるようでもあった。

当然舐められた男は息巻いて、猛然と更に勢い良く斬り込んでくる。しかしそれでも、平然と、優雅に、踊るようにパンドラズ・アクターは受け流す。

男は段々と、息を荒げ動きを鈍らせる。そして文字通り何も変動しない顔を持つ軍服の彼とは正反対に、顔をどんどん青褪めさせ歪めさせていった。

「っ！」

そしてとうとう、男の剣が弾き飛ばされた。剣は空に弧を描き、どすりと地面に突き刺さる。味気ない幕引きに、拍手は無い。

「……これで終わりですね。さて、この拠点はどちらの物でしたか……」

「ああ、さつそく報告をしなければ」

顔を男に向けて、パンドラズ・アクターは独りごちる。仕事が増えたと愚痴るつまらなそうな彼は、男を見ているが見ていない。

「クソが……。気持ち悪い……」

男も、憎々しげに零す。人間という名称が付いた物品を見る目だと、瞳と呼ぶには些か疑念を抱くその黒い二つの点を睨みつける。その腹立たしい巫山戯た顔面に対して、男は叫ぶ。感情に任せて、叫んでしまう。

「なんなんだよ、その気持ちの悪い顔は!!ふざけやがって!馬鹿にす

んじやねエよ！魔導国のクソバケモノ共がツ！こつち見んじやねえよ！！気色の悪いバケモノめ！！」

「ねえー逃げましようよー！そんな気持ち悪いの放つといてさあ！早く逃げましよう！！」

それは、負け犬の遠吠えだ。深い意味もない悔しさからの罵声ではない。そして背後の女も、能天気故か現実逃避故かの愚かな発言でしかない。しかしそれでも、その言葉は重かった。

彼らがしたことは、狂信者に向かって信じる神とその創造物を侮蔑したことに等しい行為なのだから。

「……気持ち悪い、ですか」

愛すべき偉大なる父君に創られた創造物として、そして信仰者として、彼は世界のルールの如く当たり前に思う。磔刑に処さねばと。罪人は贖罪を経て、死なねばならぬと。

「ああ、そういえばー！」

低い声を出したかと思えば突如として明るく大きな声をあげた相手に、人間はきよとんとしている。しかしパンドラズ・アクターは目の前の人間など無視して、その怒りに既視感を覚えた己の心境を理解し、納得したと手を叩く。

「何かずつとモヤモヤとすると思ったら、そうでした、そうでした！私、お預けを食らっているんですよー！」

某拠点にて、茨に包まれながら御旗を支える職務に励んでいる罪人達を、パンドラズ・アクターは思い出していた。未だ贖罪の完了していないその罪人達は、罰が与えられると決まってはいるが、今はまだ手を出せていない状況だ。

やつと己の心境を具体的に理解することができた彼は、何も変わらぬ顔で嬉しそうな声を出す。

「あれを開けて遊べるのは、ゲーム終了後になってしまおう……。それで苛ついて、妙に余計な行動ばかりしてしまっていたんですねー！」

気紛れで動いたり細かなことを気にしたりしていた己の行動理由に、パンドラズ・アクターはなるほどなるほどと得心する。

そして、彼は思考を巡らせる。

目前の人間を知っているのはパンドラズ・アクターだけであるという事実。これからの多忙な生活を前にストレスを抱え続けるのは良くないだろうという懸念。ストレス発散の為に少しだけなら遊んで良いかという欲求。

それらを頭の中でかき混ぜて、彼は、心中で舌なめずりした。

「へ、」

バケモノの顔を指し示していた己の指、その指先から伸びた腕、肩までを、レイピアが貫いた。それを男が理解するのと、絶叫し蹲るのとは同時だった。

「さあ、贖罪の時間ですよ！罪を贖い、ついでに少しは愉しませて頂きますでしょうか！」

痛みに叫ぶ倒れた男を無視してパンドラズ・アクターは、しやがみ込んでいた女の元へと軽い足取りで駆け寄る。まるで恋人を追いかけているかの様に。異形の指が、しゅるりと女の背後から伸びてくる。男の逃げろだとかいった叫びが、虚しく響いた。何の意味もなさずに。

「あ、やめ、離しっ、」

細長い指に無造作に掴まれた、滑らかな曲線を描く金髪。優しく恋人に梳かれるのがお似合いなそれが、乱暴に掴まれ彼女を引きずるための道具と成り果てる。

「人間は、このような顔を一般的には美しいと言うのですかね」

無感動に言い放つ彼に、人間は今更情に訴え悲痛な声を上げた。

「やめろ…!!彼女を離せ!!いや、離してくれ!頼む…!!」

「これを、愛しているのですか？」

横たわる男の背中を踏みつけ、パンドラズ・アクターは男の視界に入るよう女を地面に投げ捨てる。背中に押し付けられた脚一本だけで身じろぎできない男は、震える声で叫ぶ。

「愛している!だから、頼む!!」

この世で最も尊き存在を侮蔑した愚かなその口で愛を語る下等生物に、パンドラズ・アクターは怒りを通り越して憐れみをとうとう感じた。その罪を断罪してやらねばと、心よりの同情と優しさから決意

する。

そしてそれと同時に、燻る嗜虐心が牙を剥き、涎を垂らしていた。「それでは、とくとご覧あれ」

まるでその言葉が合図かの様に、背中にある足の重みが変わり、地面に落ちる影が変化し始めたことに男は驚く。影のシルエツトだけは、指の長さを除いて人間らしかったそれが、影すらも異形へと変わっていく。

それは、悪夢の始まりだった。恋人達の顔が絶望に染まる。

異様に爪が長いバケモノの手が女の金糸を掴み、持ち上げるのを男はただ見ていた。そして、その鼻孔に場違いな甘い香りが届く。まるで男を慰めるかのような、甘ったるい花の香りが。

「ひい、いやだいやだ止めて止めてやめ、あああああああ!!」

美しい彼女の空色の瞳が、真っ赤に染まる。

左側の眼球が収まっていた場所で、バケモノの爪が弧を描く。突き刺さった爪の刃によって彼女の肉も皮も取り除かれ、そこは空洞になった。続いて、右側の眼窩も同じように処理された。続いて、開いたり閉じたり鬱陶しい口の部分にも、爪が刺さり愛らしい唇と小さな歯が取り除かれた。

そうして愛する女の顔面にできた、ぽっかり空いた三つの穴。それから目を離すこともできず、男は呆然としていた。いつの間にか止んでいた悲鳴と、未だに残る甘い香りと混ざる強烈な血腥い臭い。その意味を、起きた出来事を、男は飲み込めていなかった。

「ああ、これも取らないといけませんね」

うっかりしていたと彼は零し、そして、最後に顔に残っていた小さな彼女の鼻が削がれた。

それをきっかけに、やっと男は目を逸らし、吐き戻した。もともと空に近い胃袋の中にあつたなけなしの胃液全てを、げえげえと吐き出す彼の上から、労るような声が入ってくる。

「おやおや、貴方の恋人でしよう？多少目鼻立ちが変わったからといって吐くなんて、あんまりではないでしようか？」

恋人。その言葉に、男は目を見開く。そして何も無くなった愛しい

相手の顔にまた目をやり、そしてまた視線を逸した。

「…まあ、貴方の愛だの恋だのに、興味など無いのですがね」

異形の影がまた蠢いて、指の長さ以外は至って凡庸そうな人の形へと戻る。そしてその長い指は男の右腕へとびる。

「返してもらいましょうか」

男の体に刺さりっぱなしだった武器の回収をすると、女の着ていた衣服でパンドラズ・アクターは血潮を拭った。

抜き取る瞬間は相当な激痛だったはずだが、もはや悲鳴をあげる力も残っていなかった男は静かなものである。呻き、身体を跳ねさせるだけだ。

後は衰弱し死んでいくだけのその憐れな姿にやっと、パンドラズ・アクターは心落ち着かせることができた。愛する父を貶しめる愚者の末路が悲惨であることに、心より彼は安堵していた。

それこそが麗しき世界であり、正しい光景なのだ。

そうして暫くして、漸く帰ってきた理性によって、ゲームの進行側、協力者側としてはよくないことをしたと冷静に判断し、反省会をパンドラズ・アクターは行う。少し前の発言が完全に大嘘になってしまっている事態は、さすがにバレたらまずかった。

「…まあ、アンデッドにすれば解決ですけどね！」

何も問題なしと、頷くパンドラズ・アクターは胸元の一輪をポケットから取り出す。哀れな存在への手向けにと、少し萎れ始めていた花を放り投げれば、それはひらりと空を舞って、地面に落下する。横たわる恋人同士の間。まるで、男が女に花を手渡すように。

それを見て、パンドラズ・アクターは肩を震わせる。何も変わらぬ空虚な顔で、彼は大笑いした。

血溜まりに眠る恋人達に添えられたその花の名は、くちなし。

甘く香る、白い花。

静かな青い空の下、爽やかな風が吹き抜ける。

気温は少し汗ばむ程度、穏やかで心地の良い過ごしやすい日和だ。お出かけしましょうよと親しい誰かに誘われたくなるような、そんなお昼時だった。

だからだろうか、スレイン法国兵士の彼女は報告ができなかった。その眼で、見たことについて。

彼女は、超遠隔視というタレント持ちの兵士だ。

彼女が知る任意の場所にピントを合わせ、拡大して覗き見ることができるという優秀な能力持ちである。その能力には、一定の距離まで近付かないといけない、遠方の視認中は目を瞑り無防備のため護衛は必須といったデメリットもある。

だが、それでも彼女は稀有なタレント持ちとして重宝されてきた。そして実際に、タレントを使用して偵察などの任務を成功させてきた実績と実力があつた。

だからこそ彼女は、神都の現状偵察という重要な任務を任されたのだ。

遠く離れた丘の上から、まるで直ぐ側で覗き見している様に、神都の詳細光景を彼女は既に捉えている。目を閉じたまま視認する彼女の周りにはいる兵士は、遠くに見える廃墟と化した神都の存在を方角と旗の存在から辛うじて分かる距離で。

よく知るそこを、彼女は既に視認していた。

当然、護衛の兵士達には神都の様子はまだ分からない。彼らは周囲を警戒しながら、青褪める彼女が何を見たのか説明するのを只管にじつと待っていた。

「……おいつ、何を見たんだ！」



木立が風に撫ぜられる音が聞こえる程の静寂が、突如として破られる。

焦れて我慢できなくなった一人が、耐えかねて叫んでしまったのだ。沈黙を破ったその兵士を諫める者は現れず、皆が無言で催促を始めてしまう。

彼女と長く付き合いのある兵士も、戸惑うだけで無言の催促を止めない。彼女をよく知る者にとっても、それは不思議な光景だったからだ。

その生まれ持った才能で今まで淡々と報告をしてきた彼女が、無言を貫く様は。冷徹に、彼女は今まで任務を熟してきた。どんな場面でも、見て把握して報告するという作業を彼女が滞らせたことなど、仲間達は一度も見たことが無かった。

「……………る、わ」

「は？」

その在り来りな光景を報告するまでに、彼女は一帯どれほど時間をかけたのか。彼女自身も戸惑いながら、ゆっくりと唾を飲み込み、やつと口を開く。

「……………魔導王が、お茶してるわ」

「……………は？」

「…お、茶？」

呆けた兵士達の返事を無視して、彼女は淡々と何を見たのか話を続けた。どこか温度が無い、投げやりな態度で。

「神都に人間は、一人も居ない。アンデッドが代わりに沢山いるわ。それから骸骨が、旗を持って並んでいたわね。城は、綺麗に半分切れていたの。…断面が、見える様に、綺麗に。周囲の壁も無くなってた…。はは…、防御魔法なんて、無意味だったのね…。…何もかもが……………」

「お、おい…。大丈夫か？」

「てっぺんの、神の間も見えたわ」

気が触れたかのような彼女の有様に、眉間に皺を寄せていただけの彼らも心配そうな顔に変わる。しかし周りからの気遣いの言葉も無

視して彼女は、報告というよりかは独り言に近いそれを零し続けた。「そこで、お茶してたの。正確には魔導王は香りを楽しんでる様子で、相席している白いドレスを着た綺麗な女性が、すごく繊細なティーカップを持っていて絵になったのだけど…。ああ、本当に、綺麗な人だったわ…。いえ、頭に角が生えてたから、人ではないのでしようけど……」

「なあ、おい、しつかりしろよ」

「崩壊した神都は、まるで神秘的な庭園みたいだったの…。壊れた建物がもう植物で溢れていて、綺麗なお花もいっぱいぞ…。そうそう、まるで金持ちが飼ってるペットみたいに、黒くて大きな訳の分からないバケモノも歩いてたわ。ふふ、何アレ…。ほんとに意味わかんない…」

「おい！正気に戻れ！敵が居るかもしれないんだぞ！」

「あはははっ！だから何!?勝てる訳が無いじゃない!!」

怒りすら滲ませた仲間の叱咤の声に、彼女の狂気が滲んだ怒声が返される。予想外の返答に、目を見開いたと同時にぼろぼろと大粒の涙を流す彼女に、兵士はぎよつとする。

「ねえ、私が、戦況を報告したと思う!?私は思わないわ！私はね、敵陣じゃなく他人のお庭を覗き見たような気分よ！これは戦争と言えるの!?ねえ、こんなのが!?!」

彼女の問に答える人間は居なかった。女兵士の抱く疑問は、彼らもずっと密かに抱えてきたものだからだ。あまりに悲惨な現状に、これは本当に戦争と言えるのだろうかと彼らも内心ずっと疑問を抱いていた。

「あははっ、違うよー。これは戦争じゃなくてゲームだよ、おばさん。ねっ、マーレ」

「そっ、そうだね、お姉ちゃん」

可愛らしい子供の声が残酷に無邪気に答え、けらけら笑う。

堂々と、隠れもしないで現れたダークエルフの双子に、その愛くるしい見た目に、法国の兵士達は啞然とする。あまりに唐突で、あまりに敵意が無くて、戸惑いながらも彼らは剣を構えた。

「審判側を覗き見してもつまらないでしょ？あつ、でもさあ…、モー、じゃない、アインズ様を拜見できるだけ、下々の存在には有難いことなのかな」

「こ、この人達は、至高の御方のゲ、ゲームの盤上に立てただけでも感謝しないといけないんじゃないかな、お姉ちゃん」

弟の言葉に、姉はなるほど力強く頷く。

「うん、そうだね、マール。この人達は既に幸せ者だったね」

あははつと大きく笑うその幼い姿は、ただの遊んでいる子供のようである。戦時下で見るとはさすがに、日常の中に在りそうな姿だ。

どうして自分達は剣を握って子供と対峙しているのか理解できないまま、しかし他に手段が無いために、兵士達は覚悟を決めた。これは一体何だと惑いながらも、一斉にその子供達に斬りかかったのだ。訓練通りに、大きな失敗もなく、統率された完璧な動きで。

「弱っ」

心底驚いたような物言いを、斬りかかられても身動きしなかった子供が零す。そんな子供達の目前に無様に横たわり、まだ微かに息のある兵士達は悲しさと悔しさに目を見開いた。

ダークエルフの背後から飛び出した魔獣達によって、兵士達はその剣の切っ先を少しも姉弟に届かせることなく倒れ伏していた。一部は喉笛に噛み付かれ即死し、一部は爪や尻尾によって深い傷を負い虫の息だ。立っている者は一人もおらず、無傷なのは唯一人。

腰を抜かして涙を流す、タレント持ちの女性一人だけだ。

「ねえ、おばさんはタレントを持っていてののかな？」

姉と呼ばれているのに少年のような格好をしたダークエルフが、彼女に尋ねる。口から声をだすこともできず、彼女は首を縦にふるだけで精一杯だった。

「そ、それなら僕達と一緒に来てください。タレント持ちの人、集めているんです」

気弱そうな中性的な雰囲気少女らしい格好をしたダークエルフが、穏やかな声でお願いしてくる。その問いにはやっと、彼女は震え声で答えられた。

「はっ、はい、わか、わかりました…」

まるで犬が玩具を啜えて遊ぶかのように仲間の腕を啜える魔獣と、自分の顔を覗き込んでくるあどけない笑顔の可愛らしいダークエルフの子供達。

地面にへたりこんだままの女はそれを見て、やはりこれは戦争ではないのだと確信した。

「なんだか大人しいね。でも、演技かもしれないし、ちゃんと折っておこうか」

平然と開始されたそのやり取りは、あまりにも温度が無くて、女はその言葉の意味を理解できずにいた。

「片足だけでいいかな、お姉ちゃん」

「うん、右足だけ」

「うん、右足だけだね」

続く会話からやっとその意味を察するものの、彼女は信じられない思いのままに姉弟を見つめるだけだ。その平坦な声音は、笑えない冗談を言っているだけではないのかと。

「それじゃあ、いきます」

愛らしい見目にそぐわぬ無骨な杖が、小さく柔らかそうな手によって振りかぶられる。そして杖は、彼女の右足へと吸い込まれるように落下した。

ぐしやり。

耳を塞ぎたくなるような音と、骨を砕かれた女の絶叫が、穏やかな日和に木霊した。

崩壊した神都、そこにはまるで神都の全てを吸い付くして成長したかのような大木があった。

城の半分が綺麗に抉られ消えてしまうことで剥き出しにされた最上階の神の間には、その大樹の木陰が広がっている。まるで遙か昔に滅びた遺跡のようなそこでは、木漏れ日が死んだ栄華を照らし、清涼な風が流れていた。

そんな場所で、骨の魔王と黒い翼を腰から生やす淫魔は楽しいお茶

会をしていた。

楕円形のガラス製テーブルには、レース刺繍が施された薄く透けるラベンダー色の布が掛かっている。その席についている片方は飲食不可能な体なのに、その机にはティーセットとスイーツ、そして軽食がずらりと並んでいた。

ティーポット、シUGAーポット、ミルクポット、カップ、ソーサーは一揃いで、下側からミントグリーンのグラデーションが入り白色の細やかな花と蔦模様が描かれ、金の縁取りと装飾が施されている。控えめな華やかさと儂さを兼ね備えた、美しい陶磁器だ。

用意された軽食も食欲をそそるだけでなく、まるで机上の彩りのために用意されたかのようなだった。様々な種類のフルーツジャムが添えられたスコーン、きゆうりと卵のサンドイッチ、生クリームやチョコ、ラズベリーで飾られた何種類もあるタルトとケーキ、ほうれん草のキツシュ、そしてカラフルで可愛いらしいカップケーキが並んでいる。

机上で並んだそれらに囲まれる形で、机の真ん中には法国の地図が置かれていた。地図上には、黒と白の置石やインクで拠点が示され、陣地についてメモ書きがされている。

「アウラとマーレが来ました、アインズ様」

傾国の美とはこれと言っても過言ではない微笑を浮かべ、アルベドはその長い睫毛に縁取られた黄金の視線を愛しい殿方からその奥に遣る。

「モっ、…アインズ様！」

うっかりいつもの癖で呼びそうになったアウラに苦笑しながら、モモンガは椅子に腰掛けたまま振り返り、両手を広げて双子のダークエルフを出迎えた。

「お疲れさま、アウラ、マーレ」

「ありがとうございます、アインズ様！」

「あ、ありがとうございます…！」

にこにこ笑う双子が望むまま、モモンガは二人を膝に乗せる。初めて膝に乗せた時から多少は肉体成長した姉弟が二人乗る事自体は、レ

ベル100でかつアンデッドのモモンガにとっては何も問題は無い。だがどうしても、これが褒美になることは疑問でしかなかった。

「なあ、やはり普通に腰掛けてお茶した方が休憩になるんじゃないか？」

「嫌ですーこの御膝が一番癒やされます！」

アウラがきりつとしたドヤ顔で堂々と言い放てば、モモンガも黙らざるを得ない。今回だけでなく、今までにもモモンガは何度も別の褒美を提案し、尽く御膝が一番だと拒否されている。そしてそれは姉だけではない。弟も、弱気で困り顔だが、それでも別の褒美を代わりに所望することはなかった。

「ご迷惑でしたか…？」

「いや、お前たちが望むならそれで良いんだが…。：アルベド、睨むのはやめろ。マールとアウラは休憩や報告の時間以外は林で潜伏させているんだ。これぐらいは許すという話で落ち着いただろう」

「も、申し訳ありません…。つい…、羨ましくて…」

もう何度目か分からないやり取りだと、モモンガは遠い目をする。アルベドは、注意されると毎回心底申し訳無いという顔をして謝っている。演技ではないのなら毎回毎回嫉妬が抑えきれないだけなのだろうと考え、それはそれでどうなんだとモモンガはどうにもならない思案をする。

「…：次は、気を付けるんだぞ」

「はいっ！」

先程注意した時と同じリアクション、同じ流れに、しかしモモンガは強く出られない。既に彼女の本当の想いを知ってしまったているからだ。

友が帰還した時に起きた一件を経て、アルベドの純粹な愛をモモンガは受け止めた。そしてそれからずっと、保留にしている。友から度々せつつかれるも、元々の恋愛経験値の無さと特殊な状況がモモンガの足を止めていた。

ナザリック地下大墳墓内で、一応王のような存在になってしまっているモモンガにとって妻と子供は、いわゆる正妃、世継ぎというもの

になる。さらに万が一、何かの手違いと勘違いで第二后、側室なんてものを持つことになったらと考えると、恐ろしくて堪らなかつた。

一般的な恋愛すらしてこなかつたモモンガにとって、ナザリック内でのその手の泥沼を問題として抱えることになってしまうのは、あまりに辛すぎる。だからこそ、保留を続けているのだ。

有り体に言えば後回しにしているだけのことなので、思い出す度にモモンガはちくりと罪悪感に苛まれる。告白され、その答えは考えさせてくださいですつと返答しないままであることが最低なのは、恋愛経験が無くとも分かることだつた。

「嫉妬したいのはこっちの方だよ、アルベド！モー、じゃなかつた、アインズ様とずーつとお茶会なんて役得すぎ！羨ましい！」

そんなモモンガの複雑な内情など知らず、膝上のアウラは頬を膨らませ素直にアルベドを羨んでいる。

「あら、さながら王と女王みたいに、ずーつと、そうずーつとお茶会をしているのだから、〝餌〟としての立派なお仕事なのよ。それに私だつて、モ、んんつ、アインズ様の護衛として常に緊張しているのよ！呑気にお茶をしているだけではないわ！」

「えー、そうは見えないけどな…」

さながら王と女王みたいに、というワンフレーズは要らなかつたのではないかとモモンガは思うが、藪蛇なので突っ込まなかつた。

それよりも話を進めようと、大人しくしているマールにモモンガは話を振つた。つい先程に見つけ捕らえた法国の偵察隊にいた女から、何か有益な情報は聞き出せたかと。

「あつ、えつと、ウルベルト様とたち様がいらっしゃる辺りの情報が聞けました。何でも、この辺に大きな横穴が拡がっているらしくて…」

先程捕らえてきたタレント持ちの女から聞き出した情報を、机の真ん中にある地図を指し示しながらマールは報告する。

「その、軍隊を幾つかに別けて潜伏して、さらに細かく散って、各自拠点襲撃が作戦だつて言つてました。そ、それから国民を連れての国外脱出を考えているとも、言つてました」

「ああ、成る程。随分と長くウルベルトさんもたちさんもそこで小競り合いが続いているのは、そのせいか」

「空白地帯になっているうえ、その状況では、長引くのも仕方ないですね。その地帯だけ全体把握がどちらもなかなか完了しない理由が、はつきりして良かったです」

真面目な顔に戻ったアルベドも、マールレの報告に耳を傾け意見を述べる。そしてくすりと残忍さを滲ませた綺麗な嘲笑いを零す。

「何かしらの魔法、アイテムの使用をしているかもしれないという考えは、とんだ杞憂だったようですね」

「そうだな、アルベド。潜伏している兵も民も出尽くせば、他と変わらず全て完了するだろう」

モモンガは、地図を見渡し満足気に頷く。ゲームもそろそろ終盤であつた。

対戦者同士が、盤面を自身の陣営色だけに塗りつぶそうとするかのように数を競い拠点を増やし、続々と大地を覆い尽くしてきた。そしてもう間もなく、覆い尽くし終わる。法国領土内にて、ナザリツクの者達が掌握しきれない国土は、もはや残り僅か。

地図上に記されたモノクロの両者の拠点は、ぱつと見ただけではどちらが多いか不明な程に拮抗していた。

「後少しでゲームは終いか。…ふ、やはり接戦だな」

「やはり、ですか…?」

「ん?なんだ、意外だったか?」

ぼろりと零したアルベドの疑問に、モモンガも不思議そうに尋ね返した。恐れながらと、アルベドは言葉を返す。

「その、私めはてつきり、たち様はゲームに乗じて人助けをなされたいただけかと思っておりましたので、この接戦は意外でした」

「ふむ…、アルベドは、たちさんは陣地確保と人命保護を優先しゲームの勝ちを最初から捨てると思っていたんだな?」

こくりと頷くアルベドに続き、モモンガの両膝の上からも彼女と同じ意見が述べられる。

「私もそう思っていました。勝ち負けはどうでも良く思われているの



かと」

「僕もそう思ってたけど…。あつ、あの、もしかして、負けて命令を聞くことが嫌、なのかな？って。ほら、助けた人達を全員皆殺しにしろって命令されたら…」

マールレが出した意見にしかし、姉は賛同せず首を傾げ否定する。

「うーん、それは無いんじゃないかな。一度捕虜にして魔導国に流れた人達は、さすがに殺せないよね、アルベド？」

「そうね…。魔導国内にわざわざ悪い噂の種を植えることになってしまうから、私も、きつとデミウルゴスも、その願い事の許可は出しかねるわ」

「ああ、勿論、私も許可しない」

姉と守護者統括、さらには至高の存在にまでハズレと言い渡されマールレは涙目になる。しかし、うつむくその頭に、ぽすりと優しく骨の手が乗った。

「しかし、マールレの答えは正解でもある」

きよとんとするのはマールレだけではない。アウラもアルベドも、どいう意味なのか理解できず首を傾げている。

「単純な話だ。どっちも、対戦相手には絶対に負けたくないんだよ。さらに言うなら、負けた拳句に相手の言うことを聞くななんて絶対に嫌だって、両者ともに思っているだろうな」

「え、それって…」

「ウルベルト様とたち様の仲は…、あまりよろしくないのですか？」

「ああ、仲良くはないな」

モモンガの答えに、すうつとアウラとマールレは顔を青褪めさせた。アルベドも、硬い表情に変わる。至高の存在の不和にトラウマしかないNPC達は揃って、顔を見合わせ互いの抱く憂いを悟る。そして不安そうに、救いを求めるように、縋るように彼らはモモンガを見た。「なに、心配するな。仲は良くないが、」

「至急の伝令!!」

唐突に現れた影の悪魔に、NPCが即座に反応する。勢い良く立ち上がり椅子を倒すアルベドと、膝から降りて身構えるアウラ、マールレ。

そんな彼女と彼に守られた尊き存在が、伝令に向き直る。

「たっち様とウルベルト様が対峙、険悪な雰囲気です!! ユリ様が審判の仲裁を求めております!!」

それに対し驚愕の顔をする三者とは真逆に、やっぱりかといった風にモモンガは落ち着きはらってる。

「そうか、一回ぐらいは喧嘩するだろうと思っていた。急ぎ仲裁に行こう。場所はどこだ?」

立ち上がったモモンガに対して、アルベドが驚きに満ちた声をあげる。

「そんなつ、モモンガ様を呼びつけるなんて! しかも喧嘩の仲裁だなんて、そんなことで!」

「止めないか、アルベド。私は気にしない。それに、」

モモンガの言葉は、続く轟音によってかき消された。否、その地を揺らし空気を震わせるそれこそ、モモンガの口に出そうとしていた懸念だ。遠くから届いたとは思えないその衝撃の強さは、発生地の悲惨さを濃厚に伝えてくる。

アウラもマールもぽかんとし、アルベドも目を見開いて轟音と閃光がした方を呆然と見ていた。

「…早く行こうか」

モモンガの脱力したような呟きに、再度アルベドが慌てて止めにかかる。何よりも尊く、そして愛しい存在の為にと柄にもなく声を荒げた。

「お待ち下さい! 御気持ちは分かりますがしかし、まずは様子を探ってからでないかと危険です!」

「いや、急ぎ出発する。転移後も現場へ即座の移動だ。偵察は念の為に送るが、帰還は待たない。移動しながら報告を聞く」

「っ、畏まりました…」

納得いかないといった様子ながらも、アルベドは頷き黙る。そして、モモンガから指示を受けた通りに変わらなず仕事を続けるようにナザリックの者達へと伝令を出す仕事に取り掛かり始めた。

続いてモモンガは、真剣さと不安を混ぜた表情の双子に向き直る。

「アウラ、マーレ、この場を一旦任せたぞ。パンドラズ・アクターが戻って来たら、私が帰ってくるまでは各拠点の移動を中止し、ここに留まるように指示を出してくれ」

「畏まりました！」

「アインズ様、お、お気をつけて…」

緊張した面持ちの姉と、泣き出しそうな弟にくすりと笑い、モモンガはその両手で姉弟の頭を撫でた。

「いってくる」

振り返り、机上の地図をモモンガは拾い上げる。その地図にて影の悪魔が指し示した場所から一番近い、〈転移門〉で移動可能な拠点を見つけると、よしと頷く。

そして、未だ不満そうなアルベドに対してどうするか悩み、彼女から強請られたからという言い訳ができてから、モモンガはアルベドの頭も優しく撫でた。

ただ撫でられただけで蕩けた顔をするアルベドに、モモンガはまた罪悪感に苛まれる。しかしそれどころではないのだと心中で言い訳して、アルベドから目を逸らし、魔法を行使した。

「〈転移門〉」

モモンガが広げた門に、お茶会をしていた者達は足を向ける。しかし、その中へと入る前に足を止めたモモンガは振り返ると、暗い顔をした姉弟の名を呼んだ。

「アウラ、マーレ、そこにある菓子も紅茶も待っている間、好きなだけ食べていいからな。何も心配することはない。あれは、いつものことだ」

「は、はい！ありがとうございます、モモンガ様」

「有難く頂きます…！」

気遣われたことに心底嬉しそうにする姉弟を微笑ましく思いながら、モモンガはゲートへと飛び込んだ。またもや羨ましそうにしていたアルベドを、窘めながら。

拠点に着き、休む間もなくモモンガもアルベドも移動を開始しよう

とした。しかし、アンデツドの馬に乗ろうとして、ドレス姿のため横乗りしようとしたアルベドはモモンガに止められる。

見た目の不安定さ故に心配になってしまったモモンガはつい、自身の前に横乗りするよう指示を出したのだ。

「ああッ、モッ、んんっ、そんなっ、アインズ様と一緒になんて……」  
「……嫌なら、無理は」

「いいえ！喜んで同乗させて頂きます！くふー！」

先程までの拗ねた子供はどこへやら、一気に機嫌をよくしてアルベドは、馬に跨るモモンガの前、手綱を握るその腕の間に嬉しそうに収まる。

今までにも騎乗する動物に守護者と同乗したことがあるため深く考えていなかったが、あのアルベド相手の対応としては間違いだっただろうかともモンガは少し悩んでしまう。しかし今更、撤回はできない。

「…行くぞ」

「はい！アインズ様！」

案内役の影の悪魔を先導させ、モモンガとアルベドを乗せたアンデツドの馬は駆け出した。その駆けるスピードは、周囲の警戒が疎かにならないギリギリの速度を保っている。

それでも危険が無いかは、斥候からの報告が無く周囲に潜む護衛が静かであることから、おそらく危険ではないと判断できる程度だ。そんなところをモモンガに進ませていることに、アルベドは歯ぎしりしたかった。

心の中でひっそりと次に酒場で会った時には文句を言っやろうと、とある存在に対して彼女は決意する。

暫く移動して、周囲に黒く燃え盛る炎が現れ始めた。しかしそれでも馬を止めぬ愛する殿方に、アルベドはひりひりと心焼ける想いで問いかける。

「何やらお急ぎの御様子ですが、いかがされたのでしょうか」

アルベドの問い掛けに、なんてことはないともモンガは返す。

「あまり喧嘩を長引かせたくないんだ」

その答えに、アルベドはどうとう、ギリと歯ぎしりする。片方は自分の恋路を応援していることは知っているが、それでも、愛しい殿方から大切に想われている存在がいることには苛立ちを感じざるを得なかった。自分だけが特別だったならばと、どうしたって彼女は夢想してしまう。

「御優しい方…」

「いや、そうじゃなくてだな」

嫌味にもとれてしまいそうな儂い呟きに、モモンガのあつさりした否定が返ってくる。きよとりとしたアルベドの見上げる先で、この場にはいない者達への溜息をモモンガは思い切り吐き出した。

「喧嘩が長引けば長引くほど互いに引つ込みがつかなくなつて、しかも、どっちも絶対に謝ろうとしないから物凄い泥沼になるんだよ…」

その声に滲んでいるのは、疲労感が滲む優しさだ。それには何故か、アルベドはあまり嫉妬しなかった。

「泥沼に…」

「早めに仲裁しないと軽微な被害の内に止められないんだ。覚えておく」と良いぞ、アルベド」

「か、畏まりました…」

経験則から語られるそれによって、アルベドは察する。今までも、きつとこうだったのだろうと。

そう思うと可笑しくて、そして自身が嫉妬を止めた理由がすんと理解できてアルベドは口角を無意識にあげた。それはきつと、アルベドが欲しい愛の形ではない。いやもしかしたらそれは、そもそも愛などという御大層なものではないのかもしれないと、アルベドは思う。

「…仲は良くないけれど、悪くもない。これが正解でしょうか」

「いや…、あれは、説明するのが難しいな」

「ならば、男同士の友情、なんていかがでしょうか？」

「ははっ。そんなことを言ったら、ウルベルトさんもたっちゃんも仲良く怒りだしそうだな」

「言葉にしない方がよろしいのでしょうか。難しいですね」

「そうだな。あえて言うなら…、仲間で良いんじゃないか。少なくとも

もオレはそう思っているし、きつとウルベルトさんも、たつちさんも、そう思ってはいるだろう。…まあ、ウルベルトさんとたつちさん同士は、認めはしないだろうがな」

愛しい殿方が自ら語るその名称には、アルベドは嫉妬を覚えた。決まづけられた、想い入れのある名称が与えられていることに。だからだろうか、ついぽろりとその色っぽい唇の隙間から、彼女の素直な声が漏れてしまう。

「私は、モモンガ様の、」

出してしまい、しまったとアルベドは焦る。愛しい殿方が意地悪で返事をくれない訳ではないと、その優しさから、彼の友人の助言からアルベドは知っている。それなのに催促するような真似をして、嫌われたらとアルベドは顔を青褪めさせた。

「モモンガ様…」

「アルベド、今は、アインズ・ウール・ゴウン」だ」

「も、申し訳ありません…」

「いや、謝るのは私の方だ」

その優しい声に、またアルベドは心臓をとくりと跳ねさせる。そしてその頬を、喜色のままに染めた。

「…答えを出さなくてすまない。しかし、お前のことを大切に思っているのは、事実だ。だからこそ、時間がほしい」

「っ…！はい、モモンガ様…！」

「アルベド…」

「も、申し訳ありません…！つい、嬉しくて…」

「そうか…。まあそれなら、仕方がないか」

「…アインズ様はやはり、御優しい方です」

「そうか…？」

戸惑うモモンガに対し、穏やかに、純朴な乙女のようにアルベドは微笑んだ。黒い炎に包まれる中で、美しくも、その恋心も伝わるような可愛らしい笑みが咲き誇る。

恋の炎を身の内で滾らせる乙女は、愛しき殿方の全てを肯定する。貴方様は、お優しいと。

蒼天の下、まるでその心の内のような、黒い炎が広がる焼け野原にて、彼ら二人は対峙していた。

なすすべなく侵されていくスレイン法国の国土にてゲームを行う対戦者同士であり、相容れない同士の者達が。

たち・みーが、一步前に入る。鎧がぶつかり合ってガチャリと鳴った。

ウルベルト・アレイン・オールドが、一步前に入る。蹄が土を鳴らした。

その両者が、静かに睨み合っていた。腹の中を探り合い、相手を惨めに負かしてやろうと、雌伏して時至るのを待っている。互いにその腕の中に、子供を抱き上げながら。

母親の腕の中から見つけた子供を、たちは強く抱きしめている。崩壊しかけのボロ小屋の中から出てきた子供を、ウルベルトは片腕で抱えている。

まるで対になるよう神が配慮したかの如く、彼らの腕の中で大人しくしている子供達は、互いの抱くそれとは真逆であった。

たちの抱くそれは、手足は一般的な本数と形に等しく、肉付きはとても良い。愛されてきたのだと、煤と涙に汚れながらも薄っすらと桃色が見える膨らんだ丸い頬が証明している。

対してウルベルトの抱くそれは、一般的な形から逸脱し歪で、骨と皮のみで創られたような姿だ。愛など知らぬと、ぎらりと獣のように睨みつけてくる鋭い瞳が雄弁に証言していた。

「……ウルベルトさん、貴方、ロリコンだったんですか？」

「おいこら、ぶっ殺すぞ、くそたち。なんで俺がああな鳥野郎と同じ扱いなんだ」

「エントマも可愛がってるって聞きましたから…、もしかしてと」

たっちの発言に露骨に苛ついている様子のウルベルトに、周囲のナザリックの者達はそわそわと落ち着かない。いや、そもその状況が既に酷い有様であり、どうしようもない状況なのは彼らも流石に理解している。だからこそ彼らは皆、次の瞬間には爆発するかもしれない爆弾と対面しているような面持ちで固まっているのだ。

そのため、ウルベルトの大きな溜息には誰もが思わずビクリと反応してしまった。

デミウルゴスの尻尾が、セバス・チャンの肩が、ユリ・アルファの視線が、周囲に潜む護衛の者達が、びくりと大袈裟に動いた。

「……たっちさんには珍しくも何ともないことでしょうけど、俺にとっては、幸せそうにしている子供なんて大変物珍しいモノだったんですよ」

またか、そんなことを目の前の騎士が思っていることなど知る由もなく、ウルベルトは口を滑らせる。嫌味と皮肉で相手をなじるため、吐露していく。

「すさんだ眼でギラギラと周りを睨んで、全てを喰えるか喰えないかだけで判断するような、腹を空かせてずっと彷徨っているような…、そんな子供が当たり前だったんです、…俺の知ってる世界では」  
「うっ…」

「…こういう子供もね、普通でしたよ。貴方は知らないでしょうけど、アンダーグラウンドで、こういう子供が売られていることも買われていることも棄てられていることも、全部、普通だったんですよ」

吐き捨てるように語る彼の片腕で抱き上げられた子供は、何も知らない顔で己を抱く悪魔を見詰めていた。

ウルベルトもまた、子供を見返す。しかしその視線はその子供を素通りして、全く別の何かをその向こう側に見ていた。だからこそ、その瞳に宿るのは慈しみでも同情でも無い。もっと別の澱んだ何か、だ。

「……だから、可愛がっているんですか」

「さてと、話を逸らすのはここまでですよ、たっちさん」

じとり、悪魔の瞳が、殺すべき家畜に、価値の無い動物に、視線を



移す。

「ウルベルトさん、」

たっちの言葉など無視して、ウルベルトはその片腕にいた子供を背後のデミウルゴスに向かって放り投げる。

「デミウルゴス、ちよつと預かってて」

「っ、は、い。畏まりました…」

露骨に嫌だという顔をしつつも、宙に放り投げられ落下してきた子供をデミウルゴスはキャッチする。何が起きたかよく分かっていない子供に至近距离で見詰められ、また露骨にデミウルゴスは、今にも吐き戻しそうな嫌悪感剥き出しの表情を晒した。

「どけよ、セバス」

地面に倒れ伏す女性の傍に膝をついていた執事は、暫しの迷いを見せた後にそこを離れた。そして、ウルベルトがさてどうやって殺そうかと思案している時に、女は目を覚ましてしまう。

暫しぼうつとした後に彼女は、ウルベルトに気付き、すうつと顔を青褪めさせた。

「あっ…い」

怯えながらも上半身を少しばかり起こし、彼女はたっちの腕の中にいる子供に気付く。その胸が動いていることに、その頬がまだ血色よく染まっていることに、彼女は場違いな安堵をしてしまう。そして直ぐに、それどころではないのだと察した。賢い彼女は、はらはらと美しい涙を零し、そして頭を下げる。

「お願いします…！あの子だけはどうか、助けてください。亡くなった弟夫婦に託された唯一の子です…！どうか、どうか…!!」

「あ…、良いなあ」

悲痛な声に返されたのは、返されるべきでない愉悦に満ちた声。

彼女は、そこにあつた悪魔の歪んだ笑みを見て、顔を上げたことを心底後悔した。思わず顔を逸らそうとした女の頬に、ウルベルトが持つステッキの石突きが添えられる。彼女の願いは叶わない。その瞳には、悪魔が映る。

「良い声で鳴くんだよ、こういうタイプの人間って」

「ウルベルトさん、駄目です。…それは、駄目です。俺が許さない。彼女も俺が保護します」

「たっちさん…、あまり我が儘ばかり言うべきじゃないと思いますよ。今更、ゲームのルールを破るつもりですか？」

「たっちが毅然と首を横に振るも、それに返されたのは子供を相手にするような大人ぶった解ったような言葉だ。苛立ちも微かに混ざった声で、ウルベルトが呆れ果てたと吐き捨てる。

しかしそれでも、たっちは譲らない。首を横に振り、ウルベルトを否定する。そして傲慢にも断言してしまう。それが当たり前のことなのだ決め付けて、彼は、言い放った。

「親子は、一緒にいるのが当たり前です」

しんと静まり返り、風すら止んだかのようになった。炎も、燃やされている何かも、全てが空気を読んだかのように静かだ。人間も、異形種すらも、その湧き上がる怒気に恐れを抱き、鳥肌を立たせ、足を竦ませる。

「……………ああ、だから、」

その細長い爪の様な刃物が、自身の顔に食い込むことすら気にせず、ぐつと顔に手を当て、何かを抑え込むようしていたウルベルトが、怒声と共に一気に魔法陣を展開した。

「だから、お前はムカつくんだよ、このクソ正義厨が!!」

「セバス!!」

無詠唱で、強化された無数の魔法の矢が至近距離でたっちに向かい発射される。

超越者でも対応不可能とも思える速度と数を誇る超至近距離からの攻撃に、しかしたっちはそれでも対応してみせる。不可避の矢を、避けられないならばと尽く剣で受け砕く。結果たった数発だけが彼に掠り、その鎧を抉るだけだった。

彼が執事の名を呼ぶと同時に放り投げた子供も、無事に執事の腕の中へと着地した。

遠慮ない舌打ちが響く。それは二つが重なり合った大きな音だ。

「親子が一緒にいるのが当たり前だあ…？お前が普通だと思ってるこ

とは、豊かで、恵まれているからこそ、普通なんだよ…!!」

騎士の赤いマントを引き裂かんばかりにウルベルトが掴む。まるで汚らしい物に触ったかのように、その顔が顰められた。

「ああ…糞が!!そのムカつく鎧ごと、粉微塵にしてやるよ!糞たっち!!」

輝く魔法陣が再度展開されるも、横目で第三者の介入を察したウルベルトは直ぐ様にたちから離れる。

「魔法最強化・焼夷!」

天空目掛けて吹き上がった火柱が、たち、セバス、ウルベルトの距離を引き離す。

預かった子供をユリに任せ主人のもとへ駆けつけた黒衣の執事に、ウルベルトは舌打ちする。

騎士と執事の背後に守られるように居るのは、困惑し白い顔をさらに青白くさせているユリだ。そして彼女は、気を失った子供と、いつの間にか回収されていた女を庇うように腕の中に抱えていた。

「ウルベルト様!この子供、そろそろ捨てても宜しいでしょうか!?!」

目前に現れたストライプ模様のスーツの背中に向かって、ウルベルトは落ち着けと声を掛ける。

「何を言ってるんだ、デミウルゴス。あっちがゲームのルールを破るなら、こつちがゲームのルールを破るわけにはいかないだろ」

「っ、しかし…!」

とはいえ、ウルベルトも内心では捨てるべきと判断していた。圧倒的な不利とは認めないが、ウルベルトのタンクとなるのが子供を抱えたデミウルゴスというのは、あまり笑える事態ではない。

「…たっちさん、そんなくだらしない考えのために今更、本当に、ゲームのルールを破るつもりですか?...今までのこと全てが無駄になりますよ」

「だから、説得をしているんですよ」

「説得、ねえ…。成る程。剣はペンよりも強し、ですか」

剣を構えるたっちがウルベルトに躰り寄ろうとし、歯噛みしつつデミウルゴスが身構えたその時、光線が現れた。両者ともに想定外の光

り輝く矢が、飛んできたのだ。光り輝く、高速の、五本の矢が。しかもそれは、たつちの脚を狙い放たれた物だった。

不意打ちだったその射撃を、たつちは跳躍し回避する。だが、彼の脚の着地点に目掛け間髪入れずに一斉射撃が放たれ、その左足には二本の矢が突き刺さった。

「クソッ!!」

矢が刺さった足を庇いながら、たつちは狙撃手が居るであろう方角を睨みつけつつ一歩下がる。不意打ちにはならない状況となると、嘘のように矢は飛んでこなくなった。

「ふ、ハハハ!! 友達は大切にすべきだなあ、デミウルゴス!」

誰が矢を放ったか理解したウルベルトは、にやりとする。

先程飛来してきた矢を、彼は知っていた。この世界に来る前にユグドラシルでもよく見たその矢は、この世界に来た後も、偽物が自分目掛けて放つのを正面から見たことのあるものだ。

「ゲームのルール違反者が誰か、これで分かっただろ。さあ、その女を、」

腕を伸ばすウルベルトと、剣から手を離せないままのたつちが睨み合う。後もう少して戦闘の火蓋が切って落とされるようなひりつく空気が漂う中に、執事の叫び声が響いた。

「動くな!!」

それはとても珍しい、セバスの怒号のような短い声。遠くまでよく伝わるように響くその大声が、誰に聞かせたいのかは明白だ。喧しいとしか思わなかったウルベルトだが、続く言葉でその執事を早々に黙らせなかったことを後悔する。

「——モモンガ様を、悲しませるおつもりですか!!」

ウルベルトが得た射手に対する、致命的な一手だった。見えず聞こえずとも、狙撃手がその手による攻撃を取り止めたことが嫌でも彼には理解できた。

苛立たしげに睨みつけてくるウルベルトに怯みつつ、セバスは言葉を続ける。

「そもそも、ここで我々が身内争いをして、何かメリットがあるという

のですか!？」

その言葉に、デミウルゴスが短く吐き捨てるように笑う。

「まさか、君に損得勘定について能弁を垂れられる日が来るとはね……」  
「その意味については、今は深く言及は致しませんよ、デミウルゴス」  
即座の戦闘開始の事態は免れ、緊張感を孕みつつも、各々が戦闘態勢を解除する。

ただし誰も気は緩めない。剣を鞘に収めても、拳を下ろしても、次の瞬間に備えたまま、互いの絶妙な距離幅も保ったままである。

「……とりあえず、落ち着いて話し合いましよう、ウルベルトさん」  
「何を偉そうに言ってるやがるんだ、この事態の原因が」

普段被っている上品さなどかなくなり捨てて怒りを剥き出しにするウルベルトと反対に、たっちは冷静な振る舞いを崩さない。それと同時に、ウルベルトを苛立たせる。

ずっと変わらない感情が、彼の中でぐつぐつと煮立っていた。

生まれた瞬間から自分は圧倒的下に属する存在で、同じく生まれた瞬間から勝組の存在がいる。抗えない、変わらない、自身ではどうしようもない不条理。本物の騎士のような振る舞いをするその男を見ていると、そういった不愉快なモノをまざまざと見せつけられているようで、ウルベルトは胸糞悪くて仕方がなかった。

それは、死んで生まれ変わっても、世界を破壊し尽くしても晴らせないような不快さと屈辱だ。

「ウルベルトさん、今度こそ、ちゃんと話し合いましよう。向き合いましよう」

「ああ？何良い子ぶってんだ、クソたっち。ルールを破って、正義を氣取って、相変わらずだな、クソが」

隠しもしない嫌悪と侮蔑の意思は、子供のようでもある。しかしその挑発はスルーされ、騎士は淡々と言葉を続けた。

「貴方は…、まるで私の頭の中がお花畑のように言うけれど…、…全部、分かっていますよ」

一呼吸置き、何か覚悟を決めるようにたっちは深く呼吸をした。そして彼は、真実を吐き出す。

意識して見逃して目を逸らした、知っているのに知らないことにした、現実を。その全てを知っていたのだと、白状する。

「あの世界は歪んでいて、当たり前前のことは当たり前じゃなかった。自分の居た場所が、あの世界では珍しい、幸せで豊かな暖かな場所だということも分かっていました」

「へえー…、下で這いつくばる虫けらなんて、たっちさんには見えていないのかと思っていましたよ」

嫌味を返すウルベルトの声が、震えていた。一体どういう感情が、悪魔の感覚器官が働いてその様になったのかなんて誰にも分からない。それは当然、彼自身にもだ。

「見えないふりを、していたんですよ。目を逸らしていたんです」

「…それはそれは…、御大層な正義で」

酷く疲れたような溜息が、たっちの口から吐き出される。それに苛ついたウルベルトが口を出すよりも早く、彼は言葉を紡いだ。

「それでも俺は、ここでの、この世界での答えを見つけた」

鞘から剣を抜いたたっちに、ウルベルトとデミウルゴスが警戒する。しかしその抜き放たれた剣は悪魔など無視して、世界そのものを殺さんとするかの様な勢いで大地に突き立てられた。

まるで巨大なバケモノに、止めを刺すかのように。

「俺は、この世界を征服し、幸福に、支配します。それまでに立ち塞がる全てを破壊し尽くして、殺し尽くしてでも」

たっちは言い切った。迷いもなく、躊躇いもなく、狂気も正気も滲ませずに断言した。世界に対する不遜とも言える、横柄と感じられる堂々とした態度で。身勝手すぎる尊大な願いを口にした。

「俺の理想を、この世界に押し付けます。俺は、俺の理想を成し遂げる。俺の正義を」

「そんなうわ言を…、俺に聞かせてどうするんですか」

ウルベルトは、不愉快だった。しかしその感じる苛立ちが、いつもの騎士に抱く苛立ちとはまた別の種類に感じられて、彼は自身に戸惑う。威風堂堂と立つ相手が眩く、目を逸らしたくなることに、何故と疑問を密かに抱く。

いつも以上に腹立たしく、そして己が惨めに感じることに、ウルベルトは意味も分からぬままに焦りを感じた。

そんなウルベルトの隙に切り込むが如く、揺るがぬ騎士は問い質す。陰險なほどに優しい声音で、問を突きつけたのだ。

「ウルベルトさん、貴方も、答えを見つけてください」

「…何を、」

『まだ人なのか』と、尋ねてきた貴方自身も考えて、その問に答えるべきでしょう」

それは、かつてウルベルトが意地悪でたつちに問い掛けたこと、嫌がらせの言葉だった。大嫌いな相手が苦しむことを願って紡がれた呪いの言葉に対し、何を今更とウルベルトは嘲る。その返答をすべきなのはたつちの方であり、ウルベルトは無関係なのだ、彼は、信じ込んでいた。

「俺はもう、」

「弱い人間に、腹が立つんだろ」

その一言は、強烈だった。ウルベルトの顔に貼り付けられた悪魔の笑みが、がらりと崩れ落ちる。NPC達と、弱い人間が、困惑した表情のまま固まる。動けなくなる。

「何も変えられない弱者を見て、慰められているのでしよう」

「やめろ」

深く深い奥底にあった誰も触れてこなかった暗部に、騎士の言葉はずけずけと入り込んでくる。いや、正確に言う、誰も触れてこなかったのではない。誰も知らなかった為に、触れることができなかつただけだ。

当の本人すらも無いことにしていたそれを、たつちは、たつちだからこそ察することができた。この世で一番、彼を憎たらしく想っているからこそ、理解できてしまったのだ。

「人間が、所詮は誰も守れないことに、何も変えられないことに、安心するのでしよう」

「黙れ!! 黙れよ、クソツ!!」

その叫びは、懇願であった。

自身の造物主が、ただの言葉の羅列に苦しんでいる事実には、振り返った悪魔は驚愕する。その顔に塗り込められた、混乱と怒りと戸惑いは、あまりにも悲痛で、彼の脆さを感じさせるものだった。

偉大なりし御方に対して、不敬なことを考えてしまったとデミウルゴスは慌てる。しかし次の一手が浮かばずに、造物主と同じく迷い子のような表情になってしまう。

「悪魔としての愉しみ、それだけじゃないでしょう。あれは、貴方の個人的な感情と欲望も原因だ」

「やかましい…、ウゼエ、黙れ!!」

ウルベルトの絶叫に呼応するように、黒い炎がたっちの背後から現れ襲う。跳躍し避けたたっち目掛けて、その炎を吐き出した巨大な蜥蜴が突撃する。その通り道全てを真っ黒に焦がしながら猛進するその召喚獣は、召喚主が望むままに、たっちを殺そうとしていた。

「はあぁっ!!」

攻撃を攻撃で相殺する、脳筋だ無茶苦茶だとかつての仲間に散々言われた時と同じように、襲いかかってきた炎を全て真っ向から攻撃で受け返し全てをたっちは相殺した。また炎を吐き出そうとしている蜥蜴の、その僅かな隙に、その頭部に目掛け飛び跳ねその剣を彼は打ち立てる。

もんどり打つ蜥蜴など気にもとめず、スキルの重ねがけで威力を向上させた技によって、その頭部は斬り落とされた。消滅していく魔物に一安心しつつ、周りを見渡して、そして上空を見上げてたっちは舌打ちする。

「セバス！協力しろ！それからデミウルゴス！」

名を呼ばれた、翼を広げていた悪魔は戸惑いつつもたっちの言葉を待つ。

「お前にできることはない！ここで待ってろ！すぐにウルベルトさんを連れて戻る！」

それに対してデミウルゴスが返答するより早く、たっちはユリとセバスに下は任せたと短い指示を出す。そして彼は、上空へと跳躍した。



その持てる身体能力全てを使って駆けて、地面を蹴った彼は、腰を低くおろし、まるで飛んできたボールを上げるかの如くその手で造物主を上へと押し出したセバスの協力によって、一気に有り得ない程の上空へと躍り出た。

上空で戦闘準備を行い、魔法陣を展開していたウルベルトの前へと。

「魔法三重最強化…」

詠唱中の悪魔の前に現れた騎士は、一気に斬りかかる。

「・朱の新星…!!」

「へ次元断切…!!」

轟音。それ以外に言いようの無い音が、世界に轟く。まるで世界の終焉の始まりを告げるような、この世そのものが軋む音。白く世界を塗りつぶす光。

そして、反動のように嘘のような静寂が返ってくる。

至高の御方も死んだのではないかとNPCが思ってしまうようなエネルギーの中心点で、ウルベルトもたっちも「飛行」を使い浮いていた。

片方はその鎧と肉体能力で、片方は予め使用していた魔法やスキルによって、その身を守ったのだ。

「貴方はずっと、全てを憎んでいるだけだ。憎んでいるくせに、それを認めないから、」

「違うー黙れ!!」

「救おうとして！変えようとして！結局は何も出来ないままに終わっただけの自分に重ねて、そのどうしようもない感情をぶつけてきたんだろ!!」

「違う!!俺は!!違う!!」

否定をしながら肯定をしているようだとは、ウルベルト自身も感じていた。

本当に違うのなら、笑えばいい。澄まし顔で馬鹿にしたように、笑い飛ばせばいい。悪魔のように、嘲笑えばいいのだ、何時ものように。しかしそれがウルベルトにはできなかつた。たっちの言葉全て、聞

きたくもなかった。聞き流すこともできなかった。笑えなかった。不愉快だった。否定したくて堪らなかった。稚拙な言葉を並べてでも、それを認めたくなどなかった。

「見るのも嫌なんでしょう、人間が」

それでも、たつちは言葉を続ける。

ゲームオーバーの文字が、ウルベルトの頭の中に流れた。だからだろうか、真つ黒な背景に真つ赤な文字で鮮烈に輝くその文字が頭にこびりついているからなのか、彼は魔法を放てなかった。

呪文の一つも頭に浮かばない彼の脳裏に出てきたのは、今は全く関係ないはずのもの。

ガスマスク、淀んだ空、富裕層のみ暮らす煌めく世界、ゴミの掃き溜め、オイルの浮かんだ水たまり、鼠、蛆虫、ゴミを食う子供、帰ってこない仲間達、それでも存在する幸福そうな人間達。

「弱くて何も出来なかった、世界を救えなかった自分を思い出すのが、嫌なんでしょう」

自身の胸をのたくりまわるその不愉快な感情を、ウルベルトは知っている。知りたくもないのに。今までに見てきた人間の抱えてきた感情全て、それを見ながら自身が奥底に抱えてきた感情全て、全て、何もかも、ウルベルトは知っている。

「俺は…。」

憎くて、憎くて、憎くて、憎くて、そして、悲しくて堪らなかった。全てが無駄に終わったその結末が、世界に見捨てられたその結末が、許せる訳がない。そして今更、奇跡が存在することなど、弱者であり敗者となった彼が許せるわけもなかった。

自分と同じ様に、弱者は、淘汰されるべきなのだ。救いもなく、奇跡もなく、勝利も無いままに、終わるべきなのだ。血塗れになって泥の中で、無意味に、無感動に、死ぬべきなのだ。

ウルベルトは、無意識に、いやわざと自覚しないままに願っていた。誰にも祝福されず、神々の寵愛もなく、奇跡も起きずに敗北しなければ、そうでなければウルベルトには許せなかった。絶対に、許せなかった。

そうでなければ一体、あの敗北は、あの積み重なった無駄死には、何だったというのか。

「俺は、…悪魔だ。…ああ、そうだよ!!憎くて憎くて仕方ねえよ!!全部全部全部!!腹立たしい!!俺は、」

「貴方は人間ですよ。一体いつまで人間のままでいるのかと、呆れる程にね」

感情を爆発させてなお全否定されたウルベルトは、呆ける。

お前は世界一の馬鹿だと言わんばかりに、たっちは呆れ返った口調で否定する。お前は悪魔ではないのだと。そして無慈悲にも、俺は悪魔だと逃げた彼の逃げ道を、丁寧に、優しく塞いだ。

「ウルベルトさん、貴方は一体いつまで、あの世界に対する苛立ちを抱えていくつもりなんですか」

強烈なフラッシュバックが、ウルベルトを襲う。どれほど長い年月が経とうとも完全には消えてくれない絶望の記憶が、彼の心臓を掴み、握り締める。

「あの世界で死んでいった人達を、死んでもまだ引きずっているなんて、」

あの世界で、甘い蜜を啜る人間を打ち倒そうと、世界に変革を!と熱く語って、冷たい肉に成り果てた者達の顔、顔、顔。しかしそれが、殺してきた法国の兵士と重なり、ウルベルトは吐きそうになる。

「貴方は哀れで、」

たっちが口にするのは、心の底より寄せられた同情心の塊の言葉、憐憫の情あふるる言葉だった。それが、奥底からすくい上げられたウルベルトの心の深部をまた鋭利に切り込んだ。切り刻んで、明るみにして、それでもなお、騎士は追撃を止めない。真綿で首を絞めるように、屈辱の汚泥に彼を沈める。

「とても、優しい人だ」

胸くそ悪いというかのように、騎士は、そつと告げた。

「あゝあゝっ…!!糞ッ!!」

引き上げられて、明るみにされてしまった激情。それが何かなどウルベルトにはもう解っている。今更否定など出来るわけもない。誤

魔化しようもない。

全てが憎い。全てが悍ましい。全てが腹立たしい。全て、踏み潰してぐちゃぐちゃにしてやりたい。未だに希望がある世界、光に縋ろうとする無力な者達への苛立ち。それは、ウルベルトが未だ人間だからこそ抱いた強烈な感情。

嫉妬だ。

自分達が敗北したのに、同じような存在が救われるなんて、許せなかった。そんなことになれば、嫉妬で気が狂ってしまうとウルベルトには解っていた。

だからこそ、神がないことに安心した。誰も救われないことに安心した。弱者が何も成せず死ぬことに、ウルベルトは安心した。

仲間達と自分の敗北は、あの敗北は、誤りではなかったのだと。

「糞！糞が！！だから…、だから、お前は大好きなんだ…！！」

「よく分かりますよ。だから私も、貴方が大好きなんです」

互いに互いが、あまりに正反对で、そのくせまるつきり同じだから、嫌でも分かかってしまう胸くそ悪さに、ウルベルトもたつちも盛大に顔を顰める。

彼ら二人共に、気持ち悪くて気持ち悪くて、不愉快で仕方がない気分だった。

たとえ世界に否定されても、悪と誇られても得るものが無くとも、真の正しさを求めた男。

たとえ世界に肯定されても、正義と褒められ富を得ても、空虚な正義に縋った男。

その豊かで幸せそうな姿が、その強さと正しさを求める姿が、互いに互いを腹立たしくさせていた彼ら。話し合いも理解も捨てて、ただ只管に互いに相手を愚かだと思いつながら、何も変えられずに何も無い結末を迎えた哀れな存在。

やっと彼らは異世界で、数多の犠牲の上に理解を得た。互いに互いが大嫌いであるという、単純明快なる理解を。

「……〈魔法位階上昇化・隕石落下〉」

ウルベルトがステッキをたつちに向けて言い放ったその魔法に、たつちは思わず聞き返した。

「…は？」

現れた隕石は、しかし、当たり前のように騎士によって両断される。まるで柔らかな素材でできているかの如くスパツと半分にされたそれは、地面に落下し打つかると同時に物凄い音をたてた。下を気にしつつも、いきなり戦闘行為に移ったウルベルトに警戒したつちは声を荒げる。

「いきなり何なんだ！」

「俺が悪魔でなく人であるなら、たつちさんにとって大罪人だろ？俺は殺されても文句が言えない立場って訳だ。けど、テメエに為す術なく殺されるのは胸糞悪いんだよ、クソたつち」

「勝手に思考して、勝手に話を進めるな、クソ悪魔!!」

「おいおい、悪魔じゃないって言ったのはテメエの口だろ。無茶苦茶だな」

「マジで殺したくなってきたから黙ってくれませんか、ウルベルトさん」

お前の指示に従うなんて胸糞悪い、そんなことを絶対に言おうとしたのであろうウルベルトを、咳払いで黙らせてたつちは、本題に移る。

「この世界は、あの世界じゃないんですよ」

「…解りましたよ。もういいですよ。十二分に解りましたから……」

気落ちした様子 of 悪魔は顔を歪めて、もういいから黙れと告げる。

しかし騎士は、その言葉を当たり前の様に無視した。

「貴方は今は、世界に災厄を撒き散らす悪魔、〃ウルベルト・アレイン・オードル〃。そして私は、聖騎士の〃たつち・みー〃です。それ以上にも、それ以下にも、なれない」

たつちが語るその言葉に、ウルベルトがぴくりと反応する。彼の語る全てを改めて真摯に受け取り、彼は、苦虫を噛み潰したかのような顔をした。

そして、その言葉の続きを、ウルベルトが引き継ぐ。やはりこの正義厨は愚かだと、間抜けだと呆れながら、心底うんざりしつつも、全

てを理解しながら。

「……元人間として、完全な異形にも成り切れない。俺達は、何モノでもない、それで、良いんですか」

純黒も、純白も、この世界には存在しないように。人間にも、異形種にも、正義にも、悪にも、神にも、成れない。

完全なる何かではなく、完全なる何かを演じる何モノでもない存在として自覚して生きること。

たっちの指し示す道に、ウルベルトはため息を吐く。

「…しんどいだろ、それ」

「三人いれば、なんとかなるでしょう。貴方が自分が人間でもあることを忘れたら、私とモモンガさんで殺しに行きますよ」

「じゃあ、たっちさんも」

「ええ、殺しに来てください、もしもの時には。それでこそ、この世界を導く資格があるのだと思いますから」

そう言つて、たっちは剣を収めた。そんな彼に対してウルベルトは、いつものように嫌味を零す。

「…糞みたいな綺麗事ですね」

「さつきから発言がクソ塗れですね、お里が知れますよ」

「やっぱりお前いつか殺す」

詰り合いながら、罵り合いながら、にらみ合い、殺意をぶつけ、嫌悪感剥き出しにして、彼らは空中で歩み寄った。そして、互いの右手を差し出す。

そこに居る握手を交わす存在は、ただの虚像だ。光を吸い込む黒く艶めくマントも、光を反射し白く輝く鎧も、真っ赤な嘘である。

その心中に在るのは、全てが混ざり澱んだ、汚くて斑で、みっともなく、はしたなく、薄汚い感情。

嫉妬と傲慢、それだけである。

善良であるが故に、正義にはなれない彼。善良でないが故に、悪にはなれない彼。

どちらも中途半端で、天には届かず、しかしかと言つて大地に当たり前のように立つこともできない。しかしそれでも、彼らには世界を

導く力があつた。あの歪んだ世界とは真逆に、絶対の力が。感情によつて暴走させた結果、数多の存在の生命も運命も何もかも、容易く翻弄させてしまう程の力が。

「この世界全てを幸福で墮落させるぐらいしてみせろよ、この悪魔。あの世界が、嫉妬するほどに」

「言うじゃないですか、聖騎士風情が。これからも正義をせいぜい語ってください。よくお似合いですから、その傲慢な押し付け」

言うだけ言つて、たつちとウルベルトは互いの手を離した。そうして焼け爛れた地上に戻る途中、思い出したとウルベルトが口を開く。

「しかし、あの女は渡しません」

「ウルベルトさん…、一人ぐらい良いじゃないですか」

「ここまでできて今更、ゲームルールを破る訳にはいかないでしょう。そもそも殲滅を考えていたのは、個人的な理由じゃないですよ。この国に染みついた思想はナザリックの目指す世界には、邪魔です」

ウルベルトの指摘に、たつちは反論できず黙り込む。

白の陣営にてどれ程に優しくしようとも、国民は処遇を大人しく受け入れるだけで礼を述べてくることなど一度たりとも無かつた。いやそれどころか、一部の者達が大変酷い罵詈雑言を何もしていない異形の者達に吐きかけてくるという報告があるばかりだ。

「俺は、この国の思想の根絶が将来のためになると考えてます」

「確かに…、この国は浄化した方が良いとは思いますが。しかし、あんな親子の様子を見てしまつては…」

もう諦めないと決めたたつちにとつて、ルールのせいでもまた人が救えないというのは不愉快なものであつた。しかし、ウルベルトの指摘するところも理解できていたため、言葉尻を濁したのだ。

ここまでの殺戮も救済も、全てゲームルールに則つて行われたものだ。ここでそのルールを破つては、ゲームは破綻し、殺戮も救済も規律も何もなくなり、たつちが一番始めに懸念した結局誰も救えないという事態に陥ってしまう。

相変わらず諦めの悪いと、揶揄する声に続いてウルベルトがぼそりと零す。

「だいたい、なんで俺がたっちさんの言うこと聞かなきゃいけないんですか、嫌ですよ」

「…俺の思い通りになるのが嫌なだけなんですか、もしかして」  
「はっ、違いますよ」

やいのやいの言い合いながら地上に近付いていく二人はしかし、地上にいる一つの姿に喧嘩を止めた。

「…あー…、モモンガさん、久しぶりー」

「…あれだけ大きな音がしたら、そりや来ますよね…」

地上に居たのは、女性をずっと守っていたのであろうユリと、子供を抱えるセバスとデミウルゴス。そして、そんな執事と悪魔に首を傾げる淫魔のアルベドと、彼女が愛するモモンガだった。

人間は、さすがにぐったりと気絶しているままだ。目を覚ます気配は一切無い。ナザリックの者達だけが、平然と意識を保っていた。

「それで、解決しましたか？仲良く握手してましたけど」

「やめて、モモンガさん。第三者から冷静にそんな風に言われると鳥肌が立つし蕁麻疹が出る」

「細かい詳細については追って説明します。それよりも、丁度良かった。目下の問題を解決してくれませんか？」

ウルベルトをスルーして、たっちが話を進める。ひとまず現状の残った問題を説明して、黒の陣地にいる女性を助けたいという我が儘をたっちは審判に申し出た。

聞き終えたモモンガは、ふむと考える。しかしそれは自分が仲裁するまでのことか？と首を傾げそうな雰囲気である。実際に、一体何事かと身構えていたモモンガは、少し拍子抜けしていた。

そして、その問いに対する単純明快な答えを審判は事も無げに言い放つ。

「その女性と、たっちさんの陣営にいる人とを交換することで手を打ちましょうよ」

1—1—0。提案されたのは、単純な物々交換である。人間と人間を交換する、真なる取引だ。

例外措置だがルールを破ることはならないのだから、ゲームは破



綻しない。ここまで進行されて今更、例外など許されないゲームは問題なく継続されることになる。

「…それで良いです」

「…分かりました」

モモンガが仲裁し、提案した取引に両者がのった。彼らも、妥協案として真当たと判断したのだ。

たっちはユリに向き直り、指示を出す。彼の頭に浮かんだのは、未だ説得に失敗し続けている一人の法国兵士だ。

「ユリ、仕方ない。丁度彼もあつちに行かせろと言っていたし、報告によると説得も尽く失敗しているみたいだし、連れてきてくれないか。あの男を」

「畏まりました」

説得に失敗し続けている処遇に困っていた男。該当する男がいる場所へと移動を開始したユリに代わり、気絶する女性と子供の面倒をセバスが引き受ける。

「ユリが戻ってくるまで待機ですね。…というか、あの子供、なんですか?」

デミウルゴスとセバスが抱える子供を指差し、モモンガが尋ねる。

「拾いました」

「…え、ペロロ」

「違います!!」

同時に答えた後に全力で同時に否定してきたウルベルトとたっちが互いに睨み合うのを、相変わらずだなあとモモンガは眺める。そんなモモンガの傍に、ウルベルトが近寄り、そしてたっちも歩み寄る。「モモンガさん、今度三人で、ゆっくりお話ししましょう」

三人、その言葉をウルベルトが自ら口にしたことに、モモンガは驚く。その口調がどこかすつきりした雰囲気なことにも、戸惑ってしまふ。だがしかし、同時に喜ばしいとモモンガは思った。どこかいつも憂いているようだった友が、なんとなくだがそれでも、開放されたよう。ギルドマスターとして、友として、モモンガは素直に嬉しかった。

「俺がたっちさんのこと、どれぐらい大嫌いなのか語ります」

「えっ、なんで」

「俺もウルベルトさんの性格の悪さと嫌いなところを語りますよ」

「たっちさんまで!？」

それはどういう集まりなんだと、モモンガが笑えば、ウルベルトもたっちもつられて笑い出す。肩を並べて笑い合う至高の存在の姿に、被造物も不安を胸から掻き消して、微笑ましくその光景を見詰めている。

それは、ナザリツクの者達にとって完成された芸術のように美しい光景であった。醜悪と汚泥を通り越して完成に至った目を逸らしたくなるようなバケモノ達の美しい友情に、その場に立つナザリツクの者達は純粹な涙を浮かべ拍手を送っている。

真つ黒に染まった大地の上、晴れ渡る高い青空の下、彼らは無垢に喜んでいた。命ある者達が尽く死に絶え燃え尽きた跡で、心より笑いあい、微笑んでいたのだ。柔らかい腸が晒され、加工された骨は物と化し、焦げる死肉の臭いも濃厚に漂うその場所で、気持ちよく、爽やかに、屈託のない笑顔で。

そんな彼らの頭上、雲の隙間から、陽光が降り注がれる。キラキラと美しい光の筋がいくつも並んで、まるで天が祝福しているかの如く彼らを照らした。

その祝福の光あふるる世界に、纏わりつくのは血の臭い。しかしそれでも、そこにいる誰もが確かに、幸せな空間であった。

少し前に世界を揺らすような音と閃光があったのが嘘のように、澄み渡るコバルトブルーの空はとても綺麗だった。

その爽やかに広がる空を、自動人形は不安そうに見ている。

音がしてからそれなりの時間が経過しているが、原因が何だったのか詳細報告は未だ無い。変わらずに仕事を続け、何か起きた時は報告をと指示が出ただけだ。その指示通りにプレアデスの一員である彼女、シズ・デルタは仕事をこなしていた。

だが、原因不明の事態を無視しきることはとても厳しかった。何よりも尊い存在が、大切な姉妹が、ナザリックのゲーム参加者が、無事であるのか不明な状況では。

そのせいでシズは、仕事の合間合間に晴れ渡る青空を不安そうに眺めているのだ。また何か起きてしまうのでは無いかと、懸念して。

現在開催中のゲームにてシズが任されている仕事は、白の陣地内の巡回だ。各拠点、陣地内全般の管理状況を見て回りチェックを行っている。

白の拠点には、沢山施設がある。黒側と違い生きた人間が自由に過ごせる拠点も、自由にはできなくとも軟禁されているだけで元気に生きている人間も、沢山いる。その各施設に問題が無いか見て回り、問題があれば対処する。それが彼女のやるべき仕事だった。

施設からの脱出や暴動を目論む者達の報告を受けた場合は、わざと逃して仲間の場所まで泳がせ敵を殲滅した。仲間の所に行かなかつた場合は、国境に近づいた時点で殲滅としていた。

とはいえ、敵を殲滅しているのは現状、死の騎士だけである。死の騎士で構成された三千の軍は、今回のゲームにおいて彼女の配下として与えられたものだ。小手調べとしてその軍の一部だけでも突貫させれば、シズの仕事は何も残らなかった。

そのため、シズ自身は自分の仕事をまるで散歩のように感じていた。広い公園の中を散策し、不審者がいれば警備員に指示を出して消してしまう。彼女についての認知はその程度の、楽な仕事であった。そうして、拠点内に紛れ込んだ何者かの排除も、拠点から出るなどという言いつけを破ろうとしていた者も、全て消されて、無かつたことにされてきたのだ。

しかし勿論、至高の存在であり慈悲深く御優しい今はモモンガと本来の名を名乗る方から指示された通り、舐めてはかからない。

『油断はせずに気を付けるんだぞ、シズ。何かあれば、私かたちさんにすぐ言いなさい』

ゲーム前に御方から掛けられた気遣いの言葉を思い出せば、モヤモヤしていた胸の内が軽やかになるのをシズは感じられた。

「…きつと大丈夫」

自らに言い聞かせるように呟いて、シズは足を進める。そうして進んだ方向から徐々に聞こえてきた音に、しかし彼女はまた億劫な気持ちになるのであった。

ドンドンと、扉を叩く音が響く。

わざと目を逸らしていたシズは、仕方無くちらりとそちらを見る。その拠点を訪れる度に必ず行われているその行為に対して飽きないのかと思いつつ、仕事なので渋々と彼女は足をさらに進める。

シズが訪れたその拠点は、収容所としても保護施設としても微妙な規模と位置のために使われていない場所だ。白の拠点となっていることを示す旗と、見張りのアンデッドしかそこには配置されていない。

それに何よりも、その町は元々が貧しかったのか、どの建造物もボロかった。それこそ、その拠点のことを思い出したシズが先程の衝撃の影響で崩れていないか心配になって訪れる程だ。

幸い崩れていなかったそこは、本来なら施設として使用されていないのだから、シズ以外に音を出す生命体の存在など有り得ない場所だ。強いて言えば、ナザリックの護衛ぐらいしか動く者などその拠点にはいないはずなのだ。

ドンドン！ドンドン！

しかし間違いなく響いているその音は、怪奇現象ではない。ただの唯一の例外だ。今後どうするか決められていないその男は、倉庫の一室にてずっと仕舞われている。

「出せ!!ここから出せ!!弟の所に行かせろ!!」

近づくと、相変わらずの言葉の羅列を男は叫んでいた。ドアの小窓に必死にしがみついて顔をめり込ませ、これまた相変わらずの様子で、男は叫んでいる。

食事や水を運んでくる度に見せる表情と、叫ぶ内容が、一切変わらない。その事実には、シズは嫌気が差してしまう。

「……………飽きないの?どんなに叫んでも、私はそこを開けない。落ち着いて、冷静に考えて、何が一番最善か」

シズは、感情のない声で淡々と、黒の拠点に行かせると叫ぶ男を、取り敢えず、説得していた。至高の存在たち・ミーに頼まれて行われているそれがあまりに業務的で相手を苛立たせているなど、当然彼女は知らない。

「…………止めた方が良い」

「ここから出せ!!」

話を欠片も聞いていないとよく分かる返答に、鉄面皮の彼女の眉間に皺が寄る。聞かれていない説得は、壁に向かって話すような無意味さではないかとシズは虚しく思う。だが、至高なる存在の一人であるたちから、取り敢えず説得を試みてくれと言われているのだ。それならばシズがすることは唯一つである。取り敢えずの説得を続けるだけだ。

「実力が無いなら、死ぬだけ。…訂正する。死ぬよりも酷い目に遭う」

「いいから俺を開放しろ!!人を何だと思ってるんだ!!救う地域と殲滅する地域を別けただあ!!一体全体何様だ!!このバケモノ共が!!」

「元々全部殲滅予定だった。救われる数が増えたのだから、喜ぶべき」

「ふざけんな!!」

「唾が飛んだ。汚い。最悪…」

ドンドンテンションが下がっていくシズとは真逆に、男の罵声は

ヒートアップしていく。そしてその罵声が、絶対に罵ってはいけない相手を罵ろうとした瞬間、第三者の声が現れた。

「お疲れ様、シズ」

この場にはいないはずの存在、別拠点で仕事中的はずのユリ・アルファがいることに驚きつつも、シズは内心ほつとする。なぜ姉がいるかは不明だが、ちつとも成功しない説得の成功率が上がりそうなことは素直に喜ばしいことだった。それに何よりも、仕事の都合でなかなか会えていなかった姉と会えたことが、シズは純粹に嬉しかった。

「ユリ姉、どうしたの、急に」

「ごめんなさい、シズ、説明している暇は無いの。色々あって…、その男を急いで連れて行かなきゃいけないの」

姉から蔑ろにされたことに、むすりとシズは不満そうに頬をふくらませた。

「さっきの爆発も、理由を教えてもらっていない…。それに…、それは、誰からの御命令？」

姉を疑う訳ではないのだが、自身に下された至高の御方からの命令を軽んじる訳にはいかずシズは尋ねる。

「ごめんなさい、シズ。話すと長くなってしまふの。でも、ちゃんと解決したから、安心して頂戴。後で全て説明するわ。それから、これは独断ではなく至高なる御方からの御命令よ。モ…」

秘匿されている名前を言い掛けて、ユリはちらっと男を見る。少し悩んだ後に、彼女は咳払いして言葉を続けた。

「アインズ様からの御命令で、…えーつと、聖騎士様も納得されてるわ」

「そう…。分かった」

愛する姉が、我俣を言った妹を気遣ってくれた。そして、至高の存在からの御命令を賜ってきた。シズにとってそれは充分な、いや十二分に過ぎる理由だ。

シズはユリに手招きされドアから離れ、姉の隣に並び立つ。男は未だ何事か喚いているが、それはもう彼女にとってどうでもいいノイズにすぎない。

ユリが引き連れてきた死の騎士が、扉を開け飛び出して来た男を何の問題なく捕まえる。それを見ながら、シズは元気だなとぼんやり思っていた。俵担ぎにされた男は、まるで駄々を捏ねる子供のようだ。手足をばたつかせ、なんとか開放されようと足掻いている。

「まだこんなに元気だったのね。それに…」

男が握っていたナイフに、ユリは呆れたと溜息を零す。この男の体は、隠し武器だらけなのだろうか。

「シズ、今まで説得を続けていたなんて、頑張ったわね」

「…ん、がんばった」

よしよしと頭を撫でられ満更でもなさそうな可愛い妹に、姉もほんわかと癒やされる。

「さて、至高の御方々を御待たせする訳にはいかないわ。早く行かなくっちゃ」

少しばかり名残惜しそうにしつつ、離れようとしたユリに、最後にとシズが尋ねる。

「でも、なんで？ 説得はもういいの？」

首を傾げるシズに、ユリはちらと担ぎ上げられたまま暴れる男を見る。そして、彼女はただの事実を答えた。決定された物事を、何の感慨も挟まずに妹に教えたのだ。

「交換条件つてことに、なったのよね」

人間と、人間を。

続いた彼女のその淡々とした物言いに、その中身に、目を見開いたのは人間だけだった。

「そうなんだ」

知った事実に対して、ただそれだけをシズは返す。そうしてシズは、抱えていた業務の内一つを終わらせたのだ。その胸中にあるのは、ずっと抱えていた嫌な荷物をやっと降ろせたという安堵感のみだ。

「気を付けてね、ユリ姉」

「ありがとう。シズも気を付けてね」

大好きな優しい姉に対して心を込めた見送りの言葉を妹は送り、姉

も嬉しそうに礼を返した。そうして彼女達は微笑みあつた後に、それぞれの仕事に戻っていったのだ。

アンデッドによつて運ばれてきたスレイン法国の兵士は、怒りを忘れ歓喜に震えた。一人の兵士として、兄弟の兄として、魂を震わせて神に感謝する。

憎き敵国の王が、無警戒にも見目麗しい女のバケモノ一匹だけを共立てて戦場に立っている。その光景を男は、神より与えられた好機と受け取った。ナイフを握り締めたままの自分を縛りもせず地面に投げ捨てたアンデッドも、それを許可した自惚れの激しいバケモノ達も、自分が屠るべきなのだ。

自分こそが世界を救う存在なのだ、根拠も無い可愛らしい勘違いをする。

彼は立ち上がると、ゆつくりと身構えた。しかし、殺意を向けられる王は焦りもしない。

王の傍にいる人ではないと分かる見目の美女も、少し離れて立つ漆黒の立派な衣服を着た山羊頭も、白銀の外装だけは素晴らしい騎士も、兵士に対して恐怖するどころか興味すら向けていなかった。

それに対して今に見てろと悔しく思いつつ、男は、武技を発動させる。

「〈限界突破〉！ 〈痛覚鈍化〉！ 〈肉体向上〉！ 〈剛腕剛撃〉！」

男が重ねて武技を発動させようと、反応は何もない。その様子に歯ぎしりしつつも、己の四肢に全身全霊の力を込め、兵士は駆け出す。

「死ねえ!!バケモノがあ!!…〈斬撃〉!!」

魔導王目がけて彼は駆け抜け、跳躍し、持てる力全てを注いで斬りかかる。

真紅のマントを纏う聖騎士が挙手したことも、真紅のステッキを持つ山羊頭の悪魔が順番を譲るように手を動かしたことに、彼は気付いていない。そして、訳の分からないままに彼は吹き飛ばされた。



焦げた土の上で、人間が転がる音が派手に響く。

「たっちさん、捕まえた奴の教育ぐらいきちんとしておいてくださいよ」

「すみませんね。こっちはウルベルトさんと違って悪趣味な子がいませんから、教育とやらが出来ていなくて」

軽口を叩く聖騎士は、そう言って鞘に入ったままの剣を腰の定位置へと戻した。男が死なぬようにと配慮した彼は、抜刀せずに対処したのだ。

兵士は愕然と、切れた脛から流れる血で視界を赤く染めながらそれを見ていた。打ち付けた背中が激しく痛み、頭と視界がぐらつきながらも男は何とか立ち上がるかと試みる。口の中で、鉄錆を味わいながら。

そうして男が一人で格闘している間に、アインズ・ウール・ゴウン魔導王とお付きの女性は、その場を去ろうとしていた。

「それじゃあ、俺とアルベドは定位置に戻ります。たっちさんもウルベルトさんもゲーム終了まで後少し、頑張ってください。勿論、ルールを守りながらですが」

「ええ、当然です」

「安心してください。どっかの誰かさんよりかはルールを遵守してますよ」

その会話は男に対する警戒などなく、気の抜けたものだ。騒ぐ兵士一人など眼中に無く興味も無いのだと、露骨に告げている。

「そうだ、ゲームが終わったら神都でさっそくお茶でもしましょうか。マールが頑張ってくれて、随分と綺麗な庭園にしてくれたんです」

「それは良いですね」

「楽しみにしていますよ。お茶会ですけど、ワインの準備もあると嬉しいですね」

「はいはい、準備させておきますね」

気のおけない仲だと伝わるその長閑なやり取りを聞きながら、男はますます立ち上がる気力を失っていく。一体全体自分は、何と戦っているのだろうか。何を必死になっているのだろうか、また、視界

が揺れる。

そして、ぞくりとして顔を上げると角の生えた美女が、男を見ていた。汚らしく醜いモノを見るかのような、見下した憎悪のこもった視線で。

背中側からも何故か冷やりとした嫌な気配が漂ってきて、男は恐怖から動けなくなる。

結局、男は立ち上がることでできないままに魔導王とお付の美女が去って行くのを、ただ見送った。立ち上がることもなく、ナイフを向けることもないままに。

「……クソツ!!」

悔しさに、そして情けなさに地面を睨む男は、大地に落ちるすぐ近くの影に気づき、顔を上げる。

その視線の先には、商品の品定めをするかの如く男を見てくる二つの存在が居た。魔導王とともに去ったと思っていたのに何故か残り続けていた彼らに、男はなぜか嫌悪感を、おぞましさを感じていた。

ぞくりと、男は鳥肌を立たせる。温度の無いその視線に、更に己の足場がぐらつくのを感じて、彼は思わず怯んでしまう。自分が泣きだしそうな顔をしていることを、男は知らない。

「さてと、それじゃあソイツは約束通り俺が貰って行きますね、たっちさん」

その人を人とは思わない横暴な物言い、そして陣地が別れているという話から男はハッと気付く。

「もしかして、お前が弟を捕まえている奴か…!？」

醜い山羊頭のバケモノを睨みつけながら男は、咄嗟に立ち上がり、問い質す。弟のことを思い出した瞬間に、彼の中から情けない感情は消え失せていた。熱い血が体を巡り、体の支配権を恐怖から取り返す。大切な弟への想いが、彼を、兄として奮い立たせていた。

「弟ねえ…、捕まって、死んだのか、食われたのか、拷問室送りになったのか、」

「っんだと…!! テメエ、許さ」

「——『平伏したまえ』」

唐突に割り込んできた命令に、為す術もなく男はまたもや地面と仲良くすることになる。土と煤に汚れきった彼の視界に、つややかな革靴と汚れ一つ無い明るいストライプ模様のズボンの裾が入ってくる。

「…ウルベルト様、…たち様、御話に割って入る無礼をどうか、お許し下さい。…しかし、一体いつまでコレに慈悲をお与えになり、自由に、勝手にさせておくつもりなのでしょうか？」

その声の主が怒っていることなど、顔を見ずとも男には理解できた。そして、先程の女が自分を何故あのような眼で見て、その後大人しく王と共に去ったかも男はやつと理解した。

忠義を捧げる王を殺そうとした存在のその不敬さに、あれは怒ったのだ。そして男の背後にいる存在達も同じ怒りを抱いていた。だから、大人しく女は去ったのだ。自分が手を下さずとも、仲間が代わりに仕事をしてくれると、よく解っていたから。

「いと尊き存在を害そうとした、己が分を弁えず偉大なるその御心と慈悲を理解できぬ愚か者がのうのうと息をしているなど……、腸が煮えくり返る思いに御座います」

怒りに満ちているのに何故か耳触りが良い不気味なその声に、男は腹の中から急激に冷えるような恐怖を感じてしまう。呼吸すら乱れ始めたことを自覚し、彼はつうつと冷や汗を流す。

「…歓迎するなら、拠点に戻ってからでも良いだろ。落ち着け、デミウルゴス」

「っ、失礼致しました。…御身の前で感情的になる醜態を晒した無礼を、お詫び申し上げます」

深々と頭を下げたデミウルゴスをウルベルトは許し、頭を上げるように促す。

場にあつた緊張感が解け、そこで男はやつとまともに息ができるようになった。そして、続いて視界に入った白銀の鎧の足元に男は眉間にしわを寄せた。その脚に、唾を吐きかけたくて堪らなかつた。

「…今なら間にあいます。行くのを止めませんか」

たつちが男に持ちかけた提案にはしかし、その相手からではなく、横から気の抜けたからかう様な返答がくる。

「たつちきーん、トレード、交換って意味、分かりますかー？」

「分かってますよ。ただ、最後に慈悲を与えたいだけです」

「だから、それが、」

「私が殺します」

その言葉には、人間も、人間ではない存在も黙ってしまおう。

「……………は？」

傍で聞いていた男は、間抜けな声を思わず口から漏らす。

騎士が吐き出したその理解不能な発言のせいで、唐突に会話が途切れたように男は感じていた。前後の意味が繋がっていない、滅茶苦茶な騎士の言葉と提案に理解が追いつかず、頭が混乱していた。

そんな男の前に堂々と恥ずかしげもなく立ち続けている聖騎士は、当たり前のことと言うかのように提案を続ける。

「この人が、この私の手を取ってくれるなら、あの女性も、そして彼女の子供も、私が、苦痛無く一瞬で殺します」

その言葉が何を意味しているのか、兵士には当然全く理解ができない。しかしそれでも、それが悍ましい事実であることは嫌でも解ることだった。

「一はひと。〇は〇と交換で、いかがですか、ウルベルトさん」

穏やかな声音で語る騎士の皮を被っただけのバケモノに対して、男は怒りと吐き気がこみ上げてくるのを感じていた。そののどろろが救いなのかと、頭がおかしいのかと、男は頭の中で何度も鎧ばかりが綺麗な聖騎士を罵る。怒りと興奮で血が頭に上り、口は開いたり閉まったりするだけで、なかなか言葉が出なかった。

「ふざけ、ふざけけん」

驚愕と怒りに文字通り言葉を失いつつ、やっとの思いで罵ろうとした男の言葉はしかし、ウルベルトの笑い声にかき消された。

愉快で仕方ないと、滑稽な劇を見たかのように、腹を抱えて彼はゲラゲラ笑う。

ひーひーと、呼吸が苦しくなるまでひとしきり笑って、ウルベルトはやっと落ちつく。そして、まだ笑いが耐えられないといった風にしつつも、ウルベルトはデミウルゴスに支配の解除を指示した。

そして、聖騎士の隣に、悪魔が並び立つ。

「はー…、たっちさんの発言でこんなに笑える日が来るとはなー。滅茶苦茶面白かったですよ、アハハッ！あー…、暫くこれで笑えるわー…」

笑いの波が去って落ち着いた様子で、しかし口角の釣り上がりはそのままに、彼は了承する。大嫌いな男が提案した愉快的救済に、その確かな慈悲深さに、にやけながら同意する。

「…良いですよ、それで。一は一に、0は0に交換しましょう」

交換条件も、ゲームのルールも、両方共に成立すると嗤うウルベルトは、次に兵士へと向き直った。

「良かったな、最期の救いだ」

その声音が優しいことに、兵士は震える。それが本当に救いだとかケモノ達が信じていることに、彼は怒りながらも、確かに怯えていた。「俺に付いて来るか、たっちさんの手を取るか、好きにしろよ」

それだけ言うと、後は勝手にしろと言わんばかりに背を向けてウルベルトは歩き始めた。たっちも、無言のままに兵士の返答を待つ。

好きな方を選べど、放置された男は、何も言えなかった。言いたいことも、罵りたいことも、叫びたい想いも山程あるはずなのに、何も言葉が出てきやしなかったのだ。

「…」

目前にあるその光景に、選択肢に、信じられない想いを抱きつつ、よろよろと男は体を持ち上げる。真っ黒になった大地と晴れ渡る青空の違和感のせいで、まるで全てが夢のように男は感じていた。

そして男は、無防備に背を向け去って行く悪魔を見た。その隣には、なぜか子供を抱えている銀の尻尾の人外がいた。

そして次に、悠然と佇み赤いマントをけぶる風にたなびかす白銀の聖騎士を見る。その傍へと歩み寄り侍るのは、人の姿をしたきつと人ではない存在。

執事が抱える気絶した女性と、メイドが抱える子供に、騎士の発言を思い出した男は顔を顰める。

『死ぬよりも酷い目に遭う』、ずっと続いていた説得の言葉も脳内で再

生まれ、男は頭の中を掻き回されているような気分だった。

救われるために死ぬと宣う一方と、その提案を愉快としつつも確かに救いだと同意するもう一方。どちらも既に、金輪際視界に入れたくないほどにおぞましい存在だ。

しかし、男は選ばなければいけなかった。そしてそれ以外に選択肢など、ありはしなかった。

「…弟を、探しに行く」

「…そうですね。それは、残念です」

聖騎士から離れ、小さくなりつつあった悪魔の背を目掛けて男は駆け出す。

「貴方も救いたかった」

本当に、心底残念だと気持ち伝わってくる、吐き気をもよおすような見送りの言葉を背中で受けながら、彼は、ただ走った。

弟の無事を、神に祈りながら。

## 純白05

神はいないのだと、女は思った。

悪魔に付いて行くことを選んだ男を悔やみながら見送り、たつち・みーは純白の馬車へと戻る。

彼が救った親子は未だ目を覚まさないまま、執事とメイドに抱えられ、人間は沈黙のままに豪華な純白の馬車へと乗り込んだ。

「一旦、近くの拠点に戻ろうか」

たつちの指示に、親子をそれぞれ抱えたセバス・チャンとユリ・アルファが頭を垂れ了承の意を口にする。そして、子供を抱き直しながらメイドが、確認のために問いかけた。

「その後は、私の方で親子の面倒を見ればよろしいでしょうか、たつち様」

申し出たユリと彼女が抱える子供、それから青褪めた顔の女を一瞥し、少し考えこんでからたつちは頷く。

「ああ、頼む。できればユリには早く本来の仕事に戻ってほしいが…、ショックを受けているだろうし、女性のユリの方がまだ怯えないだろう」

畏まりましたと、恭しく執事もメイドも再度丁寧な頭を下げる。

「親子に付き添って、問題が無ければだが、魔導国への出立の見送りまで済ませてくれ。ペストーニヤには悪いが今暫く独りで頑張ってもらおう」

今後の流れについて互いの認識の摺り合わせが終わると、聖騎士は、執事とメイドと共に己の拠点へと帰還を開始した。

馬車が動き出してからも、車内は静かな為か、親子は目覚めない。意識が本当に無いことを念の為に確認してから、たつちは力無く愚痴

を零し始めた。

「もう少しでゲームも終わりか。：説得しても、無駄だったようだな」  
「幼き頃より染み込まれた教育や思想は、一朝一夕で取り除けないかと思われませう。 たっち様に非は御座いません」

疲れた様子の主人に、世界の公式を解説するかの如く淡々と、執事は慰めの言葉を送る。それこそが正解であると、その返答に迷いは滲まない。

励ましの暖かな言葉に礼を述べ、たっちは気持ちを切り替え、決意を改め口にする。

「せめて、こちら側に居る人達にだけでも慈悲を与えよう」

「たっち様によって救われる者達は、たくさんいます」

ユリの言葉に、セバスは深く頷き、誇らしげに感極まった様子でたっちを褒めそやす。

「やはり、たっち様はモモンガ様のご友人で御座いますね。 お優しく、慈悲深い」

その言葉に対して、たっちは照れくさそうにしつつも、否定はしなかった。

喪に服すかのように静かだった馬車の旅の終着点。白陣営が拠点の一つ、問題があるスレイン法国民の最終隔離施設に使われている場所へと彼らは到着した。

中央拠点として白陣営が使っている場所に比べれば見劣りするが、それでも立派な城壁があるその小都市は、人の発する音がごっそり抜け落ちているせいか、昼間なのに不気味な雰囲気漂う場所になっていた。

アンデッドが管理する城門を抜け、石畳の道を馬車はスピードを緩めず突き進む。暫くして、今は倉庫として利用されている元は法国の金持ちの邸宅であった巨大な屋敷の前に馬車は停車した。

その屋敷を中心に、元々都市にあった建造物は一定範囲までとあることに利用する為に消されていた。その目的のため黙々と働く無数の死体が奏でる仕事の音。それだけが、そこには響いている。



そしてそこに、それ以外の音がやつと混ざる。屋敷まで続く石畳の道を、馬車から降りた者達が歩く音だ。しかしそれは暫く一定リズムで続いた後に、不意に止んだ。

セバスが馬車を降りてから数歩進んだところで、彼に抱えられた女性はその腕の中で身動きし、睫毛を震わせたからである。歩いていた聖騎士も、執事もメイドも足を止め、目覚めようとする人間を見ていた。

「…目が覚めましたか」

前の目覚めで出迎えた煤けた世界とバケモノとは違う、綺麗な青空と優しそうな人間の顔が少し心配そうに覗き込んできた事実、まず人間はホツとした。そして、老齡の、しかし皺があっても整った顔立ちの彼に支えられながら地面に立ち、これまた美しいメイドに抱かれる子供を視界に入れ、彼女ははらりと涙を一筋流す。

ああ、助かったのだと安心した女が、しかし次に視界の端に見たのは、数多のアンデッドが懸命に働く姿だった。夢か幻か見間違いかと思ひ込みたくて、彼女は思わず屋敷と反対側に顔を向けてしまう。

彼女が見たそこには、都市の中に唐突に開けた空間がぽっかりあった。そしてその空き地では、無数の墓が作られている真っ最中であった。しかもそれは、おびただしい数の死体を動く死体が片付けているという悪夢のような光景だったのだ。

死体を運ぶ鎧姿の死体と、死体を燃やす檻樓のフードを被った死体、そして炭化し人の形を保てなくなったいくつかを墓の中へと運び名前が無い墓石をたてる死体。その光景が遠くまでずらりと続く様は、質の悪い冗談のようだった。

「ひっ……」

思わず後退りした女の小さな悲鳴に首を傾げる聖騎士が、ああと彼女の視線の先に目を遣り言葉を続ける。

「申し訳ありません。ご婦人にお見せするようなものでは無かったですね。近くの拠点がここしか無かったもので……」

紳士的な口調が崩れぬことが気持ち悪いと、女は率直に感じた。その口調は優しく丁寧だが、死体に対してもそして死体を見てしまった

女の心からも遠くかけ離れた所にいると感じられる声に思えて、彼女はゾツとする。

「わたし、私と子供は、こ、殺されるのですか…!？」

「まさか！貴方達は魔導国に逆らうつもりなど無いでしょう？」

「と、当然でございます…!!」

たどたどしくも必死に答える彼女に対し聖騎士は満足そうにし、優しく頷く。

「どうぞ豊かに、健やかに、幸福な人生を送ってください。魔導国で条件付きの祝福を、聖騎士は堂々と晴れやかな蒼天の下にて宣う。

神はいないのだと、女は思った。

未来と幸福を優しく祈られながら、女は、焼ける死体を嗅いでいた。女は上手く返事もできず、しかし必死に涙を散らしながら頷く。

「それではユリ、彼女と子供の面倒を任せるよ。確認が済んで落ち着いたら、出立しよう」

「畏まりました。それでは、行きましようか」

「は、はい…」

怯える女性を引き連れ、彼女の子供を抱いたままのユリはその場を去った。墓と反対側にある屋敷内へと向かうユリを、たちは見送る。

「…特に問題は生じなさそうな様子でしたね」

「ああ、そうだな、セバス」

保護できるスレイン法国民は、あくまで何も知らぬ、魔導国に反逆の意志が無い者達だけだ。親子が何を見聞きしたのかはこれからユリが聞き取りし、その意志を確認してから魔導国への移動となる。そうでなければ救えないのは、これから先の世界の幸福のため、正義のためには仕方がないことだった。

しかしあの様子ならば、魔導国民としてこれから幸せに彼女と子供は生きていけるだろうと、その背中を見送りながらたちは心の底より安堵していた。

人間が視界から居なくなってから、たちは口を開く。ユリに任せ

た仕事以外にもその拠点にてやるべき仕事の一つあった。そして、その仕事を自ら行おうと思つてたつちは此処に来たのだ。

「……ここに捕らえている人達は既に説得済みだったな」

「仰せの通りでございます。二日ほど前にも再度説得しております」  
「それで、数は減つたか？」

たつちの問いかけに対して暗い表情をした執事は、首を横に振る。  
「申し訳ありません。バケモノが治める国の甘言になど乗らないの一点張りで、誰も理解してくださいませんでした。それに……」

続けようとした言葉を暫し言い淀んでから、執事は口を開く。

「調子に乗つた者達がモモンガ様を侮辱し始め……恥ずかしながら、説得の後半は怒りを抑えるのに精一杯で……」

「そうか……。よく堪えてくれた、セバス。ここから先は、私の仕事だ」  
会話を終えて、彼らは視界に入っている巨大なその建造物に揃つて視線を遣つた。そして、その拠点の中央にある元は神殿だった巨大な建物へと彼らは足を向ける。

当然、祈りに行くわけではない。そこは彼らにとって、頑丈で使い道のある元フランスの建造物でしかなく、ただの施設でしかないのだから。

神殿内にて元々設置されていた椅子や敷き布、彫像、そういった物をごっそり取り除かれ空になったその中央に、派手なストライプ模様のテントが一つ、まるで飾り物のようにぼつねんとあつた。とても静かな空間に設置されたそのテント内には、魔導国に服従することを拒んだフランスの者達が集められ捕らえられている。

神殿の内装と真逆に愉快な雰囲気漂わすそこに、聖騎士と執事は悠然と迷わずに足を向けた。出入り口に立っていた死の騎士がストライプ模様の布地を捲ると、その向こうに連なる黒幕のまぶす一枚目が、自動的にその身を脇に避けた。

聖騎士も執事も、黙々とテント内へと進み、黒の垂れ幕は次々と開いていく。

先程まで彼らが居た都市も、神殿内も、とても静かな空間だったが、たつちとセバスがいくつかの黒い垂れ幕の向こう側へと出ると、途端

にそこは喧騒に溢れた別世界へと変わった。

「てめえ！また来たのか!!」

「なんだ、ソイツは！そっちの騎士も魔導国の糞野郎か！」

「人間のくせに！裏切り者め！」

思い思いに過ごしていた人間達が、来訪者に気付いて一斉に騒ぎ始める。そんな人間の姿は、檻越しに見るとまるで猿のようだと、哀れみを抱きつつたつちは観察する。そして彼は、最後の忠告を静かに口にした。

「これが最後のチャンスです。今までのこと全て忘れて、魔導国の民として生きなおしてくれませんか？」

どうぞ健やかに、穏やかに、幸せに。蜜のようにどろりとした窒息しそうな甘言に、しかし人々は怒り狂う。人間の誇りとやらを燃やして否定する。それは、幸福ではないのだと。正しくないのだと。

その愚かしくも真っ直ぐな、そして輝かしく希望的な否定に、たつちは、ただ同情し、そして慈しむ。その胸中にある想いは、赤子へ向けるような複雑な想いに似ていた。

「これが、貴方方へ与えられる最期の慈悲です」

その毅然とした態度、言葉に、迷いは無い。彼はなんら躊躇なく、その腰にある剣を抜き放った。

檻の扉が、まるで貴族の一室の如く、執事によって恭しく開かれる。そうして悠然と檻の中へと入室してきた聖騎士に、殺してやろうと息巻き夢見る者達が一斉に群がった。

そして何が起きたのか、その騎士が何をしたのか人間には分からないまま、先頭に飛び出した一人の兵士の首は地面に落ちていた。少しの間を空けて、思い出したかのように、首の無い死体が崩れる。

「どうぞ、安らかな死を」

その言葉に対して、随分と穏やかな死刑宣告だと誰かが思った。

目の前で自分と似た姿形をした者達が、白銀の鎧に傷一つ付けることなく倒れ伏していく。それを見ていた騎士から一番遠くにいる凡庸なる兵士は、場違いなことに、とある出来事を思い出していた。

故郷にあつた黄色い花畑で起きた、彼の人生の転機を。

花卉の明るい黄色と、花粉、隙間からこぼれる緑の葉、そして澄み渡る高い青空と新鮮なミルクのような雲。それは故郷の者達には見慣れた平凡な光景だった。だが、旅人達は漏れなく足を止め眺めていたから、きつとそれは美しい光景だったのだろうか。

男にとって人生の別れ道となったその日も、世界は変わらずに空は青く晴れ渡り、花畑はそよ風に揺れていた。そんな日常にて、男の目に止まったのは、誰もが愛らしいと評するだろう幼い女の子。その子は花を摘んでいた。にこにこ笑いながら、何がそんなに楽しいのか、花をどンドン詰んでいた。その光景を眺めていて、花が可哀想に思えて男は声を掛けたのだ。

結果、村中の大人達から責められたのは男の方だった。

『たかが花よ！子供がすることに何を訳のわからないことを！』

『花が可哀想？はあー、頭が良い子と思ってたが、頭のネジでも外れたかね』

『いやねえ、頭が良いからって偉そうに。だいたい花なんて沢山あるじゃないの、同じのが！』

大人達に責められたまだ幼かった男は為す術もなく、女の子に謝った。訳の分からないことで責めて悪かったと。しかし、男にとって訳の分からないのは、女の子の行為の方だった。

生命をぶちぶち引き千切って殺して、遊んだ後は捨てるだけ。確かに同じ花は沢山あるし喋ったりもしない。しかしそれでも、それだけの理由で無意味に摘まれる花が可哀想だと思うのは、それ程に可笑しなことだったのだろうか。

「あぎやあ二」

聞こえてきた無様な断末魔に、男はハッと我にかえる。目の前にはあの黄色い花畑ではなく、無数の死体と鮮血の水溜りが広がっていた。

「……………ああ、そうか」

あれから学ぶ意欲が消えて特に何も考えずに流されるままに生きて、気付けばこんな所まで男は来てしまっていた。だがしかし彼は後悔していなかった。それよりも、やっと答えに辿り着いた満足感で胸

がいつばいだった。

先程のは走馬灯ではないのだと、彼は確信する。目前の光景を知っていたから、思い出しただけなのだ。

自分達に出来るのは手折られないように祈るだけ、もしその時が来たら、黙って手折られるだけ。そこには善も悪も無く、ただ純粹な力関係しかない。

探し求めていた解答を得られたことに、男は確かに満足していた。

「…貴方が最後の一人です。何か、言い残すことはありませんか？」

男は、呆然と辺りを見渡す。自分が最早最後の一人であることに驚いたのではない。騎士から、話しかけられたことに驚いたのだ。

「お、おれは、」

「はい」

「……………おれは、はなじゃ、ない」

「ん？…錯乱されているんですか？」

言葉が何の意味も成さず滅茶苦茶だったので頭を心配されたが、男はそれどころではなかった。痛烈な、迫り来る死を前に突然、生物として足掻きたくて堪らなくなったのだ。

「おつ、お願いします!!これからは魔導国の民として生き、魔導王陛下に忠誠を誓います…!!どうか、どうか…、御慈悲を!!」

恥も外聞も捨てて伏して頼む無様な男の肩に、優しく手が置かれる。

「良かった、最後の一人だけでも改心してくれてー!」

「は、はい!私めは愚かにも何も考えずに、ただ流されて、今この時まで来た身であります!今この瞬間、自身の愚かさを痛感致しました!こつ、これからは魔導王陛下、いえ魔導国に忠節を捧げさせて頂きます…!!」

「そうですか…!うんうん、これからまた人生を頑張ってください!」

「あつ、有難き御言葉…!!」

「ああ…、ただ気になるので、一応念押ししておきますね」

温和で優しい雰囲気を全く変えることなく、聖騎士は語り掛ける。

「また流されて魔導国を裏切ったら、即刻殺しに行きます。どうか俺

に、救えたと思った相手を殺させないでくださいね」

その言葉に、口角を吊り上げ男は顔を歪ませる。

男は、やっぱり自分は花なのだと思い知り、そして、真の解答を得た喜びに狂ったように笑っていた。

「は、ははっ…」

その足元を血に塗れつつも、立ち上がり、堂々と聖騎士は歩み征く。その真っ直ぐに進む背中を見送り、再度自らの意志で頭を下げながら、男は酷く安堵していた。生かされたことではなく、彼の背にて護られていることにとても安心していた。

その前に立ちはだかるものはなく、彼の背にて弱者は護られる。

その絶対なる力で全てを決定づける、ああ、その行為に名をつけるのならば——

「正義と言わずして、何と言おうや…！」

男はずっと、血溜まりの中頭を垂れながら幸せそうに笑っていた。

健康的な小麦色に日焼けした善良そうな人懐っこい笑顔の青年は、とても見覚えのある人物だった。だからこそ、たちは驚き、ユリの隣に立つ青年に声を掛けつつも、警戒する。

一仕事を終えて、ユリと合流し移動しようと思っていたたちを迎えるのは、ユリと人間の親子、そして純白の馬車だけのはずだった。しかしそこに追加で、魔導国孤児院出身の冒険者の青年と、おそらく彼が乗ってきたであろう簡素な幌馬車がそこにはあった。

何事かと警戒するたちとは反対に、一目で好印象を抱く様な人懐っこい純粋な笑顔を青年は向けてきた。とても嬉しそうに、そしてとても誇らしそうに。

「こんにちは、騎士様！突然来てしまつて、すみません！」

大きく声を張り上げ詫びる彼の隣にある馬車は、アンデッドの馬に繋がれている。たちちも一度使用したことのある魔導国営の自動循環馬車に似たその中では、たちちが保護した親子が背を丸めているのが見えた。

「色々確認したいが…、ひとまず、これはどこで手に入れたんだ？」  
「魔導王陛下の腹心と名乗る方よりお借りいたしました！」

「腹心…？」

首を傾げるたちちを見て、ユリがどのような人物だったか詳細を尋ねる。

「えっと…、全体的に黄色の服、黒い帽子…、それから、失礼な言い方なのかもしれませんが、顔は人でなく黒い点が三つあるだけの方でした！」

並べたてられた特徴と、決定打に、思わずたちちだけでなくセバスもユリも驚き、呆れた声を出した。

「それは……。いやはや…、いや、それよりも、君はよく彼と普通に対話したな」

「魔導王陛下に忠義を捧げられている御方ならば、見た目など瑣末なことです！」

「…そうか。まったく、ユリとペストーニヤの教育は本当に素晴らしいな」

唐突に至高の御方から褒められ、ユリは謙遜しつつも自慢気に微笑んでいる。崇拜する母を褒められた子も同じく、とても嬉しそうにはにかんだ。

「こちらの親子は俺が連れて行って、いつもの国境近くの保護施設に収監します！」

それは、大変有り難い申し出であった。彼がその仕事をしてくれるならば、ユリは早くに元の仕事に復帰できる。しかし何故に、このゲームにおいてアイテム管理の担当者でしかないはずの彼がわざわざ青年に接触してこのようなことを行ったのか、という疑問を抱くたちちに向けて、青年のにこやかな言葉が続く。そしてそれは、たちちの疑問に対する答えであった。

「それから、実は伝言を頼まれているんです」

「伝言？」

「はい！えっと…、『左足の件は、これでご容赦願いたい』と、言つてました！」



その言伝に、ナザリツクの者達はぎよつとする。姿は無くとも不敬なその態度に対し、それはあんまりではないかと焦りだす。しかし肝心のたっち自身は、高らかに、天を仰ぎ大笑いした。大きく笑って、一息つき、それでも笑いを零しつつ、たっちは眩く。

「…くく、まったくあの息子は、いや…、あの狂信者は、と言った方が  
良いか？」

笑うたっちに対してナザリツクの者達は内心冷や汗をかき、何も分らない青年はきよとんとしていた。

「…全てよく解つたよ。協力に感謝する」

「あつ、いえ！魔導王陛下に協力できるだけ嬉しいですよ！」

何が何だか理解せずとも、しかし役立ったら嬉しいという事実には青年はまたにっこりと笑顔になる。そうしてとても嬉しそうにしたまま青年は、馬車の中へと乗り込む。たっちが御者は要らないのかと問いかけると、アンデッドの馬は既に走るルートが規定されており、次に青年が『出発』と言えば勝手に走り始めるようになっていたのだと言う。

抜かり無いことだと、またたっちは兜の下でひっそり笑う。

「…ん？」

青年を見送ろうとしたたっちは、足で軽く蹴ってしまった何かを見遣る。足元に落ちていたそれは、小さな神の像であった。神殿で見た大きな像を精度を下げミニチュア化したようなそれを、なんとなしに拾い上げ、こちらを見ていた青年に聖騎士は問いかける。

「…君は、神を信じるか？」

「ええ、目に見える神様を！」

快活なる返事をした青年の、太陽光を受け輝く深く青いその瞳を見返して、たっちは応える。

「ああ、俺も同じだよ」

そう言つてたっち・みーは、神の像を空に放り投げ、そして、それを容易く両断した。

## 純黒05

神はいるのだと、男は思った。

悪魔に付いて行くことを選んだ男と共に、ウルベルト・アレイン・オードルは純黒の馬車へと戻る。

まるで訪ねてきた客を饗し出迎えるかの如く、その豪華な純黒の馬車にスレイン法国の兵士は乗せられる。

思いがけないその事態に、ただでさえ戸惑っていた彼は、山羊頭のバケモノからの質問にさらに瞠目する。

男が探す弟がどのような人物なのか尋ねてきた、その問い掛けに。一体何を考えているのかと訝しみつつも、しかし彼は沈黙を維持できなかった。黙っていても、大切な弟を見つけることができないからだ。

尋ねてきたのも話を聞くのも山羊頭という一番人から遠い見た目の方で、そのことに対しても男は戸惑いながらも、仕方なく語る。尻尾を除いた見た目と、幼子を抱える姿だけは人らしく思えるようなバケモノから酷く忌々しげに睨み付けられながら。自分と同じく偵察隊として任務についていた弟について。

そうして語り終えて、男は知った。彼らこそが、彼の愛する弟が率いていた部隊を捕縛していることを。

「それなら、中央拠点に戻ろうとするか、デミウルゴス」

「畏まりました。兄弟ともに、最高の饗しをさせて頂きます」

にたりと笑う一応は人のような面をした存在はやはり、全くもって人間には思えなかった。

奇妙で恐ろしい、しかし全く揺れないために快適であつた馬車の旅の終着点。そこで兵士を出迎えたのは、冒瀆的な湖上の砦であつた。生まれて初めて見るような胸くそ悪くなるその光景に、男は心の中に芽生えつつあつた甘い考えを急激に萎れさせ、初めて己の選択肢に微かな疑念を抱いた。今と未来をどこか甘く捉えていた己に対し、本当に大丈夫なのかと嫌な不安に男は今更ながら襲われる。

彼の視線の先には、法国の宗教都市が誇りにし大切にしてきた湖とその向こう側の瓦礫の山があつた。湖上には、無数の骸骨とアンデッドで築かれた砦が平然と建っている。そこに設置された派手なストライプ模様の巨大な丸型テントが幾つも並んでいる様は、この世の全てを馬鹿にしているようだ。

しかし今更、引き返せる訳もなく、男は淡々と進むバケモノ達に続いてその砦へと渋々と足を踏み入れた。

「おかえりなさいませ、ウルベルト様、デミウルゴス様。おや、そちらわ…、一体どなた様でしょうか？」

「弟を探しに来た客人だ。デミウルゴス、それはプルチネツラに預けておけ」

「畏まりました」

砦にあつたテントの内一つから現れたどう見ても人ではない白い服を赤く汚す存在に、男はぎよっとする。口調は妙に丁寧なその存在は恭しく、しかし首を傾げながらも尻尾の生えたバケモノから子供を受け取つた。

「プルチネツラ、それは俺のペットだ。少しの間、世話を頼む」  
「それはそれは！なんと恵まれた子供なのでしょう！」

心よりの祝福を、馬車の中で眠ってしまった子供へとバケモノは送る。その光景は、足元と眼前にひろがる光景と同じく、男にとつてとても気持ちの悪いことだつた。

しかし何も口には出さずに、男はまた歩み出したバケモノ達に大人しく着いていく。そうして足を進めていくうちに、男にも終着点が分かつてきた。

赤と黒の縞模様の派手なテントへと、向かっているのだと。

そのテントの黒い布地をいくつか越えた向こう側で、たとえばのような世界が広がっていても、生きてさえいれば、弟は嬉しそうにしてくれるはずだと兄は思っていた。

生きてさえいれば、兄弟ともに兵士として生きる以上ある程度の覚悟はしているが、それでもその言葉を互いに言い聞かせ合う程度の当たり前の弱さは兄弟にもあった。生きてさえいれば何とかなると、苦笑し合った弟は、きつと生きて笑ってくれると兄は信じていた。

「……………あ……、兄、貴……？」

赤黒く染まった木の床の上、椅子に打ちつけられた弟を見て兄は、感嘆の声をあげる。なぜか片目の色が違い、やつれ、酷い顔色をしているが、それでも生きている。死んでいない。

神はいるのだと、男は思った。

きつと、これから救いの手が差し伸べられるだろうと期待する兄の耳に、弟の絶望に浸された声が届く。

「なんで、」

「……ん？」

「なんで!?なんでっ、こんな所に来ちまったんだよ!!!」

戸惑いと悲痛に満ちた弟の金切り声が、兄を痛烈に出迎えた。兄は、その声に目が覚める思いで弟をひたと見詰める。

「ああ……、いや違う……。はは、さすが兄貴だ、魔導王陛下に御味方したんだな?陛下の下にいたんだ。……なあ!!そうだろう!!?そうなんだよな!?!兄貴は、俺達は、」

椅子に縫い止められたその身が血を吹き出すのすら厭わずに、絶叫し暴れようとする弟を兄は呆然と見詰める。

「俺は!!許されるんだろ!?!」

これは誰だと、兄は悲痛な疑問を抱く。口は悪くとも心根は優しくかった弟が、部下を大切にしていた弟が、自分だけの救済を心の底から求めているその無様な有り様に、兄は心が掻き毟られる気持ちであつた。

そしてその怒りを、やるせない想いを、兄は近くにいた憎き敵に、バ

ケモノへと刃を向けた。

「——『平伏したまえ』」

怒りのままに走り出した兄はしかし、悪魔の言葉に為す術無く倒れ伏した。その手から滑り落ちた短剣が、からからと虚しく板の上で鳴く。

男は苦しそうに、怒りに顔を歪ませる。そんな床に這い蹲る男を一瞥し、心底憐れみつつも、ウルベルトはそれから視線を容易く外す。

そして彼は、あまりの事態に言葉を失くす弟の前に立った。

「さて…、弟くんよ、残念ながら君の兄は先程、その魔導王陛下を殺そうとしたんだ」

ウルベルトが優しく事実を伝えると、瞳を見開き信じられない、いや信じたくないという顔を弟は晒す。そんな彼の頭上から、液体が、とくとくと細く小さな瓶から注がれる。

紫色をしたポーションをアイテムボックスより取り出したウルベルトが、傷付いたその身に降り注いだのだ。

回復薬を注がれたその肉体は、元の形状へと戻っていく。その手首から肘にかけて椅子に縫い付けるべく刺さっていた釘は再生される肉に押し出され、からんからんと床に落下していく。本来あるべきでない金の虹彩の眼球は、再生された正しい眼球に押し出され外へとはじき出された。

転がり落ちた金の虹彩を持つ目玉は、元持ち主の太ももに落ちて転がり、そして地面に落下した。

傷を癒やされ今はただ椅子に腰掛けるだけの男は、それを正しく眼窩に収まった自分の両目でぼんやり追う。そして、地面に落ちたそれが、悪魔の蹄に無意味に踏み潰されるのを、ただ見ていた。

健康な肉体を取り戻した兵士は顔を上げ、そして何もしない。

何も行動を起こさない弟を見て、兄は絶望する。

「お、おいー何をしているんだ!？」

ただ座っていないで、立ち上がり落ちている剣を拾わないかと責める兄の声を、弟は無視する。彼は狂ったように、ただ悪魔を見詰めていた。目前の視認できる恐怖に指示されなければ最早、己の一挙一

動、瞬きすらも自信を持って彼は行えないからだ。自身の身体を悪魔の許可も得ずに微かに動かすことすら、彼には恐ろしくて堪らないのだ。

「…デミウルゴス、斧を」

「畏まりました、ウルベルト様」

恭しく持つて来られたその斧は既に使い込まれており、赤黒く染まっている。それが、椅子に座るだけの弟の直ぐ横の床に突き刺さった。

「兄の指を切り落とせ」

さすがに目を見開いた弟の、左眼孔の皮膚と肉の下にある骨の縁を、爪先でそつと悪魔がなぞる。

「支配はしない。君の意志で兄の指を切り落とせ。勿論、兄の首を切り落としてやり一瞬で楽にしてやる選択肢もある。ただしその時は、」

一拍置いて告げられた言葉は、人間の心にとどめを刺し、支配するのには十分な言葉であった。

「今までのこと全て、ただのお遊びだったのだと思えるほどの歓待を、未来永劫に与えることを私が約束しよう」

悪魔の爪先が微かに赤い液を纏いながら、離れてゆく。それを見送り、悪魔が数歩下がった所で、弟はやつと、ふらふらと立ち上がった。

周りを見渡して地獄を眺め、地獄に相応しい斧を見詰め、その向こうで床に伏す愛しかった兄を、彼は見た。

「——『指を広げ、弟が切り落としやすいようにしてやり給え』」

「なつ…、やめろ！おいおいおい、なあ、おい、違うだろ、お前が、」

「なんで、こんなところに、来ちまったんだよお、…兄貴い」

その涙を耐える声に兄は、口を閉ざした。いや、掛ける言葉を失い何も言えなくなったのだ。

死をもって救うと言った白銀の騎士が、彼の脳裏に過る。あれは本当に、心からの憐れみであり、確かな救済だったのだと、やつと男は知った。

弟は、斧を掴む。重たいそれを引き摺り、兄の前まで来ると、しつ

かりとその両手で握りしめ、構えた。

その斧を使い行える正しいことを、彼は知っているし理解している。だがしかし、正しいと思いい進んだ果ての終着がここならば、正しさには一体、何の意味があるというのだろうか。そんな疑念が、兄を見詰める弟の頭にはこびりついていた。

「……………ごめん、なさい……」

子供のするような弱く単調な謝罪の後に、雫が落下した。その雫が赤いのか透明なのか、兄には分からなかった。ただ、落下してくるその刃が、どこに着地をするのかだけを、苦々しい真実として、ただ呑み込んでいた。

そして、愛しい弟に指を切り落とされた兄の悲痛なる絶叫が、テント内に響き渡った。

暫しの静寂後、拍手がテントの中で響く。その音源へと振り返った弟は、拍手を送ってくれたウルベルトに向き直ると、たどたどしく頭を下げた。

「デミウルゴス！氷結牢獄にこの二人を送れ。ただし弟は今後拷問は一切なしだ」

その言葉に、弟は歪に顔を綻ばせた。救われたという甘美なる事実が、その口角を自然と釣り上げていた。

「特別に普通の人間が問題なく過ごせる一室を用意して、そこにに入れておけ。そっちの兄は魔導王陛下を殺そうとしたんだ、死なないうように気を付けて拷問してやれ。最後に、」

痛みが訪れることはもう無いのだと知って緩んでしまっていた弟の頬はしかし、次の言葉によつて一気に引き攣り、ひくりと痙攣する。「弟の部屋に、必ず兄の絶叫が届くように気を付けろと念押ししておけ」

「畏まりました！ああ、流石はウルベルト様…、下等生物の兄弟のためにそこまで考えてくださるとは、なんと、ああ、なんと御優しい方なのでしょう……！」

瞠目する弟は、落ちていた兄の剣を視界に入れて直ぐにそれに飛びつく。しかし今更、悪魔を倒そうなどと思えない彼が選択したのは、

自死であった。

「——『手を止めたまえ』。全く、ウルベルト様からのせつかくの恩赦を何だと思っっているのか……」

兄の剣で自らの喉を斬り裂こうとしていた弟の直ぐ側に、ゆらりと悪魔が近寄り、そしてそつと、彼に囁く。

「暫くしたら、兄の悲鳴を聞きながらやすやすや眠れるようになるさ」

優しいその声音は、彼の魂に直接響いたようだった。壊れたように涙が止まらず、ただ只管に血液を送る自身の心臓が、彼は憎たらしくて堪らなかった。

「幸福に生きろ、弟くん」

兵士として生きてきた彼はやっと理解した。今まで逃げてきた、恐れてきた、死。しかしあれこそが最大の慈悲であり、紛うことなく神の愛だったのだと。

「ああ、これが、」

その足元を血に塗れさせつつも、華々しく悪魔は確かに目の前に居た。その爪をふるい歪に悲鳴を奏でるその背には、祝福する生者はおらず幸福そうな死者が転がるばかりだ。

その前に立ちほだかるものはなく、彼の背にて生者は世界と神を呪う。

その絶対なる力で生きる美しさを否定する、ああ、その行為に名をつけるのならば——

「……………悪」

小さく零したその言葉に対し、バケモノが呆れたように笑ったような気がした。

こんなもので良いだろうかと、ウルベルトは思案する。

指を切り落とされた男も、涙を流して呆然とする男も、テントの中でかろうじて命の灯火を抱く者達も、全て殺そうとウルベルトは最初



から決めてそこを訪れていた。ただ、ある一定の、ウルベルトが敵対したのでも心変わりしたのでも方針を変えたのでもないポーズは、どうしても必要だった。

そのため、先程に兄弟達へ与えられたものは慈悲が下るまでの罰、煉獄のようなものだ。

これ程のことをしておけば、殺してもそこまで不満はあるまい。階層守護者達の前でモモンガを殺そうとした罪は、これで終わりの良いだろうと思案し、一仕事終えた気持ちのウルベルトの耳に、聞こえるはずのない声が届く。

「あつ、ううーあ、」

「…ん？」

「騒がしいですね…」

デミウルゴスが非常に不愉快そうに、苛立たしげに呟くのと同時に、黒い布地が捲れ、暴れる子供を抱えるプルチネツラが飛び込んで来た。

「え、なんで、」

「どうしたんだ、プルチネツラ」

「一体何事ですか」

「ウ、ウルベルト様！デミウルゴス様！大変申し訳ありません…！目が覚めてからペットが暴れっぱなしで、私では手に負えず！」

くすくす微笑ってウルベルトはプルチネツラに近寄り、必死に悪魔へ手をのばしてくる子供を受け取った。そして振り返り、眉間に皺を寄せて不愉快そうにするデミウルゴスに対し、肩をすくめる。

「デミウルゴス、仲間を睨むな。そもそも、騾も終わらせてないペットを預けた俺が悪い話だろう」

ウルベルトの言葉に、気不味そうにデミウルゴスは顔から表情を引つ込め謝罪し、役目を全うできなかつたことに負い目を感じていたプルチネツラはなんと御優しいことかと震え声で感謝を述べた。

「…それで、お前はこいつのことを知っているのか？」

ウルベルトは振り返り、自殺に失敗してぼんやりしていた男に問いかける。人間が思わず漏らしただけの独り言を、悪魔は耳聴く聞いて

いたのだ。

その問いかけに答ええない選択肢など持ち合わせていない兄の指を切り落とした弟は、怯えながらもこくりと頷く。

「み、見世物小屋で見たことが、ま、ま、前に、一回だけ」

「ああ…、成る程」

あの廃村においてこれは貴重な収入源だったのかと、ウルベルトは家畜が飼われていた理由を知り納得する。

「それで、なんでつていうのは、どういう意味だ」

その問いかけに対しては、彼は言い淀んだ。しかし人間の沈黙に意味など無い。悪魔が支配し、問いかければ、その口は容易く開かれる。

沈黙を貫くことによる無罪判決も、有罪判決も、そこには存在しなかった。悪魔が支配し問い掛け、彼は嘘偽り無く全てを吐露する。

「な、んで、そんなのがつ、救われて、俺達は救われないんだ!」

そのつまらない返答を聞き届け、ウルベルトは男を殺した。

それは一分にも満たない動作だった。落ちていた斧を片手で拾い上げ、持ち上げ、滑らかに振り下ろす。ただそれだけの行為だった。そうして酷くあっさり、その首と胴体を、片手で軽く振り下ろした斧一つでウルベルトは切り離し、その生命を終わらせた。淡々と、吹き上がり己と子供に掛かる血飛沫にすら大したりアクションもせず

に。随分あっさりと弟が死んだのを見た兄は、何が起きたか理解できずに啞然としていた。壊れたように、おそろくたった今死んだ弟の名前であろう名称を呟く指の無い彼に、赤い血が滴る斧を持つウルベルトは優しく語り掛ける。その肩の重苦しい荷を、下ろしてやろうとするかのように。とても、気遣わしげに。

「安心しろ。お前たち人間の死は無駄にしない。その死体を有効利用するという意味でも、お前たちの意志を継ぐという意味でもだ」

「……意志を継ぐ、だと…」

ウルベルトの言葉に反応し、顔を持ち上げた彼は、潤んだ瞳の中に悪魔を映した。

「ああ、そうだ。お前たちが望む人間の存続と繁栄の意志は継いでや

る。まあ正確には…、幸せになるのは人間だけではないけどな。…人間も、幸せになれる。それで良いだろう」

人間ではない存在が、人間を支配する。そして繁栄も約束すると、その人間を容易く嬲り殺した存在が、言う。その目前にある事実にも、今まで見た全てに、男は怖気が走った。

「お前たちには決してできない支配だ。未来永劫に幸福のまま、生きて死ぬ。俺達が管理する世界で。…素晴らしいだろう?」

「そ、それは違う! 違うだろ!!」

自身に言い聞かせるようにも男は叫ぶ。否定しなくてはならぬという、ただそれだけの理由のない義務感による必死な想いで。

「人間には可能性がある!! よりよい世界を創ろうと弱小種族でも頑張ってきた! なっ、なぜ、そんなにも否定する!?! 可能性を! 未来を! まるで見えてきたかのように!!」

叫びながら、男はやつと答えを見つけた。目前の存在に対する気持ち悪さと不愉快と、怒りを感じる原因を。

それは否定だ。目前の存在は、全てをまず否定している。失望し、見限り、諦めているのだ。こちら側に対してバケモノは、欠片も、何も、全く期待などしていない。始めから終わりまでの、全て、人間に何かできるなど思っていないのだ。

「…全部、見てきたんだよ。だから、俺達が支配者として相応しいんだ」

バケモノのその断言に、男が叫ぶ美しき理想が入り込む余地は、無かった。

「苦しいだろ、人間。…今、楽にしてやるよ」

子供を片腕に抱えたまま、振り下ろす為に斧を持ち上げるバケモノを見詰めながら、しかし、確かに男はその声に人間らしさと深い慈しみの心を感じた。そんな自身に対し、ああ自分は狂ったのだなと思いつながら、男は疲れを感じ、諦めて、瞼を閉じる。まるで祈るように。

「…お前もどこかで、強くてニューゲーム、できるといいな」

からかうような、意味がよく分からないその言葉が、男に送られた最後の見送りの言葉であった。そうしてまた、振り下ろされた斧が、

首と胴体を切り離し生命を一つ終わらせた。

ウルベルトの手から離れた斧が、血飛沫を散らしながら床に落下する。やかましい金属音が響きわたった。

片腕に抱え込まれた子供は、体にかかった血飛沫も気にせず無垢なる瞳のまま悪魔を見つめ、その衣服に縋るようにしがみついていた。

「…いや、それもしんどいか」

独り言を零し、そしてウルベルトは、赤と黒の縞模様のテント内に残っている人間全ての殺害を命じた。殺し尽くし、燃やし尽くし、湖の底へと沈めると、決定事項を命令する。

至高の存在の御言葉に対し当然、反対する存在はいない。恭しく頭を垂れ了承し、仕事へと悪魔とモンスターは取り掛かり始める。

そうして、そこに居る人間が死んでいくのを、最後の一人が息絶えるまでウルベルトは見守った。全ての人間が死体になったのを確認し終わると彼はテントの中に火を放ち、そして暫しの間だけ死体を燃やす炎を眺め、無言のままに退室する。

生きる死体で構築された湖上の砦にて、腕に抱く子供とともに燃え盛るテントを眺めるウルベルトに、彼が創造した悪魔が語り掛けてくる。

「やはりウルベルト様はモモンガ様のご友人で御座いますね。お優しく、慈悲深い」

感銘したと涙ぐむ息子に苦笑しつつ、ウルベルトは否定する。

「いや、違うんだ、デミウルゴス。俺はただ…、あれを、火葬したかっただけだ」

そう語り、炎を眺めるウルベルトの耳に、もはや聞き慣れた、言語として成されていない音が届く。

「あ、うっ、」

燃え盛る炎から散る火花を見詰めるウルベルトに向かい、子供は無邪気に手を伸ばしていた。

「…お前は、神を信じるか？」

問いかける彼に対して、子供はきよとんとした表情のまま首を傾げるばかりだ。炎の灯りを受け、光をチラつかせる緑色の瞳を、ウルベ

ルトは、真っ直ぐ見つめ返した。

そして彼は、ひっそりと何も言わぬ子供に返事する。

「ああ、俺も同じだよ」

そう言っつてウルベルト・アレイン・オードルは、歪んだ笑みをその悪魔の顔に浮かばせた。

SUPERBIA GULA INVIEDI  
A 3

小さなその身をさらに縮こませて、子供達は草むらの中を移動していた。周囲を警戒しながら、未知を知る為に危険を顧みずに前へと進む彼らは、小さな冒険者である。

彼らの心は、不安と、それ以上のどこからかわき上がる高揚感に支配されている。その高ぶる気持ちは、彼らの鼓動を早めさせていた。「……ねえ、やっぱりやめない?」

そよ風に紛れ込みそうな声が、先頭をずんずん行く友にこわごとと問いかける。雲一つ無い晴天だけが原因ではない汗を拭う子は、不安そうな顔を晒していた。

「今さら臆病風に吹かれたか! 未知はもう目の前だぞ!」

伝説の勇者であるモモンの真似をして声を荒げたわんぱくそうな子を、その隣にいる蜥蜴人の子が慌てた様子で注意する。

「シーツ! 大声を出さないで。立入禁止区域にもう入ってるのよっ」

「あ、やべ……」

「ねえー、やっぱり帰ろうよお……。見つかったら怒られちゃうし、それに、法国の人間なんて怖いよ……。きつと魔導国民の僕達を見つけたら酷いことしてくるんだよ、うう」

「いや、それを言うならお前よりも蜥蜴人のこいつの方が怖がるべきだろ」

気の弱い友の発言に、さすがに呆れたといった風に男の子は返す。情けない声を出していた彼も、言われてみればその通りだと亜人種の友に怖くないのかと問いかけてみる。

しかし蜥蜴人の彼女は平然と、怖くなどないと答えてみせたのだっ

た。

「きつと平気よ。そういうった危ない人達はもういないって話だったじゃない。ここにはもう、私達と同じ魔導国民として生きていく人達しかいないのよ」

「そ、そうかもしれないけど……」

それでも怖いと小さく呟く気弱な友の手を、鱗に覆われた手が励ますために握り締める。

「いつか私達、冒険者になるんでしょう？　なら、勇気と好奇心を持たなきゃ！」

「……そう、だね。……ごめん、ありがとう」

「それより、ほら、早く行こうぜ！あつちに建物が見える！」

「ほら、行きましよう！」

「う、うん……！」

先に勝手に進んでいた男の子の呼び掛けに、蜥蜴人も人間も好奇心を隠せない表情へと変わる。そうして、アインズ・ウール・ゴウン魔導国の無垢な子供達は、仲良く走り始めたのだ。

その小さな後ろ姿を、不可視の存在がじっと見つめていることなど、知らぬままに。

魔導国と、今は亡国となったスレイン法国との間にかつて存在した国境線。それを跨ぐ平野にて、その造りかけの街は存在した。

建築途中の建物や道が沢山あり、街をぐるりと囲む長い壁も未完成。だが、いずれ来る繁栄を匂わせる程に、そこはとても賑やかで活気がある場所であった。

その賑やかな場所は、魔導国が保護した法国民の一部の者達が新たに暮らし始めた大きな街である。

そこでは、沢山の人間と山小人、そしてゴーレムやアンデッドが街の完成を目指し一丸となって、せっせと働いていた。

建造することに秀でた才能がある者達と力は無いが計算はできる人間、そして彼らを支える単純な労働力が無数にいる光景。それは忍び込んだ魔導国の子供達にとってはごく当たり前の、見慣れた光景

だ。だがしかし、彼らが知るそれとは少しばかり違う所もあった。

それは、人間の表情だ。

人間ではない存在に対して、どの人間もビクつきながら、まるで油断すれば食べられてしまうかのように怯えた顔をしていた。

その怯えた表情を遠目に眺め、物珍しく思いながら、子供達は草むらや積まれた物資の裏に潜んで街の奥へと進んでいく。

暫くして、資材置き場らしき誰もいない開けた場所に到達したため、魔導国の子供達は物陰で一息つくことにした。

とても大きな丸太やレンガの山がいくつも置かれた静かな場所の奥、丸太の山の後ろにて地面に腰掛け、彼らはお喋りを始める。

先程見た景色や、どこまで忍び込もうか、それとも帰ろうかという話から、なんだかお腹が空いたなという雑談までとりとめなく話して、そして、蜥蜴人が、そういうえぼと切り出した。

「お父さんとお母さんがお役人様と話しているのを聞いたのだけだね、ふふ…」

何やらもつたいぶる彼女の言葉を催促する子供達は、続いた言葉に目を見開き興奮する。

「スレイン法国があった所に、冒険者のためのおっきな都市ができるんですって！」

「ぼ、冒険者のため？」

「何だそれ、スゲーじゃん！」

確か、南東にある法国の城を元に造り直すって言ってたわと語る彼女の言葉に、冒険者を夢見る子供達はキラキラと瞳を輝かせて聞き入る。

「それにね、なんでも魔導王陛下の御側付きの騎士様が、そのお城に住みたいなの」

「へえー、そいつはすげえな！」

「魔導王陛下の御側付きなんて、すっごく強いんだろなあ…！」

「きつとアダマンタイトの強さよね！」

「俺もなりてえなあ！アダマンタイトの冒険者！」

「……なにしてるの？」



話に夢中になっていたところに不意に現れた第三者の声に、子供達は慌てて振り向く。

彼らが視線を遣った先では、彼らより一つか二つ下と思われる齢の幼子が、ぽかんとした顔をして立っていた。その手に、少し萎れた白や黄色の花をいくつも握り締めながら。

見つかってしまったことに慌てふためく彼らを見無視して、人見知りをしていない質なのか、幼子は平然と近付いてくる。

「あのね、お母さんが元氣ないから、お花をあげるの。でも、花を輪っかにしたいのに、できないの」

その困り顔を見て、彼らの中で一番氣弱で、そして一番指先が器用な子供に蜥蜴人と人間の注目が集まる。

「あつ、えつと、貸してみて」

幼いながらに一生懸命なんとかしようとしたのであろうが、草臥れただけで花冠にはなっていない無数の花を彼は小さな手から受け取る。そして、受け取った花束を器用に編み込んで花冠へと仕上げていった。

花々が綺麗な輪になっていくのを見て、眉を八の字にしていた幼子はみるみる顔を明るくさせた。

「貴方のお母さん、病氣なの？」

「わかんない。ご飯沢山食べられるのに、なんだかお母さん、ずっと元氣無いんだ」

「なんだそれ？ 何かあったのか？」

「お母さんは何でもないってしか、言わないの」

「何か怖いものでも見ちやったのかな？」

「僕は何も見えてないけどなあ。すごく優しいお兄ちゃんが、馬車の中でずっと遊んでくれて楽しかったし……」

「へえー！」

幼子の言では細かなことはよく分からないが、やはり魔導王陛下はお優しい方なのだ、話を聞いて魔導国の子供達は誇りに思った。

敵である法国民を救うために魔導国の冒険者達を沢山雇ったという話は、幼い彼らでも知っている。だから遊んでくれたお兄ちゃん

いうのも、きつと魔導国の冒険者のことであろうと子供達は考えたのだ。

「……貴方達、何してるの?」

自分達が憧れ目指す者の話を子供達がもつと催促しようとした瞬間、またもや知らぬ第三者の声が不意に現れ、完成していく花輪とお喋りに夢中になっていた子供達は驚いて振り返る。

「あつ、お母さん」

線の細い女性は、自身を守るかのように厚手の布でぎゅつとその身を包みながら子供達の様子を少し離れた所から窺っていた。

魔導国の子供達は大人に見つかってしまったと、かたまってしまふ。だが、完成した花輪を手にした幼子は母の元へと無邪気な笑顔で駆け寄って行った。

「ほら、かんむり!作ってもらったの!お母さんにあげる!」

「……そう、だったの。……貴方達は、魔導国の子供達よね?」

ちらと、蜥蜴人を一瞥して女は尋ねた。

それに、こくりと魔導国の子供達は頷く。

女はじつと魔導国の子供達を見つめ、そして自身の子に目を遣り、その頭を安心させるように撫でてから、魔導国の子供達へと再度視線を遣った。

「………貴方達は、魔導国に生まれて、幸せ?」

母親の問いかけに、魔導国の子供達は暫し呆けた後に、眉間に皺を寄せる。

「幸せに決まってるじゃない!」

「そうだぜ!」

「ど、どうして、そんなこと聞くの?」

戸惑いと、子供ながらも侮辱されたと感じた彼らからの返答に、女は苦笑する。そして、独り言を零す。

「そうよね。貴方達は、祝福されているものね」

少し離れた距離で立っていた女は、魔導国の子供達に自ら歩み寄りに行く。戸惑いつつも、どうして良いか分からぬ子供達はその場に足を縫い止めたまま、近づいて来る彼女をただ見ていた。そして彼女

は、その膝を地面に自らついて視線を小さな彼らと合わせると、また  
儂げに微笑んだのだ。

「花冠を、ありがとう。……私も、魔導国の民になれて幸せよ」

何やら含みのある言い方だったが、無垢な子供達がそれを汲み取れる訳もない。子供達はただ素直に、心底嬉しそうに、おめでとうと心よりの祝福を微笑む彼女に送るだけであった。

そうして彼女は、少しくたびれた花の冠を頭にして、子供を引き連れて帰っていった。

魔導国の子供達は、とても良いことをした気分で、その後姿を見送った。

それから資材置き場から移動して、次に魔導国の子供達が見つけたそこは綺麗な広場だった。

白いタイルが敷き詰められ、中央には簡素な噴水が設置されている。そこは、屋根付の木製の長机と椅子がいくつか準備されている。おそらくは休憩所の一つと思われるそこには、中途半端な時間帯故か、たった一つの人影しかいなかった。

そして、そこに居たのは、綺麗で明るいその場の雰囲気にとぐわな  
い、随分と陰鬱な男であった。

その独りの男は、噴水を睨みつけられる場所にぽつんと設置されたベンチに腰掛け、子供達が進もうとしている茂みには背を向けている。

少し悩んだ後、結局子供達はその男の背後をこっそりと進むことにした。

「俺は、なんで生きているのだろう……」

ぶつぶつと呟く男を気味悪く思いながら、子供たちは足音を殺して進む。

「国が減ぶきっかけを作って……」

声は若い風なのに、項垂れたその姿は草臥れた老人のような男の独り言は続く。

「……俺が、あの時、上官殿をお止めしていれば、良かったのか」

ぶつぶつと呟き続けるその男を少し哀れにも思いながら、子供たち

はそこを立ち去った。

暫く歩いて、とても小さな小屋を見つけた彼らは、そこに入り込んだ。

「……物置、みたいね」

掃除道具などが仕舞われているそこは、灯りもなく薄暗く、砂埃の舞うあまり綺麗な場所ではない。鍵がかかっているのではなく、どうやら鍵をかけるまでもないような場所らしかった。

「勝手に入って大丈夫かな？ み、見つからないかな？」

「へーきだつて！」

根拠の無い自信に溢れた男の子の言葉と同時に、ギイと扉が開いて彼らはぎくりとする。

「あー、なにしえ、う、の？」

よろよろと妙に危なっかしい足取りの細いシルエットの子供が、出入り口にてドアにもたれ掛かりながらそこにいた。

また見つかってしまったことに子供達は焦るも、出入り口は一つしかなく、どうしたものかと焦るばかりだ。ひとまず逃げようと彼らが口にした時、出入り口にいた細身の子が唐突にぐらりと前に倒れた。

その倒れた身が硬い床にぶつからぬように、優しい蜥蜴人の女の子は咄嗟に飛び出し、その細い体を抱きとめる。そして蜥蜴人の女の子は、その危なっかしさの原因、痩せぎすの子の片足の膝から下の代わりとなっている白い義足に気がつく。

「あなた、うまく歩けないの？」

「う、だーら、はごう、もあつた！」

「……は、う？」

にこにこ笑う子供の言葉が理解できずに、子供たちは顔を見合わせ、ひとまず、開きっぱなしになっていたドアを閉める為にも子供達はその不思議な雰囲気義足の子の側に近寄った。

「ん？ お、ソイツ、指が六本あるぞー！」

ドアを閉め、目について気が付いたことを男の子は大声を出して叫んだ。しかしそれは、嫌悪感からくる叫びでなく、珍しいものを見た時の驚嘆のそれであった。

「うっ？」

首を傾げながら義足の子が差し出してきた六本指の手の隣に、五本指の手が並ぶ。

「ほら、五本なのよ、私達」

「そ、そんなに指があつたら、とても器用そうだね」

「いや、それは関係ないだろ」

「関係ないと思うわよ」

「う！」

最後に、おそらくは意味もよく分からないままに声をあげた不思議な子に、笑い声があがる。

けらけら笑い合う子供たちは床に座り込むと、ほらと互いの手を差し出して見比べてみる。薄暗く、小窓から差し込む日光だけが頼りでも、その違いというものは意外とよく分かるものだった。

蒼白い肌と、鱗の光る肌、よく日にやけた擦り傷だらけの肌に、少し湿疹のある肌。子供達はただ純粋な好奇心から、自分とは違うそれを観察していた。

「そういえば、うまく歩けないみたいなのにここまで一人で来たの？」

気がない場所を選んできたので疑問に感じたりザードマンの女の子が問うと、瘦せぎすの子供はきよろきよろと何かを探すように辺りを見渡し始めた。

「えーと、えーとー！」

何も無い虚空に向かって、まるで何かを呼んでるように声を掛けるその姿に、子供達は首を傾げる。

そんな彼らが瞬きをした次の瞬間、とても大きな蜘蛛のようなモンスターが視界に現れた。

瞳を妖しく光らせるそのモンスターは、前触れもなく義足の子の隣に、当たり前のように現れたのだ。

呆然とし沈黙した後、我に返った子供達は揃って大きな悲鳴を上げる。

「「ぎゃあああああ!!」「」

吃驚した子供達は思わず、何も考えずに小屋から飛び出して一斉に

走って逃げ出した。その後姿を、ぽかんとした表情の義足の子に見られているとは知らずに。

無我夢中で走って走って走って、走れなくなるまで魔導国の子供達は走り続けた。そうして限界を迎えて立ち止まり、息を整えると、別の問題にぶつかってパニックを起こしてしまう。

「どどど、どうしよう！ お、お、置いてきちやった！」

冒険者を目指す心根の優しい彼らにとって、モンスターがいる所に義足の子を置いて逃げるなど許されることではない。半泣きの彼に、しかし冷静な蜥蜴人の彼女は反論する。

「おっ、落ち着いて！ きつと大丈夫よ！ だってあの子が呼んだら来たじゃない、アレは！」

「……あれ!? ちょっと待て！ それじゃあアイツ、何者なんだ!?

法国のやつじゃないだろ!？」

「……やだ、嘘。もしかして、魔導王陛下の、いえ、魔導国のお役人様とかの、関係者なの!? 私達が勝手にここに来たことバレちゃうの!？」

蜥蜴人の発言に、子供達はみるみる顔を青褪めさせていく。

「は、早くお家に帰ろうよ！早く、」

「君たちが、立入禁止区域に入り込んだ魔導国の子供達かな？」

「またもや、第三者の、今度は妙に耳障りの良い声が、彼らの会話に割って入ってきた。」

小さな悲鳴を漏らし青ざめた子供達が振り返ると、派手な色合いのストライプ模様のスーツを着こなす、銀の尻尾を持つ男がそこにはいなかった。

建築途中の城近くに設えられたその真っ赤な巨大なテントは、その警備の厳重さと掲げられた巨大な幾つもの御旗から、誰が来訪しているのかよく分かるものだった。

そのテント内は、外側からは想定できない広さと、豪華さと明るさに満ちた場所であった。床はチェス盤のような黒と白の市松模様の上質な毛並みの良い絨毯が敷かれ、中央では永続光によって自ら輝く

ような白銀のシャンデリアが吊るされている。

その煌めくシャンデリアの下にて、大理石でできた重厚な円卓を囲む異形達はいた。

「冒険者の階級による割引制度は良いですが、偽装や虚偽発覚時の罰則も考えないといけませんね」

ウルベルト・アレイン・オードルの発言に、書類を捲る手を止めて聖騎士はとても悲しそうに溜息を吐く。

「残念ながら、そういった人達は少なからずいるでしょうからね。ところでこの、冒険者訓練プログラムですが、実戦だけではなく技術的なことも学べるようにした方が良いと思います」

別の書類を見ていた死の支配者は、たち・みーから指摘された書類を手に取り中を見て同意する。

「言われてみれば……、他の都市の冒険者組合でやってる実戦訓練を広く大きくしたただけですね、これ。そういった+αも考えないとですねえ」

モモンガの発言に、書記官の手が素早く動いていく。その筆記音をBGMに、彼らはまた書類を捲り目を通していく。

現場の視察と、現場から提出された今後の計画の確認。それが本日の彼らの仕事である。

遊び終わった後のゲーム盤もきちんと有効活用すべく、法国跡地には冒険者の為の城塞都市が造られる予定になっている。現在造りかけとなっている街を足掛かりに、かなり巨大なものを数年を掛けて建造する予定だ。

ちりんとベルが鳴る音がして、真面目に話し合っていた彼らは一旦手を止める。それは来訪者の合図だった。

死の騎士が、出入り口の垂れ幕を開く。開かれたそこから、コートを翻し軍靴の底を綺麗に鳴らしながら、その名前の如く役者のように領域守護者が入ってくる。

「只今戻りました、たち様。ご報告が御座います。申し上げてもよろしいでしょうか？」

二重の影に名を呼ばれたたちと、モモンガとウルベルトが、些細

な任務から大仰に帰還したパンドラス・アクターに視線を移す。

「ありがとう、パンドラス・アクター。報告してくれ。彼らは今どこに？」

「はっ。ちょうど人気のない林におりましたので、デミウルゴス殿が現在、件の侵入者の動きをそこで止めております」

その報告に、大して興味もなさそうにモモンガとウルベルトは緩慢に反応する。

魔導国の子供達が侵入したことは、不可視化が使える見張り役の下僕達から彼らが侵入した時点で報告され、ナザリックの者達は全員が把握していることだ。そしてモモンガとウルベルトは、その小さな侵入者達に対して興味を示すことも警戒することもなかった。

なにせ、面倒なトラブルが起きぬようにという配慮の為だけの立入禁止だ。落ち着いたら自由な出入りが許される街に、特段見聞きされて困るものなど当然何一つ無い。

しかし、たつちは何故か小さな罪人達を迎えに行くようにと指示を出したのだ。しかも、よりによって指示を出した相手は、パンドラス・アクターとデミウルゴスだった。

今日は妙に大人しい自称息子に、モモンガは視線を遣る。そして、やはり子供の出迎えには向いていないメンバーだなと内心独り言ちた。

「ただの造りかけの街が広がるだけの光景を見れば早々に帰るかと思っただけだな」

「子供は好奇心が強いですからね」

「その言葉の意味、最近よく分かりましたよ」

モモンガが頬杖をつきながら述べた感想に、同じく緊張感の無い意見と雑談が返ってくる。

「……それで、たつちさん、子供達を彼らに迎えに行かせたのはなぜですか？わざわざ捕まえないでも、何も問題は無かったと思いますが」  
「魔導国の子供達と、少し話しをしてみたいなと思いましたが」

たつちの言葉に、モモンガは少し考えてから、ウルベルトへと顔を向けた。



「たしかに、滅多に無い機会ですね。良いですか、ウルベルトさん」  
構わないと、ウルベルトはどうでも良さそうに答える。

「パンドラズ・アクター達は…」

「下がらせなくても良いでしょう、この国の子供達なら、きつと何も気にしませんよ。それに、下がる気も無さそうですし」

たつちの言葉に、パンドラズ・アクターは恭しく頭を下げ朗々と言葉を紡ぐ。

「モモンガ様のお傍から離れることなど有り得ぬこと。しかし、モモンガ様が望まれるならば、話は別に御座いますよ、たつち様。モモンガ様が望まれるならば、私は全てに耐え、全てに応えてご覧に入れますよう」

「……本当に、父親想いの良い息子だなあ」

「たつちさん、パンドラをこれ以上からかうのは性格が悪いですよ。それに、パンドラはパンドラなりに、たつちさんに応えているじゃないですか」

「そうですね……。すまなかった。許してくれ、パンドラズ・アクター」

たつちの言葉に、パンドラズ・アクターは首を横に振り、頭を垂れたままに応える。

「貴方様が謝罪されることなど、何一つ御座いません。それでは、御方が望まれるままに、子供達をここに連れて参りましょう」

そう言って、パンドラズ・アクターは優雅な一礼を披露した後、外へと出て行った。

その背が見えなくなり、垂れ幕が下がったところで、モモンガは先程に追求できなかったことを追求する。

「……たつちさん、パンドラズ・アクターのこと、嫌いですか」

モモンガは、たつちの後ろに控えるセバス・チャンを見る。創造主の後ろに控える被造物は、恐ろしいほどじっとしている。つい先程まで、ウルベルトとモモンガの後ろでもずっと似たような被造物がいたことを思い出し、モモンガは彼らがたつちにとって目障りだったのだろうかと思念したのだ。

「まさか。モモンガさんが造った良い息子さんじゃないですか」

たつちの言葉にモモンガは複雑そうにし、ウルベルトは相変わらずだなぁと呟きながら机上のチョコレート菓子を手に取り口に放り込んだ。

「嫌われているのは俺ですよ、モモンガさん。俺が、何の宣誓をしたかお忘れですか」

たつちの言葉に、様々なことを思い出し、モモンガは納得せざるを得なかった。被造物が抱く創造主への愛の重さ、それは今までに嫌と言う程に学んできたことだ。

「モモンガさんは妙なところで鈍感だ」

ウルベルトの指摘に、モモンガは首をかしげる。そんな不死者に、悪魔は聖騎士の腰の剣を指差し答え合わせをしてくれた。

「パンドラズ・アクターも、デミウルゴスも、たつちさんの指示で、剣を持つ完全武装したたつちさんと共にいる俺達の傍から、離れたんですよ」

やつと、全ての意味を理解し、そして、自身がその愛の重さを完全には理解しきれていなかったことに気づいて、モモンガは骸骨の口を、啞然とした様子でばかりと開ける。

「本当に、良い息子達だ。俺達には勿体無い程に」

しみじみと零すウルベルトが何を思い出しているのか、それはモモンガにもよく分かった。

全てを加味して考えれば、きっとデミウルゴスもパンドラズ・アクターも心から理解し割り切っている訳ではないだろうということもモモンガはやつと察しがつき、成る程たしかに、自分には過ぎた息子だとウルベルトに同意した。

「……パンドラズ・アクターは、妥協してくれたのか」

パンドラズ・アクターの言葉を思い出し、モモンガは独りごちる。疲労とは無関係のはずの骨だけで構成された身がどっと疲れたような気がして、不要なはずの溜息のようなものをモモンガは口から漏らした。

「ん？ どうかしましたか、モモンガさん」

モモンガからの視線に気付き、ウルベルトが問いかけると、モモンガはなんでもないと草臥れたように答えた。

「俺もチョコが食べられたらなあと思っただけです」

骸骨のその愚痴に、悪魔がくすりと、妙に優しく笑った。

真つ赤な巨大なテントに連れてこられた魔導国の子供たちは、目前の光景に目を白黒させる。

赤いマントにも白銀の鎧にも汚れ一つ無い輝くような騎士と、顔の半分を鳥のような仮面で覆った山羊頭の黒衣の存在、そして、骸骨の魔導王陛下がいる、嘘のような光景に。

騎士の後ろには、背筋を伸ばした執事が、おそらく亜人ではない山羊の頭をした存在の後ろには自分達を誘った銀の尻尾を垂らす存在が控え、陛下の後ろにはもはや何かも分からぬ存在が立っていた。

その並び立つ威圧感に畏れを抱きながらも、用意されていた仲良く並ぶ三つの椅子に彼らは腰掛ける。これ以上に心臓が跳ね上がる瞬間はあるまいと思う子供達だったが、次に衣擦れの音とともに背後から現れたその存在達には普通に驚愕してしまった。

「あー！」

「「え!?!」」

にこにここと笑いかけてくる瘦せぎすの子に、子供達は揃って目を見開く。

つい先程、巨大な蜘蛛のようなモンスターに驚いて小屋に置いてきてしまった子供が、そのモンスターの上に乗って現れたのだ。想定できるはずがない驚愕の事態であった。

しかもそれは真つ直ぐと、魔導王陛下と席を共にする、何者かも分からぬが、きつと雲の上の存在であろう御方の傍へと向かっていく。

啞然としたままに子供達は、その後ろ姿を見ていた。

「運んでくれてありがとう、八枝刀の暗殺蟲。さあ、おいで、」

黒と赤の衣装を背景に煌めく金細工を身に纏う山羊頭の存在が、その子に手を伸ばすのを、子供達はなぜかとても緊張しながら見ていた。

「ツアレ」

その名が出た瞬間に妙な空気が流れたような気がして、子供達は辺りを見渡す。だが、表情の分からない骸骨と兜では理由が汲み取れない。それぞれの後ろに控える者達も渋面と笑みがそのままか、変動なしの三つの穴なので当然何も分かりやしなかった。

「その子に、よりにもよってその名前を付ける辺り本当にウルベルトさんらしいですよ」

「お褒め頂き恐悅至極、魔導王陛下」

「それで、その子は、これからはウルベルトさんが飼……」

不自然な間の後に咳払いをする魔導王陛下に、子供達は首を傾げる。

「……育てるんですか？」

「それも悪くないかなあと思ってたけど、やっぱり孤児院に入れますよ。この子、どんどん自分を慕ってくれるから…、堪えきれぬ自信が無くて」

くすくす笑うその姿になぜか恐ろしさを覚え、子供達は鳥肌をたたせる。

その頭部と違い人型をした手で膝に乗せた幼子の首の下を、彼は掻いてやっていた。それは猫を可愛がるような姿にも、柔い喉首を掻き切ろうとする姿にも何故か思えてしまうものだった。

突然白銀の騎士が立ち上がり、山羊頭の膝上にいた子供を抱き上げると自身の膝上に移動させた。移動させられた当人は不服そうにしつつも、成されるがままだ。

「ほうらね、さすがにマズイでしょう？」

「まあそうですね。さすがにその子のことであつちさんが怒ることになつたら、俺も止められないですし」

無言で睨み付ける騎士に、飄々とした態度を崩さず彼は肩をすくめ答える。

「今のはただの冗談ですよ。その子を孤児院に入れるのは、その子の言語学習のためです。どうやら話せないのではなく、まともな環境にいなかったせいで成長できなかっただけの様子ですから」

元いた場所に戻ろうとする子供の義足を視界に入れ、あつちは尋ね

る。

「この足は、治らないのですか」

「産まれついてそれだったみたいですよ。もともと無かった足は、魔法でも生えませんかからね」

会話をぼんやりと聞いていた子供たちは、置物のように固まっていた。魔動王陛下が目の前で何やら楽しげにお喋りしているのを、夢のように彼らは感じていた。

そんな子供たちに、騎士が唐突に声を掛けてくる。

「ところで、法国との戦争について、君達の親は何か言ってたかな？」

まさか話を振られるとは思っていなかった子供達は驚き、その肩はビクリと跳ね上がる。そして困惑しきった顔を見合わせ、大人たちの会話から溢れ聞いた話を子供たちはぽつりぽつりと話し始めた。

「え、えっと、魔導国に宣戦布告して、陛下をた、倒すために法国の都市にいた人達全員を、い、生贄に禁呪を使おうとしたって聞いてます…。酷いです…!」

「あーそのせいで魔導王陛下が、倒れたって聞いたけど、大丈夫なんですか…?」

「ん?…ああ、平気だ。五日ほど法国都市から離れられなかったが、今は何も問題は無い」

陛下の無事に、子供たちは純粹に喜び、顔を綻ばせる。照れてしまったのか、顔を背けた陛下に対し、話に聞いていた通り上に立つ存在とは思えないほどに奥ゆかしい方なのだと言っただと子供達は感動してしまふ。

「陛下は本当に、慈悲深きお優しい御方です…!」

「法国は酷い国なのに、魔導王陛下はそんな国の人達も助ける努力をされているって、親が感動してました!」

「陛下は僕らの誇りです…!」  
「よ、よさないか。そのように褒められるような、大したことはしていない」

魔動王陛下は困ったように顔を背けてしまい、そして山羊頭の方がなぜか愉快そうに笑い騎士も微かに肩を震わせているのを、子供達は

不思議そうにきよとりと見た。

「ああ、それで、君達はなぜ忍び込んだんだ？」

笑顔だった子供達の顔が続いた質問によって一気に困り顔となる。しかし男の子だけが、果敢にも声を張り上げた。

「俺達、冒険者になりたいんです！知らない世界を見たいんです！だから、駄目だっつて言われたけど知らない世界を、見たくて、その、」尻すぼみになっていく子供の弁解を聞いて、くすくすと微笑ましそうな声を兜の向こうから漏らす騎士に、子供達はまたきよとりとする。

「とても冒険者向きですね」

「まあ、こんな所まで来たその根性と好奇心には感心しますけどね」

「ウルベルトさんに認められたんだから、きっとすごい冒険者になりますよ」

「それ素で言ってるのか、分かかってそう返してるのか、分からないんですよ、モモンガさんは」

「素ですよ？」

「ははっ、モモンガさんは相変わらずですねえ」

たっちが笑って返したところで、ぽかんとしつつこちらをじっと見ている子供達にモモンガは気が付く。そしてモモンガがどうかしたのかとなんとなく尋ねると、意外な答えが返ってきた為に、モモンガだけでなくウルベルトとたっちも黙り込むことになってしまった。

「あの、えっと、三人共、仲が良いんだなって……」

無垢な子供からの指摘に、気恥ずかしさを感じ、それぞれが黙り込む。しかし我に返ったウルベルトは、たっちを指さして否定の言葉を放った。

「いや、待て、コイツとは仲良くないからな！決して！」

「ウルベルトさんは子供ですねえ。まあ同意しますが」

「ウルベルトさんは喧嘩売らないで、たっちさんは喧嘩買ったうえに煽らないでくださいよ」

喧嘩が始まってしまった様子に、何か言っではいけないことでも言ってしまったかと焦った子供は慌てて謝る。項垂れて、とても申し

訳なさそうにする子供達は、何か動く音を聞き、そして見つめる床の視界の端に、深く黒いローブを見た。

頭を下げている子供達はそれを見て、何も言わずに目を瞑った。それが正しいことだと、本能のように静かな気持ちで受け入れていた。「たつちさん、そろそろこの子達は帰しましょう。もう、充分でしょう」

「ええ、そうですね。お願いします」

「だいぶ慣れてきたとはいえ、疲れるし大変なんですよ、これ」

「はは、俺もモモンガさんもたつちさんの我が儘に振り回されちゃいましたね」

「わざわざ人間きの悪い言い方しないでくださいよ、ウルベルトさん」  
「はいはい、喧嘩は帰ってからでお願いしますよ」

目を瞑って大人しくしていた子供達だったが、会話の途切れ目に、また謝罪の言葉を口にした。立入禁止なのに入ってごめんなさいと、真摯に謝る彼らに何も気にしなくていいとモモンガは返す。

陛下から許された事実には、子供達は喜び、安堵した。

そして子供は、その小さな頭蓋の上に骨の手が置かれるのを感じ、それもまた、ただ受け入れた。

「……このまま、魔導国で幸せに生きて、逝けば、それで良いのだから」  
とても優しいようで、どこか突き放すような声だと、子供達は思った。

立入禁止区域に入った魔導国の子供達は、迎えに来た両親に引つ張られながら夕暮れのなか帰って行く。

散々怒られ、親が頭を下げる姿を見て意気消沈していた子供だったが、やはり気になって後ろを振り向いてしまう。

振り向くと、魔導王陛下と銀髪の若い執事と、騎士の後ろ姿が見えた。

それはたぶん百人中百人が、ただの陛下と付き人だと答えるだろう光景。それなのに、きつと彼らは仲が良いのだろうと、何故だか子

供はぼんやりとそう思ったのだ。

それに対してどうしてだろうと思った男の子だったが、その日の晩ごはんを口に入れる頃には、そんなことは忘れていたのだった。



SUPERBIA GULA INVIEDI  
A 2

ナザリツク地下大墳墓、最下層の玉座の間に至高の御方へと忠誠を誓う者達は集まっていた。

スレイン法国を盤上としたゲームのルールが説明された時と同じく、扉から玉座への一直線の道は、頭を垂れる異形達によって形作られている。

その道の果て、玉座に腰掛けるモモンガが見詰める先の扉が開き、ゲームの対戦者が並んで現れた。

血を吸ったような赤の裏地に、胸元の大輪の薔薇、黒と赤に包まれる全身に映える美しい金の細かな装飾を煌めかせる衣装を纏う、顔の右半分をペストマスクの様な仮面で隠す山羊頭の悪魔。そして、まるで絵画からそのまま抜き出たような輝くように美しい白銀の鎧を纏い、燃え盛る炎のように赤いマントをたなびかせ、立ち居振る舞いからも完成された彫像を思わせるような聖騎士。

玉座の間の扉前にて、ゲームの代表者二名が、堂々たる姿で並び立っていた。

その御姿を、まさに神話の体現が如くとナザリツクの者達は感激に身を震わせつつ静かに眺める。この世で何よりも美しく、尊き存在を目にしたのだと。

「ウルベルト・アレイン・オールド様、たち・みー様、御入室なされます」

玉座に腰掛ける王の隣に立つ守護者統括は、柔らかながらも凛と通る声にてゲームで対戦した者達の代表者達の名を上げた。

「うむ。皆の者、頭を上げ、両者の健闘を讃え拍手で迎えてくれ」

偉大なるも慈悲深き御方からの指示に、ナザリツクの者達は喜んで

従う。異形の者達はその手、もしくは人間で言うところの手に該当する部位や、代わりの部位を使って音を盛大に鳴らした。

そんな奇妙な音が混ざり込む拍手に包まれながら、彼らは歩み出す。

ウルベルト・アレイン・オードルは、阻む者など何一つ無いとその征く姿だけで証明するように華々しく、玉座へと足を進める。

たちち・みーは、恐れるものなど何一つ無いとその征く姿だけで証明するように威風堂堂と、玉座へと足を進める。

彼らの歩みは迷いなく進み、そして、下僕達が見詰めるその先、階層守護者達が膝を地につく場所の少し先で足を止めた。

ウルベルトとたちちが見遣る玉座の階段下にて立つデミウルゴスとセバス・チャンが、ゆっくりと頭を垂れる。アルベドもまた、玉座の隣で美しく、胸に手を当て頭を下げた。

鳴り止まぬ拍手は、しかし、モモンガが片手を上げたことによって、一瞬で止む。玉座の間は静まりかえり、絶対の支配者へと全ての下僕達の視線が集まった。

「皆の尽力もあつてゲームは何事もなく終了した。まずは、そのことに感謝しよう。この感謝は、遠慮せずに受け取ってくれた方が私には嬉しいことだ」

至高の御方からの感謝に、反射的に勿体無いと次々に彼らは言い始めてしまう。しかし即座に続いたモモンガからの優しい気遣いに、口を閉ざし、そして歓喜して口々にその素晴らしさを褒めそやし始めた。

嗚呼なんと、かくも我らが支配者は御優しい方なのだろうか。

感激のあまりざわめきの収まらない彼らに、今度はアルベドが注意して静かにさせる。それを労ってから、モモンガはさっそく本題へと切り込んだ。

「それでは、勿体ぶらずにゲームの結果を話すでしょうか」

また少しばかりどよめきが起こりかけるも、今度はすぐにその波はひいた。玉座にいる支配者からの発表の瞬間を、ゲーム未参加の者達すらもそわそわしながら待ち侘びている。皆、その瞬間が楽しみで仕

方がないのだ。

勿体ぶらずに、と言ったモモンガだったが、静まり返る彼らを見渡してから、やっとその口を開き、結果を伝えた。

「ゲームの結果は、……黒の陣営の、勝利だ」

モモンガのその言葉に、勝利した黒の陣営に所属していた者達から一斉に喜びの声が上がった。勝った、勝ったぞ、ウルベルト様の勝利だ！と、歓喜の声があちらこちらから湧き上がっていく。

ゲーム未参加の者達からも、白の陣営に所属していた者達からも、祝福の温かい拍手が送られた。

「さあ、それでは勝者の願い事をどうぞ、ウルベルトさん」

黒の陣営に所属していた者同士で喜びを分かち合っていた者達が、黒の陣営を率いていたウルベルトの背中を一斉に見詰める。自分達が勝利をもたらすことができたと至高なる御方が何を望まれるのか、彼らはわくわくしながらその御言葉を待っていた。

モモンガに声を掛けられたウルベルトは、ゆっくりと振り向いてナザリックの者達を見渡す。そして、彼らを背に立つたちへと視線を最後に到達させると、彼は口を開き、その願い事を口にした。

「……たち・みーを、アインズ・ウール・ゴウンの死刑執行官に就かせてほしい」

その申し出に、一瞬で場が静まりかえる。そして一気に、波が返ってきたように騒がしくなった。ざわざわと、その願い事の意味をナザリックの者達は追求する。一体どうして、何故、それを願われるのかと。

困惑しきる彼らは視線を彷徨わせ、そして縋るように、ナザリックの智者であるアルベドとデミウルゴスへと視線を遣る。しかし、彼らまでもが揃って珍しく顔色を悪くし狼狽する様子を見てしまい、ナザリックの者達の不安は加速する一方だった。

「……分かりました」

モモンガが了承するだけの簡素な言葉を紡いだことによって、ナザリックの者達は再度、動揺と衝撃と焦燥の波に激しく襲われた。

「願い事は、たちさんに、私とウルベルトさん承認のもと、死刑執行

官”の役職を与え、ナザリック地下大墳墓内外を問わず“全ての存在”に対し、正義に乗っ取って死刑執行を行える権利が与えられることを望む、ということですね」

「モモンガさんの言う通りです」

どよめきもざわめきも収まる訳がなく悪化していく。一体これはどういうことだと、ナザリックの子供達は顔を見合わせ何かに助けを求めていた。

モモンガは、“全ての存在”と言った。それが文字通り例外なく全てという意味であれば、そこには、ナザリックの者達にとっては決して入るべきでない特別な存在が入っていることになってしまう。それを許されるのかと、理由がさっぱり分からない緊急事態に、ナザリックの子供らの困惑と混乱は酷くなっていくばかりであった。

しかし、ウルベルトが片手を上げれば、それに呼応して、動揺の表情はそのままに下僕達は静まり返らざるを得なかった。

「まず言っておくが、俺はソイツが大嫌いだ」

ウルベルトは、たつちを指差し、平然と言つてのけた。唐突なその申告に、ナザリックの誰もが思わずぽかんとしてしまふ。

そんな彼らを無視して、ひとまず彼にとってはとても重要なことを伝え終えたウルベルトは咳払いをする。

「この願い事を口にしたのは、それがナザリックの益になると判断してだ。この私が、君達にとって耳に痛い苦言をここですることは、何も初めてではないだろう？」

その指摘にぎくりとして、嫌なことを思い出したナザリックの者達は渋い顔をする。

「それから、たつちさんの正義判定に疑問を感じたら俺かモモンガさんに気軽に相談していいからな。特に俺に相談してくれたら全面的に味方してやろう！」

「ウルベルトさん……」

呆れた声を出すモモンガが、ウルベルトを嗜める。その遣り取りを微笑ましく見詰めることなどできず、ナザリックの者達は曖昧に笑

う、というよりかは顔を引き攣らせたというべき表情を晒していた。「モモンガ様、ウルベルト様、たち様、口を挟む無礼をお許しく下さい。しかし、此度の願い事は、最終的には多数決によって決められることになっていたかと思われまます。ねえ、そうだったわよね、デミウルゴス」

「その通りですよ、アルベド。至高の御方に対し無礼な物言いとなつてしまいますが、ルールは、守られるべきかと」

その言葉に、混乱しきっていたナザリツクの者達ははつとすると同時に安堵する。多数決で、願い事が却下されればそれまでの話だと。

割って入ってきたアルベドとデミウルゴスの発言に、モモンガは冷静に頷いて応えた。

「ああ、勿論。その通りだ、アルベド。では、投票を始めようか」

「かしこまりました。それでは、事前に決められていた通り、モモンガ様と私、そしてセバスとデミウルゴスにより、多数決を行います」

モモンガに貼り付けた笑顔で笑いかけたアルベドは、次に冷めた瞳でデミウルゴスとセバスへ視線を移す。その冷ややかな金の瞳はともわかり易く、饒舌であった。

「ウルベルト様の願い事を叶えることに賛成する者は、挙手を」

彼女からのその問いかけに、セバスと、モモンガのみが手をあげる。それは誰もが容易く想定できる光景であった。

執事への舌打ちを耐え、愛しい殿方が手を上げたことに戸惑うも、そら見たことかとアルベドは内心笑っていた。しかし、すぐに違和感を覚え、彼女は冷や汗をかく。

ウルベルトの発言と、それを受けてのモモンガとたちの反応と受け答えは、どう考えても事前に願い事について摺り合わせを行っていた故の滑らかな流れだ。それならば、あらかじめ願い事を話し合い決めていたのに、肝心の多数決で決定されるルールを、忘れていた訳がない。

何か考えているのだろうかとアルベドは懸念するも、しかしここまですべて単純な多数決に、何かできる訳もあるまいと口角を密かに上げる。そうしてアルベドが、願い事の否決を口にしようとした時、とても単

純な一手が打たれた。

「デミウルゴス」

ウルベルトのその、たった一言で、再度雲行きは変わった。ただ名前を呼んだ、それだけで。

彼は、あくまで自身が創造した息子の名前を呼んだだけだ。だが、その意味するところを察するなという方が被造物には無理な話であろう。名を呼ばれた悪魔は、戸惑いの表情の後に、拳手をした。

「……私は、賛成に意見を変えます」

「ちよつと……ウルベルト、様！それはあんまりではないですか!？」

声を荒げ、感情的に否定してきたアルベドに、ウルベルトは冷静に返す。

「アルベド、惚れた相手の意志を尊重してやりなよ」

「っ！　なんてずるい手を……!!」

歯ぎしりするアルベドは、それでも視線を彷徨わせ、何か今からでも打てる手は無いかと考える。しかしそんなアルベドに、優しく、無慈悲な言葉をかけてきたのは、彼女がその願い事を否定する原因そのものであった。

「できれば、アルベドにも納得してほしい」

「モ、モモンガ様まで……!?　しかしっ、しかし私は、あの様な権利を たっち・みー様にご許可なさるなど、私は……!」

声を荒げ、愛しいモモンガからの言葉にも素直に頷くことができな い葛藤に苛まれるアルベドの名を、モモンガは優しく呼んだ。

その声に名を呼ばれたことに瞳を潤ませ、眉間にしわを寄せたまま 不満そうなままだが、それでも彼女はぐつと口を閉ざした。

「モモンガ様……」

「アルベド、聞いてくれ。……いや、」

玉座の間に集まった、死刑執行官をたっちに任せると言っただけで 不安に身を震わせる愛しいナザリックの子供達を見渡し、モモンガは 彼らに優しく呼びかけ、語りかける。

「アルベドだけでなく、ナザリックの者達、皆に伝えよう」

アルベドに遣っていた視線を、ナザリックの者達に移し、そして、ウ

ルベルトを、たつちを見遣り、モモンガは言葉を紡ぐ。

彼の願いを、口にする。

「私にとって、このアインズ・ウール・ゴウンのもの以外は、心底どうでもいい、有象無象の存在だ。私はお前たちを、お前たちだけを。このアインズ・ウール・ゴウンだけを、愛している」

その告白に、ナザリックの者達は感嘆の息を漏らして涙ぐむ。何よりも尊き、愛しい、失われてはいけない存在を、彼らはひたと見つめその御言葉に聞き入っていた。

「しかしだ、私は、仲間達から、情けないとも呆れられたくないのだ」続いた言葉の意味は、ナザリックの者達には上手く理解できないもので、露骨に彼らはきよんとして首を傾げ始めた。情けない、これ程までに至高の御方に似合わぬ言葉はなく、また先程の願い事の件とも繋がらない話のように彼らには思えたのだ。

そんな彼らに、甘やかな苦笑を零して、モモンガは優しく説明する。「この世界を、凡庸な人間と同じく下手くそに運営し、不幸と不平等と暗黒の未来に叩き落す…、そのようなつまらない存在に、私達は、成り果てたくないのだよ」

目を見開く彼らの顔を眺め、そしてモモンガは再度、ウルベルトとたつちへと視線を遣った。

モモンガとは違い、未だ人間に対して、この世界に対して、幸福を与えてあげようと心を砕くことのできる優しい仲間達。

そんな仲間達を、誇らしく思いながら、モモンガは見詰めていた。「その為の彼らだ。私が、愚者にならぬよう、共に居てくれる掛け替えのない仲間達だ」

モモンガがそう言い終わると同時に、たつちが前に進み出た。いつの間にもやたら静まり返っていた玉座の間に、彼の動作に合わせ動いた鎧の金属音が鳴る。赤いマントは存在を主張するようにたなびき、胸の青い宝石が光を反射し鮮やかに煌めいた。

「モモンガさん」

玉座の前へと進み出て、腰の剣を抜き放ったたつちに、ナザリックの者達がざわりと反応し警戒する。

アルベドも、デミウルゴスも前へ出ようと体勢を動かし、それぞれから痛いほどの憎悪と殺気が垂れ流される。しかし、そんなことなど気にもとめずにたっちは、剣先を指の腹で掴み、柄を自ら玉座に向けて差し出したのだ。

そして聖騎士は、モモンガへと剣を差し出しながら、その場に跪いた。

臨戦態勢になろうとしていた者達が一斉に、びたりと動きを止める。モモンガに忠義を示している真つ最中の至高の御方を、ナザリツクの者達の前で殺すことなど、彼らにできる訳がなかった。どう考えてもそれは、悪手でしかない。手を止めた者達は渋々と、事の成り行きを見守らざるを得なくなっていた。

そして、その光景に目を見開いたのは、ナザリツクの下僕達だけではない。玉座にいる剣を差し出された相手である支配者自身も、瞠目していた。

「たっちさん……」

モモンガは戸惑い、悩んでしまう。彼からそのように剣を差し出されるのも、受け取ることも、あまりに自分には分不相応にしか思えなかったからだ。しかし、名を呼ばれ、顔を上げて目があった友の悪魔からは頷かれ、催促されてしまう。

そうしてモモンガは、玉座から、骨のはずなのに妙に重たく感じる腰を上げた。そして、膝を床につく友の聖騎士へと歩み寄り、差し出された剣の柄をじっと見詰めた後に、戸惑いながらも握り締めた。

モモンガの長い躊躇とは真逆に、たっちは平然と、あつさりと剣から手を離してしまう。一気に重みが増して、受け取った事実を改めてモモンガは感じる。

聖騎士は、己が剣を持つ友である死の支配者を満足そうに見上げた。

兜の向こうからそんな彼の優しい視線を受け取り、モモンガも、覚悟を決める。せめて、友の期待に応えてみせようと。

聖騎士の肩に、剣の腹が置かれ、不死者による祈りと誓いの言葉が紡がれる。



「……たっちさん、私が憧れた貴方の強さを、どうか貫いてください。その隣に並び立てるように、私も、努力しますから」

その弱々しく継るようでもある真摯な祈りに、聖騎士は真っ直ぐとした誓いで返した。

「それでは私も、貴方の憧れに恥じぬように在りましょう」

その誓いに、モモンガは驚き、そしてとても嬉しそうに笑った。

「たっちさんはやっぱり、格好いいですね」

「ありがとうございます、モモンガさん」

ナザリックの者達へと、モモンガは視線を遣る。彼らによく見えるように、モモンガは己が持つ剣の刃を、その骨の両の掌の上に乗せ掲げる。

「これよりたっちさんに、〃死刑執行官〃の役職を与える。異論ある者は進み出よ」

支配者からの言葉に、誰も発言せず、そして身動きもしなかった。

剣を捧げ、その剣を受け取った神々の誓いに、被造物が口にできることなどあるはずがない。たとえその心が複雑な色合いをし、納得とは程遠い場所にいたとしても、信奉する神々の美しき誓いに、己が不愉快故の反対など投げつけられる訳が無いのだ。

神が、それを望まれるならばと、苦々しい想いを、それ以上の信仰心、もしくは焼け爛れるほどの愛の想いで、彼らは飲み込んだ。強制的に、納得したのだ。

玉座の間を沈黙が支配した後、聖騎士は鎧を鳴らし、マントを揺らし、立ち上がる。

死の支配者は、捧げていた剣を降ろした。

そして、たっちはモモンガより剣を受け取ると、振り返り、ナザリックの者達に向かい厳かに宣誓する。

「今この時、この私、たっち・みーは、アインズ・ウール・ゴウンに正式に帰還する!!」

玉座の間にて轟いたその宣誓は、始まりの合図。それを福音とするか、バケモノの絶叫とするかは人の自由だ。

剣を掲げ、挑むように彼は玉座の間を見渡す。

「死刑執行官として、この世界全てを正しく支配するために、君達と共に戦おう」

揺らぎのない正義の御言葉は、美しく玉座の間にて響いた。

それに対して、静まり返った玉座の間にて一番初めに拍手を送ったのはパンドラズ・アクターであった。

「素晴らしいではありませんか!」

張り上げられた芝居があったその物言いに、誰もがぎよつとして宝物殿守護者の彼を見る。

まるでスポットライトを浴びているかの如く、大げさな身振りで台詞を読み上げるように語る彼に、創造主は沈静化していた。

「たち・みー様が望まれる絶対の正しさ!そして、ただ君臨し続けるだけでなく完全なる正義でもって支配をしようとなされるモモンガ様の覚悟!嗚呼、流石は偉大なる神々!!ただ偉大なる御方が居るだけで満足しようとする我らのくだらない考えに比べ、なんとーなんと、崇高なることでしょうか…!!」

パンドラズ・アクターの言葉に導かれ、彼に続いて、拍手が少しずつ起こり始める。

役者に誘導されるままに、死刑執行官の誕生は不安に苛まれることではなく、至高の御方達の偉大さを示す素晴らしきことなのだ、彼らは認識を塗り替えていく。それは、不安から逃げ出したい下僕達の想いもあって、容易く行われていった。

「絶対なる存在、何にも代え難い、いえ代えられることなど出来ぬ御方へ、忠誠を捧げましょう!!」

床に膝をつき、玉座へと向かい頭を下げたパンドラズ・アクターに倣い、ナザリツクの者達は続けて頭を垂れて忠誠を捧げ、そしてたちの死刑執行官への就任を口々に祝った。

そうして、いと慈悲深き死刑執行官は、悪魔が願い、死の支配者が許し、多くの異形に祝福されながら、ナザリツク地下大墳墓にて生まれたのであった。

SUPERBIA      GULA      INVIEDI  
A      1

まるでRPGゲームの使い古されたラストシーンの様だ。  
そんなことを思いながら、たっち・みーは朽ち果てた城の階段をのんびりと上がって行く。

廃墟どころか遺跡と化した有様のスレイン王国の神都は、ほんの数日前には沢山の人が暮らしていたと言われても、にわかには信じられない姿を晒していた。

都市にあつた厳かな建造物は尽く朽ち果て、廃墟の隙間からは人類が残した瓦礫の山を呑み込もうとするかのように植物が溢れている。生き生きとした物言わぬ生命体は太陽光を受けて輝き、色とりどりの花卉は風に誘われて揺れていた。

まるで墓前に添えられた花のように、無意味な慰めの如く麗しい花々は笑うように咲いている。もしも本当に笑い声を出す器官が花々にあつたなら、けらけらと、きつと無邪気に、子供のように晴天の下で花達は笑っているのだろう。

崩れ落ちた城壁の外に広がるには、相応しいとも言える景色。隙間から流れ込むそよ風を受けながらそんな景色を眺め、たっちは癒やされていた。

悪魔に災厄を与えられ、不死者と淫魔のお茶会の場所ともなった哀れな都市に、人間の気配は欠片も無い。その為にそこはとても静かで、穏やかだ。だから、多忙と喧騒に囲まれた今までと違うそこは、疲れていたその身にはとても心地よかつたのだ。

「……ああ、すまない。今行くよ」

少し足を止めて外の風景を眺めていたたっちに合わせ同じく足を止めていた影の悪魔に、彼は謝罪し足を進める。

それを見て、頭を垂れた後に影の悪魔は歩みを再開した。その案内役の悪魔がたつちを誘おうとしている場所では、死の支配者が待つている。

廃墟にて来訪者を待つ死の支配者と、そこに向かう聖騎士。

本来なら緊迫感のあるBGMでも流れるべき瞬間なのだろうが、実際に流れているのは穏やかな空気と爽やかな自然物の香り、そして鳥の囀りばかりだ。そしてそれは場違いという訳でもなく、たつちの心情に合うものでもあった。

最上階、かつての栄華を感じさせる細かな装飾の入った内装が朽ち果てている広い一室にて、彼は独りで居た。

頭を下げてから何処ぞへと消えた影の悪魔を一瞥し、たつちは部屋の中へと歩みを進める。かつては頑丈だったのであろう厚い木製の扉は朽ちて、役割を果たせぬ姿で床に伏していたので、ノックはできなかった。しかし気にせず、黙したままにたつちは友の背中へと近寄って行く。

縦に長いアーチの向こう、青空を背景に蔦に覆われたテラスにいるその姿は、まるで絵画のようであった。

宵闇の色を纏う白骨の友は、死神のような風貌には似合わぬ随分と美しい深く輝く青空の世界にいる。その存在は、朽ち果てた建造物と青い空を背景にしてなお一層、輝くように目立っていた。

アインズ・ウール・ゴウンのスタッフを持ち王として佇む彼、その背に歩み寄っていく白銀の鎧を身にまとう自身。

ああ、しかし、仮に己が勇者なのだとしたら笑えない話だと、たつちは、ほくそ笑んでしまう。

世界を半分くれてやろうどころではない、世界を共に統治しようという彼の申し出を、聖騎士はこれから受けることになるのだから。これがゲームなら、そのレビューはきつと大荒れになるであろう。

しかしそれでも、世界が揺るぎない幸福に浸れるならばなどと、だいたいそれだと言いつもりは勿論たつちにはなかった。

ただ一つの反論を言うならば、これはゲームではなく現実なのである。

誰かが望み造りあげなければ、美しい物語など何一つ生まれずに弱者は死に絶え沈黙するだけの、ただの不条理な現実<sup>リアル</sup>。

劇的でなく美しくもない、賛美されるような苦戦ではなく、笑える程にどうしようもなく合理的な現実への対処ばかりのこれが、彼の望む正義が導き出した、正善なる答えであった。

「モモンガさん」

無防備に背中を晒して景色を堪能する友の名をたつちが呼ぶと、遠くの景色を眺めていた彼はゆるりと振り返った。第三者ならば気のせいだと言うだろうが、その変わらぬはずの顔が嬉しそうに笑ったのをたつちは感じ取っていた。

そもそも、魔王と聖騎士は友であるという設定がある時点でレビューは大荒れ決定か、などとくだらぬことを考えて兜の下でひっそりたつちは笑みを零す。

「たつちさん、お疲れさまです」

「お疲れさまです。ゲームも無事終了しましたね」

「ええ、無事に終わりました。何事もなくて良かったです」

ボス戦が始まることもなく、変わらぬBGMのままに互いに歩み寄る。モモンガが、たつちの後から続く存在がないことを気にしたのを見て、たつちは答える。

「ウルベルトさんなら少し遅れて来ますよ。二人きりで話したいと伝えましたので」

「……………そうでしたか」

たつちの申し出に、モモンガは大して驚いた素振りもない。昔から、彼はそういうことを察し汲み取るのが得意だ。だからこそたつちは彼がギルド長になるように仕向けたのだ。

現に今、周りにナザリックの者達を誰も控えさせていないのも、薄々何かあると察していたのだろう。

そんな友の察しの良さに、身勝手ながらもたつちは苦笑してしまう。

「……………モモンガさん」

「はっ」

まるで裁判を受ける人間のように、モモンガが真面目に返答する。そんな友の様子を、たつちは些か複雑な思いを抱きつつ見つめた。骸骨の眼球代わりの揺らめく炎の光が、たつちを見返す。

「ウルベルトさんの拷問趣味が酷くなっているのを、知ってて、わざと止めなかつたでしょう」

沈黙を金とするか銀とするか、それはあまりに不明確で安定しない価値観だが、しかしひとまず、モモンガの沈黙は雄弁であった。その沈黙こそが、純然たる答えであった。

「……俺は、本当に我侷なんだなって、改めて思い知つたんです」

自白が始まったなど、たつちは懐かしい思い出に浸る。しかしそれは大半が苦々しい思い出で、彼はそれを意識の奥底に戻して友の自白を聞き取ることに集中し始めた。

此度の自白は嘘でも茶番でもなく、真摯な語りなのだから、たつちはきちんと聞き届けてあげたかったのだ。

改めてモモンガに向き直り、たつちは異形の耳を傾ける。

「人間をやめて、長い月日が経って、どんどん何も感じなくなっていたのに。ナザリックの皆が幸せならって思っていたのに。……ウルベルトさんが、ここにいてることを選んでくれたのが嬉しくて、それから、」

モモンガの顔が動き、彼が先程まで見ていた外へと再度顔を向ける。そうして彼は、遠くの地平線を見ながら言葉を続けた。

「出て行かれるのが、嫌だった」

それは、短くも確かな感情のこもった声だった。

笑って良いですよと、彼は自嘲混じりに言葉を続ける。

「前に説明した通り、あんなカッコつけたくせに……、結局ダメでした。すごく、嫌でした。ウルベルトさんが、ナザリックを出て行くかもしれない可能性が。だから、せつかく戻ってきた友達が残り続けてくれるなら、それなら、ナザリックの皆以外は、心底どうでもよかつた、から、」

必死にモモンガが取り繕おうとするように話しているのは、自分を前にしているからだろうとたつちは察していた。目を逸らしてし

まっつてからは、一向に目を合わせようとしなない彼はずっと、気まらずそうに視線を彷徨わせている。

「だから、」

「モモンガさん」

遮って強く呼びかけると、モモンガはやっとたつちに再度視線を合わせた。

「俺は今さら、貴方の今までの苦勞を何も知らない身で、どうこう言うつもりはありません」

どこかほつとした様子の彼に、たつちは言葉が続ける。もう人では無いのだと諦めるように語った彼に、「己は悪魔だと逃げるように言うた男へと同じく、苦しみを伴う救いを提示する。

「モモンガさん、俺達は確かに人間をやめてしまったけど、これからも“元人間”であるのは、ずっと変わらないですよ」

「……元、人間」

「俺達は、異形です。それと同時に人間でもあり、そして世界が望む理想の神としても、偽ることができない」

たつちの言葉に、眼窩で揺らめく赤い炎がまばたきのように点滅する。そして、短い笑い声のような音が、その頭蓋から漏れた。

至高の支配者として偽るのも一苦勞なのにと、モモンガが困ったように零す。しかし、たつちの提案を否定するような言葉は続かなかつた。

「モモンガさんは、これからもずっと玉座にいてください。そして、この世界を導いてください。俺達と、共に」

たつちの最後の締めくくりの言葉に、モモンガがぴくりと反応する。言い間違いなどではなく、それが結論であり、紛うことなくたつちの意志なのかと伺うように見てくるモモンガに、たつちは、その手を差し出した。

その手を、モモンガは信じられない思いで見つめる。かつて、ゲームで初めて会った時に地面に倒れ伏していた自分に差し伸べてくれた彼の手を、モモンガは思い出していた。

「たつちさん……」

随分と、意味合いも、何もかもが変わってしまったその手に、戸惑いを抱きつつ、しかし確かにモモンガは、喜びを抱いていた。

それは確かに、強欲なる彼が望むものであったから。

そして、肉も皮も温度も無い骨の手は、似たような硬質な鎧の手を握り返す。

「安心してください。貴方が本当に、欠片も人ではなくなった時には、俺が殺しに行きますよ」

「はは、それはとても……、安心ですね」

嫌味でも皮肉でもなく、本当に心の底より安堵した様子の友に、たつちも心が穏やかになるのを感じた。

柔らかな風は祝福するように流れ、賛美歌のように鳥が囀る。麗らかな昼下がりにて、異形の愛は祝福される。それはなんとも、美しい友情であった。

「お話は終わりましたか？」

テラスの上から聞こえてきたその声に、モモンガもたつちも顔を上げ、空中にいた友の名を呼ぶ。

「ウルベルトさん」

「立ち聞きしていたのですか、ウルベルトさん」

「さつき来たばかりですよ。どっかの騎士様が俺の友達を殺すとか言っているとろからしか聞いてません」

「その悪意ある言い方、止めてくれませんか？」

「はてさて何のことやら」

たつちの追求にすつとぼけながらウルベルトは優雅に舞い降りて、風通しの良い建物内へと足を進める。そして、モモンガが用意させていた廃墟を背景にしては違和感を覚えるほどの豪華な食べ物や飲み物が並ぶ机に近寄ると、ワインボトルを手を取った。

「モモンガさん、ワイン、ありがとうございます」

きゅぽんと、小気味いい音とともにウルベルトはコルクを抜く。

「どういたしました。まあ、準備してくれたのはナザリックのメイド達ですけどね」

そつちにも後で礼を言っておきますねと、グラスにワインを注ぎな



がらウルベルトは応える。机上のグラスに赤黒い液体を注ぎ終える  
と、彼はコルク栓を元に戻し茶会の席に腰掛けた。

「それで、ゲームの勝者は？」

手にしたワイングラスの中の液体をとぷりと揺らしながらウルベ  
ルトは尋ねる。ちらりとたつちの様子を窺いつつ、モモンガはゲーム  
の結果を伝えた。

「黒の、勝ちです」

「おめでとう御座います、ウルベルトさん」

ウルベルトの勝利に、即座にたつちは祝いを述べた。それに対し  
て、元々たいして嬉しそうにしていなかったウルベルトは、不愉快そ  
うに顔を顰める。

「素直に祝うなよ、糞たつち。気持ち悪いな、何を企んでやがる」

「貴方は俺が言うこと全て、歪曲して受け止めないと気が済まない  
ですか」

「ウルベルトさん、たつちさん、建物が崩壊するからPVPは外でお願  
いしますよ」

呆れた声が二つ続き、戦闘態勢に移りつつあったたつちとウルベ  
ルトは、多少渋々としつつも戦いを取り止めにした。

「まあ……、何も企んでいないと言えば、嘘になります。一つ、提案が  
あります」

その穏やかな声に、しかし悪魔は露骨に警戒の色を滲ませていた。  
「提案、ですか？」

ウルベルトに続き、たつちも用意されていた茶会の席へと歩み寄  
る。

そして、赤ワインの隣に置かれていた白のボトルに手を伸ばすと、  
コルクを抜き、ワイングラスへ淡い黄色の透き通る液体を注いだ。

グラスの中で液体が跳ね、きらりと踊る。

「俺を、死刑執行官としてナザリツクに復帰させることを、ウルベル  
トさんの願い事としてくれませんか」

たつちがウルベルトへ差し出したワイングラスの中で、白ワインが  
波を立てた。

「……胸糞悪い。俺へのあてつけですか」

「何もナザリツクにいる罪人全員を殺すとは言っていないでしょう。玩具として遊べるぐらいや、食料分は残しますよ。生きて、償うべき者達だって居ますからね」

「……分かつてますよ」

不機嫌そうなままに、差し出されたグラスを無視してワインを嚙下する友と、苦笑してグラスを引つ込め机に置いた友に、交互にモモンガは視線を送る。

「自業自得の者達には、変わらず地獄にいてもらいますが……、話を聞いて、慈悲を与えるべきと判断したら殺せる権利が欲しいですね」

たっちの言葉に、ウルベルトが否定はせずに、しかし不快そうに思案するのを見て、モモンガが先に口を開く。

「その提案は、さつきオレに言ってくれたこと含め、全てをナザリツクの皆に伝えるつもりですか？」

その問いに、勿論と、事もなげに彼は言い放つ。

「ウルベルトさん、モモンガさん、ともに世界を征服して、この世界を幸福と正義で支配しましょう。俺は、あの世界とは違う幸福な正しい世界が欲しい」

ぐつと拳を握りしめ、かつては惨たらしい程に夢のまた夢の絵空事でしかなかったその、輪郭を確かめるように彼は言う。

「その為なら、貴方が、ウルベルトさんが、道を踏み外してしまったら、俺が殺してでも正します。そして俺も、俺が誤った時にはどうか、貴方達が、この俺を殺しにきてください」

友からの、友であるが故の血なまぐさい頼みごとに、すぐさまの返答はなかった。しかしその沈黙が、渋りや、否定や拒否を現すものではないと理解しているたっちは同じく沈黙し、返答を待つ。

「……分かりました。ウルベルトさんも、構いませんね？」

静かに、受け止めたと答える心が落ち着くような不死者の返答の後に、相手を不快にしてやろうと試みる悪魔の返答がやってくる。

「勿論、構いませんよ。たっちさんを殺せそうな提案に反対する訳ないでしょう」

「ウルベルトさん……」

「冗談ですよ」

嗜めるギルドマスターの声に、肩をすくめウルベルトはこたえる。彼の返答に苛立ちは感じて、彼がいつもどおりであることに安堵する。たつちは特に突つかかることもなく、それをスルーした。

「それなら、これから三人で始める世界征服を前に、乾杯を」

「ははっ、前祝いですか？ たつちさんにしては良い提案だ」

「それじゃあ、俺もグラスを」

「赤ワインにしますか、白ワインにしますか？」

「空でいいですよ、オレは骸骨なんですから、勿体無いでしょう」

「つれないなあ」

空のグラスを傾ける友を赤ワインを揺らして友が詭う。

「モモンガさんらしいですけどね」

「それもそうですね」

「たつちさんとウルベルトさんも、それらしいですよ」

軽口を交わし、彼らは杯を持ち上げた。三つの、中身はてんでバラバラのワイングラスが、ぶつかって、思いの外綺麗な音をたてる。

「乾杯」

特別タイミングを見計らったわけでもなく、なんとなくしに口にしたそれが、これまた綺麗に重なり合って、なんだか可笑しくって彼らは妙に笑い転げてしまう。

誰もいない廃墟に、とても愉快そうな笑い声が響き渡る。誰にも聞かれないその笑声に誘われるように、花々は踊っていた。

体の都合でそれが不可能な存在を除き食べて飲んで、そして語り合って時間はあっという間に過ぎていった。机上にあった食事も無くなり、ワインボトルも三分の一にまで減った頃合いに、たつちが机上に置いていた兜に手を伸ばす。

「それでは、俺は事後処理にそろそろ戻りますよ」

たつちの言葉に、モモンガも外を伺い時間経過を気にした。しかし彼が気にしているのは正確には時間ではなく、先程たつちが剣を預ける際に随分と睨みつけてきた彼女のことだろう。そんなことを考え、

かぶり直した兜の下でたつちはひっそり笑う。

自分のことだけでなく第三者によることで頭を悩ませるのは、とてもモモンガらしかった。

「それじゃあ、ウルベルトさん、俺達も仕事に戻りますか」

モモンガの問いかけに、グラスに僅かに残ったワインを揺らしてウルベルトは答える。

「いいえ、ワインが後少しだけグラスに残っていますので。……今暫くお付き合い頂けませんか、ギルマス」

「……ええ、構いませんよ」

腰を上げかけたモモンガが座り直したのを見届け、たつちは声を掛ける。

「それでは、俺はお先に。お疲れ様です、モモンガさん、ウルベルトさん」

「はい、お疲れ様です」

「……お疲れ様です」

ああ、言い忘れていましたと、立ち去りかけていたたつちが振り返る。

「負けてしまいました、久しぶりに対戦できて楽しかったですよ」

そう爽やかに言い残して、聖騎士は元来た道を赤いマントをたなびかせながら帰っていった。

聖騎士が立ち去り、静かになったその場に悪魔の不快そうな声が響く。

「……本つ当にムカつく奴だな、アイツは」

「ウルベルトさん……」

もう何度目か分からないギルドマスターからの窘めの言葉に、変わらぬ調子の分かっていますよという返事をして、ウルベルトはワイングラスを傾ける。

ワインを嚙下してウルベルトが話し始めるのを、モモンガは大人しく待っていた。

「……モモンガさん、街に行くのを最近サボり気味でしたが、また定期的にちやんと行くとしますか」

「ええ、そうですね。そうしないと、きつとたつちさんに怒られてしまう。……あ、たつちさんも誘いましようか」

提案を聞いて露骨に嫌そうな顔をしたウルベルトに、モモンガは思わず笑ってしまふ。そのスタンスが変わらぬことに面倒だと思ふ気持ちも、ほつとする気持ちもあつた。

「ちよーつと、サボつてたけど」

「はい」

「世界征服、頑張りますよ。前に言つてた教育機関の件、あれ俺がやります」

ワイングラスをまた傾け、ウルベルトは残りの赤黒い液体を飲み干す。

「不要な発展を全て、滅ぼします。この世界が未来永劫、幸せで在り続けるために。健康的に墮落し続けるために。要らないモノは全て、俺が滅ぼします」

「…ウルベルトさんらしいですね。頼もしい話です」

どこか暗い雰囲気のもの音が、つうと骨の指先で空のグラスの縁をなぞる。少し耳障りで硬質な音が、静かな朽ちた部屋に響いた。

「……ウルベルトさん、俺は、貴方達とは違つて、」

「どうしたんですか、魔導王陛下らしくない」

からかうような軽い調子の声音に、モモンガは顔を上げた。

「アインズ・ウール・ゴウンの繁栄と幸福のため、ついでに世界を支配し幸福にする、それぐらいの食欲さで、貴方はちよーつといいんですよ」

その身勝手な物言いに許された気分になつたモモンガは、安堵の息を短く吐く。

「なあに、安心してください。この悪魔が友達なんですから。幸福に墮落した退屈な世界でも、きつと永劫に遊べますよ」

「…それはとても、楽しみです」

空になつたグラスを手向けたウルベルトに、モモンガも応え乾いたグラスを手にとる。

カン、と短いぶつかり合う音が響いた後に、くすくすと笑い合う声が廃墟の部屋にて静かに流れた。

悪魔も聖騎士も居なくなつた廃墟のお茶会が開催されていた寂しい場所にて、不死者は暫く何をする訳でもなく、ただ腰掛けていた。しかしその淋しさと空虚さを表すような絵面に反して、彼は得も言われぬ充足感に満たされていた。

モモンガは、変わらぬ骨の顔だが、心で微笑する。その空の頭蓋は、満ち足りた想いでいっぱいだった。

「……たっちさん、ウルベルトさん、……貴方達が、望むなら」

友達が腰掛けていた空席に、モモンガとしての優しい声を掛ける。

「全て、手に入れてみせる。全て、成し遂げてみせる。望む、全てを」  
モモンガが手を伸ばしたことで、乾いた骨の音が飢えた者の唸り声のように鳴る。

嗚呼、世界は美しい。そんな、らしくもないことを彼は外の世界を眺めて思う。上機嫌故だろうか、モモンガは、彼が無償の愛を注ぐ唯一から零れる程度のほんの僅かほどならば、世界も愛せそうだと思えたのだ。

醜悪なる嫉妬より、死にたくなるほどの歓待を。

厳正なる傲慢より、生きたくなるほどの慈悲を。

満ちぬ貪食からは、輝かしき黄昏と黄金の時を。

アインズ・ウール・ゴウンの玉座から、愛を込めて。